

学位（博士）請求論文

『教行信証』テキスト論―その生成と展開―

富島  
信海



# 『教行信証』テキスト論―その生成と展開― 目次

## 序論

一	テキスト論研究の意義	2
二	研究史とその課題	9
三	本研究の目的	26
四	本研究の方法	28
五	本研究の構成	35
第一章 奥書からみる『教行信証』の生成		
第一節	『教行信証』の成立と周辺	53
第一項	親鸞の撰述と書写	55
第二項	親鸞示寂後の百年	60
第三項	本願寺聖教の書写と伝授	63
第二節	真筆と撰述・書写	67

第一項	親鸞と真筆	67
第二項	親鸞の撰述・書写と門弟	74
第三項	『教行信証』の書写	80
第三節	西本願寺本奥書の諸問題	86
第一項	西本願寺本奥書の課題	87
第二項	朱書箇所の問題	88
第三項	墨書箇所を検討	91
小結		97
第二章	『教行信証』の引用と書写	113
第一節	引用体系再考	114
第一項	引用書目とその分類	115
第二項	親鸞による典籍群の把握	120
第三項	引用導入の方法	125
第二節	法位『無量寿経義疏』について	135
第一項	『無量寿経』註釈書と法位	136

第二項	諸目録と法位『無量寿経義疏』	139
第三項	親鸞と存覚の引用	143
第三節	憬興『無量寿経連義述文贊』について	152
第一項	『教行信証』における割註	153
第二項	『聞持記』『述文贊』の割註化	161
第三項	『述文贊』の書写法	170
小結		175
第三章	坂東本の初期改訂	193
第一節	初期改訂の概要	194
第一項	前期筆跡時の改訂箇所	195
第二項	「行巻」・「信巻」の初期改訂	197
第三項	「真仏土巻」の初期改訂	199
第四項	「化身土巻本」の初期改訂	201
第五項	「化身土巻末」の初期改訂	203
第二節	貼紙による改訂	204



第一項	研究課題	243
第二項	形状と内容	244
第三項	書式	248
第二節	改行と註記	253
第一項	改行	254
第二項	註記による構造把握	256
第三項	親鸞真蹟との関連	266
第三節	本文と異本	268
第一項	補訂と異本	268
第二項	訂記と註記	273
第三項	異本の註記	280
第四項	音訓の附加	290
小結		293
第五章	西本願寺本の偈頌体と句点	303
第一節	偈頌体と散文	304

第一項	坂東本・専修寺本の偈頌体	305
第二項	西本願寺本の偈頌体	306
第三項	『讚阿弥陀仏偈』	307
第四項	『華嚴經』	313
第二節	『無量寿經』と句点	320
第一項	西本願寺本の句点	320
第二項	諸本比較(一)——願文・願成就文——	322
第三項	諸本比較(二)——その他——	326
第三節	『無量寿經』と偈頌体	328
第一項	第十八願成就文	329
第二項	散文の偈頌体化	331
第三項	「大本」と偈頌体	335
	小結	340
第六章 本願寺と『教行信証』		
第一節	本願寺聖教と『教行信証』	348

第一項	聖教の伝授と目録	349
第二項	『教行信証』の諸形態	357
第三項	抄出・引用箇所の変遷	359
第四項	寺院形成における『教行信証』テキスト	366
第二節	存如授与本の書誌	371
第一項	本願寺系八冊本と存如授与本	371
第二項	存如授与本と改行	380
第三項	存如授与本と異本	390
第三節	存如授与本と諸本	393
第一項	関連諸本について	393
第二項	本山宝庫本校合本	394
第三項	文明本	398
小結		406
第七章	標挙・標列の変遷―鎌倉三本からの展開―	415
第一節	標挙・標列とその例	417

第一項	標挙・標列の実例	417
第二項	標挙・標列の前例	420
第三項	『教行信証』の標挙・標列	424
第二節	「教卷」における標挙・標列	428
第一項	「教卷」標挙の問題点	428
第二項	題後文前の意義	439
第三項	古写本と諸本の異同	445
第三節	「化身土卷」における標挙	448
第一項	坂東本・専修寺本の標挙	448
第二項	漢文・延書諸本の標挙	450
第三項	標列・標挙からみる本願寺系『教行信証』	454
小結		458
-----		
一	『教行信証』テキストの生成	467
二	『教行信証』テキストの展開	470

三 テクスト環境の差異

473

四 〈作者〉と〈読者〉

476

附表一 『教行信証』坂東本・西本願寺本・存如授与本 関連略年表

482

附表二 『教行信証』引用文分類表

486

参考文献一覧

496

〈凡 例〉

一、聖教・史資料の引用文の漢字等は、『聖典全』の用字に準じたが、適宜原本の字体に近いものを用いた箇所がある。

二、引用典籍の略称は以下のように統一した。

『大正新脩大藏經』↓『大正藏』、『真宗聖教全書』↓『真聖全』、『浄土真宗聖典全書』↓『聖典全』、『浄土真宗聖典原典版』↓『原典版』、『浄土真宗聖典原典版七祖篇』↓『原典版七祖篇』、『浄土宗全書』↓『浄全』、『真宗史料集成』↓『史料集成』、『増補親鸞聖人真蹟集成』↓『真蹟集成』、『専修寺本願浄土真実教行証文類』↓『専修寺本』、『本願寺蔵』、『願浄土真実教行証文類』縮刷本』↓『縮刷本』

三、『教行信証』の頁数表記について原本の丁数を示す場合、真宗大谷派蔵親鸞真筆本（坂東本）は『真蹟集成』の巻数と『教行信証』の通頁、真宗高田派専修寺蔵真仏書写本（専修寺本）は『専修寺本』の通頁数、本派本願寺蔵鎌倉時代書写本は『縮刷本』の通頁数を示した。その他の『教行信証』や『無量寿經』については、原本の巻数と丁数・表（「オ」裏（「ウ」））を示した。なお、この三本の状態を示す際には、返点や右左訓などは原本のまま表記している。

# 序 論

# 序論

## 一 テキスト論研究の意義

本研究は、中世における『顕浄土真実教行証文類』（『教行信証』）を主たる研究対象とし、そのテキストの生成と展開について、書写者の違いに着目して論じるものである。

『教行信証』は親鸞の主著であり、浄土真宗の根本聖典と位置づけられている。親鸞は、「化身土巻」において仏滅年時を計算するが、「按三時教者、勘如來般涅槃時代、當周第五主穆王五十一年壬申。從其壬申至我元仁元年元仁者後堀川院 諱茂仁聖代也 甲申、二千一百八十三歲也。又依賢劫經・仁王經・涅槃等說、已以入末法六百八十三歲也」（『聖典全』二・二二三）と、具体的な年時を示すことで今時の年代を勘案している。親鸞が年時として記す元仁元年（一二二四）については、江戸期以来、『教行信証』撰述の年と考えられる場合が多く見られ、また、親鸞生誕七百年にあたる大正十二年（一九二三）には、真宗各派において立教開宗の年として慶讃法要が修された。その親鸞生誕七百年に前後して、『教行信証』の書誌学的乃至文献学的研究が本格化し、以後、『教行信証』の成立過程や諸本系統についての議論が積み重ねられることとなった。鎌倉三本ともいわれる真宗大谷派蔵親鸞自筆本（坂東本）や高田派専修寺蔵真仏書写本（専修寺本）、本派本願寺蔵鎌倉時代書写本（西本願寺本）については、親鸞の真筆であるか否かについて、字体の変化を分析する筆跡研究を中心に、

諸本がどのような経過で成立したのかが議論されてきた。その結果、「草稿本」あるいは「中清書本」と位置づけられてきた坂東本は、親鸞が生涯にわたって増補・改訂を繰り返して成立したことが明らかとされ、後者二本については親鸞真筆ではないと考えられる現況である。

現在、『教行信証』研究の基準となっているのが、重見一行の著書、『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察』（法藏館、一九八一）である。重見による研究成果については、本論でもたびたび触れることになるが、『教行信証』に対する文献学という方法論、諸本を用いた坂東本成立過程の解明、その検証の中で明らかになった正応版本の存在証明や周辺諸本の特徴、延書本を視野に入れた諸本系統分類の試みなどは、同書刊行から三十年以上を経過した現在でも、『教行信証』諸本研究に大きな影響を有している。重見以降も『教行信証』研究は着実に進歩を遂げてきたが、従来の研究は、坂東本を中心に諸本を比較検討することで、伝存写本・版本等の系統分類を試みることに議論が集中している。言い換えれば、〈作者〉親鸞の視点から、『教行信証』の正しいテキストは何かを探る研究が主流であった。

そのような中で、本研究では、『教行信証』には、坂東本だけでなく、それぞれの来歴を有する諸本が多く伝えられていることを大切にしたい。一つの書物である『教行信証』が、なぜ様々な形態で展開したのか、その内実については必ずしも明らかでない。このことが現状の研究課題である。というのも、昨今、ある典籍や作品に対する〈作者〉と〈読者〉という視点での研究が、諸分野において注目されてきている。たとえば、片桐洋一『平安文学の本文は動く―写本の書誌学序説』（和泉書院、二〇一五）、横田冬彦編『シリーズ

本の文化史①『読者と読書』（平凡社、二〇一五）などである。諸本が成立するプロセスには、〈作者〉による主体的な書く行為が欠かせない。同一書物であっても、様々な周辺テキストが介在することにより、原本とは異なる文や形態を有するものが数多く生成されていく。諸本の制作者たる〈読者〉たちが、それぞれの歴史的・社会的背景の中で生成してきたのが、個々のテキストであると位置づけることができる。

こうした〈作者〉と〈読者〉という視点を『教行信証』の書誌学的乃至文献学的研究に導入したとき、変動するテキストの関係性の中で『教行信証』諸本を捉え直すことが可能となり、〈作者〉親鸞による生成のみならず、どの時代にも必ず存在していたであろう親鸞の名著『教行信証』を読み解く〈読者〉の立場によるテキストの変化・変容について明らかにできると考えられる。こうして両者の立場を以て研究することによって、これまでの坂東本を中心とする『教行信証』の原初形態、あるいは完成されたテキストの探求という、従来の研究方針や成果を乗り越え、親鸞在世時から行われていた『教行信証』を書写するという行為によって、様々な形態や異文が生み出されてきたという事実を、『教行信証』におけるテキスト変化と位置づけてみたいのである。〈作者〉による生成と〈読者〉による変化、その両面を的確に捉えることができたとき、初めて『教行信証』という書物の成立と展開の歴史像が明らかになるのではないだろうか。

『教行信証』を書物としての展開の中で相對視してみれば、〈読者〉からみる『教行信証』というのは、実は親鸞以後の長い伝来の歴史の中で培われてきたもう一つの『教行信証』の在り方であった。その示唆を与えてくれるのが、『教行信証』の書誌学的乃至文献学的研究の黎明期になされた、中井玄道による一連の研究

である。中井は、「明治式」の善本を作成することを企図して『教行信証』諸本の研究を開始し、本文に対して一々の校異を示すことで、諸本を包括したテキストの翻刻を実現した。<sup>(4)</sup>

中井は、自身の研究について、『教行信証』の「外形即ち書物としての形態に関する研究」といい、「書史学(Bibliography)」と位置づけ、その方法を書物の外形と内容との二面に分けて説明している。<sup>(5)</sup>まず、外形からの研究題目として、「形状、装幀、巻帙、紙質、書写又は印刷の年時及場所、書写又は印刷せる人物、伝来又は流布の歴史、現存部数の多少」を挙げている。この点は現在の書誌学という研究分野の課題に通ずるものである。次に、内容からの研究題目として、「書物の真偽を鑑別し、無数の書物をその内容によりて分類し、又或る題目の下に関係の書物を列举すること等」と述べている。これは一見、個別著書の内容解明を行う教義学的研究にも見えるが、中井はその方面の研究を対象としてはいないことを明言している。中井のそれは、「列挙的書誌学」という書誌学の一法であり、書誌文献の目録作成を目的とする研究を指しているのである。

明治四十四年(一九一一)には、『六条学報』第一一四号に「教行信証校訂改刻批議」が発表された。そこで中井は、『教行信証』の「御真本」は一種とも限らないといい、それについてでさえ錯誤の可能性があると、後人が転々と伝写する過程で錯誤が生じた例は枚挙に遑がないことを述べ、原本・書写本双方に問題が存することを指摘している。先述のように、この論文自体は、明治時代当時に『教行信証』の改刻が必要である旨を示すことを主眼としており、時代に適応した書き下し文の必要性を説くものであったが、その過程

で、伝存する書写本に共通する問題点が描き出されていた。明治四十五年（一九一三）から大正三年（一九一四）にかけては、『教行信証』諸本の校異内容を順次発表し、その総数は全十八回で千百三十八条を数える。さらに大正六年（一九一七）には「教行信証引文の体例」（『六条学報』第一八七〜一九三号）を全五回にわたって発表した。これらを元に纏められたのが、大正七年（一九一八）の『本典諸本校異』、大正九年（一九二〇）の中井玄道校訂『顕浄土真実教行証文類』・『教行信証附録』（仏教大学出版部、一九二〇）であり、大正十二年（一九二三）には『教行信証解説』と題して諸本の紹介と内容の解説を発表した。<sup>6)</sup>

中井校訂本においては、対校本と参考本に分けて諸本校異が示されている。対校本には、(1)寛永版、(2)正保版、(3)明暦版、(4)寛文版、(5)仏光寺派本山蔵版、(6)縮刷蔵本、(7)高田派本山蔵版の七本、参考本には(1)坂東本、(2)西本願寺本、(3)存覚元亨本、(4)存覚延書本、(5)六要鈔所積本、(6)存如授与本、(7)寂如校訂本、(8)智暹本、(9)六要鈔会本、(10)悟澄本、(11)本山蔵版小本本典追加校異、(12)文明本の十二本を用い、対校本については全文、参考本については重要箇所についての校異を示している。さらに、附録では、異本解説として、坂東本、西本願寺本、存覚元亨本、存覚延書本、六要鈔所積本、存如授与本、寛永版、正保版、明暦版、寛文版、寂如校訂本、智暹校訂本、六要鈔会本、悟澄校刻本、仏光寺派本山蔵版、縮刷蔵本、高田派本山蔵版の十七本を挙げ、さらに「校正標異」「引文体例」「引文一覽」「索引」「教行信証校刻縁起」を収めている。こうして中井は、諸本を前にしてそれぞれの概説を示し、本文に対して設けた一々の校異を以て、多くの系統を包括したテキストの翻刻を実現した。公表された校訂本は、既存の刊本を元としたものである点が、近年

の重要古写本を基底とした諸翻刻とは異なるが、のちの『教行信証』諸翻刻の校異と比しても最も多い部類の対校本数を有し、『教行信証』諸本における異文の拡がりを示すためのモードを提示したことに大きな意義が認められる。この校訂本とその編集方針は、今日に至るまでの諸翻刻、あるいは教義学・解釈学にも大きく影響しており、たとえば、『真宗の世界』臨時増刊第三巻第五号「教行信証新研究号」所収本や『本典研鑽集記』<sup>(9)</sup>の本文は、この校訂本に大きく依拠している。

中井の研究方針に照らし合わせれば、『教行信証』を対象とする書誌学的乃至文献学的研究の目的というのは、諸本の書誌情報を明示することだけでなく、それらを目録化することにもある。『教行信証』に関するそれは、『教行信証』現存目録、あるいは真宗典籍目録を作成する中で把握され、所蔵者や系統などによって分類して示されている。<sup>(10)</sup>ただし、『教行信証』の諸本それぞれに個性を認めるとするならば、諸本の書誌情報を列挙したり、成立年代順に並べ替えただけでは、その目的が達せられたとは到底いうことはできない。諸本の関係性を構造的に捉えて可視化することが求められるのである。

おおよそテキストを作成するときには、依拠するテキストを機械的に模すに留まらず、置かれた環境によって様々に変化を見せる。中井の指摘にもあるように、「後人が転々と伝写する過程で錯誤が生じた例は枚挙に遑がない」のである。また、中井自身の校訂本の形成とその影響にもみられるように、『教行信証』テキストは絶えず変化している。諸本の本文や書誌情報を収集し、時代に即応したテキストの作成を目指すという中井の研究志向からすれば、『教行信証』の諸本とは、それぞれが各時代の要請によって作成された側面があ

ったことが思い起こされる。〈作者〉の意図しない改変が〈読者〉によってもたらされてきたという事実を目を向けることにこそ、テキスト論を用いる意義が認められる。

本研究は、『教行信証』の書誌学的乃至文献学的研究史上に位置づけるとするならば、真宗聖教・典籍を対象として真宗書誌学・真宗文献学・真宗典籍学・真宗聖典学と様々に呼ばれてきた枠組みの延長線上にある。『教行信証』の原典あるいは完成稿のテキストを特定し、原典遡及を成し遂げようとする基礎的研究を引き継ぎつつ、〈作者〉と〈読者〉と両面からの視点を以て、諸本それぞれにおける歴史的経過と当時の社会的環境に注意して諸本の制作と伝来の意義を明らかにしようとする点において、個々に存在するテキストの有機的な関係性を現代的視点から見いだそうとする新たな試みといえよう。この試みによって、テキストの生成と展開について明らかにしようとする『教行信証』テキスト関係論の構築を目指す。このテキスト関係論は、『教行信証』に限らず、豊富な数量が伝存する他の親鸞の著作をはじめ、多種多様な真宗聖教に適用しうるものである。そうした意味において、『教行信証』の生成と展開を明らかにするのみならず、真宗教義学や各種真宗聖教・典籍の解釈学に大きく貢献することが期待される。

## 二 研究史とその課題

これまでの『教行信証』の書誌学的乃至文献学的研究ではどのような議論が繰り広げられ、現在どのような到達点にあるのか。『教行信証』現存諸本のうち、重要な古写本と目される、いわゆる坂東本・専修寺本・西本願寺本の研究史をまとめることで、本研究に関する研究課題について詳述しておきたい。

### (1) 真宗大谷派蔵親鸞真筆本（坂東本、報恩寺本）

坂東本は、鎌倉期以降の来歴は定かたで無く、鳥越正道の推定によれば、室町時代以降の錯乱期を経て、江戸期に五本の模写本が作成されたとい<sup>11)</sup>う。さらに、大正期、昭和期、平成期にはそれぞれ次のような影印本が公刊されている。

大正期 『顕浄土真実教行証文類』六冊（大谷派本願寺編纂課、一九二二）

昭和期 『親鸞聖人真蹟』国宝 顕浄土真実教行証文類影印本（真宗大谷派宗務所、一九五六）

『親鸞聖人真蹟』国宝 顕浄土真実教行証文類影印本（真宗大谷派宗務所、一九七一再刊）

『親鸞聖人真蹟』国宝 顕浄土真実教行証文類』六冊（教行信証刊行会、美乃美、一九八六）

平成期 『顕浄土真実教行証文類（坂東本）影印本』六冊（真宗大谷派宗務所、二〇〇五）

これらに加え、『親鸞聖人真蹟集成』（法藏館、一九七三〜一九七四）が刊行されているが、その第一・二

巻に『教行信証』坂東本の縮小版（二色刷）が収められており、丁数を示すために便利である。平成期には内容・解説等が充実した『増補親鸞聖人真蹟集成』（法藏館、二〇〇五〜二〇〇七）が刊行されている。

坂東本は、江戸期あるいは明治初期には度々展覧されていたといわれる。明治末期、佐々木月樵が坂東本を披見したことを紹介しており、当時の様子が伝えられている。<sup>(12)</sup> その研究が本格化するのは大正期以降である（主要事項については、適宜巻末の附表一『教行信証』坂東本・西本願寺本・存如授与本 関連略年表」を参照されたい）。近代以降の動向としては、大正期、昭和期、平成期の坂東本修理事業が契機となり、それに付随して行われた影印本刊行とその解説が研究の基礎となった。それに加え、後に大きな影響を及ぼした山田文昭、赤松俊秀、重見一行の三氏とその前後の研究推移に焦点をあて、これまでの坂東本研究を概観したい。

坂東本研究の初めに挙げられるのが、山田文昭の発表である。山田は真蹟本と伝えられてきた坂東本・専修寺本・西本願寺本のうち、主に坂東本について「著者自筆の原本」であることを立証するために、書誌情報を提示し、諸記録から来歴を述べた。<sup>(13)</sup> 真筆であることの根拠としては、紙質・紙形の雑多さ、行間・文字の不統一、文字の訂正、空白の多さなどを挙げ、これらは著者自身によるものとか考えられない状況としている。この論考では、坂東本各部の増補改訂跡のいくつかと、撰者名、筆跡などを挙げて、坂東本が著者自身の原本であることの根拠としている。ただ山田は、親鸞の書であることを「愚禿積親鸞」という撰号のみに依っている。具体的に親鸞の真筆であることを論証するには、量的に判断材料が豊富となる後の研究を

待つ必要があるが、それでもなお、『教行信証』真蹟本研究の嚆矢と位置づけることができ、この分野を開拓したことの意義は大きい。事実、その後の研究は山田の論述や推定を踏襲するものも多く見受けられる。

大正十二年（一九二三）の立教開宗七百年を迎える前後、辻善之助、中井玄道などによって研究が進展し、親鸞真蹟に関して活発に議論が交わされるようになった。<sup>(14)</sup> そのような中で、大正十一年（一九二二）に坂東本の影印本が公刊された。<sup>(15)</sup> 鳥越によれば、日下無倫が発見した『平等覚経』断簡（別表具）を「教巻」に復元して撮影されたことを指して大正期修復という。<sup>(16)</sup> その際に制作されたのが大正期影印本であるが、発刊直後に関東大震災が起こっており、それ以前の様相を伝えるものとして貴重である。大正期影印本の公刊によって広く学問としての門戸が広がり、鈴木宗忠、藤田海龍などの真蹟本研究に結びついた。<sup>(17)</sup> また、『教行信証』の成立に関わる研究として、結城令聞による信巻別撰説に関する議論、禿氏祐祥や小川貫式による自筆草稿本の成立に関する論述があり、それらを一冊にまとめた慶華文化研究会編『教行信証撰述の研究』（百華苑、一九五四）が刊行された。<sup>(18)</sup> また、日野環によって、異筆箇所の問題が提起された。<sup>(19)</sup>

昭和三十六年（一九六一）に迎える親鸞七百回忌の慶讃記念の事業として、昭和期修復がなされた。大正期影印本出版の翌年、大谷派本願寺浅草別院経蔵の金庫に保管されていた坂東本は、大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災によって火災に遇い、表紙などに損傷があった。<sup>(20)</sup> 昭和期修理は、震災で損傷を受けた坂東本保存のための「根本修理」という目的があったが、大正期影印本の不備等もあって坂東本研究についてはなお課題があったことから、新たな影印本が要請される状況であった。<sup>(21)</sup> そこで、赤松俊秀・藤島達朗

・名畑応順らによつて修理され、新たな影印本が作成されることになった。こうして、昭和三十一年（一九五六）十一月、真宗大谷派宗務所より『親鸞聖人 眞蹟 国宝 頭浄土真実教行証文類影印本』（以下、昭和期影印本）が公刊された。その解説として、赤松俊秀「教行信証の成立と改訂」、藤島達朗「教行信証の書誌」、名畑応順「教行信証の教義」の三本が附された。それぞれ、坂東本、諸本、教義学に関する基盤的研究である。そのうち赤松による報告は、現在でも研究の基準といひうる豊富な情報を有している。赤松は撮影の監修にあたる傍ら、本紙の一々について調査し、幾多の問題について詳細に検討した結果を同解説に報告した。坂東本の「教」・「行」・「信」・「証」・「真仏土」・「化身土本」・「化身土末」の各巻それぞれを、先頭の料紙から順に並べ、料紙の状況や筆致の判断を克明に記していき、紙面の状態からみる本文成立の推移と、各部の筆致の異なり、各種書き入れなどによる改訂を指摘した。そこでは、各巻がどのような組み合わせで成り立っているのかについて、主たる事項を本文の続き方を基準に並べて各巻の改訂状況の推定を行い、それぞれの巻の特徴が際立つよう配慮されている。赤松は、真蹟本の各巻を詳述し終えたのちに総括を行い、第一に、親鸞六三歳前後に書写されたこと、第二に初稿本の存在が想定されることを述べている。坂東本の状態を鮮明に示した赤松の報告は、坂東本を語る上で基礎的な事項を記した貴重な報告と位置づけることができる。なお、同解説は、昭和四十八年（一九七三）に迎える親鸞生誕八百年・立教開宗七百五十年の慶讃記念として、昭和四十六年（一九七一）に再版された影印本にも附された。昭和期影印本刊行以降は、古田武彦によつて史料論的研究がなされるなど、着実に進展を見せた。<sup>(22)</sup>

こうした研究の変遷を経て、重見一行が坂東本研究の集大成ともいえる一連の研究を発表し、その成果は『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察』（法藏館、一九八一）に纏めて刊行された。重見は、糸偏等の坂東本における字形や異体字を他の親鸞真蹟や大蔵経等と比較することによって筆跡の変遷を詳細に検証し、坂東本各部の染筆時期を明らかにした。方法論としては、古典文学を対象とした文献学的研究が専門の池田亀鑑による古典に対する批判的処置という方法を見直した上で自らの研究を「文献学的研究」と位置づけ、諸本を多角的に論じるものであった。重見の功績は、親鸞の筆跡変遷を具体的な事例を交えて明らかにし、料紙の状態、正応版本の存在証明などを指摘、諸本の特徴と坂東本の関連を探ることで坂東本の成立過程を明らかにするとともに、延書本の異文を検討し、その祖型を探ることで諸本系統に見通しをつけたことである。この論考が、坂東本のみならず現在の『教行信証』研究の基礎となっていることは疑うべくもない。<sup>(23)</sup>

こうして一つの到達点を迎えた坂東本研究は、さらに、鳥越正道によって坂東本江戸期模写本の比較が行われ、最終稿本の復元と真本の探求が試みられている。<sup>(24)</sup> また、かねてより坂東本を鎌倉時代の訓点語資料として用いる国語学的研究も盛んに行われてきた。<sup>(25)</sup> これらの成果は、『教行信証』各部解釈の基礎に援用されることにも繋がっている。

最後に、平成十五年（二〇〇三）から八ヶ月に及ぶ平成期修復は、平成二十三年（二〇一一）に迎えた親鸞七百五十回忌の記念事業であり、赤松による昭和期修復の報告を承けて行われた。平成十七年（二〇〇五）

七月に真宗大谷派宗務所より影印本が公刊された。また平成二十四年(二〇一三)には、大谷大学編『顕浄土真実教行証文類』翻刻篇・附録篇一・附録篇二(真宗大谷派宗務所、二〇一二)の三冊が刊行された。本文は坂東本の丁別に翻刻され、書誌事項の解説が必要な箇所には補註を付している。附録編一・附録編二には、声点・右左訓・字体・合点等の一覧が纏められている。なお、平成期修復作業の最終段階で赤尾栄慶により発見されたのが角点(角筆点)である。坂東本の角点については、平成十九年(二〇〇七)『毎日新聞』朝刊にて報道された。また、平成二十年(二〇〇八)四月には「教行信証(坂東本)の角筆点について」(真宗大谷派宗務所『真宗』一二四九号)と題して角点発見の経緯と概要が報告されたが、平成二十七年(二〇一五)、赤尾栄慶・宇都宮啓吾監修・執筆『坂東本『顕浄土真実教行証文類』角点の研究』(東本願寺出版、二〇一五)が刊行され、その全貌が示された。ここまでが平成期修復に伴って進展した研究成果といえる。<sup>(27)</sup>

ここで、赤松や重見、鳥越らの所論をもとに、坂東本の成立過程や筆跡変遷について確認しておこう。<sup>(28)</sup>坂東本は、筆跡の変遷に応じて前期・中期・後期に大きく分けられると考えられている。

坂東本前期筆跡は、一行八字書きの本文であり、専修寺に蔵される『般舟讚』や『涅槃経』抄出文などを含む『見聞集』、『唯信鈔』(平仮名本)が書写されたと考えられる文暦二年(一二三五)、親鸞六三歳頃の筆跡と同時期と推定されている。<sup>(29)</sup>「化身土卷末」の『大集経』部分を主体とする親鸞七〇歳代前半の中期筆跡や、一行七字書き本文を主体とする親鸞八〇歳以降の後期筆跡との区別は、重見までに指摘された二十八種の字体・字画の異なり、<sup>(30)</sup>料紙ごとの行数の違いなどから判断されている。

〈表0-1〉坂東本の書写と改訂

年号	西暦	主要事項	筆跡変遷
		〈草稿〉 八行書き本文清書 「行卷」その他の訂正書改 〈第一次改訂〉	前期筆跡 (五八〜六三歳頃)
		「化身土卷末」『大集経』切り入れ 「真仏土卷」貼紙 ※尊蓮本書写(『教行信証』一応の完成)	中期筆跡 (七〇〜七五歳頃)
寛元五	一二四七	〈第二次改訂〉 「真仏土卷」書改・異筆 「証卷」「真仏土卷」等標挙記入 「教卷」「信卷」「化身土卷」七行書き本文書改 ※専信本書写 ※真仏本転写(専修寺本)	後期筆跡 (八〇歳以降)
建長七	一二五五	〈第三次改訂〉 「行卷」書改・標挙訂正 「証卷」「真仏土卷」表紙外題・袖書(蓮位に授与)	
弘長二	一二六二	※親鸞示寂	(最終稿本成立)

坂東本中期筆跡については、寛元元年(一二四七)尊蓮書写以前と考えられている。その内容は、『大集経』六十巻のうち後半にあたる「日藏分」や「月藏分」の抄出文であった卷子状のノートを折り込んで「化身土卷」(『真蹟集成』二・五八五〜六三二)に差し込んだものが主であるが、「真仏土卷」(同二・四三二)に『涅槃

槃経』二行分貼紙の増補もある。

坂東本後期筆跡については、専信本書写の前後で行われている。内容としては、經典中で最も多く引用される『涅槃経』についてのものを主とする。「信巻」の書改には宿紙が用いられているといわれ、「真仏土巻」におけるそれは、『涅槃経』後半部（第八〜十三文）の追加・書改が主体である。<sup>(31)</sup>これらは諸文の整理と位置づけられ、他の細部の修正・加筆も含めて、引用文の構成自体に何らかの変化をもたらしたものとはいえない。そこで、前期筆跡時の改訂が引用文の構成・配置に大きく関与し、本文内容を充足させる作業が中期筆跡時までに行われ、それを完成させるための作業が後期筆跡時の改訂であったと考えられる。

以上のように展開してきた坂東本について、本研究の目的に即して課題を挙げるとするならば、坂東本に関するテキスト生成に関して論じるべきは、坂東本における引用文の構成や、それを決定づけた改訂の意義についてであろう。注目すべきは、従来は「草稿本」、今日では「中清書本」と位置づけられながら、料紙の切り継ぎを含む紙面の改訂を、〈表0-1〉の「行巻」その他の訂正書改」とした時期、つまり坂東本初期といえる前期筆跡改訂時に既に行っていることである。しかし、『教行信証』の主体となる引用文の位置づけに変化が見られることには、これまであまり注目されてこなかった。さらにいえば、『教行信証』被引用文献を体系化する試みはなされてきたが、それが、親鸞が坂東本に長い期間をかけて改訂を加え続けたという事情の中で、一切経や経論章疏からどのように取舍選択したのかという非引用文献も含んだテキスト理解の変遷といった事項には必ずしも論考が進んでいない。

そこで、親鸞によるテキストの選定、書写、改訂という、坂東本のテキストが生成される中で生じた三つの事態に着目して、『教行信証』の生成という事態を捉える必要がある。テキストの選定と書写については第二章、改訂については第三章で述べる。

(2) 高田派専修寺蔵真仏書写本（専修寺本、高田本）

専修寺には多くの親鸞真蹟が伝えられており、大正期には辻善之助が三十五、六点を真蹟認定した。それらは親鸞より高田の門弟である覚信、専信、慶信、信証、覚然、信性、顕智、高田入道に授与されたものであり、「高田専修寺」の黒印が押されていることが特徴である。<sup>(32)</sup> そのうち、親鸞真蹟と伝えられていたものの一つが専修寺本『教行信証』である。

専修寺本の本文は、明治四十五年（一九一二）親鸞六百五十回忌の際に高田派専修寺蔵版『教行信証』四冊（活版）が刊行され、さらに常磐井堯祺によって専修寺本を底本とした校訂本文が公開されたことで世に知られていたが、影印本や写真版については長らく公開されなかった。しかし、立教開宗七百五十年・親鸞生誕八百年の記念として写真版が初めて公開され、次いで影印本も作成されている。

『専修寺本顕浄土真実教行証文類』上・下（法藏館、一九七五、刊記は「高田専修寺本教行信証」）

『重要文化財顕浄土真実教行証文類』六冊（便利堂、一九八六）

専修寺所蔵の『教行信証』は、古くから親鸞真蹟と伝えられ、辻も真蹟と認めていたが、当時から疑念を抱く学者もあつたとされる。大正十一年（一九二二）六月には京大の吉澤義則が来訪して、『教行信証』などを調査したといい、そのときは松山忍明が紹介役、三井淳辯が陪席したという。

昭和八年（一九三三）には、親鸞筆跡に関する座談会が開催され、『高田学報』第五輯には、多くの図版とともにその速記録が掲載されている。この「親鸞聖人筆蹟に関する座談会」には、生桑完明、川瀬良琛、竹内宜啓、染野光海、中澤見明、藤源真量、小妻隆文、三井淳辯、清水智乗が出席し、東西本願寺、専修寺、その他寺院所蔵の伝真蹟資料の特徴が提議され、親鸞真蹟の基準について一定の提案がなされた。

この座談会は、辻の真蹟説を承けてのものであつたが、専修寺蔵の『教行信証』は積極的に議論の俎上に取り上げられることは無かつた。ただ、三井が示した「専修寺所蔵親鸞聖人筆蹟目録」（七三頁以降）では、真筆類を選述本、書写本、経釈要文、御消息、讚銘文、断簡文の六つに分類しているが、『教行信証』については、（イ）選述本の第一として、次のように示されている。

一、教行信証 六冊

内容、本山の明治四十五年の出版本に同じ、但し教巻、信巻、眞佛土巻の終りに「親鸞御入滅弘長二歳壬戌十一月廿八日午時御年九十歳也、同廿九日專信遠江國池田住僧 下野國高田住僧顯智 御舍利藏」とあり。

奥書なし

傳持、顯正流義鈔に「教行信証一部六卷マタ眞筆二書シ建長七年乙卯冬ノコロ 高田開山眞佛上人顯智

上人ニナラヘアタヘタマフ、マコトニ付法相承ノ義顯ナリ」とあり。

この座談会の対談者たる生桑完明は、座談会から約二十年が経過した昭和三十一年（一九五六）專信書写本と推定すべきことを発表した。<sup>(34)</sup>これは、『宝曆十二壬午年六月三日御目録』によって推定され、「以彼六巻草本寫書之、筆師專信之、建長七歳乙卯六月廿二日午時畢書之」という專信房專海の奥書が、現存する親鸞入滅記事の前にあったことを理由としていた。その後、重見は、坂東本の書写本から中間写本一本を介した転写本であり、一三〇〇年以前の成立であろうと推定した。<sup>(35)</sup>重見の論を承けた平松令三は、影印本解説において真仏による転写本と推定した。<sup>(36)</sup>現在では真仏書写と考えられているが、それに対する疑義もある。<sup>(37)</sup>なお、門川徹真が現存諸本の本文や訓点を比較する中で、專修寺本は初稿本から尊蓮・專海・真仏書写に連なる系統の書写本であるという見解を発表しているが、その議論には首肯できない部分がある。<sup>(38)</sup>專修寺本の書写者や祖本については課題が残されているといえよう。

專修寺本には坂東本にも先行すると推定される情報が残されており、親鸞在世時に坂東本を書写したと思われる專信本系の情報を伝えているため、大変貴重な資料であろう。さらに、專信房專海については、「安城御影」との関連が指摘されている。<sup>(39)</sup>『教行信証』の伝授について考える上でも、貴重な位置にあるのが專修寺本である。

ただし、本研究では、本願寺という場において『教行信証』がいかに生成され受け継がれてきたのかを考察することを睨んで、坂東本、西本願寺本、存如授与本に着目して議論を進めていくことになる。そうした

意味で、真宗教団における本山の一つとして専修寺に伝来した専修寺本『教行信証』については、単独の章節を立てて議論することはしない。坂東本や西本願寺本の特徴と比較対照することに特化し、現存する『教行信証』の中で最も古い情報を有する重要古写本の一つとして、坂東本や西本願寺本等の特徴の背景を根拠づけるために積極的に使用していくことを、ここで断っておきたい。

(3) 本派本願寺蔵鎌倉時代書写本（西本願寺本、本願寺本）

西本願寺本は、本願寺において相伝・伝授という面で一定の役割を果たしてきたと考えられる。応長元年（一三二一）本願寺第三代覚如が存覚とともに大町如道へ『教行信証』の講義を行った際に用いた本、あるいは第八代蓮如時代の本向房了顕「腹籠りの聖教」「肉付きの聖教」の伝説も西本願寺本といわれていること<sup>(40)</sup>で知られる。さらに、本願寺第六代巧如の頃までの伝授本の校訂に用いられた本とされ、本願寺における「相伝の聖教」としての地位にある。<sup>(42)</sup>江戸期以降は、親鸞自筆の「御真本」と伝えられ、「清書本」として知られてきた。

大正期以降は、坂東本と同様、立教開宗や親鸞の遠忌法要の記念事業として次のような影印本や写真版の制作・刊行などが行われ、それらを基に研究が進展してきた。

大正期 『教行信証』四冊（本派本願寺立教開宗七百年記念慶讃事務所文書部、一九二二）

昭和期 『重要文化財 教行信証』六冊（講談社、一九七六）

平成期 『『顕浄土真実教行証文類』復刻（西本願寺本）』六冊（浄土真宗本願寺派宗務所、二〇一二）

『本願寺蔵顕浄土真実教行証文類縮刷本』上・下

（『教行信証の研究』第三・四卷所収、浄土真宗本願寺派宗務所、二〇一二）

大正期影印本には禿氏祐祥による解説『教行信証考証』、昭和期影印本には宮崎圓遵による解説『教行信証考証』がそれぞれ附され、「本願寺本の性質」という項目を立てて当本の解説がなされているが、両書は『教行信証』全般の概説に主眼があると思わせる内容を主としている。平成期の復刻本には、梯實圓『教行証文類』成立の思想的背景」、内藤知康『『教行信証』の概説」、本願寺教学伝道研究所聖典編纂部門「西本願寺本の書誌について」、縮刷本には、解説「西本願寺本『教行信証』の特色について」が附されている。書誌事項について述べた平成期の解説二本では、重見一行による研究成果を踏まえた上で、西本願寺本の書誌的特徴の概要が述べられている。

西本願寺本の研究については、大正三年（一九一四）に発表された山田文昭による論考が嚆矢となる。山

田は、文永写本の存在を伝える石川県弘願寺蔵本（弘願寺本）を紹介し、これがのちに西本願寺本の奥書と結びつけられる原点となった。弘願寺本は焼失して現存しないが、大谷大学図書館蔵の明治十二年（一八七九）校合本によれば、「弘長二歳壬戌十一月廿八日／未尅親鸞聖人御入滅也／御歳九十歳同廿九日戌時／東山御葬送同卅日御舍利藏／佛滅後至 二千百三十五歳 當文永十二歳乙亥也／依賢劫經仁王經涅槃經等説言」

入末法後七百三十五歳

當文永十二歳乙亥也／依賢劫經仁王經涅槃經等説言」

〔 〕は改行位置、以下同様」という奥書があったようである。<sup>(44)</sup> また、西本願寺本と同系統の書写本と考えられる福井県浄得寺藏本（浄得寺本）にも、「弘長二歳壬戌十一月廿八日牛剋親鸞聖人御入滅也御歳九十歳同廿九日戌時東山御葬送同卅日御舍利藏佛滅後二千二百三十五歳  
入末法後七百三十五歳 當文永十二乙亥也依賢劫經仁王經涅槃經等說言」という奥書があり、<sup>(45)</sup> これらが西本願寺本奥書の原形と比定されている。

その後、中井玄道による諸本研究、<sup>(46)</sup> 辻善之助・八代国治による東西本願寺や専修寺の史料調査、<sup>(47)</sup> 立教開宗七百年を機縁とした坂東本や西本願寺本の影印本の公刊など<sup>(48)</sup> によって、真蹟本を中心とする『教行信証』諸本の書誌学的乃至文献学的研究が盛んとなったが、その過程で西本願寺本の研究も進展した。山田によって文永十二年（一二七五）奥書の存在が知られていたが、辻は奥書を本文とは別筆とすることで、本文部分の真筆を認定するに至った。妻木直良は、辻の真筆説に全面的に依拠している。<sup>(49)</sup>

これに反する立場をとったのが、中井玄道や橋川正である。中井は『教行信証附録』『異本解説』の第二に「本願寺本」の項を設けている。そこでは、西本願寺本の奥書について、

本願寺本に於て切取られたる部分には、尚奥書四行を存したりしを知るべし。此本は文永十二年に書写を了したるものなれば、正しく宗祖聖人の滅後十三年に当れり。弘願寺本は不幸にも今より三十年前に焼失せりとのことなれば、僅かに校合本に依りて知るの外なきも、之を同本なりと信ずべき本願寺本は、幸いにも今日まで安全に保存せられたれば、本願寺本は今日知られたる古写本の中、最も宗祖の年代に近きものにして、頗る珍重すべきものなりとす。又は文永写本を転写せるものなるかは、古文書学の研

究を待つて後決すべきなり。弘願寺本が本願寺本と同じく蓮如上人の所伝なりと称せらるるより察するに、当時本願寺所伝の秘本が間々特別の恩許を以て書写せしめらるるの例ありしならんか。

と述べている。<sup>(50)</sup> 中井は、文永十二年（一二七五）の写本であるか、その転写本であるかの判断は保留しているが、親鸞示寂後の近い時期の書写本と考え、親鸞真筆説に疑義を呈している。また、橋川正「辻博士の親鸞聖人筆跡之研究」『親鸞と祖国』二二二、一九二〇）には、辻の坂東本真筆説には賛同、専修寺本もこれに準ずるものとしているが、西本願寺本についてはなお保留すべき点があると述べている。妻木が肯定していることについても疑問を呈し、中井と同じく、進んで肯定できないと述べている。こうして真蹟説と非真蹟説が提示されることとなった。<sup>(51)</sup>

その後、吉澤義則は訓点別筆説を提示、<sup>(52)</sup> 梅原真隆は頭註・本文別筆説を提示、<sup>(53)</sup> 鈴木宗忠は中井の説に賛同、<sup>(54)</sup> 藤田海龍は辻による本文真蹟奥書別筆説・吉澤による点注別筆説・梅原による頭註別筆説を承けて頭註・本文非真蹟説を示し、<sup>(55)</sup> 潟岡孝昭は本文文永十二年書写・奥書別筆説を提示した。<sup>(56)</sup> こうして本文と奥書、訓点、註記等との関係が検証されていき、真蹟説は次第に薄れていった。

これらを承けて、現在の西本願寺本の位置づけを確定させたのが、重見による文永十二年坂東本臨写説である。<sup>(57)</sup> 重見は、西本願寺本の字種や異文、註記、補訂等を検討し、奥書を本文と同筆とみなし、西本願寺本は文永十二年（一二七五）に坂東本を臨写した画期的な写本であることを論証した。<sup>(58)</sup>

さらに近年、親鸞七百五十回忌を記念して西本願寺本の復刻本や縮刷本が公刊された。復刻本解説には、西本願寺本は、これらと同じく古来より親鸞聖人の真筆として伝来してきたもので、坂東本が「草稿本」と称されるのに対して「清書本」と呼ばれている。それは経論釈の引文や御自釈の箇所に適宜、改行が施され、整然とした体裁を保っていることによる。これほど内容を熟知した上で長行や偈文の区別をみて、分かりやすいように改行が施されているのは、鎌倉三本のうちでも西本願寺本だけである。この西本願寺本も親鸞聖人の筆跡の研究が進み、切り取られた奥書などから、聖人十三回忌の翌年にあたる文永十二年（一二七五）の書写本であることが明らかとなった。さらに西本願寺本は、坂東本の前後期の筆跡を忠実に書写し編輯したものであることが分かってきていて、これは法義が相伝されていく過程を探る上で重要な意味を含んでおり、正応四年（一二九一）の『教行信証』開版の底本を探る上でも注目される一本である。また極めて良好な保存状態であることから、坂東本において大きく消失している総序や教巻の冒頭部分をはじめ、真仏土巻、化身土巻の欠落箇所を確認することができ、現行の「正信偈」の本文を確認出来る鎌倉期唯一の書写本としても重要視されている。

とあり、縮刷本解説には、<sup>(59)</sup>

「坂東本」では「教巻」に欠失部分や「真仏土巻」「化身土巻」に欠落部分があり、「行巻」と「真仏土巻」には弟子の筆とみられる他筆が存在するのに対し、「西本願寺本」では現行にみられる『教行信証』

の全ての文が存在し、しかも謹厳な筆で一筆で書かれている。その大きな特徴は、本文は墨で書いているが、右左の仮名や返点、頭註等の註記・補記、四声点等はそのほとんどが朱筆であり、御自釈や経論の引用文には適宜改行を施し、長行と偈頌の区別をして整備された体裁をもっているところにある。

また「総序」の前に「大阿弥陀経 友謙三蔵訳／平等覚経 帛延三蔵訳」と記され、「教卷」にある標挙・標列は通常にみられるように「教卷」の内題前にあるが、さらに最終紙の裏にも標挙・標列がある。

これは本願寺系の書写本である浄興寺本や存如上人授与本等にも影響を与え、同様の文があるのが本願寺系『教行信証』の特色となっている。ちなみに最終紙の裏にある標挙・標列には、「頭真仏土五」が「頭真実仏土五」となっているので書き損ねた紙を再利用したとも考えられる。

とある。<sup>(60)</sup> これらの研究によって、西本願寺本には次のような特徴があることが知られる。

- ① 一筆で書され、坂東本の前後期筆跡を忠実に書写する。
- ② 現行の全ての文を備え、独自の標挙も存在する。
- ③ 整然とした体裁を保ち、經典・論書・釈書の引用や御自釈に適宜改行を施し、内容を悉知して長行や偈文を区別する。
- ④ 本文は墨、右左の仮名や返点、頭註等の註記・補記、四声点等のほとんどを朱筆で記入する。
- ⑤ 正応四年出版本の手掛かりを探る貴重な書である。

西本願寺本については、古くからいくつかの影印や翻刻が公刊されている一方で、近代以降は真蹟・非真蹟の議論が繰り広げられ、現在では親鸞自筆ではないと考えられている。『教行信証』諸本の研究史上においては、坂東本ほど盛んに論じられているわけではなく、平成の復刻本・翻刻本を活用した論考も少ない。現在は、絶え間なく塗り替えられる『教行信証』の書誌学的乃至文献学的研究の中で、新たな方法を模索している最中にあり、『教行信証』研究の基礎を構築し直すとともに複数の視点からその成立と展開について論じていくことが求められるが、親鸞示寂後のきわめて近い時期に坂東本を臨写した写本として、往時の坂東本の姿を知る上でも重要な一本である。坂東本・専修寺本の影印本や写真版とともに眼前において研究することが可能となった今、西本願寺本自身のさらなる研究の進展が待たれる。

### 三 本研究の目的

『教行信証』については、坂東本・専修寺本・西本願寺本などを底本として、諸本対校によって精査された翻刻テキストが次々と制作されてきた。現在では、複製本・影印本・写真版、校訂本・諸翻刻、本文テキストや古典籍・史資料の画像といった各種データベースなど、求めれば多種多様な形態の『教行信証』を享

受することができる。このことは、特定の研究者のみが可能であった文献資料の対比がより容易に行えるようになったことを意味し、『教行信証』諸本に影響し得た文献・史資料と各テキストとの諸関係を推定することを可能とした。こうした状況にあつてなすべきは、唯一の校訂本を探索し、原初形態あるいは標準的なテキストの作成を追い求めてきたこれまでの研究姿勢に、様々な歴史的社会的背景の中で生み出された『教行信証』諸本それぞれの在り方を加えて、議論を深めていくことである。

そのような中で、古写本における執筆者、書写者、それぞれのテキスト環境にあつてどのような営みがなされたのか、さらにそれらが次代にどう受容されたのかを究明することが、これまで蓄積されてきた『教行信証』の書誌学的乃至文献学的研究の内容を新たな局面に導く一手となろう。そうして体系化されたテキスト関係論こそが、中井の志向した第二の方法、内容的考究の現代的成果になると考えられる。

しかし、多く制作され伝えられてきた諸本については、中井以後も研究が重ねられ、現存目録や翻刻、諸研究による紹介等によって、表紙・奥書や文字の相異、註記などの情報は知られるようになったが、個々の目的の下で生まれ、様々な形態を有しながら伝えられてきたと思われるにも関わらず、それぞれの書写の事情について研究されることは未だに少ない。そのような事態に今もあるのは、『教行信証』の史料批判に際して、諸本は親鸞真筆である坂東本の補助的な役割に留まり、『教行信証』の成立過程を論じる上で傍証的に見られる傾向にあることが、その一因であろう。

坂東本は、その生成過程で重要な改訂が幾度か加えられており、諸本には、坂東本には見られないそれぞ

れの改変がある。原典や原本から何を受け継ぎ、書写本毎の特徴はいかに生み出されるのか。それは、その書写本の作成意図に関わり、書写当時のテキスト環境によって様々に差異が生じる。その差異を捉えた上で、『教行信証』諸本のみならず、引用原典や親鸞真蹟などの様々なテキストとの関係性において、坂東本を含んだ『教行信証』書写本の特徴を体系づけることができれば、『教行信証』諸本の書写者による主体的な営みが具体性をもって明らかとなると考えられる。つまり、〈作者〉親鸞は、どのようなテキストを取捨選択して『教行信証』を形作ったのか。〈読者〉は眼前にある『教行信証』原本をどう紐解き、当時のテキスト環境の中でどのように書写したのか。それぞれの書写の過程で生じたテキスト変化の実態を考究することにより、現代において『教行信証』テキストに向き合う立場と同様の視点が得られるであろう。

そこで、本研究では、書写本の書誌事項を細分して取り出し、その内容を分析し、再体系化することを掲げてみたい。〈作者〉による草稿や〈読者〉によるテキストへの関与については、周辺諸分野で書物のテキスト論や生成論、史料論などが急速に発展し、一定の成果を見せている。それらの成果や方法を援用しつつ、各時代のテキスト環境と書写本間のテキスト関係を分析することで、『教行信証』書写におけるテキストの生成と享受の実態を明らかにすることを本研究の目的としたい。

#### 四 本研究の方法

研究に際して留意しなければならないのが、『教行信証』を取り巻く諸研究である。これまでの『教行信証』諸本の研究は、真宗学のみならず、仏教学、歴史学、国語学、国文学、美術史など、諸分野の研究者によって取り上げられている。その中で、坂東本を中心に、親鸞の真蹟及び親鸞自身の筆跡変化の特徴が推定され、坂東本の成立過程が次第に明らかとなり、諸本を系統だてようとする試みがなされてきた。親鸞真蹟の書写年代を推定しうる今、そうした成果を基底として、坂東本に限らない『教行信証』諸本が親鸞在世時に留まらず多様に展開したことに着目しようと考えるのが、本研究の立場である。

そのような立場にたつて、『教行信証』テキストの生成や展開について論じる場合、周辺諸分野における書の多様な展開やテキスト関係についての研究方法や成果を援用することが有効である。『教行信証』については、親鸞真蹟本や古写本があり、真蹟を含んだ親鸞自身や書写者による文献、その他写本・刊本が多く伝わる。それらは様々な形態で公開されており、現存の『教行信証』等をはじめとした親鸞著述の拡がりや考慮すべきである。そのためには、『教行信証』が生成された日本中世という時代やそれまでの仏教の展開、書物・典籍という形態に関する研究分野の方法や成果との接続は、必要不可欠である。

聖教の研究については、日本中世史研究においていくつかの提案がなされている。従来より文書が中心史料とされてきた史料論において、聖教の取り扱いについては結果的に軽んじられてきた嫌いがあったが、永村眞や上川通夫などは、聖教を寺院史料の中核として位置づける史料論を展開することで、寺院社会をめぐる僧侶の生きた歴史像を描き出そうとしている。永村は、仏・法・僧の三宝の概念による体系把握を提唱し、

八宗など諸宗の教学を形成する上位次元、一寺院の組織を成り立たせる次元、一人の僧侶の修学から成業を担う次元に分類している。<sup>(61)</sup>さらに、テキストの位相の平面で見た場合として、経典本文の註釈を中心とした引用抄出や教義解釈をなす思想テキストの位相と、仏事法会などを営むための次第・行法・故実・記録としての儀礼テキストの位相に分けている。上川は、落合俊典による三蔵に着目した聖教分類や、<sup>(62)</sup>中尾堯による仏・法・僧に分けた「寺内文書」把握を紹介しつつ、<sup>(63)</sup>寺院文書と聖教の大局的でありながら不可分の関係性について言及する中で、聖教の役割や機能について論じている。<sup>(64)</sup>寺院社会内で教義・行法に関して記した書を聖教と定義する上川は、聖教の有する意義として、修学と宗教活動を知ることのできる史料、原本授与・書写授与によって法脈継承を根拠づける文献という二点を見だし、儀式・法会等の宗教活動の内実を明らかにしようとしている。さらに、東アジア社会という広範囲で聖教が果たした役割を史料として捉えようと試みる中で諸権門の文字史料について図示しており、聖教を一切経（版本・写本）と多様な形式の二つに区分し、前者を擬似的汎東アジア性の保証、後者を日本仏教の独自性としての発達と位置づけている。このうち後者こそが、本願寺における『教行信証』の書物としての性格と位置づけられ、漢訳仏典・中国撰述書・日本撰述書と広域で成立してきた諸本との関係性の中に成立することが知られるのである。これらの議論から、『教行信証』そのものは経論章疏の引用・抄出を主体としているが、のちに「正信偈」が別行され勤行にも用いられていることを考慮すれば、教学の基盤、寺院形成、法会など、様々な役割を担いうる性格のテキストと位置づける見方が示唆される。また、上川は、院政期に口伝から書記優位の時代へという変化が見

られることを口伝の文字化・文献化と評価し、十二世紀になると、聖教書写の量や質が向上し、口伝や法語、消息等も文字化される中で、後代の者が集成していく傾向を示している。<sup>(65)</sup> このことは親鸞やその継承者たちの場合にもあてはまり、聖覚『唯信鈔』や隆寛『一念多念分別事』を註釈した『唯信鈔文意』・『一念多念文意』法然の法語を書写あるいは編集したとされる『西方指南抄』があり、親鸞示寂後には、親鸞の法語を編集した『歎異抄』や、消息を集成した『末灯鈔』・『血脈文集』などが制作された。これらは〈読者〉によってなされた文字化・文献化・集成という行為とみなすことができる。親鸞による撰述・書写のみならず、その前後を含んだ諸テキストを対象として『教行信証』の書写や註釈をその生成と展開を捉えるための視点が示唆される。

さらに、一切経をはじめとする仏教典籍の保管・伝来についての研究がある。一切経に関しては、近代以降多くの一切経・大蔵経・叢書・全書等が刊行されるなど諸テキスト群が公開され、<sup>(66)</sup> 様々な研究分野から言及されてきた。近年では、国際仏教大学院大学による『日本古写経善本叢刊』<sup>(67)</sup> のような影印・翻刻・研究によって、経論等の流传や寺院所蔵聖教の実態を明らかにしようとする試みが継続的に展開されている。寺院に伝来した聖教・史資料の影印・翻刻等を集成した『真福寺善本叢刊』<sup>(68)</sup>、『七寺古逸經典研究叢書』<sup>(69)</sup>、『高山寺資料叢書』<sup>(70)</sup> など、寺院資料の影印・翻刻も同列に数えられるであろう。さらに、親鸞と時代をともしする各宗祖師については、その真蹟を中心とする著述体系の解明などの成果が出されている。<sup>(71)</sup> これらの研究は、寺院における聖教・史資料の保管と所蔵形態について教唆をうけるものである。

こうした仏教典籍を対象とする研究とともに注目されるのが、中世における書写本制作とその享受についての研究である。中世書写論と名付けて藤原俊成・定家の書写本制作とその後の書写者の享受の姿勢を考察した家入博徳は、証本の制作、自筆の意味、家による書写本の継承についてを、書写の在り方から明らかにした。<sup>(72)</sup> 後世への継承のための書写本制作と、その享受者の動向についての見通しは、本願寺を場とする聖教形成に対する同時代的視点として重要な示唆を受けるものである。

これらの研究を背景的研究と位置づけつつ、本研究では、テキストの生成や展開についてを対象とするテキスト関係論やテキスト体系論を援用したい。フランス文学研究を中心に一九七〇年代以降発展してきたのが、〈作者〉が書く行為そのものを広義の作品と捉える、草稿研究やテキスト論である。<sup>(73)</sup> 構想メモ・草稿・最終稿など同一作品に対して多くの文字資料が残る作品を対象に、テキストの関係性からその成り立ちを探るものであって、日本の典籍を対象としても研究が進められつつある。<sup>(74)</sup> ただし、これまでのテキスト生成論は、印刷技術を前提とした研究が基盤となっており、加えて、豊富に草稿等が残存していることなどを条件として、その条件にあてはまる文学作品に適用されてきた側面がある。しかし、書写本についての研究とでは立場が異なるため、方法の援用には注意すべき点もあり、『教行信証』を題材に用いる場合には、少なくとも坂東本や西本願寺本は印刷前の成立であろうことが、著者による最終稿と編者による印刷稿の存在を前提とする草稿研究とは異なる。それでもなお、書物の生成・発展という視点をもつ場合、『教行信証』においては、坂東本、つまり真筆本に依拠する部分と、その後の書物の役割を問うていくことが可能となることから、『教

行信証』研究にもテキスト論を導入したいのである。そして数あるテキスト論の中でも、本研究では、松沢和宏による生成論と、阿部泰郎による日本中世宗教テキスト体系論に注目したい。

まず松沢和宏は、あるテキストの前後関係や引用・註釈関係を見直し、同一テキストの諸本や同一作者の他のテキストに着目して体系化を試みている。<sup>(75)</sup> これまでの文学理論を礎として、テキストの関係性について、

「間（インター）テキスト」 …… 広義の引用関係にある処々のテキストの総称

「パラテキスト」 …… 副次的テキスト

「メタテキスト」 …… 広義の註釈的關係を持つテキスト

「前||テキスト」 …… 初出以降のテキストの誕生に先立って書かれたもの

といった用語を使って、テキスト体系の概念化を試みている。こうしたテキスト概念は、『教行信証』の引用原典、諸本、周辺史資料といった様々な単位でテキストを分解してその関係性を捉えるために有効である。

次に阿部泰郎は、テキスト解釈学を基底として、中世日本における宗教テキストの体系化を試みている。<sup>(76)</sup>

阿部は、テキストの位相を儀礼、聖典、伝記などとして表出した諸現象を文字テキスト・図像テキストと位置づけ、たとえば、聖徳太子テキストや親鸞の名号等について、各テキストの機能を図式化・概念化している。文字・非文字を含めてテキストと位置づけることでそれぞれのテキストの役割を特徴付け、他のテキストとの関係性を見いだすことで、寺社形成や信仰形態のあり方を明らかにしようとしている。

松沢や阿部に代表されるテキスト論の研究過程で紡ぎ出された、書写本や草稿の役割、テキスト関係、テキストの位相などを解明するために用いられた視点や方法を以て『教行信証』を対象として研究することで、〈作者〉〈読者〉それぞれの立場から周辺テキストとの関係性の中でテキストの生成と展開について、新たな視点から解き明かすことが期待される。<sup>(77)</sup>

これまでの『教行信証』の書誌学的乃至文献学的研究においては、赤松や重見の研究に代表されるように、同一本内の個別の問題を報告したり、字形の相異をその他の親鸞真蹟等の文献資料から抽出して比較したり、諸本を対校し異文を探したりすることで、各本の祖型や諸本系統が模索されてきた。そうした研究においては、一つの事象について本文執筆の時系列的に「教巻」から「化身土巻末」までのある事象を一つ一つ追うことで成果が挙げられてきた。一方、テキスト論を標榜する本研究においては、引用文それぞれの独立性に注意しつつ、周辺の文、同一書物の他の引用、引用原典、親鸞真蹟、その他一切経・経論章疏などとの関係を重視し、書物毎の特性をまとめることで、『教行信証』テキストがどのように生成されたのかを捉えていく。その点、問題箇所を異文や特異箇所として個別に取り上げて論じるような、これまで多くなされてきた研究法とは一線を画した方法であることが本研究の特色である。すなわち、奥書、割註、標挙・標列、句点、改行、偈頌体など、書誌学的見地から細分される書物を構成する要素それぞれの特徴を、差異性を以て位置づけるだけでなく、共通性を以て結びつけて再構築していくのである。このことによつて、同一本内、同一作品内あるいはそれらの周辺テキストとの関係性がより明瞭となり、『教行信証』諸本のみならず周辺の関連

典籍・史資料を含めた重層的・複合的なテキスト関係を明らかにできると考えられる。これを本研究の方法としたい。

## 五 本研究の構成

本研究では、『教行信証』の書誌学的乃至文献学研究的の到達点と課題を踏まえ、これまで述べてきたような目的と方法を以て論じていく。具体的には、書写者によるテキスト変化に着目して、主に三つの書写本の生成と展開について議論を進める。その三つの書写本とは、現存唯一の親鸞真蹟である坂東本、親鸞示寂後に坂東本を臨写した立場にある西本願寺本、中世本願寺において伝授本の完成形として作成された存如授与本の三本である。三本を研究する意味をそれぞれ述べるとするならば、第一に、坂東本によって、〈作者〉親鸞による『教行信証』テキストの生成を明らかにすることができる。坂東本は、前期筆跡・中期筆跡・後期筆跡・異筆箇所で大別できることが特徴であり、前期筆跡時における紙面の切り取りを伴う改訂については、『教行信証』テキストの引用文や配列などが決定された点が重要である。第二に、西本願寺本によって、〈読者〉による『教行信証』テキストの継承と変化の実態を明らかにすることができる。書写者は、披見し得たテキストの諸要素を受け継ぎ、他テキストに影響を受け、新たな書写本としてのテキストを形成していったと予

想されるが、その生成については、テキスト間の関係性の中で捉えることができる。親鸞示寂後十数年という、さほど親鸞から遠くない時期に、自筆本である坂東本を臨写したという類い稀な存在である西本願寺本は、恰好の研究対象となる。その書写の実態を分析することで、坂東本から何がどう継承されたのか、はたまた何が変化し、何が追加されたのかを具に明らかにできるからである。第三に、存如授与本によって、本願寺の寺院形成の中で『教行信証』がどう受容されていたのかを明らかにすることができる。存如授与本は、西本願寺本書写からすると、約二百年後の書写本である。しかし、覚如の時代に教団として成立した本願寺において、伝授本として制作された本であり、本願寺として継承されてきた『教行信証』テキストが時代を経てどのように捉えられていたかを知ることができる。

この三本をテキスト論の方法に従って関連させて論じる意図は、坂東本を中心として研究されている現在の『教行信証』諸本研究を、本願寺という場で生成した一連のものとして捉えることはできないかという着想が背景にある。これは、親鸞示寂後十数年という近い時期に坂東本を臨写して成立し、早くから大谷廟堂・本願寺に蔵されてきた西本願寺本を『教行信証』における〈読者〉の第一に据えることで可能となる。この視点によって、坂東本は西本願寺本の前史として〈作者〉親鸞による生成を知ることができる一本、存如授与本は西本願寺本の後史として伝承する立場にあった〈読者〉存如・蓮如による生成と展開について知ることができると一本と位置づけられる。西本願寺本を挟んだ三本を取り上げることによって、本願寺という場を媒介として成立・展開していった『教行信証』テキストという一連として考察することができ、これまで

の研究のような諸本の特徴による系統分類に留まらず、歴史的・社会的背景の中で生成・展開した『教行信証』の書物史が浮かび上がることが期待される。また、それらを中心に論じていく本論の前後に、諸本の奥書や引用・書写、標拳・標列といった書物の成立や構成に関わる書誌事項を検討する章を配置することで、『教行信証』諸本の展開という歴史の中に、親鸞から本願寺へと連なる諸本の生成と展開が位置づけられるであろう。

第一章では、『教行信証』をはじめとする諸本奥書の体裁や内容から、聖教書写、真筆書写、諸本書写の目的や意義について明らかにし、本文テキストとの関係を深く有する西本願寺本奥書の問題点について論じることで、従来の『教行信証』の書誌学的乃至文献学的研究と本研究との接続を試みる。

第二章では、親鸞による引用と書写を取り上げ、『教行信証』テキストの生成について検討する。引用体系と特異な書写法を検討することで、先行テキストと『教行信証』テキストとの関連や書写本と祖本との関係を明らかにする。

第三章では、坂東本における初期改訂について検討し、テキストの完成に向けてなされた引用文の書写や配置の問題について論じることで、親鸞による引用文の取捨選択や配置転換が行われたことの意義を明らかにする。

第四・五章では、西本願寺本を中心に、書写者による本文の整理・編集について二章に分けて検討する。西本願寺本の体裁面の処置と本文整理について、坂東本からの変化を周辺テキストとの関連の中で分析する

ことで、『教行信証』のテキスト構築における書写者の独自性について論じる。その中で偈頌体と句点については、西本願寺本の独自性が高い特徴であるため、第五章として別出して考察する。

第六章では、本願寺という場における『教行信証』の伝持について論じる。真宗聖教が形成されていく過程で『教行信証』が諸形態を見せる中でなされた存如授与本の生成とその周辺を検討することで、本願寺特有の聖教としての本願寺系八冊本成立の意義について明らかにする。

第七章では、主として各巻冒頭に位置する標挙・標列の変遷について論じる。坂東本・専修寺本・西本願寺本における位置づけと、それ以降の変化の様子を考察することで、『教行信証』テキストの享受の実態とその意義について明らかにする。

以上の構成によって、〈作者〉親鸞による成立に留まらず、多くの〈読者〉とその周辺テキストによって諸形態を見せることになる『教行信証』テキストの生成と展開の実態とその意義について明らかにし、様々なテキストが交錯し聖教が書写されつつ継承されていく中で、同一典籍の諸本のみならず周辺諸テキストを媒介としながら、『教行信証』のテキストが構築されつつ絶えず変化していったことの内実には迫りたい。

(1) 「テキスト」の語について、英語ではtext、フランス語ではtexteと表記するが、文学研究などでは分析や解釈の対象となる文章のことを「テキスト」と表す場合が多い。仏教関連典籍史資料に関する研究においては、「テキスト」とも「テキスト」とも表記されるが、ここでは、後に述べる目的や方法に照らし合わせて、写本や版本あるいはその原典の本文その他を指す語として「テキスト」と表記する。

(2) 石田充之「教行信証成立期の法然教団の動向」(『真宗学』三、一九五〇)参照。以下に、石田の挙げた江戸期以降戦前に至るまでの『教行信証』の成立に関する諸説を挙げておく。

①元仁元年撰述説(「化身土巻」仏滅年時計算の年時による)

高田派良空『親鸞聖人正統伝』巻五(『真宗全書』六七・三八三)、大谷派先啓了雅『浄土真宗聖教目録』(『真宗全書』一五四)、慶証寺玄智三巻本『浄土真宗教典志』巻一(『真宗全書』七四・二〇三)・『大谷本願寺通紀』巻一(『真宗全書』六八・四)、橋川正「親鸞聖人著述総論」(『仏教研究』三、一九二三)・『日本仏教文化史の研究』(中外出版、一九二四)・『綜合日本仏教史』(目黒書店、一九三二)、山田文昭遺稿第二巻『真宗史之研究』(破塵閣書房、一九三四)など。なお、玄智『非正統伝』(『真宗全書』六七・四三三)には「廣文類製造年時 凡ソ著述ニハ、草繕重校等アリテ年時異説アル事。例如選擇集、一概スベカラズ」とある。

②親鸞帰洛後晩年制作説(『六要鈔』の記述による)

中澤見明『史上之親鸞』(文献書院、一九二二)・「教行信証撰述の意思について」(『教行信証新研究号』、大日本真宗宣伝協会、一九二三)・「専修寺蔵の見聞集と教行信証成立の時代について」(『高田学報』四、一九三三)など。

③ 中間説（元仁元年（一一二四）から寛元五年（一一四七）尊蓮書写以前頃の成立）

鷲尾教導「教行証文類完成年代考」（『仏教研究』三十四、一九二二）、山田文昭遺稿第一卷『真宗史稿』（破塵閣書房、一九三五）、日下無倫『真宗史の研究』（平楽寺書店、一九三一）、上山文夫「見聞集並愚禿鈔に就て」（『大谷学報』一四三三、一九三三）、禿諦住『行信の体系的的研究』（法藏館、一九三五）

石田は、『正統伝』にて否定される「錦織寺伝絵記」の嘉禎三年（一一三七）制作説は③中間説に入ることと述べてるとともに、宮崎圓遵『真宗書誌学の研究』（永田文昌堂、一九四九）における帰洛後晩年制作説を有力とする見解を紹介する。そして、六〇歳頃に帰洛したと仮定すれば、『教行信証』は五二歳以後七〇歳頃に亘る時期に制作されたと推測するのが穩当であろうとしている。

(3) 中井玄道「教行信証改刻批議」（『六条学報』一一四、一九一一）。

(4) 中井玄道校訂『顕浄土真実教行証文類』（仏教大学出版部、一九二〇）。本書は、仏教児童博物館創立五十五周年記念出版として、『教行信証附録』とともに昭和五十七年（一九八二）に仏教児童博物館より復刻版が刊行された。

(5) 中井玄道『教行信証解説』（龍谷大学出版部、一九三三）一〇頁。

(6) 中井玄道「教行信証校訂私考（一）」（十八）（『六条学報』一二四〜一五〇、一九二二〜一九一四）。

(7) 中井玄道『教行信証解説』（龍谷大学出版部、一九三三）。

(8) 『真宗の世界』臨時増刊第三卷第五号「教行信証新研究号」（大日本真宗宣伝協会発行、一九三三）。第五輯に「顕浄土真実教行証文類／愚禿親鸞述」と題して本文翻刻されている。本文直前に勝岡廓善の記した「校正を了へて」では、中井による校訂本における誤植を勝岡が校正し、さらに中井自身が誤植に赤で訂正を入れたものをもとにできあがったため、比較的良本であることを述べている。

(9) 本願寺宗学院編『本典研鑽集記』(興教書院、一九三七)。同書の凡例の四条目には、次のように述べられている。

一 「校異」は『大正本』を底本とし、『本願寺本』、『報恩寺本』、『高田本』、『渋谷本』、『寛永本』、『正保本』、『明暦本』、『寛文本』等の諸本を校合す。これに就きては中井玄道氏の『教行信証附録』に負ふ所多し、記して以て謝意を表す。

(10) 本願寺宗学院編『古写真宗聖教現存目録』(興教書院、一九三七)、藤島達朗「教行信証の書誌」(『親鸞聖人蹟 国宝 顕浄土真実

教行証文類影印本』所収、大谷派本願寺宗務所、一九五六、以下「藤島達朗昭和本解説」と称す)、重見一行「附録 写本目録」(『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察』所収、法藏館、一九八一)。

(11) 鳥越正道『最終稿本教行信証の復元研究』(法藏館、一九九七) 四八頁参照。江戸期坂東本模写五本とは、教行寺本、東本願寺本、旧高倉学寮本、禿庵分古本、明清寺本を指す。

(12) 佐々木月樵『親鸞聖人伝』(無我山房、一九一〇) 第三章「立教開宗」(四六七頁)によれば、佐々木月樵は明治四十年(一九〇七)五月十九・二十日に報恩寺客殿において坂東本を拝観したという。なお、同書は佐々木教悟監修・長崎法潤・木村宣彰編『佐々木月樵全集第三卷 親鸞聖人伝』(うしお書店、二〇〇二)として再刊されている。

(13) 山田文昭「教行信証の御草本について」(『無尽灯』一九一四、一九一四、『真宗史の研究』に再録)。

(14) 中井玄道「教行信証の異本 上」(『六条学報』二二〇、一九一九)、同「教行信証の異本 下」(『六条学報』二二一、一九一九)、同『教行信証附録』(仏教大学出版部、一九二〇)、橋川正「辻博士の親鸞聖人筆跡之研究」(『親鸞と祖国』二二二、一九二〇)など。

(15) 平成版影印本解説十四頁によると、日下無倫「教行信証について」(『真宗史の研究』所収、一九二七)は大正期影印本の解説の意図を含めて書かれたものである。

- (16) 大正期影印本作成のための撮影の際に差し込まれたことを指す。実際には、昭和期修復の際に現在の位置に復元された。
- (17) 鈴木宗忠「教行信証の真蹟本に就いて」(『文化』五三三、一九三八)、藤田海龍「教行信証の真蹟本に就いて」(『日本仏学論叢』一、一九四四)。
- (18) 慶華文化研究所編『教行信証撰述の研究』(百華苑、一九五四)は、平成六年(一九九四)に目録等を増補して重版された。
- (19) 日野環「阪東本教行信証に於て異筆を課題とする八カ處の筆蹟討究」(『印仏研』五一二、一九五七)。
- (20) 関東大震災による坂東本損傷については、平成版影印本解説に詳しい。
- (21) 赤松俊秀「教行信証の成立と改訂について」(『親鸞聖人真蹟』真蹟 国宝 顕浄土真実教行証文類影印本)所収、大谷派本願寺宗務所、一九五六、以下「赤松俊秀昭和本解説」と称す)二頁では、大正期影印本公刊による研究の進展に一定の評価を示しつつ、影印本のみを用いて原本を見ないための研究には不備があったとして、藤田海龍、小川貫式の研究を挙げている。
- (22) 古田武彦『親鸞思想―その史料批判』(富山房、一九七五)のうち、第二篇「資料の研究」第三章「教行信証」。本書は平成八年(一九九六)に明石書店より再刊されている。その研究成果と課題は重見一行の著書、『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察』(法藏館、一九八二)二九〇―三二頁にまとめられている。なお、これ以降で「重見一行前掲書」と示す場合、同書を指す。
- (23) 重見はその後、「教行信証天文三年写本について」(『国文学年次別論文集 中世Ⅱ(全二冊)(昭和五七年)』所収、一九八四)を発表している。また、『貞慶・高弁・源空・親鸞覚書』(タニシ企画印刷、二〇一四)の第二章第二節「親鸞の教説」には、重見一行前掲書の内容を基盤として、親鸞による『教行信証』著述完成と、文献引用の態度、『教行信証』著述の意義などを略述している。
- (24) 鳥越正道『最終稿本教行信証の復元研究』(法藏館、一九九七)。

- (25) 小林芳規「漢籍訓点語の特徴―群書治要古点と教行信証・法華經古点の比較による」(『訓点と訓点資料』二九、一九六四)、佐々木勇「親鸞筆『教行信証』の漢音声調」(『比治山大学現代文化学部紀要』二、一九九六)など。
- (26) 「教行信証(坂東本)の角筆点について」は、赤尾栄慶・宇都宮啓吾監修・執筆『坂東本『顕浄土真実教行証文類』角点の研究』(東本願寺出版、二〇一五)に再録されている。
- (27) その他、平成二十三年(二〇一一)には『真宗総合研究所研究紀要』第二十八号に「『教行信証』(坂東本)総合研究のための基盤構築」と題して次の論考が収められている。
- 加来雄之「緒言」、藤元雅文『顕浄土真実教行証文類』(坂東本)の特徴についての予備的考察―専修寺本・西本願寺本との比較を通して―、廣瀬惺『教行信証』の構成―各巻の位置について―、加来雄之「方法としての『教行信証』(坂東本)―「正信念仏偈」解釈の試み―」、後藤智道「此の」顕真実教の明証なり―晩年の改訂からみる親鸞の課題―、マイケル・コンウェイ『教行信証』における親鸞の歴史観」、金子彰「恵信尼文書の用語」。
- (28) 重見一行前掲書二二〇～二二二頁、鳥越正道前掲書二七～三七頁。
- (29) 坂東本前期筆跡に近い親鸞聖人の真蹟については、重見一行前掲書二八五～二九八頁参照。なお、親鸞六〇歳頃以前の真筆としては、『観無量寿経註』・『阿弥陀経註』・『烏龍山師並屠児宝蔵伝』・『道綽禅師略伝』・『信敬上人御釈』などがある。
- (30) 重見一行前掲書一〇六頁参照。坂東本に前後期の親鸞筆跡変化をしめすものとして、藤田海龍による「无・廻・出・悪・善・所」、小川貫式による「經・薩・本・淨・彌・陀・眞」、赤松俊秀による「尊」、瀧岡孝昭による「修」の字形を挙げ、さらに重見が「爲・前」を追加している。重見はこの字形の変化を西本願寺本に応用するとともに、同書二五八頁以降で各種版本・写本との比較を通して坂東本の詳細な各部執筆時期の推定を行っている。
- (31) 「真仏土巻」『涅槃経』後半には「仏性」に関わる文が集積しているが、親鸞真筆による『涅槃経』北本系の抄出である

『大般涅槃經要文』（專修寺蔵、『真蹟集成』第九卷所収）と共通する文が多い。

- (32) 平松令三「高田専修寺の黒印をめぐって」（『高田学報』五七、一九六六）。同論文は、平松令三『親鸞真蹟の研究』（法蔵館、一九八八）に再録されている。

- (33) 常磐井堯祺「教行信証の校訂（一）」（『高田学報』六、一九三三）、「教行信証の校訂（二）」（『高田学報』七、一九三四）、「教行信証の校訂（三）」（『高田学報』八、一九三四）、「教行信証の校訂（四）」（『高田学報』一一、一九三五）、「教行信証の校勘（五）」（『高田学報』三四、一九五三）、「教行信証の校勘（六）」（『高田学報』三五、一九五四）、「教行信証の校勘（七）」（『高田学報』三九、一九五六）、「教行信証の校勘（八）」（『高田学報』四〇、一九五七）、「教行信証の校勘（九）」（『高田学報』四一、一九五七）。

- (34) 生桑完明「高田伝来の『教行証』真本について」（『真宗研究』二二、一九五六）。同論文は生桑完明『親鸞聖人撰述の研究』（法蔵館、一九七〇）に再録されている。

- (35) 重見一行前掲書二〇五頁。

- (36) 平松令三「高田専修寺本『教行証』の特色とその背景」（専修寺本影印本解説、一九八六）。同論文は『親鸞真蹟の研究』（法蔵館、一九八八）に再録されている。

- (37) 龍谷教学会議第四十八回シンポジウム『教行信証』の書誌的研究について（『龍谷教学』四八、二〇一二）において、「専修寺本『教行信証』とその研究について」と題して発題した新光晴は、確実に真仏筆と考えられる『経釈文聞書』の筆跡と専修寺本『教行信証』の筆跡があまりに異なると指摘している。また、同じく赤尾栄慶は、質疑応答の中で、字形からいうと、坂東本、西本願寺本、専修寺本の順に古いのではないかと指摘している。

- (38) 門川徹真『教行信証』の書誌学的研究―初稿本から改定本・清書本へと（『真宗研究』五八、二〇一四）、及び『教行信

証』の書誌学的研究』(永田文昌堂、二〇一六)一一頁。門川は、代表的な書写本の本文や訓点を対校する作業を行い、「一、初稿本から尊蓮・専海・真仏書写ⅡC専修寺本」「二、初稿本↓改定本ⅡA坂東本↓B西本願寺本」「三、坂東本↓清書本↓D存如・蓮如本、E佛光寺本、存覚『六要鈔』依用本など」と、『教行信証』を三系統に分類しているようであるが、その議論には用語と内容に関する三つの問題点がある。第一に用語についてであり、従来「清書本」と称されてきた専修寺本・西本願寺本を指す語を、何の説明も無しに他の系統に使用している点は議論の混乱を招きかねない。第二に、内容についてであり、門川は「卷子本で書かれた初稿本の一部がそのまま坂東本に転用せねばならなかった」とし、「宗祖は七十五歳の時すなわち宝治元年(一二四七)に門弟尊蓮に『教行信証』の書写を許されているのだが、それは初稿本であったと思われる。これが後に専海、真仏へと転写が重ねられて現存の専修寺本としてうけつがれている」(同書三〇頁)と述べているが、尊蓮が「初稿本」を書写したと推定する根拠、尊蓮本と専海や真仏との繋がりは何ら示されていない。第三に、門川が親鸞五〇歳頃の筆蹟と推定している「化身土卷末」『大集経』(卷子本)について、重見はその筆跡変化の状況や筆跡の様相から親鸞七十五歳直前と推定し、「所謂大集経ノートは、教行信証改訂に当って急いで書写作成されたノートであり、それを時期を隔てずして坂東本内に切り入れ、教行信証の本文として文の見出し部等を補筆したものとみられるのである」(重見一行前掲書二四三頁)と述べている。門川説は、現在広く認められている重見説とは大きく異なる見解を提示しているが、そのことには触れられていない。重要古写本の対校によって諸本間の近似性や差異は見られるであろうが、初稿本はもちろん、尊蓮本・専信本、あるいは正応版本といった散逸本を現存諸本と結びつける場合には、本文のみならず奥書や書き入れ等の書誌事項や周辺テキスト、それに対する過去の研究を踏まえて慎重に議論すべきであり、今後考究されるべき課題といえよう。

(39) 藤島達朗昭和本解説参照。

- (40) 西本願寺本復刻本解説「西本願寺本の書誌について」(『顕浄土真実教行証文類』復刻(西本願寺本))解説所収、浄土真宗本願寺派宗務所、二〇一二)以下、「復刻本解説」と称す。
- (41) 平松令三「蓮如の聖教書写と本願寺の伝統聖教」(『講座蓮如』第二巻所収、平凡社、一九九七)及び「蓮如上人の書写聖教と本願寺伝統聖教」(『龍谷教学』三二、一九九七)参照。
- (42) 復刻本解説、平松令三「蓮如の聖教書写と本願寺の伝統聖教」(『講座蓮如』第二巻所収、平凡社、一九九七)及び「蓮如上人の書写聖教と本願寺伝統聖教」(『龍谷教学』三二、一九九七)参照。
- (43) 山田文昭「教行信証の御草本に就いて」(『無尽灯』一九四、一九一四)。現在では、弘願寺本は失われ、山田の記録が残った大谷大学蔵校合本によって知られる。なお、同論文は山田文昭遺稿第二巻『真宗史之研究』(破塵閣書房、一九三四)に再録されている。
- (44) 山田文昭前掲論文による。なお、藤島達朗昭和本解説によると、寛永十二亥年二月下旬第五日の奥書があるとされる。
- (45) 日下無倫「教行信証古写本の種類及其の最古の註疏」(『仏教研究』四一三・四、一九二二)、宮崎圓遵『教行信証考証』(講談社、一九七六)、重見一行前掲書一三三頁による。「真宗聖教現存目録」(『史料集成』一・一〇三九)では重見が「牛」とした字が「午」となっている。
- (46) 中井玄道「教行信証の異本(上)」(『六条学報』二二〇、一九一九)、「教行信証の異本(下)」(『六条学報』二二一、一九一九)及び『教行信証附録』(仏教大学出版部、一九二〇)。
- (47) 辻の調査の後、大正八年(一九一九)七月九日の官報に復命書が掲げられており、禿氏祐祥『教行信証考証』(興教書院、一九二三)一八頁、梅原真隆『教行信証序説』(親鸞聖人研究発行所、一九三四)一七頁や宮崎圓遵『教行信証考証』(講談社、一九七六)二五頁などに引用されている。

- (48) 立教開宗七百年記念として、坂東本は『顕浄土真実教行証文類』六冊（大谷派本願寺編纂課、一九二二）、西本願寺本は『教行信証』四冊（本派本願寺立教開宗七百年記念慶讃事務所文書部、一九三三）が公刊されている。
- (49) 妻木直良「本願寺所蔵の真本「教行信証」に就て」、『法爾』一八・一九、一九一九。
- (50) 中井玄道『教行信証附録』一〇頁。
- (51) 禿氏祐祥・宮崎圓遵による大正期・昭和期の西本願寺本影印本解説では、真蹟説・非真蹟説の両説を挙げて、解説者自身の見解は示されていない。禿氏祐祥は、「本願寺本『教行信証』後序 口絵解説」、『真宗講話』一一、一九二二）では辻説に依っているが、禿氏による大正期影印本解説では両説を挙げており、『教行信証』の自筆草稿本」、『教行信証撰述の研究』所収、百華苑、一九五四）では西本願寺本を自筆とするのには異論があるとして自筆本としては坂東本のみが承認されると客観的立場から述べている。また、宮崎による昭和期影印本解説では、大正期影印本解説に倣う部分が多く、両説を挙げるのみである。
- (52) 吉澤義則「本願寺本教行信証点注の筆者に就いて 上」、『龍谷大学論集』二五八、一九二四）及び「本願寺本教行信証点注の筆者に就いて 下」、『龍谷大学論集』二五九、一九二四）。
- (53) 梅原真隆『教行信証序説』一二頁「本派本願寺」の項及び同書所収「付記」本派本願寺本の註記に就いて」参照。
- (54) 鈴木宗忠「教行信証の真蹟本に就て」、『文化』五三三、一九三八）。
- (55) 藤田海龍「教行信証の真筆本に就いて」、『日本仏学論叢』一、一九四四）。
- (56) 鴻岡考昭「西本願寺本『教行信証』成立考」、『帯広大谷短期大学紀要』三、一九六五）。
- (57) 重見一行前掲書一三九頁。
- (58) 重見一行前掲書のうち第二章「坂東本の成立過程」第二節「西本願寺本に関する考察」（一〇一頁）参照。

(59) 「西本願寺本の書誌について」(『顕浄土真実教行証文類 解説』五三頁)。

(60) 「西本願寺本『教行信証』の特色について」(『縮刷本』九三八)。

(61) 永村眞『中世寺院史料論』(吉川弘文館、二〇〇一)のうち「寺院聖教論」。

(62) 落合俊典「中世に於ける経蔵の目錄学的分類と諸相——一切経・章疏・聖教——」(『説話文学研究』四一、二〇〇六)。第一層を一切経、第二層を章疏類、第三層を経論疏を土台とする聖教と見なす。そのうち第三層を日本人の著作にあてて、日本仏教の創造した知の所産としてのテキストと位置づけている。

(63) 中尾堯「寺内文書」(歴史読本特別増刊『日本歴史「古文書」総覧』、新人物往来社、一九九二)。

(64) 上川通夫「中世聖教史料論の試み」(『史林』七九・三、一九九六)。同論文は、上川通夫『日本中世仏教史料論』(吉川弘文館、二〇〇六)に再録されている。

(65) 上川通夫前掲論文。

(66) 拙論「本願寺の系譜——歴代宗主の事績と聖教」(『浄土真宗総合研究』一〇、二〇一六)〈近代・現代篇〉に「聖教——近代仏教学と大蔵経の刊行——」として、次のような近代以降刊行の大蔵経・全書・叢書等列挙した。

① 日本

大日本校訂大蔵経(二八八一〜一八八五)、日本校訂大蔵経〔卍正蔵〕(一九〇二〜一九〇五)、大日本統蔵経〔卍統蔵〕(一九〇五〜一九二二)、縮刷大蔵経〔博文閣〕(一九一〜一九一四)、大日本仏教全書(一九二〜一九三二)、日本大蔵経(一九一四〜一九二二)、国訳大蔵経(一九一七〜一九二八)、仏教大系(一九一八〜一九二三)、大正新脩大蔵経(一九二四〜一九二八)、現代意識 根本仏教聖典叢書(一九二三〜一九二四)、国文東方仏教叢書(一九二五〜一九三三)、国訳一切経・印度撰述部(一九二八〜一九三六)、昭和 new 纂国訳大蔵経(一九二八〜一九三二)、大日本校訂

大藏經〔縮藏〕昭和再訂本（一九三五～一九三八）南伝大藏經（一九三五～一九四一）、国訳一切經・和漢撰述部（一九三六～一九八八）、大日本仏教全書（鈴木財団一九七三）、日本大藏經・増補改訂（鈴木財団版一九七三～一九七七）、新纂大日本続藏經（一九八〇～一九八八）、新国訳大藏經（一九九三～）、大正新脩大藏經CD-ROM版（一九九五～）、聖語藏經卷・デジタルデータ（二〇〇〇～）、大正新脩大藏經テキストデータベース〔SATA〕（二〇〇八～）

②中国・朝鮮半島

高麗再雕大藏經（木板刷一八九八・一八九九・一九一五・一九三七・一九五八～一九六一、影印（東国大学校版一九五七～一九七六・東洋仏典研究会版一九七一～一九七五）、頼伽精舎校刊大藏經（排印一九一一～一九一三）、影印砂版大藏經（影印一九三三～一九三六）、影印宋藏遺珍（影印一九三五）、龍藏〔乾隆大藏經〕（木板刷一九三六・一九八九、影印一九九〇～一九九二）、普慧藏（排印一九四六～）、ハングル大藏經（排印一九六五～）、脩訂中華大藏經（影印一九七四～）、仏教大藏經・続藏（影印・活字一九七八～一九八四）、仏光大藏經（排印一九八三～）、中華大藏經〔漢文部分〕（影印一九八四～）、文殊大藏經（排印一九八六～）、房山石經〔遼金部分〕（影印一九八六～一九九三、影印二〇〇〇）、応県木塔遼代秘藏（影印一九九一）、C-BETA〔電子仏典集成〕（デジタルデータ一九九八～）、洪武南藏（影印一九九九）、永樂北藏（影印二〇〇〇）、嘉興藏（影印二〇〇八）、開宝遺珍（影印二〇一〇）、高麗大藏經初刻本輯刊（影印二〇一一）、思溪版大藏經（影印、予定）

- (67) 国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編集『日本古写経善本叢刊』として、これまでに第一輯『玄応撰一切経音義二十五卷』（二〇〇六）、第二輯『大乘起信論』（二〇〇七）、第三輯『観無量寿経・無量寿経優婆提舍願生偈註 卷下』（二〇〇八）、第四輯『集諸経礼懺儀 卷下』（二〇一〇）、第五輯『書陵部藏 玄一撰無量寿経記・身延文庫藏 義寂撰 無量寿経述記』（二〇一三）、第六輯『金剛寺藏 宝篋印陀羅尼経』（二〇一三）、第七輯『国際仏教学大学院大学蔵・金剛寺藏 摩』

訶止観 卷第一』(二〇一四)、第八輯『続高僧伝 卷四・卷六』(二〇一四)、第九輯『高僧伝 卷五 続高僧伝 卷二八・卷二九・卷三〇』(二〇一五) が刊行されている。

(68) 国文学研究資料館編／阿部泰郎・山崎誠編集責任『真福寺善本叢刊』(臨川書店、一九九八～二〇一一) は、第Ⅰ期・第Ⅱ期に分けて各十二冊が公刊され、古写本・文書、目録、典籍等の影印・翻刻が収められている。

(69) 七寺古逸經典研究会編『七寺古逸經典研究叢書』全六卷(大東出版社、一九九四～二〇〇〇)には、中国撰述經典、日本撰述經典、漢訳經典、經論章疏目錄などが収められている。

(70) 『高山寺資料叢書』(東京大学出版会、一九七一～二〇〇二)には、明恵上人資料のほか、古典籍目録や東域伝灯目録などが収められている。

(71) 各宗祖師の真蹟については、『法然上人真蹟集成』(法藏館、一九七四)、『日蓮聖人真蹟集成』(法藏館、一九七六～一九七七)などの写真版が刊行されている。また、法然の真蹟については、『選択集』廬山寺本の題字及び名号・細註や、自筆文書についての研究がある。道元の真蹟については『道元禪師真蹟集』(永平寺、一九九九)など、『正法眼蔵』に関する研究がある。なお、日蓮の真蹟については研究が多くあり、中尾堯『日蓮真蹟遺文と寺院文書』(吉川弘文館、二〇〇二)、寺尾英智『日蓮聖人真蹟の形態と伝来』(雄山閣出版、一九九七)などがある。中尾によれば、日蓮真蹟遺文としての内容(著書・書状・要文集・図表・写本)や装丁(卷子本・軸装・帖・冊子本)の両面から分類しており、こうした祖師真蹟の分類把握は、親鸞真蹟に通ずる部分があると思われる。また、日蓮真蹟の今日的意義や寺院による真蹟を中心とした史料保管、聖教としての役割などについて多角的に扱われる『【図説】日蓮聖人と法華の至宝』第二卷真蹟遺文(同朋舎メディアプラン、二〇一一)所収の新井日湛「日蓮聖人「御聖教」の恪護」・佐藤弘夫「日蓮聖人真蹟の観照」・中尾堯「日蓮聖人真蹟の概観」、同第三卷典籍・古文書(同朋舎メディアプラン、二〇一三)所収の湯山賢一「文化財としての日蓮聖人真蹟」・荻輪

頭量「鎌倉仏教における日蓮聖人の聖教」・中尾堯「寺院文書の構造的把握」などの諸論は、親鸞真蹟や『教行信証』の在り方について考察する上で、参考とすべきであろう。

(72) 家人博徳『中世書写論―俊成・定家の書写と社会』(勉誠出版、二〇一〇)。

(73) 日本におけるテキスト論研究としては、吉田城『失われた時代を求めて』草稿研究(平凡社、一九九三)、松沢和宏『生成論の探求―テキスト・草稿・エクリチュール』(名古屋大学出版会、二〇〇三)、『岩波講座文学Ⅰ―テキストとは何か』(岩波書店、二〇〇三)、吉田一義・田口紀子『文学作品が生まれるとき―生成のフランス文学』(京都大学学術出版会、二〇一〇)、松沢和宏編『テキストの解釈学』(名古屋大学グローバルプログラム、水声社、二〇一三)、明星聖子・納富信富編『テキストとは何か―編集文献学入門』(慶應義塾大学出版会、二〇一五)などがある。

(74) 工藤康子「生成研究―草稿を読む」(川本皓嗣・小林康夫編『文学の方法』所収、東京大学出版、一九九六)。

(75) 松沢和宏『生成論の探求―テキスト・草稿・エクリチュール』(名古屋大学出版会、二〇〇三)二七頁。

(76) 阿部泰郎『中世文学と寺院資料・聖教』(竹林舎、二〇一〇)及び『中世日本の宗教テキスト体系』(名古屋大学出版会、二〇一三)など。

(77) なお、キリスト教には、宗教文献の成立を論じる豊富な研究蓄積がある。聖書の成立やテキスト批判については、田川建三『書物としての新約聖書』(勁草書房、一九九七)、上村静『旧約聖書と新約聖書―「聖書」とはなにか』(新教出版社、二〇一三)などがある。



第一章 奥書からみる『教行信証』の生成

## 第一章 奥書からみる『教行信証』の生成

『教行信証』の生成について論じる場合、その周辺状況や背景を知るべきである。そうした書物の来歴を我々に文字の形で示してくれるのが奥書であり、本文の分析と同様に重視されるべき書誌事項である。奥書の種類には、本奥書・書写奥書・校合奥書・加証奥書・相伝奥書・伝授奥書・勘注奥書などがあるが、奥書の定義自体に曖昧な部分があつて、たとえば牧野和夫は、奥書・識語・跋などの用語について、いくつかの目録や辞書に示された例を挙げ、その区別の難しさを述べている。<sup>(2)</sup> 本研究で対象とする『教行信証』諸本においても、様々な種類の奥書等が知られ、鎌倉三本それぞれに裁断の問題がある。また、巻尾の書き入れを奥書とするものもあれば、識語とするものもあつて、一様ではない。<sup>(3)</sup>

本章では、奥書を『教行信証』諸本の各巻末尾に記されている書写や相伝などの文言として広く捉えた上で、それらから『教行信証』諸本生成の背景を描き出すことで、第二章以降の議論の足がかりとしたい。そのためには、書写者や伝持者、書写年時のみを抽出するのではなく、形状・内容の両面からの精査が必要である。『教行信証』のみならず諸本の奥書を通して、撰述や書写の目的や契機について考察し、中世真宗聖教形成史の中に『教行信証』を据えることを試みる。その中で、第四・五章で中心的に取り上げる西本願寺本奥書の問題にも迫りたい。

## 第一節 『教行信証』の成立と周辺

親鸞在世時から示寂後の『教行信証』の動向を把握するための方法として、本節では各種奥書などによって時代の特徴を窺っていきくため、ここでは、一定程度の年数で区切り、ある事象に注目してその動きを考察していく方法を採用したい。対象とする年代としては、便宜上およそ百年の単位で区切ることで、真宗聖教形成の大まかな流れの中に鎌倉三本等の重要な古写本の生成を位置づけていく。なお、各事項に関しては、『本願寺年表』や『聖典全』二・付録「年表」、『本願寺史』・『増補改訂本願寺史』などの記述や各種目録等を元に、各聖教の奥書等を鑑みて選定した。<sup>(4)</sup>

### 第一項 親鸞の撰述と書写

第一期は、親鸞の生涯を中心とした百年である。

親鸞誕生が承安三年（一一七三）であるから、文永九年（一二七二）頃までとしよう。親鸞の著作・書写など学問的活動については、『教行信証』を制作する以前のこととははっきりとしたことがわからず、その生涯は『親鸞聖人伝絵』（御伝鈔）や、江戸期に高田派良空が制作した『親鸞聖人正統伝』など、伝記類を中心に理解されてきた。

大正期に鷲尾教導が発見・公表した「恵信尼消息」によって、比叡山時代には堂僧をつとめていたこと、

建保二年（一二二四）佐貫での三部経読誦の発願・中止と寛喜三年（一二三一）の内省などが知られるようになった。<sup>(5)</sup> また、昭和期に『観無量寿経註』『阿弥陀経註』が注目を浴びて、親鸞壮年期の真筆であると推定されるようになる、法然門下において「浄土三部経」を初めとした浄土教典に親しんでいたことが窺われるようになった。<sup>(6)</sup>

また近年では、津田徹英による精力的な研究により、新たな見解が提示されている。<sup>(7)</sup> すなわち、親鸞が終生に及んで常用していた欠画文字や異体字が宋版一切経に留まらず宋版漢籍に範囲を拡大したところでの使用例に見いださうること、北宋皇帝の徽宗の書風である瘦金体に近いことを推定した。さらに九歳での得度出家以前には親鸞の後見人であった藤原範綱が後白河法皇の有力近臣であったことや、『親鸞伝絵』や『嘆徳文』の記述などを総合して、親鸞幼少期の修学地の候補として当時国内最高峰の蔵書数を誇ったと想定される蓮華王院宝蔵を挙げている。『教行信証』の生成と展開を主題とする本研究では、幼少期の修学についての議論には直接関わらないが、親鸞の用字について宋版漢籍との関連性の中で見ていく必要があることは、テクスト関係論としては注意が必要であろう。

さて、親鸞青壮年期の著作・書写については、奥書等は残らないが、その書写や真蹟については、次のようなものが知られている。現存するものは、筆跡からその年代が推定されている。

元久元年（一二〇四） 「七箇条制誠」署名（京都府二尊院蔵、現存する中で最古の親鸞筆跡）

元久二年（一二〇五） 『選択本願念仏集』『法然影像』書写（『教行信証』後序による）

(二九〜三五歳頃) 『観無量寿経註』『阿弥陀経註』(本願寺蔵)

(五〇歳代) 『烏龍山師並屠兒宝蔵伝』(本願寺蔵)

『道綽禪師略伝』(本願寺蔵)

『信微上人御釈』(本願寺蔵)

『教行信証』については、元仁元年(一一二四)を仏滅年代算定基準として挙げていることから、そのころから執筆を開始したとする見方があり、これが第一の基準であった。さらに、坂東本及び親鸞真蹟の筆跡研究が進展したことで、坂東本における親鸞の筆跡が前期筆跡(五〇歳代後半から六〇歳代)、中期筆跡(七〇歳代前半)、後期筆跡(八〇歳代)に分けられ、生涯にわたって増補改訂が加えられた事も、第二の基準に加えられる。それに関わって、奥書から知られる事項として、親鸞が尊蓮に『教行信証』の書写を許したことから一応の成立を見たと考えられる寛元元年(一一二四)が挙げられ、晩年の著作を考える上で第三の基準となる。坂東本の成立については序論で述べたので、親鸞による制作・書写が盛んになる尊蓮書写時期以降の動向と、門弟による書写・相伝について考察したい。

〔表1-1〕奥書からみる親鸞晩年の著作・書写

年号	西暦	教行信証	親鸞撰述	親鸞書写・加點・校合	門弟等
寛元五	一一四七	尊蓮書写	浄土和讃・浄土高僧和讃 唯信鈔文意		真仏、浄土和讃・浄土高僧和讃書写
宝治二	一一四八		浄土文類聚鈔 入出二門偈頌		
建長四	一一五二				
建長六	一一五四			浄土和讃 唯信鈔 後世物語聞書 二河譬喩(延書)	
建長七	一一五五	専信書写 真仏・顕智相伝	浄土三経往生文類(略本) 尊号真像銘文 皇太子聖徳奉讃 愚禿鈔	浄土和讃 浄土文類聚鈔 本願相応集 一念多念分別事 十字名号銘	真仏、法然聖人御消息書写
康元元	一一五六		如来二種回向文	唯信鈔文意 往生論註(加點) 十字・八字名号銘 六字・十字名号銘	真仏、入出二門偈頌書写 真仏、四十八誓願書写
正嘉元	一一五七		一念多念文意 大日本国粟散王聖徳太子奉讃	西方指南抄	
正嘉二	一一五八		尊号真像銘文(正嘉本) 正像末和讃	西方指南抄 唯信鈔文意 浄土三経往生文類(広本) 上宮太子御記 一念多念文意	真仏、如来二種回向文書写
正元元	一一五九			選択本願念仏集(延書)	真仏、三部経大意書写 成然、唯信鈔文意書写
文応元	一一六〇		正像末和讃(補訂)	弥陀如来名号徳	顕智、自然法爾聞書書写

親鸞は八〇歳頃以降、坂東本に繰り返し増補・改訂・書改を施しており、これが後期筆跡にあたる。<sup>(9)</sup>『教行信証』以外については、七五歳まではその数が少なく、親鸞の著作の大半がこの時期に成立する。それらは、大きく分けると漢語と和語に区分されるが、内容としては、經典・論書の組み立てによる「文類」(『教行信証』・『浄土文類聚鈔』・『浄土三経往生文類』・『如来二種回向文』)、漢語の詩句形式による「偈頌」(『入出二門偈頌』)、三部経や七祖の文や要語を体系的に配置した「抄物」(『愚禿鈔』)、經典・高僧・聖徳太子などを今様形式で讃嘆した「和讃」(『浄土和讃』・『高僧和讃』・『正像末和讃』・『皇太子聖徳奉讃』・『大日本国粟散王聖徳太子奉讃』)、経文の字句や隆寛・聖覚の書などを註釈した「文意」(『尊号真像銘文』・『唯信鈔文意』・『一念多念文意』・『弥陀如来名号徳』)の五つに大別することができる。これは、真宗教義を論理的にまとめた書、門弟に向けた書など、さまざまな目的に応じたことによる内容的分類である。その他、本願寺や専修寺など各所に現存する消息も親鸞晩年の著述に数えられるであろう。

親鸞は自身の著作に加えて、法然や聖覚の著作などを書写している。承久三年(一一二二)の成立と考えられる『唯信鈔』については、寛喜二年(一一三〇)・嘉禎元年(一一三五)・仁治二年(一一四一)・寛元四年(一一四六)と少なくとも四回以上書写し、晩年になってさらに書写を重ねることとなった。こうした書写活動の目的は、聖教制作のための下書きや手控えを基礎としている。<sup>(11)</sup>晩年のそれに関しては、門弟への相伝・授与のためになされていたことが、右に挙げた門弟による書写・相伝によって知られ、それは消息類に見られる聖教に対する意識から裏付けられる。<sup>(12)</sup>

『教行信証』に関しては、親鸞在世時には自身による坂東本の書写・増補・改訂・書改があり、尊蓮・専信ら門弟による書写があったと推定され、真仏・顕智への相伝は真慧『顕正流義鈔』によっている。また、「証卷」・「真仏土巻」の表紙袖書から蓮位への授与、「化身土巻末」の花押等から性信への授与が推定される。

## 第二項 親鸞示寂後の百年

親鸞示寂後十年頃から約百年の文中二・応安六年（一二七三）頃までを第二期としよう。

この時期は、鎌倉末期から南北朝期、本願寺の寺院としての創成期に相当する。文永七年（一二七〇）には覚如が誕生、文永九年（一二七二）には大谷廟堂が造立され、文永十一年（一二七四）は、親鸞十三回忌の年にあたる。そうした環境にあつて西本願寺本の書写に結びついていったと考えられている。<sup>(13)</sup> 大谷廟堂成立期には、各地の門弟においても聖教の動きを確認することが難しく、その中心的事業として西本願寺本書を位置づけることができる。

その後は、親鸞の著作の継承、新たな真宗典籍の制作が並行して行われ、再び盛況をみせるようになった。その頃の動向としては、『教行信証』出版、顕智<sup>(14)</sup>ら高田門徒系の聖教書写、覚如<sup>(15)</sup>・存覚<sup>(16)</sup>・従覚<sup>(17)</sup>・乗専<sup>(18)</sup>ら本願寺系の著作・書写、という大きく分けて三つがあった。文中二・応安六年（一二七三）は存覚の示寂年にあたり、親鸞以外による真宗聖教が多く制作された一つの時代が幕を閉じることとなった。『教行信証』と本願寺の動向を挙げると、次の〈表1-2〉のようになる。

〈表1-2〉親鸞示寂後の『教行信証』と本願寺

年号	西暦	教行信証と関連典籍	(註) 〔一〕内は他本奥書による推定。
文永七	一一七〇	親鸞の墳墓を改め大谷廟堂造立	大谷廟堂・本願寺の動向
文永九	一一七二	親鸞の墳墓を改め大谷廟堂造立	親鸞の墳墓を改め大谷廟堂造立
文永十二(建治元)	一一七五	西本願寺本書写【浄得寺本】	小野宮禪念没
建治三	一一七七	明性、坂東本相伝(坂東本奥書)	覚信尼、大谷敷地を門弟中に寄進
弘安六	一一八三		
弘安十	一一八七		
正応元	一一八八		
正応二	一一九一	性海、出版か【専修寺蔵】	覚如・覚恵、如信より宗要を授かる
正安二	一一〇〇		覚如、唯円に法文の疑義を問う
乾元元	一一〇二		如信示寂
徳治二	一一〇七		覚恵、留守職を覚如に譲る
延慶三	一一一〇		覚恵示寂
応長元	一一一一	覚如・存覚、大町如道に教行信証授与	覚如、鏡御影修復供養
元亨元	一一二一		覚如、鏡御影に識語
元亨四(正中元)	一一二四	存覚、書写(常楽寺蔵元亨本)	本願寺号所見
嘉暦三	一一二八	教行信証大意(名義)成立	(二本願寺親鸞上人門弟等愁申状)
元弘三・正慶二	一一三三	乗専、書写【大谷大学蔵】	
興国二・暦応四	一一四一	某、曆応本書写【大谷大学蔵】	
興国四・康永二	一一四三	存覚、乗智に延書相伝(龍谷大学蔵十七冊)	
正平元・貞和二	一一四六	存覚、尊蓮本延書【本願寺蔵】	
正平六・観応二	一一五一	源覚、延書書写(真宗大谷派蔵十九冊)	
正平十・文和四	一一五五	学念、延書書写(本證寺蔵残欠)	覚如示寂
正平十五・延文五	一一六〇	行玄、延書書写【弘誓寺蔵】	
		善如、存覚延書本書写(本願寺蔵十七冊)	從覚示寂
		覚念、書写(大谷大学蔵・岸部氏蔵零本)	
		存覚、六要鈔成立	
正平二十四・応安二	一一六九	尊理、加點【大谷大学蔵覚念書写本】	
文中二・応安六	一一七三		存覚示寂

親鸞示寂、つまり坂東本最終稿成立以降、西本願寺本成立に至るまでは『教行信証』に関する動きは見られない。ただ、文永年間の聖教書写の様子を伝える記事として、本派本願寺蔵『浄土三部経』正平六年存覚書写本の奥書がある。『無量寿経』卷上の奥書〔『聖典全』一・四二〕によれば、親鸞の父日野有範の中陰を機縁として親鸞の弟尋有が書写した本を、存覚が正平六年（一三五二）に写したと伝えられている。存覚によれば、その外題は親鸞自筆であった。佐々木勇によれば、親鸞の加点が保存されているという。<sup>(19)</sup> 親鸞ゆかりの聖教ともいえる同本であるが、このうち『無量寿経』卷下の本奥書には次のような事項が記されている。

又云

文永二年 丑<sup>乙</sup> 七月五日於法藏寺御房 以御本

即八條聖人 點校等竟  
御本也

文永十二年 亥<sup>乙</sup> 四月十五日以顯御本移點竟

同廿九日校合了

已上本奥書也

（正平本『無量寿経』下卷六四ウ、『聖典全』一・七〇）

まず、文永二年（一二六五）七月五日に法藏寺において、「御本」、続く割註「即八條聖人御本也」によれば親鸞の所持本をもって訓点等の校合を行ったことが記されている。次に、西本願寺本が書写されたと推定されるまさにその年、文永十二年（一二七五）四月に、「顯御本」を以て移点し、さらに後日校合し終えたこ

とである。<sup>(20)</sup>ここで注目されるのは、文永年間の段階で親鸞自筆の『無量寿経』加點本の情報が伝えられていることである。さらにこの加點が西本願寺本『無量寿経』の句点にも関連していると考えられる。その内容に関しては第五章で検討するが、大谷廟堂成立期に『無量寿経』や『教行信証』などが書写を介して関連していく姿が窺える。親鸞から次代へと聖教が繋がれていく移行期にあつてなされた西本願寺本の書写は、大谷廟堂の成立と、その聖教形成に係わる事業とも考えられる。

その後、弘安六年（一二八三）坂東本が性信より明性に相伝されたと考えられ、西本願寺本書写の八年後には、坂東本伝持者の変更があつた。親鸞三十三回忌の二年前にあたる正応四年（一二九一）には性海によつて版本が刊行されたと推定され、後の八冊本系統の祖型成立の時期に移行すると考えられる。漢文本の書写としては、京都府常楽寺蔵元亨四年存覚書写本（存覚元亨本）がある。漢文本の他に、延書本の制作も見られ、『教行信証大意』や『六要鈔』といった註釈書の成立は、後代に大きく影響を持つものとして特筆される。また、大谷大学図書館蔵室町時代書写本「信巻本」の第二奥書に、元弘三・正慶二年（一一三三）に乗専が「聖人眞祕本」を以て書写・校合し、「松影助阿」本なるものゝ以て重ねて校合したことが知られ、『教行信証』書写史において注目に値する。<sup>(21)</sup>

### 第三項 本願寺聖教の書写と伝授

第三期は、文明五年（一四七三）頃までである。南北朝から室町期にあたり、本願寺では、善如・綽如・

巧如・存如・蓮如が住持を務めた。<sup>(22)</sup>『教行信証』に関しては、その意を示し註釈した『六要鈔』や『教行信証大意』、さらに延書本が既に成立しており、それらが伝持・書写されるような時代に移った。文明五年（一四七三）蓮如の『正信偈和讃』文明版刊行を以て、この約百年が終わる。

〈表1-3〉善如・綽如・巧如・存如・蓮如期の『教行信証』と本願寺

年号	西暦	教行信証【】は他本奥書	関連典籍	本願寺の動向
元中六・康応元	一三八〇			善如示寂
元中九・明德三	一三九二		綽如、慈観から六要鈔伝授	善如示寂
明德四	一三九三			綽如示寂
応永八	一四〇一	巧如、延書書写【妙琳坊蔵】		
応永三十二	一四二五	某、書写（真宗寺本）		
応永三十四	一四二七	巧如、浄興寺芸範に授与 (巧如所伝本)		巧如示寂
永享十二	一四四〇			
文安四	一四四七		空覚、六要鈔書写	
文安六（宝徳元）	一四四九	源通、書写（大谷大学蔵零本）		
宝徳二	一四五〇	蓮如、書写（存如授与本）		
宝徳三	一四五一	蓮如、延書書写【願泉寺蔵貼紙】 存如、加賀木越光徳寺性乗に授与 (存如授与本)		
享徳三	一四五四	蓮如、越前円金に延書授与 【願泉寺蔵貼紙】		
長祿元	一四五七			存如示寂
長祿二	一四五八		加賀木越光徳寺性乗に六要鈔授与	

寛正元	一四六〇	近江安養寺浄性に延書授与 (本願寺蔵本)	蓮如、正信偈大意	親鸞二百回忌
寛正二	一四六一			
寛正五	一四六四	西玉坊、延書書写か【願泉寺蔵本】 文明本書写(龍大蔵(明厳寺旧蔵))	空覚、良空に六要鈔授与	巧如二十五回忌 大谷本願寺破却
寛正六	一四六五			
文正元	一四六六			
文明二	一四七〇			
文明三	一四七一	蓮如、正信偈和讃刊行	越前吉崎に坊舎建立	
文明五	一四七三			

本願寺第四代善如は前項の範囲にあるが、正平十五・延文五年(一三六〇)近江伊香の成信に授与するた  
めに『教行信証』延書十七冊本(本願寺蔵)を書写した。これは十七冊本として現存最古である。『六要鈔』  
成立年と同年の制作であり、存覚延書十七冊本を書写したものと考えられている。<sup>(23)</sup>善如は存覚に『嘆徳文』  
の制作を依頼し、天授五・康暦元年(一三七九)『存覚法語』を書写するなど、聖教において存覚と密接な関  
係を見せる。

第五代綽如には聖教書写は少なく、天授六・康暦二年(一三八〇)『口伝鈔』(富山県勝満寺蔵)の奥書書  
写が知られる程度である。第六代巧如の代には、浄興寺に多くの聖教が授与される中に、『教行信証』(巧如  
所伝本)が伝えられており、延書本も写与していたようである。<sup>(24)</sup>

第七代存如は、巧如期から聖教書写を行っていたが、特に『安心決定鈔』、『三帖和讃』を敬重し、「正信偈」

を初めて別行したと言われている。さらに、蓮如を右筆として多くの聖教を門弟に授与しており、その一つが存如授与本である。<sup>(25)</sup>

第八代蓮如は、若くから多くの聖教を書写していたが、その中に存如授与本などの漢文本と延書十七冊本も含まれている。文明五年（一四七三）に『正信偈和讃』を開版したことは広く知られているが、その後も文明九年（一四七七）『教行信証名義』書写、延徳元年（一四八九）延書本書写（法性寺旧蔵）、同年『教行信証大意』を添削し、延徳三年（一四九一）には蓮照（応玄）が『正信偈註』書写するなどしている。『教行信証』漢文本・延書本の書写に加え、存如が別行したとされる「正信偈」を「和讃」とともに開版し、「正信偈」に対する和語の註釈『正信偈大意』と『六要鈔』を元に再構成した漢文の『正信偈註』・『正信偈註釈』の制作するなど、蓮如は『教行信証』を多角的に展開した。

以上に見たような聖教の動向と『教行信証』の展開を踏まえれば、経疏等の書写時代を経て成立した坂東本、坂東本の後期筆跡段階で書写を許可された専信本を転写した専修寺本、坂東本を臨写しつつ体裁を整えた西本願寺本という三本それぞれの成立背景が認められる。本研究で中心的に取り上げる西本願寺本については、親鸞示寂後まもない時期の『教行信証』の受容態度をみることのできる貴重な一本である。その書写時代は、親鸞真蹟と伝授・相伝時代の狭間に位置しており、本願寺所蔵の聖教として受け継がれていくこととなる。本願寺という場において親鸞からの継承と後代への展開していく中に、西本願寺本独自の特徴と、その後の諸本成立の意義を見いだす必要があるだろう。

また、西本願寺本成立以降は、漢文本書写、延書本書写、註釈書の作成、「正信偈」別行の四つの動向があった。その内容については第六章で存如授与本成立の周辺として詳述するが、ここで注目したいのが、本願寺歴代による書写と授与である。その制作は、門弟の依頼によることが多いが、それぞれ同系統と思われる本を宗主（あるいは右筆・法嗣）が書写していることから、本願寺としての『教行信証』が漢文本・延書本それぞれにおいて成立していったことが推定される。綽如以外の宗主が何らかの形で書写した共通する唯一の聖教として、『教行信証』は本願寺聖教の中核に位置づけることができる。

## 第二節 真筆と撰述・書写

次に、各種真宗聖教の奥書等から、書写者における「真筆」に対する意識について検討し、『教行信証』の撰述や書写意識について、その展望を示したい。

### 第一項 親鸞と真筆

まず、親鸞自身の真筆に対する意識についてである。その姿勢は、西本願寺本書写者をはじめ、後代に書写する者の模倣の対象となりうる。親鸞は、法然『選択本願念仏集』や聖覚『唯信鈔』の書写などについて

述べる中で、「眞筆」という語を用いている。

まず、『選択本願念仏集』等の付属に関して、『教行信証』後序に、次のようにある。

元久乙キトノ丑ウシ歲、蒙ブリ恩オン、恕シヨ兮ハ書シキ『選擇』。同ジキ年初夏中ノ旬ツカ第四日、「選擇本願念仏集」内題字、并ニ「南无阿彌陀佛往生之業念佛爲本」與ニ「釋綽空」字、以ニ空眞筆ノ、令レ書レ之ヲ。同日、空ノ之眞影申預ノ、奉ニ圖畫ニ。同二年閏七月下旬第九日、眞影エイノ銘メイ以ニ眞筆ヲ令レ書ニ「南无阿彌陀佛」與ニ「若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現在成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生」之眞文ニ。又依テ夢告ニ改綽空字メテ同日以ニ御筆ヲ令レ書ニ名之字ヲ畢ス。本師聖人今年七月三御歲也。アラタム（『聖典全』二・二五四）

元久元年（一一二〇五）、親鸞は法然より『選擇本願念仏集』の書写を許され、その年の初夏、内題「選擇本願念仏集」と標宗の文「南无阿彌陀佛往生之業  
念佛爲本」と授受者としての名字「釋綽空」の三つを法然の眞筆を以て書き与えられた。さらに、その日のうちに法然の眞影を書写している。そして元久二年（一一二〇六）閏七月二十九日、法然眞影に六字の名号と『往生礼讚』の第十八願文との銘文を法然の眞筆を以て書き与えられ、<sup>(26)</sup>さらに同日、綽空から改めた名字を、これも法然の眞筆で書き与えられている。

坂東本においては、「以テ眞筆ヲ」（『眞蹟集成』二・六七四）が右傍に補記されている。この補記については、記さなくとも周辺にある「以テ空眞筆ヲ」や「令レ書ニ」という表現によって、法然の筆によることは判読できる。ただ親鸞は、あえて補記しているのである。このことから、少なくとも『教行信証』の後序として書き

加える必要のある大切な字句であったといえる。これを含む後序の文は、『親鸞聖人血脈文集』<sup>(27)</sup>、さらに『親鸞聖人伝絵』<sup>(28)</sup>などにも引用されている。もちろん、坂東本を臨写した西本願寺本自身もこの部分を書写しており、坂東本補記部分を本文に組み入れて写している。西本願寺本書写者は、「以眞筆」を本文に組み込むことで、親鸞に見られる師の眞筆に対する思いを、坂東本を写す中に受領していたと考えたい。

次に、『唯信鈔』の書写本については、専修寺蔵眞筆本（信証本）、本派本願寺蔵親鸞眞筆本、専修寺蔵文暦二年親鸞眞筆本（平仮名本）には、「以彼草本眞筆」「以彼眞筆草本」（『聖典全』二・一〇一）のような奥書がある。眞筆をもって書写することで、その書物の最も信頼できる本を書写した事を示しており、後の〈読者〉がこれを見れば、証本としての権威を高めて認識される効果があったと考えられる。

こうして眞筆を書写したことを克明に記すことには、作者への尊敬の念を表明すること、自身の依拠する聖教であることを明記すると同時に、書写本の信頼性の高さを示す効果がある。『選択本願念仏集』にしても『唯信鈔』にしても、特別の理由があつて、眞筆の語を用いたのであろう。

次に、現存する親鸞眞蹟は、形態としては完本として伝えられるものや断簡などさまざまある。これまでの研究史上においては、辻善之助による眞蹟認定と、その後引き継がれる筆跡研究が一つの指標となっており、また、親鸞眞蹟を多く所蔵する専修寺においても辻の説を受ける形で、各地に点在する親鸞眞蹟について議論が重ねられている。

第一に、辻は東西本願寺と高田派専修寺を調査し、親鸞筆と伝わる筆跡を鑑定することで、多くの親鸞眞

蹟を認定した。<sup>(29)</sup> 辻は大正八年（一九一九）春に本派本願寺、大正九年（一九二〇）春に専修寺に赴いて親鸞の筆跡について調査し、<sup>(30)</sup> 同年五月二十九日の史学会においてその調査報告を講演した。その内容を筆記し修正を加えたものが、『親鸞聖人筆跡之研究』であり、同年十月に刊行されている。辻の調査は、いわゆる「親鸞抹殺論」というものの世間的影響に対して批評することが当初の目的であった。同時代史料に親鸞の記録が残らない、親鸞の筆跡が見当たらないという、当時流布していた言説に対峙するための辻の方法は、親鸞の真筆が確かに存在することを明かそうとするものであった。すでに史料編纂掛で調査し終え撮影していた「報恩寺の教行信証」、つまり坂東本を起点に、明治四十四年（一九一一）の親鸞六百五十回忌に際して写真版として印刷・出版された本派本願寺蔵『唯信鈔』、本願寺から拝借したという建長八年（一二五五）親鸞加 points の『往生論註』奥書を、多種の伝親鸞真蹟本における筆跡と比較することによって、親鸞真蹟を判断するための調査であった。

本願寺においては、『往生論註』奥書、六字名号、「安城御影」讚銘、『教行信証』（西本願寺本）本文を順に比較し、少なくともこの四種が親鸞自筆であると判定した。この時点では本願寺蔵の「御消息」三通、『浄土三経往生文類』（略本）、『唯信鈔』については真筆の確信を得ず、保留としている。専修寺では、「御消息」五通、「善導大師五部九卷」表紙外題、『浄土高僧和讃』、『正像末法和讃』、『浄土和讃』、『皇太子聖徳奉讃』、『法然聖人御消息』（上野大子女房御返事）、『西方指南抄』（真筆本）、『唯信鈔』（信証本）、『唯信鈔文意』（正月廿七日本）、「念仏者疑問」、『三部経大意』、『如来二種回向文』、『善導和尚言』、『唯信鈔文意』（正月十一日

本)、「蓮華面経言」、「憬興師云」(他筆も含む)、『大般涅槃経要文』、『教行信証』(専修寺本)本文、白紙十字名号、白紙八字名号、黄地南無十字名号、『尊号真像銘文』(正嘉本)、『四十八大願』の計三十五点を列举し、辻はこれらを真蹟と見た。この調査を経た上で、本願寺での調査で保留としていた「御消息」三通、『浄土三経往生文類』、『唯信鈔』の計五点も真筆としている。こうして多くの筆跡例を得た辻は、坂東本について一筆のみとし、真筆に相違ないと確信するに至った。その他、京都府二尊院蔵『七箇条制誠』の「釋綽空」の署名についても親鸞の自署とし、茨城県結城称名寺蔵『往生要集言』、新潟県浄興寺蔵六字名号、愛知県桑子妙源寺蔵十字名号、石川県金沢専光寺蔵『太子讚文』、法林墨華・続法林墨華所収の筆跡四点を含め、計五十四点について親鸞自筆としてよいと述べ、さらに山口県徳応寺蔵『太子和讃』も自筆であろうと認めている。

辻は、親鸞筆跡の基準を確定させ、『教行信証』や「和讃」等が親鸞の自著であることを明らかにし得たことを自らの成果とし、世間に出回っている諸本との比較研究、また写真版の公刊を将来の希望としている。<sup>(37)</sup> 様々な本の近似する字体を抽出して親鸞の自筆を判断するという辻の筆跡鑑定は、その後の『教行信証』の書誌学的乃至文献学的研究のその後の方向性に大きく影響を与えた。親鸞の筆跡と同筆であるか異筆であるかを判別するための方法と具体例を提示し、親鸞の執筆年時を推定するための字種として、今日までに約三十種が挙げられることにも繋がっていることには、辻の方法論的影響が大きい。ただ、辻自身も述べているように、西本願寺本『教行信証』を真筆とすることについては当初より批判や異論があった。専修寺本につ

いては現在では真仏書写と推定されており、その他にも辻が親鸞真筆と認定したものについて疑問が呈され、真仏書写などと改められたものも多くある。<sup>38)</sup>これは、筆跡鑑定の方法が鑑定者の経験知に則しているという性質上の問題にも起因していよう。それでもなお、辻の方法を踏襲しつつ親鸞の筆跡が再批判されることによって、親鸞の真筆が次第に精査されていくための基礎となっていくたという、『教行信証』を含む親鸞真蹟の研究史において画期的であったことは間違いない。

第二に、昭和八年（一九三三）、専修寺において、親鸞の筆跡についての座談会が開かれ、その所在や特徴、認定基準などについて議論された。この座談会は、『高田学報』第五輯に「親鸞聖人筆蹟研究」と題して速記録と多くの図版が残されている。そこでは、東西本願寺、専修寺、その他の所在における当時の状態をもとに、真筆の基準について討議され、次のような基準が提案された。

- 一 本願寺所蔵の御消息（ゆつりわたすいや女事、わう御）  
（前宛、今御前宛、常陸人々宛）
- 二 専修寺所蔵の『唯信鈔』（寛喜二年五月二十五日書寫）及『唯信鈔文意』（康元年一月二十七日）  
（五会法事讃略抄、涅槃経要文、唯信抄を収む）
- 三 専修寺所蔵の『見聞集』
- 四 専修寺所蔵の慶信に対する御返事

これらは、内容を元にしてその標準を求めたものとされている。消息、著作、要文ノートの三種において、それらの特徴を議論し、和文・漢文それぞれの基準を提示したことに、この座談会の意義がある。

その後も着実に研究が重ねられ、親鸞真蹟と認められるものについては、昭和四十八年（一九七三）親鸞生誕八百年・立教開宗七百五十年を記念して刊行された、『親鸞聖人真蹟集成』九卷（法藏館、一九七三〜一九七四）に写真版としておおよそが収められ、さらに平成二十三年（二〇一一）親鸞七百五十回忌記念として刊行された『増補親鸞聖人真蹟集成』（法藏館、二〇〇五〜二〇〇七）には第十卷が加えられた。その後もいくつかが親鸞真蹟と認められている現況である。<sup>(39)</sup>

これらの親鸞真蹟について、『教行信証』との関連で述べるとするならば、辻に始まり、重見の成果に纏められたような一字一字の字形比較という方法を以て、坂東本の筆跡年代が明らかにされてきた。しかし、『教行信証』諸本とそれを取りまくテキストの関係論という範疇で語るとするならば、第一項で年代順に挙げたものを、今度は、内容によって分類することが必要であろう。

名号本尊・銘文

十字・八字・六字名号讚銘など

自身の著書

『教行信証』、『浄土三経往生文類』、『一念多念文意』など

仏教書の書写（写本類）

『見聞集』、『大般涅槃經要文』、『唯信鈔』など

書状

真筆消息十二通

親鸞の著書については、前節においても内容的分類として五つに分けて示したが、その上位階層にこれらが位置づけられる。その他の書写本を含めた形態的分类も含めた複合的なテキスト体系において、現在の研究上、中心的存在として位置づけられるのが親鸞真蹟である。

第二項 親鸞の撰述・書写と門弟

さて、親鸞の著述と書写については、前節で年代別に列挙した訳であるが、今度は諸本奥書の内容によってその特徴を検討したい。次の〈表1-4〉は、各聖教の奥書に見られる親鸞による撰述・書写の記録である。<sup>(40)</sup>

〈表1-4〉親鸞奥書に見る執筆と書写

年号	西暦	書名	真蹟本		書写本		親鸞撰述・書写の奥書	奥書の種別
			専修寺蔵 (信証本)	本派本願寺蔵	専修寺蔵 顯智書写本	大谷大学蔵 恵空書写本		
寛喜二	一一三〇	唯信鈔	専修寺蔵 (信証本)	本派本願寺蔵	専修寺蔵 顯智書写本	大谷大学蔵 恵空書写本	寛喜二歲仲夏下旬第五日以彼草 本眞筆 愚禿釋親鸞書寫之	書写奥書
文暦二 (嘉禎元)	一一三五	唯信鈔	専修寺蔵 (平仮名本)		大阪府眞宗寺蔵 (室町中期書写)		文暦二歲 乙未六月十九日 愚禿釋親鸞書之	書写奥書
仁治二	一一四一	唯信鈔					仁治二歲初冬中旬第四日 以彼眞筆草本書寫之 忻求淨土愚禿釋親鸞(朱印)	書写奥書
寛元四	一一四六	唯信鈔			専修寺蔵 顯智書写本	大谷大学蔵 恵空書写本	寛元四年三月十四日	書写奥書
宝治二	一一四八	浄土和讃					寛元四歲 丙午三月十五日書之 愚禿釋親鸞 七十四歲	書写奥書
建長二	一一五〇	唯信鈔文意					寶治第二歲申歲初月下旬第一日 釋親鸞 六十七歲書之畢	本奥書
建長四	一一五二	浄土文類聚鈔			岩手県本誓寺蔵 伝眞筆本		建長二歲 戊申十月十六日 愚禿親鸞 八十歲書之	本奥書
		浄土文類聚鈔			専修寺蔵眞智書写本		建長四歲三月四日 親鸞八十歲	本奥書
		入出二門偈頌			茨城県聖徳寺蔵		愚禿八十歲三月四日書之	本奥書



康元二 (正嘉元)	一二五七	西方指南鈔 上末	專修寺藏	(正嘉元年真仏書写)	愚禿親鸞 <small>八十一</small> 書之	校合奥書
		西方指南鈔 上本	專修寺藏		康元二歲正月一日校之	本奥書
		西方指南鈔 中本	專修寺藏		康元元丁巳正月二日書之 愚禿親鸞 <small>五十一</small>	校合奥書
		唯信鈔文意	專修寺藏 (正月十一日本)		康元元丁巳正月十一日	書写奥書
		唯信鈔文意	專修寺藏 (正月廿七日本)		康元二歲正月廿七日	書写奥書
		一念多念文意	真宗大谷派藏		愚禿親鸞 <small>八十</small> 書寫之	本奥書
		大日本国粟散王聖 徳太子奉讚			康元二歲丁巳二月十七日 愚禿親鸞 <small>八十</small> 書之	本奥書
		浄土三経往生文類			康元二歲丁巳二月廿日 愚禿親鸞 <small>八十</small> 書之	本奥書
		上宮太子御記			康元二年三月二日書寫之 愚禿親鸞 <small>八十</small>	書写奥書
正嘉二	一二五八	尊号真像銘文	專修寺藏 (正嘉本)		正嘉元歲丁巳五月十一日書寫之 愚禿親鸞 <small>八十</small>	書写奥書
		正像末法和讃			正嘉二歲戊午六月廿八日書之 愚禿親鸞 <small>八十</small>	本奥書
		選撰本願念仏集			正嘉二歲九月廿四日 親鸞 <small>六十</small>	本奥書
正嘉三 (正元元)	一二五九				正元元歲九月一日書之 愚禿親鸞 <small>七十</small>	本奥書
		弥陀如来名号徳			正元元歲九月十日書之 愚禿親鸞 <small>七十</small>	本奥書
正元二 (文応元)	一二六〇				長野県正行寺藏 愚禿親鸞 <small>八十</small> 書之	本奥書

このうち真蹟が現存しているのは半数ほどである。奥書の種別としては、本奥書、書写奥書、校合奥書の三種が見られるが、こうして並べてみると、年(干支)・月・日、「書之」「書写之」、署名、年齢という要素で構成されていることがわかる。真筆本の自著については「書之」と記した奥書が大半を占め、書物が成立した時点、つまり著作の成立時の記入が主である。また、書写本には「写」の字が記されたものが多く、自身の著作であっても、書写した時点の奥書となっている場合がある。親鸞自身も奥書を記すに当たっては著した時点と、写した時点とを一定程度意識して記し分けていると考えられる。<sup>(41)</sup>

次に、そうした親鸞の書写本に面した門弟における、後世の真筆に対する扱いについて取り上げる。まず、覚如の著作には、親鸞の書き入れた外題についての記述がいくつかある。『改邪鈔』七には、

大師聖人の御自筆をもて諸人にかきあたへわたしませす聖教をみたてまつるに、みな願主の名をあそばされたり。  
 『聖典全』四・三〇六

とある。また、『口伝鈔』六「弟子・同行をあらそひ、本尊・聖教をうばひとること、しかるべからざるよしの事」には、

なかんづくに、釋親鸞と外題のしたにあそばされたる聖教おほし。御門下をはなれたてまつるうへは、さだめて仰崇の儀なからん歟と云々。  
 『聖典全』四・二五四

と、親鸞の記し置いた外題・袖書を有する聖教が多く伝えられていることがわかる。覚如の時代にも親鸞の筆の入った聖教が珍重されていた状況であった。そして、現存する親鸞の真蹟を含め、親鸞の真筆を書写し

たり披見したりするに際しての記述は、次のような聖教の奥書に見ることができ。以下はその例であり、必要に応じて抜粋している。

〔表1-5〕諸本奥書と真筆

書名	所蔵	年代	奥書本文（／は改行位置を示す）	出典
無量寿経	本願寺蔵	正平六年 存覚書写	正平六歲 辛卯 十二月十五日切句差聲畢朱點此也本者／御室戸大進入道殿 <small>有範 上人御親父</small> 御中陰之時兼有律師被加／點之由往年承置之間所寫之也外題者上人御筆也少々／不慮之事等雖有之併任本畢先爾寫之後日加／料簡加點他本者也 釋存覺	『聖典全』一・四二
觀無量寿経	本願寺蔵	正平六年 存覚書写	正平六歲 辛卯 十一月七ケ日御報恩念佛中參籠／本願寺之間以上人御自筆本差聲切句畢日來／所奉寫持之本先年於關東紛失之間今楚忽／奉寫之後日以此本可奉書寫安置者也／於上下堺之上下并行間雖被記疏文略之 釋存覺	『聖典全』一・一〇〇
阿弥陀経	本願寺蔵	正平六年 存覚書写	正平六歲 辛卯 十一月廿八日於大谷御廟以御／自筆寫聲并句畢御本所被披觀經也稱讚／淨土經文并法事讚元照律師釋等雖被／載之今所略也／釋存覺	『聖典全』一・一一一
觀阿弥陀経註	専修寺蔵	文保元年 存覚書写	此本者以上人御自筆慥所奉寫也自去年丁巳菅季春之候至今茲戊午暮春之天涉兩歲吸數月之居諸終一卷二經書寫訖經文釋文之交行也云云 右筆存覺 <small>歲廿九</small>	『高田本山の法義と歴史』八八頁
無量寿経（延書）	兵庫原毫撰寺蔵	乗専書写	貞和三歲 亥 林鐘中句候以聖人御點祕本延寫于假名令授與之訖／願主空善	『原典版解説・校異』五頁

観無量寿経 (延書)	龍谷大学蔵 (勝福寺旧蔵)	康応元年	康應元年 <sup>己</sup> 八月三日 以聖人御點祕本書寫之訖	『原典版解説・校異』五頁
教行信証	大谷大学図書館蔵	室町中期	本云／寛元五年二月五日以善信聖人御眞筆／祕本加書寫校合訖隱倫尊蓮 <sup>六十</sup> ／又云／元弘三歲 <sup>西癸</sup> 從初夏下旬之候□孟夏下／旬之天終書寫微功畢於寫本者以聖人／眞祕本加寫合云々於當本者以松影助阿／之證本重令校合而已 釋乘專 三十九歲	『史料集成』一・一〇三六 藤島達朗昭和本解説
浄土文類聚鈔 (延書)	和歌山県真光寺蔵	暦応三年	本云／暦應三歲 <sup>庚辰</sup> 四月廿三日本願寺／聖人以染御筆眞名正本依願／主所望難避以和字所延寫也	『原典版解説・校異』 一一二頁
愚禿鈔	京都府常楽寺蔵	存覚書写	件寫本者以右御眞筆所書寫之本也	『聖典全』二・三〇八
愚禿鈔	新潟県浄興寺蔵	永享六年	參州／和田良圓房聖人御自筆之本有隨身／上洛之事仍喜便宜奉交合愚本處々／差異點付之訖／今校合御眞本上卷許有之／下卷御奥書無之	『聖典全』二・三〇九
入出二門偈頌	茨城県聖徳寺蔵	室町時代	祖師聖人御眞筆入出二門偈一卷授與之／者也	『原典版解説・校異』 一一九頁(後筆)
皇太子聖徳奉讚	真宗大谷派蔵	文保二年	以彼御眞筆草本／徳治二年 <sup>丁未</sup> 卯月七日釋道顯／書寫之	『聖典全』二・五五〇
上宮太子御記	本派本願寺蔵	覚如書写	以彼眞筆草本／弘安六年八月三日／釋寂忍 <sup>三十</sup> 五歲	『聖典全』二・一〇〇六
自力他力事	大谷大学蔵	江戸中期 惠空写伝	文保二歲 <sup>戊午</sup> 十一月廿六日書寫之／本者御自筆也／宗昭 <sup>四十</sup> 九歲	『聖典全』二・一一〇九

これらは親鸞らの真筆や加点を用いて書写あるいは校合した旨を記した奥書例である。年代としては親鸞在世時の尊蓮による『教行信証』書写から十四世紀に至るまで、多く真筆について触れられている。「祕本」などとするもの、真筆書写の喜びを示す文言を示すものなどがあり、真筆本を特別視し、それらに対峙したときの格別の意識が見て取れる。また、正平六年（一二三二）の段階で親鸞真筆が大谷廟堂に置かれていることも推定され、本願寺と親鸞真筆との関係はさらに年代を遡る可能性も予想されるのである。

### 第三項 『教行信証』の書写

坂東本には、成立に関する書き入れはなく、第三冊・第四冊の表紙に記された袖書、第一冊・第六冊の巻尾に記された伝領奥書<sup>(43)</sup>によって、親鸞在世時から示寂後の坂東本の授受・伝持についてが知られるところである。ただ、その周辺に切り取られた箇所もあり、伝来過程における混乱もあつたようである。また、平松令三は、藤島による坂東本昭和版影印本解説によつて、坂東本の臨写本である東本願寺内局本あるいは奈良県箸尾教行寺本の「化身土巻本」外題下と尾題下とに「釋性海」との墨書があることが示されたことを述べ、正応版本の存在を推測させる高田系八冊本二本や奥書に正応三年・正応四年等の事項を略記した文明本の存在を指摘している。<sup>(44)</sup>

専修寺本も奥書を有しているが、書写奥書は残されていない。第一冊に、

親鸞御入滅弘長二歳 壬戌 十一月廿八日 午時

御年九十歳也同廿九日 午時 專信

遠江國池田住僧

顯智御舍利藏畢

下野國高田住僧

〔專修寺本〕(二二)

とあり、第三冊(『專修寺本』三七六)・第五冊(『專修寺本』五一四)にも同様の記述がある。これらは本文とは別筆であり、高田派第四世專空の筆と推定されている。<sup>(45)</sup>さらに、第六冊末尾の一葉について、現状では折り目以降が裁断されているが、明治時代に松山忍明が『宝曆十二壬午年六月三日御目錄』という曝涼目錄(現在は所在不明とされる)によって、「以彼六卷草本寫書之、筆師專信之、建長七歲乙卯月廿二日午時畢書之」とあり、これに続けて先に挙げた第一冊などと同様の奥書が記されていたとされる。こうしたことから、序論で示したように、生桑完明は專信を筆者とする説を提示し、定説となっていたが、平松によって專信書写本をさらに真仏が転写したものと考えられるようになった。しかし、專修寺本の書写については、さらに時代が下る可能性も示唆されている。

西本願寺本は、坂東本を臨写する中にその後期筆跡時の字形の特徴を捉えて写しており、「清書本」と呼ばれるように体裁が整っているが、単に坂東本を写して体裁を整えたことに留まらず、写しの中に深い意図と独創性を含んだ特徴的な一本である。しかし、奥書には書写の経緯などは記されておらず、その書写意識を文言や記録によって知ることができない。第六冊「化身土卷」尾題後に朱筆で、

和光同塵結縁之始 八相成道以論其終

ツイニ  
オワリ

〔縮刷本〕九二五)

とあり、さらにその裏面にあたる最終丁には、墨書で、

弘長二歳壬戌十一月廿八日

午歟  
未剋親鸞聖人御入滅也

(同九二六)

の二行があつて、このうち「午歟」のみ朱筆である。この三行分が現在の西本願寺本の奥書と認識されているが、以下の紙面が裁断され、数行分が失われている。近世には、切り取られた奥書を以て、真筆であることに疑念が抱かれていたともされる。<sup>(46)</sup>その後、同系統本の奥書が、西本願寺本奥書の原型と考えられ、文永十二年(一二七五)書写と推定されるようになった。

このように、奥書は筆者や書写・伝来を推定する上で重要な役割を果たすが、原本の奥書であつたり、後に奥書が加えられたり削られたりしながら、現在に至つていたのである。奥書が削除される場合が鎌倉三本に共通してみられることは、それぞれが真蹟として伝えられてきた歴史の中でなされたと考えられる興味深い事実である。この三本の生成について論じる場合、この奥書の問題を本文とのテキスト関係として捉える中で研究の現状と課題を追求すべきである。

次に、諸本の奥書からは、『教行信証』の書写に関して、豊富な情報を知ることができるといえる。たとえば、正応版本にあつたと考えられる記述などは、『教行信証』の伝播や諸本系統を探る研究のみならず、出版・印刷史、

あるいは政治史にも関与するような内容が示されている。歴史社会の中で存在する『教行信証』の側面を知るために重要な情報ともなり得るのである。<sup>(47)</sup>ここでは奥書の内容面から分類を試み、西本願寺本の位置づけをしていく。

第一に、伝真蹟の西本願寺本や専修寺本に見られる親鸞入滅の記事である。親鸞の入滅に関しては、『親鸞伝絵』下の第六段には、弘長二年（一一六二）の親鸞入滅に至る様子が、同じく下の第七段には文永九年（一一二二）冬に墳墓を改め、廟堂が造立されたことが述べられている。<sup>(48)</sup>ただ、入滅の時刻は西本願寺本と異なり、『親鸞伝絵』と同じ「午時」としている。西本願寺本・専修寺本ともに、親鸞入滅の記事を伝える貴重な史料と目されてきており、『伝絵』などを含めた年時の違いについても議論されてきた。<sup>(49)</sup>また、親鸞入滅の内容については、「安城御影」副本裏書『聖典全』二・九〇〇）および『反故裏書』『聖典全』五・一一〇五）の記事が知られているが、『存覚袖日記』には「安城御影」の詳細な記録が残されている。そこには「弘長二歳十一月廿八日 未時<sup>剋トソバニアリ</sup> 御入滅 御年九十」（『聖典全』四・一四五九）とある。ただし、「安城御影」副本裏書には「剋トソバニアリ」は無いようである。<sup>(50)</sup>

第二に、高祖や親鸞の命日を契機とする書写が、諸本奥書によって知られる。たとえば、京都府常楽寺蔵存覚元亨本第一冊奥書には、「元亨四年<sup>甲子</sup>三月廿七日奉書寫之／今日者眞宗高祖導和尚／遷化之期也依有往生之懇志殊凝／渴仰之精而誠已權律師光玄」、第五冊奥書には「本云／元亨四歲<sup>甲子</sup>十一月廿八日書寫之／今日者作者上人之遠忌也六十三廻之／運轉如夢百千萬端之戀慕催涙而已／權律師光玄」とある。<sup>(51)</sup>また、曆応

本「信巻」の第三奥書には、「殊迎本願寺聖人之御縁日慮外終右毫之功」とあったとされる。<sup>(52)</sup> 命日や遠忌に併せて聖教の書写が行われることは多くある。先に示した『無量寿経』正平六年存覚書写本では、日野有範の十三回忌に際して兼有が書写を行っているとの奥書にあり、ここに挙げた各本でも、善導や親鸞の遠忌や命日を機縁としていたことを、書写の結びとして記している。日本では奈良・平安朝以来、盛んに写経や一切経供養が行われてきた。もともとの經典書写や出版はその功德を期して祈願や供養のためになされるという目的があったと考えられるが、高祖・祖師の命日・遠忌に寄せて行われた書写事業によって、多くの本が展開してきたこともまた、重要な事実である。『教行信証』の書写においても、祖師の忌日に奥書を合わせることも自体にも意味があったと思われるのである。

なお、「鏡御影」覚如裏書には「延慶三歲 庚戌 十一月廿八日以前奉修補遂供養訖／應長元歲 辛亥 五月九日於越州／教行證講談之次記之了」〔聖典全〕二・九〇二とある。応長元年（一二二一）に大町如道への『教行信証』講義の際に携えられた「鏡御影」は、その前年の親鸞の命日に合わせて修補供養が完了したというのである。『教行信証』のみならず、そうした日時が制作に関わる契機として記されているのである。

第三に、室町時代以降の『教行信証』書写本・刊本には次のような奥書があることが多い。<sup>(53)</sup>

今此教行證者祖師親鸞法師選述也立章於六篇調卷於八軸皆引經論眞文各備往生潤色誠是眞宗紹隆之鴻基實教流布之淵源末世相應之目足即往安樂之指南也

宮崎圓遵の指摘以来、応永年間成立の浄興寺蔵巧如所伝本が最も古いと言われ、本願寺蔵存如授与本をは

じめとする諸本に書写され、さらに江戸時代刊本にもこの文が刻されていることが知られていた。<sup>(54)</sup>しかし、平松令三によって、慶長・室町成立の高田系八冊本二本にその原型が伝えられ、その原初形態が正応四年版本に遡りうるものが指摘された。<sup>(56)</sup>この奥書で注目すべきは、その内容である。『教行信証』は親鸞による撰述であること、六卷八軸という調卷、経論の「真文」による組み立て、真宗興隆の基礎としての性格を端的に述べており、『教行信証』が伝授され読み伝えられるべき由緒を記したものととして、本願寺系の書写本や江戸期の刊本が流布することによって広く受け入れられてきたのである。<sup>(57)</sup>

以上にみたような内容は、『教行信証』が書写・出版され広く伝播していく中で、書写の契機を知らせるとともに、『教行信証』の由緒を端的に示す重要な役割を果たしている。西本願寺本に第二・第三のような内容は含まれてはいない。しかし、『教行信証』書写の根底には、何らかの機会に親鸞から伝えられた諸本を前にして書写し、その本を書写し終えた「書写之功」という意識は、諸本の書写者に共通するものであろう。真筆に対する意識が親鸞や門弟、後世の書写者に見られる中で、西本願寺本の書写意識はいかにあったのかを考えれば、祖師・高祖の真筆に対峙して書写する際の格別の意識は、西本願寺本にも認められ、それが一字一字を坂東本の字形を模して書写したことに表れているのではなからうか。経典・論疏の真文を写していく中で成立した坂東本は、親鸞自身の言葉で『選択集』見写や法然による自筆や『往生礼讃』真文について述べられているが、坂東本を臨写した西本願寺本は、親鸞示寂後における坂東本『教行信証』の第一の〈読者〉として、後代のものに伝える役割を負って西本願寺本制作を企図したと考えられる。

では、親鸞が坂東本に奥書を示さなかったことは如何なる意味を有するのであろうか。『教行信証』との略関係が古くから議論される『浄土文類聚鈔』については、真宗大谷派藏室町初期書写本に「建長七歳七月十四日書之／愚禿釋親鸞三十八歳」とあることから、著作意識は垣間見れ、ある短期間の一定の時期を以て、その書物が公式に成立したことを示しているのではないかと奥書から見れば推察されるが、同書の他の書写本にはこのような奥書は見られないようである。一方、坂東本を始め専修寺本にも西本願寺本にも、尊蓮や專信の書写が伝えられる奥書にも、親鸞自身による奥書は見られない。奥書が無い事實は、経論の「眞文」を類聚した書物であつて親鸞自身は集成した立場であるという意識があつたことが想定されるが、坂東本自身に常に執筆・増補・改訂が加えられていたことで、坂東本の完成を意味する奥書を記すことができなかつたのではないかと考えられる。

### 第三節 西本願寺本奥書の諸問題

以上の議論を踏まえて、西本願寺本奥書に残された二つの問題、朱書と裁断について、他のテキストとの関係の中で、その意味を見いだしていきたい。

## 第一項 西本願寺本奥書の課題

西本願寺本奥書の第一の問題は、奥書が裁断されていることである。坂東本の場合、第一冊「行巻」末の別筆奥書は一行が残されているが、第六冊「化身土巻末」に残された奥書と比較すると、署名「釋性信（花押）」に当たる一行分が切り取られている。<sup>(58)</sup>一方、本文が整備された西本願寺本の場合、親鸞の入滅年時等の二行を残して、残りの数行が裁断されていると推定されている。この裁断は、親鸞の示寂年のみを残すことに意味があった、あるいは裁断部の不都合な文言を削除することなどが理由として想定されるが、裁断の意図と時期、裁断者については不明である。

また、残存あるいは推定される部分が書写奥書のような情報を有していないために、書写者や書写環境がはっきりしていない。書写者について、中澤見明は、覚信尼が覚恵を招き寄せて書写したという説を挙げている。<sup>(59)</sup>小川貫弑も、「覚信尼が聖人の十三回忌を迎えて、真筆の草本の臨写を発願し、このことを長子覚恵に命じたとしても、敢て不自然ではない行為である」と、覚信尼発願・覚恵書写説を挙げている。重見一行は、親鸞の生前死後を生きて来た弟子の一人であった可能性を言い、近年では「鏡御影」の原讚銘との関連から如信らの可能性が指摘されている。<sup>(62)</sup>だれが書写したのか、大谷廟堂の動向を検討する方法や、周辺史資料と関連づけることで書写者の推定がなされ、現段階では覚恵説や如信説など、親鸞から大谷廟堂・本願寺へと展開していく中での重要な人物が挙げられている。ただ、断片や新出史資料の発見を待たなければ確定し得ない性質の問題でもあるため、今なすべきは西本願寺本の書写自体の再考であろう。計画的に行われたであ

ろう西本願寺本の書写には、少なくとも依拠する原本が用意されていたはずである。いかなる環境で書写されたのかを、西本願寺本の書物としての位置を問う中で明らかにしなければならぬ。

奥書部分の問題に限れば、もう一点、朱書の扱いが問題となる。「化身土巻」尾題後に記された「和光同塵」等の文については、その文言の意味、書き入れの意図について十分に議論がなされてきたとは言いがたい。この書き入れが意味しているところについては、西本願寺本全体の朱筆による書き入れの選別と奥書内容の分析による精査が必要である。

本文の分析については第四・五章に譲り、本節では西本願寺本奥書における問題である朱書と裁断について述べていきたい。

## 第二項 朱書箇所の問題

現状見ることのできる西本願寺本の奥書で特徴的なのは、「化身土巻」尾題から二行ほど離れて書かれた「和光同塵結縁之始 八相成道以論其終（ツイニオワリ）」（『縮刷本』九二五）の朱書である。「和光同塵」等は、もともと『老子』第四章の「和其光同其塵是謂玄門」に基づき、仏典でいえば五世紀頃北涼の曇無讖によって訳出された北本『大般涅槃經』に、未來非法の時代に出現する大乘の比丘のあり方の一面として、「是人爲欲調伏如是諸比丘故與共和光不同其塵」（『大正藏』一二・三九九下）とあることが指摘されている。<sup>(63)</sup>「和光同塵」は天台智顛が積極的に用い、『摩訶止観』卷六下には、「和光同塵結縁之始、八相成道以論其終」（『大正藏』四六・八

○上)と述べられている。<sup>(64)</sup> この『摩訶止観』の記述が西本願寺本末尾の朱書となって書写されている。<sup>(65)</sup>

しかし真宗典籍では、親鸞より時代の下る書物にならないければ引用されていない。「和光同塵」等は、覚如『親鸞伝絵』<sup>(66)</sup>、存覚『持名鈔』<sup>(67)</sup>・『諸神本懐集』<sup>(68)</sup>、蓮如『御文章』<sup>(69)</sup>に見られ、阿弥陀仏の本地垂迹の応用として登場し、神仏の関係を論理づけるために引用されているのである。中世における真宗聖教の中では、仏道に帰入することを述べる中で用いられることとなったが、この引用意図をそのまま西本願寺本の朱筆の意図とするのは早計である。ただ、この文言の書き入れの目的は、後代に一貫して仏道に帰入するという点で用いられていることを鑑みれば、伝授や相伝に類する文言とすることができるといえる。

一方、西本願寺本が文永十二年（一二七五）頃に書写されたことを前提とすると、親鸞示寂後まもないこの時期にあつて、親鸞の文献に見られないこの文言を、親鸞の主著である『教行信証』の末尾に書き入れたことはいかなる意味を有するのであろうか。西本願寺本書写時のものであれば、覚如や存覚らの用法が既に親鸞示寂十数年後に書き入れられていたということとなり、後代に「和光同塵」等を用いる依り所となったと見なければならぬ。一方、後世の書き入れとみれば、覚如・存覚・蓮如の引用が書き入れ時期の背景となる。そこで、この朱書をどう捉えるべきかが問題となる。

まず、西本願寺本の朱書の性格を捉える必要がある。西本願寺本では、本文とその訂正などは墨書され、その他の書き入れ、具体的には訓点、註記（欄外・右左傍）、朱註点、異本情報などは朱で書き入れられている。本文と直接関係のない西本願寺本の朱書の中の「和光同塵」等の文は、他の朱書とは異なる目的の書き

入れであり、時期は未定としても、『教行信証』諸本に見られない西本願寺本に独自の文言であって、この位置に記入されてしかるべき理由があったと考えるのが自然である。しかし内容面からすれば、本文として認められないものを書写していることと、「終シュツ」のように、「終ツイニ」の音義について詳細に述べる理由はどこにあるのかという二点に疑問がある。坂東本に無い要素、親鸞真蹟等周辺史料にも見られない要素がなぜ奥書様に示されたのか。難解な書き入れである。西本願寺本における他の書き入れについては、たとえば、第二冊「行巻」尾題後には「一チ 於悉反」(『縮刷本』二〇八)と朱筆での書き入れがあるが、西本願寺本成立時に書き入れられていたとは考えにくい。親鸞入滅の時刻を「午敷」と直している註記は、同じ系統の書写本と目される浄得寺本においても「午剋」と書き替えられていた。これと考え併せると、西本願寺本奥書周辺の朱筆は本文執筆時に書かれたのかどうか課題である。

この朱筆による書き入れが本文と同筆かどうかについては、中井玄道は本文と同筆と断言し、重見一行は「以」の運筆、「成」の部分から西本願寺本筆者のものとしている。<sup>(71)</sup> また、焼失した弘願寺本にも同様の朱書が巻尾紙右にあったとされる。<sup>(72)</sup> 現状では二つの字形と散逸した弘願寺本によって同筆と認定されているようだが、はたして本文と同筆とすべきなのであるか。朱筆部分については、全巻にわたる本文周辺の書き入れ、上下欄の註記、そしてその他の書き入れの全体像を把握する必要がある、朱筆全てを本文と同筆であるとするには、全巻の精緻な照合作業を通して検討しなければならない。奥書そのものの検討とは別となるため、ここでは立ち入らないが、西本願寺本の朱筆に関わることとして一点指摘しておきたいと思う。

それは、尾題と朱書きを含む奥書の紙面の状態についてである。この朱書きが含まれる見開き頁は、右頁の墨書による本文が、見開きの左頁に写ってしまっていることから、本文書写直後にこの頁は閉じられ、速やかに次頁の奥書書写に向かったと思われる。そして、朱による訓点・註記等の記入がなされたのは奥書を書いた直後か、少なくとも「化身土卷」の墨筆を終えた後の書き入れと考えられる。「和光同塵」等をそれらと同時に書き入れたとするには判断材料が乏しい。「和光同塵」等の字形については、重見のいうように「成」は西本願寺本特有の傍註「成就土」などの「成」に似てはいる。<sup>(73)</sup>ただし、同筆としての書き入れにしては、「始」の偏と旁、「論」の偏は本文墨書とは異なるように見え、特に「始」は第三冊「信卷」の上欄註記「始也」〔縮刷本〕二六九）とも異なる。同時の筆とするにしては、別の特徴が出てしまっていると思われるため、本文（墨）との比較とは別に、その他の朱筆、特に註記の字形との比較を通して推定していく必要がある。

「和光同塵」等の思想の登場と西本願寺本自体の書き入れの状況から推察すると、「化身土卷」尾題後の朱筆が本文と同時期に書き入れられたとするには、内容・染筆の両面から改めて論証する必要がある。この朱筆については、本文部分の墨書、註記を中心とした朱筆との照合を終え、その他の書き入れ一定の結論が得られるまでは、暫くは伝授に関する書き入れとして置いておくべきであろう。

### 第三項 墨書箇所を検討

次に、「弘長二歳」以下は、辻によって別筆とされていた経緯もあり、大正期影印本には含まれることはな

かった。しかし、西本願寺本における奥書の主体は、この二行の墨書であろう。「未」の左、「滅」の左に次の書き入れが見えるのが裁断部である。そこで、墨筆部について、体裁の問題と、内容の問題に分けて検討してみたい。

まず、体裁については、専修寺本同様、西本願寺本にも裁断が見られる。専修寺本は専信坊専海の書写本を転写したものと考えられているが、その際、「安城御影」との関連が指摘されている。『教行信証』伝授に真影が用いられたであろうことは、『教行信証』後序に見られる『選択本願念仏集』付属に遡ることができるが、その後の伝授形態にも受け継がれており、覚如は大町如道への伝授に際して「鏡御影」を携えていたとされ、<sup>(74)</sup>「鏡御影」裏書には覚如による修補について記されている。<sup>(75)</sup>『教行信証』伝授と真影、そして覚如による「鏡御影」の修訂の事実、西本願寺本奥書の裁断部の状況と類似している。もちろん、もつと後代になって削除された可能性もあるが、文永十二年（一二七五）に成立して以降、初めに浮上する裁断の可能性としては、覚如による宝物整備と『教行信証』伝授形式の確立に伴って修訂された場合が考えられる。

次に、内容については、西本願寺本の原形と推定される弘願寺本・浄得寺本の奥書と、親鸞入滅の記事を同じく残している専修寺本とでは些か文章が異なる。まず、弘願寺本奥書は、山田文昭によって次のように紹介された。

弘長二歳壬戌十一月廿八日／未尅親鸞聖人御入滅也／御歳九十歳同廿九日戌時／東山御葬送同卅日御舍

利藏／佛滅後至

二千百三十五歳  
入末法後七百三十五歳

當文永十二歳乙亥也／依賢劫經仁王經涅槃經等説言

また、浄得寺本奥書は日下無倫によって次のように紹介された。<sup>(76)</sup>

弘長二歳壬戌十一月廿八日牛剋親鸞聖／人御入滅也御歳九十歳同廿九日戌時東／山御葬送同卅日御舍利

藏／佛滅後 二千二百三十五歳  
入末法後七百三十五歳 當文永十二／亥<sup>乙</sup> 也依賢劫經仁王經涅槃經等説言

西本願寺本奥書より時代が下る書き入れであるが同様の親鸞入滅記事を残す専修寺本では、「專信」「顯智」の名があるが、その部分の弘願寺本・浄得寺本は「東山御葬送同卅日」とし、専修寺本で「御舍利藏畢」としている部分に、二本は「畢」が無い。そして、弘願寺本と浄得寺本の間でも、「未」と「午」、「二千百三十五歳」と「二千二百三十五歳」、「至」の有無などいくつかの相異があり、改行箇所の違いも認められる。それが西本願寺本により近いのか、西本願寺本の断片が残っていない以上、それらと完全に一致するとは断言できず、別の書き入れがあったのかもしれない。

また、現在弘願寺本の奥書と伝えられている数行のうち、西本願寺本裁断部の二行目にあたる「佛滅後至二千百三十五歳 入末法後七百三十五歳 當文永十二歳乙亥也」の一行字数が、他行と比べてかなり多く、西本願寺本の一行字数（十四字前後）を優に満たしてしまうのではないかということも疑念が残る。弘願寺本や浄得寺本等の内容は西本願寺本と共通していたと推定することは可能であるが、それらの形態がそのまま西本願寺本と同一であったかはまた別の問題である。

この文章自体は、「化身土巻」において仏滅時を基点とする年代換算を行っているところの、

按三時教者、勘如來般涅槃時代、當周第五主穆王五十一年壬申。從其壬申至我元仁元年元仁者後堀川院  
諱茂仁聖代也 甲申、二千一百八十三歲也。又依賢劫經仁王經涅槃等說、已以入末法六百八十三歲也。

〔聖典全〕二・二二三)

に由来していると考えられている。<sup>(77)</sup> この仏滅・入末法の年時については、『教行信証』では、元仁元年（一二二四）を仏滅から二千八百八十三年、入末法から六百八十三年経過したと述べているが、『六要鈔』では『末法灯明記』の延暦二年（八〇一）の年紀を用いて、二カ所の「八」が誤りであって、それぞれ二千七百七十三年、六百七十三年とすべきことが述べられている。ただ、西本願寺本のものと思われる奥書には、文永十二年（一二七五）は仏滅から二千二百三十五年、入末法は七百三十五年としているので、それらの年代を差し引きすれば『教行信証』本文を基準として、元仁元年（一二二四）から文永十二年（一二七五）の間の年数を加算した数値になっていると考えられる。新たに計算し直したというよりは、自身が本文として書写した内容に依っていると考えられ、ここでも親鸞の記述に従っていることがわかる。

もう一点考えておくべきことは、『教行信証』の文と弘願寺本・淨得寺本の奥書とでは文章構成が異なっていることである。「化身土巻」仏滅年時の記述に従えば、西本願寺本の奥書としては、「佛滅後至當文永十二年乙亥二千二百三十五也、依賢劫經仁王經涅槃等說言、入末法後七百三十五歲也」などと続くのが文章構成

としてふさわしいと思われる。さらに弘願寺本・淨得寺本共に「言」で締めくくられていることも難解である。七行書きの西本願寺本であれば、あと一、二行続いてもおかしくはない。<sup>(78)</sup>

このように、西本願寺本と同じく親鸞入滅の記事を記した専修寺本、西本願寺本奥書の原形を残すと考えられる弘願寺本・淨得寺本、そして仏滅年時計算の文については、容易に断定できない内容・形態的な課題を抱えていることがわかる。内容的には、西本願寺本の奥書は、親鸞の入滅と葬送・納骨についての時刻を述べた「弘長二歳壬戌十一月廿八日未剋親鸞聖人御入滅也 御年九十歳 同廿九日戌時 東山御葬送 同卅日御舍利藏」と、書写年時と推定されている文永十二年の仏滅後・入末法後の年数をそれぞれ換算した「佛滅後至當文永十二歳乙亥二千二百三十五歳也 依賢劫經仁王經涅槃等說言入末法後七百三十五歳」という二つの内容に大別される。後者については、『教行信証』の記述に従って、周穆王五一年を如来涅槃時として元仁元年甲申までを換算した年数を基準とした文永十二年と、『賢劫經』・『仁王經』・『涅槃經』等の正法五百年・像法千年・末法万年の三時説によって入末法の年時を数えたものに分かれている。しかし、弘願寺本・淨得寺本奥書によれば、仏滅後の年数と入末法の年時とが「佛滅後(至)」と「當文永十二」の間に挟まれた一つの割註の中に含まれているという状態にあるため、この奥書は、内容的には錯綜しているのではないかと疑われる。

また、専修寺本で「親鸞」としているものを「親鸞聖人」と聖人号を用いていることにも注意しておきたい。親鸞を指す呼称については、本章で挙げてきた奥書によれば、親鸞自身の奥書では「愚禿釈親鸞」など

とあるのが通例であった。親鸞以後の奥書になれば、「善信聖人」「聖人」「本願寺聖人」「祖師聖人」「親鸞法師」「聖人」「親鸞」「作者上人」「祖師親鸞法師」などある。名字で言えば「善信」「親鸞」、尊称で言えば「上人」「聖人」「法師」、本願寺開基としては「本願寺」「祖師」である。「本願寺聖人」など出るのは覚如以降であろうし、<sup>(79)</sup>西本願寺本や専修寺本の奥書で「祖師」「本願寺」などは用いられてはいない。専修寺本は「親鸞」であるが、『教行信証』の古い書写を伝える奥書でいえば、尊蓮の書写を伝える奥書に「善信聖人」とあって、専修寺本と尊蓮本の中間の内容として位置している。<sup>(80)</sup>このように、『教行信証』諸本の中で最古層の奥書が伝真蹟本二本の奥書なのであるが、入滅時刻と呼称で、両本の奥書内容には差異が見られる。

「弘長二歳」を残して、「當文永十二」を切り取った理由については、文永十二年（一二七五）以前には本文が存在していたことを明らかにするためであり、真蹟であると伝えられていたことと深く関係していよう。前二行を残すことで、親鸞を直接知るものが書写した本であることを暗示し、そのことよって親鸞に近接した書写本であることを示そうとしたのではないだろうか。そうした意味であれば、奥書が書かれた時点とは異なる、裁断時におけるもう一つのテキスト享受の姿が浮かび上がってくるのである。

## 小結

書物に奥書が記されたとき、そこにはその本の書写者の意思表示が含まれている。坂東本に本奥書が無いことは、坂東本自身の性格を考える上で重要な要素である。一方、その後の『教行信証』諸本には、親鸞の入滅年時、祖師の遠忌、書物の来歴を記すことの裏側に、諸本の書写意識が残されている場合が多く、真筆として由緒ある本を書写した旨を示すことにも一定の意義があった。

鎌倉三本ともに伝領あるいは識語的な内容の書き入れを有しているが、それぞれ裁断されており、書物の伝来の中で、書写者あるいは伝持者の意図しない改変があった可能性がある。その中で、鎌倉三本で唯一書写者の定説が無い西本願寺本においては、奥書記入時、朱筆書き入れ時、奥書裁断時の三つの時点で意思表示されている。時代の傾向、書物群の中の位置、奥書そのものの形状と内容を考察することで、朱筆の問題と裁断部の内容の問題については、いまだに不確定要素を含んでいる。裁断されたこと、そして朱筆の扱いに課題を含んだ西本願寺本の奥書ではあるが、その一方で伝授・伝承の上では重要な事柄が残されている。つまり、思想的に「和光同塵」等の文言が真宗典籍の中に現れ出した覚如・存覚の時代には、遅くとも西本願寺本にあったと推定でき、専修寺本奥書の「午時」、『親鸞伝絵』の「午」時と西本願寺本註記の「午敷」が同時代の訂正であろうことが推定される。このことは、現在まで伝えられる『教行信証』西本願寺本が、少なくとも十四世紀初頭以前には本願寺に設置されていたことをほのめかす情報と考えられる。

書写奥書が記されるときには、日時や契機、書写者などが記される場合が多い。本章では、できるだけ広い範囲で奥書という用語を定義して議論してきたが、書写奥書とはやや異なる内容や体裁を有する西本願寺本奥書については、奥書というよりは、跋や識語の要素の強い書き入れである。そこには、本文に近いと思われる朱・墨それぞれの執筆時と、裁断時という都合三回にわたって、書写者あるいは他の〈読者〉の主体的な意識が働いている。坂東本からの臨写を主体とする西本願寺本書写において特殊な箇所であるが、奥書執筆時には親鸞の情報を記入する意図が働き、裁断時には親鸞の『教行信証』本文に附随する文言としてふさわしいと思われる内容を保持しようという意図が働いたと考えられる。さらに大正期影印本には最終丁として示されることは無かった。ここには〈読者〉としての立場であった西本願寺本が、奥書に限っては〈作者〉の立場に入れ替わり、後の〈読者〉によってさらに改変されていたことが判明する。同一本内であっても複雑なテキスト関係が見られるのである。

書写者にとっては奥書は本文とのテキスト関係が強くと考えられるが、後代の書写行為によっては、奥書の書写者が〈作者〉のような立場にもなりうる。奥書には、複雑なテキスト関係が存在していることを指摘し、本章を結びたい。

## 註

- (1) 藤井隆『日本古典書誌学総説』（和泉書店、一九九一）、『日本古典籍書誌学事典』（岩波書店、一九九九）参照。
- (2) 「シンポジウム―奥書・識語をめぐる諸問題―」（国文学研究資料館文献資料部『調査研究報告』一七、一九九六）。
- (3) 西本願寺本の奥書は『教行信証』の目録類では奥書に含んでいることが多いが、『増補改訂本願寺史』一（本願寺出版社、二〇一〇）一八二頁などは識語としている。
- (4) 『教行信証』諸本の奥書刊記についてまとめられた研究や目録に、中井玄道『教行信証附録』（仏教大学出版部、一九二〇）、本願寺宗学院編『古写真宗聖教現存目録』（興教書院、一九三七）、藤島達朗「教行信証の書誌」〔親鸞聖人真蹟 国宝 顕浄土真実教行証文類影印本』所収、大谷派本願寺宗務所、一九五六、以下「藤島達朗昭和 본解説」と称す）、佐々木求巳『真宗典籍刊行史稿』（伝久寺、一九七三）、重見一行『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察』（法藏館、一九八一）所収「附録 写本目録」、『真宗史料集成』一（同朋舎、一九八三）所収「現存聖教目録」などがある。本章では主にこれらによって諸本奥書を示していく。
- (5) 鷺尾教導『恵信尼文書の研究』（中外出版、一九二三）。
- (6) 禊氏祐祥『観無量寿経集註 付阿弥陀経集註』（全人社、一九四四）。
- (7) 津田徹英「親鸞の欠画文字・異体字とその書風」〔『仏教美術論集 6 組織論―制作した人々』所収、竹林舎、二〇一六）。
- (8) 尊蓮の書写については、大谷大学図書館蔵室町時代書写本「信卷本」の第一奥書に、「本云／寛元五年二月五日以善信聖人御眞筆／祕本加書寫校合訖文義字數重委註今年聖人七十五歳也（隠倫尊蓮 歳六十六）」とあることから知られる。同様の奥書は、文明本「教卷」奥書、大谷大学図書館蔵恵空所持本「教卷」奥書、寛永版「信卷本」奥書にもある。註4に挙げた藤島達朗昭和 본解説及び重見一行前掲書付

録写本目録参照。

(9) 後期筆跡箇所は、鳥越正道『最終稿本教行信証の復元研究』（法藏館、一九九七）二四三頁に纏められている。

(10) 『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、一九九九）三〇二頁によれば、「抄物（しよもの）」は、主に室町時代中期から江戸時代初期にかけて、五山の禅僧や博士家の学者などが、漢籍・仏典・国書など漢文文献を講義した際の、聞き書きや講義のための草案である手控え、講義調で記された註釈を指すのが普通であり、昭和期以降は、「一抄」を書名に持つ一群の国史研究資料に対する呼び名として用いられるようになったとされる。この語は、平安期以来の「シヨウモツ」と無関係に成立したものであるが、その一部をなす性格を有するともいわれる。また、同辞典において「抄物」は「証せられた書」の総称であつて「のような説明もなされる。ここでは、前者の意味では無く、単に「抄せられた書」との意味を採つて、要文・要語を抜き出したものとして「抄物」と位置づけておきたい。

(11) 親鸞は抄出の形でいくつかの経文を写し取っている。『涅槃経』『大集経』などが真蹟として残されており、それらは『親鸞聖人真蹟集成』に収められている。また、赤松俊秀「教行信証の成立と改訂について」（『親鸞聖人真蹟 国宝 顕浄土真実教行証文類影印本』所収、大谷派本願寺宗務所、一九五六）によれば、坂東本では中期筆跡時に挿入された『大集経』はもと卷子状のノートであつたとされる。これも聖教制作のための經典の書写例と考えられる。

(12) 親鸞の消息にはいくつもあり、現在では「親鸞聖人御消息」などとしてまとめられることがある。それらには『無量寿経』『阿弥陀経』『華嚴経』『論註』『般舟讚』『往生要集』など様々な経論釈が引用されているが、特に『唯信鈔』『後世物語聞書』『自力他力分別事』（『末灯鈔』一九、『親鸞聖人御消息』三・六・八・一一、『血脈文集』二二）、さらに自著の『一念多念文意』『唯信鈔文意』（『血脈文集』二二、以上いずれも『聖典全』二二所収「親鸞聖人御消息集成」参照）を読むことを門弟に勧めている。

(13) 小川貫式「教行信証の書写と印刷」『真宗研究』一八、一九七四。

(14) 顕智(一二二六―一三三〇)は、親鸞在世時には、建長七年(一二二五)に真仏とともに親鸞より『教行信証』の相伝を承けたと伝えられ、正嘉元年(一二五八)親鸞から「獲得名号自然法爾」の法語を聞き書したとされる。また、『浄土和讃』・『正像末和讃』(正応二年(一二九〇))、『愚禿鈔』(永仁元年(一二九三))、『法然上人伝法絵』詞書(永仁四年(一二九六))、善鸞義絶状(嘉元三年(一一三〇五))、『一念多念文意』(徳治二年(一一三〇七))、五卷書・『西方指南抄』下末(延慶元年(一一三〇八))の書写本が、主に専修寺に伝わっており、宗祖著作を中心に多くの聖教書写を行った。

(15) 覚如(一二七〇―一三五二)は、澄海や宗澄などのもとで諸宗を学んでいたが、弘安十年(一二八七)如信より宗要を授かり、永仁二年(一二九四)親鸞三十三回忌にあたって『報恩講私記』を制作した。永仁三年(一二九五)『善信聖人絵』(本願寺蔵自筆琳阿本)、『善信聖人親鸞伝絵』(専修寺蔵自筆高田本)を制作、正安三年(一一三〇一)『拾遺古徳伝絵詞』を著している。五〇〜六〇歳代には『執持鈔』(嘉暦元年(一一三二六))、興国元・暦応三年(一一三四〇)再写、『口伝鈔』(元弘元・元徳三年(一一三三一)口授、興国五・康永三年(一一三四四)書写(龍谷大学蔵自筆))、『本願鈔』(延元二・建武四年(一一三三七))、『改邪鈔』(延元二・建武四年(一一三三七)口授)、『願願抄』(興国元・暦応三(一一三四〇))を著し、七〇歳代には『最要鈔』(興国四・康永二(一一三四三)口授)、『尊師和讃鈔』(正平二・貞和三年(一一三四七))、『出世元意』(法華念仏同体異名事)を著したほか、『本願寺聖人親鸞伝絵』(真宗大谷派蔵自筆康永本)を重修している。また、『愚禿鈔』(正応二年(一二八九))、(興国二・暦応四年(一一三四一))、『浄土文類聚鈔』『上宮大師御記』『皇太子聖徳奉讃』『自力他力事』、『大日本粟散王聖徳太子奉讃』、『経釈要文』(二尊大悲本懐)、『法然上人法語』(正平五・観応元年(一一三五〇))などの書写が伝えられている。その他、『恵信尼消息』の披見、『浄土文類聚鈔』の校合が伝えられている。延慶元年(一一三二〇)『鏡御影』を修復し、応長元年(一一三二一)存覚の講義により越前大町如道に『教行信証』を伝授したが、このとき持参さ

れたのが文永十二年（一二七五）に書写されたと推定されている西本願寺本『教行信証』と考えられる。

- (16) 存覚（一二九〇―一三三七）は、『持名鈔』（正中元年（一三二四））、『浄土真要鈔』（正中元年（一三二四））、『弁述名体鈔』、『破邪顕正鈔』（正中元年（一三二四））、嘉暦三年（一三二八）漢文化）、『諸神本懐集』、『女人往生聞書』（正中元年（一三二四））、『顕名鈔』（延元二・建武四年（一三三七））、『歩船鈔』・『決智鈔』・『報恩記』・『選択註解鈔』・『至道鈔』・『法華問答』（延元三・暦応元年（一三三八））、『信貴鎮守講式』（正平三・貞和四年（一三四八））、『謝恩講式』（正平十二・延文二年（一三五七））、正平十六・康安元年（一三六一）添削）、『嘆徳文』（正平十四・延文四年（一三五九））、正平二十一・貞治五（一三六六）再治）、『存覚法語』（正平十一・延文元年（一三五六））、『六要鈔』（正平十五・延文五年（一三六〇））、『纒解記』（正平十七・貞治元年（一三六二））の撰述があることが、各種奥書や『浄典目録』（正平十七・貞治元年（一三六二））や『存覚二期記』などによって知られ、本尊・影像類などを書き留めた『存覚袖日記』などが自筆として伝わる。これらは、仏光寺了源などの依頼によって制作されたもので、真宗聖教において重要な位置を占めていった。その他、『浄土三部経』正平本（本願寺蔵）、『教行信証』元亨本（京都府常楽寺蔵）、『愚禿鈔』（京都府常楽寺蔵）・『観阿弥陀経集註』（専修寺蔵、文保元・二年（一三二七・一八）書写）、『愚禿鈔』（興国元・暦応三年（一三四〇））、『看病用心鈔』（正平十八・貞治二年（一三六三））、『本願鈔』・『肝要記』（建徳二・応安四年（一三七一））などの書写が伝えられる。その他、本尊・影像類の銘・裏書や授与、『選択集』授与（正平十一・延文元年（一三五六））、『末法灯明記』書写・加点（正平十三・延文三年（一三五八））を行っている。

- (17) 従覚（一二九四―一三六〇）は、親鸞の消息類二十二首を年時の校勘を行って二巻に集成した『末灯鈔』（元弘三・正慶二年（一三三三））を制作した（延元三・暦応元年（一三三八）再治）。覚如より口授された『最要鈔』（興国四・康永二（一三三三））を筆記している。覚如示寂後の正平六・観応二年（一三五二）、乗専の要請に応じて『慕帰絵』を制作している。

- (18) 乘專（一一八五—一三五七）は、存覚とともに『慕帰絵』制作に関わり、その成立の翌年にあたる正平七・文和元年（一一三二）『最須敬重絵詞』を著した。覚如より『口伝鈔』（元弘二・正慶元年（一一三三））、『改邪鈔』を（延元二・建武四年（一一三三））を口授され、それぞれ書写している。また、『安心決定鈔』（元弘三・正慶二年（一一三三））、『唯信鈔文意』・『選択集』延書（興国二・暦応四年（一一三三））、『往生大要鈔』（興国六・貞和元年（一一三四））の書写が伝えられる。
- (19) 佐々木勇「西本願寺蔵『浄土三部経』正平六年存覚書写本の朱点について—親鸞自筆加點本および龍谷大学蔵南北朝期加點本との比較—」（『訓点語と訓点資料』一二六、二〇一一）。
- (20) これを含めて、この『無量寿経』正平本奥書には、披見・校合した本について「眞如寺殿御本」（嘉禎二年（一一三二））移点・「肥州本」（嘉禎三年（一一三二））校合・「御本即八條聖人御本也」・「顯御本」・「興國寺本」（貞和四年（一一三四））。「本御坊上人善—御自筆之御經」と、存覚に至るまで都合六、七本の『無量寿経』書写本あるいは『教行信証』の『無量寿経』引用の存在が示されており、同本の奥書からは、浄土教典の展開の中に本願寺の聖教が形成されていたことが窺える。
- (21) 乗專本の奥書は、大谷大学蔵本によって知られる。藤島達朗昭和 본解説参照。
- (22) 各宗主の事績と聖教については、拙論「本願寺の系譜—歴代宗主の事績と聖教」（『浄土眞宗総合研究』一〇、二〇一六）参照。
- (23) 藤島達朗昭和 본解説によれば、龍谷大学蔵江戸中期書写本（「眞仏土卷」・「化身土卷」のみの零本二冊）について、内容は明らかに善如書写本と同一であって、「眞仏土卷」巻尾に尊蓮奥書と乗智奥書、「化身土卷」に「此書存覺聖人ノ御筆ヲ以テ寫申候但四卷目二卷同五卷メ二卷合テ四卷ハ乗專ノ筆也此内四卷メノ本口ヨリ十丁メノ一面迄ハ存覺聖人ノ御筆也」天文廿二年<sup>癸</sup>七月十二日相調候畢」とある。このことから、善如書写本は、康永二年（一一三四）に乗智の要請によって存覚が尊蓮書写本より直接延書した本を、善如がさらに書写したものであるとされる。

- (24) 巧如期に淨興寺に伝授された聖教には、応永八年(一四〇一)『教行信証』延書(大阪府妙琳坊藏)、応永三十四年(一四二七)『口伝鈔』永享二年(一四三〇)『執持鈔』・『改邪鈔』がある、さらに存如によって応永三十一年(一四二四)『安心決定鈔』本、応永三十二年(一四二五)『教化集』・『法華問答』、その他『伝絵』・『持名鈔』・『浄土真要鈔』・『安心決定鈔』末などが写与され、永享六年(一四三四)『愚禿鈔』書写を許可している。同時期には常楽寺空寛が『顕名鈔』・『決智鈔』・『浄土見聞集』・『諸神本懐集』を写与しており、本願寺による写与と考えられる。
- (25) 存如による書写本としては、註24で挙げたもののほか、永享九年(一四三七)『三帖和讃』、永享十年(一四三八)『諸神本懐集』、永享十一年(一四三九)『持名鈔』・『教化集』、宝徳元年(一四四九)「正信偈」識語(本願寺藏)、康正元年(一四四五)『阿弥陀経』断簡、その他『破邪顕正鈔』、『親鸞聖人御因縁秘伝鈔』などの書写が伝わる。また、永享十年(一四三八年)『浄土真要鈔』、宝徳元年(一四四九)『親鸞聖人絵伝』四幅は、蓮如書写本に奥書・花押を加えて授与したものである。
- (26) 『往生礼讃』の第十八願文を親鸞は「真文」としているが、「真文」の用例は、『浄土三経往生文類』に「いまこの真文をよくよくこゝろえて、難思議往生の義をしるべしとなり」(建長本、『聖典全』二・五八三下)、及び「これらの真文にて、難思議往生とまふすことを、よくよくこゝろえさせたまふべし」(康元本、『聖典全』二・五九六上)・「これらの真文にて、難思議往生とまふすことを、よくよくこゝろうべし」(建長本、『聖典全』二・五九六下)とある。
- (27) 『聖典全』二・八八一。
- (28) 『聖典全』四・八一、同九二。
- (29) 辻善之助『親鸞聖人筆跡之研究』(金港堂書籍株式会社、一九二〇)。
- (30) 辻の調査の後、大正八年(一九一九)七月九日の官報に復命書が掲げられている。『史学雜誌』七月号に掲載され、禿氏祐祥『教行信証考証』(興教書院、一九二三)一八頁、梅原真隆『教行信証序説』(親鸞聖人研究発行所、一九三四)一七頁や

宮崎圓遵『教行信証考証』（講談社、一九七六）二五頁などに引用されている。

- (31) 『親鸞と祖国』大正八年（一九一九）五月号巻頭瑠璃版参照（大淵眞了撮影、橋川正により全文掲載）。
- (32) 『親鸞と祖国』大正八年（一九一九）八月号巻頭所収、橋川正「聖人の筆跡と浄興寺六字名号」参照。
- (33) 『親鸞と祖国』大正九年（一九二〇）第二巻第二号（二月号）所収、橋川正「聖人真蹟妙源寺蔵十字名号」参照。
- (34) 辻善之助前掲書では、近角常観蔵の写真版による。
- (35) 福井県法雲寺蔵『入出二門偈』、大阪府貝塚願泉寺蔵『太子和讃』、京都府手塚大制氏蔵「第十八願文」、京都府今井辨次郎氏蔵「第十一・十二・十三願文」。辻善之助前掲書では、いずれも石摺。
- (36) 辻善之助前掲書では、『仏教大辞彙』所収写真版。
- (37) 辻は「親鸞聖人筆跡之研究」正誤（『史学雑誌』三一―二、一九二〇）を寄稿し、覚信房と覚信尼の混同、本願寺号の初見などについて訂正している。
- (38) 先に挙げた高田派専修寺所蔵の伝真蹟類のうち、『浄土高僧和讃』国宝本、『正像末法和讃』国宝本、『皇太子聖徳奉讃』、『三部経大意』、『如来二種回向文』、『善導和尚言』、『蓮華面経言』（真仏『経釈文聞書』所収）、『懺興師云』（他筆含む）、『教行信証』（専修寺本）、『四十八大願』については、平松令三等により、現在では真仏書写と考えられており、『浄土和讃』の冒頭、『浄土和讃』『浄土高僧和讃』の左訓など、『四十八誓願』の朱点などは、親鸞筆と考えられている。また、茨城県結城称名寺蔵『往生要集云』も真仏書写と考えられている。真仏書写については、真宗高田派教学院編『影印高田古典』第一巻真仏上人集（真宗高田派宗務院、一九九六）参照。
- なお、「善導五部九卷」表紙外題については、親鸞筆とする平松説に対して新光晴によって疑問が呈されている（「口絵解説 専修寺蔵『観経四帖疏（版本）』の藍紙表紙筆跡について―修理が完了した重要文化財『善導五部九卷（版本）』から」『高

田学報』一〇三、二〇一五、「口絵解説」専修寺所蔵『法事讀（上・下）』・『往生礼讃』・『観念法門』・『般舟讃』の藍紙表紙外題筆跡について—修理が完了した重要文化財『善導大師五部九卷（版本）』から—『高田学報』一〇四、二〇一六。また、『法然聖人御消息（親鸞書写）』についても親鸞筆かどうか疑わしいといわれている（口絵解説 国宝本『西方指南抄』に見る聖人筆跡『高田学報』一〇二、二〇一四）。

(39) 小山正文『増補親鸞聖人真蹟集成』以後の聖人真蹟—平松令三先生への「報告」—『高田学報』一〇二、二〇一四。

(40) 〈表1-4〉の内容は、主に註4の各書によって作成した。なお、親鸞撰述・書写の奥書については、その内容を比較対照しやすくするために、筆者が独自に改行や空白を設け、おおよそ一行目に年月日等、二行目以降に署名や年齢等が収まるように示しており、原本とは異なる場合があることを断っておく。

(41) 「書之」と「書写之」については、生桑完明が『西方指南抄』真筆本の奥書について考察する際に、次のように述べている。さて前に記したところによつて、六冊の奥書を見ると、「書之」とあるのが、四ヶ所、「書写之」とあるのが一ヶ所ある。『尊号真像銘文』真筆本の奥に「正嘉二歳戊午六月廿八日書之愚禿親鸞八十六歳」とあるのは前者の例、『唯信鈔文意』真筆本の奥に「康元二歳正月廿七日愚禿親鸞八十五歳書写之」とあるのは後者の例といえよう。「書之」は聖人の自著を示し、「書写之」は「自著の書写」を示す。「書写之」は他の著を書写する場合にも通ずる言葉である。すでに四ヶ所に「書之」とある点から按ずれば、既に成立したものを書写したものは思えない。また奥書の日時が上本から下末まで、必ずしも順序になつていない。筆蹟と奥書に見える二点とをもつて、『西方指南抄』が、親鸞聖人みずから編集に成つたものであり、専修寺に蔵する真筆本は聖人の自筆稿本と認定したのである。

（生桑完明「西方指南抄について」『親鸞聖人撰述の研究』〔法蔵館、一九七〇〕二四一頁、初出は『親鸞聖人全集』輯録編解説、一九五四）

『西方指南抄』の成立については編集説と転写説などがあつて未だ定説を見ないが、親鸞の奥書において「書之」は自著を示し、「書写之」は自著あるいは他者の書写を示すことについては、原則的には認められるであろう。

(42) 『真蹟集成』一・三三五、同二・三八七。

(43) 『真蹟集成』一・一五三、同二・六八〇。

(44) 平松令三「高田宝庫より発見せられた新資料の一、二について」(『高田学報』四〇、一九五六)。

(45) 『専修寺本』解説七四〇頁。

(46) 妻木直良「本願寺所蔵の真本『教行信証』に就て」(『法爾』一八、一九一九)。

(47) 『教行信証』の書誌学的研究の中では、平松令三前掲論文に始まり、小川貫弑前掲論文、重見一行前掲書などにおいてこの奥書が扱われている。特に重見による中山寺本の紹介は、網野善彦『蒙古襲来(下)』(小学館、一九九二、初出一九七四)、峰岸純夫「鎌倉時代東国の真宗門徒―真仏報恩板碑を中心に―」(北西弘先生還暦記念会編『中世仏教と真宗』所収、一九八五)、今井雅晴『親鸞と東国門徒』(吉川弘文館、一九九九)によつて得宗体制の側面を知るための史料として使用されている。

(48) 『聖典全』四・一〇三、一〇四。

(49) 『親鸞伝絵』に示された入滅時刻は本願寺蔵琳阿本「午剋」、専修寺蔵本「午時」、真宗大谷派蔵康永本「午時」である(首藤善樹『親鸞聖人伝絵』詞書翻刻対照表『真宗重宝聚英』五、同朋舎、一九八九、二〇四頁参照)。年時の違いを並べると、西本願寺本奥書「未剋」に始まり、それが西本願寺本右傍註記「午敷」や専修寺本「午時」、そして『伝絵』の「午時」へと変遷している。中澤見明氏前掲論文では、西本願寺本の朱による書き入れは後の再訂と考える方が適切であり、本文の「未剋」がより古い記述であるとされ、鈴木宗忠前掲論文ではこの年時の違いをもとに『教行信証』諸本の撰述年代の

推定がなされている。

- (50) その他、顕智『見聞』『聞書』にも、親鸞を含む各師の入滅日時が記されている。
- (51) 中井玄道『教行信証附録』一二頁、藤島達朗昭和 본解説四四頁参照。
- (52) 曆応本は散逸しており、大谷大学図書館蔵室町時代書写本による。藤島達朗昭和 본解説四五頁参照。
- (53) 正応版本の書写と推定される三重県中山寺本「化身土卷末」奥書の冒頭。重見一行前掲書八三頁。
- (54) 註4に挙げた各書によると、この奥書を有する書写本に以下のものがあり、ほぼ第八冊の末尾に記されている(順不同)。  
新潟県浄興寺本(応永年中か)、新潟県真宗寺本(応永三十二年か)、石川県専光寺本(室町期)、富山県勝興寺本(室町末期か)、本派本願寺蔵本(室町末期)、龍谷大学図書館蔵知空手沢本(江戸初期)、龍谷大学図書館蔵(誓願寺旧蔵)本(室町期)、大谷大学図書館蔵本(室町中期)、大谷大学図書館蔵恵空本(室町末期から江戸時代初期)、大谷大学図書館蔵真昭諸本校合本(宝暦六年(一七五六)、奈良県岸部氏蔵(願泉寺旧蔵)本(室町期)、和歌山県真光寺本(室町期か)、奈良県本善寺本(室町末期か)、大谷大学図書館蔵本(室町期)、龍谷大学蔵(明厳寺旧蔵)文明本、高田派専修寺蔵本(室町期)、高田派専修寺蔵慶長本など。
- (55) 佐々木求巳前掲書によると、『教行信証』の主な刊本には、寛永版(一六三六)、正保版(一六四六)、松屋町版(一六五七以前)、明暦版(一六五七)、寛文九年版(一六六九)、寛文十三年版(一六七三)、天保十一年版(一八四〇)、渋谷本(天一八四三)などがある。
- (56) 平松令三前掲論文。
- (57) この文について、玄智『光融録』では六十八字の記入は誰によるか不明であつて六要鈔主・存覚ではないかと記しており、「目足」という語の典拠について、『智度論』卷二十四の「如人有目有足隨意能到」及び『要集』序の「目足」などを

挙げている。なお、このような定型句化した文言はいくつかの聖教奥書に見ることができ、いずれも書物の性質や書写の目的を述べたものである。たとえば、「念佛成佛」等は『末灯鈔』乗専本・蓮如本に、「佛法興隆」等は文明版『正信偈和讃』・准如開版『浄土文類聚鈔』に、「當流大事」等は蓮如書写『歎異抄』に類例がある。今回は『教行信証』を中心とした考察であったが、こうした諸聖教の定型句を包括的に把握していくことが今後の課題となる。

(58) 『真蹟集成』一・一五三。

(59) 中澤見明前掲論文。

(60) 小川貫弑前掲論文。

(61) 重見一行前掲書一三七頁。

(62) 平松令三「蓮如の聖教書写と本願寺の伝統聖教」(『講座蓮如』第二巻所収、平凡社、一九九七)及び「蓮如上人の書写聖教と本願寺伝統聖教」(『龍谷教学』三二、一九九七)、龍谷教学会議第四十八回シンポジウム『教行信証』の書誌的研究について」(『龍谷教学』四八、二〇一三)。

(63) 木村清孝「仏教と「和」の思想」(『国際仏教学大学院大学研究紀要』一〇、二〇〇六)。

(64) 『大正蔵』四六・八〇上。

(65) 木村清孝前掲論文。

(66) 『親鸞伝絵』下の第五段「平太郎熊野権現参詣」では、「浄土三部経」より七祖の相承を経て伝えられてきた一向専念の義について「然則、何の文によりて、専修の義立すべからざるぞや」(『聖典全』四・九八、上段康永本)といい、「證誠殿の本地すなわちいまの教主なり。かるが故に、とてもかくても衆生に結縁の心ざしふかきによりて、和光の垂迹をとどめたまふ。垂迹をとどむる本意、たゞ結縁の群類をして願海に引入せむとなり」(『聖典全』四・九八、上段康永本)と続けており、

親鸞の言葉として本地垂迹説に基づく神祇観を述べる中で用いられており、熊野権現の証誠殿を阿弥陀仏の垂迹とする立場が示されている。

(67) 『持名鈔』末巻冒頭には、「おほよそ神明につきて權社・實社の不同ありといへども、内證はしらず、まづ示同のおもては

みな輪廻の果報、なをまた九十五種の外道のうちなり。佛道を行ぜんもの、これをことゝすべからず。たゞしこれにつかへ

ずとも、もはらかの神慮にはかなふべきなり。これすなはち和光同塵は ヒカリツバキバクダクダチリニマシハルハ 結縁のはじめ、八相成道は ツキニチチクワナルハ

利物のおはりなるゆへに、垂迹の本意は、しかしながら衆生に縁をむすびてつゝに佛道にいらしめんがためなれば、眞實念 シニヒクワリテオヘリナリトイフ

佛の行者になりてこのたび生死をはなれば、神明ことによるこびをいだし、權現さだめてゑみをふくみたまふべし。一切の

神祇・冥道、念佛のひとを擁護すといへるはこのゆへなり」(『聖典全』四・五六七)とあり、『教行信証』「化身土卷末」外

教釈における諸経引用の旨を承けて神明について述べる中で、仏教者は外道につかえるべきではないが、つかえなくとも神慮には叶っていることを示すための根拠として、「和光同塵」等の文が用いられる。

(68) 『諸神本懐集』には「第一に權社の靈神をあかして本地の利生をたうとむべきことををしふといふは、和光同塵は

結縁のはじめ、八相成道は ツキニチチクワナルハ 利物のおはり ヒカリツバキバクダクダチリニマシハルハ。これすなはち權社といふは、往古の如來、深位の菩薩、衆生を

利益せんがために、かりに神明のかたちを現じたまへるなり」(『聖典全』四・五二六)、さらに「第三に諸神の懷をあかし

て佛道に入り、念佛を勤修すべきおもむきをしらしむといふは、一切の神明、ほかには佛法に違するすがたをしめし、内には佛道をし、むるをもてこゝろざしとす。これすなはち和光同塵の本意をたづぬるに、しかしながら八相成道の來縁をむす

ばんがためなり」(『聖典全』四・五三七)とある。

(69) 文明七年七月十五日の年紀のある福井県最勝寺藏永正二年実如上人証判本(『聖典全』五・三四二、御文章集成九〇)には、

六箇条の篇目のうち、「一 神社をかるしむることあるべからず」という項目の詳細として衆生を佛法に勧め入れる根拠と

して「和光同塵」等が引用されている。この文は、五帖御文章の三帖目第十通(『聖典全』五・一四〇)に当たる。また、文明九年二月廿三日の年紀のある奈良県本善寺藏蓮如上人自筆本(『聖典全』五・三六九、御文章集成一〇七)には、八幡大菩薩の本地としての阿弥陀仏を述べる中で、「和光のちりにまじはり」とある。さらに大阪府本照寺藏蓮如上人自筆本(『聖典全』五・五〇四、御文章集成二四七)には、衆生を仏道に引き入れるための縁として、諸仏・諸神が一切の神として現れていることの論拠として、「和光同塵」と「八相成道は利物のをはり」に分けて詳しく解説されている。

(70) 中井玄道『教行信証附録』一〇頁。

(71) 重見一行前掲書一三六頁。なお、梅原真隆も本文と同筆であるという見解を示している(『教行信証新釈』結巻七一八頁、専長寺文書伝道部道發行所、一九五九)。

(72) 梅原真隆『教行信証序説』一四頁。梅原はこの文について「恐らくは聖人が愚禿の沙弥生活をなされたことを「和光同塵」として讚嘆したものかとうかどはれませんが」(一五頁)と述べている。

(73) 第六冊「化身土巻」にはないが、第五冊「真仏土巻」に「成就土」(『縮刷本』六四五)などとある。

(74) 『増補修訂本願寺史』一・二七五頁。

(75) 『聖典全』二・九〇二。

(76) 日下無倫「教行信証古写本の種類及びその最古の註疏」(『仏教研究』四一三・四、一九二三)。この奥書に続いて、別筆で「寛永十二亥年二月下旬第五日淨得寺」とあり。ただし、淨得寺本については、「和光同塵」等の文が無い。

なお、淨得寺本奥書については、その後重見一行前掲書一三三頁にも示されている。

(77) 山田文昭前掲論文。

(78) 中澤見明前掲論文では、ここに覚恵から覚如への相伝の奥書があったと推定している。

(79) 覚如による初期の著作である『報恩講私記』には「祖師」(『聖典全』四・六五)・「祖師聖人」(同六六)などとある。『親鸞伝絵』では、『善信聖人絵』(西本願寺藏琳阿本)、『善信聖人親鸞伝絵』(専修寺藏)とあり、のちに重修された『本願寺聖人伝絵』(真宗大谷派藏康永本)と題号が変化している。また、法然の伝記である『拾遺古徳伝絵詞』には「善信聖人」(同一八五・二二〇)・「善信房親鸞」(同一九一)とある。覚如の教学的な著作の中では、『執持鈔』には「本願寺聖人仰云」(同二三三)、『口伝鈔』には「本願寺鸞聖人」(同二四五)、『本願鈔』「本願寺の聖人<sup>親鸞</sup>」(同二九二)、『改邪鈔』には「祖師<sup>親鸞</sup>」(同二九九)に「本願寺<sup>鸞</sup>」(同三〇三)、『最要鈔』には「祖師鸞聖人」(同三四四)などとある。

(80) 真仏書写とされる『経釈文聞書』には「親鸞聖人曰」(『聖典全』四・六)として『教行信証』「行卷」の文が、顕智『聞書』には「親鸞上人」(同四〇)として「化身土卷」の文が引かれている。また、顕智『聞書』の「御入滅日記事」(同四六)には「親鸞上人十一月廿八日御年九十 眞佛法師三月八日御年五十」とあり、「自然法爾獲得名號」書写後には「聖人ニアイマイラセテノキ、ガキ」(同五四)と述べている。早くから「聖人」「上人」が使われていた可能性もある。

## 第二章

### 『教行信証』

### の引用と書写

## 第二章 『教行信証』の引用と書写

『教行信証』テキストは、引用文を蒐集・配列し、その前後に御自釈を配することで構成されている。その主体となる引用文については、経典・論書・釈書の書目に分けて把握される場合が多くあるが、その周辺テキストや書写法に言及されることは少ない。

本章では、従来の引用文研究を振り返りつつ、テキスト関係という観点から、『教行信証』の引用と書写について考察する。『教行信証』全体の引用法を分析することで、その引用体系を再考し、さらに『無量寿経』の註釈書である法位『無量寿経義疏』及び憬興『無量寿経連義述文贊』の引用を取り上げ、引用や書写に関する特徴について考察する。これらによって、親鸞によるテキスト形成の特徴とそれを書写する者による変化を明らかにしたい。

### 第一節 引用体系再考

『教行信証』は、具名を「顕浄土真実教行証文類<sup>①</sup>」とする。「文類」とあるように、その構成主体は引用文であり、親鸞がどのような枠組みの中から引用原典を選び出し、配列していったのが課題である。それは

現存最古の書写本かつ親鸞真筆である坂東本を中心とする検証によつて、その内実を明らかにするべきであろう。

松沢和宏によるテキスト関係論に準じれば、親鸞の用いた經典・論書・章疏等の引用原典は「間テキスト」、親鸞自身のメモや手控え等は「前||テキスト」、本文とは別に書き記した註記等は「メタテキスト」、本文とは別に書物を成立させるために記された題号・撰号等は「パラテキスト」と位置づけられる。その上で、それらの連関について捉える場合、課題は間テキスト性の問題である。<sup>(3)</sup>『教行信証』の構成主体である引用文は本文テキスト形成の基底となり、これを蒐集することが、「文類」形成の基盤となる。本節では、引用典籍の体系化に留まらず、親鸞による記述から、一切経・仏教典籍・經論章疏というより大きな枠組みの中での取舍選択、あるいは前||テキストとの連関について考察していく。

### 第一項 引用書目とその分類

『教行信証』の構成主体である引用文の分類方法として過去の研究を顧みれば、意外にも『教行信証』の引用文を体系づけようとする研究は少ない。谷川理宣による引用文と引用原典とを対照する研究もあるが、引用原典の全体像が体系化されているわけではない。近代以降の研究でいえば、その著作体系の解明については、中井玄道『教行信証附録』の引文体例が基準であり、次のように示されている。<sup>(4)</sup>

(一)改点例 文点を改めて別義を頭はすもの。

(二)省略例 一字、数字、若くは一句を省略するもの。

(三)更改例 字句を更改せるもの。

(四)添加例 文字を添加せるもの。

(五)合糅例 原本の異を合糅せるもの。

(六)顛倒例 文字を顛倒せるもの。

(七)前後例 一連の文を引くに、順序を前後せるもの。

また、同書には引用文を正引・子引に大別して引文一覧が掲げられており、前者は三経、諸経律、七祖論積、諸論積、外典の五つに、後者は経、律、論、釈の四つに細分して示されている。<sup>(5)</sup>

この中井の示した引文体例及び引文一覧を吟味し直したのが、山田龍城・福原亮巖である。<sup>(6)</sup> 山田・福原は、親鸞にとつての原典の重要度や距離を鑑みて、引用文献三十六種を①三部経典、②三部経疏、③七祖聖教、④浄土関係諸師作品、⑤浄土教に直接関係しない、に五分類し、その引用数を示した。この山田・福原による分類は、引用数を重視することを特色とする。三部経とその註釈疏、七祖、浄土教典籍、その他に分けることは、親鸞にとつての原典の性格を示しているよう。この点については、有効な分類法として首肯できる。

さらにその附録には、「A親鸞七祖著作中引用書一覧」として、『大正蔵』の配列に基づいて経典・論書・釈書と親鸞所引・源空所引・上六祖所引箇所との対照を一覧化し、さらに「B親鸞七祖著作中引用書一覧」

として、『大正蔵』に収録されない諸書について二類五種に分けてそれらの出所を示している。これらは『大正蔵』で試みられたような内容的関連性を元にした区分と配列に準じたもので、近代仏教学の研究蓄積を前提として引用原典を説明しようとする我々の研究状況においては、中世段階に見られない要素ではあるが、引用文分類として重要な視点である。<sup>(7)</sup>

これらは、親鸞とそれ以前にあったテキストとの関係の全体像を示すために効力を発揮し、出拠を検索するためにも有用である。ただ、こうした分類法とは別の把握も並行して行うべきであろう。親鸞が中心的引用文と位置づける①浄土三部経や③七祖聖教については、質量ともに研究が分厚いが、②④⑤の位置づけについては、不明確なものがある。制作地（インド・中国・日本）や、経典・論書・釈書という枠組み、浄土教典籍とその他といった、重層的な諸典籍の関連性も追求する必要があるだろう。

また、親鸞は、『貞元録』を大いに参照していたことは、『集諸経礼懺儀』の引用に見えるところであるし、<sup>(8)</sup>親鸞の時代においては、『開元録』・『貞元録』による仏教典籍の基本的理解も浸透していたと考えられる。<sup>(9)</sup>『集諸経礼懺儀』や『貞元録』を含めた宋版一切経との関連が多く指摘される親鸞文献であるが、その一切経という枠組みから漏れた釈書の場合は、どのような体系で把握されていたのか、そのテキスト関係も含み込んだ上での引用文の体系化が、『教行信証』の場合で実現されることが期待されよう。

また、引用数とは別の方法として従来から用いられてきた分類法が、経典・論書・釈書の分類である。序論で述べたように、上川通夫・中尾堯のように三宝に配当して見る見方や、落合俊典のように三蔵を重視す

る見方があるが、こうした見解と視点を同じくする分類法として、『教行信証』の引用文を主に經典・論書・釈書に分類し、おおよそ「言」・「曰」・「云」に対応させる見方がある。<sup>(10)</sup>これを近年、「引文導入語」と位置づけて考察したのが鳥越正道であり、引文と御自釈の区分の上で、その使用法を検討している。<sup>(11)</sup>鳥越の結論としては、親鸞は原則として經典・論書・釈書をそれぞれ「言」・「曰」・「云」で区別して引用しているが、坂東本に使用されている全数について検討すると、必ずしも原則通りではないとし、その理由は明らかではないようである。また、主として引用の後に「已上」「乃至」等十六種の「引文指示語」を用いられていることも注目されており、<sup>(12)</sup>「已上」を意味上の句切りとして重視する見方も提示されている。<sup>(13)</sup>

さらに、『教行信証』に関わるテキスト体系を把握しようとする場合、経論等の抄出文を含む親鸞真蹟にも注目すべきである。願文や『涅槃経』・『大集経』等の經典書写が多く伝わり、名号・影像〔真蹟集成〕第九巻参照〕には『無量寿経』や『浄土論』などの要文が讚銘として視角的に配置されている。これらを周辺資料として『教行信証』とのテキスト関係を位置づけることで、『教行信証』を取り巻く文献群が明らかとなるう。

以上の分類法を鑑みて、引用文を複合的・総合的に捉えることができれば、親鸞のテキスト環境を知ることができると考えられる。<sup>(14)</sup>次頁の〈図2-1〉は、山田・福原の分類を元として、各分類の関係性と経論釈の別とを考慮して引用文の分類を図式化したものを示した。これを現在の引用文分類の基準としたい。

積書	論書	經典
浄土教に直接関係しない		
『末法灯明記』 1 法琳『弁正論』 14 『論語』 1 『貞元釈教目錄』 1 從義『四教義集解』 1 諦觀『四教義』 1 智顛『法界次第』 2 智顛『摩訶止觀』 2 『大乘起信論』 1 (1)	『大智度論』 1 (5) 『首楞嚴經』 1 (1) 『灌頂經』 1 『梵網經』 1 『集一切福德三昧經』 1 『首楞嚴經』 1 (1) 『不空罽索經』 1	『涅槃經』 36 (8) 『華嚴經』 晋訳 3 (5)・唐訳 5 『悲華經』 2 (2) 『地藏十輪經』 2 (2) 『般舟三昧經』 2 『本願薬師經』 2 『仏本行集經』 1
七祖撰述		三部經典 異記
法然『選択集』 2 源信『往生要集』 9 『往生礼讃』 20 『觀念法門』 3 『法事讃』 14 『定善義』 8 『散善義』 14 『序分義』 8 『安樂集』 17 『讚弥陀偈』 2 (2) 『論註』 29 『淨土論』 6 龍樹『十住論』 6 (2) 天親『淨土論』 6	『阿弥陀經』 1 (7) 『觀無量寿經』 2 (11)	『大阿弥陀經』 3 『平等覺經』 5 (1) 『如来会』 19 『無量寿經』 35 (18)
浄土関係諸師作品		三部經疏
永觀『往生捨因』 1 智昇『集諸經礼懺儀』 2 (1) 王日休『龍舒浄土文』 1 飛錫『念仏三昧宝王論』 2 宗曉『樂邦文類』 5 法照『五会法事讃』 8	戒度『小経義疏聞持記』 1 智圓『小経義疏』 1 元照『小経義疏』 8	法位『大経義疏』 1 憬興『述文贊』 12 吉藏『觀経義疏』 1 戒度『觀経扶新疏』 1 戒度『觀経正觀記』 1 元照『觀経義疏』 5

〔図2-1〕『教行信証』の引用文分類

〔註〕書名の次の数字は引用数、括弧内数字は子引数を表す。

## 第二項 親鸞による典籍群の把握

先行研究を元とした引用書目の分類を批判的に考察する場合、親鸞による記述を参考にする必要もあろう。そこで本項では、内容的側面から、前項で挙げた分類の妥当性を考察したい。

『教行信証』には、親鸞が披覧したいくつかの典籍を大まかに分けるような記述がいくつか見られる。まず、「総序」である。

爰愚禿釋親鸞、慶哉、西蕃・月支聖典、東夏・日域師釋、難遇今得遇、難聞已得聞。敬信眞宗教行證特知如來恩德深。斯以、慶所聞、嘆所獲矣。

（『聖典全』二・七）

「西蕃・月氏の聖典」と「東夏・日域の師釈」の語が見られ、前者には經典、後者には中国・日本の祖師による釈書が該当する。

次に「教卷」眞宗大綱である。

夫顯眞實教者、則大无量壽經是也。斯經大意者、彌陀超發於誓、廣開法藏、致哀凡小選施功德之寶。釋迦出興於世、光闡道教、欲拯群萌惠以眞實之利。是以說如來本願爲經宗致、卽以佛名號爲經體也。

（『聖典全』二・九）

眞実教を『大無量壽經』と規定し、その大意について経文を要約する形で私釈している。その要が『無量壽經』の本願を説くことにあると述べている。

次に、「行巻」偈前序説である。

爾者歸大聖眞言、闋大祖解釋、信知佛恩深遠作正信念佛偈曰、  
〔聖典全〕二・六〇

ここでは「大聖眞言」と「大祖解釋」に分けている。これは「総序」と同様の文言と見え、前者には經典、後者には論書・釈書が該当する。

次に、「正信偈」には、次の二箇所を示されている。

印度西天之論家 中夏・日域之高僧 顯大聖興世正意 明如來本誓應機  
〔聖典全〕二・六一

弘經大士・宗師等 拯濟无邊極濁惡 道俗時衆共同心 唯可信斯高僧説  
〔聖典全〕二・六四

前者ではインドの「論家」と中国・日本の「高僧」に分け、後者では「大士」「宗師」と「高僧」の語を用いている。

次に、「信巻」別序である。

爰愚禿釋親鸞、信順諸佛如來眞説、披閱論家・釋家宗義。廣蒙三經光澤、特開一心華文。且至疑問遂出  
明證。  
〔聖典全〕二・六五

とある。「論家」と「釈家」に分け、『大経』の三心と『浄土論』の「一心」の華文とを比較している。

次に、「信卷」明所被機である。

是以今據大聖眞說、難化三機、難治三病者、憑大悲弘誓、歸利他信海、矜哀斯治、憐憫斯療。喻如醍醐妙藥療一切病。濁世庶類、穢惡群生、應求念金剛不壞真心。可執持本願醍醐妙藥也、應知。

夫據諸大乘、說難化機。今大經言唯除五逆誹謗正法、或言唯除造無間惡業誹謗正法及諸聖人。觀經明五逆往生不說謗法。涅槃經說難治機與病。斯等眞教云何思量邪。

報道、論註曰、問曰、无量壽經言願往生者、皆得往生。

(『聖典全』二・一二四)

「大聖眞說」は具体的には『涅槃經』を指しており、「諸大乘」として『大經』『如來會』『觀經』の文が挙げられている。ここでは經典間の説示内容の相異から出た疑問について、『論註』を引用することで答えるという文脈である。

次に、「証卷」還相廻向釈冒頭である。

二言還相回向者、則是利他教化地益也。則是出於必至補處之願。亦名一生補處之願。亦可名還相回向之願也。顯註論。故不出願文。可披論註。

(『聖典全』二・一三七)

『大經』二十二願の名を挙げながら直接引用せず、『論註』中の引用に譲っている。また、同釈『往生論註』引文の後、往還結釈には、

爾者大聖眞言誠知證大涅槃籍願力回向還相利益顯利他正意。是以論主宣布廣大无尋一心、普徧開化雜染堪忍群萌。宗師顯示大悲往還回向、慇懃弘宣他利利他深義。仰可奉持、特可頂戴矣。

〔聖典全〕二・一五二

とある。ここでの「大聖眞言」は『往生論註』所引の『無量壽經』第二十二願文を、「論主」は天親、「宗師」は曇鸞を指している。

次に、「真仏土卷」真仏土結釈である。

爾者如來眞説、宗師釋義、明知顯安養淨利眞報土。惑染衆生於此不能見性、所覆煩惱故。經言我說十住菩薩、少分見佛性。故知到安樂佛國、即必顯佛性。由本願力回向故。亦經言衆生未來具足莊嚴清淨之身而得見佛性。

起信論曰、若知雖説無有能説可説、…

〔聖典全〕二・一七九

「如來眞説」「宗師釈義」は特に『涅槃經』と善導著作を指すと考えられる。御自釈中では『涅槃經』を経証として引用するが、その直後にその助証として『起信論』（実際の文は『念仏三昧宝王論』）が引用されている。

次に、「化身土卷」の御自釈には多くの書名や人名が出されるが、聖教把握の上で注目されるのが、三願転入から聖道釈にかけての次の三カ所である。第一に、三願転入である。

是以愚禿釋鸞、仰論主解義、依宗師勸化久出萬行諸善之假門、永離雙樹林下之往生。回入善本德本真門、偏發難思往生之心。然今特出方便真門轉入選擇願海。速離難思往生心欲遂難思議往生。果遂之誓、良有由哉。

【聖典全】二・二二〇

ここには「論主」「宗師」と出ている。

第二に結説総勸である。

是以據經家披師釋、辯説人差別者、凡諸經起説不過五種。一者佛説、二者聖弟子説、三者天仙説、四者鬼神説、五者變化説。爾者四種所説不足信用。斯三經者則大聖自説也。

【聖典全】二・二二〇

「經家」が經典、「師釋」が「玄義分」、「三經」が浄土三部經を指している。

第三に、二門通塞である。

然據正眞教意披古德傳説、顯開聖道・浄土眞假、教誠邪偽異執外教。勘決如來涅槃之時代開示正像末法旨際。

【聖典全】二・二二一

「正眞教意」は經典、「古德伝説」とは、広くここに至るまでに引用された諸論釈を指している。

そして最後に、「後序」では、

慶哉、樹心弘誓佛地、流念難思法海。深知如來矜哀、良仰師教恩厚。慶喜彌至、至孝彌重。因茲、鈔眞

宗註、撫淨土要。唯念佛恩深、不恥人倫嘲。若見聞斯書者、信順爲因、疑謗爲緣、信樂彰於願力、妙果顯於安養矣。

〔聖典全〕二・二五五

とある。「師教」は法然をはじめとする先徳を指し、「斯書」は『教行信証』を指している。また、「真宗詮」「浄土要」と示しているのは、『教行信証』に親鸞自身が集めた文を指しており、経典・論書・釈書全体を指すものである。

以上のような文によれば、『教行信証』の御自釈においては、経典と師釈に大きく分ける視点があつたと考えられる。<sup>(15)</sup>さらに、経典を用いつつ、その意を『起信論』や『往生論註』の引用によつて報答する方法があつたことが認められる。このことから、経典・論書・釈書に厳格に分けていたことも重要であるが、経典を軸としてその解釈として論書・釈書を用いる、という位置づけがあつたことが窺える。その下位として、「曰」「云」の使い分けがあつたと見るべきであろう。

### 第三項 引用導入の方法

こうした記述がどの程度『教行信証』の本文に現れているのかを、引用文の構成、経典・論書・釈書の引用法の二点についてそれぞれ考察したい。この検討にあたっては、A. 経典の引用法、B. 論書・釈書の引用法、C. 御自釈中引文に分けて考察し、人名や書名に基づいた分類を行った「附表二」『教行信証』引用

文分類表」を作成し、巻末に附したので、適宜参照されたい。

第一に、經典の引用である。『教行信証』各巻の構成を考えれば、引用の根幹となるのは、『無量寿經』である。「教巻」標挙には、「大無量壽經眞實之教淨土眞宗(16)」と示される。「行巻」以下の標挙には、『無量寿經』願文が各巻の標挙に示され、細註でその意が明示される。本文の『無量寿經』引用文は各巻の冒頭に配置され、さらにその願文・願成就文には『如来会』が添えられているのが大きな特徴である。この二經の配置については、願文と成就文の順が巻や釈によって異なりがあるが、おおよそこの二經を冒頭に配置することで文類の基礎としている。他の大經異訳に関しては、『大乘無量寿莊嚴經』は引用されず、〈初期無量寿經〉と位置づけられる『平等覺經』と『大阿弥陀經』の引用がある。『大阿弥陀經』に関しては『西方指南抄』巻上末に「この經の同本異譯の大阿彌陀經」（『眞聖全』四・八六）、『無量寿如来会』については『淨土三經往生文類』広本（『聖典全』二・五七九上、同五九三上）や『如来二種回向文』（『聖典全』二・七二四）に「同本異譯」と示されている。異訳を参照することについては、親鸞壯年期の制作と推定される『阿弥陀經註』において、『法事讚』等善導疏からは少し遅れた時期に、『阿弥陀經』の異訳である『称讚淨土經』が朱書で書き加えられており、早くから異訳を対照していたことが知られる。また、『淨土三部經』のうち、『觀無量寿經』『阿弥陀經』は前五巻に引用（正引）は少なく、「化身土巻」（『聖典全』二・二〇二）に連続引用があつて標挙にも示されている。『教行信証』では、これらに『涅槃經』や『華嚴經』、『大方等大集經』など、多種多様な背景をもつ經典が付け加えられることとなる。

これら經典の引用法については、經典名を記して「言」を添えるのが大半であり、連引の場合は「又言」などとされる。その形式としては三例あり、「大無量壽經言」(『聖典全』二・一〇)のように書名で示すもの、「諸佛稱名願大經言」(同一五)・「願成就文經言」(同一三四)のように願名・願成就文を示すもの、「佛說諸佛阿彌陀三那三佛薩樓佛檀過度人道經友謙譯言」(同一五七)のように書名に割註あるいは上下欄註記の形式で訳者名を示すものがある。ここに挙げた例でわかるように、『無量壽經』とその異訳に特徴的な引用法が見られるのである。まず、本文内における願名・願成就の表記については、標拳や御自釈で次のように示された内容に導かれて示されたものであり、「行卷」「信卷」にて願名が示されているのを特徴とする。それらを並記してみよう。

「行卷」標拳 「諸佛稱名之願」(『聖典全』二・一四。なお傍点は筆者による、以下同。)

大行釈 「然斯行者出於大悲願。即是名諸佛稱揚願、復名諸佛稱名之願、復名諸佛咨嗟之願、亦

可往相廻向之願、亦可名選擇稱名之願也」(同一五)

大經 「諸佛稱名願大經言」・「願成就文經言」(同一五)

「信卷」標拳 「至心信樂之願」(同六六)

大信釈 「斯心即是出於念佛往生之願。斯大願名選擇本願、亦名本願三心之願、復名至心信樂之

願、亦可名往相信心之願也。……」(同六七)

大經 「至心信樂本願文大經言」(同六七)・「本願成就文經言」(同六八)

信樂積 「次言信樂者：斯心者即如來大悲心故：是名利他真實信心」(同八三)

大經 「本願信心願成就文經言」(同八三)

欲生積 「次言欲生者：以利他真實欲生心廻施諸有海。欲生即是廻向心」(同八七)

大經 「是以本願欲生心成就文經言」(同八八)

「証卷」標拳 「必至滅度之願」(同二三二)

真実証釈 「即是出於必至滅度之願。亦名證大涅槃之願也」(同二三三)

大經 「必至滅度願文大經言」(同二三三)・「願成就文經言」(同二三三)

「真仏土卷」標拳 「光明无量之願／壽命无量之願」(同二五四)

真仏土釈 「然則酬報大悲誓願故、曰眞報佛土。即而有願、即光明・壽命之願是也」(同二五五)

大經 「大經言」・「又願言」・「願成就文言」(同二五五)

「化身土卷」標拳 「至心發願之願」「至心回向之願」(同二八二)

要門釈 「即而有悲願。名修諸功德之願、復名臨終現前之願、復名現前導生之願、復名來迎引接

之願、亦可名至心發願之願」(同一八三)

大経 「是以大經願言」(同一八三)

真門釈 「卽而有悲願。名植諸徳本之願、復名係念定生之願、復名不果遂者之願、亦可名至心回

向之願也」(同一〇一)

大経 「是以大經願言」(同一〇一)

各巻冒頭の御自釈、あるいは「信巻」信樂釈・欲生釈などの御自釈の直後に置かれた『無量寿経』文については、配列からもその重要性は自明であろう。これをテキスト論の視点から見た場合、傍点を附した箇所のように標挙や御自釈と同様の文言を用いていることや、願名を示さなくとも「願」「願成就文」と示していること自体が他の経典の引用に見られない事である。そのことから、ただ御自釈の直後に置かれていることだけでなく、非常に注意した文言を用いて引用していることから、テキスト間の関係の強さを指摘することができる。

訳者名については、本文中に既に示されている場合と、後に上下欄に註記された場合とがある。本文として示しているものに、次のような例がある。

悲華經大施品之二卷言 曇無讖  
三藏譯

〔『聖典全』二・一九〕

大阿彌陀經 謙友

(同九七)<sup>(18)</sup>

佛説諸佛阿彌陀三那三佛薩樓佛檀過度人道經 友謙  
譚 言

(同一五七)

また、後に加えられたものに、次のような例がある。

無量壽如來會言 菩提  
流支

『聖典全』二・六八、坂東本下欄補記)

無量清淨平等覺經 帛延  
譯 言

(同一五七、坂東本上欄註記)

佛本行集經第四十二卷優婆斯那品 闍那崛  
多譯 言

(同一四一、坂東本上欄註記)

坂東本で註記された訳者名は諸本で本文に組み込まれる場合があり、西本願寺本「総序」前の標挙には『大阿弥陀經』と『平等覺經』の経題とそれぞれの訳者名が記されている。<sup>(19)</sup> 訳者名の表記については諸本間で異同の多い箇所の一つである。また、親鸞の他の著作にも類似する記述があり、『愚禿鈔』卷上には、『無量壽經』諸本に対して「佛説無量壽經言 康僧鎧三藏譯」、「無量壽如來會言 菩提流支三藏譯」、「無量清淨平等覺經言 帛延三藏譯」、「諸佛阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經言 支謙三藏譯」と経題の直下にそれぞれの訳者名が示されている。<sup>(20)</sup> 『愚禿鈔』は奥書の年紀からすれば晩年の著作にあたるが、訳者名を示していく方法は、坂東本に見られる親鸞による經典引用の特徴と認められる。なお、北本・南本のある『涅槃經』、晋訳・唐訳が引用される『華嚴經』については、いずれも訳者名などは示されておらず、表記上は区別せずに引用されているようである。

第二に、論書・釈書の引用である。『教行信証』における論書や釈書には、経説を詳述する役割がある。然が「三経一論」と示したうちの「一論」にあたる『浄土論』については、『論註』の引用文である場合が散見され、本来論書ではない曇鸞『往生論註』・『讚阿弥陀仏偈』が引文導入語「曰」の引用に含まれるように、論書・釈書と引文導入語「曰」「云」が全く一致しているわけではない。論書・釈書の引用法については、論書は「曰」、釈書は「云」で引用導入されることが多く、書名のみを挙げる場合、人名のみを挙げる場合、書名と人名を挙げる場合といった、幾つかの引用法がある。

主として書名によって引用するものに『十住毘婆沙論』・『浄土論』・『論註』・『安樂集』・『樂邦文類』・『往生要集』・『起信論』・『論語』など、人名と書名を併記するものに『讚阿弥陀仏偈』・元照『小経義疏』・法然『選択集』・戒度『聞持記』・最澄『末法灯明記』・法琳『弁正論』・天台『法界次第』など、主として人名によって引用するものに憬興（憬興師）・善導（光明寺和尚）・元照（律宗祖師・大智律師）・戒度（律宗戒度・度律師）など「行巻」に引かれる諸師を中心とした引文がある。

さらに御自釈中引文を含めれば、『十住毘婆沙論』は「龍樹大士曰」〔聖典全〕二・四九）、『論註』は「曇鸞大師云」（同四九）とあり、引用文で基準となっている書名ではなく人名で引用している。割合としては、善導以降の時代に成立した諸文を引く場合には人名で引く場合が多く、さらに御自釈中引文になれば、論書・釈書ともに人名で引かれる場合が増える傾向にあることが指摘できる。

おおよそは論書については書名、釈書については人名で引用されているようであるが、その明確な基準が

あったのかについては、現状の研究から導き出すことは困難である。

ところで、経典・論書・釈書が引用される場合、連続して引用される場合が数多く見られる。その引用法について、いくつかの連続引用箇所を挙げて検討しておこう。

まず、『無量寿経』とその異訳である。附表二では『無量寿経』と『如来会』を区分せず示しているが、それは、両経は「又言」で連続引用される場合が散見され、容易に分断できないからである。ただ、例外が二例認められる。第一は、「信卷」横超断四流釈の「断」に関する御自釈に続く連続引用「大本言」「又言」「聖典全」二・九七)については、『無量寿経』と『平等覚経』である。直前の同じく横超断四流釈『無量寿経』『大阿弥陀経』連引箇所(『聖典全』二・九七)では『大阿弥陀経』は書名を示して引用しているから、『平等覚経』の書名を示さない引用は異例である。また、御自釈中引文において、「真仏土卷」真仮対弁では真仏・真土・往生を頭す文として『無量寿経』や『浄土論』などが連引されるが、真仏の経証に「大經言」「又言」(同一七九)として『無量寿経』と『大阿弥陀経』が引用され、真土の経証に「大經言」として『平等覚経』が引用されている。通常の引用であれば、それぞれ書名を示して引用されるが、追釈や御自釈の中では『平等覚経』や『大阿弥陀経』が「大経」に含まれる場合があった。これこそが、引用法から見るテキスト関係を示す例であろう。

次に、『浄土論』と『論註』であり、これも附表二では分割することができなかった二書である。ここでは、『浄土論』と『論註』が交錯する二箇所について検討を加えたい。一箇所目は「信卷」欲生釈の「浄土論曰」

「又云」「又論曰」（『聖典全』二・八八）であり、それぞれ『論註』巻下の引文であるが、『浄土論』として引用されている。この箇所では注目したいのは、この三文全てで『浄土論』文を含んでいることであり、さらに『浄土論』文の末尾は「故」ニトノタマヘリ、「應」シトイヘリト、「知」ク、「名」クトノタマヘリト、第五門トとして引用されていることである。その他の『論註』の文にはそのような訓は含まれておらず、第三文に至っては、本文としては『浄土論』文そのものであるが、この右訓によつて『論註』からの子引と考えられるのである。すると、『浄土論』文については『論註』に依拠していることが、内容面からではなく、この引用法から導き出せるのである。

二箇所目は、「証卷」真実証積の「浄土論曰」「又言」「又論曰」（同一三四）であり、ここもそれぞれ『論註』巻下であるが、『浄土論』として引用されている。ここは一箇所目と比べれば、右訓の特徴も見られず、第二文に『浄土論』文は含まれない。引用の表記法としては同様であるが、二文目が「云」と「言」で相異している。釈書としては、『論註』は「云」で引用される方が妥当であろうが、『浄土論』文も含まない『論註』の文を「言」として引用することには注意すべきである。三文に分割するよりは、全体としては『浄土論』の文として引くが、詳細には『論註』による註釈を散りばめている構造と考えられる。論書とその註釈という関係性を前提に見れば、「信卷」と同様の引用法であろう。<sup>(22)</sup>なお、「真仏土卷」『起信論』（『聖典全』二・一七九）についても、『浄土論』『論註』の関係と同様の引用法が見られると考えられる。その文は、『念仏三昧宝王論』からの引用であると考えられているが、前半部「若知雖說無有能說可說、又無能念可念、名爲隨順。若離於念名爲得入」は『起信論』文「若知雖說一切法而無能說所說。雖念一切法而無能念所念。爾時

隨順妄念都盡名爲悟入」（『大正藏』三二・五八四下）に對する飛錫による取意と考えられ、それについて解釈する文を続ける形式は、『浄土論』『論註』の場合と同様である。實際の引用文の文言は釈書によるが、そこに論文が含まれていれば論書として引用している場合があることに注意したい。<sup>(23)</sup>

次に、善導五部九卷である。善導の著作については、附表二のように、「光明寺和尚云」「光明寺疏云」「光明寺釋云」「光明寺觀經義云」などという形式で引用され、それ以外は「又云」で繋がれている。『觀經疏』のみを連続引用する場合には「觀經義」としているが、それ以外は区別していないようである。五部を一連の書として見ていることが窺えるのが、善導引文の特徴であろう。なお、御自釈中引文においては「宗師」とされることの多い善導著作であるが、「行卷」両重因縁（『聖典全』二・四九）において、「宗師言」「又云」「又云」と連続引用してそれぞれ『札讚』・『五会法事讚』・「散善義」の文を引いている。これまでの例を踏まえれば、法照『五会法事讚』が善導疏に近い関係にあることが指摘できる。

以上のように、連続引用の用例を見渡せば、他の箇所では区別されて引用されている『無量寿經』と『平等覺經』・『大阿弥陀經』、『浄土論』と『論註』、『起信論』と飛錫『念仏三昧宝王論』、善導疏と法照『五会法事讚』とが、場合によっては一連として引用されることがある。このことは、単に内容の合致を意味するだけでなく、それぞれの書目が非常に強いテキスト関係にあることが示唆される。

一般に、同一巻中・同一釈中、隣接して配置される引用文、同一書名・同一人物の書物である場合には、関係性が強いことは認められ、あるいは文意等によってもその関連性を指摘することはできる。ただ、テク

スト論を標榜する本研究の場合、テキスト関係を考察するためのもう一つの尺度として、「又言」「又曰」など連続引用された時の諸文の関係性をここに加えることとしたい。連続して引用しながら、引用原典が変化しているとき、それらは関連性の高い書物として認識すべきである。現代の研究視点から見れば、一つの書物に一つの訳者や制作者を配当して理解するのが常であろうが、『教行信証』における書名による引用、人名による引用、連続引用の用例を考察すれば、必ずしもそうした概念に縛られない柔軟な態度を以て諸テキストの関係を捉えていた姿が、引用文研究の課題として浮かび上がる。

## 第二節 法位『無量寿経義疏』について

『教行信証』引用文の中心は、内容としても数量的にも『無量寿経』である。その『無量寿経』については、中国・新羅・日本において多くの註釈書が作成され、科文的内容の討究や本文内容の註釈が行われてきた。ただ、親鸞が『教行信証』に引用しているのは、新羅の法位『無量寿経義疏』と憬興『述文贊』の二書のみである。『無量寿経』願文・願成就文を各巻の中心として引用する『教行信証』にあつて、なぜこの新羅浄土教の所産の二書を引用したのであるのか。その引用法やテキスト関係、書写法を課題として、本節・次節で二書の考察にあたる。

## 第一項 『無量寿経』 註釈書と法位

『無量寿経』註釈書の位置づけについて、藤田宏達『浄土三部経の研究』には、中国・朝鮮における三部経の受容形態の跡として、数書が紹介されている。<sup>(24)</sup>〈無量寿経〉の場合は、伝康僧鑑訳以外の諸訳の註釈書は皆無とされている。「無量寿経疏」の制作については、隋代には浄影寺慧遠『無量寿経義疏』と古蔵『無量寿経義疏』があったが、唐代にはもっぱら新羅に移り、元暁『両卷無量寿経宗要』、法位『無量寿経義疏』、玄一『無量寿経記』、義寂『無量寿経述義記』、憬興『無量寿経連義述文贊』を挙げ、新羅浄土教が形成されたが、宋代以降には見るべきものはなくなったという。なお、藤田は、これらを含んだ三部経の註釈書の特徴としては、經典の内容を科文の形で示していることを挙げている。恵谷隆戒は、中国では『観無量寿経』中心の浄土教が発達し、新羅では『無量寿経』『阿弥陀経』中心の浄土教が発展したと述べている。<sup>(25)</sup>

しかし法位については、現在ではその著述が散逸しており、目録や引用等によってその存在が知られる。<sup>(26)</sup>新羅諸師の書にいくつかの引用があり、日本では「奈良朝一切経疏目録」にも挙げられているから、古くから伝来していたようである。<sup>(27)</sup>

法位『無量寿経義疏』の本文については、恵谷隆戒による研究<sup>(28)</sup>と本文復元<sup>(29)</sup>がある。

前者では、新羅浄土教典籍における日本への伝来について概観した上で法位『無量寿経義疏』の位置づけについて述べられている。「浄土三部経」や『般舟三昧経』について、「正倉院文書」、『新編諸宗教蔵総録』(義天録)、『東域伝灯目録』、『浄土依憑経論章疏目録』(長西録)等によって一覧化されているが、ここでは『無

『無量寿経』註釈書について取り上げたい。恵谷の一覧表によれば、現存しないものも含めて、次のような『無量寿経』註釈書が伝えられていたようである。

法位（七世紀頃）  
〔無量寿経疏〕（正倉院文書・東域録・長西録）

元暁（六一七―六八六）  
〔無量寿経宗要〕（正倉院文書・東域録・長西録）

〔無量寿経疏〕（義天録）

義寂（七世紀―八世紀初）  
〔両観無量寿経疏〕（正倉院文書）

〔無量寿経疏〕（東域録）

〔無量寿経述義記〕（長西録）

玄一（七世紀―八世紀初）  
〔無量寿経疏〕（正倉院文書）

〔無量寿経記〕（東域録）

〔無量寿経記〕（長西録）

円測（六一三―六九六）  
〔無量寿経疏〕（正倉院文書）

憬興（七世紀―八世紀初）  
〔無量寿経連義述文贊〕（東域録・長西録）

太賢（八世紀）  
〔無量寿経古迹記〕（義天録）

恵谷は、新羅浄土教の系譜を浄影寺慧遠系（慈蔵・元暁・義湘・義寂・法位・玄一など）と玄奘・慈恩等

の唯識系（円測・憬興・太賢・遁倫ら）に分けて理解し、前者はさらに皇竜寺系と法位・玄一系に分かれるという。法位については、玄一がその説を引用してほとんど法位の説によっていると述べ、後者に属する憬興について、慧遠や法位の学説を排斥しており、義寂の説をも批評しているという。

日本における法位『無量寿経義疏』の伝来について、恵谷は、右に挙げた書は奈良・平安期には日本に將來されていたというが、平安中期より鎌倉期の浄土教については、道綽・善導系の浄土教によっていることに注意している。さらに「正倉院文書」によれば神護景雲二年（七六八）に書写され、源隆国『安養集』に十四回、『安養抄』に七回に渡って長文が引用されているという。また、鎌倉期、了慧『無量寿経鈔』、長西『念仏本願義』、明恵『摧邪輪』、寂恵『述聞口決鈔』における抄出引用の例から、室町期になつての散逸と推定されている。その内容について恵谷復元本においては、『安養集』以下の諸書に加え、良忠『観経疏伝通記』、聖聡『大経直談要註記』などから引用文を収集し、およそ半分程度の復元を得たとしている。

ただし、法位及びその『無量寿経義疏』については、次の二つの課題があると考えられる。一つは、法位自身の立場についてである。恵谷は慧遠系と位置づけているが、これに対して深貝慈孝が疑義を呈している。<sup>(30)</sup> 深貝は、恵谷が新羅諸師の学説を慧遠と同じとするのは、了慧道光『大経鈔』の説に影響されて形成されたと考えられること、恵谷復元本の範囲内であれば、法位の説は『仏地経論』によっており『成唯識論』を参照した形跡が見られないことの二点を挙げ、法位は単純に慧遠の説を継承しており、玄奘・慈恩の唯識系に属する系統にあったとは認められないとしている。また、愛宕邦康は、新羅では『観無量寿経』の研究が殆

どなされなかつたという恵谷説に対して疑問点を述べている。<sup>(31)</sup> 愛宕は、恵谷説の難点として『無量寿経』や『阿弥陀経』に比べて註釈書の数が少ないという一点からなされていることを指摘し、実際には新羅浄土教の諸師が『観経』に介在する諸問題に対応していたことを示している。このように、伝記や完本の現存しない法位自身の立場については、その考察の方法を含めて再検討すべきであり、殊に親鸞に関してはどのような立場から引用したのかを考究する必要がある。

もう一つは、復元本自体の問題である。憬興『述文贊』や玄一『無量寿経記』による引用については含まれていないようであり、それらを含めて法位『無量寿経疏』の復元本に充足させるべきである。<sup>(32)</sup> また、恵谷復元本は法位『無量寿経義疏』本文部分と思われるものを推定して经文に適合させて配置しているのであるが、誰がどのように引用したのかは明らかにしにくい。各書の引用法について検討することで、法位『無量寿経義疏』の位置づけのみならず、親鸞『教行信証』における引用の特徴を明らかにしようと考えられる。

なお、改めて大正新脩大藏経テキストデータベース(SAT)を検索したところ、杲宝説・賢宝記『理趣积秘要鈔』第六において、第七無漏智を解釈する中、『唯識論』に続いて「法位無量壽経疏云。平等性智轉七識依得。良由智如境界如智平等不可分別絶於稱説 文即此意也」と法位『無量寿経義疏』が引用されていたので、<sup>(33)</sup> ここに加えておきたい。

## 第二項 諸目録と法位『無量寿経義疏』

恵谷の復元本が示されてから半世紀以上が経過し、恵谷の理解に対する疑義も提示されているが、仏教典籍研究自体に大きな進展が見られるため、そうした成果から、法位『無量寿経義疏』に関する事項を拾うことで、恵谷の成果を発展的に『教行信証』引用文の研究に接続させる必要がある。そこで、目録による位置づけから、法位『無量寿経義疏』について再検討したいと思う。

第一に、目録類における記述である。経疏目録については、恵谷の用いた「正倉院文書」、『義天録』、『東域録』のほかに、近年いくつかの目録の翻刻が公にされ、それらに基づく研究が行われている。

新羅仏教の日本への影響については、福土慈稔「目録類からみる日本に於ける朝鮮仏教の影響とその問題点」(『印仏研』五六―二〇〇八)では、十世紀初めまでの目録として『大日本古文書―正倉院編年文書』(奈良期)、延喜十四年(九一四)円超の「五宗録」、延長三年(九二五)延暦寺の『山王院藏書目録』(頭教目録)、十二世紀末頃までの目録として一〇九〇年高麗・義天の『新編諸宗教藏総録』、寛治八年(一〇九四)法相宗永超の『東域伝灯目録』、安元二年(一一七六)法相宗藏俊の『注進法相宗章疏』、十一世紀初頭から十二世紀末の成立とされる『古聖教目録』、平安前期成立とされる『大小乗経律論疏記目録』、『高山寺聖教目録』(昭和法宝総目録所収本)を挙げている。ここではこれらを含めた目録類から、恵谷の時点で明らかになっていなかったものも含めて、日本における目録の記述を整理してみよう。

(1) 『浄土依憑経論章疏目録』(長西録)

『長西録』巻上・第二釈経録には、「同経疏二卷六十四丁 法位」(『真宗全書』七四・四七二)とある。

三行前の憬興に「法相宗」との註記があるが、法位についてはそのような註記は無い。

(2) 『東域伝灯目録』

『東域伝統目録』は寛治八年（一〇九四）興福寺永超による制作とされ、『大正蔵』所収本の底本は高山寺蔵鎌倉初期書写本、甲本は大谷大学蔵本である。『大正蔵』には「同經義疏二卷 法位師撰大夫殿目録云同經疏三卷法作師云云可勘會之」(『大正蔵』五五・一一五〇下)とあり、脚註に「②大 甲本傍註曰已下南本無 ②⑤作 依④、位力④」とある。なお高山寺本は、『高山寺資料叢書』第十九冊に収録されている。

(3) 真福寺蔵『阿弥陀仏經論並章疏目録』(承暦元年(一一〇七七)蓮永書写本)

落合俊典によれば、十一世紀初頭の成立とされ、『長西録』と比べて五分の程度の經論数であり、天台平安浄土教の原初的な形態を保持していると評されている。<sup>(34)</sup> 落合論文に掲載された「真福寺蔵承暦元年写『阿弥陀仏經論並章疏目録』翻刻」では、(仮五才)四行目に「無量寿經疏二卷 法位師撰」とあるという。なお、(仮四ウ)から(仮五ウ)にかけて「無量寿經疏」が集中して記されており、吉蔵『無量寿經義疏』、憬興『無量寿經疏』、義寂『無量寿經述義記』、憬興『無量寿經連義述文贊』、『無量寿經述記』、法位『無量寿經疏』、『無量寿經宗要』、『無量寿經指事私記』、龍興『同經記』、『無量寿經宗要指事』、『両觀無量寿經疏』、『両卷經提目』が挙げられているが、一連として書かれているわけではなく、『阿弥陀經』『觀無量寿經』『般舟三昧經』の註釈書とともに記されており、その記述順が如何なる意味を有しているのかは定かでない。

(4) 法金剛院蔵『大小乘經律論書記目録』卷上(平安前期〜中期)

七寺古逸經典研究叢書第六卷『中国・日本經典章疏目錄』（大東出版社、一九九八）による。<sup>(35)</sup> 本文二百八十六行目に「無量壽經義疏二卷 法位師 五十八紙」とある。本目錄は、法相宗の中でも最も教学の盛行した寺院の蔵書目錄」と見られている。<sup>(36)</sup> なお、七寺蔵『古聖教目錄』（擬題）には、法位『無量壽經義疏』と思われる書目は掲載されていない<sup>(37)</sup>。

さらに、時代は下るが、その他の真宗系の目錄についても触れておきたい。法位『無量壽經義疏』は、存覚『浄典目錄』には「大経疏」として「同疏上下二卷 法位撰」（『真宗全書』七四・二）と示される。これに基づく記述が後の目錄中に確認される。

#### (5) 実悟『聖教目錄聞書』

実悟『聖教目錄聞書』が『新編真宗全書』に収録されている。他の「大経疏」とともに、「同疏 上中下 法位 二卷」（『新編真宗全書』史伝編九・五頁下）として掲げられている。なお、本書については、安藤弥「史料紹介 慈願寺蔵『聖教目錄』（『同朋大学仏教文化研究所紀要』三二、二〇一三）及び【史料対校】実悟編『聖教目錄聞書』・慈願寺蔵『聖教目錄』前半部分」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』三三、二〇一四）によって慈願寺蔵『聖教目錄』（慈願寺法林、江戸初期成立）と対校されてその内容について検討されている。慈願寺蔵『聖教目錄』では、「大経疏」の中に「同疏 二卷 法位作」とある。

さらに、福土慈稔による「日本仏教各宗の新羅・高麗・李朝仏教認識に関する研究」から、法位『無量壽經義疏』に関する記述を拾ってみたい。<sup>(38)</sup> 日本天台章疏として、『安養抄』（失名、十二世紀初頃成立か）に六

箇所の引用（第一巻・一六四頁）があることが示されている。『六要鈔』によれば「行巻」引用の次の文は胎生に関する文が続いていたとされていたが、この『安養抄』には胎生に関する記述が三つ掲げられている。しかし、『安養抄』より先に成立した『往生要集』には、元暁・憬興・玄一・義寂の引用あるいは書名の指示があるが、法位の引用が無いことが確認できる。<sup>(39)</sup>その他、第二巻上（日本三論宗章疏）、第二巻下（日本法相宗章疏）には見当たらず、次に挙げられるのが第三巻（日本華嚴宗章疏）の明恵『摧邪輪』と『浄土法門源流章』であった。これらは恵谷の指摘に合致する内容である。

以上のように、近年発表された研究において、『長西録』を遡る目録がいくつか紹介されたことは、注目に値する。法位『無量寿経疏』について窺ってみると、大経疏二巻として伝えられていたのは確かであり、紙数も表示されていることから、平安・鎌倉期には完本として存在していたと考えられるが、その紙数に若干の相異も見られる。

### 第三項 親鸞と存覚の引用

次に、親鸞と存覚の引用について考察したいと思う。

恵谷は、法位『無量寿経疏』の思想的特徴として、四十八願、十念、別時意、浄土、三輩往生などの問題を挙げつつ、四十八願について次のように述べている。<sup>(40)</sup>

法位は四十八願を特に重要視し、それを新しく分類組織しているばかりでなく、更に進んで四十八願の

一々に願名をつけていることである。これは後世の四十八願積の上に一つの指針を与えたものであって、新羅では玄一・憬興・義寂などがこれに習って願名を呼称し、日本では智光・良源・静照・真源・澄憲・源空・隆寛等を初め、多くの人々が何れも願名を呼称するようになって来たのであって、その先鞭をつけた者が彼であったとすれば、彼の四十八願積は実に後世にその範を垂れた最初の人として注目すべき存在であるといえようか。

このように法位『無量寿経義疏』は、四十八願に願名を初めて付した書として知られる。ここには含まれていないが、願名を強く意識したのが親鸞であり、『教行信証』各巻標挙や冒頭の御自釈に様々な願名を並べることが『教行信証』の特徴の一つであって、その点で間接的ではあるうが法位の影響がみられる。<sup>(41)</sup>

また、梯信暁は『安養集』中の法位『無量寿経義疏』引用について、

新羅法位の『無量寿経義疏』は、了慧の『無量寿経鈔』に三十二回の引用が見られる外、親鸞・高弁・良忠・長西・寂慧・聖聡の著作中に引かれていて、<sup>(38)</sup>後には広く流布していたことが知られるが、『安養集』以前の叡山系諸文献の中には全く見られない。しかし本書は『奈良朝現在一切経目録』に載せられていて、奈良時代の南都に既に伝えられていたことがわかる。

としており、註26に「恵谷隆戒『浄土教の新研究』395頁」と恵谷復元本を挙げている。<sup>(42)</sup>その恵谷の論文およ

び復元本には親鸞や存覚の引用は含まれていないが、親鸞による引用には注意が払われているようである。

しかし、法位『無量寿経義疏』に関する研究が着実に進展している中で、これらの成果が『教行信証』研究において顧みられることはかつてなかったようである。『教行信証』江戸期以降の講録については、『六要鈔』によるところが多く、伝記が伝わらないこと、前文の嘉祥寺吉蔵の文との関連、滅罪の益を示すという文意などは述べられるが、引意や同疏の来歴については記されることは少ない<sup>(43)</sup>。また、江戸期真宗聖教目録では、「大経疏」の一つとして略述するものが多数である。

一雄『真宗正依典籍集』 「同疏 法相祖師法位撰」(『真宗全書』七四・五)

知空『真宗録外聖教目録』 「同法位疏」(同一一)

月筌『月筌聖教目録』 「同疏 二卷 法徳法相宗祖師」(同二九)

慧琳『学部必用目録』 「疏二卷長西 法位述」(同一一二)

また、玄智による三卷本『浄土真宗教典志』第三卷「浄土三経章疏目録」には、「義疏二卷 法位作。出東域・長西二録。行卷以法位爲法相宗人。續僧傳十五・唐僧鳳傳有弟子法位。同異未詳」(『真宗全書』七四・二六二)とある。玄智は、『東域伝灯目録』、『長西録』によって法位撰『無量寿経義疏』の項を立てたことを明示し、「行卷」に「法相祖師」とあることから、法相宗の人と考えるほか、『続高僧伝』にて法位なる者の記述があるが、制作者と同一であるかは定かでないとしている。このように、真宗における聖教目録では、『浄

典目録』の記述がそのまま示されており、「法相祖師」とするのは『教行信証』本文による情報、「長西」というのは『長西録』に記述されていることを追記したに過ぎない。

このような理解に今も留まるのは、本文・伝記ともに伝存していないという、法位やその『無量寿経義疏』特有のテキスト環境に原因があると考えられる。たとえば少し古くなるが、真宗学において『無量寿経』註釈書について扱った徳沢龍泉「聖道諸師に於ける無量寿経の解釈的思想傾向とその批判」(『宗学院論輯』七、一九三一)では、現存する「四大註疏」に描かれた組織や思想を考察されているが、法位の書については現存しないものとして考察の対象には入っていない。そこには復元本が未だなかったという時代的制約もあった。しかし恵谷による復元本及びその研究が発表され、その他諸資料によって補われつつある現段階においては、たとえ散逸本の集成であったとしても、もはや内容が不明であるものとしては扱えない。親鸞や存覚が引用している以上、親鸞教義を研鑽する真宗学において無視し続けることは、その研究姿勢に課題が残っていると一言わざるを得ない。

そのような中で、本研究では、書誌学的見地からの検討と、テキスト関係の検討という二点の方法を以て、法位『無量寿経義疏』の解明を行いたいと思う。

『教行信証』における法位『無量寿経義疏』は、「行巻」大行釈の中国十師の内の一つとして、恵谷本、あるいは『大正新脩大藏経』や『浄土宗全書』所収の諸書にも見当たらない文が引用されている。配置としては、六字釈の後に中国十師ともいわれる文が続くが、法照『五会念仏法事讚』、憬興『述文賛』、宗暁『楽邦

文類』、台教祖師山陰慶文法師、律宗祖師元照『観経義疏』、『小経義疏』、慈雲讚、律宗戒度『正観記』、律宗用欽、三論祖師嘉祥『観経義疏』、法位『無量寿経義疏』、禅宗飛錫『念仏三昧宝王論』と並ぶ中に位置し、日本の源信『往生要集』に至る位置にある。周辺の引用法からすれば、台教・律宗・三論・禅宗の祖師が並ぶ中での法相宗の祖師としての引用である。坂東本・専修寺本・西本願寺本ではやや右訓が異なるから、それについて示しておく。

坂東本 法相祖師法位云諸佛皆德施<sub>ニ</sub>名<sub>一</sub>稱<sub>ニ</sub>名<sub>一</sub>即稱<sub>ニ</sub>德<sub>一</sub>德能滅罪<sub>ニ</sub>生福<sub>一</sub>名亦如是<sub>ニ</sub>若信<sub>ニ</sub>佛名<sub>一</sub>能生<sub>ニ</sub>

善<sub>一</sub>滅<sub>ニ</sub>惡<sub>一</sub>決定無<sub>ニ</sub>疑<sub>一</sub>稱名往生此有<sub>ニ</sub>何惑<sub>一</sub>上<sub>ニ</sub>已

〔真蹟集成〕一・一〇九

専修寺本 法相祖師法位云諸佛皆德施<sub>ニ</sub>名<sub>一</sub>稱<sub>ニ</sub>名<sub>一</sub>即稱<sub>ニ</sub>德<sub>一</sub>德能滅罪<sub>ニ</sub>生福<sub>一</sub>名亦如是<sub>ニ</sub>若信<sub>ニ</sub>佛名<sub>一</sub>能生<sub>ニ</sub>

善<sub>一</sub>滅<sub>ニ</sub>惡<sub>一</sub>決定無<sub>ニ</sub>疑<sub>一</sub>稱名往生此有<sub>ニ</sub>何惑<sub>一</sub>上<sub>ニ</sub>已

〔専修寺本〕一一七

西本願寺本 法相祖師法位云諸佛皆德施<sub>ニ</sub>名<sub>一</sub>稱<sub>ニ</sub>名<sub>一</sub>即稱<sub>ニ</sub>德<sub>一</sub>德能滅<sub>ニ</sub>罪<sub>一</sub>生福<sub>ニ</sub>名亦如是<sub>ニ</sub>若信<sub>ニ</sub>佛名<sub>一</sub>能生<sub>ニ</sub>

善<sub>一</sub>滅<sub>ニ</sub>惡<sub>一</sub>決定無<sub>ニ</sub>疑<sub>一</sub>稱名往生此有<sub>ニ</sub>何惑<sub>一</sub>上<sub>ニ</sub>已

〔縮刷本〕一四七

坂東本では八行書き本文であり、一行の字詰や糸偏の字形などから前期筆跡時で坂東本最初期の筆と考えられている。<sup>(44)</sup> 引用の冒頭は、「法相祖師」と朱で声点が施されており、この声点は西本願寺本も書写している。

三本を比べれば、本文に相異はないが、訓点にいくつかの異なりが見られる。その中で違なる点が、「惑」の右訓であり、字音「マドイ」は共通しているが、送り仮名が異なっている。坂東本では、「マトイ」と「カ」の位置がややずれている。元は「ノ」あるいは「カ」とあったようだが、墨で「カ」と訂記されている。周辺の朱筆の状態を見れば、墨による送り仮名に対して字音を朱で附されている例が散見されるため、ここでも字音をさらに附加したものと思われる。専修寺本は「マドイノ」、西本願寺本は「マドイカ」としているから、少なくとも坂東本朱訓①「マドイノ」を専修寺本（の祖本）が書写し、坂東本の補訂後の②「マドイカ」を西本願寺本が書写していると考えられる。この一点で三本の前後関係を論じるつもりはないが、前期筆跡時に書写された本文に対し、坂東本で朱による訓が附されたことと、専修寺本（の祖本）が書写された後に、訂正を行っていると考えられるのである。時期を隔てた二回に渡って朱で点を補訂していることから、親鸞による一定の注意が払われたと考えることができる。「惑」の右訓からは、書写者の立場によれば、仮に同じ本を親本としていたとしても、そのときの書写原本の状態によって書写内容が変化すること、「法相祖師」の西本願寺本の右訓からは、書写者の判断により誤謬が生まれる姿が端的に知られる。何をどう読んだのか書写本それぞれの特徴となる。本研究で目指す書写本それぞれの価値を認めていく立場が、『教行信証』を初めとする典籍研究のために重要であることが認められよう。

ところで、法位『無量寿経義疏』の引用については、存覚『六要鈔』によるところが大きい。法位『無量寿経義疏』二巻のうち上巻の釈であることも、『六要鈔』によってのみ知られる事実である。そこで、『教行

信証』自体の研究からは少し離れるが、強いテキスト関係にある書としての意味から、『六要鈔』の内容検討をして、『教行信証』本文からのみでは窺い知ることのできない法位『無量寿経義疏』の引用について少しく言及したい。

存覚は『無量寿経義疏』の構成について、「彼疏釋文有其四門。一明彌陀佛土是化非化、二明往生者有得不得、三明修因有事有理、四開文解釋」(『聖典全』四・一〇七三)と述べ、大きく四門に分けられるが、今の文は第三門「明修因有事有理」の下に多重の問答がある中の答えの一つであるという。第四門を「開文解釋」とするよう経文に従って註釈を施していく段だとすれば、一・二・三門はその総説的な位置に当たる。『六要鈔』では第三門に多く設けられる問答の一つが『教行信証』の引用であるといい、その問いを「問曰、佛名有何神驗稱名即得滅罪往生」とし、これに対する答えの中に当文があるという。また、次下の文として「若疑惑不信、然由信罪福修習善本願生其國、尙得往生名曰胎生。況今決定信樂稱佛名號十念相續生彼無疑也」と示している。存覚による「行卷」法位『無量寿経義疏』引文に対する註釈によれば、同書の構成とその中での当文の位置づけが知られるのである。

この「行卷」の註釈箇所を含めて、『六要鈔』において法位に言及している箇所を抜き出したのが〈表2-1〉である。



『六要鈔』においては、『無量寿経』文を解釈する場合には、主に浄影寺慧遠『大経義疏』・憬興『無量寿経連義述文贊』・義寂『無量寿経述義記』を用いているが、その他比較対象として多くの註釈書が挙げられる。その場合に、玄一や元暁らのように適宜引用されている傾向が見られる。他の『無量寿経』註釈書との関係の中で、同書の位置づけがなされていると考えられるのである。

なお、「化身土卷」要門釈『大経』の註釈として挙げられている法位の文は四智についてのものであるが、真仏筆『経釈文聞書』中の『述文贊』に、

憬興師云、

佛智清淨法界 不思議智大圓鏡智 不可稱智平等性智 大乘廣智妙觀察智 无等无倫最上勝智成所作智 (『聖典全』四・六)

とある。『六要鈔』では「又憬興師以佛地經所五法立爲五智所謂清淨法界以爲初之佛智大圓鏡等如次配彼不思議等之四智也」(『聖典全』四・一二五五)とあるが、これを『経釈文聞書』では『述文贊』の文を割註化して示している。『教行信証』における割註化については次節で述べるが、同じ『無量寿経』註釈書として比較される中に法位『無量寿経義疏』が位置していることがわかる。しかし「行卷」の引用においては、存覚の註釈によれば『無量寿経』文を直接註釈した箇所というわけではなく、総説的な内容としての文であったであろう。そうしたことも、法位『無量寿経義疏』の引用自体の検討が進まなかった一因とも考えられる。

もう一点の問題は、なぜ「法相祖師」としているのかである。恵谷復元本に用いられた諸文献の引用法を

再確認すれば、『安養集』、『安養抄』、了慧『無量寿経鈔』、長西『念仏本願義』、明恵『摧邪輪』、寂恵『述聞口決鈔』においては、総じて人名あるいは書名によって引用され、また、玄一『無量寿経記』や憬興『述文賛』においても人名以外の指示はない。他師による引用法について確認してみても、親鸞以外からは「法相祖師」ということが窺われないのである。

親鸞の前時代・同時代の日本諸師における法位の位置づけについては、今回の検討によっては平安期に成立した法相宗の聖教目録に法位『無量寿経義疏』二巻として記されていたこと以外、関連性が認められなかった。このことも親鸞が法相祖師とした根拠とはならない。依然として課題として残されているが、今後さらなる目録・史資料が公開されることによって、親鸞自身による文言の根拠が発見されることを期待したい。

### 第三節 憬興『無量寿経連義述文賛』について

『教行信証』に引用される『無量寿経』註釈書のもう一つが憬興『無量寿経連義述文賛』である。親鸞が引用文を書写するとき、憬興『述文賛』と戒度『阿弥陀経義疏聞持記』（『聞持記』）の引用においては本文大に書写された經典の語句等に対して、一々の随文解釈として直下に細字二行書で示されている場合が散見される。これを引用原典の割註化と位置づけ、引用原典と坂東本とのテキスト間の形式変化に着目することで、

必ずしも引用原典の形式に依らない書写方法を採ったことの背景とその意義を明らかにする。

### 第一項 『教行信証』における割註

割註とは、註記の一種で、ある言葉に対して註釈・解説を加えたもののうち、細字で行を割って示したものである。『教行信証』中の割註については、坂東本の改訂や筆跡に関する先行研究で、真筆・異筆、染筆時期などが検討されている。赤松俊秀はいくつかの頭註の筆跡年時を言及、小川貫式は註記の年時を指摘、重見一行は坂東本各部染筆時期の限定と諸本間の異同を指摘、鳥越正道は坂東本本文部分の筆跡変化と引文指し語をまとめている。<sup>(45)</sup> また、註記類の研究としては、字訓・左右訓を分類する中に割註の語句も含まれている。<sup>(49)</sup> ただ、先行研究では、研究対象が標挙や頭註などに偏り、割註全体の定義や役割自体が不明確である。また、御自釈や引文中には独自の割註が見られ、全体としてどう捉えるべきかはつきりしていない。

そこで本項では、坂東本を中心に、割註が附された場所と筆跡年時によって分類し、『教行信証』本文引用部の割註を対象に、原文と坂東本の当該箇所を比較検討する。そのことで、一、『教行信証』独自の割註の由来は『選択集』や『讚阿弥陀仏偈』などに求められること、二、『教行信証』の割註の役割は、人名・典籍註、音訓註、意義註、引用指示語の四つに分類され、特に意義註に親鸞独自の割註が見られることを明らかにしていく。

『教行信証』における割註を、坂東本の細字複数教行で示された註記として定義した場合、坂東本の割註は、

附された場所によつて題号・撰号・標挙・本文・上下欄外に分けることができる。本文については、御自釈と引文前後（引文の前後に附された訳者・撰者名など）・引用部（引用の本文）・引文指示語（引用の省略や意味上のまとまりを示す）に細分化することで、誰による書き入れなのかを把握しやすくなる。また、本文への影響を考へるためには、坂東本の中で真筆・異筆や前期・中期・後期の筆跡変遷を判断し、『教行信証』諸本との比較を通してそれぞれを把握する必要もある。そこでまずは、真筆・他筆を問わず、各巻巻頭の書き入れ、本文、上下欄外・その他に分けて坂東本における割註の具体例をいくつか示してみたい。

第一に、各巻巻頭の書き入れとしては、標挙、題号、撰号がある。標挙内の割註としては、「行卷」に「諸佛稱名之願淨土眞實之行  
選擇本願之行」（『真蹟集成』一・二四、後期筆跡、「淨土」と「本願」はそれぞれ右傍補記）とある。題号には厳密には割註は見られないが、「化身土卷本」の題号に「顯淨土方便化身土文類六本」（『真蹟集成』二・五八二、別筆）と補足的に細字が用いられている。また、撰号としては、「別序」題号下に「顯淨土眞實信文類序愚禿釋  
親鸞集」（『真蹟集成』一・一五七、後期筆跡）とある。

第二に、本文としては、御自釈、引文前後、引用部、引文指示語の四つの場所に見られる。御自釈内では、「行卷」六字釈に「歸言也至」（『真蹟集成』一・八五、前期筆跡）などあり、引文前後には「行卷」大行釈『悲華經』引文は「悲華經大施品之二卷言曇無讖三藏  
譯」（『真蹟集成』一・三六、後期筆跡）と訳者名を細字二行で示している。引用部では、「教卷」『述文贊』引文に「今日世尊住奇特法依神通輪所現之相非  
唯異常亦无等者故」（『真蹟集成』一・二一、後期筆跡）とある。引用後の引文指示語は同じく「教卷」『述文贊』引文に「无能遏絶上」（『真蹟

集成』一・一九、後期筆跡）とあるように、おおよそは細字二行書きで示されている。

第三に、上下欄外・その他である。上下欄外のもは、註記と訂記に分けられる。「信卷」『涅槃経』引文の「災」について左傍に符号を附し、さらに上欄に「或本作」遇火「真蹟集成」一・二八六、前期筆跡）との註記

があり、上欄の幅の問題もあろうが、二行書きで示されている。また、本文に符号を附さずに註記を記す例としては、「行卷」大行釈『大経』第十七願文の導入部「諸佛稱名願大經言」に対して、上欄に「第十七」願「真蹟集成」一・二六、異筆）とある。また、坂東本の奥書として「行卷」に「弘安陸癸」未「真蹟集成」一・一

五三、後人加筆）とあって、干支を割註として示している。

また、坂東本散逸箇所の中で、西本願寺本・専修寺本には「総序」と「教卷」の間に「大無量壽經眞實之教」眞實之教「真蹟集成」二・四四八）のみ残存している。

は散逸しているが、西本願寺本（『縮刷本』六二二）・専修寺本（『専修寺本』四九二）によって推察するに、「讚阿彌陀佛偈曇鸞和尚造／南无阿彌陀佛釋名无量壽傍經」との文言が引用の導入として示されていたようで、坂東本では最後の「奉贊亦」曰安養」眞蹟集成」二・四四八）のみ残存している。

これらを踏まえ、坂東本各冊毎の割註の分類に、筆跡年時による区分を加えると次のようになる。引文指

示語に特に多く見られるが、前期筆跡時において、上下欄のみならず引用部に既に多くの割註が見受けられ、さらに御自釈中にも多くあることがわかる。



〈表2-3 引用原典と割註例〉

卷	引用書	『教行信証』の割註例 (括弧内は『真蹟集成』一・二の頁数)	関連諸本	『大正蔵』
行	龍樹『十住毘婆沙論』	世自在王佛 乃至有 諸餘佛	『聖典全』一・四一三〜四一四	二六・四一上
行	曇鸞『論註』	相 <small>修齋</small> 反	加点本『真蹟集成』七・一六〇	四〇・八二六中
行	法照『五会法事讚』	依稱讚淨土經 釋法照	見聞集Ⅱ(『真蹟集成』九・五六)	四七・四七五上
行	元照『觀經義疏』	外魔 <small>謂天魔也</small>	『淨全』五・三六三上	三七・二八三下
行	法然『選択集』	南无阿彌陀佛 往生之業 念佛爲本	『聖典全』一・一二五三	八三・一中
信	曇鸞『論註』	首楞嚴經言譬如有藥名曰滅除若鬪戰時用以塗鼓聞鼓聲者箭出毒除菩薩摩訶薩亦復如是住首楞嚴三昧聞其名者 三毒之箭 自然拔出	加点本『真蹟集成』七・二七四	四〇・八三八上
信	永觀『往生十因』	汚母无學尼 殺母罪 同類	龍大蔵宝治二年刊本(二三才)	八四・九四上
証	曇鸞『論註』	澀 <small>食陵反</small>	加点本『真蹟集成』七・三二八	四〇・八四二上
真	曇鸞『讚阿弥陀仏偈』	南无阿彌陀佛 釋名无量壽傍經 奉贊亦曰安養	『聖典全』一・五三五	四七・四二〇下
化本	最澄『末法灯明記』	解脱堅固 初得聖果 名爲解脱	龍大蔵存覚書写本(三ウ)	
化末	法琳『弁正論』	原壤母死騎棺而弗譏子桑死子貢弔四子相視 歌而孔子時助祭而笑莊子妻死扣盆而歌也		五二・五二九中

(註) 龍谷大学蔵『往生拾因』(請求記号…〇二一―三三二―)・『末法灯明記』(請求記号…〇二一―八二一―)は龍谷大学図書館貴重書データベース「龍谷蔵」の画像によった。

「行卷」『十住毘婆沙論』については、原典では「師子意仏」から「宝相仏」にあたる諸仏が省略されているから、その意を割註で示している。「乃至」に似た用法である。

「行卷」「証卷」の『論註』における反切については、右に挙げた例の他、同じく「行卷」には「膺<sup>一升</sup>反」

〔真蹟集成〕一・五八）、「証卷」には「擗<sup>聽念</sup>反」「擗<sup>聽歷</sup>反」（同三七五）、「樂<sup>五角</sup>反」「樂<sup>魯各</sup>反」（同三八三）、「寓

尤舉<sup>尤舉</sup>」（同三八六）とあり、いずれも『論註』加點本においても割註であるから、『論註』流布本の中で既に

割註であったと考えられるのである。なお、「証卷」『論註』の「漚<sup>食陵</sup>反」は、『淨土三經往生文類』（略本、

『真蹟集成』三・三三二貼紙）引用では同様であるが、親鸞加點『論註』鎌倉時代刊本では「食石<sup>食石</sup>反」（『真蹟集

成』七・三二八）とある。いずれにせよ、原典によるものといえよう。同じく原典によると思われるものが、

右の表の中では、「行卷」元照『觀經義疏』、法然『選択集』、「信卷」曇鸞『論註』、永觀『往生拾因』、<sup>(51)</sup>「真仏

土卷」曇鸞『讚阿弥陀仏偈』、「化身土卷本」『末法灯明記』、<sup>(50)</sup>「化身土卷末」『弁正論』中の割註である。

「行卷」法照『五会法事讚』については、偈文の前に依るべき經典名を掲げ、その直下に細字で偈文の制

作者を示したものであり、表に挙げたもののほか、「依佛本行經 法照」、「依阿彌陀經」「依般舟三昧經 慈愍和尚」、

「依新无量壽觀經 法照」と五つの偈文のうち四つで制作者を細註で示している。同じく『五会法事讚』を書

写した親鸞真筆『見聞集』においては、いずれも本文大に書写されていることから、<sup>(53)</sup>坂東本では明らかに細

註としての位置づけを与えている。

つまり、〈表2-3〉に掲げたものは、坂東本では全て前期筆跡であり、龍樹『十住毘婆沙論』『易行品』の

諸仏名省略、曇鸞『論註』の反切、法照『五会法事讚』の撰者名のほかは、註釈対象語句の意義を示したものである。『論註』の「相反修醬」は、『安樂集』（『大正蔵』四七・一二中）・『選択集』（『大正蔵』八三・二上）などの『論註』同文引用部に反切はないが、親鸞加点の『論註』鎌倉時代刊本では割註で示されている。このような類いのものは、親鸞が所覧本に従って書写した割註であると考えられる。

このように、『教行信証』における割註は、引用原典の形式に基づくもの、訳者・著者を示すもの、字訓註、親鸞が独自に施したものなどに分けることができる。独自の割註形式は、そうした引用原典に見られるように、坂東本前期筆跡の時点で既に採用された、簡潔に重要な字句の意義を示す方法であろうと考えられる。親鸞にとつての割註の前例として注意したいのが、引用の冒頭で六字名号を掲げ、それに細註を附している点で共通した構造が見られる『選択集』と『讚阿弥陀仏偈』の文である。

「行巻」『選択集』引文（標宗の文）

選擇本願念佛集源空集 云 南无阿弥陀佛往生之業念佛爲本

〔真蹟集成〕一・一一三

「真仏土巻」『讚阿弥陀仏偈』冒頭<sup>(54)</sup>

讚阿弥陀佛偈曰 曇鸞和尚造

南无阿弥陀佛釋名无量壽傍經奉贊亦曰安養

〔真蹟集成〕一・四四八〜四四八は一部散逸、『専修寺本』四九二、『縮刷本』六二二

この二文は、「南无阿彌陀佛」の義を割註形式で示し、引用文の前に撰者名を附している点で共通している。<sup>(55)</sup>

南無阿彌陀仏の六字については、親鸞自身も「行巻」六字釈において割註形式で解釈を進めている。六字釈では、善導「玄義分」和会門の六字釈を承けて、「歸言至也」、「説字悦音悦説悦説悦也悦宣悦述悦人意也悦」、「命言

業也招引也使也教也道也信也計也召也

必言 審也然也分極也

「真蹟集成」一・八五」と割註形式で字の音や義を示している。<sup>(56)</sup>

六字釈の坂東本執筆時期は、前期筆跡による「行巻」執筆途中の書改である。<sup>(57)</sup>

また、御自釈でいえば、「後序」にも割註がある。<sup>(58)</sup> 坂東本では前期筆跡の一旦の本文書写後、すぐに引き続き行われた改訂・書改であり、三上皇の諱や関白の法名等を、「太上天皇諱尊成」「今上諱爲仁」「皇帝諱守成」

「禪定博陸月輪殿兼實法名圓照」

と割註形式で示している。こうした人名への注意は、本文引用前後の『無量寿経』異

訳の訳者名、『讚阿彌陀仏偈』などの撰者名、『集諸経礼懺儀』の註記など、典籍に関するものや上下欄外に多くある。

『教行信証』における割註の役割を定義すると、人名・典籍註、音訓註、意義註、引文指示語の四つに分類でき、それぞれ次のような役割を担っていた。<sup>(60)</sup>

① 人名・典籍註：……経・論・釈の訳者・撰者、人名等に関する註記。引用前後や上下欄外に多い。

② 音訓註：……古字書などにより、字の音や訓を示す。上欄外に多い。

③ 意義註：……文あるいは語句の意義を示す。

④ 引文指示語：……文の省略（「乃至」など）や意味上のまとめり（「已上」など）を示す。

本文引用部では、『五会法事讚』の撰者名は①、『論註』の反切は②、「南无阿彌陀佛」の諸釈は③であり、『十住論』の諸仏名省略は④に通じるであろう。

## 第二項 『聞持記』『述文贊』の割註化

一方、引用原典では割註ではないものを、『教行信証』の引用では割註形式で示したものが、憬興『無量寿経連義述文贊』と戒度『阿弥陀経義疏聞持記』に見られる。

「教卷」	『述文贊』：坂東本後期筆跡（『真蹟集成』一・二二一）	『大正蔵』三七・一四七中
「行卷」	『述文贊』：坂東本前期筆跡（『真蹟集成』一・九六）	『大正蔵』三七・一五六下
「信卷」	『聞持記』：坂東本後期筆跡（『真蹟集成』一・二九二）	『浄全』五・六九六上
「真仏土卷」	『述文贊』：坂東本前期筆跡（『真蹟集成』二・四六四）	『大正蔵』三七・一五五中

これらは、経釈の註釈対象語句を挙げ、釈書による解釈をそれぞれ割註化して当てはめており、註釈元の引用経釈からいくつかの文を隔てて配置する点で共通する。

まず、『聞持記』の例を確認し、続いて本節の主題である『述文贊』の事例を見ていきたい。

「信卷」菩提心釈の戒度『阿弥陀経義疏聞持記』（以下、『聞持記』）は、「信卷」菩提心釈・元照『阿弥陀経義疏』第二文（『真蹟集成』一・二二八）に対する『聞持記』の釈を割註化して示したものであるが、元照

『阿弥陀經義疏』第三文「於此惡世…」と用欽引文「說法難中…」を挟んで引用されている。同一釈内の位置づけとしては、他の文を挟んで引用されるところには、「教卷」「述文贊」に通ずるものがある。引用原典は、『浄全』では【疏】 〓元照『小経義疏』と【記】 〓戒度『聞持記』が対照されているが、<sup>(61)</sup>ここでは後に掲げる『教行信証』の文言と対比しやすくするために、『聞持記』の註釈に従った疏文と記文を対照して一覽にしてみよう。その際、参考として『教行信証』引用の元照『小経義疏』も併せて示した。

〈表1-4〉教行信証所引元照『阿弥陀經義疏』／戒度『聞持記』疏文・記文対照

『教行信証』引用 元照『小経義疏』 (『聖典全』一一・九二)	戒度『聞持記』疏文 (『浄全』五・六九六)	戒度『聞持記』記文 (『浄全』五・六九六)
念佛法門 不簡愚智豪賤 不論久近善惡 唯取決誓猛信 臨終惡相 十念往生 此乃 具縛凡愚 屠沽下類 刹那超越成佛之法可謂世間難信也	不簡愚智 不擇豪賤 不論久近 不選善惡 唯取決誓猛信 臨終惡相 十念往生 此乃 具縛凡愚 屠沽下類 刹那超越成佛之法可謂一切世間甚難信也	不下四句所攝之機 愚智則性有利鈍 貴賤則報有強弱 久近則功有淺深 善惡則行有好醜 唯下三句感生行相 臨終惡相即觀經下品下生地獄衆火一時俱至等 十念往生即下生中具足十念等 此則正顯類信之意 具縛者三惑全在故 屠謂宰殺 沽即酤賣 如此惡人止由十念便得超往豈非類信

これらを「信卷」では、

聞持記云不簡愚智

性有  
利鈍

不擇豪賤

報有  
強弱

不論久近

功有  
淺深

不選善惡

好有  
醜

取決誓猛信臨終惡相

即觀經下品中生地  
獄衆火一時俱至也

具縛凡愚

二惑全  
在故

屠沽下類利那超越成佛之法可謂一切世間甚難信也

屠謂宰殺沽即醞売如此明惡人  
止由十念便得超往豈非難信

阿彌陀如來號

眞實明平等覺難思議畢竟依大應供大安慰无等等不可思議光上<sup>巳</sup>

〔眞蹟集成〕一・二二九

と七つの割註で示している。平原晃宗によれば、『浄土宗全書』所収の文とかなり異なった形で引用されており、三カ所の省略、二カ所の読み替え、三カ所の『阿彌陀經義疏』文の省略という特徴があるといふ。<sup>(62)</sup>坂東本では、後期筆跡時、八三歳後半頃の書改であるが、<sup>(63)</sup>周辺が八行書きで統一されているが二二九頁が七行書きであることには、割註形式による書写が関連していよう。その中で、最後の「阿彌陀如來」以下は、『聞持記』原文になく、おそらく『讚阿彌陀仏偈』によって親鸞が附加した文である。「已上」が用いられていることから、『聞持記』に含まれて考えられてきたが、これらは「眞仏土卷」『讚阿彌陀仏偈』〔眞蹟集成〕二・四四八〜四五二のうち、「乃至」以前の前半部分にあたる「稽首眞實明」「稽首平等覺」「頂禮難思議」「稽首畢竟依」「頂禮大應供」「稽首頂禮大安慰」「稽首无等等」「南无不可思議光」と、頂礼・帰依の語がついたものと合致し、<sup>(64)</sup>ここでも『讚阿彌陀仏偈』との関連が指摘できる。

次に、憬興『述文贊』である。『述文贊』は、『無量寿經』の經文の二々に対する解釈を示した釈書であり、各經文を挙げて「述云」などとして私釈を述べる形式で註釈されている。帛延・支謙による異訳大經に注意

し、慧遠や法位の説などを挙げつつ『無量寿経』の文義を註釈したものであって、古辞書の引用が多いこともその特徴に挙げられる。憬興『述文賛』と『教行信証』の比較については、『教行信証』全体の引文を『大正蔵』等と比較した谷川理宣の研究や、『教行信証』における『述文賛』について比較対象しつつ検証した述べた渡辺顕正による研究がある。<sup>(65)</sup> 引用原典との比較対照による検討については比較的多くの論考が認められ、『教巻』などはかなりの文言を省略して再構成していることが特徴である。ここでは原文からの変化について、先行研究によって把握しておこう。

第一に、「教巻」出世本懐の『述文賛』である。<sup>(67)</sup> 「教巻」では、『無量寿経』・『如来会』・『平等覚経』に続く師釈として引用されており、坂東本（『真蹟集成』一・一七〜一八）に一部残存している箇所を含む『無量寿経』五徳瑞現に対する註釈である。渡辺は、経文は竺法護訳ではなく康僧鎧訳であること、『述文賛』の本文は割註でないこと、『教行信証』の割註の内容は、『述文賛』の本文そのものでないことを指摘し、江戸期講録等の解釈によって、「述文賛」の本文を撮要した文を、経文を大書して、その下に割註して、その釈義を挙げることが、教文類は教説を本とするの謂であると云うのは、よく洞察したところの義であるといえよう」と述べている。<sup>(68)</sup>

第二に、「行巻」大行釈・他師引文中、法照『五会法事讚』に次いで引用された『述文賛』のうち第七文である。「行巻」大行釈の引用は、原典と比べてもほぼ省略が無い。<sup>(69)</sup> 「本願力」等は『無量寿経』道樹の文（『大正蔵』一一・二七一上）であり、『無量寿経』の経文にに応じて、『述文賛』の釈を割註化して当てはめている。<sup>(70)</sup>

渡辺は「述文贊の文は全文を細註していないが、今の引用文において挾註することは、經意を了解し易く知らせんがためであろうと思われる」と述べているが、その註釈対象となる『大経』文については「化身土巻」に引用されているという。<sup>(71)</sup>

第三に、真仏土巻の『述文贊』である。<sup>(72)</sup>『無量寿経』第十二願成就文（『真蹟集成』二・四〇〇）における仏十二光についての義註であり、同じく十二光を讃ずる『讚阿弥陀仏偈』と同様の引用意図であろうと思われる。渡辺によれば、『述文贊』本文と「真仏土巻」所引の文はほとんど字句の増減なく引用されており、『述文贊』の註釈をわかりやすくするために、「教巻」と同様の細註形式で出されたことを述べているが、<sup>(73)</sup>超日月光仏については『述文贊』と「真仏土巻」所引では釈意が異なるという。<sup>(74)</sup>

このように、内容としては「教巻」「述文贊」では五徳瑞現について、「行巻」「述文贊」第七文では本願力や願について、「真仏土巻」「述文贊」では十二光についての語句をそれぞれ割字形式で註釈している。これらの引用原典は割註ではないが、『教行信証』引用部では、本文大に書写された經典の語句に対して、一々の随文解釈として直下に細字二行書で示されているのである。しかも原典と対照すれば、かなりの字数を省略している場合もあった。ただし、『述文贊』全文が割註形式ではないこと、『述文贊』以外には『聞持記』にしかこの形式が用いられないことにも注意しなければならない。

以上のような割註化がなぜ行われたのかについて、「真仏土巻」の『述文贊』を取り上げて、『述文贊』割註化の背景を考えてみたい。「真仏土巻」では、十二光の解釈として引用されているが、それに関して既に言

及した『往生要集』等師釈の文の影響があつたと考えられている。<sup>(75)</sup>

源信『往生要集』巻中・大文第五・助念方法のうち、第三対治懈怠の第四光明威神の節には、『平等覺經』に続いて『無量壽經』（双觀經）が引用されている。その中で、玄一『無量壽經記』を十二光の註釈として多く用い、「清淨光仏」・「歡喜光仏」・「智慧光仏」については懐興『述文贊』によつて註釈を加えているのである。

經云、「無量壽佛威神光明、最勝第一。諸佛光明所不能及。或有佛光照百佛世界或千佛世界。取要言之、乃照東方恆河沙佛刹。南西北方四維上下、亦復如是。是故無量壽佛號无量光佛・无边光佛・无礙光佛・无對光佛。玄一師云 无與等故・炎王光佛。玄一師云 最勝自在故・清淨光佛。一云滅三垢故懐興師云 无貪善根所生故・歡喜光佛。一云遇者悅意故 興云无瞋所生故・智慧光佛。一云智慧所發故 興云无癡所生故・不斷光佛。一云恆 相續故・難思光佛・無稱光佛。一云不可稱歎盡其所有 故自餘名義可知不煩記・超日月光佛。若在三途勤苦之處、見此光明、無復苦惱壽終之後皆蒙解脫。非但我今稱其光明。一切諸佛亦復如是。若有衆生聞其光明威神功德、日夜稱說至心不斷隨意所願得生其國。我說无量壽佛光明威神巍巍々殊妙、晝夜一劫尙不能盡。」

已上取意。『平等經』別云「頂光」、『觀經』總云「光明」

〔聖典全〕一・一一二二一

『述文贊』に関しては、法然『逆修說法』第三七日や『西方指南抄』「法然上人御說法」の光明功德の節にも、『述文贊』が引用されている。『西方指南抄』巻上本には、「阿弥陀」の翻訳語としての無量壽仏について十二光仏名を挙げ、無量光・無辺光等について説明する中、

次に清浄光は、人師釈していはく、「无食の善根より生ずるところのひかりなり」。

〔真聖全〕四・七三、〔真蹟集成〕五・九〇)

と、十二光の解釈として『述文賛』を挙げている。<sup>(76)</sup>このように、相承の上でも光明の特に十二光に関して、当初から『述文賛』の「真仏土巻」への引用が想定されていたと考えられる。実際、「真仏土巻」でも、「清浄光仏」の註釈に『述文賛』原文より詳しく註釈していることから、これらの相承に注意していたことが窺える。よって、『述文賛』は「真仏土巻」の当初より、その構成に含まれており、「真仏土巻」一連の執筆の中で記されたと考えてよいだろう。

このように、十二光の意を『述文賛』で示すのは、源信『往生要集』に先例があつて、『往生要集』では『無量寿経』を挙げる中、十二光仏のいくつかについて、玄一『無量寿経記』・憬興『述文賛』の解釈を割註形式で直接挿入している。また、法然の言行録が収録された『西方指南抄』でも清浄光仏について『述文賛』の釈が引用されている。『述文賛』による十二光解釈が源信や法然からの相承であることがわかり、内容面と形態面の両面から、『述文賛』は引用の背景としては七祖からの相承と位置づけることができる。時系列的に捉えれば、『無量寿経』で示された十二光について註釈しているのが憬興『述文賛』である。この『述文賛』を十二光の解釈として依用したのが源信『往生要集』であり、『往生要集』に倣つて『述文賛』を用いているのが法然の法語・伝記等を輯録した『西方指南抄』である。親鸞から見れば〈親鸞↓法然↓源信↓憬興↓『大

『經』と十二光解釈の流れを遡ることができ、こうした系譜を背景として、実際に『教行信証』に『述文贊』が引用されたのである。

では、親鸞の他の著作ではどうだろうか。『教行信証』一連の執筆後は、『浄土和讃』の巻頭に仏名号の異名として『讚阿弥陀仏偈』や『十住毘婆沙論』の語を略出引用している。<sup>(77)</sup>『弥陀如来名号徳』では、十二光について『觀經』や『往生要集』の引用で始まり、『浄土論』、『讚阿弥陀仏偈』を踏まえて註釈している。<sup>(78)</sup>『一念多念文意』や『唯信鈔文意』では、阿弥陀仏について「无导光」「无边光」と示すなどしている。<sup>(79)</sup>

それらと対比すれば、十二光の解釈として主に論書「日」の『讚阿弥陀仏偈』と釈書「云」の『述文贊』のみを用いていることが、『教行信証』の特徴として挙げられる。ここに、『述文贊』が『大経』の註釈書であり、特に「真仏土卷」では十二光を註釈する釈書であるという位置付けが可能となり、『大経』の註釈書として辞書的な役割を込めて引用されたものと考えられる。こうした位置付けにある書を、割字による細註の形式にして示したのは、『述文贊』には『大経』の註釈書としての役割があることを明確に示す目的があったのではないだろうか。坂東本では六字釈を除いて字句の訓註は上欄外の頭註に示されている。同じように、字句の義註としての役割から『述文贊』の文を割註の形式にしたと考えられる。特に「真仏土卷」については、先ほど挙げた『往生要集』に見られるような十二光を挙げつつ、それぞれに註釈を施すという先例に倣い、『往生要集』では三つしかなかったものを十二光すべてに註釈を与える形式にし、さらに『大経』の經文に挿入するのではなく、「憬興師云」という独立した書として引用している。

親鸞周辺では、真仏書写の『経釈文開書』や『憬興師云』にも『述文賛』割註化の例がある。<sup>(80)</sup>本文中で、原典の構文を変容しつつ、經典の註釈を細字・割註化して示すことで、経言に対する随文的な註釈内容が視覚的に示される効果が期待される。經典の語を中心に組み立てる中に、原形を失う方法を許容しうるだけの意義を『述文賛』等に認め、註釈書としての位置と役割を明確化していたのではなからうか。

そこで注目されるのが、体裁的特徴であり、親鸞は源信『往生要集』の経文註釈の方法を踏襲し、発展的に取り入れることで、『大経』の経文を註釈的に示す方法を見いだしたと考えられるのである。親鸞の独自性は、内容面では玄一『大経記』が主体であった源信の註釈を、全て『述文賛』に置き換えたことが挙げられる。一方、体裁面では、源信はあくまで經典の引用の中で註釈文を挿入していたのであるが、親鸞は『述文賛』の引用として、註疏の引用においてその方法を取り入れていることである。それは、「真仏土巻」冒頭で引用される第十二願成就文に手を加えることなく、「真仏土巻」の経証として配置し、その経文と註疏との相互の独立性を崩さなかったことに、親鸞による經典・論書・釈書・釈書に対する態度が見いだせる。『無量寿経』『述文賛』それぞれの独立性を担保して引用しつつ、その関連性を視覚的に示すことが『述文賛』割註化の意義であった。これは、源信『往生要集』と比較したことで見いだされる、親鸞によるテキスト関係把握の特徴の一つといえることができる。

以上の書写法が認められるとして、経文自体に対する註釈を割註として示していた『述文賛』の書写法が〈経文―註文〉の関係において行われたものだとすれば、『聞持記』の引用についても同様に〈疏文―註文〉

という関係において、原文それ自体を説明するとき用いるべき手法として用いられていると考えられる。なお、書写した字句自体に対する註釈・解釈について、割註化して本文と考える場合、これは後の版本における形式ともいうことができる。正応四年版本においては、坂東本上欄にあった註記について本文に狭註化されたと考えられており、その形式については、存如授与本にも見られ、江戸期版本でも踏襲されることになる。親鸞による『述文贊』割註化は、註釈対象とすべき字句に対する解釈という意味において、版本作成者における坂東本上欄註記の本文狭註化に発展しえた書写法であったという第二の意義も想定される。

### 第三項 『述文贊』の書写法

さらに、親鸞の採用した『述文贊』割註化の実態について、鎌倉三本を比較しながら検討したい。

第一に、「教巻」引用部では、鎌倉三本はそれぞれ、次のような字割で書写している。

〈坂東本〉

諦聽 上巳 憬興師云今日世尊住

奇特法 依神通輪所現之相非 唯異常亦无等者故 今日世雄

住佛所住 住普等三昧能制 衆魔雄健天故 今日世眼住

導師行 五眼名導師行引 導衆生无過上故 今日世英住最

勝道 佛住四智獨 秀无匹故 今日天尊行如來德

〈専修寺本〉

上巳 憬興師云今日世尊住奇特法 依神通

輪所現之相非唯異 常亦无等者故 今日世雄住佛所住 住普等 三昧能 制衆魔

雄健天故 今日世眼住導師行 五眼名導師 行引導衆生

无過 上故 今日世英住最勝道 佛住四智獨 秀无匹故

今日天尊行如來德 即第一義天以 佛性不空義故 阿難當

〈西本願寺本〉

.. 憬興師云

今日世尊住奇特法 依神通輪所 現之相非唯

異常亦无 等者故 今日世雄住佛所住

住普等三昧能制 衆魔雄健天故 今日世眼住導

師行 五眼名導師行引 導衆生无過上故 今日世英

即第一義天以 阿難當知如來正覺 即奇特之法  
 佛性不空義故  
 慧見无導 述最勝之道 无能遏絕 即如來之德  
 上 已 尔者則此顯眞實教明證也

〔真蹟集成〕一・二二

知如來正覺 即奇特之法 慧見无導 述最勝  
 之道 无能遏絕 即如來之德 已上 尔者則此顯眞  
 實教明證也 誠是如來興世之正說奇特

〔專修寺本〕二〇

住最勝道 佛住四智獨秀无匹故 今日天  
 尊行如來德 即第一義天以佛性不空義故 阿難  
 當知如來正覺 即奇特之法 慧見无  
 導 述最勝之道 无能遏絕 即如來之德  
 上 已 尔者則此顯眞實教明證也

〔縮刷本〕二〇

坂東本では後期筆跡箇所にあたり、八つの割註で示されている。坂東本のみが行を跨いで割註を書写することがない点が特徴的である。引用冒頭の「憬興師云今日世尊住」の行の字数を少なくすることによって、後の割註が行を跨ぐことが無いよう配慮されていることが窺える。引文指示語「上」を次行に送っているのであるが、坂東本で『述文贊』引用の割註に含めないことを明示するために行った措置であると考えられる。後期筆跡による書改によって、このように整った形式となったのであろう。専修寺本では七つめの「述最勝之道」が割註となっておらず、七つの割註となっている。最後の「上」を割註としないのは、坂東本と同じ意味を有しているが、異なる形式となって現れている。西本願寺本は、一行字数が少なく書写されているが、最後に「上」で改行して次行に「上」を置く点は、坂東本を臨写した姿が窺える。

第二に、「行巻」第七文引用部では、鎌倉三本はそれぞれ、次のような字割で書写している。

〔坂東本〕

違逆即往也又云本願力故即往

誓願誓願 満足願故願无 欠故求之不 明了願故虚故

堅固願故緣不能 究竟願故必果遂

〔真蹟集成〕一・九六

〔専修寺本〕

也又云本願力故即往誓願之力 満足願故願无 欠故

明了願故求之不 堅固願故緣不能 究竟

願故必果遂 又云惣而言之欲令凡小増欲

〔専修寺本〕一〇二

〔西本願寺本〕

違逆即易往也  
・又云

本願力故即往誓願 満足願

故願无 明了願故求之不

堅固願故緣不能 究竟願故

必果遂 故  
・又云惣而言之欲令

〔縮刷本〕一二八

坂東本は前期筆跡時に書写された五つの割註である。重見は、坂東本の当箇所周辺について、書改ではなく、『真蹟集成』一・九二まで書写したが、しばらく日をおいて書き継がれた可能性を指摘しているが、坂東本の一連の本文の段階で註釈書の割註化がなされたということができ(81)る。割註の内容については、専修寺本が最も整っているようにも見えるが、坂東本・西本願寺本の最後の割註「必果遂故」が均等割になっておらず、西本願寺本では「即往誓願」についても左右均等では無い。いずれも坂東本の状態を書写しようとした結果であろうが、坂東本では割註対象の字数と行末の余白を見て適宜折り返されているようである。また、坂東本では朱筆による訓点が補われていることも特徴である。

第三に、「真仏土巻」引用部では、鎌倉三本はそれぞれ、次のような字割で書写している。

〔坂東本〕

號曰无上涅槃 已上抄出 憬興師云无量光佛  
非竿 无边光佛 无縁不照故 无寻光佛 无有人法而能  
數故 无對光佛 非諸菩薩之所及故 光炎王佛 光明自在  
鄣 更无爲 清淨光佛 從无貪善根而現故亦除  
故 之心故 歡喜光佛 從无瞋善根而生故能 智  
云清淨 慧光佛 從无癡善根心起復 不斷光佛 佛之常光  
恆爲照 除衆生无明品心故 難思光佛 非諸二乘 无稱光佛 亦非餘乘  
益故 等所堪 超日月光佛 日應恆照不周 娑婆一耀之光故 皆  
說故 是蒙光觸身者身心柔濡願之所致也 已上抄 余者

〔真蹟集成〕二・四六四

〔専修寺本〕

彌陀妙果號曰无上涅槃 已上抄出 憬興師云无  
量光佛 非竿 无边光佛 无縁不照故 无寻光  
佛 无有人法而能鄣故 无對光佛 非諸菩薩之所及故 光炎王佛  
光明自在 更无爲上故 清淨光佛 從无貪善根而現故亦除  
衆生貪濁之心也亦貪濁之心故云清淨 歡喜光佛 從无瞋善根而生故能 智慧光佛  
除衆生瞋恚盛心故 從无癡善根心起復 不斷光佛 佛之常光 難思光佛  
除衆生无明品心故 非諸二乘 无稱光佛 亦非餘乘 超日月光佛  
所側度故 日應恆照不周 娑婆一耀之光故 皆  
是蒙光觸身者身心柔濡願 之所致也 已上抄出 余者如來眞說宗師釋義明知

〔専修寺本〕五〇八

〔西本願寺本〕

成就 憬興師云 无量光佛 非竿 无边光佛 无縁不照故  
无寻光佛 无有人法而能鄣故 无對光佛 非諸菩薩之所及故  
光炎王佛 光明自在 更无爲上故 清淨光佛  
從无貪善根而現故亦除 衆生貪濁之心也亦貪濁之心故云清淨  
歡喜光佛 從无瞋善根而生故能 智慧  
除衆生瞋恚盛心故 從无癡善根心起復 不斷光  
佛 佛之常光 難思光佛 非諸二乘 无稱光佛 亦非餘乘 超日月光  
佛 日應恆照不周 娑婆一耀之光故 皆是蒙光觸  
身者身心柔濡願之所致也 已上抄出

〔縮刷本〕六四三

坂東本の当箇所は、おそらく前期筆跡による一連の「真仏土巻」本文執筆後、あるいは「化身土巻末」までの執筆後の切り継ぎ改訂と推定されている。<sup>(82)</sup>袋綴を切り開いて現れた裏面に書き入れ、当初は繋がっていた『法事讃』と真仏土結釈の間、師釈の末尾に『述文賛』を組み込むための改訂と考えられる。

鎌倉三本において書写法で特徴的なのは「從无貪善根而現故亦除衆生貪濁之心也无貪濁之心故云清淨」の割註である。坂東本では、行を跨いで

書写されているが、専修寺本では右行に「從无貪善根而現故亦除」と坂東本の右行終わりの文字で折り返したために、左行は「衆生貪濁之心也无貪濁之心」までしか右行と対応せず、「故云清淨」は左行の直下にそのまま続けて書写している。他の十二光の割註化における原典からの文言の変化を考えれば、「故云清淨」については引用原典からの割註化の際に削除すべき文言であるとも考えられ、それを専修寺本では割註左行の余分な字として書写している可能性がある。

坂東本では削除されることはなく、『教行信証』本文として伝えられてきている。坂東本を臨写したと推定される西本願寺本になると、「清淨光佛」の割註に一行を費やし、専修寺本と同様に右行に「從无貪善根而現故亦除」と坂東本の右行終わりの文字までを書写し、左行に「衆生貪濁之心也无貪濁之心故云清淨」と写しているが、左右の字数を気にせずそのまま続けて書写し、右行と比べて左行が六字多くなっているのである。西本願寺本においては、他にも「无邊光佛」に対する「无緣不照故」、「无對光佛」に対する「非諸善薩之所及故」、「炎日應恆照不周王光佛」に対する「光明自在更无爲上故」、「佛之常光不斷光佛」に対する「恆爲照益故超日月光佛」に対する「娑婆一耀之光故十二光のうち半数に及ぶ割註において、左行の字数が右行より多い結果となっており、坂東本より

もむしる専修寺本の字割に近いと思わせる書写を行っている。坂東本の文字を書写しながら、他本の情報にも注意して書写している姿が窺えるのである。

### 小結

親鸞が引用文を「言」「曰」「云」に分けて引用することは、よく知られることであるが、本章での検討により、そうした書物としての独立性を確保しつつ、独立して引用された書物間の有機的な関係性が、經典・論釈の引用法や法位の引用に見られる書名や人名への注意、『述文賛』に見られる割註化に見られることが明らかとなった。引用文間の関係性を鑑みれば、『無量寿経』を中心とした引用体系が導き出せるところであるが、これらを基底に、坂東本の状態や現存する親鸞真蹟など周辺諸文献に視野を拡げたところに、『教行信証』のテキスト体系が明らかとなる。これまでの研究の中で、様々な視点から引用文について検証されてきたが、『教行信証』という枠組みの中で引用文の関係を考察する場合、配列や対応関係などについて、坂東本の改訂状況を精査しつつ検討を加えなければならない。

御自釈での言及に着目すれば、経・論・釈という従来考えられてきた枠組みとは別に、經典と論釈という区分で引用文を把握する視点が得られる。そうした視点で引用法に着目すれば、經典と論釈との引用法には

異なりが見られ、經典名に願名・願成就文名、訳者名を添えていく經典と、人名と書名とが複雑に交錯する論釈という分け方が一定程度可能であることがわかった。その中で連続引用の用例を見渡せば、区別されて引用されるはずの『無量寿経』と『平等覚経』『大阿弥陀経』、天親『浄土論』と曇鸞『論註』、馬鳴『起信論』と飛錫『念仏三昧宝王論』、善導疏と法照『五会法事讚』が、一連の文として引用される例があり、書名と訳者・制作者が必ずしも合致しない、より柔軟な態度を以て諸テキストの関係を捉えられていた。

そこで着目したのが、『教行信証』における經典の中心である『無量寿経』を、論釈の立場で註釈した法位『無量寿経義疏』と憬興『無量寿経連義述文贊』である。法位『無量寿経義疏』は現在では散逸しているが親鸞・存覚の時代には存在していたと推定されるという、現代の研究状況からすると扱いの難しい書物であり、その理解は存覚『六要鈔』以降発展した形跡がなかった。しかし、近年次々と公開されている目録等の史資料を取り入れることで、引用の背景に着実に迫っていくことが可能であり、こうした散逸本についても、諸分野の研究成果との連絡を図ることで、着実に研究を進めていくことができるため、今後の研究の課題としたい。

さらに、『述文贊』については、原則として引用原典の文を忠実に書写することが多い中で、割註化が散見される。「真仏土巻」では、『述文贊』は『讚阿弥陀仏偈』に次ぐ十二光讚であるが、註釈の内容としては既に『述文贊』引用による十二光解釈のある『往生要集』や『西方指南抄』の説示を承継ぎつつ、原典の構文を大きく変容した特殊な書写法が採られ、『無量寿経』文に対する随文解釈的な註釈書として引用しながら、

經典の語句と註釈内容の双方が視覚的に示されていた。さらに「真仏土卷」の三つの割註箇所から、坂東本においては前期筆跡における一連の本文執筆時には既に割註形式が用いられているが、後期筆跡時に書写形式が整えられたであろうことが推測された。また、専修寺本や西本願寺本では、坂東本の字割を参考として書写しようと試みているが、書写にかなり苦慮しているようであって、割註の原案者・親鸞は明確な意図を持って坂東本に書き写したと考えられるが、それを書写または転写していった専修寺本や西本願寺本の書写者については、坂東本とは異なる字詰で書写している経緯もあって、坂東本（祖本）の情報を保持しつつ、自身の裁量によって書法を選択しなければならぬ状況であった。坂東本の字割に大方は従いつつ、訓読上の観点から右左行の字割を適宜変更したのが専修寺本であり、坂東本の視覚化という目的を忠実に書写しつつ、体裁上の問題が生じた場合に専修寺本のような諸本を参照して書写したのが西本願寺本であった。坂東本の書写法からは、引用の際の注意や体裁の意図が垣間見れるが、同一箇所における専修寺本や西本願寺本の書写行為に着目することで、当初の書写者とそれを享受する者の間で、状況に応じた変化が生じていたことが判明した。他者によって再び書写されたときに、改変が起きていることは注目すべき事態である。

(1) 「顕浄土真実教行証文類」の題号について、『六要鈔』では総序釈において「先釋題中十一字内、初之一字與後三字能釋之詞、中間七字所釋之法」（『聖典全』四・九九七）と述べて「顕」「文類序」を能釈の詞、「浄土真実教行証」を所釈の法としている。さらに「文類」について『広韻』『玉篇』を挙げたのち、「種類相似。類聚所明其教行證之文故也。」（同九九八）としており、教行証を明かす文を集めたことから文類と名付けると述べている。なお、「文類」という形式については、宮本正尊「教行信証の基本構造、自釈・文類・自伝」（『印仏研』一八二、一九七〇）、三木彰円「親鸞の思想課題における「文類」形式の考察」（『真宗研究』四七、二〇〇三）などの論考がある。

(2) 松沢和宏『生成論の探求―テキスト・草稿・エクリチュール』（名古屋大学出版会、二〇〇三）二七頁参照。

(3) 松沢和宏前掲書二七頁によれば、「間テキスト」とは広義の引用関係にある処々のテキストの総称を指す。

(4) 中井玄道『教行信証附録』一三三～二六八頁。これは、「教行信証引文の体例」（『六条学報』一八七～一九三、一九一七）全五回に基づいたものである。

(5) 中井玄道『教行信証附録』二六九～三三〇頁。

(6) 山田龍城・福原亮厳「親鸞教学とその著作中の引用書」（『龍谷大学論集』三六五・三六六、一九六〇）。

(7) 仏教大学宗教文化ミュージアム平成二十六年秋期特別展『縮刷藏経から大正藏経へ』において研究発表された梶浦晋「日本近代出版の大藏経と大藏経出版」（三〇～四三頁）には、高楠順次郎や渡辺海旭が掲げた『大正藏』の五大特色を次のように評している（三七頁）。

内容の特色として、特筆すべきものに、新しい分類の採用が挙げられる。従来の大藏経が『開元釈教録』や『閲藏知

津」など伝統的な仏教観に基づいた分類配列をおこなってきたのに対し、『大正蔵』では大乘・小乗の区別をとらず、阿含部を首に置く近代仏教学の成果を基礎とした分類を用いている。

(8) 『集諸経礼懺儀』の引用については、『往生礼讚』との関連で研究が重ねられている。井上見淳「親鸞聖人と『集諸経礼懺儀』」、『龍谷教学』四一、二〇〇六)、能島覚「親鸞の用いた『往生礼讚』をめぐる」、『日本古写経善本創刊第四輯 集諸経礼懺儀卷下』所収、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇一〇) 参照。

(9) 堀池春峰「仏典と写経」(堀池春峰著・東大寺監修『南都仏教史の研究 遺芳編』所収、二〇〇四)によると、天平十二年(七四〇)五月一日の願文を有する光明皇后一切経は『開元録』によっており、宮崎健司「法隆寺一切経と『貞元新定釈教目録』」(伊東唯真編『日本仏教の形成と展開』所収、二〇〇二)や大塚紀弘「一切経書写と仏典目録―愛知県新城市徳雲寺平安古写経の分析から―」(『日本における宗教テクストの諸位相と統治法』所収、名古屋大学大学院文学研究科、二〇〇八)などによれば、『貞元録』をもととした一切経写経事業が知られる。

(10) 鳥越正道『最終稿本教行信証の復元研究』(法藏館、一九九七)第一部第三章「教行信証の〈引文導入語〉についての考察」(二二二頁) 参照。

(11) 鳥越正道前掲書二二二頁参照。

(12) 鳥越正道前掲書二一七頁参照。

(13) 藤場俊基『親鸞の教行信証を読み解く』全五冊(明石書店、一九九八〜二〇〇二)、武田晋「信卷」の構造について―書誌的視点と本願成就文受容形態を中心として」、『龍谷大学論集』四五六、二〇〇〇)、同「行卷」の構造について―書誌的視点を中心として」、『真宗学』一一一、二〇〇五)、同「真仏土卷」の構造について―書誌的視点と報仏土の問題を中心として」、『龍谷大学論集』四七一、二〇〇八)、同「化身土卷」(本)の構造について―書誌的視座を中心として」、『真宗学』

(14) なお、親鸞のテキスト環境を考察する場合、非引用文献にも目を向けなければならない。非引用文献に関しては、木村邦和『教行信証』信巻所引の「大般涅槃經梵行品文における非引用部分について」（『新鴻親鸞学会紀要』五、二〇〇八）や淺田正博「學術講演 親鸞聖人における天台用語の依用について―なぜ『本典』中に『法華經』の引用がないか、をめぐって」（『行信学報』二二、二二〇〇八）、同『教行信証』になぜ『法華經』が引用されなかったのか―天台教学との関連において」（『真宗研究会紀要』三〇、一九九八）など、經典毎の非引用についての所論がある。また、『教行信証』の註釈書である『六要鈔』には、『教行信証』で省略された文や、引用文の周辺、非引用文献について多く言及されている。『六要鈔』の註釈における全体的な註釈傾向としては、管見の限り、次のような註釈法を採っている。

- (1) 『大經』の解釈には、諸師の大經疏を用いる。
- (2) 異訳大經の特に『如来会』は『大經』と同意としつつ、字句の異なりを解釈する。
- (3) 短文などの場合に、解釈しない場合がある。
- (4) 『涅槃經』や釈書の解釈では、『大經』との対応箇所を述べる場合がある。
- (5) 經典であれば訳者、釈書であればその略伝を載せる場合がある。
- (6) 引用文の前後の文や、省略箇所を挙げる場合がある。
- (7) 古字書における漢字の音義を挙げる場合がある。

これらのうち、特定の書目に注目すれば、『大經』の註釈書としては、淨影寺慧遠『無量寿經義疏』、憬興『無量寿經連義述文贊』、義寂『無量寿經述義記』を中心に、法位『無量寿經義疏』、吉藏『無量寿經義疏』などが対比される。師釈においては、『浄土論』『論註』には智光『無量寿經論釈』が用いられ、「善導五部九卷」には他巻での引用文との関連が述べられる。

これらは少なくとも『教行信証』テキストを解釈する上で用いられてきた関連文献として捉えることができ、『教行信証』テキストと相互的な関係のあるものとして位置づけておきたい。

(15) 論師や祖師について、親鸞真筆消息には「天竺の論家、浄土の祖師のおほせられたることなり」（『聖典全』二・七四三）、

「聞見る〔候〕にあかぬ浄土の御〔聖〕教も、…今師主の〔御〕教によりて…」（同七四九）と示されている。

(16) 坂東本当該箇所目標本は現存せず、西本願寺本（『縮刷本』一二）、専修寺本（『専修寺本』一三）による。

(17) 『阿弥陀経註』（『真蹟集成』七・七八〜八二、一四五〜一四六）には表書き裏書きともに朱筆で行間に『称讚浄土経』文が

書写されている。なお、この朱筆については、墨書による書き入れよりやや時代が下ると推定されている（『真蹟集成』七・解説参照）。

(18) 坂東本（『真蹟集成』一・二三九）では割註、西本願寺本（『縮刷本』三三三）では同じように「大阿彌陀經友謙三言」とあるが「言」の上「三藏譯」と補記されている。専修寺本では「大阿彌陀經言／友謙三藏譯也」（『専修寺本』二六七）と「言」の次行

冒頭に割註で示し、「也」を加えている。

(19) 『縮刷本』六。

(20) 『聖典全』二・二九〇〜二九一。なお、『大阿彌陀経』の訳者名「支謙三藏譯」について、『聖典全』校異によれば、底本（存覚書写本）では左傍註記「友〔御點〕」があり、対校本甲（専修寺藏頭智書写本）では「友謙三藏譯」である。

(21) この箇所の『大経』の文「會當成佛道廣度生死流」（『聖典全』九二・七）については、渡辺顕正前掲書一〇八頁は『述文贊』の経文と一致することを以て失訳である竺法護訳『無量寿経』と推定しているが、渡辺自身が註に示しているように、この文言を有する大蔵経あるいは書写本（『大正蔵』一二・二七三中校異〔宋明元三本〕、『聖典全』一・四七校異②宋明元版・正平本）が存在しているため、ここでは康僧鑑訳と考えておきたい。

- (22) 「証卷」 眞実証釈の『浄土論』引用については、『浄土三経往生文類』（『聖典全』二・五八三）にも同様の引用順が見られる。
- (23) なお、『華嚴経』「入法界品」の文（「信卷」 大信釈、『聖典全』二・七八）は『往生要集』の文として引用されており、經典の文が釈書として引用される場合がある。これも含めた『教行信証』における子引の在り方については、どういった基準でなされているのか未だ不明な点も多く残っていると考えられる。今後の課題としたい。
- (24) 藤田宏達『浄土三部経の研究』（岩波書店、二〇〇七）五五〇頁参照。
- (25) 恵谷隆戒「新羅法位の無量寿経義疏の研究」（『浄土教の新研究』所収、山喜房佛書林、一九七六）。以下、恵谷隆戒前掲論文と示す。
- (26) 法位には『観無量寿経疏』もあった可能性もあるが、江戸期目録の言及に限られるため、誤伝の可能性もある。『浄土教典籍目録』（仏教大学総合研究所、二〇一一）一九六頁参照。
- (27) 石田茂作『写経より見たる奈良町仏教の研究』（東洋書房、一九八二）所収付録「奈良朝現在一切経疏目録」による。同附録九八頁の通番号一八九四に「无量寿経疏 法位師」とあり、『大日本古文书』一七・一一九頁に示されている。なお、本書は東洋文庫一九三〇年刊の新装版である。
- (28) 恵谷隆戒前掲論文。
- (29) 恵谷隆戒「新羅法位撰無量寿経義疏復元について」（『浄土教の新研究』所収、山喜房佛書林、一九七六）。以下、恵谷隆戒復元本と称す。なお、恵谷隆戒復元本については、『韓国仏教全書』第二冊新羅時代篇二（東国大学校出版部、初版一九七九、再版一九九〇）所収本の底本として用いられている。
- (30) 深貝慈孝「新羅法位浄土教の研究」（戸松啓真教授古稀記念論集刊行会編『戸松教授古稀記念 浄土教論集』所収、大東出版

社、一九八七)。

(31) 愛宕邦康「新羅浄土教における『観無量寿経』の位置づけ——惠谷隆戒説への疑問——」(『印仏研』六一一、二〇一二)。

(32) 国際仏教大学院大学『日本古写経善本叢刊第五輯 書陵部蔵玄一撰無量寿経記 身延文庫蔵義寂撰無量寿経述義記』(国際仏教大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇一三) 所収の「書陵部蔵新羅玄一撰『無量寿経記』巻上解題」(三頁)によれば、「法位云」として十三回の引用があるとされる。法位の引用について、同解題では、

玄一が「法位云」として十三回も引用するのは、惠谷氏が指摘しているように、やはり法位を重視し、依拠しているといえる。他方で法位にはない特徴として『称讃浄土仏撰受経』「玄奘云」「基法師云」など、新訳経典、あるいはその新訳の訳者や弟子を引用している点があげられる。玄奘は六四五年に長安に戻り翻訳事業に着手しているので、法位と玄一との生存年代を隔てる一つの基準となり得よう。つまりこれまでは「七世紀頃」とされてきた法位の生存年代は、その没年を七世紀中頃以降に設定できる。

また玄一は、『往生論』を法位よりも多い、十八回も引用するが、これは偈頌のほぼ半数を『無量寿経』に対応させている。懐興も『往生論』を多く引用はするものの玄一ほどではない。これもまた玄一の特徴としてあげられよう。

と、玄一『無量寿経記』との比較の中で法位の生存年代や引用書の特徴が指摘されている。なお、同解題は、南宏信「新羅玄一撰『無量寿経記』諸本の系譜——書陵部蔵奈良朝写本を中心として——」(『国際仏教大学院大学研究紀要』一七、二〇一三)としても公開されている。

(33) 『理趣秘要鈔』について、『仏書解説大辞典』第十一卷一九二頁によれば延文元年(一二三五六)の成立で、大意・釈名、入材料簡の三段に大別して『理趣釈』を釈したものであるという。

(34) 落合俊典「真福寺蔵承暦元年写『阿弥陀仏経論並章疏目錄』について」(『仏教文化研究』四七・四八、一九九二)。

- (35) 同書所収の落合俊典「平安時代における入蔵録と章疏目録について」によれば、重要美術品指定の『大小乗律論疏目録』といわれる目録があったことは博物館・美術史界には知られていたが、仏教学では注目されなかったという。龍大図書館の平春生が着目し、昭和二十二年（一九四七）に書写したものが龍谷大学図書館に伝わっていたが、近年同本の存在に気づいたのが梶浦晋であり、京都国立博物館に寄託されている法金剛院本を調査したことで広く知られるようになったとされる。
- (36) 落合俊典「興福寺と法金剛院蔵の章疏目録」（『日本における宗教テキストの諸位相と統治法』所収、名古屋大学大学院文学研究科、二〇〇八）。
- (37) 落合俊典「七寺蔵『古聖教目録』に見える浄土教章疏について」（『仏教文化』三七、一九九二）。
- (38) 福土慈稔『日本仏教各宗の新羅・高麗・李朝仏教認識に関する研究』として、次の書が刊行されている。
- 第1巻『日本天台宗にみられる海東仏教認識』（身延山大学東アジア仏教研究室、二〇一一）
- 第2巻・上『日本三論宗・法相宗にみられる海東仏教認識—三論宗の部—』（身延山大学東アジア仏教研究室、二〇一二）
- 第2巻・下『日本三論宗・法相宗にみられる海東仏教認識—法相宗の部—』（身延山大学東アジア仏教研究室、二〇一二）
- 第3巻『日本華嚴宗にみられる海東仏教認識』（身延山大学東アジア仏教研究室、二〇一三）
- なお、第3巻編集後記によれば、平成二十八年（二〇一六）以降に続刊が予定されており、第5巻として『鎌倉期及び鎌倉期以降成立の諸宗にみられる海東仏教認識』が刊行であるという。法然門下や親鸞、及び同時代における新羅撰述『無量寿経』註釈書についての体系的研究が発表されることと期待される。
- (39) 福土慈稔前掲書第一巻八二頁。
- (40) 恵谷隆戒前掲論文。
- (41) 恵谷隆戒前掲論文によれば、法位は「四十八願を十三に分類し、各に願名を附しているのであるが、これはただ義に約して、

同類の願を集めて十三に分類したまでで、深い意義があつたものとは考えられない」としながら、「後世に至るに従つて語調を整え、平安・鎌倉の時代になれば、四字一句を以て願名を表わすようになって来るのである」としている。『教行信証』では第十一願・第十二願・第十三願・第十七願・第十八願・第十九願・第二十願が標挙として掲げられているが、恵谷復元本によれば、それぞれ「住定聚」・「光無限」・「寿無限」・「自身有善名」・「十念成」・「但令発心修福」・「聞名称讚修徳廻向」を願じたものであると法位は理解していた。なお、『六要鈔』にも「真仏土卷釈」(『聖典全』四・一二〇三)などに、諸師による願名を列挙している場合が見受けられる。

(42) 梯信暁『宇治大納言源隆国編 安養集 本文と研究』(百華苑、一九九三) 五五二頁。

(43) 江戸期講録として、『真宗全書』『真宗大系』『続真宗大系』所収の諸書では、善護『顕浄土真実行教行証文類敬信記』巻五が「法位ノ大經ノ義疏ハ、六要主ノ時迄ハ傳ハルト見ヘタリ。今ハ傳ハラザルナリ。コノ法位ノ疏ノミナラズ、玄一・義寂、此等ノ疏モ傳ラズ。又法位ノ傳詳ナラズ」(『真宗全書』三〇・三〇五)と述べ、同様の内容は、『広文類解読記』(『真宗大系』一三・三八三)にも示されている。芳英『教行信証集成記』巻一四(『真宗全書』三三・二七〇)では、「法相祖師」に着目して考察している。法相宗は玄奘以降、慈恩大師・淄州大師慧沼・樸陽大師智周と相承されてきたが、慈恩大師『西方要決』が法然『選択集』に引用されていることから、おそらくは法相宗第二祖慧沼・第三祖智周の門人ではないかと推察している。次に、法海説・円龍記『本典指授鈔』巻四には、「闕本。近頃深叻講師梅尾ノ藏本寫得ス」(『真宗全書』三四・一三〇)と、高山寺藏本の存在を示唆している。僧録『本典一諦録』(行卷)第二席(『真宗叢書』七・一一二頁)は、了慧が引用していることを述べている。その他、次に挙げる書では主に『六要鈔』によって略述されるのみであった。

頓慧『教行信証報恩記』卷三(『真宗全書』二二・八四) … 『六要鈔』の「大經義疏上卷釋也」を挙げる。

興隆『顕浄土真実教行証文類徴決』卷五(『真宗全書』二二・二二五) … 吉蔵引文の助頭とする。

玄智『頭淨土真実教行証文類光融録』卷十(『真宗全書』二四・二五四)：『浄土真宗教典志』と同内容。

僧叡『教行信証文類随聞記』卷六(『真宗全書』二六・二三七)：吉藏引文と同じく称名即得罪消除の文とする。

柔遠『教行信証頂戴録』卷二(『真宗叢書』七・三〇)：「上の滅罪の義を釈す」とのみ示す。

円月『本典仰信録』卷二(『真宗全書』七・二七六)：「全徳施名の義を以て滅罪生善の徳を顕す」としている。

義山『教行信証摘解』卷二(『真宗叢書』八・五〇二)：伝記未詳とし、僧鎔の説を引いて、了慧の引用を指摘する。

慧琳『教行証文類六要鈔補』卷四(『真宗全書』三七)：『六要鈔』の文を挙げる。

鳳嶺『広文類聞書』卷三(『真宗大系』一六・八八)：具体的な講釈無し。

宣明『真実行文類聞誌』(『続真宗大系』五・二一五)：『六要鈔』による。

法住『教行信証金剛録』行卷(『続真宗大系』七・二六七)：伝記未詳、大経疏ありというのみ。

さらに、『無量寿経』講釈には、道隱『仏説無量寿経』に「因辨此経末釋者、元曉淨影嘉祥玄一義寂等各有註疏」(『真宗全書』一・二二)、『無量寿経頭宗疏』玄概に「次明釋此經者、論則有天親菩薩無量壽經論。解即有淨影・嘉祥・法位・玄一

・義寂・知玄・環興・元曉等疏。其中現行于世者、唯影・祥・曉・興・四家疏耳」(『真宗全書』二・四)、『大経安永録』卷一に「他宗解釋、有淨影二卷・嘉祥一卷・元曉一卷・憬興三卷。此四部現存肆行。依被淨侶、其他有悟達二卷・僧徹二卷

右一部出宋僧  
傳六之二十三紙

『大無量寿経庚寅録』卷一に「又震旦ニ於テ他師ノ註釋ハ義天録・長西録ニ依ルニ、凡ソ十餘部アリ。其中今此方ニ傳ハル

モノハ淨影ノ義疏二卷、嘉祥ノ義疏一卷、元曉ノ宗要一卷、憬興ノ述文贊三卷、玄一ノ記一卷、已上五部ナリ。其餘ノ義寂

・法位・悟達・僧徹等ノ著述ノ末疏ハ、今ハ亡ビテ傳ラズ。右五部ノ中玄一ニ記ハ中古久シテ世ニ伝ラザル所ニ、先年私共  
梅尾高山寺ノ明惠ニ藏ヲ探シテ幸ニ玄一ノ記一卷ヲ得タルコトナリ。下卷ハ亡ビテ上卷バカリ存シテアリ。直様ソレヲ寫シ

取リタルコトナリ。…：淨影ハ地論宗、嘉祥ハ三論宗、元曉ハ華嚴宗、憬興・玄一ハ法相宗、所謂山ニ棧スルモノハ海ヲシラザルノ風情ニテ、右五部ノ疏ハ淨土眞宗ノ大經ヲ窺フ規矩トハナシガタシ」(『眞宗大系』一・六六)とある。

『本典指授鈔』に深励による法位『無量寿経疏』書写本、『大経庚寅録』に玄一『無量寿経記』の書写本がいずれも梅尾高山寺にあつて、写得されたことを述べていることの真偽は定かではないが、その原本あるいは所引の文が確認することのできる状況が迫っていたことを示している。しかしその内容については、伝本を披見したと考えられる親鸞あるいは存覚以上に知られることはなかつたといえる。

(44) 重見一行『教行信証の研究—その成立過程の文献学的考察』(法藏館、一九八二)三〇五頁。

(45) 赤松俊秀「教行信証の成立と改訂について」(『親鸞聖人 眞蹟 国宝顕浄土眞実教行証文類影印本解説』所収、一九五六)。

(46) 小川貫弑「阪東本『教行信証』の成立過程」(慶華文化研究会編『教行信証撰述の研究』所収、百華苑、一九五四)。

(47) 重見一行前掲書参照。

(48) 鳥越正道前掲書参照。

(49) 浅井成海他(共同研究)「親鸞聖人著作用語の学術的解明—用語解釈及び字訓・左右訓の分類(一)(二)」(『龍谷大学仏教文化研究所紀要』二〇・二一、一九八二・一九八三)、浅井成海他(共同研究)「親鸞における他力救済用語の総合的研究—

教行信証の左右訓と古字書(一)(二)」(『龍谷大学仏教文化研究所紀要』二五・二七、一九八六・一九八九)。

(50) 『論註』『首楞嚴經言』等の割註は、専修寺本(『専修寺本』三六六)や西本願寺本(『縮刷本』四五〇)では本文文化されている。

(51) 「信卷」引用『往生拾因』にはこれを含む偈文箇所として五つの割註があるが、龍谷大学図書館HP貴重書資料画像データベースにて公開されている『往生拾因』宝治二年刊本(請求記号…〇二一—三三二—)二三才においても全て割註であった。

- (52) 龍谷大学図書館HP貴重書資料画像データベースにて公開されている『末法灯明記』延文三年書写本（請求記号：〇二二一八二二一）三ウにおいても全て割註であった。浅田正博『存覚上人書写本 末法灯明記講読』（永田文昌堂、一九九九）六一頁。この割註については、最澄挿入説と後人挿入説があるが、今は親鸞所覽本に附されていたもの想定して原文に則しているものと判断した。
- (53) 『見聞集』I「浄土五会念仏略法事儀讚」（『真蹟集成』九・五六、六七、七二）。
- (54) 坂東本「真仏土巻」『讚阿弥陀仏偈』冒頭は散佚しているため、専修寺本・西本願寺本によって補った。
- (55) 『教行信証』の引用では、省略しながら全文引用の意がある点でも共通している。灘本愛慈『頭浄土真実行文類講讚』（永田文昌堂、一九八九）一二七頁、同『讚阿弥陀仏偈要解』（永田文昌堂、一九七九）一七頁参照。
- (56) 専修寺本では「必言」（『専修寺本』九〇）を割註にしていない。西本願寺本（『縮刷本』一一三、一一四）は坂東本と同様である。
- (57) 重見一行前掲書三〇三頁。
- (58) 『真蹟集成』二・六七一〜六七五。
- (59) 重見一行前掲書三二七頁。
- (60) その他の親鸞真蹟では、『阿弥陀経集註』裏書（『真蹟集成』七・一三七〜一四七頁）、「聖覚法印表白文」（『真蹟集成』九・一四三）、「浄肉文」（『真蹟集成』九・三四四）、「烏龍山師並屠兒宝蔵伝」（『真蹟集成』九・三二六）、「道綽禅師伝」（『真蹟集成』一〇・三八五）にも典籍・意義などの割註がある。
- (61) 『浄全』五・六九六上。戒度『阿弥陀経義疏聞持記』は、『大日本統蔵経』第一輯第三三套第二冊にも収録されている。
- (62) 平原晃宗「信卷所引『聞持記』について」（『印仏研』四七一、一九九八）。

(63) 重見一行前掲書三二二頁。赤松俊秀昭和本解説では、坂東本の折目綴と『開持記』自体の成立時期から、当初は引用されていなかった可能性が指摘されている。

(64) 憬興については、伝記などがあまり伝わらないが、『三国遺事』にその行状がみえるとされる。渡辺顕正『新羅・憬興師述文贊の研究』（永田文昌堂、一九七八）第二章および韓普光『新羅浄土思想の研究』（東方出版、一九九一）第二章第三節参照。

(65) 渡辺顕正前掲書では、『述文贊』冒頭に「今西晋法護名無量壽經：欲釋法護經本之名」（『大正蔵』三七・一三一下）などあることを手がかりに、『述文贊』所釈の『無量壽経』を、現在欠本である竺法護訳に比定して比較対照しているが、天台智顛『観無量壽経疏』や宗暁『楽邦文類』、源信『往生要集』や源隆国『安養集』、『安養抄』においても竺法護訳が用いられていること、『浄土十疑論』や『教行信証』においても竺法護訳と考えられる文が引かれていることを指摘しており、『教行信証』における『述文贊』を捉える上で注意されるべき内容である。韓普光は、竺法護訳『無量壽経』について、康僧鑑訳本と文段章句が一致していることから、憬興は現在康僧鑑訳として知られている『無量壽経』を竺法護訳本と認定しているものと推定しているが、康僧鑑訳自体についても疑問が提されている現状から、未決定の問題であるとされる（韓普光前掲書一四八頁参照）。今は、親鸞自身がそのことを述べていないことも含めて、『教行信証』の康僧鑑訳『無量壽経』引文に対する引用文として経文を扱っていきたい。

(66) 『教行信証』における『述文贊』引用に関する論文に、隅倉浩信『教行信証』における『述文贊』の引用について」（『印仏研』四三二一、一九九四）、桃井信之「親鸞浄土教と『述文贊』」（『印仏研』五一一、二〇〇二）、貴志澄圓「教巻」における憬興師『述文贊』引用の意義」（『龍谷教学』四二、二〇〇七）などがある。

(67) 「教巻」『述文贊』引用の原典は『述文贊』巻中（『大正蔵』三七・一四六中〜一四七中）にある。なお経文や引用文にカギ

括弧を附し、句読点を適宜補つた。

經曰「唯然大聖」至「奇特之法」者、述云、此第二彰己所念也。遠法師云、「雖有五念初即總表後四別申。」故唯有四意。即後四所念在世所無故云奇特、此恐不然。佛所住法非此五念之所盡念況亦四念、故不可總五而言四。若言「奇特」故知總句者、如來之德亦無別指故、應非別念故。即今阿難略申五念各有所標。此初念也。有說、「唯」者即專義、唱己專念故非也。違諸世典、應對之儀故。今即唯然者、應上之言也。汎言「今日」者即簡往來之言。「依神通輪所現之相非唯異常亦無等」者、故云「奇特」。即立世尊名之所以也。

經曰「今日世雄住諸佛所住」者、述云、此第二念也。有說、「所住」者即大涅槃諸佛同住故、佛於世間最爲雄猛。故云「世雄」非也。佛常住涅槃非今日住故。今即如來住諸佛平等三昧能制衆魔雄健之天故住佛住。爲世雄名之因也。經曰「今日世眼住導師之行」者、述云、此第三念也。有說、四攝法是佛導師攝化之行。佛住此行能開世人令見正路故名世眼此亦非也。四攝之行雖復化物而非眼義故。今即五眼名導師行。佛住五眼引導衆生更無過者故。以導師行以釋世眼之義也。經曰「今日世英住最勝道」者、此第四念也。「最勝道」者即大菩提四智心品。佛住四智獨秀無匹故、從最勝道立世英之名也。經曰「今日天尊行如來德」者、述云、此第五念也。「天尊」者即第一義天以解佛性不空義故。即唯佛所有不共佛法名如來德。餘聖所無故以如來德釋天尊之名。雖遠法師名德別解今即以德釋名者觀此經文順釋義故。名者世尊世雄等。德者即奇特所住等。……經曰「阿難當知」至「無能遏絕」者、述云、第二舉德勅許有二。初舉佛德以述成後勅許以答所問。初又有二。初直述果勝後將因顯勝。初又有二。此初述阿難所念也。「如來正覺」者即奇特之法。者其智難量者、即平等三昧。發勝妙智故以智難量述住佛住。多所導御者即述導師行。有說、慧見無礙即如來德非也。越述天尊之德却成最勝道無別所以故。今即「慧見無礙」者述最勝之道。「無能遏絕」者即如來德。遏阿達壅也絕也。佛德既勝妙不爲餘聖之抑遏故云無遏絕。

(68) 渡辺顕正前掲書一二二～一二八頁。

(69) 「行卷」大行釈『述文贊』第七文の原典は、『述文贊』卷中(『大正藏』三七・一五六下)にある。

經曰「本願力故」至「究竟願故」者。述云、此後願力獲利也。本願者即往誓願之力。他方菩薩聞名得忍況亦自土。故願無缺故滿足。求之不虛故明了。緣不能壞故堅固。願必遂果故究竟。由此願力生彼土者皆得三忍。

(70) 「本願力故」等の文自体は「化身土卷本」(『真蹟集成』二・四七六)に引用があるが、ここでは「行卷」大行釈『無量壽經』第十七願成就文第三文の「其佛本願力」(『真蹟集成』一・二七)や直前の『述文贊』第六文「即往」(『真蹟集成』一・九六)に応じた釈と考えられる。

(71) 渡辺顕正前掲書一五三～一五五頁。

(72) 「真仏土卷」『述文贊』引用の原典は、『述文贊』卷中(『大正藏』三七・一五五中)にある。

經曰是故「無量壽佛」至「超日月光佛」者。述云、此後結歎顯勝也。有説、「長故無量廣故無邊。自在故無礙。餘不能敵故無對。勝餘光故炎王。離垢故清淨。見心喜悅故歡喜。於境善照故智慧。照物無已故不斷。過世間想故難思。絕言想故無稱。超世諸色故超日月」。雖有此解不能別光、亦不鄭重故。今即佛光非算數故「無量」。無緣不照故「無邊」。無有人法而能障者故「無礙」。非諸菩薩之所及故「無對」。光明自在更無爲上故「焰王」。從佛無貪善根而現亦除衆生貪濁之心故「清淨」。從佛無嗔善根而生能除衆生瞋恚感心故「歡喜」。光從佛無癡善根心起復除衆生無明品心故「智慧」。佛之常光恆爲照益故「不斷」。光非諸二乘等所測度故「難思」。亦非餘乘等所堪說故「無稱」。日夜恆照不同娑婆一曜之輝故「超日月」。總而言之。卽身莊嚴故。論云「相好光一尋色像超群生」故。經曰「其有衆生」至「皆蒙解脫」者。述云此第二見者獲利也。「三垢滅」者即除障利。「身意歡喜」卽生善利。「苦得休息」者拔苦利。「皆蒙解脫」者即得樂利。皆是蒙光觸體者身心柔軟願之所致也。

- (73) 渡辺一行前掲書一六四頁。
- (74) 渡辺一行前掲書一六九頁。
- (75) 渡辺顕正前掲書一六五頁。
- (76) 同様の文は、『黒谷上人語灯録』（漢語）第七の「逆修説法」第三七日に「次清淨光者人師釋云無貪善根所生光也云云」（『浄全』九・三九七、『大正藏』八三・一四五上）にもある。
- (77) 『聖典全』二・三三二～三三三。
- (78) 『聖典全』二・七三一～七三五。
- (79) 『聖典全』二・六七四、六七六、七〇三。
- (80) 『経釈文聞書』（『聖典全』二・六、『影印高田古典』一・一〇八）、『憬興師云』（『高田学報』八六、二〇〇八）。
- (81) 重見一行前掲書三〇四頁。
- (82) 重見一行前掲書二一七頁。

## 第三章

### 坂東本の初期改訂

## 第三章 坂東本の初期改訂

坂東本は従来、「草稿本」と位置づけられてきたが、平成期修復後には、今後の研究の指針として、親鸞所持本であること、「中書本（中清書本）」であることの二点が基本性格であると指摘されており、これを基準として研究を進めなければならぬ。前期筆跡時における紙面の改変を伴う改訂は、『教行信証』一応の完成に向けた時期にあつて引用文の配列を決定づけるものとして重要であるが、これまでの研究では、改訂の状況が報告されその時期が推定されることはあつても、それがいかなる意義を有しているのかについては、坂東本生成の問題として考慮されてはこなかった。そこで、坂東本の初期状態の変化に着目し、前期筆跡・中期筆跡・後期筆跡時における改訂の跡を隈なく有する「真仏土巻」を中心として、親鸞による『教行信証』テキストの生成における引用文確定の過程について明らかにしていく。

### 第一節 初期改訂の概要

赤松俊秀によれば、坂東本の初期的状態が最も良く現れているのが第三冊「証巻」であり、それに次いで初期の状態を残すのが第四冊「真仏土巻」、第五冊「化身土巻本」である。<sup>(2)</sup>その他、第一冊「教巻・行巻」・

第二冊「信巻」は中期・後期の筆跡を多く含んでいる。各巻の改訂状況からは、親鸞の手によるテキスト生成の具体的な方法を知ることができるが、前期筆跡時の改訂跡は、親鸞によるテキスト生成の場面を如実に物語る格好の材料となる。本節では、初期改訂について概観したい。

### 第一項 前期筆跡時の改訂箇所

鳥越正道の提示した資料<sup>(3)</sup>によって、前期筆跡箇所の具体例を確認すると、以下のようなになる（以下の数字は『真蹟集成』一・二の『教行信証』頁を示す）。

#### 第一冊「総序」「教巻」 該当無し

「行巻」 五一〜六四、六七〜八四（三行）、八五〜一二〇、一二三〜一二六、

一三一〜一五三（二行）

第二冊「信巻」 一六三〜二〇四、二二一〜二二六、二二九〜二二二、三〇七〜三三〇

第三冊「証巻」 三三九〜三九一

第四冊「真仏土巻」 三九九〜四〇八、四一〇〜四二四、四二九〜四三二、四三三〜四三四、

四三九〜四四五、四四七〜四六九

第五冊「化身土巻本」 四七三〜四八一、四八三〜五二七、五二九〜五三四、五三六〜五七九

第六冊「化身土巻末」 六三一（七行）〜六七九

「総序」はすべて後期筆跡の三頁、「教巻」もすべて後期筆跡の八頁であり、前期筆跡は無い。「行巻」では百三十頁中九十三頁四行分（後期三十三頁、異筆二頁六行）、「信巻」では百七十六頁中七十六頁分（後期百頁）、「証巻」では五十五頁中五十三頁分（後期二頁）、「真仏土巻」では七十一頁二行中六十一頁分（中期二行、後期六頁、異筆四頁）、「化身土巻本」では百六頁中百四頁分（後期一頁、異筆一頁）、「化身土巻末」では九十八頁中四十八頁二行分（中期四十六頁六行、後期三頁）とされ、これらを総計すれば、全体で約六百四十七頁と貼紙二行となり、その内訳は、前期筆跡四百三十六頁五行、中期筆跡四十七頁、後期筆跡百五十六頁、異筆七頁六行となる。全体の約六割強を前期筆跡部分が占めていることになる。その中で、前期筆跡時の紙面には、本文一連の執筆時の筆跡だけでなく、少なくともその直後に行われたであろう改訂も含まれている。また、中期筆跡にあたる『涅槃経』貼紙は、前期筆跡時の紙面に貼り付けられたものであつて、当初は存在しなかつた文とも考えられる。後期筆跡では、字数を増やすために窮屈になりつつも書写している姿からは、数文あるいは数十字に及ぶ文が加えられた可能性があるため、現状の坂東本からすると当初はやや少ない分量の『涅槃経』が書写され、その後増広されたと考えられる。

さて、坂東本における改訂の方法は、主に墨筆・朱筆による訂正の場合（塗抹・訂記）と、切り取り・貼付等による削除・増補の場合（切断）とに分けられる。前者の代表的な例は「行巻」の「正信念仏偈」などに見られる推敲跡であるが、<sup>(4)</sup>前期筆跡時における改訂方法の主体は、後者の紙面の変化を伴う改訂である。

## 第二項 「行巻」・「信巻」の初期改訂

以下、各改訂箇所の様相を検討していきたい。その際、主たる改訂事項については、赤松俊秀の報告と、重見一行の研究などから、各改訂箇所に対する現状の認識を示した。

## (1) 「行巻」 1 (『真蹟集成』一・七三～七四)

大行釈『安楽集』引文の終わりの文で、次に善導『往生礼讃』が開始する前の頁の改訂である。七三頁二行目は『安楽集』第四文「又云又如目連所問經……」以下が始まるが、その五行目の「生老病死只由」で終わり、折り返した七四頁はその続きの「不信佛教……」以下、この文の終わりである「易行道<sup>巳</sup>」で終わっている。都合、四行減っているように見えるが、次丁『往生礼讃』の本文「文殊般若云……」の上部に「又如」と補われ、その右にさらに「光明寺和尚云」が補われている。七三・七四頁は行間がかなりあり、折り返した紙面十行で『安楽集』第四文がちょうど収まるように書写されている。赤松によれば、朱訓附きの袋綴で筆致も八行書き本文と異ならないというが、同時筆ではなく書改であり、この改訂によって四行五十字が減った、あるいは『安楽集』の引用が下巻から上巻に還って順序が乱れたことから上巻の文が新たに引用されたものだとすれば、百三十二字程度削除されたと考え、または『往生礼讃』の文がより長かったかもしれないと推定している。重見は、糸偏などの字形から、「化身土巻末」までの一旦の書写の後の改訂書改と考えている。『安楽集』と『往生礼讃』の接続について削除することで、続く『往生礼讃』に首尾良くつなぐための改訂と考えられる。複数行を削減する改訂は、後期筆跡箇所であるが、実は五五～五六頁の『論註』・『安楽集』

間の改訂箇所に見られ、そこでは紙の両面に四行ずつ本文が書かれることで、八行百二十三字程度が削減されている。<sup>6)</sup>「行巻」『安樂集』の前後には、いずれも元の袋綴状態から変形することで行数を減らす方法がとられていることがわかる。

(2) 「行巻」 2 (『真蹟集成』一・八四)

大行釈『観念法門』・『般舟讚』の改訂である。赤松によれば、三行目以降が切り取られて、雁皮紙が継がれており、三十字前後を書き足すための他筆による改訂と述べている。重見は、七三〜七六頁は前後に比べて一行あたりの字詰めが多いと指摘し、七四頁四〜九行目の他筆箇所を除いて一連の書ではなく、「化身土巻末」までの一旦の書写語の改訂と予想している。これらのことからすれば、前期筆跡時には三十字程度引用が少なかったと考えられ、『観念法門』第二文(二十四字)の追加が予想される。

(3) 「行巻」 3 (『真蹟集成』一・一三七〜一四四)

一乗海釈から偈前序説にいたる箇所である。赤松によれば、袋綴ではなく半切れの切紙の表裏に本文が書かれており、最後は三行ずつになっていること指摘し、一乗海・真実方便の御自釈が加えられた可能性を指摘している。一方、重見は、朱書や糸偏の字形などから、「行巻」書写直後、あるいは「信巻」に書き進んだ頃の改訂書改であって、「化身土巻」までの全体の書写後ではないと推定している。

(4) 「信巻」 1 (『真蹟集成』一・三二五〜三二六)

明所被機のうち『涅槃経』引用後の御自釈部分である。赤松は、袋綴表裏に二行ずつ御自釈が書かれてい

ることを指摘し、書き直される前はより長文であったという。重見は、袋綴や糸偏の状態から、三一三〜三一六頁までは同時の筆跡であり、「信卷」の最初の執筆から時を隔てない時期の執筆であると推定している。ここでは、御自釈に『大経』・『観経』・『涅槃経』の引用があり、次に『論註』の引文を控えている箇所である。

以上(1)〜(4)で確認しておきたいのは、初期改訂の時期について、全巻執筆後とする場合と、「行卷」書写直後、あるいは「信卷」に書き進んだ頃の改訂書改とがあることである。初期改訂の時期には、各巻を書き進める中で随時なされるもの、巻毎の書写の後に行われるもの、全巻で統一に行われるものとが散在しているということである。

### 第三項 「真仏土卷」の初期改訂

次に、「証卷」には切り取り等を含む改訂が見られないので、「行卷」「信卷」の次の改訂は、「真仏土卷」ということになる。

(5) 「真仏土卷」 1 (『真蹟集成』二・四〇八〜四〇九)

真仏土釈『大阿弥陀経』・『不空罽索経』間の約十行分の切り取りである。四〇八頁は、六行書に続く二行分が切り取られ、次丁から白紙である。『大阿弥陀経』最終行には一、二文字分の空白がある。赤松は、『不空罽索経』の新規引用による『涅槃経』文の切り取りではなく、「不空罽索」以下五行を残存するために、四

○八頁最後の七・八行目と袋綴表面八行分と四〇九頁一・二・三行目の計十三行が切り取られたとの見解を示している。字数でいえば、周辺の頁に合わせて一行十五字とすれば百九十五字程度が削除されたようである。内容からすれば、当初は『無量寿経』関連の諸本・註釈書類が続くか、或いは『大経』と異訳の文に対する親鸞による御自釈があったと推測される。

(6) 「真仏土巻」2 (『真蹟集成』二・四四六～四四八)

真仏土釈『論註』・『讚阿弥陀仏偈』間の改訂である。第一に『論註』最後の八字「不差故曰成就<sup>出抄</sup>」は、袋綴を切り開いた左裏面(四四七頁)に存在し、江戸期模写本の一つである教行寺本では袋綴の裏面に直接記入される。<sup>(9)</sup> 現在では、大正期修復時に袋綴が切り開かれた可能性が高いと考えられている。<sup>(10)</sup> 第二に『讚阿弥陀仏偈』初めの二十五字「讚阿彌陀佛偈曰曇巒和尚造南无阿彌陀佛釋名無量壽傍經」が欠落している。この文言は、江戸期坂東本模写五本においてもいづれも欠いているようであるが、坂東本の古い形態を伝えていると思われる専修寺本・西本願寺本では本文中に記載している。<sup>(12)</sup> 第三に四四八頁の本文は、「<sup>(11)</sup>奉贊亦曰安養」の割字で始まり、右端の折り返し部分に墨書がある。また四四八頁の頭註「鸞和尚造也」は二行程度の大きさの貼紙の存在を示唆しているが、専修寺本・西本願寺本ともに書写していない。この三つが『往生論註』から『讚阿弥陀仏偈』にかけての改訂である。前期筆跡による坂東本一連の書写後から親鸞七五歳時の尊蓮書写までに複数箇所<sup>(13)</sup>の改訂がなされたが、ここでは『涅槃経』・『浄土論』間の書改・他筆のような改訂はなされず、結果的に散逸等の錯綜状況が生じてしまっている。

(7) 「真仏土巻」 3 (『真蹟集成』二・四五二〜四五三)

真仏土釈『讚阿弥陀仏偈』・「玄義分」間の改訂である。『讚阿弥陀仏偈』引用終了から「玄義分」開始直前までを切り取って圈と線で指示し、さらに「玄義分」の始め二行のところ、紙面の中央辺りで折り返している。<sup>(13)</sup>ここは、『讚阿弥陀仏偈』最後の引文指示語「已上略抄」から釈書に移行する箇所である。赤松によれば、当初は報土の名目を初めて出した道綽『安樂集』の三身三土義の文等が挿入されていた可能性がある。『安樂集』が削除されたとすれば、善導の報身報土説には、道綽の挙げた『大乘同性經』に加えて、『大經』の第八願文が引証されるため、『安樂集』の意がここに包含されて、善導の「玄義分」が採用されたものとも考えられるが、推測の域を出ない。

(8) 「真仏土巻」 4 (『真蹟集成』二・四六三〜四六五)

真仏土釈『法事讚』・『述文贊』と真仏土結釈の接続部である。元は袋綴であったが、現四六三・四六五頁を切り開いて、裏面へ『述文贊』と真仏土結釈冒頭が記入されている。『述文贊』周辺は、「真仏土巻」本文の執筆に近い時期に袋綴が切り開かれ、現れた裏面に『述文贊』等が書き入れられたと推定されている。

以上、「真仏土巻」には(5)〜(8)の四つの大きな改訂箇所があるが、その関連について次節以降で述べたい。

#### 第四項 「化身土巻本」の初期改訂

次に、「化身土巻本」の改訂である。「化身土巻本」には数多くの改訂跡が認められる。

(9) 「化身土卷本」 1 (『真蹟集成』二・四八一〜四八三)

要門釈『大経』『如来会』『定善義』『述文贊』『要集』の改訂である。赤松は前半面の後半部分に当たる四行五十八字が切り取られて紛失したとし、重見はもと袋綴の両面を形成していたとすれば、切り継ぎ改訂時に裏書されたもので、「化身土卷末」までの一連の執筆後の改訂としている。

(10) 「化身土卷本」 2 (『真蹟集成』二・四八五〜四八八)

要門釈『要集』・勸誠の改訂である。重見は元袋綴であったと考え、四八六頁四行分と四八七頁第一行が改訂期の記入であるという。上欄に「也若不雜修專行此業此即執心牢固定生極樂國」との補記がある。

(11) 「化身土卷本」 3 (『真蹟集成』二・四九九〜五〇一)

觀経隱頭「序分義」「散善義」「礼讚」の改訂である。重見は、元袋綴であったとすれば五〇〇頁が改訂時の書き入れとなるという。全巻書写後すぐの改訂であると推定されている。

(12) 「化身土卷本」 4 (『真蹟集成』二・五〇五〜五〇七)

觀経隱頭『礼讚』の改訂であり、最後に『論註』の上欄補記「論註曰有二種功」がある。重見は、元袋綴であったとすれば、五〇六・五〇七頁が改訂時の書き入れとなるとし、全巻書写後すぐの改訂と推定している。

(13) 「化身土卷本」 5 (『真蹟集成』二・五二七〜五二八)

真門釈「散善義」の改訂である。上欄に「又云」と補記されている。重見は、「又云」のみの書き入れであ

り、(11)と同時期とする。

(14) 「化身土巻本」 6 (『真蹟集成』二一・五三〇～五三六)

真門釈「散善義」『法事讚』『般舟讚』の改訂である。重見はもとは五三〇頁が五三六頁と直接していたことを、切り口と文字の切断面が合致する事を以て推定している。全巻書写後すぐの改訂と考えられる。

(15) 「化身土巻本」 7 (『真蹟集成』二一・五五七～五五八)

聖道釈・三時開遮の御自釈の改訂である。重見は、表裏五行あり、糸偏や「修」の字形から推定すると全巻書写後としている。

以上、「化身土巻本」の改訂については、全巻の執筆直後になされたと考えられる改訂が多く見受けられる。「真仏土巻」とともに、文言の附加・削除、移動や散逸などの錯綜状況が生じた様子が窺える。

### 第五項 「化身土巻末」の初期改訂

(16) 「化身土巻末」 1 (『真蹟集成』二一・六三二)

外教釈『大集経』月蔵分における中期筆跡部分の終わりと同前期筆跡との接続部である。重見は、上欄に「又言」が加えられたのは、中期筆跡改訂時の補記としている。実質的には中期筆跡時であるが、前期筆跡の再開箇所ということで挙げておいた。

(17) 「化身土巻末」 2 (『真蹟集成』二一・六六五～六六六)

外教釈『弁正論』から『法事讚』の改訂である。重見は全巻書写後の改訂とする。

(18) 「化身土卷末」 3 (『真蹟集成』二・六六九〜六七〇)

外教釈『摩訶止観』から『往生要集』周辺の改訂である。「源信」は本紙を剝り抜いて現れた裏面に書かれ、上欄補記「依止」がある。重見は一旦の執筆後まもなくとする。

(19) 「化身土卷末」 4 (『真蹟集成』二・六七五〜六七八)

後序のうち後半部の改訂である。重見は一旦の執筆後まもなくとする。

以上で初期改訂箇所全てを掲げたことになるが、引文や御自釈の接続部に多く見られることが特徴である。經典に関するものは比較的少なく、曇鸞・道綽・善導など中国浄土教祖師による著作の引用周辺部に多い。本文が後期筆跡で始まる「行卷」・「信卷」については前期筆跡時には現状とは異なる配置であった可能性があるが、「証卷」以下については、各巻冒頭に前期筆跡時に改訂の無い状態で『大経』『如来会』による願文・成就文が並んでおり、初期改訂の目的は、釈書の選択や配置に関するものであった可能性が高い。

## 第二節 貼紙による改訂

『讚阿弥陀仏偈』は、題後の六字名号の下に「釋名無量壽傍經  
奉讚亦曰安養」(『聖典全』一・五三五)とあるように、『無量壽經』を奉讚した書である。曇鸞が、龍樹にならって『無量壽經』によって制作した偈文であるといわれ

るが、『教行信証』以前の諸師による引用は、決して多くない<sup>(14)</sup>。この書が、なぜ「真仏土巻」において前後に改訂を抱えるに至ったのかを検討していきたい。

### 第一項 「真仏土巻」「讚阿弥陀仏偈」について

『教行信証』での引用形態としては、正引（「信巻」・「真仏土巻」）と『安樂集』による子引（「行巻」・「証巻」）が数えられる。正引については、「信巻」では「曇鸞和尚造也」（『聖典全』二・七〇）とし、「真仏土巻」では頭註「曇鸞和尚造也」とある。「信巻」・「真仏土巻」の引用では、論書を意味することが多い。「曰」で導入されており、同じく曇鸞撰述の『往生論註』に多く見られる引用法である。「真仏土巻」引用では、冒頭の約二十字あるいは二十五字が散逸しているものの、その内容は、西本願寺本・専修寺本などによって推定できる。子引では「行巻」は「大經贊」（同三〇）、「証巻」では「是故曇鸞法師正意、歸西故傍大經奉讚曰」（同三六）としている。親鸞は、特に曇鸞の制作であること、『無量寿經』を讚じたものという二点を強調して引用している。

「真仏土巻」における『讚阿弥陀仏偈』については、引文導入語による分類によれば、「曰」と論書としての引用と考えられ、引文指示語による分類によれば、『論註』との一連であると考えられる。その構成は、題号・六字名号・傍註、総讚（光寿二無量の徳を顕す）、十二光（光明をもって真仏を示す）、「乃至」（聖衆・国土の讚を省略）、総結述意（龍樹讚と曇鸞自督）の五つに大別される。「乃至」により全体の半分程度が書

写されていないが、全文引用の意があるとされている。<sup>(16)</sup> 筆跡については前期筆跡時に属し、頭註三箇所も前期筆跡である。また、朱書による補筆も施されている。<sup>(17)</sup> 『讚阿弥陀仏偈』引用文の両端に改訂・切り取りの跡があることは既述の通りである。

坂東本と西本願寺本・専修寺本を比較すれば、坂東本には初めの二十五字が欠落（散逸）していること、専修寺本・西本願寺本は最初の四句が偈頌体であること、坂東本にのみ「頽字」「轍字」の字註（『真蹟集成』二・四五一）があることの三点が挙げられるが、ここでは一点目について述べ、二点目・三点目に関しては、西本願寺本の関連として第四・五章で考察したい。

## 第二項 『論註』『讚阿弥陀仏偈』間

「真仏土巻」「讚阿弥陀仏偈」は、書名を含む冒頭の文が散逸している。坂東本の本文は、割字「奉贊亦」曰安養で始まる。この割書に関しては、専修寺本・西本願寺本では本文に組み込まれている。この『往生論註』・『讚阿弥陀仏偈』間の改訂箇所において着目しなければならないのが、四四七頁『往生論註』最後の八字「不差故曰成就抄」と、それに続く『讚阿弥陀仏偈』冒頭の脱文であろう。『讚阿弥陀仏偈』前半部に関しては、現状では袋綴が切り開かれ、もともと裏面だった紙面（『真蹟集成』二・四四六、四四七）が表出している。ここでの先行研究としては、次の三つが挙げられる。

まず赤松俊秀は、『往生論註』最後の八字は、袋綴の折目を切り開き、料紙の裏に脱字を書き入れたもので、

<p>自費美余 成佛已來歷十劫壽命方將无有量法身光輪徧法界照世旨冥故頂禮智慧光明不可量故佛又号无量光有量諸相蒙光曉是故稽首眞實明解脫光輪无限賢故佛又号无邊光蒙光触者離有無是故稽首平等覺光雲无号如虛空故佛又号无号光一切有礙蒙光澤是故頂禮難思議清淨光明无有對故</p>	<p>不差故曰成就<small>（註）</small></p>		<p>山海之神乎毛芥之力乎能神者神之耳又云何者莊嚴不虛作住持功德成就傷言觀佛本願力遇无空過者能令速滿足功德大寶海故不虛作住持功德成就者蓋是阿彌陀如來本願力也<small>（註）</small>乃所言不虛作住持者依法藏菩薩四十八願今日阿彌陀如來自在神力願以成力力以就願願不徒然力不虛設力願相府畢竟</p>
<p>（『尊嚴集成』二・四四八）</p>	<p>（『尊嚴集成』二・四四七）</p>	<p>（『尊嚴集成』二・四四六）</p>	<p>（『尊嚴集成』二・四四五）</p>

〈図3-1〉『論註』『讚阿弥陀仏偈』間の改訂

文暦二年（一二三五）前後の筆致であるとする<sup>(18)</sup>。さらに、『讚阿弥陀仏偈』冒頭二十字は、写し漏らしたために貼紙などによって書き入れ、欄外頭註に「鸞和尚造也」と著者を書き入れたが、中古に紛失したものと<sup>(19)</sup>する。

重見一行は、『讚阿弥陀仏偈』冒頭の文について「何故に続けて書写しなかったのか（おそらく貼紙であったのだろう）不思議である」といい、四四七頁の補写である『往生論註』最後の八字は、「化身土卷末」までの一通りの書写後まもなくの改訂記入と見られるという<sup>(20)</sup>。また、四四八頁の頭註「鸞和尚造也」は、前期筆跡時の記入だが筆先は異なるとし、総じて推定しがたい訂正状況と述べている。

鳥越正道は、諸種の坂東本影印及び模写本の現状から検討している<sup>(21)</sup>。四四七頁の『讚阿弥陀仏偈』冒頭の欠落（二行二十五字）と、四四八頁の頭註「鸞和尚造也」（大正版影印本・昭和版影印本・真蹟集成・美之美版）にあること、昭和本では、袋綴を切り開いた状態で、切り開かれた右表面（四四五頁）は『往生論註』の「一力願相府畢竟」で終わり、左表面（四四八頁）は『讚阿弥陀仏偈』の傍註

の途中（「奉贊亦  
曰安養」の割字）から始まっているとする。『讚阿弥陀仏偈』冒頭の脱文は、袋綴を切り開いた左裏面（四四七頁）にあったが、元来二行程度の大きさの付箋があり、後に欠落したものと推定する。そして、四四五頁と四四八頁は元々袋綴であつて、大正期に切り開かれたものと述べている。

また、『讚阿弥陀仏偈』冒頭の脱文の内容については、四四八頁の頭註「鸞和尚造也」を考慮するか否かで、二十字とするか二十五字とするかで意見が分かれている。考慮する場合は、二十字と推定され、「讚阿弥陀佛偈曰、南無阿弥陀佛、釋名無量壽傍經」となる。考慮しない場合は、二十五字となり、「讚阿弥陀佛偈曰、曇鸞和尚造、南無阿弥陀佛、釋名無量壽傍經」となる。専修寺本や西本願寺本がこれにあたり、『浄土和讃』冒頭（『聖典全』二・三三二）の引用法もこれに準じている。この両説の可能性を考えたのが、鳥越が示した二つの貼紙復元例であつた。<sup>(22)</sup>

以上のことから、当箇所の問題点としては、次の二点が挙げられる。

- ・ 大正期以前は袋綴であつたため、赤松が主張するような「写し漏らし」とは考えにくい。
- ・ 頭註「鸞和尚造也」の意味が判然としない（専修寺本・西本願寺本には反映されていない）。

これらを踏まえて、『往生論註』『讚阿弥陀仏偈』接続部についての現在までの時間的推移について纏めておこう。坂東本の執筆時には、表面には『往生論註』「一力願相府畢竟」（『真蹟集成』二・四四五）に続けて『讚阿弥陀仏偈』「奉贊亦  
曰安養」の割字（『真蹟集成』二・四四八）を執筆した。その裏面に『論註』最後の八字を

書き入れ、『讚阿弥陀仏偈』冒頭の引用部を貼紙として裏面に貼り付けた。この段階で、『論註』部分の一連の執筆時点には少なくとも紙片として存在していた『讚阿弥陀仏偈』冒頭部を貼紙として利用することを意図し、左裏面（『真蹟集成』二・四四七）に書き入れた『往生論註』最後の八字に続けて貼り付けたと考えられる。しかし、次丁の頭註による指示「鸞和尚造也」（『真蹟集成』二・四四八上欄）について、重見は筆先が異なると述べ、裏面に貼紙等の書き入れがあることを指示するものであるが、本文執筆時との時間的差異（本文より後の前期筆跡時の加筆）を示唆している。

四四五頁と四四八頁はもともと一紙であることから、両頁が一連の執筆であれば、『往生論註』の途中で『讚阿弥陀仏偈』の冒頭を省いた割字「奉贊亦曰安養」が執筆されたという不可解な状況があった。『往生論註』のみが裏書きされたのに対し、続く『讚阿弥陀仏偈』を続けて書かれなかったということは、新たに貼紙を作成したというより、当箇所執筆時に既に存在していた紙片を利用した可能性も考えられる。そして、四四八頁頭註の「鸞和尚造也」は、貼紙あるいは裏書の存在を示すための親鸞自身の備忘、或いは書写者のための記入と考えられているが、本文に反映されないこうした頭書は、他に類を見ない。こうしたことから、裏書や貼紙という坂東本における二つの本文書写・改訂の方法を総合的に捉えなければならない。

### 第三項 『讚阿弥陀仏偈』「玄義分」間

散逸してしまった前半部の改訂跡のみならず、引用後にも改訂跡を抱えているのが、「真仏土卷」「讚阿弥

<p>等。初。本師能。樹摩訶薩。形像。始理類。綱開閉邪。扇開正。徹是。閻浮提。一切眼。伏承。導語。歡喜。地歸。阿彌陀生。安樂。我從。无始。備三界。爲虛妄。輪所。回轉。一念。一時。所造。業足。繫六道。滯三塗。唯願。慈光。護念。我不。失菩提。心我。讚佛。惠功。德音。願聞。十方。諸有。緣欲。得往。生安。樂者。普皆。如意。无。部。導。所有。功</p>	<p>德若。大小。回施。一切。共往。生南。无不可。思議。光。一心。歸命。稽首。禮十方。三世。无量。壽。同。乘。一。如。号。正。覺。二。智。圓。滿。道。平等。攝。化。隨。緣。故。若。干。我。歸。阿。彌。陀。淨。土。即。是。歸。命。諸。佛。國。我。以。一。心。贊。一。佛。願。偏。十。方。无。導。又。如。是。十。方。无。量。佛。咸。各。至。心。頭。面。禮。</p>	<p>光明寺和尚云問曰彌陀淨國爲當是報是化也答曰是報非化云何得知如大乘同性經說西方安樂阿彌陀佛是報佛報土又无量壽經云法藏比丘在世饒王佛所行菩薩道時發四十八願一願言若我得佛十方衆生稱我名号願生我國下至十念若不生者不取正覺今既成佛即是酬因之身也又觀經中</p>
--	--	--

〔寫真轉成〕二・四五三〜四五四

〔寫真轉成〕二・四五二

〔寫真轉成〕二・四五一

〈図3-2〉『讚阿弥陀仏偈』「玄義分」間の改訂

陀仏偈』の特徴であるから、これについても検討しておこう。現状では、切り取られた箇所は糊止めされ、四五一頁と四五四頁の裏面が表出している。

当箇所についての先行研究としては、次のものが挙げられる。

まず赤松は、四五二頁の終わり一行半、四五三頁の始め半行が切り取られていることについて、現在三十字余りの空白があるが、当初切り取られた分はそれより百二十字ほど多かったとし、道綽の疏ではないかと推定している<sup>(23)</sup>。また、四五三頁と四五四頁はもと八行書きの袋綴の後半面であり、切り取り後、後半面を本文四行ずつに二つに折り分け、左端はそのままだに右端を糊止めにしたという。そして自筆で圈と線を書き、両方の文章が直接続くことを指示している状況を報告している。

次に、重見は、四五二〜四五四頁の切り継ぎは、改訂がいつ行われたかは明白ではないという。ただ、「化身土巻」の切り継ぎと一連のもの<sup>(24)</sup>と考えられるから、前期筆跡時を出るものではないと述べている。

以上のことから、当箇所の問題点は、何らかの意図をもって切り継ぎがなされたが、その改訂が必要であった理由が不明瞭なことであろう。

これらを踏まえて『讚阿弥陀仏偈』・「玄義分」接続部の現在までの推移についてまとめておこう。坂東本文執筆時に近接した時期に、「玄義分」が『讚阿弥陀仏偈』に接続するように切り継ぎ・改訂されたということは明白であるが、引用文間の関係についてはいくつか考えられる。赤松の言うように、本文執筆当初は『安楽集』の文があつた可能性もあるが、<sup>(25)</sup>「玄義分」は『論註』に続き、当初は『讚阿弥陀仏偈』との連続性はなかつたとも考えられるのである。

『讚阿弥陀仏偈』周辺の切り取りなどの改訂箇所を検討すると、前期筆跡時改訂の内容について、次の可能性が想定される。すなわち、本文書写時の状況は不可解であるが、結果として冒頭には『讚阿弥陀仏偈』冒頭が貼紙として存在していたこと、そして、それと同時に『讚阿弥陀仏偈』と「玄義分」が連続していることを示すように圏線が記されたことが分かる。

これらの改訂については、『讚阿弥陀仏偈』前後において引用文間の配置の問題が関わっており、『讚阿弥陀仏偈』のみならず、「真仏土巻」全体の問題として捉えなければならぬのではないだろうか。『讚阿弥陀仏偈』を現在見られるような『論註』の次、「玄義分」の前に配置する必要があつたために、前半の箇所貼紙や切り継ぎの改訂がなされたが、それは坂東本文執筆時に近接した初期の段階での改訂であつたという仮説が立てられる。そうした意味で、やはり初期改訂時の変化について検討する場合、貼紙と裏書の全容について考えなければならぬ。ただ、貼紙については、前期筆跡時の貼紙は残っていない。中期筆跡時の『涅槃経』貼紙が認められるのみである。この貼紙による方法が、坂東本に処した親鸞による引用文の追加の方

法であり、『涅槃經』等の經文追加の際に利用されてきた方法であろうと考えられるが、余所は改訂・書改によつて今は見ることができない。

#### 第四項 諸テキストからの検討

親鸞示寂後、西本願寺本書写などがあつたが、西本願寺本では全て書写されている。その後、『讚阿弥陀仏偈』冒頭の文言を記した貼紙が散逸したと考えられる。<sup>(26)</sup>江戸期には坂東本模本の制作が行われているが、教行寺本のみ『往生論註』最後の八字を書写している。また、江戸期模写本五本全てに『讚阿弥陀仏偈』冒頭の手書き入れは無い。さらに大正期修復時に袋綴を切り開き、『讚阿弥陀仏偈』冒頭の貼紙が発見されることを期して折り返しを施されたのである。<sup>(27)</sup>

こうして改訂されたが散逸してしまったために錯綜した坂東本「真仏土巻」『讚阿弥陀仏偈』の開始位置について、「信巻」や関連諸本との関わりの中で検討してみたい。坂東本では初めの二十五字が欠落しているが、その内容は書名・撰者名・名号・細註の四つであると考えられる。「信巻」では書名・著者名を一行で示し、改行を施して本文引用に移るといふ、他の引用文にない形式でそれらを提示している。本文と經論名の間を改行して示すのは、親鸞真蹟では六字名号（『真蹟集成』九・一〇）、八字名号（同一一）、十字名号（同一二～一五）、「安城御影」（同三〇）などの上下讚銘に『大經』や『浄土論』、正信偈の文を記す際などに用いられる方法でもある。「信巻」の形式は、これは坂東本・専修寺本・西本願寺本に共通しており、類例として『浄

土和讚』讚弥陀偈讚冒頭が挙げられる。

一方、坂東本「真仏土卷」の原形は、西本願寺本や専修寺本から推定すると、現存する「奉贊亦日安養」を除く、「讚阿彌陀佛偈曰」「曇鸞和尚造」「南無阿彌陀佛」「釋名無量壽傍經」の四つの要素を二行書きで示す場合と考えられ、これらの文言が引用の開始前に置かれることになる。両本に見られるような二十五字がどのように存在していたのかがこれまで議論されてきたわけである。

ただ、これまで推定されてきたのは、文言は西本願寺本や専修寺本によるが、貼紙であった可能性は坂東本の状態に依っているものであったから、少し違う角度から検証したい。それは専修寺本の形態である。

専修寺本「信卷」大信釈『讚阿彌陀仏偈』

定故・三者信心不相續餘念間故・此

三句展轉相成以信心不淳故无決定

無決定故念不相續亦可念不相續

故不得決定信不得決定信故心不淳

与此相違名如實修行相應是故論

主建言我一心上已讚阿彌陀佛偈曰曇

鸞和尚造也 諸聞阿彌陀德号信心歡喜

〔専修寺本〕一八〇

専修寺本「真仏土卷」真仏土釈『讚阿彌陀仏偈』

來本願力也至乃所言不虛作住持者依本法

藏菩薩四十八願今日阿彌陀如來自在

神力願以成力力以就願願不徒然力不虛

設力願相府畢竟不差故曰成就出抄

讚阿彌陀佛偈曰 曇鸞和尚造

南无阿彌陀佛

釋名无量壽傍經  
奉贊亦日安養

〔専修寺本〕四九二

「信卷」の形態からは、撰号にあたる「曇巒和尚造也」の「曇」のみが本文に近い大きさで行末に書写されているが、次行の「巒和尚造也」については割字で示されていることが注目される。ここから想起されるのは、坂東本における「真仏土卷」「讚阿弥陀仏偈」残存状態が「奉贊亦  
曰安養」の割字で始まっていることについてである。専修寺本「信卷」の例を元にすれば、「釋名無量寿傍經」までは割字でなく、一行書きで示されていた可能性が想定される。

「真仏土卷」の形態からは、改行や空白が比較的少ない専修寺本において一行分の空白が施されていることが注目され、専修寺本の書写原本に何らかの書誌的特徴があったと考えられる。<sup>(28)</sup> その書誌的特徴は、坂東本の状態を鑑みれば、貼紙という形態を想起させる。あるいは『論註』と『讚阿弥陀仏偈』の接続について、専修寺本の祖本書写以前に断絶状態が見られていたが、そこに貼紙という処置が行われたことが示唆される。この箇所特殊な処理が施されたことについては、専修寺本の『讚阿弥陀仏偈』「玄義分」間が、「方无量佛咸各至心頭面禮已上抄出光明寺和」(『専修寺本』四九八・一行目)と、大きな空白など無くそのまま続けて書写していることから窺えよう。

こうしたことからすれば、『讚阿弥陀仏偈』の前半部には特殊な状態があったこと、それも専修寺本あるいはその祖本がそのような状態を伝えていることがわかった。その特殊な状態こそがこれまで発見を期されてきたような貼紙であった。その内容として鳥越の示した二例については、いずれも貼紙内の文言のうち「釋

名无量壽傍經」が割字として示されており、二行書きの貼紙であったとするならば、一行目との字数の異なりにやや均衡性を欠いているといわざるを得ない。本項での検討によれば、貼紙二行目は、一行書きではなかったかという可能性を付け加えておきたいのである。

### 第三節 裏書による改訂

裏書の全容を知る上で重要なのが、『述文贊』の改訂である。元々は袋綴の一枚で『法事讚』引用文と真仏土結釈が連続していたが、「真仏土巻」まで、あるいは「化身土巻末」までの一連の執筆直後に袋綴を切り開いて一行半分を削除し、現れた裏面に『述文贊』等二百三字が書き入れられたと推定されている。<sup>(29)</sup>『讚阿弥陀仏偈』に続いて『述文贊』の改訂を検討することで、「真仏土巻」の両書は強い関連があることを指摘したい。

#### 第一項 「真仏土巻」「述文贊」の現状

『述文贊』の周辺について、坂東本の現状把握、原初形態、改訂の時期などについて、先行研究をもとに議論を進めたい。<sup>(30)</sup>坂東本の現状を図示すると、次の〈図3-3〉のようになる。これらは、坂東本の料紙を切り取った箇所と本文の状態を紙面毎に示したものであり、灰色部分は料紙の裏面であることを示している。

<p>槃城又云極樂無爲涅槃界隨緣雖善 惡雖生故使如來邊歸法教念彌陀專 復專又云使仗道還歸自然念彌陀是 彌陀因無漏無生還即廣行來進止常 隨佛証元爲法性身又云彌陀妙果</p>	<p>號曰无上涅槃<small>已上抄出</small>憍興師云元量光佛 非等無邊光佛無緣不無光佛無有人 數故無邊光佛無緣不無光佛無有人 故無邊光佛非諸善無光炎王佛自光明 更無爲清淨光佛從無貪嗔現故亦除 上之故歡喜光佛除衆生煩惱心故亦 云之淨</p>	<p>慧光佛從無煩惱心起復不斷光佛佛光 恆爲照耀思光佛非諸善無光炎王佛 等所處超日月光佛日心恆照不問皆 是蒙光觸身者身心柔濡願之所 致也<small>已上覆者抄要</small></p>	<p>如來眞說宗師釋義明知 顯安養淨利眞報土慈染衆生於此不 能見性所覆煩惱故經言我說十住菩薩 少分見佛性故知到安樂佛國即顯佛 性由本願力回向故亦經言衆生未來具 足莊嚴清淨之身而得見佛性起信論曰 若知難說無有能說可說亦無能念可 念名爲隨順若離於念名爲得入得入 者眞如三昧也況乎無念之位在於妙覺 蓋以了心初生之相也而言知初相者所謂</p>
---	---	---	---

(真蹟集成』二 四六六)

(真蹟集成』二 四六五)

(真蹟集成』二 四六四)

(真蹟集成』二 四六三)

〈図3-3〉『述文贊』周辺の改訂

〈図3-3〉に示した『真蹟集成』二・四六三〜四六四頁は、一枚の紙の表面と裏面にあたる。四六三頁には『法事讚』第三文の「槃城又云…彌陀妙果」（七十四字）が書き入れられ、四六四頁には『法事讚』第三文最後の十字から『述文贊』にかけての「號曰无上…盛心故智」（百二十一字、うち細字八十一字）が書き入れられている。ここからは、第三五丁右の五行分で切り取り、もともとの「真仏土卷」一連の執筆と思われる本文である「槃城又云」等が書かれた紙面の裏に、新たに「號曰无上」等が裏書きされることが確認できる。

次に、四六六頁は、料紙の裏面が表出した部分と、折り返し部分も含む表面からなる。右頁の灰色部分が料紙の裏面であり、これは左面および中央の折り返しより右の白地部分の裏側にあたる。四六五頁には、『述文贊』の残り」と真仏土結釈はじめの「慧光佛從…已上抄要爾者」（九十七字、うち細字五十九字）と、真仏土結釈の続きで中央折り返しより右一行半の「如來眞說…生於此不」（二十字）が書き入れられている。また、四六六頁は、料紙の表面で真仏土結釈から『起信論』の「能見性所…相者所謂」（八行書、百二十七字）が書き入れられている。

この坂東本の現状について、平成期修復後、三木彰円は、次の四点を確認、報告している。<sup>(31)</sup>

- ・ 四六三・四六四頁は一枚の紙の裏表にそれぞれ本文が記されている。
- ・ 四六五頁は、一行目から五行目までの本文（「慧光佛：已上抄要爾者」とそれに続く一行文の空白の部分）は一枚の料紙の裏に記されている。続く「如來眞説宗師釋義：感染衆生於此不」の部分は料紙の端を折り返して袋状にして糊止めされている。
- ・ 糊止めは料紙の破損や脱落を防ぐためである。
- ・ 四六四頁と四六五頁の五行目までの本文は、当初書かれた本文に新たに書き加えられた要文である。

以上によって、『述文贊』周辺の改訂に関わる坂東本の現状から確認できることは、次の二点に纏められる。

第一に、袋綴が切り開かれ、現れた裏面に『法事讚』最後の十字「號曰无上涅槃」已上抄出と『述文贊』全文の百九十一字「懽興師云：所致也」已上抄要、真仏土結釈冒頭の二字「爾者」の計二百三字（訓点等は除く）が書き加えられていることである。第二に、四六四頁と四六五頁の裏書は共に五行であり、真仏土結釈の始め二字「爾者」の後には少しの空白行があることである。坂東本「真仏土巻」『述文贊』周辺の改訂の現状を確認すると、坂東本初期改訂によって袋綴から両面書きに変化したことが窺え、主として『述文贊』を配置するための改訂であると考えられる。

## 第二項 改訂の内容と時期

次に、『述文贊』周辺の改訂から、その原形、改訂の状況、時期などについて確認したい。

第一に、坂東本当初の状態については、赤松、『平成版影印本解説』、三木の研究・報告が挙げられる。赤松は、書き直し前は四六二頁に続いて善導疏が引用され、「爾者如來眞説」の御自釈が続いていたと述べている。<sup>(32)</sup>『平成版影印本解説』では、四六三頁と四六五頁の末尾二行を半葉とし、四六六頁を半葉とする一紙からなる元袋綴であったという。<sup>(33)</sup>また三木は、「彌陀妙果」から「如來眞説」までの間の一行半が当初は存在していたことを指摘している。<sup>(34)</sup>

第二に、改訂の状況についても、赤松、『平成版影印本解説』、三木の報告が挙げられる。赤松は、四六三頁の第六行全部と第七行始めの五字が切り捨てられ、そのうち始めは「號曰无上涅槃」、下二字は「爾者」、残り十四〜十五字は善導疏であろうと推測している。<sup>(35)</sup>『平成版影印本解説』では、四六三頁と四六五頁の末尾二行を半葉とし、四六六頁を半葉とする一紙からなる元袋綴であったと考えられること、前半葉のうち第六行目と第七行目との五文字相当分を切り取ったと考えられること、現在の四六四頁と四六五頁とがそれぞれ新たな面として現れ、そこに本文が書き加えられたことを報告している。<sup>(36)</sup>三木は、当初存在していた一行半を削除すると同時に、残された「如來眞説宗師釋義明知：顯安養淨刹眞報土惑染衆生於此不」の部分は当初の折り目のまま折り返され、その右端が糊止めされた袋状となっていたと述べている。<sup>(37)</sup>

第三に、改訂の時期については、赤松、湯岡、重見が言及している。赤松は、

「真仏土」巻には用紙を切り開いて書き入れたり、不要の部分を切り取ったり、貼紙によって本文を改訂したところがあり、筆致からすると、改訂の時期は、「真蹟本」が初めて書写された時とあまり隔りがない。

としている。<sup>(38)</sup> 潟岡は、前後の本文と裏書の字体やその他諸条件は全て前期筆跡のものであるが、時間的差があると述べ、紙背への加筆は削除の要があったためであると述べている。<sup>(39)</sup> 重見は、

筆跡変化の点から言えば全部前期筆跡のもので、早く変化した「出・所」等の点から考えて、この改訂記入は真巻書写後まもなくか、化巻末までの一旦の書写直後のものであるろう。

と説明している。<sup>(40)</sup> 以上のように、前期筆跡時、「真仏土巻」あるいは「化身土巻末」までの一連の執筆直後の改訂だと考えられている。

これらによると、現在の坂東本「真仏土巻」「述文賛」周辺に見られる改訂箇所は、〈図3-4〉に示した通り、四六三頁・削除部分・四六五頁のうち表面を半葉、四六六頁を半葉とする袋綴の一枚であった。また改訂に関しては、当初は一枚の料紙であったものを、袋綴を切り開いて一行半分（約二十字）を削除したこと、そうして現れた裏面に『述文賛』等二百三字を書き入れて、現在見られるような紙面の状態となったことが推測できる。また、改訂の時期については前期筆跡時の「真仏土巻」あるいは「化身土巻末」までの一連の

執筆直後の改訂であろうと考えられる。

この時削除された文字については、赤松は『法事讚』の「號曰无上涅槃」（現在は裏書）と善導疏十四く五字に「爾者」の二字を加えたものと推定し、これ以上言及されていない。今この削除分を推定すると、現存する『法事讚』残り六字があったことは間違いはない。ただ、削除された文字数が約二十字という少なさから、『法事讚』第四文なる次の引用文があったとは考えにくい。そこで、『法事讚』の原文を考慮すると、当初は「彌陀妙果號曰无上涅槃」に続く「國土即廣大莊嚴徧滿自然衆寶」（『聖典全』一・八六三）があったのではないかと考えられる。これによって当初存在していたのは「彌陀妙

樂城又云極樂无爲涅槃界隨緣雜善 恐難生故使如來選要法教念彌陀專 復專又云從佛道遙歸自然自然即是 彌陀國无漏无生還即眞行來進止常 隨佛證无爲法性身又云彌陀妙果	□□□□如來眞說宗師釋義明知 顯安養淨刹眞報土惑染衆生於此不	能見性所覆煩惱故經言我說十住菩薩 少分見佛性故知到安樂佛國即必顯佛 性由本願力回向故亦經言衆生未來具 足莊嚴清淨之身而得見佛起信論曰 若知雖說无有能說可說亦无能念可 念名爲隨順若離於念名爲得入得入 者眞如三昧也况乎无念之位在於妙覺 蓋以了心初生之相也而言知初相者所謂
--	-----------------------------------	--

※□は削除される前に存在していたと思われる文字を示す

### 〈図3-4〉『述文贊』周辺の原形

果號曰无上涅槃國土即廣大莊嚴徧滿自然衆寶已上抄出「爾者」であったが、『述文贊』を挿入することを目的として袋綴を切り開くと同時に、『浄土論』で既に仏土について「廣大无边際」（『真蹟集成』二・四三九、前期筆跡）と示されているものと意味上で重なる言葉でもあることから、削除されたと考えられる。いずれにせよ、切り取られた箇所には、『法事讚』の残りに引文指示語を付したものに、真仏土結釈の初めの接続語を加えた約二十字があったと考えられる。

よって、当初は『法事讚』までの善導疏と真仏土結釈が接続していたといえるが、当初の状態と現状とでは、構成が異なることを示唆してい

る。『述文贊』が当初はこの位置になかったということは、引用文の構成に少なからず変化があったことが認められるとともに、『述文贊』がなかったことで真仏土結釈の役割も現在とは異なることが考えられる。真仏土結釈と『大経』やその註釈による十二光などは、当初は位置的に離れていたこと、真仏土釈や真仮対弁の御自釈内引用が『大経』や『浄土論』であるのに対して真仏土結釈は『涅槃経』であることから、「真仏土巻」の構成に少なからず変化があったことがわかる。

そこで、親鸞によるテキスト生成における転換点の一つとして、『述文贊』を含んだ「真仏土巻」の配列が変化した可能性について考慮すべきである。

### 第三項 『述文贊』裏書の意義

『述文贊』は『教行信証』には「教巻」に一文、「行巻」に十文、「真仏土巻」に一文、「化身土巻本」に一文、計十三文引用されている。その引用の時期について、坂東本一連の執筆順から考えると、「真仏土巻」より前には「教巻」と「行巻」の引用があるが、「教巻」は後期筆跡によるもので、坂東本当初からのものと断定することができない。そこで、最も古いと考えられるのが「行巻」大行釈の『述文贊』引用(『真蹟集成』一・九三〇―九七)である。鳥越の筆跡変遷資料によると、「行巻」の『述文贊』周辺は坂東本では前期筆跡時に当たり、この辺りには改訂の跡も見られない。すると、『述文贊』そのものは当初から『教行信証』の構想に含まれていたものであり、「真仏土巻」の初期改訂の時に初めて挿入されたものではないといえる。

また、「真仏土巻」では『述文賛』は料紙を切り開いた裏面に書き入れられているが、これと同様の方法で引用している箇所が、前期筆跡時に袋綴を切り開いて裏書された、「化身土巻本」要門釈の「上憬興師云由疑佛智雖生彼國而在邊地不被聖化事若胎生宜之重捨」（『真蹟集成』二・四八三）である。文字の書き入れの数は異なるが、位置としても遠くなく、共に裏書している点は、改訂の時期を推定する際に重要な点となり得ると考えられる。重見は改訂時期について「化身土巻末」までの一連の改訂と関連して考えているが、この裏書という事実も推定に関係していると思われる。

「化身土巻本」の『述文賛』周辺については、「真仏土巻」のそれよりさらに複雑な状態を見せている。直前の本文が「大經」（同四八二）で終わり、以下『大經』『如来会』『定善義』の文が欠失してしまっているのである。<sup>(42)</sup>しかし、鳥越によれば、江戸期模写本のうち、教行寺本にのみこの欠落箇所が書写されているとい<sup>(43)</sup>い、少なくとも教行寺本書写までは坂東本に存在していたと考えられる。ここで注目したいのが、構成面の<sup>(44)</sup>変化であり、善導疏の次に挿入する形で裏書されているという事実である。

「真仏土巻」においては、引用の背景を考慮しても『述文賛』構想としては初めから含まれていたが、書き入れられて現在の位置となったのは、「真仏土巻」を一旦書写した後の初期改訂のことといえよう。それは、善導疏の次に配置しようとする操作であったことで、『述文賛』裏書が共通しているのである。

#### 第四節 「真仏土巻」の構成変化試論

本章の最後に、これまで述べてきたことを踏まえて、「真仏土巻」全体の生成について考察してみたい。坂東本第四冊「真仏土巻」は、第三冊「証巻」に次いで前期筆跡時の様相を残しているが、その筆跡変遷については、既に赤松や重見らによって紹介され、現状の坂東本に至る過程などが示されている。<sup>(45)</sup>さらに、中期・後期の筆跡も含んでおり、幅広い変化を目にすることができ一冊である。「真仏土巻」に限れば、以下のような成立過程と考えられている（括弧内の数字は、『真蹟集成』二の『教行信証』頁数を示す）。

執筆 前期筆跡 五八〜六三歳頃 八行書本文

訂正 本文とほぼ同時 頭註（四〇三・四二九・四四二・四四八・四五一・四六二）

『論註』八字（四四七）

墨による塗抹（四六一）

改訂 中期筆跡 七〇〜七五歳頃 『涅槃経』追加（四三二）

書改 後期筆跡 八〇歳前後 『涅槃経』自筆書改（四二五〜四二八）

『涅槃経』異筆書改（四三五〜四三八）

朱筆補記（三九九・四六九）

補筆 八四歳以降 標拳（三九八）、外題（三九五）

その他、紙面の上下余白にある矢印のような「合点様の記号」なるもの、『大阿弥陀経』引用文中の「光明

中之極明」「諸佛中之王也光明中之至極也」等に見られる傍線などによって、坂東本の訂正や内容の確認の様相、親鸞の注意した箇所や文言が窺える。前節・前々節で述べたように、『讚阿弥陀仏偈』や『述文贊』周辺の初期改訂箇所をふくむ「真仏土巻」は、改訂によって配列が変化した可能性がある。その可能性を考慮すること、初期改訂の意義について考察したい。

## 第一項 「真仏土巻」の内容分類

現状の内容・構成については、御自釈の言及や引用文の内容などによって、經典・論書・釈書の別、光明無量・寿命無量の別、真仏・真土の別の、三つの視点で分類することができる。

第一に、經典・論書・釈書の別とは、坂東本における「言」「曰」「云」の引文導入語によって、各引用文を經典・論書・釈書の三つに分類したものである。<sup>(46)</sup>現状の坂東本「真仏土巻」では真仏土釈のもと、經典二十文、論書八文、<sup>(47)</sup>釈書六文が、真仏土結釈にかけて引用され、また、真仏土結釈では既に引用している『涅槃經』二文を再度掲げ、『起信論』がこれに続いている。

第二に、光明無量・寿命無量の別とは、神子上恵龍の指摘をもとに分類したもので、真仏土釈に引用された文をそれぞれ光明・寿命に当てはめて分類した。<sup>(48)</sup>神子上は、光明無量を証する引文として『大經』第十二願文・『大經』第十二願成就文・『如来会』・『平等覺經』・『大阿弥陀經』・『讚阿弥陀仏偈』・『述文贊』を挙げ、

寿命無量の引文として『大経』第十三願文・『大経』第十三願成就文・『不空羂索経』を挙げている。このように、寿命無量より光明無量の引用文が多い理由としては、教理史的に阿弥陀仏の仏格について寿命無量を強調しなければならぬ問題は既に解決されていたこと、また「真仏土巻」は撰化門の立場に立つて記述されたからであるという。真仏土積で「既而有願即光明壽命之願是也」（『真蹟集成』二・三九九）と示されたものに基づいて分類していったのがこの光明無量・寿命無量の別である。これは、標挙や御自釈に示された願名を中心として引用文が配置されていると見、その願名の意を各引用文に配当して検討されたものであり、引用文それぞれの性格を端的に捉えるために重要な視点であろう。

第三に、真仏・真土の別とは、「真仏土巻」巻頭巻尾の御自釈中引用文に従って、引文の主題を分類しようとする本研究の試みである。中国浄土教においては、浄影寺慧遠を嚆矢として諸仏とその浄土についての研究、仏身仏土論が盛んとなったが、阿弥陀仏の仏身・仏土については、聖道諸師による弥陀応身応土説に対して、道綽・善導・源信の各師は弥陀報身報土説を証明し、親鸞もこの流れを承けている。

まず、真仏土積には「佛者則是不可思議光如來」「土者亦是無量光明土也」（『真蹟集成』二・三九九）とある。仏として『無量寿如来会』や『讚阿弥陀仏偈』の文、土として『平等覚経』の文が挙げられている。また真仮対弁には、「眞佛者大經言无邊光佛无導光佛、又言諸佛中之王也光明中之極尊也」<sup>上</sup> 論曰歸命盡十方无導光如來也」「眞土者大經言无量光明土 或言諸智土」<sup>上</sup> 論曰究竟如虛空廣大无边際也」（同四六七）とある。真仏として『無量寿経』『大阿弥陀経』『浄土論』、真土として『平等覚経』・『如来会』・『浄土論』の文が挙

げられている。この言及に留意して、仏と仏土に分けて捉えれば、各引用文と御自釈との連関を整理することができるのである。

さらに、他経引文や善導引文については、真仏土結釈との連絡関係がある。真仏土結釈は坂東本の当初は善導の文に直接しており、真仏土結釈には『涅槃經』二文と、それに続いて馬鳴撰とされる『起信論』（実際は飛錫『念仏三昧宝王論』の文）が御自釈内引文に近い役割で引用される。「如來眞說宗師釋義」によると安養淨刹は眞の報仏土であり、惑染凡夫は煩惱によつて仏性を見ることができないが、本願力回向によつて安樂仏国に至つて必ず仏性を見ることを、『涅槃經』引用後半部の衆生仏性の引用が裏付けする役割を持つ。一方、善導については、真仏土結釈のように安養淨刹眞報土についての引用である。前半は『無量壽經』第十八願を中心に弥陀報仏報土と凡夫入報を証明しており、『淨土論』・『論註』引文の内容から展開したものである。後半は弥陀仏土を「无爲涅槃界」と称し「彌陀妙果号曰无上涅槃」と示したもので、『涅槃經』前半と関連する。また、当初は『法華讚』と真仏土結釈が連続していたと考えられることから、善導引文は主に眞土についてのものであつて真仏土結釈で結ばれるべき引文群といえる。『涅槃經』と善導については、「如來」や「報身」とあることから仏身についての表現が見られるが、善導が「極樂无爲涅槃界」とするよう、主に眞土についての引用であり、往生後に涅槃の徳を受ける土であることを示したものと見えよう。

このように、御自釈に顕された文言や御自釈中引用文が、「真仏土卷」を構成する引用文中に鏤められてい

る。これこそが、「真仏土卷」のもう一つの特徴である。

## 第二項 初期改訂と現状

前項のような内容については、「真仏土卷」に複数確認できる引文接続部の錯綜状況とが大きく関わっていると考えられる。それが第一節で「切り取り」や「袋綴切り開き」と確認した(5)『大阿弥陀経』・『不空羂索経』間、(6)『論註』・『讚阿弥陀仏偈』間、(7)『讚阿弥陀仏偈』・『玄義分』間、(8)『法事讚』・『述文贊』・真仏土結釈間の各接続部の大幅な書改や切り取り、散佚等の錯綜状況である。<sup>(49)</sup>

(5)については、直後に空白があることから、この箇所を構成を考えると、もともとは引文の役割が異なっていたことが伺える。(5)より前の『大経』から『大阿弥陀経』までは、正依と異訳の大経によって光明無量・寿命無量の願と願成就について述べられており、〈大経群〉とすることができる。一方、(5)の次の大きな空白の後に配置される『不空羂索経』は、現在の位置から推定すると、元来は「清淨佛土」の語を必要とした、仏土に関する引用であり、初期改訂によって『大阿弥陀経』とつながることで、寿命無量の経証である意味も強まったのではないか。<sup>(50)</sup>

次に、(6)(7)は『讚阿弥陀仏偈』前後の切り取りを伴う改訂である。この改訂に関しては、重見も不思議な改訂と指摘している通り、不可解な点が多い。<sup>(51)</sup>しかし、(6)の箇所は、「真仏土卷」一連の執筆時には『往生論註』終わりの八字を料紙に続けて書かず、本文としては『讚阿弥陀仏偈』冒頭の割註の途中から書き始めら

れている。そこで、そうした書き方の意図を前期筆跡時の状況、特に(5)～(8)の初期改訂箇所との関連から推定すると、本文執筆時に何らかの配置転換をするために、(6)(7)の改訂時に、切り貼り等の改訂が施されたと推定される。その改訂の必要性を考えると、既に『讚阿弥陀仏偈』初めの二十五字が記されていた二行分の紙片を貼紙として利用しつつ、<sup>(62)</sup>『讚阿弥陀仏偈』をこの位置に配置することを目的として施された改訂と考えられる。

次に、(8)は、当初は『法事讚』と真仏土結釈が連続していたと考えられている。これと『不空羂索経』以下、『涅槃経』や『浄土論』『論註』、善導疏の引文の役割とを考え合わせると、真仏土結釈にいたるまでの「真仏土巻」後半部では、「仏土」を顕すことを主な目的として引文が展開されていたと推定することができる。

以上、坂東本「真仏土巻」における書誌的問題点と引文接続部の錯綜状況を概観した結果、前期筆跡の本文執筆時あるいはその直後に『讚阿弥陀仏偈』・『述文賛』を中心に大幅な引用文の挿入・削除等の改訂があったと考えられる。その後は中期筆跡・後期筆跡による『涅槃経』の増補・書改があり、外題や標挙の書き入れ、袖書「釋蓮位」の書き入れを以て坂東本「真仏土巻」は完成を見た。そのような中で、「真仏土巻」において、前期筆跡時に料紙を切り取ってまでの四箇所改訂を施すことによって、現在見られる引用文の配置がほぼ確定したことは間違いない。(5)(6)(7)(8)の改訂が、「真仏土巻」テキストの生成に大きく関わったと見られるのである。

## 第三項 「真仏土巻」の構成変化

現在の引用文の配置は、〈大経群〉（『大経』・『如来会』・『平等覚経』・『大阿弥陀経』）で光寿二無量の願・願成就を示し、さらに『不空羅索経』・『涅槃経』・天親・曇鸞・善導・憬興の順に引用文を並べることで、阿弥陀仏とその浄土が報仏・報土であることを助顕するという並びが見られる。この配置については、御自釈に真仏・真土として示した「真仏土」を顕す方法として、経典・論書・釈書の順に示すことが、「真仏土巻」の構成として落ち着いたことを示している。『教行信証』の真実五巻の関係は往生門と正覚門があるとされるが、真仏・真土あるいは光寿二無量の証文を、内容的に分類せず、御自釈を交えずに並べていることが内容的な特徴となった。

しかし、(5)〜(8)の改訂箇所を除けば、『涅槃経』以下は阿弥陀仏とその浄土が報仏・報土であることを助顕するための引用であり、真仏土結釈における御自釈中『涅槃経』引文で結ばれている。こういう引用群がまとめられるとすれば、「真仏土巻」の引証では、『大経』から『不空羅索経』にかけては光寿二無量の経証が並べられ、『涅槃経』とそれ以降の論書・釈書では主に真報仏土であることが述べられていることになる。『涅槃経』から『法事讃』では主に真報仏土について示す引文が多く、真仏土結釈では『涅槃経』と『起信論』（念仏三昧宝王論）が引かれて結ばれているのである。

一方、「真仏土巻」における四箇所的前期改訂箇所は、全て光明無量を証する文の周辺に当たり、また真仏・真土の分岐点という点でも共通している。すると、『涅槃経』以下の阿弥陀仏の浄土が報土である旨を示し

ていく段において、十二光を中心とする引文である『讚阿弥陀仏偈』と『述文贊』の配列が組み込まれた結果になっていることに注目したい。

第二節で検討した『讚阿弥陀仏偈』引文は、その引意を考えると、十二光に注目すれば『大経』を助顕するための引文であるが、寿命無量の句も省略されていない。引文指示語によって『論註』と一連である面を強調すれば真仏についての引証でもあるが、「曰安養」を考慮すると真土についての言及もある。<sup>(54)</sup>『讚阿弥陀仏偈』が論書の位置に配置されたことや後半部に「安樂」「阿彌陀淨土」などとあることを考えると、『大経』十二光の助顕のみならず、身土不二を示すための引用であることが明瞭になると考えられる。この改訂箇所については、『讚阿弥陀仏偈』が現在の位置に組み込まれた時期の推定は困難であるが、一連の執筆時に書かれた割字には「亦曰安養」（『真蹟集成』二・四四八）とあり、散佚部分を含めて「南無阿彌陀佛」が『大経』等で用いられる「安養」という仏土名で示されていることから、真仏あるいは真仏土を顕すことが、『大経』等で光明無量・寿命無量の願とその成就を示し終わった後の引用文が果たす役割であろう。そして改訂の実態からは、『讚阿弥陀仏偈』初めの二十五字が記されていた二行分の紙片を貼紙として利用しつつ、この位置に配置されたと考えられるのである。

次に『述文贊』については、袋綴状態を切り開いて書き入れられているが、『讚阿弥陀仏偈』のように紙片や貼紙での補訂とはならなかった。<sup>(55)</sup>十行分の挿入は紙片の貼り付けでは対応できない量であること、第一章で述べたような『述文贊』の割註化という特殊性からも、裏面に書き入れたと思われる。では、当初はどの

位置にあったのか、それは、元來『述文贊』は『大経』異訳の直後が最適である。内容としては十二光に関する文として位置づけられていたが、本文執筆時或いはそれに近接した早い時期に現在の善導疏の次の位置に挿入されたのではないだろうか。それは同時期の裏書と思われる「化身土卷末」と同様の趣旨と思われる。当初は、『述文贊』を『大経』等の後、『不空縹索経』の前に存在させることを想定していた。これは、『大経』の註釈書としての役割からであり、「教巻」にも似た構造があった。

これまでの検討をもとに、現在の構成要素から坂東本「真仏土卷」の成立過程をまとめると、次のようになる。すなわち、当初の構成は、光寿二無量の〈大経群〉と真報仏土の〈他経・論・釈群〉に大別されて、『讚阿弥陀仏偈』や『述文贊』は前者に近接した位置にあった。しかし、坂東本の初期改訂によって、切り継ぎ改訂が行われることになり、(5)『大阿弥陀経』後、『不空縹索経』前の文を約十行分削除し、(6)(7)『讚阿弥陀仏偈』の挿入と前後の文の切り取り、(8)袋綴を切り開いて『述文贊』等二百三字を裏書、という大きな改訂がなされることになった。この改訂は、現在のような經典・論書・釈書の順に整然と配列した引用文の構成とするためであったと考えられるのである。

前期筆跡から後期筆跡まで隈なく残す坂東本「真仏土卷」においては、その主題は、真仏と真土であって、衆生が往生して成仏する世界であることをあらわすという側面と、十方衆生を救済する根源としての世界をあらわすという側面があるとされる。<sup>(56)</sup>この真仏・真土を顕す方法として、『大経』十二光に着目すれば、十二光を挙げる『大経』をもとに、十五光を挙げる『如来会』、光明の徳を文によって顕す『平等覚経』・『大阿弥

陀經』、十二光の名義を讃ずる『讚阿弥陀仏偈』に続いて、『述文贊』において十二光を文に随つて略弁して『大経』第十二願成就文を助顕されている。一方、『涅槃経』や善導疏については、真仏土結釈に繋がつていく真報仏土についての引用文であった。これらの引用文を、「真仏土卷」の構成である〈経典・論書・釈書〉の順に引用文を配列し直したのが、初期改訂の意義と認められるのである。

## 小結

蒐集された引用文は適宜配置されていくが、坂東本では貼紙・塗抹・訂記・書改など、様々な方法で改訂が行われた。坂東本初期改訂時の、切り取り削除を含む改訂は、単なる引用文の追加や削除に留まらず、引用文の役割変化によって配置が転換された可能性が含まれていた。

寛元元年（一二四五）尊蓮の書写前までに『教行信証』の内容がおおよそ確定していたと推定される。前期筆跡時から中期筆跡時の改訂は、内容の削除や増幅、差し替えが目的であつて、諸経論釈の抄出・書写を通して、さまざまな配列の変化などが生じていた。本文の一応の書写の後は、切り取り削除による本文調整の方法が前期筆跡時に行われ、紙面の追加による増幅が中期筆跡時の改訂である。これらを組み合わせるのが、親鸞によるテキスト形成の方法であり、それを整理したのが後期筆跡時であると位置づけられる。

坂東本前期筆跡箇所のうち、「行巻」に二箇所、「信巻」に一箇所、「真仏土巻」に四箇所、「化身土巻本」に七箇所、「化身土巻末」に四箇所<sup>1</sup>の切継を含む改訂が認められる。本文の内容を比較すれば、道綽、善導、憬興の書の周辺に多いことが特徴である。『大経』やその異訳部分には殆ど見られず、前期筆跡時では、主に釈書の削除・追加・配置の変換などが行われたものと考えられる。

このように、前期筆跡時に関しては、大幅な改訂は無いものの、目に見えて削除改訂を行っている箇所が多く見受けられ、そのままの状態<sup>2</sup>で現在まで伝えられている。坂東本執筆当初から改訂を行っていることについては、これまであまり注目されていないが、これこそが坂東本における「清書」の内実であり、中期・後期の大规模な改訂の前に既に改訂が行われていたこと、そしてその改訂が雑多なために大きく改訂したのが中期・後期の筆跡に属する紙面状態の変化であったと、それぞれの筆跡時の状況を窺うことができる。

## 註

- (1) 「顕浄土真実教行証文類 解説」(『顕浄土真実教行証文類』附録篇一所収、真宗大谷派宗務所、二〇一二、二五九頁) 参照。
- (2) 赤松俊秀「教行信証の成立と改訂について」(『親鸞聖人 眞蹟 国宝 顕浄土真実教行証文類影印本』所収、大谷派本願寺宗務所、一九五六、以下「赤松俊秀昭和本解説」と称す)。

- (3) 鳥越正道『最終稿本教行信証の復元研究』(一九九七、法藏館)二四二頁。
- (4) 若林真人「坂東本『正信偈』の推敲跡をめぐって」(『行信学報』一一、一九九八)。
- (5) 赤松俊秀昭和本解説。
- (6) 重見一行『教行信証の研究—その成立過程の文献学的考察』(法藏館、一九八一)第四章第三節「坂東本各部染筆時期」(二一九八〜三二八頁)。
- (7) 赤松俊秀昭和本解説五頁下〜六頁上。
- (8) 教行寺本は、『大阿弥陀経』九十一字が「化身土卷末」「大集経」日藏分念仏三昧品中に挿入され、東本願寺本では後序に挿入されている。重見一行前掲書七一〜七九頁、鳥越正道前掲書七九頁参照。
- (9) 鳥越正道前掲書巻頭図版「教行寺本2C4(四四七頁・真佛土卷)」参照。
- (10) 坂東本江戸期模写五本は、共通して『真蹟集成』二・四四五頁と四四八頁を一紙とする袋綴で、教行寺本以外は『論註』引用最後の八字の記述がない。(鳥越正道前掲書五〇頁)。
- (11) 鳥越正道前掲書五〇頁参照。
- (12) 西本願寺本は『縮刷本』六二一、専修寺本は『専修寺本』四九二。
- (13) 『真蹟集成』二・四五一〜四五四頁。『讚阿弥陀仏偈』「徳若大小」以下の「真仏土卷」五十八頁分は、教行寺本では「化身土卷末」「日藏経」巻第十護塔品第十三の本文中に挿入され、東本願寺内局本では「化身土卷末」後序中に挿入されている。重見一行前掲書七一〜七九頁、鳥越正道前掲書七九頁参照。
- (14) 『讚阿弥陀仏偈』には冒頭の名号細註に「無量壽傍經」(『聖典全』一・五三五)とあり、『安樂集』では「大經贊」(『聖典全』一・五八六)などがある。

- (15) 智光『無量寿経論釈』、源隆国『安養集』、『安養抄』のほか、隆寛『弥陀本願義』に引用がある。また、京都府大原来迎院蔵良忍手沢本には「羅什法師作」とあり、永超『東域伝灯目錄』にも「羅什」とある(『原典版七祖篇』一四五八頁解説参照)。
- (16) 灘本愛慈『讚阿弥陀仏偈要解』(永田文昌堂、一九七九)一七頁参照。
- (17) 「真仏土卷」の朱筆は、内題『真蹟集成』二・三九九)、『大阿弥陀経』(同四〇四・四〇六)、『涅槃経』(同四二・四一六・四一七・四二九・四三〇・四三二)、『論註』(同四四二・四四七)、『讚阿弥陀仏偈』(同四四八・四五二)、善導疏(同四五八・四五九・四六〇・四六一)、『述文贊』(同四六五)、真仮对弁(同四六九)、尾題(同四六九)にある。
- (18) 赤松俊秀昭和本解説一五頁。
- (19) 赤松は、昭和版影印本作成時点では既に切り開かれており、西本願寺本などでは「鸞和尚造也」が本文に取り入れて書写しているという(赤松俊秀昭和本解説)。また、小川貫弑は、この脱文を根拠にして初稿本の存在理由としている(『教行信証撰述の研究』二二八〜二二九頁)。
- (20) 重見一行前掲書三一六頁。
- (21) 鳥越正道前掲書二六頁・四五頁。
- (22) 鳥越正道前掲書二五六頁参照。
- (23) 赤松俊秀昭和本解説一五頁。
- (24) 重見一行前掲書三一六頁。重見は「化身土卷」の切り継ぎ(『真蹟集成』二・四八一〜四八八、四九九〜五〇一、五〇五〜五〇八、五二七〜五二八、五三〇〜五三六、五五五〜五五八、六六五〜六六六、六六九〜六七〇、六七五〜六七八)について、「ここ」で後の切り継ぎを含めていえば、これ等の一連の切り継ぎ補記は化巻未までの順次の書写後すぐに行われたもの

と考えられるのである」(重見一行前掲書三一九頁)と述べている。

(25) 字数は、現在三十字、当初百二十字ほど多かったとされる。赤松俊秀昭和本解説一五頁下参照。

(26) 小川貫弑は、『讚阿弥陀仏偈』冒頭の脱文について、

「阿弥陀仏」「南無阿弥陀仏」の名号の文字があつたから後人が切り取つたのであろう。これと併せ考へられるのは、阪東本の教巻にある唐訳大経の経題から「无量寿如来」の五文字が截除されてゐることである。これらはこの阪東本が一時期糊ばなれして錯乱してゐたところ、本尊に名号を尊重するので親鸞真蹟の本書からこのところを切りとつたのであろう。

と推測している(「阪東本『教行信証』の成立過程」、慶華文化研究会編『教行信証撰述の研究』所収、二二九頁)。

(27) 鳥越正道前掲書五〇頁。

(28) 同様に大きな空白が見られるのは、「信巻」三一問答・字訓釈前(『専修寺本』二二二)のみである、その他六行書きとしては「総序」後の標列(同一四)が挙げられる。なお、三一問答字訓釈前の空白は、坂東本(『真蹟集成』一・一九三)の空白を保持したものと推定される。

(29) 『顕浄土真実教行証文類(坂東本) 影印本解説』(真宗大谷派宗務所、二〇〇五) 四二頁。以下、「平成版影印本解説」と示す。

(30) 「真仏土巻」「述文賛」周辺の改訂について述べた論考に、赤松俊秀昭和本解説、瀧岡孝昭「国宝本「教行信証文類」の改稿と完成」(『帯広大谷短期大学紀要』四、一九六七)、重見一行前掲書、平成版影印本解説(『顕浄土真実教行証文類(坂東本) 影印本解説』真宗大谷派宗務所、二〇〇五)、三木彰円「坂東本・教行信証と親鸞 第十六回「坂東本」の形態⑨」(『真宗』一二五七、大谷派宗務所、二〇〇八、以下、「三木彰円報告⑨」と示す)がある。前者三本は昭和期修復を承けた

もので、残りは平成期修復後のものである。これらの先行研究は、おおよそ赤松の主張に沿って坂東本の現状から改訂の状況を推定されている。これらで主に言及されているのは、坂東本当初の状態の推定、改訂の推移、改訂の時期についての三つである。

- (31) 三木彰円報告⑨参照。
- (32) 赤松俊秀昭和本解説一六頁。
- (33) 平成版影印本解説四二頁。
- (34) 三木彰円報告⑨参照。
- (35) 赤松俊秀昭和本解説一六頁。
- (36) 平成版影印本解説四二頁。
- (37) 三木彰円報告⑨参照。
- (38) 赤松俊秀昭和本解説一六頁。
- (39) 瀧岡孝昭前掲論文参照。
- (40) 重見一行前掲書二一七頁。
- (41) 鳥越正道前掲書二四一頁。
- (42) 大谷大学編『顕浄土真実教行証文類』翻刻篇（真宗大谷派宗務所、二〇二二）「補註」七二八頁では、坂東本で欠失した分の専修寺本五十八字・西本願寺本五十八字を示している。
- (43) 鳥越正道前掲書四五、七九頁。この箇所の教行寺本については巻頭の図版2C6に掲載され、さらにそこからの復元案として資料3D（二五七頁）が提示されている。

- (44) なお、『浄土三経往生文類』（『聖典全』二・五九六上下）にも「定善義」・「述文贊」の同文が連引されている。しかし、文類の中での配置については要門釈にある「化身土卷本」と弥陀経往生の段にある『浄土三経往生文類』とでは差異があり、周辺の『大経』『如来会』『要集』の文との接続も異なるようである。桃井信之「親鸞浄土教と『述文贊』（『印仏研』五一―一、二〇〇二）参照。
- (45) 赤松俊秀昭和本解説一三〇―一六頁。重見一行前掲書六一―六四、一三六―二四〇、三一四―三一七、三二九―三三二参照。
- (46) 「引文導入語」とは、それぞれの引文が引用されるに当たって経論釈名の次に示された書かれた語で、『教行信証』では一部を除いて経・論・釈それぞれに「言」「曰」「云」が当てられ、厳密に使い分けられている。その語は鳥越正道前掲書二二―二六頁の用例によった。
- (47) 『往生論註』第二―六文は「又云」と引用されるが、『浄土論』の註釈として『讚阿弥陀仏偈』と共に「論」部に含めることができる。
- (48) 神子上恵龍『弥陀仏身仏土論の展開』（永田文昌堂、一九六八）一四六―一四七頁。
- (49) 後期筆跡時及び異筆の『涅槃経』・『浄土論』間については、『涅槃経』引文後半は、仏性に関する文が集められており、それに關する改訂・書改であろう。『真蹟集成』二・四三二の貼紙による追加と、計四枚分の書改がこれに当たる。赤松は、『真蹟集成』二・四二五―四二八について、「信卷」宿紙部分と同時期かそれより早い時期の親鸞自身の筆致であるとし、一行当たりの字数が多いことから三百五十六字の『涅槃経』文の挿入を想定している。また、『真蹟集成』二・四三二の貼紙は『真蹟集成』二・四二五―四二八に近い筆致と認定し、同四三五―四三八の書改部分は引用文の逸脱あるいは料紙の破損によって「行卷」の異筆箇所（『真蹟集成』一・一一一―一一二）と同様に細書が困難となったために弟子に依頼して四丁分にまとめた他筆であろうとしている。当箇所は、尊蓮書写前において、貼紙（『真蹟集成』二・四三二）追加によって

本文が確定し、後の専信本書写の前に貼紙等による雑多な状況について、体裁よく繋ぐ為に修正を施したと考えられる。実際に、書改の最終行である『真蹟集成』二・四三八第八行の『浄土論』が二十字と周辺の行と比べて著しく字数が多く、前期筆跡時の次丁に首尾よく繋げるよう書写されている。

- (50) 『不空羂索経』には「壽命无量」の語もあるが、「阿彌陀佛清淨報土」の語を必要とした引用であると考えられる。坂東本の初期改訂では『不空羂索経』前の文が約十行分も削除されており、浄土経典ではないことから、当初は『大阿彌陀経』以前の文とは一定の距離があつたと考えられる。

- (51) 重見一行前掲書三二六頁。

- (52) 推定される貼紙（現在は散佚）は、鳥越正道前掲書二五六頁に欠損箇所への復元試案が提示されている。

- (53) 村上速水『教行信証を学ぶ―親鸞教義の基本構造―』（永田文昌堂、一九九六）二〇五頁。

- (54) 『唯信鈔文意』には「極楽」の解釈として、「かのくにおぼ安養といへり。曇鸞和尚は、ほめたてまつりて安養とまふすとこそたまへり」（『聖典全』二・七〇〇～七〇一）とある。

- (55) 『述文贊』を既にどこかに記入していた場合、その紙面の行方は不明であるが、坂東本の「無量寿」や「南無阿彌陀仏」等の名号などが書かれていたと思われる紙面については散佚していることがある。たとえば、「教卷」『如来会』の「無量壽如来」（『真蹟集成』一・一九）や「真仏土卷」『讚阿彌陀仏偈』の巻頭（同二・四四七に相当）が散佚している。

- (56) 内藤知康『教行信証』の概説（『顕浄土真実教行証文類 解説』所収、浄土真宗本願寺派宗務所、二〇一一、四七頁）。



## 第四章

### 西本願寺本の体裁と本文

## 第四章 西本願寺本の体裁と本文

西本願寺本の書写者や書写年時については、現存の奥書からは判然とせず、周辺史資料による推定に留まる。そのため、書写の実態を把握することから西本願寺本の制作意趣を明らかにすべきである。西本願寺本は、坂東本を臨写したものと推定される。しかし、坂東本との文字や体裁の異なりはもちろんあり、坂東本には見られない本文の構造的把握を行っているのが西本願寺本の特色である。

本章では、西本願寺本における本文の書写と註記の記入状況を課題として、西本願寺本の書写本としての独自性を明らかにし、なぜその制作が企図されたのかについて追及する。

### 第一節 西本願寺本の書誌

西本願寺本に関するこれまでの研究では、①書写年代、②筆跡、③本文、④奥書の四点が議論の焦点であった。本文と奥書、訓点、註記との関係が考察され、そこに大きく筆跡鑑定の方法が取り入れられているといった次第である。序論で示したように、中井玄道は、「書史学」に依拠しているわけであるが、その項目の中でいえば、西本願寺本の形状、装丁、巻帙、紙質等については、従来の研究・解説及び影印本・写真版

等の公刊によって知られるところである。現状の課題としては、中井が外形の項目の五番目以降として挙げている、書写や印刷時、更に伝来・流布の問題、あるいは統計書誌学的研究となる内容解明によって書目を分類するという課題が残っている。また、坂東本等諸本との相異は少なからず存在していることは確かである。個別の書誌情報それぞれの状態を的確に捉えることから始めなくてはならない。

### 第一項 研究課題

平成期の復刻本や縮刷本の解説では、西本願寺本の研究課題が指摘されている。まず、復刻本解説では、書写者について、

西本願寺本の筆蹟からは該当する人物は確認されておらず、このことは未だ明らかになっていない。書写者の名を明言し得る史料は未だに発見されておらず、新しい史資料の発見も含め、今後の研究が大いに期待されるところである。

と述べている。<sup>(1)</sup> また、縮刷本解説では、書写者について如信の可能性を挙げ、

「西本願寺本」の特徴である経論釈や御自釈の改行は、「坂東本」における「化身土巻」『大集経』の引用にならったものと考えられるので、「西本願寺本」の書写者は聖人が「化身土巻」を補訂されていたときに学んでいたと思われるからである。しかし、筆蹟はもとより明確な史料がないので書写者につい

ては未だ明らかになっていない。

としている。<sup>(2)</sup>

西本願寺本における研究課題の第一は、書写者が不明であることであり、書写者に関する史資料の発見が一つ目の課題解決の方法ということになる。しかし、その史資料を待つまでもなく西本願寺本そのものの検討を重ねていく方向性は、二つ目の課題解決の方法として必須であるが、これまでの研究蓄積では、なぜ現状に見られるような特徴を有するに至ったのかについて充分に考察されてきたとは言いがたい。

そこで、西本願寺本書誌の諸要素を分析した上で、その総体として書写の実態を捉え、坂東本と西本願寺本の差異について体系的に把握することが現状の課題ということになる。両本の差異を捉えることは、親本を元として書写されることで成立する書写本間のテキスト関係を明らかにすることを意味し、これは『教行信証』の諸本全体に通じうるテキスト論的方法であろう。

## 第二項 形状と内容

日本古典籍に関する書誌学的知見に従えば、<sup>(3)</sup>古典籍の書誌事項は、寸法や装丁、書物を成り立たせるとともに本文等を保護する役割のある表紙、書名を決定する外題・内題・尾題、匣郭・行数・字数・用字・訓点・字様・巻冊丁数などの写式、文体・書体・字様・欠画など文字に関すること、書物の成立などを示す跋・

奥書、前付・後付などが抽出される。これらを〈外的形状〉〈内的形状〉〈内容〉の三項目に大別し、西本願寺本の書誌についても、これらの総体として捉えてみたい。

それでは、西本願寺本の書誌事項について、これまでの研究を参考として概観したい。ここでは、中井玄道『教行信証附録』（仏教大学出版部、一九二〇）「本願寺本」の項、重見一行『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察』（法藏館、一九八二）第二章第二節「西本願寺本に関する考察」、及び西本願寺本の解説にあたる禿氏祐祥『教行信証考証』（一九二三）、平成期の復刻本解説「西本願寺本の書誌について」（二〇一一）と縮刷本解説「西本願寺本『教行信証』の特色について」（二〇一一）を用いる。

第一に、〈外的形状〉としては、調卷・寸法・装丁・料紙、表紙・見返・外題などについてである。西本願寺本は「教巻」・「行巻」を分け、「信巻」・「化身土巻」を二冊にわけない六巻六冊本である。寸法については、縮刷本解説によれば、第一冊は縦二八・七cm×横二二・三cm、第二冊は縦二八・六cm×横二二・〇cm、第三冊は縦二八・五cm×横二二・一cm、第四冊は縦二八・六cm×横二二・〇cm、第五冊は縦二八・六cm×横二二・二cm、第六冊は縦二八・六cm×横二二・九cmである。斐楮交紙の料紙を用い、袋綴である。元三つ穴綴じの跡が見られ、数度の改装があったとされている。表紙については、現表紙は渋色紙、見返は銀色芝文様に切り金箔が散らされ、背に白地金欄があらわれている。現題簽は、改装時に蓮如筆の旧表紙を剥ぎ取って題簽化したものと考えられるが、第四冊の外題にのみ「文類」の語が無い。第三冊・第六冊の元表紙は失われ、第二冊・第五冊のものは半葉だけが残されている。第四冊の内側の表紙中央には「四」とある。

これらは、西本願寺本に特有のものではあるが、『教行信証』の原形からの改編というわけではない。表紙については、西本願寺本の伝持と改装の中で次第に現状に近づいていったと考えられる。

第二に、〈内的形状〉としては、界（野）、書入、欄外、字様などに関しての事項である。本文の料紙には天・地と縦に押界が引かれる。体裁は半葉七行、一行十二字内外（十〜十四字程度）である。本文や一部の書き入れは墨、訓点や合点・註記類などは朱で書き入れられている。欄外には坂東本では縦書と横書の書入があるのに対し、西本願寺本では縦書に統一されている。こうした書き入れは坂東本の機械的書写とも評されるが、統一感が保たれているともいえよう。字様については、坂東本の字体を模し、ほぼ後期筆跡で統一されていることを特徴とする。本文は適宜改行し、原典が偈文の場合は偈頌体を多く用いる。

以上によれば、坂東本に依りつつ、独自の書写方式で本文整備したことがわかる。

第三に、〈内容〉としては、標列・標挙、題号・撰号、本文、註記、奥書の細目に分けて書誌的事項を分析する。各巻初めの書き入れは標挙・標列であり、おおよそ坂東本の位置や内容に沿って書写されているが、「総序」前に「大阿彌陀經 友謙三藏譯／平等覺經 帛延三藏譯」の二行十九字、「総序」後に標挙・標列、「教卷」尾題後に再び標挙・標列を書写するのを特徴とする。また、「化身土卷」の標挙が失われている。各巻標挙の後に内題・撰号、さらに巻尾に尾題がある。本文は、坂東本で欠損箇所が多い「総序」・「教卷」を完備する。坂東本を忠実に書写したもので誤写は少なく、坂東本の補記や訂記を悉く本文に反映している。また、「竟」「競」「境」「敬」「教」などに欠画文字（避諱欠筆）を使用している。さらに朱書によって、右左

訓や返点、合符、声点などが書写されるが、坂東本と比べてかなり多い。異本情報として「イ本」、「イマ本」「アル本」などの註記があり、数種の本と校合していたと考えられる。最後に、奥書については、第六冊「化身土巻」の尾題後に「和光同塵結縁之始 八相成道以論其終シユ反 オワリ」（朱書）があり、次丁「弘長二歳壬戌十一月廿八日／未剋親鸞聖人御入滅也」の二行を残して、以下裁断されている。

以上、書誌事項から導き出せる西本願寺本の書写方針としては、本文整備という目標があり、体裁面を整えて書写されたが、それに付随して、諸異本の情報を集積することも行われた。そうして生成された西本願寺本には、坂東本にない特徴的な事項がいくつかある。〈外的形状〉としてその特徴が見られるのが、界（罫）と改行であり、行格の統一が図られている。この体裁面の特徴とともに、〈内容〉としての朱墨による書き入れがあり、明らかに坂東本より多くの情報を有していることがもう一つの特徴であろう。

これらについて端的に言及しているのが、重見である。重見は、

更に既述したごとき化巻末尾題の創作、「和光同塵云々」の跋文、点注の朱書統一、引用偈頌の整備等々、出版本をのぞけば、今日伝存しているどの写本よりも整備され偉風をもっている。これ等が、すべて西本書写者の独創であったかどうか判然としない点もあるが、既述のごとき坂東本に対する書写態度を見れば、その可能性は十分ある。

と述べ、西本願寺本は画期的写本であると位置づけている。その、「化巻末尾題の創作、「和光同塵云々」の跋文、点注の朱書統一、引用偈頌の整備等々」という部分には、西本願寺本独自の要素が詰め込まれている。

既に第一章で西本願寺本奥書の問題を述べたので、本章と次章では残りの課題を分析していくこととしたい。

### 第三項 書式

西本願寺本本文書写の基礎となるのは、その書式であろう。書式について、山本信吉は、

①本文の一行の字数が何字で書かれているか。

②本文中には注記があるか。

③卷子装本の場合は料紙の一紙中に、粘葉装本・綴葉装本の場合は半葉中に何行で書かれているか。その場合、料紙に界線が施されているか。

④その界線は墨線か金・銀線か、あるいは押界おしかい（「おつかい」とも読む。ヘラ押しおしかいの線おしかいで白界ともいう）か、また朱線等か。

といった事項を挙げている。<sup>(6)</sup>

西本願寺本の特徴の一つとして挙げられるのが、界（罫）である。西本願寺本では全体にわたって丁寧に押界（白界）が引かれており、全体としては整然としている。ただ、必ずしもそれを忠実に守っているというわけではなく、これをはみ出して書写する場合もあるとされる。<sup>(7)</sup>

半葉あたりの行数については、坂東本ではおおよそ八行書き本文が前期筆跡時、七行書き本文が後期筆跡

時とされる。<sup>(8)</sup> 専修寺本は七行書きで統一されている。西本願寺本は七行書きに統一して書写されている。坂東本の後期筆跡時や専修寺本の行数と共通しているが、後世の書写本や江戸期刊本などは、おおよそ六行書きであり、当時の版本も六行書きが主流であるから、版本の体裁のような書写本を作成しようとしたわけではないと思われる。<sup>(9)</sup>

一行字数については、西本願寺本ではおおよそ十〜十四字を標準としている。<sup>(10)</sup> 坂東本はおおよそ十五字、専修寺本は十四字程度であって、西本願寺本はそれらより少ない字数で書写されている。鎌倉期までの仏教典籍の形態としては、写経や版本の存在が挙げられるが、一行字数については、一般に一行十七字である場合が多く見られる。そのことは『教行信証』諸本においてもあてはまり、重見が多く紹介した本願寺系八冊本などは一行十七字である。重見は諸本の行格を検討する中で、他の仏教典籍との比較を試みているが、<sup>(11)</sup> ここでは西本願寺本について同様の議論をしてみたい。西本願寺本の字詰（一行字数）の意味を親鸞真蹟等と対比しつつ、写経や大蔵経の歴史の中に位置づけてみたいのである。

敦煌写経などによって、中国において六世紀頃から一行十七字となっていたとされるが、それ以前は一行十六字から二十二字前後と特に決まっていなかったようである。<sup>(12)</sup>

その後、大蔵経が出版されるようになるが、その事情については、竺沙雅章による系統分類が多くの研究で用いられている。<sup>(13)</sup> 竺沙は、刊本大蔵経を三種に分類し、第一類蔵経（開宝蔵・高麗版・金蔵など）は、卷子本で每版二十三行・一行十四字、第二類蔵経（契丹蔵・房山石経）は、每版二十七〜二十八行・一行十七

字、第三類藏經（福州版・浙西版〈思溪版〉・磧砂藏・普寧藏・元の官版）は、折本で每版三十行・一行十七字とされる。

次に、日本における写経では、聖語藏など奈良朝写経が挙げられるが、これらの大部分は第二類にあたり、一行十七字である。ただし、倍の字数、三十四字で書写される細字経のほか、字数の少ない大字写経の存在が知られている。頼富本宏・赤尾栄慶『写経の鑑賞基礎知識』（至文堂、一九九四）一六一頁「字詰と界線」によれば、一行十一〜十三字で書写されたものとして、「大聖武」（東京国立博物館蔵『賢愚経』残欠）、「大字法華経」（京都国立博物館蔵）、「根本百一羯磨」巻第六（根津美術館蔵）、「註楞伽経」（京都国立博物館蔵など）が挙げられている。<sup>14</sup>「大聖武」については「肉太で雄渾なその筆致は、他の追随を全く許さない。もちろん大字で書写されているので、界幅も広く二・七cm余りになっている」、「大字法華経」については「本来なら一行に五字四句を書写すべき偈頌も一行に五字三句となっている」、「註楞伽経」については「大字の本文に双注を挟みこんだ」ものと、それぞれ評されている。<sup>15</sup>これらは、大字で書写されるために、広い界幅をもつという特徴を有している。大字写経については、いずれも肉太の筆致で丁寧に書き込まれており、能書の者が書写したのではないかと推定されている。

版本については、和版系といわれる平安中期から鎌倉期にかけて版行された春日版・高野版・浄土教版では、一行十七字詰を主流としており、<sup>16</sup>親鸞加點『浄土論註』（本願寺藏鎌倉時代刊本）や「善導大師五部九卷」（専修寺藏鎌倉時代刊本）も同様である。

さらに、親鸞真蹟では、一行十二字程度のものに、「六字名号」上部讚・「信徹上人御釈」（以上、本願寺蔵）、『見聞集』・「浄土本縁経文」（以上、専修寺蔵）、「聖覚法印表白文」（法専寺蔵）、「大集経・涅槃経文」（個人蔵）、「四十八願文」断簡（慈雲寺・常円寺・手塚大制氏・本誓寺蔵）がある。一行十四字のものに、『大般涅槃経要文・業報差別经文』・「三骨一廟文」（以上、専修寺蔵）がある。一行十七字のものに『観無量寿経註』『阿弥陀経註』・『道綽禅師略伝』・『烏龍山師屠兒宝蔵伝』（以上、本願寺蔵）がある。

こうして大蔵経・古写経・版本・親鸞真蹟等を並べてみると、一切経の書写あるいは出版形式として定着した一行十七字は、『観無量寿経註』『阿弥陀経註』などに見られるように、親鸞においても写経としての標準として理解されていたものと思われる。しかし、西本願寺本の場合は、開宝蔵や金蔵の一行十四字、日本古写経における「大聖武」など大字写経の一行十二字、親鸞真蹟における一行十二字に近いのである。開宝蔵・金蔵の形式は、開宝蔵が元々勅版であったことが注目される。大字写経については、經典書写として大字で書写される際に界幅が広がり、一行字数が少なくなる特徴がある。さらに親鸞真蹟で抄出文系に一行字数が十二字程度のものが数点存在することを鑑みれば、西本願寺本自体がそれらを参照したかどうかは別として、それらの有する意味については共有されよう。それらの特徴はただ文字を写すだけでなく、内容、字形、体裁が整い、時には美しささえも要求された結果として現れ出たものである。そうした書写法の意義を、西本願寺本に還元できるのではないか。こうして一定の形式に基づいて坂東本の文字を書写することには、次のような意義があったと考えられる。すなわち、坂東本の一字一字を丁寧に書写しつつ、視覚的にも美し

く体裁を整えることで、後代に伝えていくべき証本を作成しようという意図が込められていると考えられるのである。

ところで、一般に一行字数を十七字にすることについては、

偈頌の部分は、一句が四字あるいは五字の場合には一行に四句一偈分、すなわち十六字ないし二十字が書写され、一句七字の場合には一行に二句半偈分の十四字が書写されるのであり、偈頌は当初よりそのように書写して長行の部分と区別していたようである。この一行十六字、二十字、十四字という偈頌の字数や、縦二十五cm前後で界線の高さが二十cm前後という紙の大きさの制限、さらには長行の中央が九字目となれば、偈頌の中央の位置どりもしやすくなると思われることから、長行の部分が一行十七字となつたと考えられよう。

と、偈頌との関連が指摘されている。<sup>(17)</sup> 山本信吉は、五言四句を一行に書く場合もあることから慎重な姿勢を見せているが、「二行の字数を定めることの利点は、写経にさいして脱字・脱行の間違いが少なく、もしあつても気がつきやすいことで、きわめて合理的である」と述べている。<sup>(18)</sup> 一行字数や行数を決めて書写するこつと書写しようという意思が認められるのである。

次節で述べることになる改行・空白等を多用したと考えられる西本願寺本においては、視覚的な効果の点

からは真筆名号（本願寺蔵「六字名号」讚銘等）、文類を抄出毎に並べていく方法としては要文集『見聞集』・『大般涅槃経要文』等に近しいものがあり、比較的大字で書写することと相俟って一行字数が十二字前後となったと考えられる。一行十七字ではなく一行十〜十四字程度とする西本願寺本については、坂東本の文言を書写しつつ、四言二句（あるいは三句）、五言二句、七言二句を一行に美しく収めるための書式と考えられ、書式の決定には偈頌の体裁が大きく関わっていたことが推定できる。西本願寺本における偈頌体については、その書写法自体が、本文の字詰、つまり西本願寺本の体裁決定における基礎を担う重要な要素であったと考えられるのである。この偈頌体の特徴については、第五章で述べていきたい。

## 第二節 改行と註記

坂東本から最も変化するのが改行であり、西本願寺本では偈頌体を用いること、その参考例が坂東本における「化身土卷末」『大集経』引文にあることなどが指摘されている。<sup>(20)</sup>

改行については、坂東本では、「化身土卷末」『弁正論』、『真蹟集成』二・六四〇、前期筆跡）にも改行があるが、全体の実数としてはかなり少ない。<sup>(21)</sup> 西本願寺本では、御自釈・経論名・引用後などで、かなり多くの改行を施している。その改行の意義を、註記の特徴とともに捉えてみたい。

## 第一項 改行

西本願寺本においては、界を基準に字數調整・字間調整を行っており、文字の間隔を空けて示すべきときに、行を改める場合と數文字分の空白を用いることを体裁面の原則としている。つまり、引用原典の体裁を保持した可能性があり、その例は、坂東本においては、いずれも「化身土卷」の『大集經』（中期筆跡）や『弁正論』（前期筆跡）などが挙げられるのである。『大集經』部分は、赤松俊秀らの研究により、卷子状の抄出文を折り込んで綴じられたと推定される。<sup>(22)</sup>『弁正論』については、坂東本を含む諸本にも改行が多いことから、既存であった書写原本等で用いられていた改行が、そのまま坂東本の書写に表出したものと考えられる。<sup>(23)</sup>一方、西本願寺本では、引用原典の体裁に気を配るのはもちろんであるが、ある種、意図的に改行や空白を調整していると考えられる。<sup>(24)</sup>

それは、引用文のみならず、御自釈中にも現れている。「真仏土卷」冒頭において、

謹按眞佛土者 佛者則是

不可思議光如來 土者亦是

无量光明土也 然則酬報大

悲誓願故曰眞報佛土既而有

願卽光明壽命之願是也

（『縮刷本』五五三）

と、改行と空白を利用しつつ、『無量寿如来会』あるいは『讚阿弥陀仏偈』を元とする「不可思議光如来」と、『平等覚経』を元とする「无量光明土」とを、それぞれ仏・土をあらわす語として並置している。

また、「真仏土卷」の末尾で再び引文によって真仏・真土等を示す卷末の真仮対弁では、

擇本願之正因成就眞佛土言眞

佛者

∴大經言 无邊光佛 无尋光佛

・ 又言 諸佛中之王也光明中之

極尊也

上巳

∴論曰歸命盡十方无尋光如来

也言眞土者

(以上、『縮刷本』六四七)

∴大經言无量光明土或言諸智土

上巳

∴論曰 究竟如虛空 廣大无邊際也

言往生者

∴大經言 皆受自然虛无之身无極

之體

上巳

∴論曰 如来淨華衆正覺華化生

・又云同一念佛无别道故  
上

(以上、『縮刷本』六四八)

・又云難思議往生是也

(『縮刷本』六四九)

とある。御自釈中引用文に対して空白を多く用いながら、引用文毎に改行して書写されている。

また、引用文においては、『大経』や『浄土論』を初めとして、経論名の後には改行を設け、引用が終わった後にもまた改行で区切る場合が大半である。さらに、論書・釈書中に引用される経典においても改行が施される場合が散見される。正引・子引にかかわらず、引用文それぞれを単独の文として位置づけているのである。

## 第二項 註記による構文把握

この改行に関連する書き入れとして注目されるのが、西本願寺本特有の註記である。註記とは、『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店、一九九九)を参照すれば、「注」の項(三八八頁)に、

書物の本文の意味を補足し、あるいは詳しく説明するために書き加えること、また、その記載。

とあり、「勘注」の項(二三五頁)に、

調査して記録すること、また、その記録・記事。書物の行間や本文の上欄・下欄、またその巻末などに

語義の注釈、人物の考証、史実の説明など、本文内容に即してその理解のために、補足説明する意図をもって注記された記載（考勘）をいう。

とある。本文のある語に対して行間、上下欄、巻末等に記された註釈や符号を指すのが、書誌学的事項としての註記の意味である。

註記については、他の研究分野での提言があるので紹介しておこう。野村精一は、「書誌の文明史的考察——源氏物語古注釈の世界——」に次のように述べている。<sup>(25)</sup>

なお加うるに、穂久邇文庫本など一部の主な写本には、朱・青などの色墨による加注があり、事態を複雑にはしているが、それもまた本書の本質にかかわる書誌的特徴と行ってよい。なぜなら、これらの注は、あきらかに近世中期以降とみられるものをのぞけば、必ずしも一概に後人のそれとは言い難いものも、多く見られ、その加注の在り方じしんに、むしろ意味があると考えられるからである。

この提言からは、後人の加筆あるいは本文とはいえないものとして脇に置かれてしまい、単なる書誌的な事実と見られうる註記それ自身を、書物としての特性と捉えていくことが、写本を前にした研究の一方法であることが汲み取れよう。

西本願寺本の註記については、まず、中井玄道の指摘を挙げなければならない。中井は、「六字註は凡て

冠頭に存す<sup>(26)</sup>」といい、冠頭の字註は、流布する刊本と異なる坂東本・西本願寺本共通の特色であるとしている。次に、梅原真隆は、

この字訓は恐らく大谷派本願寺本を写したものであらうと推測されます。ところが、形式を忠実に模写することのみ専念して、その意味を領得しなかったやうであります。(中略) さて、かかる誤記の生ずることは本派本願寺本の欄外の註記は親鸞聖人が自ら記されたものでないことになります。従って、欄外の註字と同一の筆蹟であるやうに想像される本派本願寺本は聖人の真蹟本とは認めがたいことになるわけであります。

と述べ、<sup>(27)</sup>坂東本の形式を忠実に模写するが、いくつかの誤脱が認められることを指摘している。また重見一行は、

勿論、以上のごとき論証は、朱字補訂、校異記入が、すべて同一筆者によつてなされたことを証明し得たことにはならぬであらう。しかし、おおよその見当はついたと言うべきである。すなわち、朱による点注・補訂・校異記入者は、漢文本文書写者と同一人であるということである。

と述べ、<sup>(28)</sup>訓点・校異等補訂部分の書写者は本文書写者と同一であることが認められている。

このように、西本願寺本の註記に関しては、字註は坂東本と同じく冠頭にあり流布本とは異なること、形

式に忠実に模写するが誤脱があること、本文と同じ人物が朱筆も筆写することなどが指摘されてきた。字註の記入法や坂東本との異なりについて述べた論考が多いということであるが、その一方で、他の西本願寺本独自の記入について、漢文本文との関連から議論を進めていく必要がある点は、課題として挙げられよう。

次に、坂東本の初期段階から後期筆跡時にかけて改訂・書改が繰り返された「真仏土巻」を対象に、「機械的書写」とも評される場合がある西本願寺本における註記の書誌的特徴を通して、本文テキストの構造把握が行われたことを指摘する。それは、註記と改行を組み合わせることで行われ、さらにその構造把握の方向が親鸞晩年の真筆本に見られる書物としての形態に求められることを明らかにしていきたい。

「真仏土巻」は御自釈が巻頭巻尾にあり、経典・論書・釈書は引用導入語「言」「曰」「云」の順に配列されている。坂東本では「証巻」に次いで前期筆跡時の状態をよく残す一方、多くの改訂・書改箇所があることは、前章で述べた。この「真仏土巻」において、坂東本では明確な改行は見られないが、西本願寺本では六十二回の改行を用いて本文を整理しているのである。そこで、改訂・書改の多い坂東本からどのように引用文を整理したか、その中で註記が果たした役割は何かについて知ることのできる巻として「真仏土巻」を取り上げようというわけである。

西本願寺本の註記としては、〈表4-1〉のように、書き入れ場所やその内容によって、本文としての註記（割註）、本文右左傍の註記、本文の文字などに対する上下欄外の註記、合点のような役割を帯びた朱註点「∴」「∴」「∴」「∴」が挙げられる。

〈表4-1 西本願寺本「真仏土巻」の註記〉

種別	数	位置・役割	初出例	縮刷本	坂東本	親鸞真蹟等の参考例
本文	一四	訳者名	友謙譯	五六一	同じ	論註加點本における割書
右傍	二	願名(願文の右)	十二光明无量之願 設我得佛	五五四	無し	浄土三経往生文類略本
左傍	一六	成就等(典籍名の左)	願成就文言 光明无量之願成就上文	五五四	無し	
上欄	一	本文への註釈	帛延譯 ツル	五六〇	同じ	坂東本上欄註記
下欄	一	本文校正等	像歟	五七七	無し	
朱註点	一二	∴ 經典	∴ 无量壽如來會言 成就土	五五九	無し	西方指南抄真筆本
	八	∴ 論書・釈書	∴ 浄土論曰 成就土	六一〇	無し	尊号真像銘文正嘉本
	二八	・ 問答	・ 答曰	六一六	無し	愚禿鈔頭智本
	・ 連引	・ 又言		五七二	無し	
	・ 本文中	・ 又解脱者		五六八	無し	

本文と上欄の註記は、坂東本のものを書写しているが、それ以外は西本願寺本書写者によるものである。坂東本にない註記を多く使用していることは一目瞭然であるが、その註記の具体例として、書写原本であると考えられる坂東本における改訂・書改箇所を、西本願寺本がいかに書写したのかを検討することで、西本願寺本における改行の特徴を見いだしていきたい。

まず、前期筆跡箇所においては、「真仏土巻」では四箇所改訂箇所を抱えていた。

(1) 『大阿弥陀経』・『不空羼索経』間(『真蹟集成』二・四〇七〜四一〇)

坂東本では、『大阿弥陀経』引用の最後「<sup>上</sup>」の後に圈(挿入符号)がある。その後、十二行分が削除され、『不空羼索経』が引用される。ここを西本願寺本(『縮刷本』五六七)では、『大阿弥陀経』引用の最後「<sup>上</sup>」で改行し、「…不空羼索神変眞言經言」で再度改行する。「不空羼索神変眞言經」の左には「成就土」との傍註がある。

(2) 曇鸞『往生論註』・『讚阿弥陀仏偈』間(『真蹟集成』二・四四五〜四四八)

坂東本では、『往生論註』「く畢竟」の後、袋綴の中に残りの「不差故曰成就<sup>抄</sup>」を裏書し、『讚阿弥陀仏偈』冒頭は散逸している。次丁は「<sup>奉贊亦曰安養</sup>」の割註から開始し、上欄に「鸞和尚造也」との註記がある。これを西本願寺本(『縮刷本』六二一〜六二二)では、『往生論註』引用後で改行し、次行に「…讚阿彌陀佛偈曰曇鸞和尚造」とあつてさらに改行される。「讚阿彌陀佛偈」には左に「成就土」との傍註がある。しかし、坂東本に見られる頭註は無い。

(3) 曇鸞『讚阿弥陀仏偈』・善導『観経疏』「玄義分」間(『真蹟集成』二・四五二〜四五三)

坂東本では、『讚阿弥陀仏偈』「<sup>已上抄出</sup>」の後、六行分を削除し、「玄義分」の開始である「光明寺和尚云」と圏線で繋いでいる。同丁四行目以降は折り返されている。これを西本願寺本(『縮刷本』六二八〜六二九)では、『讚阿弥陀仏偈』「<sup>已上抄出</sup>」の後改行し、次行に「…光明寺和尚云」とある。「光明寺和尚」には左に「成

就土」との傍註がある。

(4) 善導『法事讚』・憬興『述文贊』・真仏土結釈間 (『真蹟集成』二・四六三～四六六)

坂東本では、袋綴が切開され、『法事讚』の残り、『述文贊』全文、真仏土結釈冒頭の「爾者」を裏書している。これを西本願寺本 (『縮刷本』四六二～四六四) では、『法事讚』引用後に改行し、次行「…憬興師云」とある。「憬興師」の左には「成就土」との傍註があり、さらに改行されている。『述文贊』引用後にも改行され、真仏土結釈が書写される。

以上、前期筆跡箇所の特徴としては、註点・左傍註・改行を用いて經典・論釈を整理していることが挙げられる。(3)において、坂東本では圏線で引用文の連続性を指示する場合でも、西本願寺本独自の基準で改行されていることが注目される。本文の訂記については坂東本の指示に基づいて訂正するが、改行に関してはその指示によらず、独自に行っているのである。

次に中期筆跡箇所は、一箇所である。

(5) 『涅槃經』貼紙 (『真蹟集成』二・四三二)

坂東本では、前期筆跡箇所に二行分の貼紙で引用文を追加しており、後筆と思われる朱の圏線で挿入を指示している。西本願寺本 (『縮刷本』六〇一) では、前の『涅槃經』引用文に続けて「・又言」とし、改行せずに書写している。

中期筆跡箇所の特徴としては、朱註点「・」を用いて同一經典の連続引用を示している点が挙げられる。

その際、改行せず書写されるのが特徴であろう。

最後に、後期筆跡箇所である。坂東本では親鸞による書改と異筆とがある。

(6) 『涅槃経』自筆書改(『真蹟集成』二・四二五〜四二八)

坂東本では、空白も無く、連続して引用されている。西本願寺本(『縮刷本』五八九〜五九五)では、『涅槃経』引用文の変わり目に「・又言」として連引している。改行はされていない。

(7) 『涅槃経』異筆書改(『真蹟集成』二・四三五〜四三八)

坂東本では空白も無く、連続して引用されている。これを西本願寺本(『縮刷本』六〇四〜六〇九)では、『涅槃経』引用文の変わり目を「・又言」と連引しており、『涅槃経』は改行が無いが、『涅槃経』引文全てが終わった後に改行を設け、「浄土論曰」と『浄土論』の引用を始めており、「曰」でさらに改行している。

「浄土論」の左には「成就土」との傍註がある。

後期筆跡箇所の特徴からは、連続引用の朱註点「・」では改行しないが、『浄土論』の朱註点「∴」を基準として前後に改行している点が挙げられる。

これらのことから、坂東本に見られない西本願寺本独自の註記として、次の三つを指摘できる。

朱註点 經典に「∴」、論書・釈書に「∴」、連引の場合などに「・」を記す

右傍註 願文の右傍に御自釈中の願名を添える

左傍註 朱註点の付いた典籍名の左傍に「願成就」等と添える

西本願寺本の右傍註・左傍註は、朱註点を避けて記されているようである。まず、朱註点によって引用文の属性が示され、次に右傍註・左傍註によって、引用文の主題を示したということであろう。これらと『無量寿経』・『浄土論』等の引用導入の後、あるいは引用後の改行とを組み合わせることで、本文の構造把握が図られている。つまり、これら註記と、『大経』とその異訳、『浄土論』等に見られる典籍名後の改行とを連動させて、引用文の整理を行っているのが、西本願寺本の特徴と捉えることができるのである。

ここまでは「真仏土巻」の例によって述べたが、経典・論釈の区分を明確に書写する傾向はかなり徹底されており、引用原典あるいは坂東本が割註である箇所を本文として書写している箇所もある。<sup>(29)</sup>さらに、引用文中の経論に注意する姿は朱註点を附す箇所において窺える。

「行巻」では、『十住毘婆沙論』中の「寶月童子所聞經阿惟越致品」(『縮刷本』六四)、『安樂集』中の「觀佛三昧經」(同八五)・「華嚴經」(同九〇)・「又彼經」(同九一)・「大經贊」(同九四)・「目連所問經」(同九五)、  
「玄義分」中の「十往生經」(同一〇四)・「无量壽經」(同一〇六)・「彌陀經」(同一〇六)、『五会法事讚』中の「稱讚淨土經」(同一一七)・「般舟三昧經」(同一二〇)・「新无量壽觀經」(同一二三)、『述文贊』中の「悲華經諸菩薩本授記品」(同一二四)・「无量壽如來會」(同一二六)、元照『觀經義疏』中の「經」(同二三七)、他力釈『論註』中の「經」(同二六八)・「論」(同二六九)・「願」(同二七〇)、『禮讚』の「觀經」(同二八七)・「彌陀經」(同二八七)、『樂邦文類』中の「宗釋禪師」(同二八七)に見られる。

「信巻」では、『貞元新定釈教目録』中の「集諸經禮懺儀」(『縮刷本』二六二)・「觀經」(同二六三)、便

同弥勒釈『安樂集』中の「大集經」(同三四一)・「涅槃經」(同三四二)・「涅槃經」(同三四三)・「大經」(同三四六)・「大悲經」(同三四七)、明所被機『論註』中の「无量壽經」(同四四一)・「觀无量壽經」(同四四二)・「業道經」(同四四六)・「首楞嚴經」(同四五〇)、『往生拾因』の「薩遮尼乾子經」(同四六〇)・「彼經」(同四六一)に見られる。

「証卷」では、真実証釈『論註』中の「論」(『縮刷本』四八一)、還相廻向釈『論註』中の「无量壽經中阿彌陀如來本願」(同四九五)・「肇公」(同五〇七)に見られる。

「真仏土卷」では、『論註』中の「諸經」(『縮刷本』六一八)、「玄義分」中の「无量壽經」(同六二九)・「觀音授記經」(同六三二)・「大品經涅槃非化品」(同・六三三)に見られる。

「化身土卷」では、要門釈『要集』中の「群疑論」(『縮刷本』六七四)、聖道釈『安樂集』中の「正法念經」(同・七六三)、「大集月藏經」(同・七六四)、「大集經」(同七六六)、『末法灯明記』中の「大集經五十一」(同七七三)・「大集」(同七七七)・「涅槃第三」(同七八四)・「涅槃六」(同七八九)・「大集五十二」(同七九二)・「賢愚經」(同七九二)・「大悲經」(同七九三)・「像法決疑經」(同七九六)・「遺教經」(同七九六)・「法行經」・「鹿子母經」・「仁王經」(以上、同七九七)、外教釈『弁正論』中の「論語」(同八八二)・「註」(同九〇一)・「正法念經」(同九〇二)、及び「神智法師釈」中の「子曰」(同九一三)に見られる。

これらの箇所からは、經典で上欄に「:」を附す場合、書名の上ではなく、「經」あるいは引文導入語「言」「曰」「云」の語がある行の上欄に附すこと、引用文中であっても經典の場合は改行が施される場合が多く

見られることの二点が、西本願寺本の特徴として指摘できる。

このように西本願寺本では、引用文や問答という単位を区切りとして、改行や大きな空白を用いながら本文を明確に区分していくが、そこに經典・論釈の二つの基準で朱註点を加えられている。<sup>(30)</sup> 従来、引用文を区分する際に多く用いられてきた「言」「曰」「云」の分類とは異なる構造把握が、西本願寺本では行われているのである。

### 第三項 親鸞真蹟との関連

これらの改行や傍註、朱註点については、現存する親鸞真蹟のうち、『浄土三経往生文類』略本<sup>(31)</sup>、『西方指南抄』国宝本<sup>(32)</sup>、『尊号真像銘文』正嘉本<sup>(33)</sup>に類例が見られる。

第一に、改行については、経論名の後、あるいは引用後に改行しているのは、『浄土三経往生文類』略本（『真蹟集成』三・三二一～三六六）、『西方指南抄』国宝本（『真蹟集成』五・六所収）、『尊号真像銘文』正嘉本（『真蹟集成』四・一三三～二九〇）、その他本尊影像讚文や四十八願文などで確認できる。これらは、西本願寺本における引用文毎の区切りと通じている。

第二に、願名等の補註については、『浄土三経往生文類』略本の漢語部分に見られ、大経往生について願名と願成就を後に補記している。<sup>(34)</sup> これは、引用文の属性を示す点で西本願寺本の右左傍註と共通している。

第三に、朱註点「:」「・」「」についても、親鸞真蹟にいくつか類例が見られる。<sup>(35)</sup> 『西方指南抄』国宝本上巻

本「法然聖人御説法事」の冒頭に「∴」、『尊号真像銘文』正嘉本漢語部分の標題や引用文に「∴」と「・」があり、章や節の区切りとして用いられている。<sup>(36)</sup> 章・節内の二文目以下の引用は「・」が用いられている。これらによれば、引用文毎に改行し、章・節の頭に朱註点「∴」、章・節内の引用に「・」を用いている。引用文毎の改行は西本願寺本にも多く見られ、朱註点のうち「∴」を上部構造、「・」を下部構造と位置づけて引文を分類する方法は、西本願寺本に通ずるものがある。これらの類例と、西本願寺本とを比較すれば、親鸞が晩年の引用法や註点の形式を踏襲・発展させて使用しているのではないかと思われるのである。

以上により、西本願寺本の書写形式の源泉と註記についてまとめておきたい。西本願寺本に特有な註記として、経典「∴」、論釈「∴」、その他「・」に配当する朱註点、願文の右傍に御自釈中の願名を添える願名註、「∴」「∴」のついた典籍名の左傍に「成就土」などと添える願成就註があった。朱註点と改行を連動して用いることで、経典と論書・釈書の引用文が分類されて、願文の右傍に願名、典籍名の左傍に願成就等の註を書き入れることよって、その属性が示されていた。この三つによって引用文群の範囲が区分けされていたのである。その書写形式は、親鸞晩年の著作における漢語引用箇所などの類例にみる事ができるが、章・節の区切りを示していた親鸞真蹟における朱註点の使用例を応用的に用いることで、西本願寺本の書物としての構造が成立したと考えられる。その書写者は、親鸞真蹟の形態に親しい面授の門弟であろうと推定され、『教行信証』本文の整理を企図した西本願寺本では、坂東本をはじめ、多くの親鸞真蹟に近接した環境で書写が進められたのではないだろうか。

### 第三節 本文と異本

さらに、改行・註記を以て整理された西本願寺本本文とその周辺の書写について考察する。西本願寺本の本文は墨書、その他の書き入れは主に朱筆で記されており、朱筆は本文と同じ人物が筆写している。<sup>(37)</sup> 坂東本に対する西本願寺本の補訂については、六つの場合が想定され、異本についても課題が残っている。そこで、本文書写の実態と異本の関係を再考し、朱を中心とする書き入れの意味について分析すべきである。

本節では、本文とその他書き入れの実態を『涅槃経』引用文を中心に検討することを通して、西本願寺本が坂東本から整理・発展する過程で、より「読む」ことを重視した書写本として成立したことを示していく。

#### 第一項 補訂と異本

西本願寺本の本文その他の書き入れについて、縮刷本解説「西本願寺本『教行信証』の特色について」では、「その大きな特徴は、本文は墨で書いているが、右左の仮名や返点、頭註等の註記・補記、四声点等はそのほとんどが朱筆であり」（『縮刷本』九三八）と述べている。また、その朱筆については、重見一行によって本文と同じ人物が筆写していることが指摘されている。<sup>(38)</sup> 本節では、親鸞と『涅槃経』の関係性を踏まえつつ、引用箇所を中心に、西本願寺本本文書写の実態と異本の関係を再考するための足がかりとしたい。

その中で考察の基盤とすべきは、重見一行による西本願寺本の補訂に関する指摘である。西本願寺本が坂東本を臨写したものであることを論証した重見は、その過程において西本願寺本の本文以外の書き入れや異

本について検討している。坂東本に対する西本願寺本の補訂については、六つの場合が想定され、異本については、坂東本を書写した西本願寺本は、「イマ本」と一致する「専修寺本的写本」を中心としつつ補訂したが、「イ本」と示した例が坂東本に悉く存しているという矛盾があるという。本節での検討に先立って、その指摘を振り返ってみたいと思う。

まず、坂東本に対する西本願寺本の補訂について、次の a から f の項目を数えている。<sup>(41)</sup>ここではその特徴を合わせて示してみよう。

- (a) 書本におけるものかもしれぬ補訂
- (b) 本文漢文部分書写途中における補訂
- (c) 点注部分（朱書）書写途中の補訂
- (d) 点注部分書写途中での漢文部分の補訂
- (e) 他本による点注部分の補訂と本文部分の補訂（乃至校合）
- (f) (e) 以後の補訂（乃至校合）

a については、訂正跡のない坂東本との相異を指し、西本願寺本自身の誤りを訂正したものを指す。b は、坂東本頭註などを根拠として本文に坂東本の改訂情報を記入したものを指す。c は、訓点書写時に、頭註部分のうち反切などを書写途中に補記したものを指す。d は、訓点書写時に行われた誤脱・誤写などの補訂を指す。e は、坂東本書写後に補訂されたものを指し、改訂跡が明らかで異本情報を示した校註などを指す。

fは、別人によるものを指す。以上、aとfについては、fの後筆と思われるものを除けば、西本願寺本における補訂は、主に墨書による本文漢字部分（a・b）と、朱書による訓点部分（c・d・e）に分けて考えるべきであろう。

次に、異本情報の矛盾について、重見は、

推定してきたごとく、西本の「イ本」「イマ本」の校異記入者が本文筆者と同一人とする時、「イマ本」が専修寺本的写本を指すという結論はよしとするも、筆を尽くして述べてきたように、忠実な書写を行ったはずの書本―坂東本を「イ本」と名指しという点である

と指摘している。<sup>(42)</sup> 坂東本を臨写したという西本願寺本は、「イマ本」と十二箇所的一致がある。「専修寺本的写本」を中心としつつ補訂したが、「イ本」と示した例が坂東本に悉く存しているという矛盾が存在しているというのである。

以上のことから、西本願寺本の本文および訓点・註記等の書き入れについては、①本文とそれに対する異本、②朱書による訓点という、二つの視点から考察することで、その実態が明らかになると考えられる。さらに、異本情報に顕著に見られるような矛盾の要因を考察するためには、重見が行ったような坂東本・専修寺本などの『教行信証』諸本のみならず、引用原典や親鸞以外の註疏による引用、親鸞による他の抄出文を視野に入れて検討することが必要であろう。

その場合、ある經典を対象として考察してその問題の傾向を知り、さらに全体の引用文に拡大して適応していく方法が有効であろう。そこで取り上げたいのが、『涅槃經』である。

『涅槃經』は、古来より多くの註釈が施され、七高僧においても道綽や源信の書に多くの引用が見られる。こうしたものが、親鸞の著述に影響したとも考えられる。坂東本「信卷」別序前には、『涅槃經』抄出文がある。<sup>(43)</sup>『教行信証』における『涅槃經』は、最も引用数の多い經典であり、次のように分布している。<sup>(44)</sup>

〈表4-2 『涅槃經』引用箇所〉

卷	積	引用数	『聖典全』二	坂東本 『真蹟集成』	西本願寺本 『縮刷本』	専修寺本 『専修寺本』
行卷	一乗海積	四	五四	一一八～一三一	一七七～一八一	一四〇～一四三
信卷	至心積	二	八二	二〇二～二〇三	二七九～二八〇	一二二四
	信樂積	三	八四	二〇五～二〇八	二八四～二八八	一二二七
信卷	信一念積	一	九四	二二三～二三三	三三一	二五八
	横超断四流積	一	九八	二四一	三三五	二六九
	仮偽弁積	一	一〇四	二五八	三六一	二九〇
	明所被機	五	一〇五～一二四	二五八～三二五	三六二～四四〇	二九一～二九三
真仏土卷	真仏土積	一三	一五八～一七〇	四一〇～四三八	五六八～六一〇	四五二～四八四
	真仏土結積	二	一七九	四六六	六四四	五一〇
化身土卷	真門積	三	二〇五～二〇八	五三八～五四五	七四一～七五一	五八二～五九〇
	外教積	一	二二二	五八一	七九七	六二八

坂東本については、序論で述べたように、親鸞七〇歳頃の中期筆跡時には、「真仏土巻」「涅槃経」(『真蹟集成』二・四三二)に二行分の貼紙が付加されており、後期筆跡時の親鸞八三歳頃には「信巻」「涅槃経」(『真蹟集成』一・二〇五〜二一〇、二二七〜二二八、二二三〜三〇六)に書改が施され、ここに宿紙が用いられているという特徴がある。また、坂東本を祖本とし、親鸞八三歳時点の坂東本の状態を残すとされる専修寺本では、「信巻」の『涅槃経』引用前に改行が見られる。<sup>(45)</sup>引用数が多いのみならず、諸本に特徴のある引用經典であるといえよう。<sup>(46)</sup>さらに、『大般涅槃経要文』・『見聞集』・『浄肉文』(いずれも専修寺蔵)など、親鸞真蹟の抄出文も数多く残っている。<sup>(47)</sup>

このように、『教行信証』としても、古写本としても特色があると認められるのが親鸞による『涅槃経』の引用文や抄出文であり、原典、『教行信証』諸本における『涅槃経』引用箇所、親鸞真蹟における『涅槃経』抄出文といった、さまざまな形態で残存する諸文を比較してテキスト間の関係性を知りうる書物なのである。そうした意味で、『大経』のように親鸞関連テキストの多く存在する經典でありながら、他に引用数の多い異訳の『無量寿如来会』や「化身土巻」に集中的に引用される『大集経』とは異なる特徴を持つ經典と位置づけられる。

この『涅槃経』を対象とすることで、西本願寺本の本文、異本、音訓について、重見の作業をテキスト関係論の中で再検討し、異本や音訓を中心とする西本願寺本の生成と、『涅槃経』など浄土経論以外の典籍をどのように受容したのかを明らかにしたい。こうして他経(末経)と位置づけられる經典を取り上げること

によって、『教行信証』の引用文全般に対する西本願寺本の書写姿勢と、鎌倉三本とのテクスト関係における西本願寺本本文を内容面で相対的に位置づけることが可能となろう。

## 第二項 訂記と註記

西本願寺本の本文漢字は、墨書で書写されている。大部分は坂東本と相異無いが、西本願寺本書写時に発生した諸事象の特徴として、四つに分けて検討したい。

第一に、誤字の訂正（訂記）に関するものであり、六例ある。

(1) 坂東本の「清淨」（『真蹟集成』一・五四）に対し、西本願寺本（『縮刷本』一七八）では「淨」を「清」と上書訂記している。専修寺本は坂東本と同じ「清淨」（『専修寺本』一四一）なので、西本願寺本書写者自身の誤りである。

(2) 坂東本の「則爲非有」（『真蹟集成』一・一一八）に対し、西本願寺本（『縮刷本』四一四）では「非」を「爲」と上書訂記している。専修寺本は坂東本と同様「則爲非有」（『専修寺本』三三五）なので、西本願寺本書写者自身の誤りである。

(3) 坂東本の「名之爲」（『真蹟集成』一・一六三）に対し、西本願寺本（『縮刷本』五七六）では「爲」を「之」と上書訂記している。専修寺本は坂東本と同様「名之爲」（『専修寺本』四五七）なので、西本願寺本書写者自身の誤りである。

(4)坂東本『真蹟集成』一・一六五)の「如來具足」に対し、西本願寺本(『縮刷本』五九一)では「具」を「來」と上書訂記している。専修寺本は坂東本と同様「如來具足」(『専修寺本』四六九)なので、西本願寺本書写者自身の誤りである。

(5)坂東本の「吾弟」(『真蹟集成』一・一六五)は「弟」の上に「吾」とあったが抹消されている。これに対し、西本願寺本(『縮刷本』五九一)でも本文は「吾弟」であるが、坂東本と同様「弟」の上に「吾」とあったものを抹消している。専修寺本は訂記無しの「吾弟」(『専修寺本』四七〇)である。西本願寺本書写者自身の誤りではなく、坂東本の抹消・訂記をそのまま書写しているようである。

(6)坂東本の「樂」(『真蹟集成』一・二〇七)に対し、西本願寺本(『縮刷本』七四六)では「爲」を「常」と上書訂記し、上欄に「在本ニハアリ樂字」とある。専修寺本(『専修寺本』五八七)は上欄に「常」と補記している。本文の訂記については専修寺本の内容に準じているようである。ただ、三本が大きく異なっており、異本情報も含めて複雑な諸本関係となっている。

以上六例のうち、(1)(2)(3)(4)は西本願寺本の書写時に発生した誤字に対して、自身が訂記した場合であるが、(5)については、坂東本と同じように書写・抹消・訂記を施しており、坂東本の訂記の状態をそのまま写している。(6)は異本に関する事項が含まれるため、後述することにしよう。

第二に、誤写例には三例ある。

(1)坂東本の「名阿嗜多翅金欽婆羅」(『真蹟集成』一・二七九)に対し、西本願寺本(『縮刷本』三九一)

は「名<sup>四ク</sup>阿<sup>ワ</sup>嗜<sup>キ</sup>多<sup>タ</sup>翅<sup>シ</sup>金<sup>キ</sup>欽<sup>キン</sup>波<sup>ハ</sup>羅<sup>ラ</sup>」<sup>ト</sup>、専修寺本は「名<sup>四ク</sup>阿<sup>ワ</sup>嗜<sup>キ</sup>多<sup>タ</sup>翅<sup>シ</sup>金<sup>キ</sup>欽<sup>キン</sup>婆<sup>ハ</sup>羅<sup>ラ</sup>」<sup>ト</sup>（専修寺本三一六）とある。大正蔵本『涅槃經』では「阿耨多翅舍欽婆羅」（北本…『大正蔵』一二・四七五下、南本…『大正蔵』一二・大正蔵一・二・七一八下、いずれも校異無し）とある。<sup>(48)</sup>鎌倉三本と大正蔵『涅槃經』を比べれば「耆・嗜」「金・舍」「婆・波」の異なりがあるが、坂東本以下の訓読によれば、坂東本のものが『教行信証』としては基準となるう。

西本願寺本の「波」については、坂東本の「婆」のうち「女」がかなり小さく書かれているので、それを模した結果、「波」になったと考えられる。字音が「バ・ハ」と通じるので、見た目で判断して書写した可能性が高い。これを含む六師外道の大人名については、直前の『涅槃經』中に既に引用されていて、坂東本「阿耨多翅金欽婆羅」（『真蹟集成』一・二七〇）、専修寺本「阿耨多翅金欽婆羅」（『専修寺本』三〇六）、西本願寺本「阿耨多翅金欽婆羅」（『縮刷本』三八〇）とある。西本願寺本自身が引用箇所において「婆」としているから、六師外道の箇所では坂東本の字形そのものを模したと見なしておきたい。

(2)坂東本の「當<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>何<sup>ノ</sup>罪<sup>カ</sup>」（『真蹟集成』一・三〇五）に対し、西本願寺本は「當<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>何<sup>ノ</sup>罪<sup>カ</sup>」（上欄に墨書で「罪」と註記、『縮刷本』四二八）、専修寺本は「當<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>何<sup>ノ</sup>罪<sup>カ</sup>」（『専修寺本』三四七）とある。大正蔵本『涅槃經』は「當<sup>ニ</sup>有何<sup>ノ</sup>罪」（北本…『大正蔵』一二・五六五中、南本…『大正蔵』一二・八一二上）である。西本願寺本では坂東本の「罪」の「非」の左部を糸偏と見なして書写したが、訂記に近い内容の註記を上欄に附し、さらに左傍に「ザイ」との訓を加えている。これも坂東本の見え目から写した結果であろう。

(3)坂東本の「像」（『真蹟集成』一・四一七）に対し、西本願寺本は「雖无色僧」（下欄に「像敷」と註記、

『縮刷本』五七七)、専修寺本では「雖无色像」(『専修寺本』四五九)とある。大正蔵本『涅槃経』も「雖无色像」(北本:『大正蔵』一一・四六五下、南本:『大正蔵』一一・七〇八下)である。ここも坂東本の見目による誤写であろう。

以上のように、誤写例は、坂東本の見た目によると思われるものが多い。しかし、西本願寺本では疑わしい字についても見た目に従って書写した上で、訂記せずに正しいと思われる字を註記するという方法を採用していた。

第三に、坂東本との異字であり、七例ある。

(1)坂東本の「一切知見」(『真蹟集成』一・二六三)に対し、西本願寺本では「一切智見」(『縮刷本』三六八)、専修寺本では「一切知見」(『専修寺本』二九六)とある。大正蔵本『涅槃経』では、「一切知見」(北本:『大正蔵』一一・四七四中、南本:『大正蔵』一一・七一七中)である。これは一見誤写に見えるが、西本願寺本における「智」の左下には朱による「ヒ」あるいは「〇」のような符号が見られる。声点(平声清音)のようでもあるが、坂東本には声点は附されていない。抹消符号だとすれば、「智」の誤りに気づき、「知」に訂正したことになる。そうであるとするならば、西本願寺本書写者自身の誤字を、坂東本等に合うように修正されたものと位置づけることができる。

(2)坂東本の「无有慧目」(『真蹟集成』一・二六四)に対し、西本願寺本では「无有慧日」(右傍に「目」と註記、『縮刷本』三七〇)、専修寺本では「无有惠日」(『専修寺本』二九八)とある。大正蔵本『涅槃経』

では、「無有慧目」（北本…『大正蔵』一・二・四七四中、南本…『大正蔵』一・二・七・七一七中）である。<sup>(49)</sup> 西本願寺本では「日」の字は周辺より濃く書かれており、訂記の可能性もあり、さらに右傍の註記はかなり薄い状態である。結果として「日」は専修寺本と同様であるが、坂東本あるいは大正蔵本系（高麗蔵など宋元明三本以外の大蔵経）の字を註記として附している。

(3) 坂東本の「無<sup>ニ</sup>辜<sup>ツミ</sup>」(『真蹟集成』一・二六七)に対し、西本願寺本では「無<sup>ニ</sup>辜<sup>ツミ</sup>」(「無」の左傍に「无」、<sup>トガツミ</sup>「辜」の下に挿入符号、右傍に「過」)と補記、『縮刷本』三七五)、専修寺本では「无<sup>ニ</sup>過<sup>ツ</sup>咎<sup>ク</sup>」(『専修寺本』三〇一)とある。大正蔵本『涅槃経』では、「無辜咎」(北本…『大正蔵』一・二・四七五上、南本…『大正蔵』一・二・七・七八上)であるが、南本の校異にて、宋元明三本では「辜」は「過」とされ、この三本が専修寺本の内容に一致する。西本願寺本の墨書「無辜」は坂東本と同様であるが、「無」の左傍に「无」とあり、「辜」に朱で斜線を引いて右傍に朱で「過<sup>ク</sup>咎<sup>ク</sup>」<sup>トガツミ</sup>と加えられているのである。一旦は坂東本の文字を書写したが、朱筆を書き入れる段階で専修寺本及び宋元明三本のような内容に訂正したものと思われる。

(4) 坂東本の「阿耨多趺金欽婆羅復有大臣名吉徳」(『真蹟集成』一・二七一)の「羅」と「復」の間に「乃至」は無いが、西本願寺本では「阿耨多趺金欽波羅復有大臣名吉徳」(『縮刷本』三八〇)の「羅復」の左右傍に朱で「乃至」と付加され「羅復<sup>ニ</sup>」<sup>トガツミ</sup>のようになっている。専修寺本では本文行に「乃至」(『専修寺本』三〇六)とあるから、西本願寺本では専修寺本に見られる「乃至」を後に加えたと考えられる。

(5) 坂東本の「无<sup>ニ</sup>辜<sup>ツミ</sup>」(『真蹟集成』一・二七四)に対し、西本願寺本では「无<sup>ニ</sup>辜<sup>ツミ</sup>」(『縮刷本』三八五)

とあるが下に朱で「咎」が挿入され、さらに「イ本无」とある。専修寺本では「无<sup>シ</sup>辜<sup>ツミトガ</sup>咎」(『専修寺本』三一〇)とある。大正蔵本『涅槃経』では、「無辜咎」(北本：『大正蔵』一一・四七七中、南本：『大正蔵』一一・七二〇中)であるが、南本の校異にて「辜」は宋元明三本では「過」とされている。西本願寺本では専修寺本や大正蔵所収本『涅槃経』のような文言を朱によって補っているが、「イ本无」の内容は、この中でいえば坂東本に一致している。

(6)坂東本の「无<sup>シ</sup>辜<sup>ツミ</sup>」(『真蹟集成』一・二七四)に対し、西本願寺本では「阿闍世」(『縮刷本』三八五・五行目)とあるが、挿入符号があつて左傍に「王」(さらに左傍に小さく「:」のような符号あり)と補記されている。専修寺本では「阿闍世王」(『専修寺本』三一六・七行目)とある。大正蔵本『涅槃経』では、「阿闍世」(北本：『大正蔵』一一・四八〇中、南本：『大正蔵』一一・七二三下)であり、「王」は無い。ここは坂東本と大正蔵本が一致し、西本願寺本の補記は専修寺本の文言と一致している。

(7)坂東本の「設我」(『真蹟集成』一・二八七)に対し、西本願寺本では「誤<sup>アヤマテ</sup>我」(『縮刷本』四〇二)とあるが、「誤」は上書訂記に見える。専修寺本では「誤<sup>アヤマテ</sup>我」(『専修寺本』三二五)とある。大正蔵本『涅槃経』では、「設我」(北本：『大正蔵』一一・四八二上、南本：『大正蔵』一一・七二五上)である。ここは坂東本と大正蔵本が一致し、西本願寺本と専修寺本が一致している。なお、坂東本の「設」も上書きされているようにも見える。

ここでは、西本願寺本が専修寺本のような本で校合した結果、坂東本と相異なる結果となった例が見受け

られるが、坂東本のみが大藏経系と一致する箇所があることにも注意したい。

第四に、西本願寺本独自の文言である。

(1)坂東本の「以殺彼壽命長故」(『真蹟集成』一・二七二)に対して、西本願寺本(『縮刷本』三八一)は「以彼殺壽命長故」とあったが「彼」を抹消し、さらに「長」も抹消して「彼」と右傍訂記しているため、本文としては「以殺壽命彼故」となっている。専修寺本は「以殺彼壽命故」(『専修寺本』三〇七)である。大正蔵本『涅槃經』では、「以殺生故得壽命長」(北本…『大正蔵』一二・四七六上、南本…『大正蔵』一二・七一九上)とあることから、ここに挙げた全てで異なる文言となっている。<sup>(50)</sup>

(2)坂東本(『真蹟集成』一・二八六)の「災而死」(「或本遇<sub>レ</sub>火」と上欄註記)に対して、西本願寺本(『縮刷本』四〇一)は「遇火」と坂東本上欄註記の文言を本文としているが、右傍に「災<sub>サイ</sub>イ<sub>イ</sub>ア<sub>ア</sub>本<sub>本</sub>ニア<sub>アリ</sub>」、左傍に「イマ本无<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>字」、下欄に「遇火<sub>ニ</sub>字<sub>イ</sub>本」と註記している。専修寺本は「災<sub>サイ</sub>而<sub>レ</sub>死<sub>ス</sub>」(『専修寺本』三二四)である。大正蔵本『涅槃經』では、「遇火而死」(北本…『大正蔵』一二・四八二下、南本…『大正蔵』一二・七二五中)とある。坂東本上欄註記や西本願寺本本文・「イ本」(下欄)の「遇火」は大正蔵本の文言と一致、坂東本本文・専修寺本や西本願寺本「イマノ本」(右傍)・「イマ本」(左傍)の「災」が一致している。

これらは、西本願寺本自身による誤字・誤写のみならず、別の意図をもって坂東本から改められた箇所を有するといえる。これが、西本願寺本における本文の特徴である。

### 第三項 異本の註記

次に、異本情報については、「在本」・「アル本」、「今本」・「イマ本」、「イ本」などと示されるが、異本指し示の無い註記もある。

第一に、〈アル本〉である。註記としては、「アル本」「在本」と表記され、「教巻」・「化身土巻」の二箇所を示されている。「教巻」については『涅槃経』ではないが、『教行信証』全体で〈アル本〉は二例しかないため、併せて検討しておこう。

まず、「教巻』『大経』『聖典全』二・一一)については、坂東本は欠損しており、西本願寺本と専修寺本との比較を行う。西本願寺本においては本文「導」(『縮刷本』一五)に対して下欄に「道アル本ニヨノ字」と朱で補筆されている。専修寺本ではこの本文を「導」(『専修寺本』一六)とするが、「寸」はかなり小さく補筆されており、当初は「道」と書かれていたと思われる。西本願寺本においても「寸」がかなり小さく、「道」に加えられた印象が強い。本文としては専修寺本と同様の状態であり、「寸」を加筆する前の状態が異本情報として示されている。

次に、「化身土巻本』『涅槃経』(『聖典全』二・二〇七)では、引文指示語に「略抄」とあるように、多くの文言が省略されて引用された箇所がある。坂東本では「有爲涅槃ハ无常樂ナリ我淨ハ无爲涅槃ナリ」(『真蹟集成』二・五四一)とあるのに対して、西本願寺本では「有爲涅槃ハ无常樂ナリ我淨ハ无爲涅槃ナリ」(『縮刷本』七四六)とあるが、「常」は「爲」を上書訂記したもので、その左傍に斜線状の符号が附され、さらに上欄に「在本二ハ

アリ樂字」とある。専修寺本では、「有爲涅槃<sup>ハ</sup>、无常樂我淨<sup>ナリ</sup>、无爲涅槃<sup>ナリ</sup>」（『専修寺本』五八七）とあったが、さらに「常」の下に挿入符号があつて「常」と上欄補記され、その結果として「有爲涅槃<sup>ハ</sup>、无常常樂我淨<sup>ナリ</sup>、无爲涅槃<sup>ナリ</sup>」としている。ここを原典と対照すると、北本では「樂我淨」以下四百四十八字省略<sup>(51)</sup>、南本では「樂我淨」以下四百四十七字省略<sup>(52)</sup>されている。この箇所について、中井玄道『教行信証附録』一八九頁上では、有爲涅槃等、四本、阪本、山本、誤脱あり、従つて文を読むこと甚だ穩やかならず。即左の如し。

有爲涅槃無常、常樂我淨無爲涅槃、有<sup>ニ</sup>常人<sup>一</sup>

但し、常樂我淨の常、阪本に無し。餘本、經文に依りて之を訂すこと今の如し。

としている。坂東本に「常」の字が無く、後の諸本では経本によつて「樂」を補っている状況を示しているが、西本願寺本の上欄註記については説明がつかない。本願寺本の「樂」が誤字だとすれば、「在本」として専修寺本が想定される可能性もあるが、「常」を繰り返す専修寺本の上欄補記についてを本文左傍の書き入れで示し、上欄註記は、『涅槃經』原典から中略された「樂我淨」の「樂」を指しているのではなからうか。それは、西本願寺本の当行が「涅槃<sup>ハ</sup>、无常樂我淨<sup>ナリ</sup>、无爲涅槃<sup>ナリ</sup>、有常<sup>ナリ</sup>」で終わっており、次行の「人深信」以下は『涅槃經』でいう中略後の冒頭に当たるからである。そこで、坂東本や専修寺本とは中略箇所の判断が異なり、両本とは異なる本文を提示する結果となっている。

第二に、〈イ本〉・〈イマ本〉について、「信卷」『涅槃經』の用例を取り上げたい。〈イマ本〉とは、「イマ本」「イマノ本」「イマ」「今ノ」と表記されるものを指し、〈イ本〉は「イ本」「イ」と表記されるものである

る。

(1) 坂東本の引文導入語「言」(『真蹟集成』一・二〇八)に対し、西本願寺本(『縮刷本』二八八)では右傍に「云イマ本」、右傍に「イ本」とある。専修寺本は「云」(『専修寺本』二〇三)であることから、「イマ本」は専修寺本に一致する。ただし「イ本」は定かではない。

(2) 坂東本「非罪人」(『真蹟集成』一・二七三)に対し、西本願寺本(『縮刷本』三八三)では下欄に「人無罪イマノ本ニアリ三字」、「罪人」の左傍に「今本ニ无二字ハ」との註記がある。専修寺本は、「非人無罪・」(「無」は上書訂記、『専修寺本』三〇九)とあって、上欄に「人イ」との註記がある。

(3) 坂東本「辜」(『真蹟集成』一・二七四)に対し、西本願寺本(『縮刷本』三八五)では「咎」を左傍補記で「辜」の下に挿入し、さらに左傍に「イ本无」とある。専修寺本は「辜咎」(『専修寺本』三二一)である。専修寺本の文言が補記後に西本願寺本と一致するが、「イ本」とは坂東本と一致する。

(4) 坂東本「藏徳」(『真蹟集成』一・二七九)に対し、西本願寺本(『縮刷本』三九一)では右傍に「得イマ字」、左傍に「イ本字」とある。専修寺本は「得」(『専修寺本』三二五)である。大正蔵本『涅槃経』(北本・『大正蔵』一一・四七四中、南本・『大正蔵』一一・七二七中)は「徳」であるが、北本の校異によれば、宋版で「得」とあるという。本文は坂東本や北本・南本『涅槃経』の多くと同一であるが、専修寺本あるいは宋版の『涅槃経』と西本願寺本の「イマ本」が一致している。

(5) 坂東本「王」(『真蹟集成』一・二九一)に対し、西本願寺本(『縮刷本』四〇八)では左傍に「イ本字

今ノニ无」との註記がある。専修寺本〔専修寺本〕三三二に「王」は無い。坂東本と「イ本」、専修寺本と「今」が一致している。

(6) 坂東本「幻」〔真蹟集成〕一・二九二に對し、西本願寺本〔縮刷本〕四〇八では左傍に「イ本今本无」との註記がある。専修寺本〔専修寺本〕三三一に「幻」は無い。坂東本と「イ本」、専修寺本と「今本」が一致している。

(7) 坂東本「者」〔真蹟集成〕一・二九七に對し、西本願寺本〔縮刷本〕四一六では右傍に「者イ本ニアリイマノ本ニ无」との註記がある。専修寺本〔専修寺本〕三三七に「者」は無い。坂東本と「イ本」、専修寺本と「今本」が一致している。

(8) 坂東本「頌」〔真蹟集成〕一・二九九に對し、西本願寺本〔縮刷本〕四一九では左傍に「イ本」との註記がある。専修寺本は〔専修寺本〕三四〇「頌」は無い。

(9) 坂東本「修」〔真蹟集成〕一・三〇二に對し、西本願寺本〔縮刷本〕四二二では左傍に「イ本字」、下欄に「イマノ本ニ故有ナリ」との註記がある。専修寺本は「故」〔専修寺本〕三四〇であり、西本願寺本の「イマノ本」と送り仮名まで一致している。大正蔵本『涅槃經』（北本：『大正蔵』一二・四八四下、南本・大正蔵一二・七二八上）は「故」であるが、南本の宋元明本は「修」である。「イ本」は坂東本あるいは南本宋元明の三本、「イマノ本」は専修寺本に一致する。

(10) 坂東本「祇」〔真蹟集成〕一・三〇三に對し、西本願寺本〔縮刷本〕四二六では右傍に墨書で「耆

イ」とある。専修寺本は「祇」（『専修寺本』三四五）である。大正蔵本『涅槃經』（北本…『大正蔵』一二・五六五中、南本…『大正蔵』一二・八一一下）は「耆」であるので、西本願寺本の異本「耆」は大蔵經を含めた原典系の異本情報となる。

(10) 坂東本「法」（『真蹟集成』一・三〇五）に対し、西本願寺本（『縮刷本』四二八）では右傍に墨書で「往イ」とある。専修寺本は「法」（『専修寺本』三四六）である。大正蔵本『涅槃經』（北本…『大正蔵』一二・五六五中、南本…『大正蔵』一二・八一一下）は「往」である。西本願寺本の異本「往」は大蔵經を含めた原典系の異本情報となる。

(11) 坂東本「索」（『真蹟集成』一・三〇五）に対し、西本願寺本（『縮刷本』四二八）では下欄に「索シヤクイ」とある。専修寺本は「索シヤクスルニ」（『専修寺本』三四六）である。大正蔵本『涅槃經』（北本…『大正蔵』一二・五六五中、南本…『大正蔵』一二・八一一下）は「索」である。西本願寺本の異本は専修寺本に見られる字音を示したものと思われる。

(12) 坂東本「至」（『真蹟集成』一・三〇六）に対し、西本願寺本（『縮刷本』四二八）では左傍に「イ本字イマ字ハ生」とある。専修寺本は「生」（『専修寺本』三四七）である。「イ本」が坂東本、「イマ字」が専修寺本にあたる。

「信卷」『涅槃經』に多い「イマ本」とは、専修寺本と一致する場合が多い。「今本」（『縮刷本』四〇八）と記されるものが二箇所あって、現在目の前にあることを示している。「イマ本」「在本」とは、手元で校正

するための〈専修寺本系写本〉と、ここでは想定できる。この「イマ本」「今本」は、坂東本もしくは原本系の『涅槃経』文を「イ本」と示している場合に、さらに校合した異本を示すための註記であろう。

「イ本」については、坂東本に存するものもあるが、親本である坂東本を異本とすることは表記上問題がある。墨書による異本情報には、「耆<sup>ヤ</sup>イ」（『縮刷本』四二六）、「往<sup>ヤ</sup>イ」（同四二八）があるが、北本（『大正蔵』一二・五六五中）・南本（『大正蔵』一二・八一一下）に「耆<sup>ヤ</sup>」、北本（『大正蔵』一二・五六五）・南本（『大正蔵』一二・八一一下）に「往<sup>ヤ</sup>」とあり、『涅槃経』と一致する。『教行信証』諸本のみならず、引用原典との照合が必要である。〈イ本〉は坂東本、あるいは書写原文を含む「涅槃経文」とも想定される。

第三に、異本指示の無い註記についてである。

異本指示の無い註記についても、専修寺本あるいは『涅槃経』原典と一致する場合が多い。専修寺本と対照すると、西本願寺本（『縮刷本』三七〇）の上欄註記「燥<sup>サウ</sup>」は、専修寺本の本文「燥<sup>サウ</sup>」（『専修寺本』二九七）、西本願寺本の上欄註記「刪<sup>セン</sup>」（『縮刷本』三七七）は専修寺本の本文「刪<sup>セン</sup>」（『専修寺本』三〇三）、西本願寺本（『縮刷本』三九一）の下欄註記「舍離<sup>シャリ</sup>」は専修寺本の本文「舍離<sup>シャリ</sup>」（『専修寺本』三一六）、西本願寺本（『縮刷本』三九一）の右傍註記「實得」は専修寺本の本文「實得」（『専修寺本』三一六）、というように、専修寺本とよく一致していることが確認できた。ただし、「舍離<sup>シャリ</sup>」は『見聞集』涅槃経（『聖典全』二・九五九）では「舍離<sup>シヤリ</sup>」、北本（『大正蔵』一二・四七四下）の宮内庁本校異が「賒梨」である。「實得」については北本（『大正蔵』一二・四七五）や南本（『大正蔵』一二・七一一七下）「得」に対し、北本の宋元明の三本

には「徳」という校異が出ている。親鸞真蹟や大藏経に範圍を拡げれば、原本系統の文字の相異が、坂東本・西本願寺本・専修寺本に鏤められて存在しており、西本願寺本がいずれかの文字を採用したときに、異本の情報が付加されることになると思われるのである。

第四に、こうした傾向を踏まえ、『涅槃経』引用箇所以外の異本情報について検討してみたい。

(1) 「教巻」欠損箇所『真蹟集成』一・一五)のうち、西本願寺本(『縮刷本』一四)では「欲」オホスナリとあり、左傍に「オモテナリイ本」との註記がある。専修寺本では、「欲」オホテナリ(『専修寺本』一五)とある。

(2) 坂東本「破」(『真蹟集成』一・三七)に対し、西本願寺本(『縮刷本』四七)では「破」シの左傍に「スイ本」とある。専修寺本では「破」ス(『専修寺本』三八)とある。坂東本や西本願寺本は訓読で共通、専修寺本に見られる右訓が異本情報として示されている。

(3) 坂東本「明」ニシテ(『真蹟集成』一・五一)に対し、西本願寺本(『縮刷本』六五)では「明」ニシテの左傍に「ケシイ本」とある。専修寺本では「明」ケシ(『専修寺本』五二)とある。坂東本や西本願寺本は訓読で共通、専修寺本に見られる右訓が異本情報として示されている。

(3) 坂東本の上欄註記「斤」ハカリ(『真蹟集成』一・六〇)に対し、西本願寺本(『縮刷本』七七)の上欄註記では下方に「秤イ本」とある。専修寺本(『専修寺本』六二)ではこの註記は書写されていないので、坂東本や専修寺本の情報ではない「イ本」がここに示されている。

(4) 坂東本「部」(『真蹟集成』一・六九)に対し、西本願寺本(『縮刷本』九〇)は左傍に「イ本」、下欄に

「鄣歟イマ字」とある。専修寺本（『専修寺本』七一）では「鄣」を「部」と上欄訂記している。専修寺本の訂記前の文字と一致している。

(5) 坂東本「雜」〔『真蹟集成』一・一〇七〕に対し、西本願寺本（『縮刷本』一四四）は左傍に「スルコトイマノ本云」とある。専修寺本では「雜」〔『専修寺本』一一五〕とある。専修寺本の送り仮名と「イマノ本」が一致している。

(6) 坂東本（『真蹟集成』一・一六三）で二字抹消「有情」と上欄訂記されている箇所について、西本願寺本（『縮刷本』一二四）は本文を「有情」とし、右傍に「生」、左傍に「イ本」と註記している。専修寺本では「衆生」〔『専修寺本』一二七〕とあるから、専修寺本の一部と「イ本」が一致している。

(7) 坂東本「不<sub>ルト</sub>如<sub>セ</sub>實<sub>ク</sub>修行<sub>セ</sub>」〔『真蹟集成』一・一六七〕に対し、西本願寺本（『縮刷本』二二九）は「不<sub>ルト</sub>如<sub>ク</sub>實<sub>ク</sub>修行<sub>セ</sub>」とし、左傍に「イ本ニアリ」との註記がある。専修寺本は「不<sub>ルト</sub>如<sub>ク</sub>實<sub>ク</sub>修行<sub>セ</sub>」〔『専修寺本』二二九〕とあって、西本願寺本のみが異なる訓読となっている。

(8) 坂東本（『真蹟集成』二・五一六）では「稱」を抹消して「名」と上欄訂記しているが、西本願寺本（『縮刷本』七一四）は「名」とするが左傍に「稱」とある。専修寺本は「稱」〔『専修寺本』五六一〕とある。本文は坂東本の訂記後の字を書写しているが、左傍註記は専修寺本本文の字と一致する。

(9) 坂東本「修」〔『真蹟集成』二・五三六〕に対し、西本願寺本（『縮刷本』七三七）は左傍に墨書で「雜歟」とある。専修寺本では「雜イ本」〔『専修寺本』五八〇〕と右傍註記がある。西本願寺本の左傍註記と専

修寺本右傍の異本情報の註記が一致している。

(10)坂東本〔『真蹟集成』二・五五〇〕では「至」は右傍補記されているが、西本願寺本〔『縮刷本』七五七〕は本文文化され左傍に「イ本アリ」との註記がある。専修寺本〔『専修寺本』五九〇〕には無い。

(11)坂東本「憐」〔『真蹟集成』二・六一〇〕に対し、西本願寺本〔『縮刷本』八三五〕では「憐」の下に挿入符号があつて右傍に「愍イ本アリ」との註記がある。専修寺本〔『専修寺本』六六〇〕では「憐」の下に挿入符号があつて上欄に「愍イ本アリ」との註記がある。西本願寺本の右傍註記と専修寺本の上欄註記が一致している。

以上から、「イ本」は坂東本、「イマ本」は専修寺本と一致する場合が多いが、右訓などについては「イ本」と専修寺本が一致する場合がある。また、異本指示の無い註記は、専修寺本も書写していないものが見受けられる。「今本」「在本」は手元で校正するための「専修寺本的写本」、「イ本」は『教行信証』諸本に限らず、坂東本の書写原本を含む原典の可能性が想定される。

さらに、西本願寺本で書写されない註記〔『涅槃経』引用箇所以外〕は、次のようであり、いずれも専修寺本にも書写されていない。

(1)坂東本〔『真蹟集成』一・三七五〕上欄註記「摘字他曆反排除也」

西本願寺本〔『縮刷本』五二三〕、専修寺本〔『専修寺本』四二〕ともに無し。

(3)坂東本〔『真蹟集成』二・三九九〕題号右傍註記「光明无量之願壽命无量之願」

- 西本願寺本〔縮刷本〕五五三)、専修寺本〔専修寺本〕四四一)ともに無し。
- (4)坂東本〔真蹟集成〕二・四四七)「日成就」の左傍「曇鸞和尚造」
- 西本願寺本〔縮刷本〕六二二)、専修寺本〔専修寺本〕四九二)ともに無し。
- (5)坂東本〔真蹟集成〕二・四四八)上欄註記「鸞和尚造也」
- 西本願寺本〔縮刷本〕六二二)、専修寺本〔専修寺本〕四九三)ともに無し。
- (6)坂東本〔真蹟集成〕二・四五二)上欄註記「頽字タイ反崩也カフレ、破也オツル纏也マツフル」
- 西本願寺本〔縮刷本〕六二六)、専修寺本〔専修寺本〕四九六)ともに無し。
- (7)坂東本〔真蹟集成〕二・四五二)上欄註記「轍字カゴフ直利反アト通也セキ車也アト跡也」
- 西本願寺本〔縮刷本〕六二六)、専修寺本〔専修寺本〕四九六)ともに無し。
- (8)坂東本〔真蹟集成〕二・六一三)「提謂」の右傍註記「經名也」
- 西本願寺本〔縮刷本〕八四〇)、専修寺本〔専修寺本〕六六四)ともに無し。
- (9)坂東本〔真蹟集成〕二・一)「昔」の右傍註記「昔」
- 西本願寺本〔縮刷本〕八五七)、専修寺本〔専修寺本〕六七七)ともに無し。

坂東本に註記があるが、西本願寺本・専修寺本ともに無いものが、右に並ぶこととなった。書写本本文を生成する上では、原本の訂記・誤記を反映・修正する場合が多くあるが、ここに挙げたものについては、書

写当時にあったが書写しなかった可能性もあり、後世に加えられた可能性まで含まれる。

これらによれば、〈イ本〉が西本願寺本以外の本で校合すべき内容を示し、さらにもう一本あれば、「イマ本」と示されているようである。西本願寺本の採用した本文に対して、坂東本系の本文、専修寺本系の本文、涅槃経原典の三つが複合した内容となつていられると思われるのである。重見の指摘した坂東本を「イ本」とする不可解な状況は、坂東本と一致する「イ本」については、現状見られる坂東本自身に限らず、西本願寺本書写時点で坂東本あるいは他の親鸞の書写本を含んで存在していた諸本としておきたい。

つまり、「イ本」は特定の写本等を指すのではなく、西本願寺本自身が校合した異本があることを示していたのではないだろうか。それには、坂東本系の本文、専修寺本系の本文や『涅槃経』の経文が想定され、異本指示の無い註記については、専修寺本とともに書写していないものも見受けられるのである。西本願寺本は、坂東本から一旦書写した後の情報整理の過程で引用原典を含む数本との校勘を行い、相違があれば異本表記を取って示したと考えられる。次章で論じる句点の場合と同様に、坂東本のみならず、多くの関連情報を取り入れていることが、西本願寺本書写の実態といえよう。

#### 第四項 音訓の附加

西本願寺本では、坂東本と比べると、漢字の字音・声点・右左訓・字音註が多く書き加えられている。字音の付加は、親鸞真蹟や親鸞に由来する諸本によるものである。西本願寺本書写時には、諸文献を参照しつ

つ校訂や情報の集積を行ったと考えられる。訓点の増加と併せて考えれば、西本願寺本書写は、『教行信証』をテキストとして「読む」対象とすることを目指し、声に出して読むことを意識して訓点・字音を積極的に付加していったと考えられる。

本文整理の要素としての大きな特徴は、朱書による諸情報の付加である。西本願寺本の朱書の種類は、

字義に関わるもの 字義註

訓読に関わるもの 右訓、左訓、返点、合符、読点

字音に関わるもの 声点、字音註

と三つに大別できる。

引文に関わるものに願文や成就の傍註や註点「:」「:」「:」があり、字義に関する註記、右訓・左訓・返点・合符・句点・読点などの訓点、音を示すための字音や字音註・声点などの書き入れがある。字義・訓点・字音については、基本的には坂東本の情報を保存しているが、付加している数が圧倒的に多い。坂東本を底本とし、西本願寺本を対校本とする『浄土真宗聖典全書』第二巻「宗祖篇上」（本願寺出版社、二〇一一）所収の『教行信証』の校異を眺めれば、左訓の校異が大部分を占めることが容易に分かる。

引文に関わるものである傍註（願文・成就）、註点（:」「:」「:」）については、前節までに検討したことでもあるので、本項では、以下の幾つかの場合に分けて例示することで検討を進めていきたい。

第一に、右左訓である。「大喜 大捨」〔縮刷本〕二八五）、「攝盡」（同二八八）、「闡提」〔同三

ヨロコフ  
スツ

オサメツクス

セ  
ナリ  
シシノコトハ  
ヒラクフダクノコトハナリ

六二) などである。専修寺本と一致するものも多いが、一部専修寺本の左訓に「反」などと追加したものがあつた。また、坂東本右訓を変更したものがある。「故」を「故」(同二八五)、「言」を「言」(同二八六)、「云」何」を「云」何」(同三二二)、「學」を「學」(同三六一)、「聽」(同五九三、下字不明)、「稱」佛具知根力」を「稱」佛具知根力」(「稱」佛」を上書訂記、同五九四)と変更するなどしている。専修寺本では、「聽」(『縮刷本』五九三・『専修寺本』四七一)は同様、「稱」佛」(『縮刷本』五九四)は「稱」佛」(『専修寺本』四七一)とある。これらには専修寺本との関連が多く見られる。

第二に、返点・合符である。「爲」(『縮刷本』一八〇)の二点、「可」(同三六九)の四点を補うなど、坂東本における省略返点の補いをしている。また、「云」何」(同二七八)、「信」順」(同二七八)、「了」知」(同二七八)、「又」復」(同三二二)のような合符の追加がある。

第三に、音に関する付加が多いという点を指摘したい。右訓でいえば、「痛」を「痛」(『縮刷本』三六六)、「遂」を「遂」(同三六七)、「彼」を「彼」(同三六九)とするような箇所が多い。坂東本で送り仮名しかないものに対して、訓読あるいは音読するための補助として、積極的に字音を追加しているのである。さらに、坂東本の声点を保存しつつ、「大喜大捨」(『縮刷本』二八五)、「檀波羅蜜」(同二八六)などに、新たに声点を付加されている。ここには専修寺本によらない追加も多く認められる。

朱による訓・点・音の書き入れは、正しく本文を訓読し、音読するために付加されたものと位置づけることができる。そのために諸異本を参照し、校訂や情報の集積を行っていたと考えられる。西本願寺本の書写

では、『教行信証』をテキストとして「読む」対象とすることが目指され、声に出して読むことが意識されていた。

### 小結

書物としての構成を細分化すると、本文に関わる要素としては文章・句・語・字・声などの単位で段階的に捉えることができる。文章や句においては、西本願寺本では引文を解釈するために改行・傍註・註点が必要に施したことが挙げられる。様々な經典・論書・釈書等を蒐集、配列し、そこに親鸞自身の解釈を散りばめたのが『教行信証』である。その西本願寺本の特徴とは、本章での検討を通して三点挙げることができる。

第一に、坂東本を臨写したことである。具体的には、①坂東本の字体を模すことと、②誤写はあるがほぼ坂東本の文字・訓点・註記などの情報を保存することが挙げられる。一行十二字前後という少ない一行字数の中でその字形や内容を親鸞から次代へ継承しようとすることを目的とした書写内容であり、西本願寺本を証本として位置づけるための措置であったと考えられる。

第二に、頻繁に施される改行、註記によって構造化して本文を書写していたことである。親鸞真蹟の用例に基づき、朱註・右左傍註記・改行の三つを連動させることで、西本願寺本は引用文の整理を行っていた。

第三に、西本願寺本の本文整理の諸相としてのもう一側面、朱を中心とする書き入れは、字義に関する註

記、字訓に関わる註記、音に関わる四声点や反切などの註記、返点や合符などの訓読に関するものに分けられる。坂東本の情報を基底に置きつつ、諸本の文字情報を集約して示すことで、坂東本との関係における継承性とテキストとしての進展とが西本願寺本の特徴とすることができる。従来より西本願寺本は、坂東本との相異や「イ本」・「イマ本」などの書き入れから、坂東本や専修寺本系など諸本を参照したとされてきたが、異本情報のみならず音訓附加の様子からは、『教行信証』諸本に留まらない引用原典を含む諸本を披見した上で情報が集積されたと考えられ、それらを対照させながら、一度とは限らない校正がなされ、本文その他が整備されていた。

改行・朱註点・右左傍註という方法を複合的に用いて引文を分類することは、引文を読解していくためのものであり、親鸞真筆讚銘などの体裁に倣ったものと考えられる。その構造の中で、坂東本の文字が書写され、そこにさらに声点・右左訓・字音註によって音読のための漢字音を、返点・句点・読点・合符・字訓註・字義註によって訓読のために訓点を追加したのが西本願寺本の書き入れの内容である。つまり、構造、本文、内容の三つの調整が行われた西本願寺本では、読解・音読・訓読という三つの「読む」要素の充実が図られていたと考えられるのである。

このように、『教行信証』諸本の中での西本願寺本の特性としては、西本願寺本独自の体裁や諸本情報であるが、これが親鸞示寂後に近い時期に行われたことが重要である。訓点や、音読に関する字音・声点が増加した事実からは、口伝との関係が浮かび上がる。西本願寺本は後に「伝授本」としての地位を帯びること

になるが、そのための要件が西本願寺本書写時には既に備えられていた。時代性を考慮すれば、親鸞没後、直弟の時代、十四世紀以降盛んとなる延書本や註釈書の作成に先立つ時代の書写である。

親鸞の要素を継承しつつ、『教行信証』諸本と関連する典籍を多く参照して情報を集積することで、本文を「読む」ためのテキストとして成立した西本願寺本は、後の伝持の歴史からは本願寺（大谷廟堂）としての根本聖典として保管することを企図してのものと推測されるが、そのことは本文からは証明できないので、ここではその可能性を指摘するにとどめておくことにしよう。

以上、本章で考察してきた「読む」ための書写は、特に偈頌体と句点という形式において表出している。西本願寺本最大の特徴とも思われる偈頌体と句点との使用については章を改めて検討し、本章での小結を補完したい。

## 註

- (1) 復刻本解説「西本願寺本の書誌について」（『顕浄土真実教行証文類解説』五七頁）。
- (2) 縮刷本解説「西本願寺本『教行信証』の特色について」（『縮刷本』九四一）。
- (3) 堀川貴司『書誌学入門―古典籍を見る・知る・読む』（勉誠出版、二〇一〇）、藤井隆『日本古典書誌学総説』（和泉書店、

一九九一）、『日本古典籍書誌学事典』（岩波書店、一九九九）。

(4) 『縮刷本』解説参照。

(5) 重見一行『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察』（法藏館、一九八一）一三七頁。

(6) 山本信吉『古典籍が語る―書物の文化史―』（八木書店、二〇〇四）九二頁。

(7) 「龍谷教学会議第四十八回シンポジウム『教行信証』の書誌的研究について」（『龍谷教学』四八、二〇一三、一六四頁）。

ただし、界（野）を越える例は古版印刷経の場合などにも見られることである。なお、親鸞真蹟の界（野）をみれば、壮年期の筆跡とされる『観無量寿経註』『阿弥陀経註』あるいは鹿児島県性応寺蔵『唯信鈔』断簡に用いられるのみである。

(8) その他、一行、二行、三行から十行まで、改訂箇所を多く含む坂東本には多くの行数が見られる。詳細は、鳥越正道『最終稿本教行信証の復元研究』（法藏館、一九九七）二四〇頁、付録資料2「坂東本の行数・筆跡関係」参照。

(9) 平安末期から鎌倉時代にかけて京都の浄土教徒によってなされたと考えられている浄土教版は六行とされる。藤堂恭俊『増補新版浄土教版の研究』（山喜房佛書林、一六七六）一九七頁参照。親鸞加点本と考えられる『浄土論註』や『善導大師五部九卷』についても同様に六行書きである。

(10) 一行字数については、調査者によって若干の異なりがあるようである。重見一行前掲書三八六頁では一行一四字程度とするが、『現存目録』三三三頁、『原典版 校異解説』八頁、『聖典全』二・五解説では十二字内外、復刻本解説六〇頁は十三字内外とする。

(11) 重見一行前掲書八七頁。

(12) 頼富本宏・赤尾栄慶『写経の鑑賞基礎知識』（至文堂、一九九四）七九頁。

(13) 竺沙雅章「宋元版大藏経の系譜」（『宋元佛教文化研究』所収、汲古書院）二八一頁。

- (14) 「大聖武」といわれる『賢愚経』残欠については、東京国立博物館蔵本（一巻）のほか、前田育徳会蔵本（三巻）、白鶴美術館蔵本（二巻）が伝えられている。山本新吉『国宝大辞典』（講談社、一九八六）第三巻「書跡・典籍」六一頁参照。
- (15) 頼富本宏・赤尾栄慶前掲書一六一頁「字詰と界線」参照。
- (16) 藤堂恭俊前掲書七頁。
- (17) 頼富本宏・赤尾栄慶前掲書七九頁。
- (18) 山本信吉前掲書九四頁。
- (19) 鈴木宗忠「教行信証の真蹟本に就いて」（『文化』五十三、一九三八）、藤田海龍「教行信証の真蹟本に就いて」（『日本仏学論叢』一、一九四四）。
- (20) 『縮刷本』九四一頁解説。
- (21) 坂東本の改行については、「行巻」では行一念釈の前（『真蹟集成』一・一一五）、他力釈の前（『真蹟集成』一・一一九）、「信巻」では三一問答の前（『真蹟集成』一・一九三）などに明らかな改行が見られる。改行箇所については、武田晋「信巻」の構造について―書誌的視点と本願成就文受容形態を中心として（『龍谷大学論集』四五六、二〇〇〇）、「行巻」の構造について―書誌的視点を中心として（『真宗学』一一一、二〇〇五）、「真仏土巻」の構造について―書誌的視点と報仏土の問題を中心として（『龍谷大学論集』四七一、二〇〇八）、「化身土巻」（本）の構造について―書誌的視座を中心として（『真宗学』一一九・一二〇、二〇〇九）にて検討されている。
- (22) 赤松俊秀昭和本解説二二頁、平成版影印本解説四九頁、『顕浄土真実教行証文類』翻刻篇補註七五一頁。
- (23) 坂東本における『弁正論』の書写原本は定かではないが、平成版影印本解説二六六頁によれば、坂東本の他の箇所には見られない特徴的な字形が見られ、書写本を書写していくことが繰り返されることによって生じた字形ではないかと推定し

ている。

(24) 専修寺本においては、『無量寿経』・『如来会』引文の前後にいくつかの空白が見受けられる。すなわち、「行巻」(『専修寺本』一三五)では、他力釈『論註』中の『大経』第十八願文引用箇所で、「願言」と経文の間に二分の空白がある。また、「信巻」(『専修寺本』一七三)では、信樂釈『大経』「至心信樂本願文」の次、「大経言」の次、『大経』引文後「無量壽如来會言」の間、『如来会』引用後「本願成就文經言」の間、『大経』本願成就文引用後、「無量壽如来會言」の間である。引用後は空白を設ける場合があることが散見されるが、「大経言」の次の空白は異例である。

その他、専修寺本各巻における改行(二字以上空白があり行が変わっている箇所、偈頌体を除く)は次のようである。

第一冊「教巻」『無量寿如来会』(『専修寺本』一八)、『平等覺経』(同一九)

第二冊「行巻」『浄土論』(『専修寺本』五六)

第三冊「信巻」三一問答(『専修寺本』二二二)、欲生釈『涅槃経』(同二二四)、信樂釈『涅槃経』(同二二七)、信一念

釈(同二五七)、『安樂集』中『大経』(同二七七)、用欽律師釈(同二八六)、明所被機(同二九〇)、六

師外道(同三一五)、勸誠(同三五八)

第四冊「証巻」還相廻向釈(『専修寺本』三九二)

第五冊「真仏土巻」『讚阿弥陀仏偈』(『専修寺本』四九二)

第六冊「化身土巻」觀経隱顯(『専修寺本』五三三)、聖道釈(同五九九)、外教釈(同六二八)、『大集経』月藏分諸天王

護持品(同六四六)、『大集経』月藏分諸魔得敬信品(同六七八)、『弁正論』(同六九四く七一九に三二箇

所)、「高麗觀法師云」(同七二三)、「神智法師釈云」(同七二四)、後序(同七二六く七三三に二箇所)

(25) 実践女子大学文芸資料研究所叢書Ⅰ『源氏物語古注釈の世界―写本から版本へ―』所収(汲古書院、一九九四)一八頁。な

お、「源氏物語聞書」(覚勝院抄)は室町時代の書写の古註釈とされるが、ここにも朱註が付された写本がある(同書口絵図版参照)。

(26) 中井玄道「教行信証の異本(上)」、『六条学報』二二〇、一九一九。

(27) 梅原真隆「本派本願寺本の註記に就いて」、『教行信証序説』所収、一九三四)一五八〜六一頁。

(28) 重見一行前掲書一一二頁。

(29) 「信卷」の後半に引用される『往生論註』における『首楞嚴經』。坂東本(『真蹟集成』一・三二三)は割註であるが、西

本願寺本(『縮刷本』四五〇)では、恰も独立した経文のように改行を施した上で本文大に書写されている。

(30) 「信卷」『摩訶止観』引用の「・止観信一云」(『縮刷本』三二九)や「化身土卷」『弁正論』引用中の「論語」(『縮刷本』八

八二)の場合に、「・」ではなく「・」を用いている。前者は、「菩提」の語義を内容とし、二文前の『論註』引用文における「要發無常菩提心也」(『聖典全』二・九六)をさらに明かすための引用であろうと考えられる。後者については『周書』『禮』に続いて引用される『論語』であり、『禮』の右肩には合点が記されている。両者ともに誤って「・」としたわけではなく、連続性を持った文であるためにあえて「・」が用いられたと推定される。

(31) 『浄土三経往生文類』略本は、奥書によれば、建長七年(一二五五)親鸞八三歳の成立である。

(32) 『西方指南抄』国宝本各巻奥書によれば、康元元・二年(一二五六・五七)親鸞八四・五歳の書写校合によって成立した。

(33) 『尊号真像銘文』正嘉本の奥書によれば、正嘉二年(一二五八)親鸞八六歳の成立である。

(34) 観経往生、小経往生の段にはみられない。

(35) 最も古い年時の朱註点は『唯信鈔』信証本(『真蹟集成』八・一三九)に見られ、冒頭に「・」が使用されている。

(36) 『尊号真像銘文』正嘉本の註点は次の通りである。

「…大无量壽經言」〔『真蹟集成』四・一三三〕、「…又言」〔同四二〕、「…又言」〔同四五〕、「…大勢至菩薩御銘文」〔同五五〕、「…龍樹菩薩御銘文／＼十住毘婆沙論曰く文」〔同六七〕、「…婆藪般豆菩薩論曰」〔同七一〕、「…又曰」〔同〕、「…齊朝曇鸞和尚眞像銘文」〔同〕、「…釋曇鸞法師者」〔同八四〕、「…唐朝光明寺善導和尚眞像銘文」〔同九九〕、「…善導和尚云」〔同九四〕、「…又曰」〔同九八〕。

(37) 重見一行前掲書一二一頁。

(38) 重見一行前掲書一二一頁。

(39) 重見一行前掲書一一九頁。

(40) 重見一行前掲書一二八頁。

(41) 重見一行前掲書一一九頁。

(42) 重見一行前掲書一二八頁。

(43) 坂東本「信卷」別序前には、次のような『涅槃経』抄出文がある。

復有一臣名悉知義

昔者有王名日羅摩害其父得紹王位

跋提大王 毗樓眞王 那睺沙王 迦帝迦王

毗舍佉王 月光明王 日光明王 愛王

持多人王 如是等王皆害其父得紹王位然无

一王入地獄者於今現在毗瑠璃王 優陀邪王

惡性王 鼠王 蓮華王 如是等王皆

この文については、斎藤研「坂東本『教行信証』「信巻」、序前の文、試論」(『親鸞教学』九一、二〇〇八)、尾畑文正『教行信証』信巻「序前の文」についての一考察」(『同朋仏教』四六・四七、二〇一一)など、個別の論考が多くある。

(44) 山田龍城・福原亮巖「親鸞教学とその著作中の引用書」(『龍谷大学論集』三六五・三六六、一九六〇)によれば、『涅槃経』は三十六文(子引八文)引用される。

(45) 「信巻」至心積「散善義」中の『涅槃経』引文(『専修寺本』二二四)、信楽釈『涅槃経』(同二二七)に改行が見られる。

(46) 『教行信証』における『涅槃経』引文については、土橋秀高「親鸞聖人の涅槃経観」(『真宗研究』五、一九六〇)、土橋秀高「親鸞聖人と涅槃経」(『龍谷大学論集』三六五・三六六、一九六〇)、吉田讓「宗祖と『涅槃経』」(『教行信証』)と『大般涅槃経要文』、『見聞集』との関係について(『宗学院紀要』五、一九九九)、吉田讓「宗祖の『涅槃経』依用の態度」源信の『一乗要決』と比して(『真宗研究』四三、一九九九)、福井智行『教行信証』と『涅槃経』(浄土真宗本願寺派総合研究所編『教行信証』の研究第二巻『顕浄土真実教行証文類』の背景と展開)(浄土真宗本願寺派宗務所、二〇一一)などがある。

(47) 『大般涅槃経要文』、『見聞集』所収の『涅槃経』など(いずれも『真蹟集成』九に所収)。

(48) 大正蔵テキストデータベース(②)検索による大蔵経諸本画像を見れば、東京大学総合図書館蔵嘉興蔵(第四十二帙第四冊七表一行目)でも大正蔵と同様であった。その他の經典においても、長阿含経以下「阿耨多翅舍欽婆羅」となっており、『教行信証』の用例は誤りである可能性がある。

(49) 南本涅槃経について、大正蔵では「⑩目||眼⑬」という校異がある。

(50) この諸本状態について、中井玄道校訂本四〇頁校異⑨によれば、江戸期刊本は坂東本と一致、縮刷蔵本・高田蔵版本・

寂如校訂本・智暹本は經本と一致、洪谷本は「以殺得壽命長故」、芸州本は「以殺彼壽命長故」、存如本は「以殺壽命故彼」とあるという。

(51) 北本『涅槃經』(『大正藏』一二・五七五中)は次のようである。

如來則有二種涅槃。一者有爲。二者無爲。有爲涅槃無常樂我淨。無爲涅槃有常樂我淨。…人深信是二種戒俱有善果。是故名爲戒不具足是人不具信戒二事。所修多聞亦不具足。云何名爲聞不具足。如來所說十二部經。唯信六部不信六部。是故名爲聞不具足。雖復受持是六部經。不能讀誦爲他解說無所利益。是故名爲聞不具足。又復受是六部經已。爲論議故爲勝他故爲利養故爲諸有故一七受持讀誦解說。是故名爲聞不具足。

(52) 南本『涅槃經』(『大正藏』一二・八二二下)は次のようである。

如來則有二種涅槃。一者有爲。二者無爲。有爲涅槃無常樂我淨。無爲涅槃有常樂我淨。…是人深信是二種戒俱有善果。是故名爲戒不具足是人不具信戒二事。所修多聞亦不具足。云何名爲聞不具足。如來所說十二部經。唯信六部不信六部。是故名爲聞不具足。雖復受持是六部經不能讀誦爲他解說無所利益。是故名爲聞不具足。又復受是六部經已。爲論議故。爲勝他故。爲利養故。爲諸有故。持讀誦說。是故名爲聞不具足。善男子。我於經中說聞具足。云何具足。若有比丘身口意善。先能供養和上諸師有德之人。是諸師等於是人所生愛念心。以是因緣教授經法。是人至心受持誦習。持誦習已獲得智慧。得智慧已能善思惟如法而住。善思惟已則得正義。得正義已身心寂靜。身心寂已則生喜心。喜心因緣心則得定。因得定故得正知見。正知見已於諸有中心生厭悔。悔諸有故能得解脫。是人無有如是等事。是故名爲聞不具足。

# 第五章

## 西本願寺本の偈頌体と句点

## 第五章 西本願寺本の偈頌体と句点

改行に類する西本願寺本の体裁面の特徴として、引用原典が偈文の場合は、積極的に四言・五言・七言などに区切って一行数句で書写する偈頌体を用いる傾向にあり、坂東本と比しても圧倒的に多く見られる。さらに本来偈文でないと考えられるものを独自に偈文形式とする例がいくつかあり、句点（句切り点）との関連の中で新たに偈頌体とされたものがある。本章では、偈頌体と句点の様相を通して、西本願寺本書写の実態について考察する。

### 第一節 偈頌体と散文

偈文あるいは偈頌とは、経典や論書などのうちで、仏の教えを詩句によって述べたものや、仏・菩薩をたたえた詩句である。『教行信証』鎌倉二本に見られるものは、経典・論書中に「偈曰」などとして記された偈文がすべて偈頌体で示されているわけではないが、少なくとも、一行二句あるいは三句で改行されているものは各本に散見される。ここでは、これらを「偈頌体」という語で示し、その傾向を探っていく。<sup>(1)</sup>

第一項 坂東本・専修寺本の偈頌体

親鸞真筆である坂東本、古写本の西本願寺本・専修寺本には、それぞれ偈頌体での引用があり、真蹟本の研究の中で、『涅槃経』・『大集経』中の偈文が偈頌体であることや、三本それぞれの偈頌体の特徴などが指摘されてきた。<sup>(3)</sup> 行格・行改に注意して比較検討すれば、『教行信証』の偈頌体は、坂東本を基点とし、西本願寺本では大幅に増加することがわかる。まず、坂東本と専修寺本の偈頌体を示すと、次のようである。

〈表5-1 坂東本・専修寺本の偈頌体〉

卷	積	引用文	第一句	最終句	句数	坂東本筆跡	専修寺本筆跡	『聖典全』
行卷	大行積	平等覚経	如是人間佛名	度一切生老死	三八	『真蹟集成』変化	『専修寺本』	『聖典全』
行卷	大行積	十住論	般舟三昧父	從是二法生	四	一九	後期	一七
行卷	大行積	十住論	无量光明慧	願佛常念我	三六	五三	前期	一九
行卷	大行積	五会法事讚	如來尊號甚分明	至彼還同法相身	四三	八七	前期	二四
行卷	正信念仏偈	—	歸命无量壽如來	唯可信斯高僧說	一一〇	一四五	前期	三六
信卷	明所被機	涅槃経	若常愁苦	亦復如是	一〇六	—	後期	一〇六
信卷	明所被機	涅槃経	若於父母	在阿鼻獄	六	二六四	後期	一〇七
信卷	明所被機	涅槃経	實語甚微妙	猶如妙德等	六二	二九九	後期	一一九
化卷	外教釈	大集経	若有衆生歸佛	決得阿耨菩提果	一一	五九一	中期	一一九
化卷	外教釈	大集経	三世諸佛大悲	盡壽歸依如來法	八	五九三	中期	一一四
化卷	外教釈	大集経	佛出世甚難	智者常速知	一一	五九七	中期	一一五
化卷	外教釈	大集経	示現世間故	熾然正法燈	二四	六〇八	中期	一二六
化卷	外教釈	大集経	我告月藏言	護持善朋黨	四八	六二三	中期	一二六
化卷	外教釈	大集経	於此娑婆界	飢饉及鬪諍	三二	六二六	中期	一三〇

【註】坂東本・専修寺本の項の「—」は偈頌体でないことを示す。

坂東本は、前期筆跡時三箇所、中期筆跡時六箇所、後期筆跡時五箇所である。前期筆跡時に既に偈頌体があり、中期筆跡時以降の筆跡である『大集経』や『涅槃経』に長い偈頌体が見られる。殊に『大集経』抄出文を元にしたと推定される中期筆跡以降の用例が西本願寺本の改行の源泉といわれている点は、抄出文という經典書写の形式とこの偈頌体の多さを見れば首肯されるが、なぜこの形式になったのかはわからない。また、専修寺本は、偈頌体の数は最も少ないが、おおよそ坂東本の偈頌体と合致している。

## 第二項 西本願寺本の偈頌体

次に、西本願寺本は、坂東本の筆跡変遷に照らし合わせると、前期箇所(二四)、中期箇所(六)、後期箇所(二二)と、坂東本・専修寺本に比べて大幅にその数が増加している。

西本願寺本では、『平等覚経』(二)、『十住論』(五)、『涅槃経』(四)の偈頌体が増え、さらに『大経』(一)、『浄土論』(一〇)<sup>(4)</sup>、『華嚴経』(四)、『礼讚』(三)、『如来会』(二)、『讚阿弥陀仏偈』(二)、『仏本行集経』(二)、『集諸経礼懺儀』(一)の中の偈文が偈頌体となっている。特に、『大経』重誓偈・往観偈、『平等覚経』往観偈、『如来会』往観偈、『浄土論』願生偈、『讚阿弥陀仏偈』、『礼讚』など元々の偈文に偈頌体が採用されている。

鎌倉三本を見渡すと、『十住論』や「正信念仏偈」、『平等覚経』、『大集経』、『涅槃経』が三本のいずれもが偈頌体で示していることがわかる。筆跡年時と書写の状況からは、坂東本で偈頌体のあるものを西本願寺本で

はおおよそ偈頌体で示し、さらに西本願寺本では偈頌体の採用経論釈が大幅に拡がっているのである。偈頌体の増えた西本願寺本では、坂東本で一行三句のものを全て一行二句にする点、専修寺本でのみ偈頌体である『大集経』を偈頌体としていない点も注意すべき事項であろう。坂東本などと比べて、紙数が大幅に増える可能性がある書写法を敢えて採っているのが西本願寺本ということである。

現存の親鸞真蹟との関係でいえば、『見聞集』の『五会法事讚』・『涅槃経』・『大般涅槃経要文』にいくつかの偈頌体があり、あるいは中期筆跡段階で卷子状の抄出文を折本状にして「化身土巻」に組み入れた『大集経』など、親鸞六三歳頃から七〇歳頃にかけての経論の要文が伝えられている。經典書写という性格の中で成立した史料に見られるような形式が、親鸞晩年における坂東本の体裁や、西本願寺本の書写時における偈頌体の採用に影響したと考えられる。

それ以外にも、原典が偈文であるが坂東本では偈頌体でない箇所であっても、西本願寺本で偈頌体とする例があり、坂東本とは異なる書式を用いることの意義を考える必要がある。

### 第三項 『讚阿弥陀仏偈』

原典が偈文である引用書の代表として、その中で第一に取り上げたいのが、『教行信証』に五回の引用がある『讚阿弥陀仏偈』である。改めて引用箇所を挙げれば、次のように三つの種類に分かれ、親鸞による使い分けが推測できる。

正引二文…「信卷」大信釈  
〔聖典全〕二・七〇)

「真仏土卷」真仏土釈  
〔聖典全〕二・一七三)

子引二文…「行卷」大行釈『安樂集』  
〔聖典全〕二・三〇)

「証卷」真実証釈『安樂集』  
〔聖典全〕二・一三六)

略抄一文…「信卷」菩提心釈『聞持記』  
〔聖典全〕二・九三)

第一に、『讚阿弥陀仏偈』正引である。「信卷」と「真仏土卷」の引用が該当し、「曇鸞和尚造」を明記する点で共通している。<sup>5)</sup>

「信卷」大信釈(坂東本後期筆跡)

諸聞阿彌陀德号 信心歡喜慶所聞

乃暨一念至心者 回向願生皆得往

唯除五逆謗正法 故我頂礼願往生  
上巳

〔縮刷本〕二二二)

「真仏土卷」真仏土釈(前期筆跡)

成佛已來歷十劫 壽命方將无有量

法身光輪徧法界 照世盲冥故頂礼

〔縮刷本〕六二二)

「信卷」の引用は、『大経』第十八願文の内容を承けた讚文であるが、西本願寺本のみ偈頌体で示されている。「真仏土卷」の引用は、西本願寺本・専修寺本では初めの四句のみ偈頌体であり、残りは散文である。

第二に、『安楽集』による引用であり、偈頌体ではない。これは、「行卷」大行釈『安楽集』（前期筆跡、原文との相異なし）、「証卷」真実証釈『安楽集』（前期筆跡、原文との相異なし）、「真仏土卷」『讚阿弥陀仏偈』『智慧光明』以下である。坂東本・西本願寺本・専修寺本のいずれも偈頌体としては引用されておらず、『安楽集』として引用したことには、釈書として相承関係を示す方に重点があると考えられる。『讚阿弥陀仏偈』を偈頌として引用しない意図が、西本願寺本の体裁にも表れているといえよう。

第三に、「信卷」菩提心釈『聞持記』（後期筆跡）である。『聞持記』については第二章で取り上げたが、その引用文の末尾に『讚阿弥陀仏偈』の徳号が略称して紛れ込んだと考えられる文言がある。

往豈非  
難信 阿彌陀如來号眞實

明平等覺難思議畢竟依大

應供大安慰無等等不可思議光 上巳

（『縮刷本』三一七）

『聞持記』原文に当該の文は見当たらないが、第二章での検討によれば、「真仏土卷」所引の『讚阿弥陀仏偈』のうち前半部との関連が推定される。また、西本願寺本に関しては、「シタマツルナリトツルト」という二種の訓



る。また、原典の抄出引用である『浄土和讃』の訓点まで、書写時に採用しているのではないかと考えられるほど一致している。

〈表5-2 「真仏土巻」『讚阿彌陀仏偈』の構造〉

<p>「真仏土巻」『讚阿彌陀仏偈』 〔縮刷本〕六一二二</p> <p>讚阿彌陀佛偈曰 曇鸞和尚造 南无阿彌陀佛 釋名无量壽傍經 奉贊亦曰安養</p> <p>成佛以來歷十劫 壽命方將无量有 法身光輪徧法界 照世盲冥故頂禮 智慧光明不可量 故佛又号无量 光有量諸相……故我稽首无等等 本師龍樹摩訶薩…… 南无不可思議光…… 无量佛咸各至心頭面禮 抄出 已上</p>	<p>構造</p> <p>題号・撰号 名号・細註</p> <p>總讚 (偈頌体)</p> <p>徳号 (長行1)</p> <p>龍樹讚 (長行2)</p> <p>結讚</p>	<p>『浄土和讃』国宝本徳号列示 〔真蹟集成〕三・一一二</p> <p>讚阿彌陀佛偈曰 曇鸞和尚造 南无阿彌陀佛 釋名无量壽傍經 奉贊亦曰安養</p> <p>成佛以來歷十劫 壽命方將无量有 法身光輪徧法界 照世盲冥故頂禮 一 又号无量光 二 眞實明…… 卅七 南無不可思議光 已上阿彌陀如來尊号 已上略抄之</p> <p>十住毘婆沙論曰 自在人<sup>一</sup>我<sup>二</sup>清淨人命<sup>三</sup>无量徳稱<sup>三</sup>贊</p>
--	---	--

さらに、要文を示す際に讚銘類の改行形式を踏襲したことも併せて考えられる。『教行信証』において、「偈

頌体」は坂東本初期に見られる形式であり、早いうちから偈頌体を用いていたことは、前期筆跡時の偈頌体から確認できる。もともとが『大経』を讃仰した偈文である『讚阿弥陀仏偈』においては、正引の論書と子引の釈書の別が引文指示語の相異に対応している。特に「真仏土卷」においては、『浄土和讃』徳号列示と関わって、坂東本では偈頌体ではなかったものが、西本願寺本においての偈頌体採用に影響していたのではないだろうか。

ここで問題となるのが、『讚阿弥陀仏偈』引用において、親鸞には偈頌体とする意図があったのかということである。改行の少ない坂東本においてであっても本文引用の前に改行を設けつつ引用を行っている点（「信卷」大信釈）、引用の序列を「曰」に引き上げる点、『浄土和讃』徳号列示との構造比較などからすると、偈文としての意識は親鸞の執筆当初よりあり、更に「真仏土卷」の引用のように、光寿二無量の総讃と十二光讃・龍樹讃と和讃と似た構造で把握していたと考えられる。また「真仏土卷」においては、真仏を「南無不可思議光」（『無量寿如来会』・『讚阿弥陀仏偈』、真土を「無量光明土」（『平等覚経』）と、それぞれ偈文からの引用で示している。それを専修寺本と西本願寺本とで一部視覚化が図られたと考えられる。

偈頌として引用することの意義については、「行卷」における『五会法事讃』や「正信念仏偈」からも類推することができる。親鸞自身の作である「正信念仏偈」は、これまで述べたような『讚阿弥陀仏偈』と同様に、「曰」として導入する点が特徴的である。ここに偈文を重要する姿勢が見られるのであるが、「偈頌」の位置づけを今一度考え直せば、『讚阿弥陀仏偈』に「釋名無量壽傍經奉讃」（『聖典全』一・五三五）、「正

信念仏偈」に「歸大聖眞言闋大祖解釋」(『聖典全』二・六〇)とあるように、これらの偈文は經典等に依拠して制作された点で共通している。内容上、經典を解釈したものと位置づけられるために、偈文の作者が曇鸞・親鸞であっても、偈頌体として引用することで經典に準ずる地位として「曰」に位置づけられることを、西本願寺本は形式的に明確にした。

これまで述べてきたことを総合すれば、經典が「言」に対応し、「論書」が「曰」に対応し、釈書が「云」に対応するという引文導入語に関する原則的な位置づけが認められるが、經典に依拠して製作された偈頌体については、經典に準ずるという意味において、「云」が「曰」になりうることを示している。

#### 第四項 『華嚴經』

第二に、『華嚴經』引用文について検討したい。『華嚴經』は正引五文、子引三文の計八文が引用される。教義的に重要な箇所へ引用されているともいわれ、『涅槃經』との連引箇所については、必ず御自釈、『無量壽經』の後に引かれる傾向が指摘されている。<sup>(12)</sup> また、大乘經典成立の研究に目を向ければ、(後期無量壽經)に偈頌が増加する背景として、『華嚴經』あるいは『法華經』に非常に偈文が多く、『華嚴經』「賢首品」では、長い一品全体が偈文で成り立っていることから、大乘經典成立期においては『無量壽經』系と『華嚴經』系のテキストが影響し合っていたという見方もある。<sup>(13)</sup> こうしたことに導かれて、偈頌体の多い西本願寺本の検討において、『華嚴經』を取り上げてみたいのである。

〈表5-3 『華嚴經』の引用〉

卷	積	『聖典全』	『真蹟集成』	『縮刷本』	『専修寺本』	『華嚴經』	『大正藏』	
行巻	大行釈	二・三〇	六九〇七	九〇	七一〇七三	晋訳卷五九入法界品	九・七七八下	
	『安樂集』	(一・五七九)						
	大行釈	二・四七	一一二	一五一	一一〇	晋訳卷五九入法界品	九・七七八中	
	『往生要集』	(一・一〇八八)						
	他力釈	二・五二	一一二〇	一六八	一三三	晋訳卷五 明難品	九・四二九中	
	『論註』	(一・五二七)						
	一乗海釈	二・五五	一三一〇	一八一	一四三	晋訳卷五 明難品	九・四二九中	
	大信釈	二・七八	一九一〇	二六四〇	二二〇	晋訳卷五九入法界品	九・七七七上	
	『往生要集』	(一・一〇八七)						
	信巻	信樂釈	二・八五	二〇八〇	二八九	二三三	晋訳卷六〇入法界品	九・七八八上
信樂釈		二・八五	二〇九	二八九	二三三	唐訳卷六〇入法界品	一〇・三二六下	
信樂釈		二・八五	二〇九	二八九	二三三	唐訳卷一四 賢首品	一〇・七二中	
信樂釈		二・八五	二〇九	二八九	二三三	唐訳卷一四 賢首品	一〇・七二中	
信樂釈		二・八五	二〇九	二八九	二三三	唐訳卷一四 賢首品	一〇・七二中	
信樂釈		二・八五	二〇九	二八九	二三三	唐訳卷一四 賢首品	一〇・七二中	
信樂釈		二・八五	二〇九	二八九	二三三	唐訳卷一四 賢首品	一〇・七二中	
信樂釈		二・八五	二〇九	二八九	二三三	唐訳卷一四 賢首品	一〇・七二中	
信樂釈		二・八五	二〇九	二八九	二三三	唐訳卷一四 賢首品	一〇・七二中	
信樂釈		二・八五	二〇九	二八九	二三三	唐訳卷一四 賢首品	一〇・七二中	
真仏土巻	真仏土釈	二・一七〇	四三九〇	六一二	四八四	晋訳卷三四 性起品	九・六一五上	
	『論註』	(一・四五八)						
	真門釈	二・二〇八	五四五〇	七五一	五九一	唐訳卷七七入法界品	一〇・四二五下	
	真門釈	二・二〇八	五四六	七五一	五九一	唐訳卷六〇入法界品	一〇・三二六下	
	外教釈	二・二三九	散逸(六三二)	八六七	六八五	晋訳卷二四 十地品	九・五四九上	
	後序	二・二五六	六七九	九二四	七三三	唐訳卷七五入法界品	一〇・四二二下	
	化身土巻	真門釈	二・二〇八	五四五〇	七五一	五九一	唐訳卷七七入法界品	一〇・四二五下
		真門釈	二・二〇八	五四六	七五一	五九一	唐訳卷六〇入法界品	一〇・三二六下
		外教釈	二・二三九	散逸(六三二)	八六七	六八五	晋訳卷二四 十地品	九・五四九上
		後序	二・二五六	六七九	九二四	七三三	唐訳卷七五入法界品	一〇・四二二下
真門釈		二・二〇八	五四五〇	七五一	五九一	唐訳卷七七入法界品	一〇・四二五下	
真門釈		二・二〇八	五四六	七五一	五九一	唐訳卷六〇入法界品	一〇・三二六下	
外教釈		二・二三九	散逸(六三二)	八六七	六八五	晋訳卷二四 十地品	九・五四九上	
後序		二・二五六	六七九	九二四	七三三	唐訳卷七五入法界品	一〇・四二二下	
真門釈		二・二〇八	五四五〇	七五一	五九一	唐訳卷七七入法界品	一〇・四二五下	
真門釈		二・二〇八	五四六	七五一	五九一	唐訳卷六〇入法界品	一〇・三二六下	

これまでの『教行信証』における『華嚴經』引用文の研究では、原典情報を踏まえて、主として各引用文単位で引意について考察が重ねられてきた。『教行信証』以外でいえば、『華嚴經』は親鸞真蹟として単独で

抄出されたものは少ないが、「御消息」中にいくつかの引用が伝えられている。<sup>(14)</sup>

『華嚴経』の引用箇所については、〈表5-3〉のように、「行巻」一乗海积一文、「信巻」信楽积三文、「化身土巻」真門积二文、外教积一文、後序一文があり、また、『論註』、『安楽集』、『往生要集』に子引があるとされる。<sup>(15)</sup>

『華嚴経』正引・子引箇所の特徴について、右の表のように並べることによって分かるのは、「行巻」の引用については、『論註』『安楽集』『往生要集』という、七祖撰述による引用であって、「信巻』『往生要集』も然りである。

では、『教行信証』における正引の特徴について、いくつか確認してみよう。

「行巻」一乗海积の引用は、「文殊法常爾」(『聖典全』二・五五)以下四十字であるが、その中に含まれる「一切无导人、一道出生死」については、「一切」と「十方」の異なりはあるが、他力积『論註』引用中『華嚴経』の「經言十方无导人一道出生死」(同五二)の原典と同一である。<sup>(16)</sup>「信巻」信楽积第一文「聞此法歡喜信心」以下二十字は、「歡喜信心」の訓読が「信心を歡喜して」と、親鸞の『大経』第十七願文訓読と同一の訓を施している点が注目されてきた。<sup>(17)</sup>「信巻」信楽积第三文は『龍舒浄土文』(『大正蔵』四七・二五一上)に引用があり、後序の「若有見菩薩」以下二十字は、『往生要集』(『聖典全』一・一二四三)における最後の引用文である。こうしたことからすれば、親鸞の引用においては、『往生要集』等の引用に基づいて『華嚴経』を受容していた一面が認められる。

そこで西本願寺本であるが、やはり偈頌体が多く見られるのである。「行巻」、「信巻」、「後序」の引用形態について、坂東本・専修寺本と比較してみよう。

第一に、「行巻」一乗海積引文である。原典は、偈文である。

〈坂東本〉

无数法故<sup>上</sup> 華嚴經言文殊法常爾・

法王唯一法・一切无導人・一道出生死

一切諸佛身唯一法身・一心一智慧

力无畏亦然<sup>上</sup> 已

(『真蹟集成』一・一三二)

〈専修寺本〉

无数法故<sup>上</sup> 華嚴經言文殊法常

爾法王唯一法一切无導人・一道出生死

一切諸佛身唯一法身・一心一智慧

力无畏亦然<sup>上</sup> 已

(『専修寺本』一四三)

〈西本願寺本〉

∴華嚴經言

文殊法常爾 法王唯一法

一切无導人 一道出生死

一切諸佛身 唯一法身

一心一智慧 力无畏亦然<sup>上</sup> 已

(『縮刷本』一八一)

西本願寺本では五言八句、四行で偈文が示されているが、坂東本・専修寺本が中点(句点)を五言ずつに附していることから、坂東本や専修寺本でも、五言切りの句と認識していたと思われるが、西本願寺本ではさらに発展させて偈頌体になっているのである。

第二に、「信巻」信樂積引文である。原典は、第一文、第二文、第三文ともに偈文である。

〈坂東本〉

信不具足抄上 華嚴經言聞此法  
 歡喜信心無疑者速成无上道餘諸  
 如來等又言如來能永斷一切衆生疑  
 隨其心所樂普皆令滿足又言信爲  
 道元功德母長養一切諸善法斷除  
 疑網出愛流開示涅槃无上道信無  
 垢濁心清淨滅除憍慢恭敬本亦爲  
 法藏第一財爲清淨

〔真蹟集成〕一・二〇八

〈專修寺本〉

具足抄上 華嚴經言聞此法歡喜  
 信心無疑者速成无上道餘諸如來  
 等又言如來能永斷一切衆生疑  
 隨其心所樂普皆令滿足又言信  
 爲道元功德母長養一切諸善法斷  
 除疑網出愛流開示涅槃无上道信  
 無垢濁心清淨滅除憍慢恭敬本  
 亦爲法藏第一財爲清淨

〔專修寺本〕一四三

〈西本願寺本〉

∴華嚴經言成就信  
 聞此法歡喜 信心無疑者  
 速成无上道 與諸如來等  
 ・又言  
 如來能永斷 一切衆生疑  
 隨其心所樂 普皆令滿足  
 ・又言  
 信爲道元功德母 長養一切諸善法  
 斷除疑網出愛流 開示涅槃无上道  
 信無垢濁心清淨 滅除憍慢恭

〔縮刷本〕二八九

原典が偈文であるため、第一文・第二文は偈頌体で示されている。しかし、第三文は一見そうではないように見える。ただし、一行字数と若干の空白を考慮すれば、前二行は七言四句の偈頌体となっているようであり、第三行以下は一行字数が十二字前後に減少している。第三文も前四句は偈頌体と見なすことができる。

なお、第一文は真仏『経釈文聞書』（『聖典全』四・七）に偈頌体で書写されている。<sup>(18)</sup> 第三文の前二行も真仏『経釈文聞書』（『聖典全』四・八）では偈頌体であり、前二句を偈頌体として示す例が親鸞周辺に認められる。

第三に、後序の引文で、『教行信証』最後尾の引用である。原典は偈頌体である。

〈坂東本〉

〈専修寺本〉

〈西本願寺本〉

上<sup>巳</sup>爾者末。俗可行信敬也可知如華

信敬也可知如華嚴經偈云若有見菩

・如華嚴經偈云若有見菩薩・修

嚴經偈云若有見菩薩修行種種

薩修行種種行起善不善心菩薩

行種種行・起善不善心・菩薩皆

行起善不善心菩薩皆攝取<sup>上巳</sup>

皆攝取<sup>上巳</sup>

攝取<sup>上巳</sup>

（『真蹟集成』二一・六七九）

（『専修寺本』七三三）

（『縮刷本』一八一）

（註）坂東本「末」の下の挿入符号は、上欄補記「代道」を指す

ここは原典偈文のため、西本願寺本では偈頌体で示されそうな箇所でありながら、偈頌体とはされていない。「如華嚴經偈云」とあることや、大きな中点（朱による句点）によって五言毎に附加していることから、五言四句の偈文であることは認識されていたと考えられるのであるが、「云」を用いていることは、『要集』巻下（『聖典全』一・一二四三）に準じており、独自に引用したというよりは、『要集』の文をそのまま書写した側面が強い。そこで、散文として引用されたが、西本願寺本では朱の句点を五言づつに附すことで、偈

頌体に準じる扱いとして書写したのではないだろうか。

なお、原典が偈頌であるが散文で示している箇所はこの他に二箇所あり、「行巻」「論註」中引文と「化身巻」真門釈第一文・第二文である。前者は一乗海釈に含まれる偈文であり、『論註』中の引文であるため、偈文形式である必要はないが、西本願寺本の見ただ目では、改行を施した上で一行で「∴經言十方无碍人・一道出生死」と朱による中点（句点）を交えて書かれてあって、偈頌体に準じるものと見なすこともできる。後者については、第二文と「信巻」信樂釈第二文との関連が指摘されている。<sup>(19)</sup> すなわち、二十一巻分を数える『華嚴経』「入法界品」の始めの方にあたり、十個目の偈文となるこの文は、「釋迦無上尊 具一切功德 見者心清淨 迴向大智慧」と始まるが、その続きが「化身土巻」真門釈第二文であり、十四行二十八句を跨いだこの偈文の末尾が「信巻」に引かれた「如來雷永斷」以下四句であるというのである。「信巻」引用との関連の中で偈頌体としなかった可能性もあるが、第一文も含めて、偈頌体としなかった理由については定かでない。

ここで、前項で検討した「真仏土巻」「讚阿弥陀仏偈」と比べれば、原典偈文の引用のうち、長文については、前二行四句は偈頌体とするが、後は偈頌体としない例が信樂釈『華嚴経』第三文と共通している。西本願寺本においては、坂東本において偈頌体としないものについて、原典が偈文の場合にはおおそ偈頌体で示すが、引用文が『論註』『安樂集』『要集』に依る場合、偈文が長文に渡るものの第三行五句目以降は偈頌体とはしない例が確認された。しかし、後者の場合は、前二行を偈頌体として残していることから、全体

としては偈頌体であるが、形式上省略した可能性が含まれていることに留意したい。

そうした中で、今一度西本願寺本の「真仏土巻」『讚阿弥陀仏偈』の冒頭の二行が偈頌体として書写されていることの意義について再考すれば、『讚阿弥陀仏偈』全体のうち、この二行が『大経』願文及び願成就文に対応するものとして經典に準ずる地位に相当する偈頌体として書写され、それ以降は偈頌体を省略する形で書写する方針であったことが明らかとなる。さらに願文・願成就文に示されていない内容が、「乃至」として省略されていると考えられるのである。

## 第二節 『無量寿経』と句点

次に、『無量寿経』引用箇所を取り上げて、西本願寺本の朱点について、親鸞真蹟の『無量寿経』引用、親鸞の朱点を保存していると考えられる『無量寿経』とを比較し、親鸞にゆかりのある『無量寿経』の句点に相当近い点が付されていることを明らかにする。

### 第一項 西本願寺本の句点

西本願寺本は、坂東本を臨模しつつ、誤写・脱落・改変のすがたが窺えるが、訓点については、坂東本からの改編や国宝本『三帖和讃』との関連が指摘される。その中で、訓読に関する書き入れとして大きな特徴

のひとつが、西本願寺本の本文随所に附された朱による句点（中点）である。

初めに、西本願寺本の点註について言及した吉澤義則の記述を挙げておこう。<sup>(20)</sup>

本願寺本教行信証の点注は、親鸞上人の信者が上人と同時代或は後るゝこと遠からざる時代に於て、坂東本から忠実に移点し、更に専修寺本によつて補校し、且自点をも加えたものである。この三点は想ふに一筆であらう、少くとも校点と自点との筆者は同一人であつたと認められる

ここでは、坂東本からの移点、専修寺本による補校、自身の加点という三種があることが指摘される。ただ、自筆であり臨写原本である坂東本に無い独自の追加・編集は、創出なのか、何かに基づいているのかに疑問が残る。そこで、各巻冒頭などに引用される願文・願成就文を中心に、『無量寿経』を比較対照したい。

西本願寺本には、「如來者・卽・是・眞實」〔縮刷本〕一八〇）や「一者・欲暴」（同三三五）のように、訓読あるいは音読の際の句切りの目安となる箇所句点（朱による中点）が附されている場合がある。その中で注目したいのが、『無量寿経』における句点であつて、願文や願成就文を中心に、句点が付されている箇所が多くある。巻毎に示すと次のようである（括弧内数字は『縮刷本』の頁数を示す）。

「行巻」 第十七願（三四）・第十七願成就文（三六）・「無量壽佛……」（三六〓四言毎の句点）

「信巻」 第十八願（二二二）

「証巻」 第十一願（四九三）・第十一願成就文（四七四）

「眞仏土巻」 第十二願（五五四）・第十三願（五五四）

第十二願成就文（五五五〓十二光部分）・第十三願成就文（五五八〓一部）

「化身土卷」第十九願（六六一）

## 第二項 諸本比較（二）―願文・願成就文―

西本願寺本の句点がある箇所について、『教行信証』諸本や『無量寿経』（引文・抄出文を含む）との朱点比較を行うことで、西本願寺本の特徴を考察したい。親鸞が書写あるいは引用している『無量寿経』文や、親鸞の加点に関連するものとして、次のものとの比較を行った。

①『教行信証』坂東本（『真蹟集成』一・二所収）

②『教行信証』専修寺本（『専修寺本』所収）

③親鸞真筆第十一・十二・十三・十七・十八願断簡（『真蹟集成』九所収）

第十一願・第十二願・第十三願は慈願寺蔵、第十七願は浄円寺蔵、第十八願は手塚大制氏蔵。

④本派本願寺蔵『無量寿経』正平六年書写本

⑤龍谷大学図書館蔵『無量寿経』南北朝期存覚加点本<sup>(21)</sup>（龍谷大学図書館貴重書データベース）

本研究では、本願寺当局より本派本願寺蔵『無量寿経』正平六年書写本の資料使用の許可を頂き、閲覧に当たっては、浄土真宗本願寺派総合研究所に便宜を図っていた。ここに甚深の謝意を表したい。それでは、まずは願文について比較してみよう。『教行信証』の引用順に並べたのが次表である。

〈表5-4 『無量寿経』句点比較(1)〉

願文	西本願寺本 〔縮刷本〕	坂東本 〔真蹟集成〕	専修寺本 〔専修寺本〕	真筆願文 〔真蹟集成〕	『無量寿経』 正平本	『無量寿経』 龍大本
十七願	設我得佛・十方世界・无量諸諸・不悉咨嗟稱我名者・不取正覺 (二四)	設我得佛・十方世界・无量諸佛不悉咨嗟稱我名者不取正覺 (一一・二六)	設我得佛・十方世界无量諸佛不悉咨嗟稱我名者不取正覺 (二八)	設我得佛・十方世界无量諸佛不悉咨嗟稱我名者不取正覺 (九・二八)	設我得佛・十方世界・无量諸佛・不悉咨嗟稱我名者不取正覺 (上卷一七ウ)	設我得佛・十方世界・无量諸佛・不悉咨嗟稱我名者・不取正覺 (下卷一七ウ)
十八願	設我得佛・十方衆生・至心信樂欲生我國・乃至十念・若不生者・不取正覺・唯除五逆・誹謗正法 (二二二)	設我得佛・十方衆生・至心信樂欲生我國・乃至十念若不生者・不取正覺唯除五逆・誹謗正法 (一一・六)	設我得佛・十方衆生・至心信樂欲生我國・乃至十念若不生者・不取正覺唯除五逆誹謗正法 (二七三)	設我得佛・十方衆生・至心信樂欲生我國・乃至十念若不生者・不取正覺唯除五逆誹謗正法 (九・三三)	設我得佛・十方衆生・至心信樂欲生我國・乃至十念・若不生者・不取正覺・唯除五逆・誹謗正法 (下卷一七ウ)	設我得佛・十方衆生・至心信樂欲生我國・乃至十念・若不生者・不取正覺・唯除五逆・誹謗正法 (下卷一七ウ)
十一願	設我得佛・國中人人・不住定聚・必至滅度者・不取正覺 (四七三)	設我得佛・國中人人・不住定聚必至滅度者・不取正覺 (一一・三四〇)	設我得佛・國中人人・住定聚必至滅度者・不取正覺 (三八二)	設我得佛・國中人人・不住定聚・必至滅度者・不取正覺 (九・三三〇)	設我得佛・國中人人・不住定聚・必至滅度者・不取正覺 (下卷一六ウ)	設我得佛・國中人人・不住定聚・必至滅度者・不取正覺 (上卷一六ウ)
十二願	設我得佛・光明有能・限量・下至不照百千億那由他・諸佛國者・不取正覺 (五五四)	設我得佛・光明有能・限量下至不照百千億那由他・諸佛國者不取正覺 (一一・二九九)	設我得佛・光明有能・限量下至不照百千億那由他・諸佛國者不取正覺 (四四一)	設我得佛・光明有能・限量下至不照百千億那由他・諸佛國者・不取正覺 (九・三三〇)	設我得佛・光明有能・限量・下至不照百千億那由他・諸佛國者・不取正覺 (下卷一六ウ)	設我得佛・光明有能・限量・下至不照百千億那由他・諸佛國者・不取正覺 (下卷一六ウ)
十三願	設我得佛・壽命有能・限量・下至百千億那由他劫者・不取正覺 (五五四)	設我得佛・壽命有能・限量下至百千億那由他劫者不取正覺 (一一・三九九)	設我得佛・壽命有能・限量下至百千億那由他劫者不取正覺 (四四一)	設我得佛・壽命有能・限量下至百千億那由他劫者不取正覺 (九・三三二)	設我得佛・壽命有能・限量・下至百千億那由他劫者・不取正覺 (下卷一六ウ)	設我得佛・壽命有能・限量・下至百千億那由他劫者不取正覺 (下卷一七ウ)

十九願 設我得佛・十方衆生・ 發菩提心・修諸功德・ 至心發願・欲生我國・ 臨壽終時・假令不與・ 大衆圍繞・現其人前・ 者不取正覺 (六六一)	設我得佛十方衆生・ 發菩提心修諸功德・ 至心發願欲生我國・ 臨壽終時假令不與・ 大衆圍繞現其人前・ 者不取正覺 (二・四七四)	設我得佛十方衆生發 菩提心修諸功德至心 發願欲生我國臨壽終 時假令不與大衆圍 繞現其人前者不取正 覺 (五二二)	設我得佛・十方衆生・ 發菩提心・修諸功德・ 至心發願・欲生我國・ 臨壽終時・假令不與・ 大衆圍繞・現其人前・ 者不取正覺 (上卷一八才)	設我得佛・十方衆生・ 發菩提心・修諸功德・ 至心發願・欲生我國・ 臨壽終時・假令不與・ 大衆圍繞・現其人前・ 者不取正覺 (上卷一八才)
---	---	--	--	--

『教行信証』古写本については、①坂東本・②専修寺本の『無量寿経』引用部にはほぼ句点は無い。ただ、第十二願文に三本一致した句点が附されている。真筆願文については、第十一・十二・十八願について一致がみられた。『無量寿経』古本については、正平本や龍大本には全体を通して句点あり、西本願寺本句点箇所とほぼ一致していた。

なお、真筆和語については、『尊号真像銘文』正嘉本の第十八願に「設我得佛・十方衆生・至心信樂・欲生我國・乃至十念・若不生者・不取正覺・唯除五逆・誹謗正法・」(『真蹟集成』四・一一三)との句点がある。『浄土三経往生文類』広本には句点が無かった。また、真仏筆『四十八誓願』には句点は無かった。

次に願成就文についてである。願成就文に真筆は伝わらないので、①②④⑤との比較を行おう。

〈表5-5 『無量寿経』句点比較(2)〉

成就文	西本願寺本 〔縮刷本〕	坂東本 〔真蹟集成〕	専修寺本 〔専修寺本〕	『無量寿経』 正平本	『無量寿経』 龍大本
十七願 成就文	十方恒砂・諸佛如來・皆共讚嘆・無量壽佛・威神功德・不可思議・ (三六)	十方恒砂諸佛如來皆共讚嘆・無量壽佛威神功德・不可思議 (一・二七)	十方恒砂諸佛如來皆共讚嘆・無量壽佛威神功德・不可思議 (二八)	十方恒砂・諸佛如來・皆共讚嘆・無量壽佛・威神功德・不可思議・ (下卷一才)	十方恒砂・諸佛如來・皆共讚嘆・無量壽佛・威神功德・不可思議・ (下卷一才)
十一願 成就文	其有衆生・生彼國者・皆悉住於・正定之聚・所以者何・彼佛國中・无諸邪聚・及不定聚 (四七四)	其有衆生・生彼國者・皆悉住於・正定之聚・所以者何・彼佛國中・无諸邪聚・及不定聚 (一・三四一)	其有衆生・生彼國者・皆悉住於・正定之聚・所以者何・彼佛國中・无諸邪聚・及不定聚 (三八三)	其有衆生・生彼國者・皆悉住於・正定之聚・所以者何・彼佛國中・无諸邪聚・及不定聚・ (下卷一才)	其有衆生・生彼國者・皆悉住於・正定之聚・所以者何・彼佛國中・无諸邪聚・及不定聚 (下卷一才)
十二願 成就文 (一部)	号无量光佛・无边光佛・无导光佛・无对光佛・炎王光佛・清淨光佛・歡喜光佛・智慧光佛・不斷光佛・難思光佛・无稱光佛・超日月光佛・ (五五五)	号无量光佛・无边光佛・无导光佛・无对光佛・炎王光佛・清淨光佛・歡喜光佛・智慧光佛・不斷光佛・難思光佛・无稱光佛・超日月光佛・ (二・四〇〇)	号无量光佛・无边光佛・无导光佛・炎王光佛・清淨光佛・歡喜光佛・智慧光佛・不斷光佛・難思光佛・无稱光佛・超日月光佛・ (四四二)	号无量光佛・无边光佛・无导光佛・无对光佛・炎王光佛・清淨光佛・歡喜光佛・智慧光佛・不斷光佛・難思光佛・无稱光佛・超日月光佛・ (上卷三〇ウ)	号无量光佛・无边光佛・无导光佛・炎王光佛・无对光佛・清淨光佛・歡喜光佛・智慧光佛・不斷光佛・難思光佛・无稱光佛・超日月光佛・ (上卷三二才)
十三願 成就文 (一部)	无量壽佛・壽命長久・不可勝計・汝寧知乎・假使・十方世界 (五五四)	无量壽佛・壽命長久・不可勝計・汝寧知乎・假使・十方世界 (二・四〇二)	无量壽佛・壽命長久・不可勝計・汝寧知乎・假使・十方世界 (四四四)	无量壽佛・壽命長久・不可勝計・汝寧知乎・假使・十方世界・ (下卷三二才)	无量壽佛・壽命長久・不可勝計・汝寧知乎・假使・十方世界・ (下卷三二才)

『教行信証』古写本については、坂東本・専修寺本の第十二願成就文、第十三願成就文に三本一致した句点が附されている。その他の願成就文については、『教行信証』では西本願寺本のみ句点が附されている。

### 第三項 諸本比較 (二) — その他 —

右に挙げた願文・願成就文以外の句点箇所として、「行卷」の「无量壽佛・威神无極・十方世界・无量无边・不可思議・諸佛如來・莫不稱・嘆於彼・」(『縮刷本』三六)がある。①坂東本(『真蹟集成』一・二七)、②専修寺本(『専修寺本』二九)には句点無し、⑤龍大本(下卷三ウ)は「无量壽佛・威神无極・十方世界・无量无边・不可思議・諸佛如來・莫不稱・嘆・於彼・」とある。

また、引用文中の『大経』について、「証卷」還相廻向釈『論註』中の『大経』にも一部句点が附されているのでここに掲げておきたい。<sup>(22)</sup>西本願寺本『論註』中の第二十二願文は、

設我得佛・他方佛土・諸菩薩衆・來生我國・究竟必至一生補処・除其本願・自在所化・爲衆生故・被弘誓鎧・積累徳本・度脱一切・遊諸佛國・修菩薩行供・養十方・諸佛如來・開化恆砂无量衆生・使立无上・正眞之道・超・出常倫・諸地之行・現前修習・普賢之徳・若不尔者・不取正覺

(『縮刷本』四九五)

とあるが、①坂東本(『真蹟集成』一・三五五)、③専修寺本(『専修寺本』三九九)には句点が無い。次に、『無量寿経』二本と、『往生論註』親鸞加点本の内容を示してみよう。

正平本

設我得佛・他方佛土・諸菩薩衆・來生我國・究竟必至・一生補處・除其本願・自在所化・爲衆生故・被弘誓鎧・積累德本・度脫一切・遊諸佛國・脩菩薩行・供養十方・諸佛如來・開化恆沙・无量衆生・使立无上・正眞之道・超出常倫・諸地之行・現前修習・普賢之德・若不尠者・不取正覺

(上卷一八ウ)

龍大本

設我得佛・他方佛土・諸菩薩衆・來生我國・究竟必至・一生補處・除其本願・自在所化・爲衆生故・被弘誓鎧・積累德本・度脫一切・遊諸佛國・脩菩薩行・供養十方・諸佛如來・開化恆沙・无量衆生・使立无上・正眞之道・超出常倫・諸地之行・現前修習・普賢之德・若不尠者・不取正覺

(上卷一八ウ)

論註加标点

次・无量壽經中・阿弥陀如來本願言・設我得佛・他方佛土諸菩薩衆・來生我國・究竟・必・至・一生補處・除其本願自在・所化爲衆生故・被弘誓鎧・積累德本・度脫一切・遊諸佛國・修菩薩行・供養十方諸佛如來・開化恆沙无量衆生・使立无上正眞之道・超出常倫・諸地之行・現前修習普賢之德・若不尠者・不取正覺

(『真蹟集成』七・三三五)

『論註』加标点においては、訓点に応じた句点が附されているのが特徴であり、一方、西本願寺本の句点

は、ほぼ四字切りである。『論註』引用文内であっても、正平本や龍大本のような、『無量寿経』としての句点が附されていることを特徴としているのである。

また、西本願寺本に句点がない『無量寿経』引用文は次の通りである（括弧内数字は『縮刷本』の頁数）。

願文 三十三願（三三八）・三十四願（三三八）・二十願（七二五）

願成就文 十八願（二八三）・道場樹（六六三）・講堂（六六五）・二十願（七二五）

その他 右に挙げた引用文以外

正平本や龍大本の『無量寿経』には全体として句点が附されていることを考えれば、先に挙げた句点の付された願文・願成就文等とこれらの句点が附されなかった箇所は、西本願寺本書写者が句点を有する願文・願成就文等とは区別して捉えていたと考えられるのである。<sup>(23)</sup>

このように、句点の有無は、願文・願成就文に集中しているが、その中でも附す箇所と附さない箇所が分けられていることが分かった。親鸞真筆等の句点については、訓読が重視される場合にはあまり付されない傾向にあると思われる。西本願寺本において句点のある箇所については、坂東本、真筆願文断簡、正平本や龍大本『無量寿経』に見られる親鸞に由来する加點の有無にほぼ一致しており、音読のための補助として示されていると考えられる。

### 第三節 『無量寿経』と偈頌体

ところで、願文を中心に句点を附す西本願寺本において、さらに特徴的なのは、本来偈文でない第十八願成就文などを偈頌体として書写することである。引用原典が偈文である場合に、西本願寺本では多く偈頌体を採用していることを前項・前々項で指摘したが、願文や願成就文では句点を用いる例が多く見られるのに対し、この第十八願成就文を偈頌体とするのは、西本願寺本の独自性を際立たせる要素である。

第一項 第十八願成就文

まず、「信卷」第十八願成就文で偈頌体を用いている例は次の箇所である。

<p>・大信釈『大経』</p> <p>∴本願成就文經言</p> <p>諸有衆生 聞其名号</p> <p>信心歡喜 乃至一念</p> <p>至心回向 願生彼國</p> <p>即得往生 住不退轉</p> <p>唯除五逆 誹謗正法</p> <p>〔縮刷本〕一三三</p>	<p>・欲生釈『大経』</p> <p>疑蓋无雜是以本願欲生心成就</p> <p>∴文經言</p> <p>至心回向 願生彼國 即得往生</p> <p>住不退轉 唯除五逆 誹謗正法<sup>上</sup></p> <p>〔縮刷本〕二九九</p>	<p>・信一念釈『大経』『如来会』</p> <p>∴大経言</p> <p>諸有衆生 聞其名号</p> <p>信心歡喜 乃至一念</p> <p>至心回向 願生彼國</p> <p>即得往生 住不退轉</p> <p>唯除五逆 誹謗正法</p>	<p>・又言</p> <p>他方佛國 諸有衆生</p> <p>聞无量壽 如來名号</p> <p>能發一念 淨信歡喜</p> <p>・又言</p> <p>其佛本願力 聞名欲往生</p> <p>・又言 聞佛聖德名<sup>上</sup></p> <p>〔縮刷本〕三一九</p>
--	--	--	--

願成就文全体を引用する場合（大信釈・信一念釈『大経』）には、一行二句で示されるが、欲生釈のよう  
に一部であれば、一行三句の二行で収めるような書写法となっている。信一念釈では、『如来会』の第十八  
願成就文も偈頌体で示している。『大経』『如来会』の第十八願成就文の後には、『大経』の「其佛本願力  
聞名欲往生」、『如来会』の「聞佛聖徳名」が連引される。これらは、いずれも往觀偈の文であるが、「聞名  
欲往生」と「聞佛聖徳名」を並べるような高さに書写していることから、信一念釈の『大経』『如来会』の  
経文全体として、西本願寺本の他の箇所にも見られないような特殊な処置を採っていることがわかる。

『大経』第十八願成就文については、親鸞真蹟類においては、『浄土三経往生文類』略本（『真蹟集成』三  
・三二六）、『一念多念文意』（同四・二九九、一行十一字程度）に引用されるが、偈頌体ではない。<sup>24)</sup>『大経』  
讚仏偈を引用しない『教行信証』において、一行四言二句の偈頌体は、「信巻」明所被機『涅槃経』引用文  
中に数カ所見られる程度であるが、一行八字という一行字数の少なさで書写することには、体裁的な美しさ  
を求めることで、要文としての位置づけを与えていることが窺える。前々項で挙げた「信巻」大信釈の『讚  
阿弥陀仏偈』も偈頌体であり、第十八願成就文に対応した内容であるため、そうした関連もあって特に偈頌  
体としたとも考えられる。第十八願成就文同土や『大経』『讚阿弥陀仏偈』という引文同士の結びつきの強  
さが、このような形式に表れているのではなからうか。

この形式は、西本願寺本書写者による独創の一つであるということができよう。

## 第二項 散文の偈頌体化

次に、その他の『大経』文における偈頌体である。

まず、「信卷」横超断四流釈における『大経』释迦指勧の引文である。

・又言

必得超絶去 往生安養國

横截五惡趣 惡趣自然閉

昇道無窮極 易往而無人

其國不逆違 自然之所牽<sup>上巳</sup>

(『縮刷本』三三二)

『教行信証』では直前に『大経』重誓偈が引かれ、西本願寺本(『縮刷本』三三二)ではやはり偈頌体で書写されているが、続く当文も偈頌体となっている。周辺や連絡関係の強い引文が偈頌体である場合に、原典が偈文でなくとも、偈頌体を採用していく傾向が見られる。親鸞真蹟類では、『尊号真像銘文』広本(『真蹟集成』四・一四五、一行十二字)に引用があり、その他、『浄土文類聚鈔』にも引用されている。関連する文を挙げると、『楽邦文類』第一に「無量壽經 勸各精進努力求之」(『大正藏』四七・一五七上)として引かれているが、ここで注目したいのが、遵式『往生浄土懺願儀』中の引用である。

白衆等聽說。經中如來偈。何不力爲善。念道之自然。宜各勤精進。努力自求之。必得超絶去。往生安養

國。横截五惡道。惡趣自然閉。升道無窮極。易往而無人。何不棄世事。勤行求道德。各得及長生。壽樂無窮極。

〔大正藏〕四七・四九四中

形式的には偈文とはいえないが、「經中如來偈」という文言があること、五句ずつに切れることからしても、古くから『大經』の「必得超絶去」等の文は五言切りの偈文として認識されていた可能性はある。さらに、親鸞が偈文として見ていた可能性として、本尊影像讚文を挙げてみたい。次のものに、「必得超絶去」等の文が引用されている。<sup>(25)</sup>

- ・ 本願寺藏「安城御影」(正本) 上部讚二段目第三文 一行十字の四行書〔真蹟集成〕九・三〇)
- ・ 専修寺藏「黄地十字名号」 上部讚第三文 一行十字の四行書〔真蹟集成〕九・一四)
- ・ 専修寺藏「紺地十字名号」 上部讚第三文 一行十字の四行書〔真蹟集成〕九・一五)

このように、「必得超絶去」の文は、古くから偈文として認識された可能性がある。本尊影像讚文の中に偈頌体が見られることから、それらを参考とした西本願寺本書写者が偈頌体を採用して書写した可能性が考えられる。

また、「化身土卷」真門釈の『大經』流通分引文であり、七言十三句が七行で示されている。

∴大本言

如來興世難值 難見諸佛經道

難得難聞菩薩 勝法諸波羅蜜

得聞亦難遇善 知識聞法能行

此亦爲難若聞 斯經信樂受持

難中之難無過 此難是故我法

如是作如是說 如是教應當信

順如法修行

〔縮刷本〕七四〇

真門積では、第二十二願文（縮刷本七二五）が引用されたのち、『大經』・『如來會』・『平等覺經』・『觀經』・『小經』・善導疏・元照『小經義疏』・智圓『小經疏』に続いて当文が引用され、次には『涅槃經』『華嚴經』『般舟讚』『禮讚』『法事讚』が続く。当文以降は「別詳真實」とされており、この引文群は真門積の御自積の意を示す弧山疏までの一群と、当文以降の真實について詳述する一群に分けられるようである。<sup>(26)</sup> 内容としては、小經隱頭内の「言彰者彰真實難信之法」について經典の語として引用したものである。真門積内の引用文としては、『平等覺經』（縮刷本七二七）に偈頌体が見られるが、往觀偈の引用であるため、当文と直接関係するとは言いがたく、形態的には真門積内の他の箇所とは結びつけることが難しい。親鸞真蹟類では、

『唯信鈔文意』に引用されるが、なぜ偈頌体なのか現段階では定かではない。ただ、「正信偈」、『入出二門偈頌』に類文があるため、それらの出拠として、要文と見なしたとも考えられる。

これらを単に内容的に要文であるからとして、偈頌体としたと結論づけるのは早計であり、親鸞真蹟などの周辺資料が直接的に西本願寺本の体裁に關与した可能性があると見るのも、西本願寺本は誰がどこで書写したのかがわからない現状では、推論の域を出ない。

そこで着目したのが、これらの文の引用法である。第二項で挙げた二例は、「大本」として『大經』を引用している点で共通している。御自釈では「化身土卷本」の三箇所のみであるが、その他同様の引用法を用いた箇所を確認したところ、もう一つの偈頌体を確認することができた。それは、「行卷」行一念釈の『大經』流通分引文であり、次のように偈頌体が用いられていた。

顯開選擇易行至極故大本言

佛語彌勒 其有得聞 彼佛名号

歡喜踊躍 乃至一念 當知此人

爲得大利 則是具足 无上功德<sup>上已</sup>

〔縮刷本〕一五七〜一五八

ここに示したように、西本願寺本では、僅かであるが四言毎に空白が見られるのである。なお、この文に続く善導引文も、

..光明寺和尚云 下至一念 ・又云  
一聲一念 ・又云 專心專念<sup>上</sup>已

〔縮刷本〕一五八

と、大きな空白を利用した独特の体裁で書写されていることから、この周辺には偈頌体のような書写法が意識されていることがわかる。

### 第三項 「大本」と偈頌体

『教行信証』において「大本」という呼称を用いるのは、用欽引文にみられるように宋代の用法を受けたものとされている。<sup>(28)</sup> 「大本」として引用する箇所については、「行巻」一乗海釈、「信巻」菩提心釈、横超断四流釈二箇所、真仏弟子釈の計四箇所がある。それぞれについて、異訳等を含めた『大経』の引用箇所を含めて並べて、体裁的特徴を比較してみよう。

#### (1) 「行巻」一乗海釈

故大本言

聲聞或菩薩 莫能究聖心

譬如從生盲 欲行開導人

如來智慧海 深廣无涯底

二乘非所惻 唯佛獨明了<sup>上</sup>已

〔縮刷本〕一八三

『大經』往觀偈の八句（『聖典全』一・四六）である。一行二句、五言八句の偈頌体である。偈文を偈頌体にするという西本願寺本の書写方針がそのまま適用されている。

(2) 「信卷」菩提心釈

故凡淺衆生多生疑惑即…大本

云易往而無人故知難信矣

〔縮刷本〕三一六

律宗用欽の引文に引かれた『大經』釋迦指勸の文（『聖典全』一・五一）であり、「易往而無人」部分が經文であるが、原典は偈文ではない。西本願寺本においても偈頌体とは言えないが、五言で端的に示された語である。『教行信証』の『大經』引文では、次に示す(3)の第三文に含まれる文言である。

(3) 「信卷」横超断四流釈

∴大本言

超發无上殊勝之願

・又言

我建超世願 必至无上道

名聲超十方 究竟靡<sup>所</sup>聞誓

不成正覺

・又言

必得超絶去 往生安養國

横截五惡趣 惡趣自然閉

昇道无窮極 易往而無人

其國不逆違 自然之所牽了<sup>上</sup>

〔縮刷本〕三三二一

三文が連引されている。第一文は『大経』法蔵發願の文（『聖典全』一・二二三）であり、原典は偈文ではない。偈頌体には見えないが、「超發无上」と「殊勝之願」の縦位置がややずれていることから、西本願寺本書写時には当初四言ずつに分けて考えられていたとも見える。第二文は『大経』重誓偈の五句（同三〇）であり、書き損じを補っているために四句目以降の文言がずれているが、五言五句の偈頌体である。そして第三文は、『大経』釋迦指勸の文（同五二）であり、先程挙げた「必得超絶去」以下の文が、一行二句、五言八句で示されている。前項で指摘したように、この文は遵式『往生浄土懺願儀』において偈文として認識されていた。藤田宏達によれば、その書において『無量寿経』を「大本無量寿経」と示している箇所があるとのことであるから、ここでは「大本」として引用され、偈頌体となったと考えられる。<sup>(29)</sup>

(4) 「信卷」横超断四流积

∴大本言

會當成佛道廣度生死流

・又言

會當作世尊將度一切生老死上已

(『縮刷本』三三四)

第一文は『大経』往觀偈の結びの二句 (『聖典全』一・四七)、第二文は『平等覚経』往觀偈の文 (『聖典全』一・二四三) である。原典はそれぞれ五言二句、七言二句の偈文であるが、訓点の関係上か、空白は見られない。

(5) 「信卷」真仏弟子积

∴大本言

設我得佛十方无量不可思

議諸佛世界衆生之類蒙

我光明觸其身者身心柔燻

超過人天若不尔者不取正覺

不可思議无等界有情之輩蒙

佛威光所照觸者身心安樂超

過人天若不尔者不取菩提上已

・又言

聞法能不忘

見敬得大慶

則我善親友

設我得佛十方有量不可思議

諸佛世界衆生之類聞我名字

不得菩薩无生法忍諸深捨持

者不取正覺 上 巳

∴无量壽如來會言

若我成佛周徧十方无量无邊

・又言 其有至心 願生安樂 國者

可得 智慧明達 功德殊勝 又言

廣大勝解者 又言 如是等類

大威徳者能生広大異門

・又言若念佛者當知此人是人中

分陀利華 上 巳

(『縮刷本』三三九)

第一・二文には『無量寿経』(『聖典全』一・二七)と『如来会』(同三〇五)の第三十三願文が引かれる。

第三文は『無量寿経』往觀偈の三句(同四七)、第四文は『無量寿経』弥勒領解の文(同五四)、第五文は『如来会』流通分の文(同三三五)、第六文も『如来会』流通分の文(同三三六)、第七文は『觀経』流通分の文(同九八)で当箇所の経文引用が終わる。書名が付された第三十三願文には句点も偈頌体も施されていないが、続く往觀偈の文以下に特徴が見られる。第三文では三句であるが、引文導入語を含めて二行分に収めて偈頌体で示している。続く第四文は本来は偈文ではないが、四言ずつの字間に均等に空白が設けられ、厳密には偈頌体とはいえないが、それに準じるような体裁である。さらに、第五文は『如来会』では「廣大勝解之者」と六言であるが、『教行信証』引用では「之」を省いて五言とし、西本願寺本では、往觀偈の文のように偈頌体に近い体裁で書写していると考えられる。

以上の箇所のように、「大本」として引用される経文の一群には、偈文、偈頌体、偈頌体に準じるものが多数含まれている。『教行信証』における要文であるから偈頌体としたという単純な理由ではなく、「大本」などの引用であること、原典が偈文であること、周辺の偈頌体などを総合して、西本願寺本において独自に要文と見なした結果が、原典が偈文でなくとも偈頌体として書写していると考えられるのである。

## 小結

様々な経典・論書・釈書等を蒐集・配列し、そこに親鸞自身の解釈を散りばめたのが『教行信証』である。親鸞によって構想され執筆された坂東本の字形や文字情報を写すことで文が成立するが、改行や偈頌体によって本文を視覚化し、『教行信証』諸本や親鸞真筆などから親鸞由来の加点情報を写し、さらに諸本の文字情報を集積した独自の本として生成されたのが西本願寺本であった。そこには、親鸞真筆の坂東本を書写して証本たる位置を確立しつつ、引用文を構造化することによって、読むテキストとしての『教行信証』を制作しようという書写者の主体的な意識が介在していたと考えられることは前章で指摘していた。

本章では、西本願寺本の最たる特徴として、偈頌体や句点に見られる独自性について考察してきた。西本願寺本の中でも特異な書写法が見られるのが、『無量寿経』である。親鸞真蹟においては、真筆願文に四言や五言ごとに句点（中点）があり、願文を一句ごとに区切る意識が垣間見れるのであるが、ただ第十八願成

就文などいくつかの文については西本願寺本で独自に偈頌体を用いている。つまり、西本願寺本『無量寿経』引用では、形式としては、通常の文、加点の文、偈頌体の文の三種が存在していることになる。句点に関しては、真実五願の願文や成就文には多く加えられ、その他には附されない場合が多い。坂東本には無い情報を、親鸞真蹟や親鸞に由来する諸本によって書き加えている可能性が高いことが指摘できる。<sup>30)</sup>

さらに、『大経』の文をいくつかの基準を設けて区分し、第十八願成就文と、「大本」として引用される要文について、特別に偈頌体を用いて示しているのが、西本願寺本書写者による独創ということが出来る。このことと、願文に多く見られた句点とを関連させれば、親鸞真蹟や本尊影像讚文に見られる形式が、『無量寿経』要文に対する西本願寺本書写時における体裁的処置に影響した可能性が考えられる。また、本尊影像讚文との関わりで言えば、視覚化という目的が書写形式に表れていると見ることが出来る。

## 註

(1) 偈頌と偈文は同様の意味をもつと考えられるが、本研究においては、原典(被引用文献)が一行数句の形式になっているものを「偈文」といい、それを『教行信証』諸本の書写形式で一行数句で示された場合を「偈頌体」と示す。つまり、引用原典については一様に偈文とし、原典の体裁を問わず『教行信証』で一行数句で示されている箇所を全て「偈頌体」と

呼ぶこととする。

(2) 鈴木宗忠「教行信証の真蹟本に就いて」(『文化』五三、一九三八)。

(3) 藤田海龍「教行信証の真蹟本に就いて」(『日本仏学論叢』一、一九四四)。

(4) 『論註』に引かれた『浄土論』の願生偈の数も含む。

(5) 坂東本「真仏土巻」では『讚阿弥陀仏偈』初めの二十五字が失われているが、『真蹟集成』二・四八八上欄外に「鸞和尚造也」と註記がある。また、前頁に裏書されている「不差故曰成就抄出」の左傍には朱で「曇鸞和尚造」と書いたと思われる筆がある(『聖典全』一・一七三校異②参照)。

(6) 引文指示語「已上」の位置からは、『聞持記』の文としての引用であるといえる。引文指示語については、鳥越正道『最終稿本教行信証の復元研究』(法藏館、一九九七)二〇七頁参照。

(7) 『浄土和讃』国宝本徳号列示では、「号」に二箇所右訓が付されている。一つは「一又号ナツケタテマツル」(『真蹟集成』

三・一二)、もう一つは「十八ナツケタテマツル号アウニシクワチワラフ」(同十四)である。西本願寺本のみにある左訓「ツルト」は、坂東本

・西本願寺本の右訓「タテマツルナリト」のうち「ナリ」が無い訓読があることを示しており、これが『浄土和讃』『国宝本に当たるのではないかと考えられる。『浄土和讃』国宝本弥陀徳号の右訓は親鸞真筆と推定されているから、親鸞によるもうひとつの訓読を書写した可能性がある。

(8) 中村元『教行信証』の同訓異字(一)——言・曰・云について——(『教学研究紀要』七、一九九八)、鳥越正道前掲書二一二頁。

(9) これには、曇鸞撰と羅什撰に分かれる『讚阿弥陀仏偈』伝来の問題に関わっていると考えられ、曇鸞撰とする書に道練『安樂集』・迦才『浄土論』・珍海『決定往生集』、羅什撰とする書に源隆国『安養集』・『安養抄』・永超『東域伝灯目錄』・

慶保胤『日本往生極樂記』がある。

(10) 引用の位置も、いずれの文も『論註』の次、乃至は数文を隔てて後にあり、『論註』との関係が深い。

(11) 『浄土和讃』はじめの「讃阿彌陀佛偈曰」以下については、仏三十七名の振り仮名が親鸞筆と考えられており、少なくとも親鸞が見ていることは確かである。平松令三「解説三帖和讃」、『註解国宝 三帖和讃』一〇九〜一一〇頁、龍谷大学善

本叢書21『三帖和讃』所収六四二頁・六五二頁解説、『真蹟集成』第三卷解説参照。

(12) 中村薫『親鸞の華嚴』(法藏館、一九九八)七一頁、大田利生「親鸞と華嚴経」、『真宗学』一〇五・一〇六、二〇〇二)など。

(13) 大田利生前掲論文

(14) 『尊号真像銘文』正嘉本(『聖典全』二・六五五)の巻尾に別筆で「信爲道元」以下の文が引かれて註釈される。同文は『浄土文類聚鈔』巻尾(『聖典全』二・二七六、滋賀県光延寺藏延慶二年書写本)にもある。

(15) 引用箇所については、中村薫前掲書のほか、林智康「親鸞と華嚴経」(『佐賀龍谷短期大学紀要』二九、一九八三)、宇野恵教『本典華嚴経要文講述』(永田文昌堂、二〇〇八)など参照。

(16) 宇野恵教前掲書においては、「一乗義を証する文」として纏めている。

(17) 宇野恵教前掲書一〇三頁。なお、この文は真仏『経釈文聞書』(『聖典全』四・七)にも引用されている。

(18) 第一文については、「親鸞聖人御消息」(『末灯鈔』第四通・『御消息集』(善性本)あるいは『浄土和讃』諸経讚と関連して理解されている(林智康前掲論文参照)。真筆消息、古写消息にはないが、御消息二本では『華嚴経』として「信心歡喜者與諸如來等」(『聖典全』二・七八四、八六五)と引用されている。また、善性本第二通には、「聞此法歡喜」以下四句が引用されている(『聖典全』二・八五六)。

- (19) 宇野惠教前掲書二〇六頁。
- (20) 吉澤義則「本願寺本教行信証点註の筆者に就いて(上)」『龍谷大学論集』二五八、一九二四。
- (21) 親鸞自筆により近い朱点が保存しているとされる二本のうち的一本。佐々木勇「西本願寺蔵『浄土三部経』正平六年存覚書写本の朱点について―親鸞自筆加点点本および龍谷大学蔵南北朝期加点点本の比較―」(『訓点語と訓点資料』一二六、二〇一一)参照。
- (22) 引用文中の『大経』については、「行巻」大行釈『礼讃』中(『縮刷本』一〇六)、「玄義分」中(同一〇九)、『観念法門』中(同一一一)、『往生要集』中(同一四八)、他力釈『論註』中(同一七二)、「信巻」三一問答『論註』中(同一二二)、「律宗用欽」中(同三一六)、真仏弟子釈『安樂集』中『大経』(同三四六)、『樂邦文類』中(同三五五)、明所被機『論註』(同四四二)、「証巻」『玄義分』中(同四八三)、「真仏土巻」真仏土釈『玄義分』中(同六二九)には句点は附されていない。
- (23) 伝存する真筆断簡に第三十三願文(本誓寺蔵、『真蹟集成』九・三二四)が含まれるが、句点は「設我得佛」の次と、「若不尔者」の次の二箇所であった。
- (24) この文は、『浄土文類聚鈔』、『末灯鈔』、『御消息集』(善性本)においても引用がある。本尊・影像類に範囲を拡げれば、本願寺蔵如信寿像、山科八幅のうち如信影像是願成就文を一行八字で示している。
- (25) 本願寺蔵六字名号・下部(『真蹟集成』九・一〇)は散文である。愛知県妙源寺蔵光明本尊讚銘(『聖典全』二・九〇四)九字名号の上部讚(真仏筆)は、一行十字の四行で示されている。
- (26) 『本典研鑽集記』(本願寺派宗学院、一九三七)四六四頁。『聖典全』二所収「付録」三二二頁「顕浄土真実教行証文類科段」でも同様に示されている。

(27) 正月十一日本(『真蹟集成』八・三二八)。その他、『浄土文類聚鈔』(『聖典全』二・二七六)、『愚禿鈔』(『聖典全』二・二九〇)にも見られる。

(28) 藤田宏達『浄土三部経の研究』(岩波書店、二〇〇七)七二頁。

(29) 藤田宏達前掲書七二頁。同書によれば、天台智顛に仮託された『観無量寿経疏』宋代知礼の『観無量寿仏経義疏』『阿弥陀経義疏』等に見られるという。知礼は『大本無量寿経』とも示しているから、その上の二文字をとったとされている。

『大本無量寿経』の呼称は遵式『往生浄土懺願儀』(『大正蔵』四七・四九〇下)にも見られ、その他「大本無量壽佛經」(同四九二上)といわれるという。

(30) 親鸞真蹟では、四十八願断簡、『尊号真像銘文』、『浄土三経往生文類』の『無量寿経』引用部に、その他『無量寿経』古写本などにも朱による句切り点ある。



第六章 本願寺と『教行信証』

## 第六章 本願寺と『教行信証』

本願寺には、文永十二年（一二七五）に親鸞自筆の坂東本を臨写した『教行信証』（西本願寺本）が伝わる。その書誌的な事項からみる特徴については、第四・五章で考察したが、本章では、西本願寺本以降の中世本願寺における『教行信証』の展開について検討したい。

西本願寺本の伝承と並行して、中世本願寺においては、覚如・存覚がその著作に『教行信証』を引用し、第四代善如は『教行信証』延書十七帖（本願寺蔵）を書写するなど、『教行信証』テキストは写伝に留まらず、本願寺という場において様々な形態で展開している。

そこで本章では、中世本願寺における『教行信証』テキスト諸展開の内実を指摘するとともに、「伝授本」の性格があり、江戸期刊本にも影響する跋文を有するとされる存如授与本（本願寺蔵）の形態を諸本との比較を通して、本願寺の寺院形成と『教行信証』諸展開の中における写伝の意義を問いたい。

### 第一節 本願寺聖教と『教行信証』

本願寺聖教について考察する場合、一切経、経論章疏、浄土教関連典籍、真宗典籍などいくつかの階層が考えられるが、より広範な仏教典籍との連関から本願寺という場の特性に絞って捉える必要がある。

第一章では、年時順に検討して真宗聖教の成立について述べ、第二章では『教行信証』引用文のテキスト関係について論じたが、その内実は、〈作者〉あるいは〈読者〉周辺のテキスト環境によって大きく左右されることを示した。それらを踏まえた上で、本節では、『教行信証』の展開の背景として、中世本願寺における聖教の認識と、『教行信証』の諸展開について考察したい。

## 第一項 聖教の伝授と目録

本願寺において聖教がどう受け継がれてきたかについては、伝授史と目録研究、さらに本願寺の蔵書という三つの方面で検討されてきた。それらの研究を概観し、本願寺聖教と『教行信証』の伝持に関する検討課題について述べてみたい。

第一に、伝授史について、鷲尾教導、宮崎圓遵の二つの論考を確認しておこう。

鷲尾は、親鸞と本願寺歴代における『教行信証』の伝授について考察している。<sup>1)</sup> 親鸞については、坂東本における蓮位への署名を授受の証とし、佐々木樵『親鸞上人伝』によって奥書の明性・性海、性信の花押について指摘、正保版「信巻」奥書から寛元五年（一二四七）尊蓮書写を推定しているが、この時代には後代にいう相伝のようなことは無かったのではないかと述べている。次に、覚如及び存覚については、『教行信

証』の伝授が一種の儀式のように行われるようになったことを、応長元年（一三一一）の大町如道への伝授から考察している。さらに覚如の門下に入った乗専にも『教行信証』の書写・伝授が行われたことを、正保版奥書や『慕帰絵』の記述から指摘している。その『慕帰絵』巻三に見える如信より覚恵・覚如への面授・口伝や、河和田唯円への法門の疑義については『教行信証』の伝授を暗示するものと述べている。さらに嘉暦三年（一三二八）成立の『教行信証大意』の文や『六要鈔』の存覚奥書において、『教行信証』は列祖から相承された真宗教義の要、親鸞領解の己証が記されたものであることなどから、『教行信証』の相伝が一種の意義を有するようになり、厳密な儀式を要したのではないかと述べている。その後の善如・綽如・巧如・存如の代については伝授・相伝の形式や方法は不明であるが、蓮如の言行録に『教行信証』等の伝授が見られるようになるという。『実悟記』によれば、『教行信証』は二〇歳以下の者が読むことが制限され、読む際には儀式として行われていたことが指摘される。その儀式とは、「御本書伝授式」なる写本に、当時の伝授の儀式について記されていることが紹介されている。

次に、宮崎は、「相伝」「伝授」という語の史料上の用例から、その実態に迫っている。<sup>②</sup>「伝授」の語の初見は『存覚一期記』であり、応長元年（一三一一）の大町如道への「講談」を、「鏡御影」裏書から親鸞御影の前で行われたものと推定している。一方、「相伝」については、龍谷大学蔵『女人往生聞書』乗専書写本、『六要鈔』延文五年（一三六〇）存覚識語・明德三年（一三九二）慈観書写奥書の用例や、巧如や存如による信濃浄興寺への『教行信証』巧如所伝本を含む宗典免許の事例などを挙げ、「末寺子弟が聖教の書写授与を願い、

宗主や法嗣がこれを許可したことが察せられる」と位置づけ、こうしたことを当時「学問」といったのではないかと推定している。さらに、『実悟記』や『本願寺作法之次第』、『天文日記』を挙げ、蓮如以降の伝授の様子や蓮如七回忌での『六要鈔』伝授復興、室町末期の伝授の様相などをまとめ、中世末に至る全体像を示した。

鷲尾や宮崎によれば、覚如・存覚や、蓮如以降の『教行信証』伝授については、それを窺うことのできる史資料があるが、善如・綽如・巧如・存如の代は史資料上の制約からほぼ不明である。宮崎は巧如所伝本について言及しているが、それを含めて西本願寺本成立以降蓮如までの『教行信証』諸本の書物としての在り方そのものを問うことによつて、『教行信証』がどのように読み継がれたのかという「伝授」の在り方を検討することはできよう。そうした意味において、書写者が不明であるためにその制作意図までもがなかなか議論の俎上につてこなかった西本願寺本の課題と同種の課題が内在していると考えられる。このような課題を解決するために、西本願寺本について検討した第四・五章と同様の作業が、諸本研究に適用されることが期待され、その成果を当時本願寺に設置されていたと考えられる西本願寺本との関係性の中に位置づけてみたいのである。この課題については、本章第三節で述べることにしよう。

第二に、現存最古の真宗聖教目録とされる『浄典目録』から、本願寺聖教について考察したい。『浄典目録』は康安二年（一三六一）五月に存覚が制作したもので、同年は、存覚による『教行信証』最古の註釈書『六要鈔』成立年にあたる延文五年（一三五九）の翌々年、慈観が『六要鈔』を書写した貞治二年（一三六〇）

の翌年である。善如は、延文四年（一三五九）、報恩講に用いるために、存覚に『嘆徳文』の制作も依頼している。<sup>(3)</sup>この『浄典目録』によって、諸師著作を列挙し、本願寺における教学の根拠の視覚化が図られたものと考えられる。

『浄典目録』の奥書には、「隨「思出」大概記」之」とある。『六要鈔』執筆後数年という時期にあつて、「浄土三部経」など浄土經典や論書を除く浄土教関連典籍の書名を抜き出したものであり、その著者等についても略述しているのを特徴とし、存覚自身の書物になると、その所望者までも示されている。初期真宗における聖教の動向を探る上でも大変貴重な書である。現在では、その本文は『真宗全書』七四、『新編真宗全書』史伝篇九、『真宗史料集成』一に翻刻されているが、ここでは、真宗全書本による内容を、七つの項目に分けて示してみよう。

#### 浄土五祖

『論註』『略論』『安樂土義』（以上、曇鸞）、『安樂集』（道綽）、『觀經義』『法事讚』『往生礼讚』『觀念法門』『般舟讚』（以上、善導）、『群疑論』（懷感）、『瑞応刪伝』（少康）

#### 唐土

『五会讚』（法照）、『念仏鏡』（道教善道）、『浄土論』（迦才）、『大経疏』（慧遠・吉蔵・憬興・義寂・法位・法聡）、『觀經疏』（慧遠・吉蔵・智顛・法聡・法常・元照）、『正觀記』（戒度）、『弥陀経義疏』（元照）、『聞持記』（戒度）、『小経疏』（孤山智圓）、『小経通贊疏』（慈恩）、『龍舒浄土文』（王日休）、『樂邦文類』

(宗暁)

和朝

『往生要集』(源信)、『往生十因』(永観)、『選択集』『三部経講釈』(以上、法然)

本願寺上人御作(親鸞)

『教行信証』『浄土文類聚鈔』『愚禿鈔』

先師御作(覚如)

『報恩講私記』『口伝鈔』『執持鈔』『願願鈔』『最要鈔』『本願鈔』

存覚

『持名鈔』『浄土真要鈔』『弁述名体鈔』『破邪顕正鈔』『諸神本懐集』『女人往生聞書』『顕名鈔』

『歩船鈔』『決智鈔』『報恩記』『選択註解鈔』『纒解記』『謝徳講式』『報恩講嘆徳文』

存覚(追加分)

『信貴鎮守講式』『浄典目録』『法華問答』『法語』『六要鈔』

構成については、法然の提示した「三経一論」を初めとする經典・論書に関する記述が無いことが特徴である。また、聖覚や隆寛など、親鸞の消息に登場する書目は示されていないようである。内容については、浄土五祖は、法然に関する伝記・語録に見られるが、その浄土五祖以来、中国・日本の浄土教関連典籍を挙

げるのが浄土五祖・唐土・和朝までであり、親鸞・覚如・存覚の著作が続いている。親鸞の依拠する文は、七祖によるものが多いが、第二章で述べた『教行信証』引用体系に照らし合わせても、この構成からは、浄土教典籍を多く含んだより広範なテクスト体系が想定されていたことがわかる。経典に関する記述が無いが、『大経』『観経』『小経』の註釈書について、現在散逸しているものも含めて記している。

親鸞の著作に限れば、『浄典目録』に書き出された『教行信証』『浄土文類聚鈔』『愚禿鈔』の三書は、いずれも漢語である点で共通している。これは、覚如著作について「和字法語也」としているのとは対照的である。『教行信証』や『愚禿鈔』は存覚による書写本も伝存している。こうしたことも、本願寺聖教の「大概」を示すことを目的とする本書による聖教体系把握の意識と考えられる。そうした意味で言えば、伝授史の考察において鷲尾の挙げていたような、『六要鈔』奥書「教行證者列祖相承之要須聖人領解之已證也」、『聖典全』四・一三四〇）と同様、「浄典」としての『教行信証』あるいは漢語聖教の位置づけが推察されるのである。

なお、中世段階での目録類としては、永正十七年（一五二〇）実悟によって制作された『聖教目録聞書』とがあり、庄司暁憲や安藤弥<sup>6)</sup>によって聖教目録の在り方について検討されている。安藤は、『聖教目録聞書』と慈願寺蔵『聖教目録』の対校によって得られた所感として、

次に、またあらためて、この目録を見通してみると、当然ながら近現代的な真宗教学体系に基づく聖教理解を見出し得ないことも再確認される。経・論・釈・疏はじめ、汎浄土教系典籍をひろく掲載し、法然・親鸞の言行関係の書物、覚如・存覚らの書物も多く書き出されている。親鸞・真仏・源海の三因縁、

歎異抄などが挙げられていることも前稿で確認した通りである。しかし、なぜこのような順番で列記されているのか、たとえば『御伝鈔』が挙がっていないなど、単純な疑問がすぐに浮かび上がる。さらに、こうした聖教理解（何を聖教と認めるのか）がどうやって共通認識となっていたのかなど、中世真宗聖教史（目録論）の解明はこれからである。

と述べており、<sup>(7)</sup>今日の聖教理解と中世での認識との差が課題として提示されている。

第三に、近代以降、各地に点在する親鸞真蹟を初めとする法宝物が様々な形で公開されてきた。大正と昭和初期に、本願寺に関するものを概観するようなものが二つ提示されているので、それらを挙げてみよう。

まず、親鸞門侶毎に史蹟を分類して掲載した東洋大学真宗会編『真宗史蹟大観』（成行社、一九二六）がある。その一〇〇番から一二一番に「如信上人」としてまとめられているのが本願寺関連であり、そのうち一〇四から一一三番が西本願寺、一一四番から一二一番が東本願寺に割り当てられている。<sup>(8)</sup> 写真版を多く伴うことから、当時広く用いられていたようである。

次に、序論専修寺の項でも挙げたが、『高田学報』における親鸞筆跡に関する座談会において、東西本願寺における真蹟についての報告があった。「第二 本願寺派本願寺所蔵の真蹟に就て」では、中澤見明が自身知り得た本願寺所蔵の親鸞真蹟について、「六字名号」並びに上下讚文、古版『浄土論註』上下二卷朱訓並に同下巻真筆奥書、「安城御影」上下讚、御消息四通（三月二十六日付「いやおむながこと」（年号不明）、十一月十二日付常陸の人々宛（年号不明）、十一月十一日付いまごぜんのははへ宛て、寛元元年十一月二十一日付

讓文)、『教行信証』、『浄土三経往生文類』、『唯信鈔』二通(略抄本、完本(横曽根報恩寺の印あり))、『経釈要文』、『経釈要文』(南北朝書写、伝親鸞筆)を挙げている。その中で、本願寺所蔵資料について中澤が指摘したことで、重要な事項が二点ある。一点目は、「御消息」四通についてである。正安四年五月二十二日付本願寺文書に覚恵から覚如へ宛てた讓状の案文に「故覚信御房の御事を仰せおかるゝ上人御自筆の御消息文、此の御影堂の本券証文並具書ことごとく、これをわたすもの也」とあり、ここの「上人御自筆の御消息文」が寛元元年十一月二十一日付の「ゆづりわたすいや女が事」という書状を指していることを指摘している。そのことから、本願寺系に伝わった最も確実なものと認め、仮名書きの親鸞真筆の基準にすべきとまで述べているのである。二点目は、『唯信鈔』完本の所蔵を巡って、「横曽根報恩寺」の印があることから、本願寺が入手した時期について問われ、慶長年中書の「聖教箱一重目入日記」を挙げている。その題目の下には「聖人御筆分」とあり、「浄土三経往生文類一帖」、次に「唯信鈔二帖」として、その下に「但シ此内報恩寺ヨリ上ル一冊ハ御正筆ナリ」という註記があるとされている。次に「浄土論註上下一部聖人御自点也」、最後に「法然聖人御念珠並御骨」とあって、「右如日記慶長六年十月四日入置者也」「慶長十三年五月廿八日如右入也」、「慶長十六年六、廿六日改之」とし、ここから、慶長年間以前にはこの四種が一つの箱に入れられて蔵されていたと述べられている。中世本願寺における親鸞真蹟の保管と伝持の状況を知りうる史資料として、重要な指摘であろう。

さらに、「第三 大谷派本願寺所蔵の真筆に就て」では、染野光海によって大谷派本願寺所蔵の真蹟につい

て、大正十一年（一九二二）、山田文昭が東本願寺宝庫より発見した「御消息」（念仏者疑問）、『一念多念文意』、『唯信鈔』断簡一四枚、『聖徳太子奉讃』一首の四種が挙げられている。これらについても、古くより本願寺に所蔵されてきた重宝である可能性が高い。

本研究は『教行信証』を中心とする論考であるが、こうした諸聖教・史資料に囲まれて伝えられてきたのが西本願寺本であり、それを伝持してきた本願寺という場において、『教行信証』がいかに展開したのかを次項以降の課題としたい。

## 第二項 『教行信証』の諸形態

本研究の主題である『教行信証』に対象を絞って、その諸展開について探ってみたい。その上で参照しなければならぬのが、宮崎圓遵「親鸞聖人書誌」における『教行信証』写伝等の記述である。<sup>9)</sup> 宮崎は、真蹟本書写とそれ以降の展開についていくつかに分類して示している。その分類を元に、〈真蹟・伝真蹟〉、〈写伝〉、〈延書〉、〈御自釈・音訓〉、〈正信偈別行〉に分けて、以下に纏めておきたい。

第一に、〈真蹟・伝真蹟〉である。下総報恩寺に伝えられていた坂東本（真宗大谷派蔵）、本願寺にて古くから相伝されてきた西本願寺本（本願寺蔵）、真仏が書写したといわれる専修寺本（高田派専修寺蔵）がここに数えられる。この三つは、門弟集団としては、それぞれ横曾根門徒（性信ら）、高田門徒（真仏・頸智ら）、大綱・本願寺門徒（如信・覚如ら）の系統にそれぞれ伝えられてきたものである。

第二に、〈写伝〉である。まず、奥書等から推定されるものに、寛元五年（一一二四七）尊蓮書写、元弘三年（一一三三三）乗專書写（助阿本にて校合）、暦応四年（一一三四一）書写本が挙げられる。次に、現存するものについては、元亨四年（一一三二四）存覚書写本（京都府常楽寺蔵、八冊中五冊現存）、巧如所伝本（新潟県浄興寺蔵）、宝徳二・三年（一二四五〇・一四五一）存如授与本（本願寺蔵、蓮如書写本、存如・蓮如両筆本）、蓮如筆題簽八冊本（石川県専光寺蔵）、室町初期書写八冊本（滋賀県大楽寺蔵）、室町中期書写八冊本（大谷大学蔵）などが挙げられている。<sup>10)</sup>

第三に、〈延書〉である。龍谷大学蔵江戸中期書写本の奥書から、康永二年（一二四三）存覚延書が伝えられる。その流れにあるものが延文五年（一二六〇）善如書写本（本願寺蔵）等の十七冊本系であるとされ、「教卷」一冊、「行卷」三冊、「信卷本」二冊、「信卷末」三冊、「証卷」一冊、「真仏土卷」二冊、「化身土卷本」三冊、「化身土卷末」二冊の構成である。この十七冊本系統が最も流布しているとされる。その他、十七冊本とは別系統の貞和二年（一二四六）源覚書写本（真宗大谷派蔵）の十九冊本、延徳元年（一二四八九）蓮如書写本（日野環氏蔵）の二十冊本等がある。

第四に、〈御自釈・音訓〉であり、『本願寺聖人教行証御自釈』乗專書写本（京都府常楽寺蔵、末巻のみ）、『教行信証音訓』（茨城県称名寺蔵、『往生要集』と合綴）がある。それぞれ『教行信証』に関する一定の項目を抜き出して構成されたものである。

第五に、〈正信偈別行〉である。本願寺蔵存如書写本には、巻尾に「釋存如（花押）」とあり、存如が初め

て『教行信証』から別行したといわれている。その他、文明五年（一四七三）版「正信偈・和讃」、延徳三年（一四九一）書写本（禿氏文庫蔵）などがある。『教行信証』から抜きだしたという形でいえば、第四に挙げた〈御自釈・音訓〉と同種の流布形態といえる。

ここまでは、宮崎の議論を元にした五分類であるが、現存聖教の中で提示されたこの『教行信証』テキストの諸展開は、本願寺の活動としても抽出することができる。本願寺の来歴との関連で注目すべきは、写伝（西本願寺本・巧如・存如・蓮如ら）、延書（存覚・善如・蓮如ら）、「正信偈」別行（存如・蓮如）の三点であろう。さらに加えるとするならば、第六に〈註釈・引用〉であり、註釈書としては覚如あるいは存覚撰述とされる『教行信証大意』『教行信証名義』、存覚による『六要鈔』、蓮如による『正信偈註』『正信偈註釈』『正信偈大意』が制作されている。また、覚如・存覚らの書に多く引用されているので、それらも『教行信証』の諸展開に加えるべき形態であろう。

### 第三項 抄出・引用箇所の変遷

『浄典目録』では「浄土五祖」、「唐土」、「和朝」などに分けて挙げられていたが、こうした中国や日本の註釈書の著者たちは、宮崎による伝授史の研究にもあつたように、図像テキストとの関連性が浮かび上がる。親鸞真筆の讃銘を含んだ三朝高僧影像が伝えられ、それらは『存覚袖日記』に構図や銘文が書写されているのである。これまでの課題を総じてみれば、『教行信証』の諸展開を考える場合には、先の『教行信証』諸本

の諸展開と並んで、本文の抄出・引用を検討すべきである。それは、凶像テキストの讃銘、覚如・存覚らによる引用の二点に分けることができる。

第一に、凶像テキストとしての展開としては、親鸞御影の讃銘に「正信偈」文が抄出引用されている。

まず、「安城御影」である。下部讃銘には自筆で、

和朝釋親鸞正信偈曰／本願名號正定業：即横超截五惡趣／愚禿親鸞八十三歲〔聖典全〕二・九〇〇

とある。「安城御影」については、真宗大谷派蔵本とは若干の文字の異同がある。本願寺においては、存覚による披見記録が『存覚袖日記』に詳細に描かれている。蓮如は副本（模本）を作成して裏書に『存覚袖日記』の存覚披見記録を書いた。さらに、実如期に本願寺に寄進されている。

次に、「鏡御影」である。現在見ることでできる上部現讃銘には、次のようにある。

和朝親鸞聖人眞影／憶念彌陀佛本願：應報大悲弘誓恩 〔聖典全〕二・九〇一、覚如筆

しかし、現讃銘は覚如によって修訂されたものであって、上部原讃銘と下部讃銘にはそれぞれ、

（本願名號正定業：即横超截五惡）趣 文 〔聖典全〕二・九〇二、切断塗抹部推定

釋親鸞云／還來生死流轉之家：必以信心爲能入 文 〔聖典全〕二・九〇一塗抹・描表装

とある。「鏡御影」については、もともと木像等の内部に収められていたとする説もある。讚銘の内容としては、原讚銘を覚如が塗抹したとされ、裏書に「應長元歲 辛亥 五月九日於越州／教行證講談之次記之了」（『聖典全』二・九〇二）とあるように、大町如道への講義に携えていったと考えられている。

さらに、『存覚袖日記』に登場する本尊・影像類内の親鸞偈文を取り上げてみたいと思う。

左表によれば、親鸞の作として、『入出二門偈頌』の「觀彼如來本願力 凡愚遇无空過者 一心專念速満足 眞實功德大寶海」（『聖典全』二・一六）が多く抄出引用されるが、その他は「正信偈」の「本願名號正定業…即横超截五惡行」の十行二十句（『聖典全』二・六〇）であり、その範囲に含まれる「如來所以興出世…應信如來如實言」二行四句（『聖典全』二・六一）としても書写されている。親鸞自身によるものを含んだ銘文類では、「正信偈」については「本願名號正定業…即横超截五惡趣」が抄出の中心となっていることが明らかである。

〈表6-1 『存覚袖日記』における親鸞偈文〉

番号	本尊・影像類	位置	本文（括弧内は『聖典全』による推定）	『聖典全』四
一	本尊銘文（和朝）	上	上部釋親鸞聖人偈曰 觀彼如來本願力…眞實功德大寶海	一四三五
二	近江本尊（三朝血脉祖師眞影）	下	釋親鸞偈曰 觀彼如來本願力…眞實功德大寶海	一四三七
八	不可思議光	下	和朝釋親鸞正信偈曰 本願名號正定業…即横超截五惡趣	一四四二
一三	エキラシマ（善導向上人血脉等）	下	釋親鸞偈曰 觀彼如來（本願力…眞實功德大寶海）	一四四五
一三	爲本書所送ノ本（寂靜房本尊）	下	釋親—聖佛偈文云 本願名號ヨリ如實言マデ	一四四六
一四	光明本文	上	親鸞聖人曰 如來所以興出世…應信如來如實言	一四四六

二二	瓜生津本尊(太子并和朝先徳)	下	親鸞聖人曰 如來(所以興出)世:應(信如來如實)言	一四五三
二五	予安置御影等銘文	上	親鸞聖人曰 觀彼(如來本願)力:眞實(功德大寶)海	一四五四
二七	開田證信房本尊	上	親鸞聖人曰 如來(所以興出)世:應信(如來如實)言	一四五五
二九	安城御影	下	和朝釋親鸞正信偈曰 本願名號正定業:即横超截五惡趣	一四五八
四四	毘沙津(上人マムキノ一尊)	上	本願名號ヨリ得涅槃マデ十行	一四六八
四四	同	下	凡聖逆謗ヨリ五惡趣マデ十行	一四六八
四五	和州三人本尊	下	親鸞聖人曰 觀彼如來文 <small>七言四行 已上五行</small>	一四六八
五四	不可思議光(汁谷孫六本尊銘)	下	親(鸞)聖人偈曰 觀彼(如來本願力):眞實(功德大寶)海	一四七一
六〇	鳥巢使蓮淨房本尊銘	上	親鸞聖人曰 如來所以興出世:應信如來如實言	一四七三
七一	仙空房・眞空房等	下	親鸞聖人偈曰 一行 觀彼如來偈七言ヅ、ヲ四行二書之	一四七八
七三	粟本尊修補文字書入之時間及様	上	親—上人偈曰 觀彼如來四句偈	一四七八
七四	ヒサ津・血脈眞影	下	和朝釋親—正信偈曰 一行 本願名號ヨリ□横截五惡趣マデ二十行	一四七九
七六	大无量寿経言	上	親鸞上人曰 觀彼如來本願力:眞實功德大寶海	一四八〇

第二に、覚如や存覚らの著作における『教行信証』の引用を拾い上げたのが〈表6-2〉である。

〈表6-2 覚如・存覚等の『教行信証』引用〉

教巻 総序	覚如・存覚等による『教行信証』引用本文(括弧内は『聖典全』二の『教行信証』頁)	引用書目	『聖典全』四
	遇獲行信速慶信縁	乗専『最須敬重絵詞』五	四五四
		存覚『存覚法語』	八二五

<p>行巻 両重因縁</p>	<p>徳號の慈父ましまさずは能生の因かけなん。光明の悲母ましまさずは所生の縁そむきなん。光明・名號の父母、これすなはち外縁とす。眞實信の業識、これすなはち内因とす。内外因縁和合して報土の眞身を得證す (二・四九)</p>	<p>覚如『執持鈔』四</p>	<p>一三八</p>
<p>行一念釈</p>	<p>行の一念といふは、いはく稱名の遍數について選擇易行の至極を顯開す(二・四九)</p>	<p>存覚『浄土真要鈔』末</p>	<p>五〇五</p>
<p>正信偈</p>	<p>十念相續といふは、これ聖者のひとつのかずまくのみ。すなはちよく念をつみ、おもひをこらして他事を縁せざれば、業道成辨せしめてすなはちやみぬ。またいたはしくこれを頭數をしるさじ (二・五〇『安樂集』引文)</p>	<p>存覚『浄土真要鈔』末</p>	<p>五〇四</p>
<p>能發一念喜愛心</p>	<p>能發一念喜愛心</p>	<p>覚如『改邪鈔』一九</p>	<p>三三五</p>
<p>不斷煩惱得涅槃</p>	<p>不斷煩惱得涅槃</p>	<p>覚如『改邪鈔』一九</p>	<p>三三五</p>
<p>能發一念喜愛心</p>	<p>能發一念喜愛心 不斷煩惱得涅槃 凡等逆謗齊廻入 如衆水入海一味 (二・六一)</p>	<p>存覚『浄土真要鈔』本</p>	<p>四八七</p>
<p>攝取心光常照護</p>	<p>攝取心光常照護 已能雖破无明闇 貪愛嗔憎之雲霧 常覆眞實信心天 譬如日光覆雲霧雲霧之下明无闇 (二・六一)</p>	<p>存覚『浄土真要鈔』本</p>	<p>四八八</p>
<p>已能雖破无明闇</p>	<p>已能雖破无明闇 (二・六一)</p>	<p>覚如『口伝鈔』上</p>	<p>二五〇</p>
<p>憶念彌陀佛本願</p>	<p>憶念彌陀佛本願 自然即時入必定 唯能常稱如來號 應報大悲弘誓恩 (二・六二)</p>	<p>覚如『口伝鈔』下</p>	<p>二七六</p>
<p>眞實信心必具名號</p>	<p>眞實信心必具名號、名號必不具願力信心也 (二・九〇)</p>	<p>覚如『最要鈔』末</p>	<p>三四四</p>
<p>願力の信心は名號を具す</p>	<p>願力の信心は名號を具す (二・九〇意)</p>	<p>存覚『浄土真要鈔』末</p>	<p>四九八</p>
<p>信巻</p>	<p>信巻</p>	<p>覚如『本願鈔』</p>	<p>二九三</p>
<p>法義釈</p>	<p>法義釈</p>	<p>存覚『浄土見聞集』</p>	<p>八五七</p>
<p>信一念釈</p>	<p>信一念釈</p>	<p>存覚『浄土真要鈔』末</p>	<p>五〇五</p>
<p>の慶心をあらはす</p>	<p>の慶心をあらはす (二・九三)</p>	<p>存覚『浄土真要鈔』本</p>	<p>四九三</p>
<p>一念といふは信心を獲得する時節の極促をあらはす</p>	<p>一念といふは信心を獲得する時節の極促をあらはす (二・九三意)</p>	<p>覚如『最要鈔』</p>	<p>三四四</p>
<p>本願の生起本末をきくべし</p>	<p>本願の生起本末をきくべし (二・九四)</p>		

明所被機	愛欲の廣海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚のかずにいることをよるこばず、眞證の證にちかづくことをたのしまず (二・一〇五)	存覚『浄土真要鈔』末	五〇〇
証卷	煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行をうれば、すなはちのときに大乘正定聚のかずにいる。正定聚に住するがゆへにかならず滅度にいたる。かならず滅度にいたるはすなはちこれ常樂なり。常樂はすなはちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなはちこれ无上涅槃なり。无上涅槃はすなはちこれ无爲法身なり。无爲法身はすなはちこれ實相なり。實相はすなはちこれ眞如なり。眞如はすなはちこれ一如なり (二・一三三)	存覚『浄土真要鈔』末	五〇〇
眞実証釈			
眞仏十卷	佛はこれ不可思議光佛、土はまた无量光明土なり (二・一五五)	覚如『改邪鈔』一一	三二二
眞仏十釈	佛はすなはちこれ不可思議光如來、土はまたこれ無量光明土なり (二・一五五)	存覚『弁述名体鈔』	一三七九
化身十卷	一切梵行の因は善知識なり。一切梵行の因无量なりといへども、善知識をとけば、すなはちすでに攝在しぬ (二・二〇五)『涅槃経』引文	存覚『浄土真要鈔』末	五一八
眞問釈	一切梵行因善知識。一切梵行因雖無量、説善知識則已攝盡 (二・二〇五)『涅槃経』引文	乗専『最須敬重絵詞』一	四三五
後序	汝念善知識。生我如父母、養我如乳母、增長菩提分 (二・二〇八)『華嚴経』引文 汝念善知識。生我如父母、養我如乳母、增長菩提分 (二・二〇八)『華嚴経』引文 然患禿釋鷲、建仁 <small>辛酉</small> 曆、棄雜行分歸本願。元久 <small>丑乙</small> 歲、蒙恩恕分書選擇。同年初夏中旬第四日、選擇本願念佛集内題字、并南无阿彌陀佛往生之業念佛爲本與釋綽空、以空眞筆令書之。同日、空王之眞影申預、奉圖書。同二年閏七月下旬第九日、眞影銘以眞筆令書南无阿彌陀佛與若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現在成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生之眞文。又依夢告、改	乗専『最須敬重絵詞』一 覚如『親鸞聖人伝絵』上 四	四三五 八一

<p>綽空字、同日以御筆令書名之字訖。本師聖人今年七旬三御歲也。選擇本願念佛集者、依禪定博陸<small>月輪殿 兼實</small>之敕命所令選集也。眞宗之簡要、念佛之奧義、攝在于斯。見者易論。誠是希有最勝之華文、無上甚深之寶典也。涉年涉日、蒙其教誨之人雖千萬、云親云疎、獲此見寫之徒甚以難。爾既書寫制作、圖書眞影。是專念正業之德也、是決定往生之徵也。仍抑悲喜之淚註由來之緣 (二二五四)</p>	<p>竊以、聖道の諸教行證久廢、淨土の眞宗證道今盛、然諸寺釋門、昏教兮不知眞假門戸、洛都儒林、迷行兮無辨邪正道路。斯以興福寺學徒、奏達 大上天皇 諱尊成 號後鳥羽院 今上 諱爲仁 號土御門院 聖曆、承元 丁卯歲、仲春上旬之候。主上臣下、背法違義、成忿結怨、因茲眞宗興隆太祖源空法師并門徒數輩、不考罪科、猥坐死罪。或改僧儀賜姓名處遠流、予其一也。爾者已非僧非俗。是故以禿字爲姓。空師并弟子等、坐諸方邊州經五年之居緒 (二二五三)</p>
<p>一</p>	<p>覺如『親鸞聖人伝絵』下</p>
<p>九二</p>	<p></p>

〈表6-2〉によれば、引用箇所が重なっているのは「正信偈」である。本尊類や親鸞影像においては、『大經』に依る「本願名號正定業…即横超截五惡趣」を中心とする抄出であったが、覺如・存覺の引用では、『口伝鈔』『最要鈔』『浄土眞要鈔』のように「憶念彌陀佛本願…應報大悲弘誓恩」の四句を中心とした引用に変遷していることがわかる。これは、先に示した「鏡御影」の原讚銘から覺如による修訂における讚文の変化にも一致している。「憶念彌陀佛本願…應報大悲弘誓恩」の四句は、親鸞・如信・覺如連坐像(本願寺藏・讚銘覚如筆)の讚銘「攝取心光常照護…應報大悲弘誓恩」の十二句にも相当し、覺如が明らかにした信心正因・

称名報恩の義を承けて図像テキストに取り入れられたものと考えられる。さらに、「後序」引用に着目すれば、覚如による伝記への展開も確認される。なお、蓮如の引用については、『正信偈』の四句乃至八句の文が書幅として授与されたものが伝えられている。<sup>(11)</sup> その抄出箇所は「本願名號正定業：應信如來如實言」や「能發一念喜愛心：應報大悲弘誓恩」などが挙げられる。<sup>(12)</sup>

このように、讚銘の内容と、本願寺聖教に展開される覚如・存覚教学の基礎とが相互に関連している姿が窺える。

#### 第四項 寺院形成における『教行信証』テキスト

以上のような諸展開が、本願寺においてどういった形で表出するのかを試案してみたいと思う。その際、中世宗教諸テキストの体系化を試みている阿部泰郎が行った方法を参考としたい。阿部は、法隆寺における聖徳太子関連テキスト体系を、舍利を中心に大きく四つの象限に分節された座標によって単純化・概念化している。<sup>(13)</sup> そこでの四象限とは、舍利を中心とする太子聖典、太子尊像、太子伝記、太子絵伝であり、太子聖典は文字テキスト・儀礼、太子尊像は図像テキスト・礼拝、太子伝記は注釈・儀礼、太子絵伝は解釈・芸能の役割を帯びたものとし、それぞれの境界上の座標にテキストを付置するものである。

これを参考にすれば、本願寺という場においては、教義的には〈本尊〉、成立史的には親鸞遺骨を中心としたものであり、それらの周辺に〈聖典〉、〈尊像〉、〈絵伝〉、〈伝記〉の四つを象限としてテキスト体系の座標

を設定することができよう。〈聖典〉とは、文字テキストとして伝授されるべき聖教、〈尊像〉とは、先徳や親鸞、歴代の御影、〈絵伝〉とは、法然・親鸞・覚如らのものが伝えられ、〈伝記〉とは、その絵伝の詞書を別行されたものがある。

それぞれについて具体例を示せば、〈本尊〉としては、大谷廟堂当初にかけられていたものは定かではないが、覚如時代の本尊といわれる籠字「十字名号」が伝えられているとされ、その讃銘はいずれも覚如筆で、上部讃には「大無量壽經」として第十八願文、「又言」として往觀偈の「其佛本願力」以下四句、「又言」として「必得超絶去」以下八句が書写され、下部讃銘には「婆敷槃豆菩薩曰」として「世尊我一心」以下十二句、「又曰」として「觀佛本願力」以下四句、末尾に「愚禿親鸞敬信尊號」と、専修寺藏黄地十字名号とほぼ同じ体裁の本尊が制作されたようである。<sup>(14)</sup>『改邪鈔』(『聖典全』四・三〇二)の記述などによれば「歸命盡十方无尊光如来」の九字名号ではなかったかとも考えられているが、いずれにせよ親鸞の依用した尊号を本尊として用いていたようである。さらに本願寺には親鸞真筆「六字名号」が伝えられている。

〈聖典〉としては、「浄土三部經」や七祖聖教、『教行信証』などを中心として聖教・史資料体系が構築される。歴史が下るにつれて、覚如や存覚の著作が加えられていくようになることは本章第一節で述べた。

〈影像〉としては、親鸞御影があり、「鏡御影」や「安城御影」が所蔵されるようになった。七高僧や聖徳太子像、歴代寿像・影像、連座像などもここに数えられる。

〈絵伝〉としては、覚如の制作に始まる。法然に関する『拾遺古徳伝』、親鸞に関する『親鸞聖人伝絵』、

さらに從覚・乗專による覚如に関する『慕帰絵』などがある。本願寺に連なる系譜が視覚化されたものである。

〈伝記〉としては、それらの詞書部分が別行された『御伝鈔』や『最須敬重絵詞』が代表的であり、前者は現在でも親鸞の生涯に関する基礎文献であつて大谷廟堂の成立に至るまでが記されている。

さらに、『報恩講私記』や『嘆徳文』は、親鸞の〈伝記〉でありながら〈聖典〉でもあつて両者の境界上に位置づけられ、〈本尊〉と〈尊像〉の境界上には、親鸞御影（木像）が位置づけられる。<sup>(15)</sup>

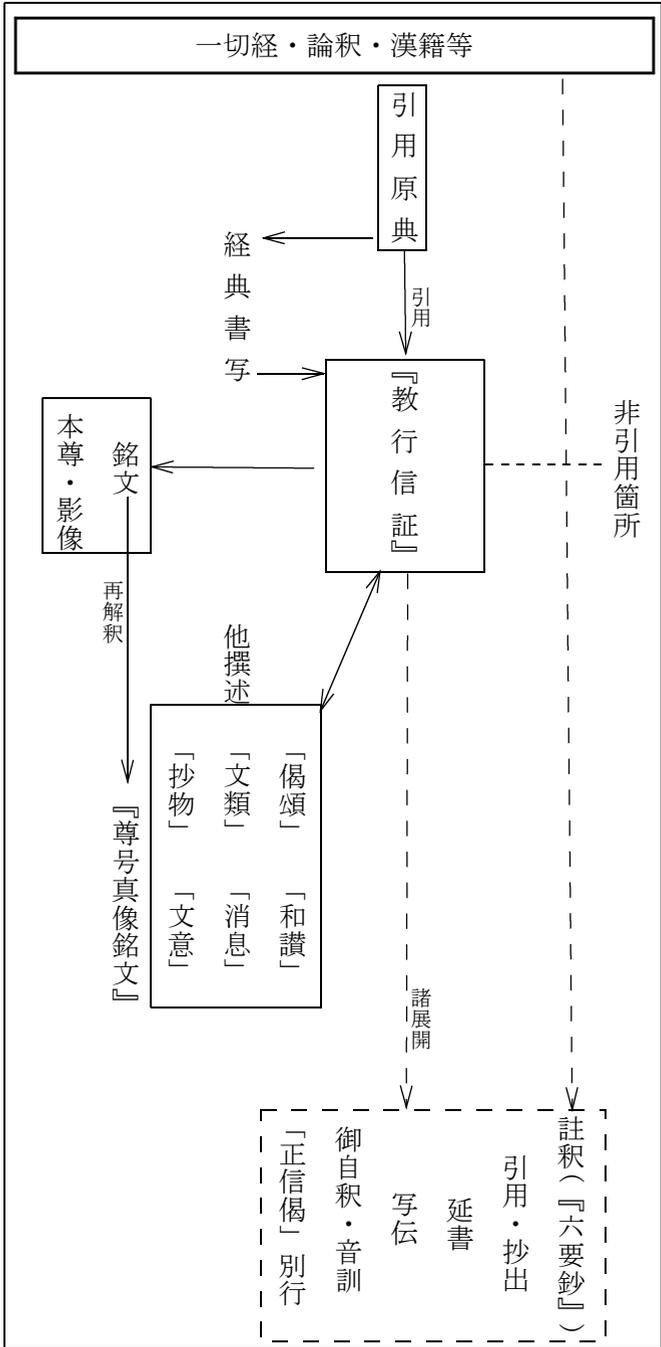
親鸞の廟所を基点として寺院化することによつて成立した中世本願寺という場に対して、〈本尊〉あるいは親鸞遺骨を中心に、〈聖典〉〈影像〉〈絵伝〉〈伝記〉という形態で表出したテキストは、文字テキスト・図像テキストに大別され、註釈・解釈・儀礼・礼拝・物語・絵解きなどの役割を帯びたテキストとして意義づけられることができ、相互有機的な関連性の中で本願寺の基盤が造りあげられていったと考えられる。

そのテキスト形成の初期段階が親鸞による生成であり、そのことは、主として第二・三章で述べた。親鸞による生成については、仏典あるいは漢籍まで含めた書籍群の中から、経論章疏の書写を媒介として『教行信証』引用文の選定と書写・改訂が行われたことの実態を示してきたのであるが、本節で考察しているように、そのテキストは本尊・影像類の讚銘として用いていた。そうした文を親鸞自身が解釈したのが『尊号真像銘文』であり、視覚的に示される銘文の特徴を最大限取り入れているのが西本願寺本書写者であつたと考えられる。さらに『教行信証』本文については、宮崎が示したように諸展開を見せることになるが、本願寺

においては覚如・存覚らによる引用・註釈が行われた。

こうした文字テキストの中心的存在として『教行信証』を位置づけてみたい。それは、『教行信証』にも引用された六字・九字等の尊号が還元的に表出した名号本尊として敬重され、本尊影像類の上下讚銘として「正信偈」が抄出され、『親鸞聖人伝絵』に引用され、伝記の中で本願寺成立の由縁が語られていることから、『教行信証』がそれら諸テキストに深い関連が見られるためである。

覚如は本尊の最後に「愚禿親鸞敬信尊號」と書写しているが、親鸞の依用した本尊を大切にしたように、親鸞の主著である『教行信証』を教学的成立根拠とするのが本願寺ということが出来る。その『教行信証』テキストとは、『浄典目録』で明らかにされたような、浄土教祖師・親鸞・本願寺歴代との連続性を持つ中で生成されてきたが、伝授・相伝の創始によつて伝写・延書・註釈・引用といった文字テキストが形成されていくこととなった。さらに、親鸞当時より「正信偈」文などが画像テキストへも展開されていた。これらのことから、本願寺において様々に展開する諸テキストの論拠となつていると考えられるのである。こうした大枠の中で、聖典についてはさらに細分化されるのであつて、親鸞著作を中心として、本願寺特有の聖教が宗主あるいは法嗣の書写（あるいは奥書）によつて授与されていったことは、平松令三によつて推論されている。<sup>(16)</sup>とりわけ、相伝の聖教としての西本願寺本の役割や、歴代による伝写・授与（善如書写延書本、巧如所伝本、存如授与本など）は、本願寺という場での聖教の展開における中心的な役割があつたものと位置づける必要がある。



〈図6・1 テキスト概念図〉

## 第二節 存如授与本の書誌

前節で述べた『教行信証』の写伝の姿を我々に教示するのが、存如授与本である。その特徴と諸本との関係を検討し、「伝授本」としての書写の実態について明らかにしていきたい。

### 第一項 本願寺系八冊本と存如授与本

存如授与本については、表紙の全巻に、標列に準じた外題と「釋性乗」の袖書がある。また、以下のよう  
な奥書を有している。

(教巻) 「寶徳三年辛未八月十六日／釋存如(花押)」

(行巻) 「寶徳二年八月一日奉書寫畢／右筆蓮如(花押)」

(真仏土巻) 「寶徳二年八月十一日奉書寫畢右筆蓮如(花押)」

(化身土巻) 「右此鈔者親鸞上人御作也而／加州木越 光徳寺 住持性乗／依所望無難去所令許與之也／

於國中縱難有所望之仁不蒙本／寺之許者楚忽不可令書寫者也／寶徳三年辛未八月十六日／

大谷本願寺住持釋存如(花押)」

このように、宝徳二・三年(一四五〇・五一)にかけて蓮如らによって書写され、存如によって加賀光徳

寺性乗に授与されたのが存如授与本である。性乗に關しては、本派本願寺蔵『正信偈・三帖和讃』が挙げられる。<sup>(17)</sup>「正信偈」巻尾には「釋存如（花押）」の署名があり、『和讃』の奥書に、

右斯三帖和讃者加州木越／光德寺性乗在京之間依／所望奉書寫處也／于時文安六年五月廿八日／右筆釋蓮如／（花押）

とある。また、『六要鈔』（興正寺蔵蓮如上人書写本）の奥書には、

右斯六要鈔一部十帖者當流相傳之／重寶也雖然賀州木越光德寺住持／性乘先年在京之時連々懇望／依難  
黙止令與訖聊爾不可有／外見之儀而已／長祿貳年 寅 七月廿八日／大谷本願寺住持釋蓮如（花押）

〔聖典全〕四・一三四二）

とある。これらのことから、光德寺性乗に対しては『正信偈和讃』、『教行信証』、『六要鈔』の順に授与されており、存如授与本は本願寺宗主による聖教伝授の一環として制作・授与されたものである。さらに、『三帖和讃』授与と同年の文安六年（一四四九）六月三日に『安心決定鈔』が授けられている。<sup>(18)</sup>

さて、存如授与本については、その内容や体裁などから、本願寺系八冊本とされる一本である。重見一行は、『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察』（法藏館、一九八一）第二章において正応四年版本の存在について論証する中、高田系八冊本と本願寺系八冊本を本来的八冊本と位置づけており、その特徴をまとめている。<sup>(19)</sup> すなわち、西本願寺本に由来する本願寺系八冊本の特徴として、

- ① 「総序」前に「大阿弥陀経」等の二行十九字を置く。
- ② 標列が「総序」の後のほか、「教巻」の後にもある。

という二点を挙げ、

- ③ 八冊本としての表尾題を全冊に具備する。
- ④ 標拳は全て内題と本文の間に置く。
- ⑤ 撰号がもれなくある。序は「愚禿釋親鸞述」、本文は「愚禿積親鸞集」。
- ⑥ 坂東本にある頭注は、すべて文中に割註の形でとり入れられている。
- ⑦ 本文は一紙片面六行、一行十七字に固定されている。

という五点を、高田系八冊本と共通する特徴としている。重見は、本願寺系八冊本として、浄興寺本、真宗寺本を検証しているが、これらの特徴は、先述した宮崎による室町末期までの『教行信証』書写本の特徴と共通する。<sup>(20)</sup> 重見は本願寺系八冊本について、さらに、

本願寺系八冊本は、今日の東西本願寺派寺院の教行信証写本の共通形態と言ってもよい。何故なら、蓮如前後より固定化し始めたと思われる、そして今日の本願寺系末寺に伝えられているほとんどを占める、室町期以前に多数書写された「伝授本」の形態だからである。しかしこの伝授本に定着するまで、――多

分は蓮如より前―の八冊本は、少しずつ本文状態が異なっている。∴蓮如本はこの本（真宗寺本―筆者註）の前段階の状況を伝えていようである

と述べている。<sup>(21)</sup> 本節で扱う存如授与本は、本願寺系『教行信証』八冊本のうち、その系統の本文確定に向かう「伝授本」として捉えることができよう。

重見の指摘をもとに、これまでの研究・解説から、存如授与本に関する書誌的特徴について考えてみよう。

第一に、中井玄道である。<sup>(22)</sup> 中井は、『六要鈔』所釈本との一致として、調巻が八冊であること、各巻標拳が題後文前を挙げ、但し「教巻」の標拳は前紙標列の前にある点は西本願寺本と一致するという。次に、西本願寺本との一致として、撰号を題後一行に記すが、その有無は一定しないこと（但し、「教巻」は題の直下、「総序」の撰号は無し）、「教巻」の終わりに標拳及標列の一行を添えることを挙げる。次に、存如授与本の所見として、西本願寺本では「教巻」表紙裏の「大阿彌陀經」等の二行十九字を置くが、「総序」の題後文前に移すこと、冠註を凡て本文の狭註とすること、「化身土巻本」の終わり、題号の後に撰号があること、「化身土巻末」の終、題後に「今此教行證者祖師親鸞法師選述也立章於六篇調卷於六軸皆引經論眞文各備往生潤色誠是真宗紹隆之鴻基實教流布之淵源末世相應之目足即往安樂之指南也」の跋文を置くことを挙げる。そして、江戸期刊本との一致として、寛永・正保・明暦・寛文の刊本に共通する型が、当本に既に成立していたとする。中井の指摘は、標拳の位置や跋文等に関するものであった。

第二に、禿氏祐祥である。<sup>(23)</sup> 禿氏は、「(一五) 存如上人所出本。八冊。宝徳三年存如上人より加賀木越の性乗に付与された一本で、前年蓮如上人の筆写する所である。体裁は第十三の巧如上人所出本に似ている。今は本願寺派系本山の所蔵であつて後世広くおこなはるゝ版本は悉くこの本と系統をおなじくするやうである」としている。宮崎圓遵『教行信証考証』三六頁も同様の内容である。これらでは、存如授与本を巧如所伝本から江戸期刊本への中間的存在と位置づけている。

第三に『古写古版 真宗聖教現存目録』三四頁には⑫備考として、

真仏土卷 十六 右「作中能知是人轉中作下是故當知衆生根」ノ十七字一行ノ文、別紙ニ書キ欄外ニ張り付ケタル爲此頁ハ七行ナリ

真仏土卷 一六紙 左 二行目欄外に「又言加葉ヨリコノ行マデ點ズル也」ノ識語アル張り紙アリ

とあり、存如授与本に特徴的な貼紙について言及している。

第四に、宮崎圓遵は、「親鸞聖人の書誌」において、

更に本派本願寺には、宝徳二年(一四五〇) 蓮如の書写せる八冊本がある。『行卷』に、「宝徳二年八月一日奉書写畢、右筆蓮如(花押)」とあり(真仏土卷にも同年八月十一日蓮如書写の記あり)、『化卷』(本)に、

右此鈔者親鸞上人御作也、而加州木越光徳寺住持性乗、依所望無難去、所令許与之也、対因中縦難有

所望之仁不蒙本寺之許者、楚忽不可令書写也

宝徳三年<sup>辛未</sup>八月十六日

大谷本願寺住持存如(花押)

とある。(『教巻』にも「宝徳三年辛未八月十六日積存如」(花押)とある)。すなわち蓮如書写の翌年八月存如が性乗に授与したもので、各冊表紙に「釈性乗」の袖書がある。本書は普通存如・蓮如両筆本と称されて居り、本文も一見二筆あるようにも見えるが、また同筆とも考えられ、蓮如の写本に存如が識語を加えて下附せしものかとも見られる。なお、金沢専光寺には蓮如の筆になる題簽ある八冊を伝えている。

と述べている。<sup>(24)</sup> 蓮如書写・存如授与としながら、筆跡については躊躇した記述となっている。

第五に、藤島達朗である。<sup>(25)</sup> 藤島の書誌目録には、

本文につき、一見両筆ある如く、奥書又存如・蓮如両上人によってなされてゐるので、古来、存蓮両上人書写本といはれて来たが、最近では本文を一筆とみ、宝徳二年に蓮如上人が書写されたものを、翌三年、性乗に下附される時、更に存如上人が奥書を附加されたものである、と考定している。

第八冊の奥書中の前者は、(六)巧如所伝本のそれと、前記の如く「親鸞上人」「親鸞法師」と相異するのみで、他は同じく、同系統本と考へられるが、後世の板本に共通するその形式が、ここに成立したことを思わしめられるのである。

とあり、本文は蓮如による一筆で、存如が授与のための奥書を加えたと考えている。また、巧如所伝本の跋文との比較により、同系統本であつて後世の版本の形式が成立したことに当本の意義を認めている。

第六に、金龍静である。<sup>(26)</sup> 金龍は、「総序」から「教巻」に至る題号・本文・標挙等の配列順序が西本願寺本に依拠し、この形が本願寺授与本に継承されることと、根本奥書は尊蓮本↓正応開版本の跋文を継承している事に注目し、当時正応開版本が絶大なる権威を誇っていた可能性を推察している。さらに、存如授与本の体裁がいつ頃からできたのかを問題とし、体裁面で存如授与本に先行する可能性のある書写本として伝善如本と無年紀九帖本を挙げている。

第七に、存如授与本を対校本として用いた『浄土真宗聖典原典版 解説校異』では、本文は同一筆、蓮如の筆とし、「後世に流布した版本は、多くこの系統の本であり、学僧の註釈も多くこの系統の本によっている」(『原典版解説校異』九頁)としている。同じく存如授与本を対校本として用いた『浄土真宗聖典全書』第二巻宗祖篇上所収『教行信証』の解説には、

奥書とそれぞれの筆跡から「教文類」と「化身土文類末」(奥書のみ)が第七代存如上人、「行文類」と「真仏土文類」が蓮如上人によることが知られ、それ以外は右筆によるものとされる。……この書写本の特徴としては、漢字や右仮名について貼紙が多いことや、「化身土文類」に「専修者唯称念佛名」<sup>二</sup>「自力之心」<sup>一</sup>との一文があることなどが挙げられる。また、江戸時代の版本には、この系統の本が底本として多く用いられており、広く流布していたことが知られる。

(『聖典全』二・五)

とある。

これらをまとめれば、存如授与本の特徴として、次のようなことが挙げられる。

①漢字や右仮名について貼紙が多い。「真仏土巻」に二箇所、別紙欄外に貼紙がある。

②「化身土巻本」に「専修者唯称「念佛名」離「自力之心」との一文がある。

③「化身土巻末」の尾題後に「今此教行證者祖師親鸞法師選述也立章於六篇調卷於六軸皆引經論眞文各備往生潤色誠是眞宗紹隆之鴻基實教流布之淵源末世相應之目足即往安樂之指南也」の跋文を置く（巧如所伝本は「親鸞上人」とするが、他は同じ内容）。正応版本あるいは高田系八冊本の跋文からの切り取りと考えられる。

⑤寛永・正保・明暦・寛文の刊本に共通する型が、当本に既に成立している。

⑥この系統の本が底本として多く用いられており、広く流布していた。

以上のことから、奥書から刊本や巧如所伝本との関連が着目され、内容としては貼紙や異文が指摘されている。つまり、本願寺における『教行信証』諸本の展開を承けて成立し、江戸期刊本へ直接的に影響した本と位置づけられているのが現状の研究段階である。

重見は、本願寺系八冊本成立期に関わる書写本と見ていたが、存如授与本の実態については、これまで研究されてきたこと自体が少ない。当本を研究することにより、本願寺という場において『教行信証』が中世

的展開を遂げていく中で、ますます豊富になる諸本・諸テキストとの関係性の中で、いかに存如授与本が成立したのかを問い直す必要がある。また、正応版本の存在が確からしいものとして認められている今、存如授与本の書誌から想定される江戸期刊本への影響という視点だけでは不十分であり、存如授与本に影響し得た書写本・刊本をテキスト論的に紐解くことで、本願寺系八冊本の成立とその背景を明らかにすべきである。

なお、今回の検討によって、これらの先行研究に関して補うべき内容があるので、それについて述べることで、存如授与本の書誌情報として補足しておきたい。それは、比較的長文であったり重要と思われる貼紙・補記などである。

第二冊 「行巻」 五丁オ 「一切人聞説法 皆悉來生我國」を七行目に補記。

第三冊 「信巻本」 四丁オ 「有情 御筆」 上欄貼紙。

第四冊 「信巻末」 二九丁オ 「六加羅鳩駄迦旃延 六名尼乾陀若犍子」 貼紙。

第四冊 「信巻末」 三八オ 「其不飲則亦不酔雖復知火不燃燒王亦如」と右傍補記。

第七冊 「化身土巻本」 九ウ 「言若佛滅後諸衆生等即是」は貼紙、

続く「未來衆生」は前行末「他力之意也」の左傍に補記、

続く「顯与」は次行頭「往生」の右傍に補記。

第七冊 「化身土巻本」 五九ウ 尾題後に「愚禿親鸞」とあり。

## 第二項 存如授与本の改行

『教行信証』の改行箇所について特徴的な本としては、第四章で述べた西本願寺本が挙げられる。西本願寺本では、引用文前後にかなり多くの改行を施していたが、これは坂東本や専修寺本とは異なる特徴であった。さらに、西本願寺本では註点「:」や右左傍註を用いて經典と論釈を区分して引用文の属性までも示していた。しかし、存如授与本にはこれらの特徴は見られない。存如授与本の改行数は少なく、西本願寺本より坂東本のような体裁に近いと思われるのである。以下に本文部分の段落数(偈頌体を除く)を掲げておこう。

第一冊 総序一、教卷一四

第二冊 行卷三(その他、偈頌体三)

第三冊 別序一、信卷本三(三一問答で改行)

第四冊 信卷末五(その他、偈頌体一、『涅槃經』六師外道)

第五冊 証卷一

第六冊 真仏土卷一

第七冊 化身土卷本五(觀經隱頭・小經隱頭)

第八冊 化身土卷末三四(『弁正論』三十二)、後序一

これらはおおむね坂東本の改行位置に対応している。存如授与本書写において、坂東報恩寺に伝えられていたと考えられる坂東本を披見していたとは思われないが、この状態は坂東本から派生した諸本の影響が想定される。まず、重見の所論に従って、やはり八冊本の祖本がそうなっていたと捉えておこう。存如授与本において改行数の多い「化身土巻末」『弁正論』部分については、坂東本自体に改行が多く施されており、宋版一切経等の影響が考えられるのであるが、専修寺本や西本願寺本といった古本、さらには江戸期刊本も同様の特徴を有することから、鎌倉時代書写本を含めた諸本に通ずるものと考えられることができる。しかし、「教巻」の十四箇所については、坂東本の大部分が失われていること、専修寺本に改行が少ないことなどから、存如授与本あるいは八冊本としての特徴の一つとして、ここで取り上げてみたい。

- 存如授与本「教巻」の改行に基づく段落を示すと、次のようである。
- |                               |                               |             |
|-------------------------------|-------------------------------|-------------|
| ① 謹按淨土…教行信證                   | ⑥ 无量壽如來會言                     | ⑪ 今日世雄…     |
| ② 夫顯眞實…出世大事                   | ⑦ 阿難白佛…如是之義 <small>上巳</small> | ⑫ 今日世眼…     |
| ③ 大无量壽經言                      | ⑧ 平等覺經言                       | ⑬ 今日世英…     |
| ④ 今日世尊…問斯義乎                   | ⑨ 佛告阿難…懍興師云                   | ⑭ 爾者則此…教也應知 |
| ⑤ 佛言善哉…无能遏絶 <small>上巳</small> | ⑩ 今日世尊…                       |             |

以上十四段から構成されるわけであるが、③⑥⑧⑨では、『大無量寿経』、『如来会』、『平等覚経』、『述文贊』の書名を示した後に改行している。これは西本願寺本に見られる改行と一致しており、『平等覚経』引用の終わりに続けて「憬興師云」と示していることを除けば、書名前後の改行については西本願寺本に対応している。また、⑤についても西本願寺本の改行と対応している。存如授与本「教巻」に限った第一の特徴として、西本願寺本の改行が挙げられるのである。

次に、『述文贊』の書き入れについて詳細に検討したい。坂東本・西本願寺本において特徴的な書写法を見せる『述文贊』であるが、存如授与本では、五回の「今日：」と始まる経文において、前四回(⑩⑪⑫⑬)で改行を施しており、一見規則性のある書写法であるかのようだが、最後の「今日天尊」については、「今日世英」の行に続けて書写されているのである。それは、次のように示した存如授与本第一冊「教巻」後半部(六丁ウウ九丁オ)の本文状況によって確認されよう。西本願寺本のように、四つめの「今日世英：」までは割註が終われば改行しているように見えるが、存如授与本では、高田・本願寺両系の八冊本における特徴の一つである一行十七字を厳格に守ることが確かめられる。

そのうち、割書部分は右行が十七字となるように統一して折り返されており、実は改行とはいえないのである。また、「今日世英住最勝道佛住四智獨秀无匹故 今日天尊」の行については、「今日：」と細註のみで十七字詰にしようとする、細註部分がすべて一行書きになってしまうため、均等にして割註とし、続く「今日天尊」を当行に入れなければならなかったと考えられる。このことも、存如授与本の書式に対する厳密な姿勢の現出

と考えられる。

〔図6-1〕存如授与本「教巻」『述文賛』周辺

六ウ／一行目	今我作佛出於天下若有大德聰明善心緣
六ウ／二行目	知佛意若不妄在佛邊侍佛也若今所問普
六ウ／三行目	聽諦聽 <sup>上</sup> 憬興師云
六ウ／四行目	今日世尊住奇特法
六ウ／五行目	今日世雄住佛所住
六ウ／六行目	今日世眼住導師行
七オ／一行目	今日世英住最勝道
七オ／二行目	行如來德
七オ／三行目	爾者則此顯真實教明證也誠是如來興世
七オ／四行目	之正說奇特最勝之妙典一乘究竟之極說
七オ／五行目	速疾圓融之金言十方稱讚之誠言時機純
七オ／六行目	
八ウ／一行目	熟之真說也應知
八ウ／二行目	顯淨土眞實教文類一
八ウ／三行目	大無量壽經
八ウ／四行目	眞實之教
八ウ／五行目	淨土眞宗
八ウ／六行目	顯真實教一
九オ／一行目	顯真實信三
九オ／二行目	顯真實證四
九オ／三行目	顯眞佛土五
九オ／四行目	顯化身土六
九オ／五行目	
九オ／六行目	

これを、先行研究で影響があると言われてきた江戸期刊本と比較すれば、寛永版では、「今日……」全てで改行しているが、寛文版は存如授与本と同様であった。具体的には、次に示すような状態である。

**寛永版五才**

今日世雄住佛所住

住普等三昧能制  
衆魔雄健天故

今日世眼住導師行

五眼名導師行引  
導衆生无過上故

**寛文版四ウ**

今日世雄住佛所住

住普等三昧能制衆魔  
雄健天故

今日世眼住導師行

五眼名導師行引導衆  
生无過上故

つまり、一行十七字の形式である版本において、「今日……」等を改行と見なしているのが寛永版であり、一行字数に対して割書部分が考慮されているとはいえないのだが、存如授与本においては、割書箇所を本文と数えることで、右行が十七行となるよう統一して書写し、その字数を厳格に守っているのである。同じ一行字数を以て全体を書写・翻刻したとしても、それぞれの〈読者〉によってその位置づけが異なる箇所が現出しうるのである。ここでは、西本願寺本の改行位置を受け継ぎつつ、内実としては改行されておらず、西本願寺本の特徴と八冊本に共通する体裁とが折衷して現れていた。さらに、これは江戸期刊本においては寛永版には見られないが、寛文版に採用された特徴であった。

この割註箇所右行を本文字数と数えるのは、ここに限ったことではない。改行箇所の少なくなる存如授与本の他巻においては、特に顕著にその傾向を見ることができ、坂東本等では頭註にあったが存如授与本では本文に狭註化して書写されるとされるものも含めて他の割註箇所を確認すると、同様の傾向にあった。その例として、次の二つを挙げておこう。

## 第二冊行巻・六字釈

三四〇一

也説字悦音又歸説也説字悦音悦税二音告也述也宣述人意也業也招引也使也教也命言道也信也計也召也

是以歸命者

## 第六冊真仏土巻

三六ウ一

摩訶薩誕形像始理頽從回反崩也波也落也纏也綱關閉邪扇開正轍直刹反通也車也跡也是閻浮提一切

ここに挙げた、「行巻」六字釈などのように、坂東本等の割註箇所においても、「真仏土巻」のように存如授与本などで頭註が本文化された箇所においても、一行十七字を守るために、割註箇所の左右の字数を均等とするよう調整しつつ、右行を本文一行字数に数えることで、その体裁を守っていたことは、存如授与本全体に共通している。存如授与本は、第二冊行巻以降は、改行自体が少なくなるのであるが、一行字数が増減することがきわめて少ない書写本である。この一行字数については、前項で示した八冊本特有の特徴に当てはまるのだが、その厳密性に存如授与本の特徴があることをここでは指摘したい。重見による八冊本の検討によれば、「高田・本願寺両八冊本とも共通に二行に書し、横に並んだ二字を普通本文の一字分に配当して、一行全体としては17字分になるよう工夫して書写されている」、「高田慶長本↓浄興寺本↓恵空本乃至真宗寺本という変遷を推定することができる」と述べているが、本願寺系八冊本より古い形態を伝えていると推定されている高田系八冊本については、「本文は、精査してみると全く一行17字ではない。所々例外がある。しかしそれ等は各本独自の誤脱等によるもので、共通したものではない」とされている。<sup>(27)</sup>

さらに、重見が高田系と本願寺系で異なると指摘している行格対照表について、存如授与本の場合を検討しよう。<sup>(28)</sup>

A表6 「行巻」 中山寺本「証不——不囑——了教」

「不付囑」については、「行巻」二教二機対のうちの文言である。中山寺本は「不囑」、浄興寺本は「不付囑」、恵空本は「不付囑」、真宗寺本は「不付囑」である。存如授与本第二冊「行巻」六三ウは「不付屬」とある。『聖典全』二・五七（坂東本：『真蹟集成』一・一三七）では「不囑」とあり、専修寺本・西本願寺本も同様で、本願寺系八冊本のみ「付」が付されている。「付」字が本願寺本系八冊本以外の写本にも無いのである。

A表8 「行巻」 中山寺本「對法滅利不利——願対」

「不滅對」については、「行巻」二教二機対の文言である。中山寺本に無し、浄興寺本は傍書、恵空本・真宗寺本は本文とされており、本願寺本系八冊本以外の写本にも無い。存如授与本第二冊「行巻」六四オは右傍補記であり、浄興寺本と同様である。

B表7 「信巻本」 高田慶長本「反則落反爲也起也  
行也初也役也生也——至心」

「作」字の割註のうち「藏落反」については、「信巻」三二問答字訓釈の註記である。高田慶長本に無し、浄興寺本・恵空本・真宗寺本にありとなっている。存如授与本第三冊「信巻本」二二オでは本文にある。坂東本（『真蹟集成』二・一九五）は上欄註記であるが、「藏落反」が含まれている。坂東本の内容を受け継い

でいるが、「落↓落」に文字が変化している。『聖典全』二・八〇によれば、専修寺本には無く、西本願寺本は坂東本と同内容を上欄に示している。

C表10 「信巻本」 高田慶長本「如來——歡喜<sup>上</sup>——經言」

「愛樂」については、「信巻」信樂釈『無量寿如来会』の文の末尾である。高田慶長本に無し、浄興寺本・恵空本・真宗寺本にありとなっている。存如授与本第三冊「信巻本」二八才は、「愛樂」とある。『聖典全』二・八四によれば、存如授与本のみあり、坂東本・専修寺本・西本願寺本には無い。

D表3 「化身土巻本」 中山寺本「憶念——之心是名——也斯」

「専修者唯稱念佛名離自力之心」については、「化身土巻本」觀經隱顯「凡就一代教……」で始まる御自釈の後半部にあたる。中山寺本に無し、浄興寺本は左欄外補註、恵空本・真宗寺本にありとなっている。存如授与本第七冊「化身土巻本」二二ウには本文にある。『聖典全』二・一九七では存如授与本にのみある。

D表6 「化身土巻本」 中山寺本「雜修——雜之言——入万」

「行」については、「化身土巻本」觀經隱顯「夫雜行雜……」で始まる御自釈の文である。中山寺本に無し、浄興寺本は本文、恵空本・真宗寺本に無し、となっている。存如授与本第七冊二二ウには本文に無い。『聖典全』二・一九七によれば、坂東本・専修寺本・西本願寺本ともに無い。浄興寺本のみ本文である。

D表7 「化身土巻本」 中山寺本「行對五正行——薩等」

「種」については、同じく「化身土巻本」觀經隱顯「夫雜行雜……」で始まる御自釈の文である。中山寺本

に無し、浄興寺本は傍書、恵空本・真宗寺本にあり、となつてゐる。存如授与本第七冊二二ウには「行」の字が無い。

このように存如授与本の行格とその他諸本を比較すれば、本文の文字は浄興寺本により近い本文となっているが、異なる箇所も存在している。

また、重見による「行格対照表」に示された範囲（「行巻」・「化身土巻本」のそれぞれ一部）において、その一行字数に着目すると、本願寺系として比較対象された浄興寺本・恵空本・真宗寺本に、十八字以上の行が散見されることから、存如授与本はより厳密に行格を守つて書写されていると位置づけることができよう。重見は、中国唐代以降や奈良朝写経の形式や宋・東禪寺版、鎌倉初期以降の浄土教版に由来が求められるとしているが、<sup>(29)</sup> それに加えて『教行信証』八冊本系で定型となつた一行十七字という体裁を最も厳格に守りつゝ、「教巻」では西本願寺本の改行が影響しているのが、存如授与本の特徴の一つである。

以上のことをまとめれば、存如授与本の八冊本という範疇での位置づけが再認され、西本願寺本を由来とする特徴が含まれていることが指摘できる。ではなぜ、「教巻」のみに改行が多いのか、その理由については判然としない。むしろ「行巻」以降で改行を省略したと思われるのであるが、「教巻」において細かく改行で区切る意図は、第一に御自釈と引用文を区別することが想定される。第二に、引用文の終わりについては「已上」など割註形式の引文指示語によつて容易に見分けられるが、「憬興師云」を改行せずに『平等覚経』の引文指示語に続けて置かれていることから、その引文の開始位置を改行で示す役割を帯びていることまでは推

察できると思う。しかし、体裁上「行巻」以降ではほぼ取り除かれ、次に改行が多く用いられるのは、「化身土巻」の『弁正論』となる。つまり、本来は「教巻」のように改行を施すべきであるが、「行巻」以降は版本に見られる形式をそのまま書写していると考えられる。

ここで注意したいのが、体裁における省略例である。存如授与本の「教巻」改行の意図を汲めば、第一冊に改行を施しているように、後の巻も適宜改行を施すべきであるが、第二冊以降は煩瑣なため重要箇所を除いて引用文前後の一々の改行を省略する形式となっているのではないかという仮説を立ててみたい。坂東本自身に改行は少ないが、各引用文毎の改行が専修寺本ではいくつか見られ、西本願寺本では多くの改行を施している。現在散逸している書写本の影響があつたことは否定できないが、本願寺という場において生成された存如授与本にあつては、坂東本系本文あるいは版本系から受け継がれた体裁を基底としつつ、西本願寺本に見られるような改行を重視してその用例を「教巻」でほぼ再現し終えたことになる。後は省略するという書写方針を採つた、あるいはそうした書写方針を採つた先行諸本に倣つたことで、「教巻」とそれ以降の巻で、大幅に異なる体裁上の特徴を持つ存如授与本が成立したと推定したい。この体裁は、存如授与本の特徴の一つであるが、それが存如授与本の独創か、書写原本の体裁なのかは、本願寺系八冊本の体裁と成立に関する問題なので、今後の課題としておくべきであろう。

### 第三項 存如授与本と異本

さらに、本章で度々取り上げてきた「正信偈」を取り上げて、存如授与本の特徴を挙げてみたい。『浄土真宗聖典全書』には、存如授与本に関する坂東本との校異箇所について、六つ挙げられている。これらについて、坂東本（『真蹟集成』一・一四五～一五二）、西本願寺本（『縮刷本』一九九～二〇七）、専修寺本（『専修寺本』一五六～一六五）、存如授与本の状態と、従来より存如授与本との関係が指摘されてきた江戸期刊本（寛永版「行巻」四五～四九、寛文版「行巻」四五～四八）等との比較の中に、存如授与本の本文その他の生成について、その後の諸本との関係について捉えていきたい。

#### (1) 「譬如日光覆雲霧」〔『聖典全』二・六一⑨〕

「光」について、坂東本において「月」を「光」と上書訂記しているが、存如授与本では「月」を本文としている。西本願寺本・専修寺本は訂記後の「光」であり、坂東本の訂記前の情報を残す古写本としては存如授与本のみである。

#### (2) 「獲信見慶大慶喜」〔『聖典全』二・六一⑩〕

坂東本の訂記の特徴が見られる箇所として度々取り上げられている箇所である。坂東本では、「見敬<sup>テ</sup>得大<sup>テ</sup>慶喜<sup>スレハ</sup>人<sup>ハ</sup>」を抹消し、左傍に「獲信大慶」としながら「大慶」を「見敬」と上書訂記し、最終的に「獲信見慶大慶人」となっている。西本願寺本では「獲<sup>ウレハ</sup>信<sup>ヲ</sup>見敬<sup>テ</sup>大慶喜<sup>スレハ</sup>」、専修寺本「獲<sup>テ</sup>信<sup>ヲ</sup>見敬<sup>テ</sup>大慶喜<sup>セム</sup>」となり、この二本では、訓読は多少異なるが、『尊号真像銘文』に見られるような本文となっている。<sup>(31)</sup> 一方、存如

授与本は本文を「獲<sup>テ</sup>信<sup>ヲ</sup>見<sup>テ</sup>敬<sup>ヒ</sup>大慶<sup>ス</sup>喜<sup>ハ</sup>」としており、「獲」については専修寺本系、「喜」については西本願寺本系の訓みであるが、左傍に「見<sup>テ</sup>敬<sup>ヒ</sup>大慶<sup>ス</sup>喜<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>イ」との註記が見られる。註記については、坂東本の訂記前の状態を保存しているのである。江戸期刊本に目を向けると、寛永版は「獲<sup>テ</sup>信<sup>ヲ</sup>見<sup>テ</sup>敬<sup>ヒ</sup>大慶<sup>ス</sup>喜<sup>ハ</sup>」、寛文版は「獲<sup>レ</sup>信<sup>ヲ</sup>見<sup>テ</sup>敬<sup>ヒ</sup>大慶<sup>ス</sup>喜<sup>ハ</sup>」<sup>(31)</sup>としており、本文としては多少の訓読の異なりが見られるが、寛文版では、前丁（四五ウ）左端に「見<sup>テ</sup>敬<sup>ヒ</sup>大慶<sup>ス</sup>喜<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>イ」とあり、正保版・明暦版も同様である。<sup>(32)</sup>場所は数行誤っているが、存如授与本の註記情報を版本に再現しようという姿勢が見られるのである。

(3) 「常向鸞處菩薩礼」(『聖典全』二・六二⑥)

坂東本と同様の送り仮名「礼<sup>シテマツル</sup>」<sup>(33)</sup>について、存如授与本では左傍に「リイ」と註記がある。

(4) 「證知生死即涅槃」(『聖典全』二・六三⑦)

「涅槃」について、存如授与本では右傍に「菩提」、右下に「イ本」と異本に関する註記があり、寛文版では左傍に「菩提イ」と註記されており、正保版・明暦版も同様である。<sup>(33)</sup>他の漢文本に「菩提」とあるものを現状では確認できていないが、本願寺蔵善如書写延書十七冊本を底本、寛正二年（一四六一）蓮如書写延書十七冊本を対校本としている『浄土真宗聖典 原典版』二五八下段延書において、「菩提」と示されていた。<sup>(34)</sup>

(5) 「報化二土正辯立」(『聖典全』二・六四⑧)

「辯」について、存如授与本・寛永版・寛文版が「辨」を用いている。「辯」と「辨」には若干の意味の違いが含まれているが、古写本・版本いずれも左訓があつて、坂東本等の左訓「ワキマフ」に応じた用字とも考

えられる。

(6) 「唯可信斯高僧説」(『聖典全』二・六四⑨)

「唯可信斯高僧説」では、「説」について存如授与本では左傍に「談イ」と註記があり、寛永版の本文は「記」である。<sup>(35)</sup> いずれも何を元に行っているのか、現時点では分からない。<sup>(36)</sup> なお、本願寺蔵蓮如自筆『正信偈註』では「談イ」と右傍註記(『聖典全』五・五七上)があり、本願寺蔵蓮如自筆『正信偈註釈』にも「談イ」と右傍註記(『聖典全』五・五七下)とある。

このうち、存如授与本の特徴が表れているのが(1)(2)(4)である。これらの箇所からは、次の三点が指摘できる。

- 一、坂東本(訂記前の状態を含む)の本文・異本情報を伝えている。
- 二、延書本(善如書写十七冊本)の情報を二箇所に見つって異本情報として有している。
- 三、寛文版は、存如授与本を以て、既存の刊本から増補修訂している。

これらは実際には諸本間の直接的関係があったと断定するに及ばず、坂東本の情報についても、正応四年版本やそれを書写したとされる三重県中山寺蔵本の存在が知られる現在、存如授与本の特徴のみから推定する暫定的な見通しとなるが、存如授与本が、本願寺に所蔵されていたと思われる西本願寺本の特徴を具備し、さらに他の本願寺に関連する披見し得た古写本の情報を取り込んでいたと考えられる。本願寺の諸要素を吸

収することで、本願寺による「伝授本」が成立していったと考えられるのである。

### 第三節 存如授与本と諸本

本章の最後に、存如授与本に関わる諸本との関係を考察することで、存如授与本の特徴やその後について若干の考察を加え、前節とは異なる視点から見た存如授与本の姿について明らかにしたい。

#### 第一項 関連諸本について

妻木直良は、蓮如が西本願寺本を真蹟本として珍重した例として、存如授与本（存蓮二筆本）には「証巻」『論註』引用部「攝取一切衆生共同生安樂國」の傍らに「土イ 御筆土字尻」の註記があると断言している。<sup>(37)</sup> 存如授与本を対校本に用いた近代以降の諸翻刻には「土」の含まれる本文や記述は示されていないが、<sup>(38)</sup> 一方で、寛永版・正保版の刊本や、<sup>(39)</sup> 龍谷大学図書館蔵の書写本には、「土」として「御筆」の註記がある本も伝えられている。室町期の動きからは、西本願寺本が本願寺における証本『教行信証』としての役割があったといえる。

一方、存如授与本については、その形態に大きく関係のある書写本が存在しているといわれている。一つ

は、慈願寺本で、日下無倫は、

本書の内容及び体裁等については西本願寺所蔵の存蓮両上人筆写本八冊と全く同一形式であるから、従ってその伝写本たることは疑ひを容れない。

とし、現流の室町時代以降の浄得寺本（教行合一帖、室町末期書写）や願泉寺本（八帖、伝実悟筆）もこの伝写本に他ならぬ、と述べている。

## 第二項 本山宝庫本校合本

もう一つは、龍谷大学図書館蔵室町時代末期書写本（誓願寺旧蔵）である。<sup>(42)</sup>

龍谷大学蔵室町末期書写本（誓願寺旧蔵）は、粘葉装の八冊本であるが、その第一冊の表紙には「本山宝庫本校合本」と記されている。行格等は存如授与本の形態と類似しているが、本山宝庫本、つまり西本願寺本と思われる本と校合していると思われる。その本文と異本情報との関わりの中から、『教行信証』の受容の一場面について考察することで、本山による伝授本と、西本願寺本との関係性を問い直してみたい。

当本は、「化身土卷末」尾題直後に、存如授与本と同じように「今此教行證者……」の跋文を有している。存如授与本は天から書写されているが、当本では天から一字下げで書写されている。この跋文の次丁には、「右一部八軸本書以御本寺之御本校合加朱点者也」とある。書写年時・書写者等は記されていないが、「御本寺之御本」が西本願寺本に当たると想定される。

当本の書誌について、『龍谷大学善本目録』には、第一門写本第一類日本の部七〇番として、

教行信証。親鸞。六卷八冊。

〇二二一六五八

室町末期の写本。粘葉装。縦八寸七分、横五寸九分。六行十七字詰。字画の高さ七寸一分。巻末に左記の奥書があるによつて、本山宝庫本の校合本であることを知ることが出来る。

右一部八軸本書以御本寺之御本校合加朱點者也。誓願の墨印を捺す。朱或は墨にて訓點・送假名を附し、まゝ振仮名を施す。寫臺台の藏印あり。

と示されている。<sup>(43)</sup>

それでは、当本の特徴について、書誌事項に則つて分析していきたい。

### (1) 体裁・改行

体裁は存如授与本と同じく半葉六行、一行十七字である。改行も存如授与本に特徴的な「教巻」の状態を保持している。存如授与本が誤脱箇所を補記している場合に文字がずれていくが、「証巻」以降で存如授与本の一行あたりの字に合わせようとして十八字になっている場合もある。存如授与本の訂記・補記等を正しく書写しているといえよう。改行に関しては、「教巻」標挙後に空白を設けることが、存如授与本とは異なっている。

### (2) 標挙

標挙は、題後文前である。「教巻」は総序本文から一行空けて標挙・標列が並べられ、行間も無くそのまま「教巻」題号撰号本文へと続けて書写している。「教巻」末には標列・標挙があり、西本願寺本・存如授与本と一致している。なお、標列に訓点を付しているのが、西本願寺本や存如授与本に見られない特徴である。

### (3) 本文（墨書）

墨書（本文・訓点・声点等）はおおよそ存如授与本と一致している。存如授与本の補記・訂記を本文に反映しており、誤写・訂記は少ない。ただ一箇所のみ、行ごと入れ替え指示がなされている。存如授与本と異なるものとしては、「慧」を「惠」とする場合が多いこと、『大阿弥陀經』の訳者「友謙」を「支謙」とすること、「無」を「无」とすることが挙げられる。また、右訓の「コト」には略字「ㄱ」、「玉フ」を「下フ」、「ナリ」を「也」とする場合が散見される。

朱書部分については、右訓・左訓についてはおそらく西本願寺本であろうと考えられる。訓点については、西本願寺本とも存如授与本とも異なるものもある。

### (4) 註記

存如授与本における異本情報については墨書で書写しているが、その他は朱で記されている。

文に関する異本情報については、おそらく西本願寺本主体だが、専修寺本と思われるものもあって、俄に断定できない。坂東本・西本願寺本の頭註については、存如授与本と同様に本文割註化されているが、「イ无」との註記がある。また、本文内で三つ以上の類似項目を列挙される場合に「三」などと附されているように

ある。さらに、存如授与本の特徴として挙げた「正信偈」異本情報については、存如授与本と同じものを悉く有している。

(5) 題号

「行巻」尾題について、「顯淨土眞實行文類二」とあるが、「實」の下に挿入符号を附して右傍に「教イ」、  
「行」の下に挿入符号を附して右傍に「證イ」と、いずれも朱で異本情報が記されていた。坂東本塗抹前の情報を異本として残している。「行巻」尾題については、中井玄道校訂本・校異によれば存覚元亨本は、「顯淨土眞實教行證文類二」とあり、延書本もそのようである。<sup>(44)</sup>

以上のことから、当本の特徴を纏めれば、まず存如授与本の書写本であることが再認される。これは、重見の指摘したように、存如授与本が本願寺系八冊本の成立を意味することを裏付けられる。また、本山宝庫本としての西本願寺本の情報を付与していると思われ、奥書にあるような「御本寺ノ御本」という認識において、西本願寺本が本願寺聖教として中心的位置づけにあったことがわかる。このように、本願寺聖教としての『教行信証』が確立していく中で西本願寺本が影響力を有したことは、平松説への補強となる。

また、存如授与本に見られるような形式や内容が本願寺系八冊本の「定型」となっていたことは判明したが、存如授与本自体にその役割があったのかについては慎重にならざるを得ない。歴代宗主が書写してきた『教行信証』で現存するものについては、いずれも本願寺から他者に授与されたものであるから、本願寺系八冊本の真本が存在していたのかもしれない。

### 第三項 文明本

本山宝庫校合本に続いて、文明本を取り上げてみたい。文明本については、存如授与本と同時期の成立と考えられるが、「教巻」末に尊蓮書写の奥書を有する希有な書として知られている。こうした当時存在していた特徴的な本を比較することで、本章で取り上げた室町期の三本を、散逸本を含む古写本との関連の中に本願寺周辺の『教行信証』の動向として捉えてみたいのである。

文明本は中井玄道の校訂本にも使用されており、参考本として「本山蔵小本本典」に附された追加校異に引かれたところによって示しているとされる。<sup>(45)</sup> この文明本を『教行信証』諸本研究史の組上に挙げたのは日野環である。<sup>(46)</sup> 日野は、寛元五年（宝治元、一二四七）尊蓮本、年時不明の松影助阿本、元弘三年（正慶二、一三三三）乗専本、興国二・暦応四年（一三四一）暦応本の存在を知らせる奥書を有する大谷大学図書蔵室町中期書写本の識語にある「文明二年九月上旬」等の内容が、加賀松任本誓寺蔵明暦版（智暹校訂本）「教巻」表紙にあることを指摘して文明古写本の存在を想定し、山口県明蔵寺蔵文明二年書写本をその真本として研究した。日野によってその書誌情報のいくつかを挙げれば、調巻は八冊（「信巻」・「化身土巻」分冊）、装丁は粘葉装、行格は一面六行・各行およそ十七字詰めである。本文については、字体は楷書様の墨書・返点・捨て仮名、稀に仮名左訓があるが、四声点はなく、校異は当該字の上に貼紙が附されていて、これが文明本の一つの特徴であるという。その文明本の注意すべき点として、日野は十一点を列挙しているが、本論第四章西本願寺本の書誌で行ったように、書誌事項によって分類すれば、

(1) 装丁

「化身土卷末」の最後の三葉に誤綴じがある。

(2) 題号

「行卷」の尾題に、「顯淨土眞實教行證文類二」とある。

「化身土卷本」の内題下に「本」の貼紙がある。

「化身土卷末」の尾題に、「顯淨土眞實教行證文類六末」とある。

(3) 撰号

「総序」に、「釋愚禿親鸞述」とある。

「別序」に、「釋愚禿親鸞述」の貼紙がある。

「信卷末」の題後文前に、「愚禿親鸞集」の貼紙がある。

「化身土卷本」の尾題の下に、「愚禿親鸞」の貼紙がある。

「化身土卷末」の題下文前に「愚禿釋親鸞集」の貼紙がある。

(4) 標挙・標挙

「総序」の次に、六行の標列がある。

「教卷」の標挙は題後文前にある（「行卷」・「信卷」を除いて標挙の所在は共通）。

「行卷」・「信卷」の標挙は、題下撰号前にある。

(5) 「正信偈」 異文

第三十五句「見敬得大慶喜人」とあるが、「獲信見敬大慶喜」との貼紙がある。

(6) 奥書

「教卷」巻尾に、寛元元年（一二四七）尊蓮書写の奥書を有する。

「化身土卷末」巻尾の跋文に、文明二年（一四七〇）書写の奥書がある。

の六つの書誌事項に分けて理解されよう。

文明本については、龍谷大学貴重資料画像データベース「龍谷蔵」に公開されている画像（請求記号…〇二一六一八八）を参照することができる。ここからはそれに基づいて文明本の検討を進めたい。

まず、日野は右に挙げた要点のうち、奥書に関して詳述し、高田慶長本との文言の比較を以て正応版本との共通性を指摘している。<sup>(47)</sup> 日野の挙げた特徴に加える点があるとすれば、一点目は朱註点の存在であり、「証巻」や「真仏土巻」を除いた次のような箇所<sup>(47)</sup>に記されている。

「.:」 「総序」・「行巻」題号

「・」 「行巻」標挙、大行釈冒頭、『五会法事讚』引文の各偈文

「別序」題号、「信巻本」題号・標挙、「信巻末」題号

「化身土巻本」題号・撰号・標挙細註、「化身土巻末」題号

二点目は、改行である。「教巻」ではほぼ改行は無く、割書についても左右均等に配した上で一行十七字詰めに調整しているようであり、この点で存如授与本とは異なる特徴を持っている。「行巻」以下においても、引用後に改行が施される場合が散見されるが、御自釈においても改行されない場合もあるから、その基準は明白でない。「化身土巻末」になると、改行や朱註点が多くなり、諸本で揃って改行が多く見られる『弁正論』

においては、「内一喩曰」「外四異曰」などの語句を三字下げで示しているのが特徴であろう。

三点目は、偈頌体であり、第二冊「行巻」一四ウ『十住毘婆沙論』『易行品』中や第四冊「信巻末」四一才『涅槃經』の偈文について、三十六句を一行四句の九行で示している。同じ冊に収められる『五会法事讃』や「正信念仏偈」は一行二句であり、一行十七字を基準とする体裁において際立つ字詰である。

四点目は、全体で数カ所しか無い朱書註記において、第八冊「化身土巻末」二六ウにある貼紙註記に対し、「護持善明四字摺无」と朱による異本情報も版本の存在を想起させる特徴的な書き入れがある。

なお、日野は四声点は無いとしているが、管見の限り、「教巻」や「真仏土巻」には朱、「信巻本」・「証巻」・「化身土巻」には墨による四声点が附されているようである。

さて、本研究では、奥書については第一章で既に述べ、標挙・標列は第七章で述べる予定であるから、本節では(2)(3)(5)について、存如授与本・本山宝庫本校合本等との関連を述べてみたいと思う。

## (2) 題号

「化身土巻本」の貼紙「本」については、存如授与本・本山宝庫本校合本（いずれも第七冊「化身土巻本」一才）には本文にある。「本」の無い本を探してみると、坂東本（『真蹟集成』一・四七三）・専修寺本（『専修寺本』五二一）・西本願寺本（『縮刷本』六五九）の古写本であり、中井玄道校訂本（本文四〇七頁校異①）によれば、寛永本・正保本は小さく書かれ、存覚延書本には無いという。<sup>(48)</sup> 坂東本系の文言といえよう。

「行巻」尾題、「顯淨土眞實教行證文類二」については、坂東本の塗抹前の文言を有しており、本山宝庫本

校合本においては、「顯淨土眞實行文類二」とあるが、「實」の下に挿入符号を附して右傍に「教イ」、「行」の下に挿入符号を附して右傍に「證イ」と、いずれも朱で異本情報が記されていた。坂東本系あるいは文明本のような情報が、本山宝庫本校合本に記されていたことになる。

「化身土卷末」尾題、「顯淨土眞實行證文類六末」については、存如授与本・本山宝庫校合本（いずれも第八冊「化身土卷末」五六ウ）と共通している。坂東本（『真蹟集成』一・六七九）と専修寺本（『専修寺本』七三三）は「顯淨土眞實行證文類六」、西本願寺本（『縮刷本』九二五）は「顯淨土方便化身土文類六」である。「末」は八冊本の特徴とも考えられる。中井玄道校訂本（本文五八三頁校異㊸）によれば、寛文版・仏光寺蔵版本に「六」の字が無く「末」の字のみ、専修寺本・坂東本に「末」の字なく、寛永版・正保版は「末」を細書するという。<sup>(49)</sup> その中井の記述には、「一説に、総題なるが故に六の字なく、末は終末の義なりといふ」とあり、その内容的位置づけによって文言の変化が見られるようであるが、西本願寺本のような六冊目の尾題という場合もあるので、「眞實行證」と「方便化身土」の違い、「六」「本」の有無については、内容的側面と分冊の問題も関わって多くの場合が見られると考えられる。なお、図録によって知り得たところを補足すれば、三重県中山寺蔵室町時代書写本も「顯淨土眞實行證文類六末」とあり、本章で取り上げている三本に一致している。<sup>(50)</sup>

題号については、文明本は坂東本系あるいは正応版本系の文言を元としているが、存如授与本・本山宝庫本校合本のような情報も貼紙として有していると考えられる。

## (3) 撰号

「総序」の「釋愚禿親鸞述」については、佐々木瑞雲によれば、『六要鈔』所積本及び大樂寺本・文明本・高田系八冊本・佛光寺本に見られ、坂東本・専修寺本・西本願寺本・存如授与本には見られない。<sup>(51)</sup> 存如授与本と同じ特徴を持つ本山宝庫本校合本も後者に加えられる。

「別序」の貼紙「釋愚禿親鸞述」については、佐々木瑞雲によれば、『六要鈔』所積本及び高田系八冊本・本願寺系八冊本・佛光寺本の本文にあり、坂東本・西本願寺本・常樂寺本は「釋愚禿親鸞集」、大樂寺本や専修寺本には見られない。<sup>(52)</sup> 中井玄道校訂本（本文一二九頁校異㊸）によれば、高田蔵版本・存覚元亨本（常樂寺本）にその文言は無く、坂東本・西本願寺本は題号の直下にあるが、「述」ではなく「集」とあり、存如授与本は題号の次行に「述」ではなく「集」であることが示されているから、<sup>(53)</sup> その他の諸本に「釋愚禿親鸞述」とあるというところで、これが文明本の貼紙と一致する。文明本本文としては、専修寺本や存覚元亨本（常樂寺本）に近いということになるが、『六要鈔』所積本及び高田系八冊本・本願寺系八冊本・佛光寺本のような異本情報がある。

「信卷末」の題後文前にある貼紙「愚禿親鸞集」については、中井玄道校訂本（本文一九九頁校異㊸）によれば、高田蔵版本・坂東本・西本願寺本・存覚元亨本・存覚延書本は本末に分かれていないため、撰号を有していないという。<sup>(54)</sup> 撰号が無い点はこれらに準じ、貼紙内容についてはそれ以外の諸本に従ったものであろう。その諸本の一つが、存如授与本であり、本山宝庫本校合本（いずれも第四冊「信卷末」一才）である。

「化身土巻本」尾題の下の貼紙「愚禿親鸞」については、存如授与本や本山宝庫本校合本（いずれも第七冊「化身土巻本」五九ウ）にその文言がある。中井玄道校訂本（本文五〇〇頁校異③）によれば、寛永版・正保版に「愚禿釋親鸞集」、明暦版・存如授与本に「愚禿親鸞」とあるという。<sup>(55)</sup> 存如授与本の文言を貼紙として有しているといえよう。

「化身土巻末」題下文前の貼紙「愚禿釋親鸞集」については、存如授与本や本山宝庫本校合本（いずれも第八冊「化身土巻末」一オ）にその文言がある。中井玄道校訂本（本文五〇一頁校異③）によれば、分冊しない高田蔵版本・西本願寺本や存覚元亨本には無く、坂東本には「化身土巻末」一行目に「愚禿釋親鸞集」とある。<sup>(56)</sup>

これらによれば、坂東本あるいは正応版本系と思われる文言に近いのが文明本の題号であるが、やや相異もある。そして貼紙として存如授与本や本山宝庫本校合本の文言を有しているのが特徴である。

#### (5) 「正信偈」異文

日野による指摘により、第三十五句の本文「見敬得大慶喜人」に対して、「獲信見敬大慶喜」との貼紙があることが知られる。さて、存如授与本の異本として挙げた六箇所について、文明本（第二冊「行巻」六六オ〜七一オ）の状態を比較してみたい。

#### ①第三十二句 存如授与本「譬如日月覆雲霧」

文明本 「譬如日光覆雲霧」

②第三十五句 存如授与本 「獲<sup>テ</sup>信<sup>ヲ</sup>見<sup>テ</sup>敬<sup>ヒ</sup>大慶<sup>スレハ</sup>喜<sup>ハ</sup>」、左傍註記「見<sup>テ</sup>敬<sup>ヒ</sup>大慶<sup>スレハ</sup>喜<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>イ」

文明本 「見<sup>テ</sup>敬<sup>ヒ</sup>大慶<sup>スレハ</sup>喜<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>」、本文の上に貼紙註記「獲<sup>テ</sup>信<sup>ヲ</sup>見<sup>テ</sup>敬<sup>ヒ</sup>大慶<sup>スレハ</sup>喜<sup>ハ</sup>」

③第七十四句 存如授与本 「常<sup>ニ</sup>向<sup>テ</sup>鸞<sup>ノ</sup>處<sup>ニ</sup>菩薩<sup>ト</sup>礼<sup>シタテマツル</sup>」、<sup>シテ</sup>「礼」に左傍註記「リイ」

文明本 「常<sup>ニ</sup>向<sup>テ</sup>鸞<sup>ノ</sup>處<sup>ニ</sup>菩薩<sup>ト</sup>礼<sup>シ上ル</sup>」

④第八十二句 存如授与本 「證<sup>ニ</sup>知<sup>シ</sup>生死<sup>即</sup>涅槃<sup>」</sup>」、<sup>ニ</sup>「涅槃」の右傍に「菩提」、左傍に「イ本」と註記

文明本 「證<sup>ニ</sup>知<sup>シ</sup>生死<sup>即</sup>涅槃<sup>」</sup>、註記無し

⑤第四百句 存如授与本 「報<sup>ニ</sup>化<sup>ニ</sup>二土<sup>正</sup>辨<sup>立</sup>」

文明本 「報<sup>ニ</sup>化<sup>ニ</sup>二土<sup>正</sup>辨<sup>立</sup>」

⑥第二百十句 存如授与本 「唯<sup>ニ</sup>可<sup>シ</sup>信<sup>ス</sup>斯<sup>高</sup>僧<sup>説</sup>」、<sup>ニ</sup>「説」の左傍に「談イ」と註記

文明本 「唯<sup>ニ</sup>可<sup>シ</sup>信<sup>ス</sup>斯<sup>高</sup>僧<sup>説</sup>」、註記無し

存如授与本にも坂東本の状態を残すものもあつたが、本文としては文明本の方がやや坂東本に近いこと、存如授与本の註記にあたる情報は有していないことが挙げられる。日野の指摘した第三十五句については、存如授与本の本文が文明本の貼紙、文明本の本文が存如授与本の異本情報の文言と一致している。両本の直接の交渉があつたかは不明であるが、坂東本から尊蓮本（文明本奥書による）、西本願寺本（重見の論証による）、正応版本（中山寺本奥書による）と、十三世紀に分岐した三つの系統が、文明本と存如授与本の両本の

本文・註記に現れているのではないかと考えられる。

つまり、坂東本からそれぞれ数本を経て成立したのが存如授与本であり、文明本であった。それぞれ祖型を探れば、系統分類がなされるであろうが、同時代に存在した両本間にも関係性があり、文明本の貼紙に現れていた。

## 小結

本章では、中世本願寺の寺院形成における『教行信証』の役割について、テキストの諸展開から概観するとともに、存如授与本の書誌に着目することで、その特徴と影響関係について考察した。まず、『教行信証』の諸展開については、文字テキスト・画像テキストが、聖典としての写伝・延書・引用、儀礼としての「正信偈」別行、伝記としての「後序」への引用、尊像としての「正信偈」銘文という動態として位置づけられ、それぞれが本願寺の寺院としての形成と展開に役割を果たしてきたが、『教行信証』の写伝は、それらの動態の基幹となるものと考えられる。

そうした中で、本願寺系『教行信証』における共通形態の先駆けとなる存如授与本は、すでに正応四年版本という出版本としての形態が整っていたとも考えられる時代にあつて、その跋文の内容を略出したと考え

られる文を第八冊の巻尾に有しており、巧如所伝本から「伝授本」としての連続性も見られるとされていた。存如授与本の特徴が際立つのが、一行十七字という形式を必ず守る書写法である。本文に改行が多く見られる「教巻」においては、西本願寺本における標挙・標列、改行の特徴などを残しているが、『述文贊』の経文列挙箇所で一見字数が少なく見える場合でも割註右行を本文字数と数えて一行字数を守る書写法を採っており、江戸期の刊本である寛永版と比較しても、より厳格である。これこそが、「伝授本」としての完成形とみることができよう。さらに、「正信偈」部分からは、坂東本訂記前の情報のみならず善如による延書本の情報も記入するなど、坂東本を由来とする内容の他に、本願寺系諸本の内容を伝えていることも特徴としていえることがわかる。

版本系の体裁の中に、写伝・延書・出版等の諸展開を見せる『教行信証』の内容を包含して書写されたのが、存如授与本の特徴であり、本願寺における『教行信証』テキストの基準として、江戸期、寛文版における増補改訂に影響していったと考えられる。流布本としての版本に、諸書写本の情報を加えていくことの意義は、単なる書写本という位置づけに留まるべきではないだろう。

さらに文明本との関係性からは、同じ坂東本から派生していったテキストが、ある時代に諸本として並置されたときに、別系統と考えられる関係にあったとしても、註記・註釈的な内容として、テキスト内に組み込まれることで、系統分類を越えた新たな関係性を作り出したことに注意すべきである。祖本系統を探るのみでは明らかにし得ない同時代テキストの交渉が、ここに見られるのである。

## 註

〔付記〕 存如授与本は現在、本派本願寺に所蔵されている。本論の執筆に際しては、本派本願寺に閲覧・翻刻等の資料使用に関するご許可をいただいた。また、その閲覧にあたっては、浄土真宗本願寺派総合研究所にご高配いただいた。ここに甚深の謝意を表したい。

(1) 鷲尾教導 『教行信証』 伝授史考』 (『六条学報』 一一七、一九一)。

(2) 宮崎圓遵 「真宗における聖教の伝授」 (『龍谷大学論集』 四〇〇・四〇一、一九七三)。

(3) 『嘆徳文』 真宗法彙本奥書による。『真聖全』 三・六六四参照。

(4) 『西方指南抄』 上卷末 「法然上人御説法事」のうち 「浄土五祖」 (『真聖全』 四・一〇五)、 『黒谷上人語灯録』 (漢語灯録) 卷九 「類聚浄土五祖伝」 (『真聖全』 四・四七七)、 『拾遺古徳伝絵詞』 卷四本 「浄土五祖」 (『聖典全』 四・一五〇) などにある。

(5) 庄司暁憲 『相伝義書』 相伝家の聖教目録について (『同朋学園佛教文化研究所紀要』 一〇、一九八九) は、近世における相伝家による聖教目録の作成から完成、その目的等を検討した論考であるが、ここでは中世段階での聖教目録についても検討されている。そこで挙げられているのは、法然 『選択集』 卷上の記述、蓮位 『浄土真宗龜鑑』、存覚 『浄典目録』 (真宗寺本・慈観書写本)、明了 『仮名聖教』 二四部、顕恵 『仮名聖教』 数部、実悟 『聖教目録聞書』 であり、付録写真として城端

別院善徳寺所蔵実悟『聖教目録聞書』などが掲載されており、非常に有用である。同じく庄司暁憲「『相伝義書』相伝家の聖教目録について 補稿—真玄の聖教目録完成に至る経緯—」（『同朋学園佛教文化研究所紀要』一一、一九八九）には、存覚『浄典目録』と江戸期の諸聖教目録が翻刻され、原典研究資料（写真）として、龍谷大学図書館蔵存覚『浄典目録』、堺真宗寺蔵網厳筆『浄典目録』が掲載されている。

(6) 安藤弥「〔史料紹介〕 慈願寺蔵『聖教目録』」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』三一、二〇一三）及び「〔史料対校〕 実悟編『聖教目録聞書』・慈願寺蔵『聖教目録』前半部分」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』三三、二〇一四）では、慈願寺蔵『聖教目録』を紹介し、実悟『聖教目録聞書』と一致すると思われるその前半部分と真宗大谷派城端別院善徳寺蔵『聖教目録聞書』とを対校した内容が示されている。

(7) 安藤弥「〔史料対校〕 実悟編『聖教目録聞書』・慈願寺蔵『聖教目録』前半部分」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』三三、二〇一四）。

(8) 西本願寺の項には、鏡御影、安城御影、安城御影調度記、六字名号、消息（わう御前宛・今御前宛・常陸人々宛）、東本願寺の項には消息（性信宛）、親鸞伝絵、一念多念文意、聖徳太子奉讃が掲載されている。

(9) 『宮崎圓遵著作集6 真宗書誌学の研究』（思文閣出版、一九八八）所収、「親鸞聖人書誌」の第二章撰述に『教行信証』について述べられている。

(10) その他、大谷大学蔵（端坊旧蔵）延文五年（一三六〇）書写本（「化卷末」のみ）、大谷大学蔵（山田文昭氏旧蔵）文安六年（一四四九）源通書写（「証卷」のみ）、堺真宗寺蔵室町中期書写本（総序残欠）、岐阜県仏心寺蔵室町中期書写本（「行卷」のみ）がある。また、室町末期のものとして、本願寺、龍谷大学、大谷大学、大和本善寺、河内頭証寺、同慈願寺、同光徳寺（二部）、摂津名塩教行寺、播磨本徳寺、和泉願泉寺、和歌山真光寺、越前超勝寺（本派）、越中勝興寺、新潟真宗寺等の

- 蔵本がある。いずれも八冊本、半葉六行十七字詰の粘葉装で、多くは蓮如写本の系統を承けているようである。
- (11) 宮崎圓遵「室町時代に於ける『正信偈』の註釈」(『宗学院論輯』一二一、一九三五)。
- (12) 『図録 蓮如上人余芳』(本願寺出版社、一九九八) 一三二・一三三頁によれば、愛知県碧南市願隨寺「正信偈文」には「本願名號正定業 至心信樂願爲因 成等覺證大涅槃 必至滅度願成就」「如來所以興出世 唯說彌陀本願海 五濁惡時群生海 應信如來如實言」の二紙、和歌山県海南市了願寺蔵「正信偈文」は「能發一念起愛心 不斷煩惱得涅槃 凡聖逆誘齊回入 如衆水入海一味」「憶念彌陀佛本願 自然即時入必定 唯能常稱如來號 應報大悲弘誓恩」の二紙が伝えられている。
- (13) 阿部泰郎『中世日本の宗教テクスト体系』(名古屋大学出版会、二〇一三) 三八頁。
- (14) 『増補改訂本願寺史』一・二八三頁。
- (15) 大谷廟堂の成立について、親鸞伝絵諸本の描写から、廟堂の中心物には変遷があると思われるが、ここでは概念化を試みているため、その内容は論じない。
- (16) 平松令三「蓮如上人の聖教書写と本願寺伝統聖教」(『龍谷教学』三二、一九九七)、「蓮如の聖教書写と本願寺の伝統聖教」(『講座蓮如』二所収、平凡社、一九九七)。
- (17) 『図録 蓮如上人余芳』(本願寺出版社、一九九八) 四八頁参照。
- (18) 奈良県個人蔵文安六年蓮如書写本『安心決定鈔』末の奥書による。『聖典全』五・一一三六には同本奥書として「右斯聖教者賀州木越光徳寺之／性乘在京之際依所望令漸筆／處也／文安六歲六月三日／終寫功訖／釋蓮如(花押)」と示される。
- (19) 重見一行『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察』(法藏館、一九八二) 八六〜八八頁。
- (20) 室町末期までの『教行信証』諸本とは、本章註10の諸本を指す。
- (21) 重見一行前掲書八八頁。

- (22) 中井玄道『教行信証附録』（仏教大学出版部、一九二〇）二二頁。
- (23) 禿氏祐祥『教行信証考証』三一頁。
- (24) 宮崎圓遵著作集第6巻『真宗書誌学の研究』（永田文昌堂、一九八八）五三頁。
- (25) 藤島達朗「教行信証の書誌」（親鸞聖人真蹟） 国宝 顕浄土真実教行証文類影印本』所収、真宗大谷派宗務所、一九五六）四八頁。
- (26) 金龍静「蓮如上人と『教行信証』」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』二八、二四〇）。同稿は、平成二十年（二〇〇八）十一月に開催された同朋大学仏教文化研究所設立三〇周年記念シンポジウム「親鸞聖人と教行信証—教学と史学の対話」のうち、金龍静の発表分。本派本願寺蔵（石川見七尾市光徳寺旧蔵）の宝徳二・三年書写本を蓮如唯一の『教行信証』書写本とし、その特徴を挙げてゐる。
- (27) 重見一行前掲書九〇頁。
- (28) 重見一行前掲書九六〜九七頁。
- (29) 重見一行前掲書九二頁。
- (30) 直接通ずるものではないが、第五章において検討した西本願寺本の「真仏土巻」『讚阿弥陀仏偈』において、前文を偈頌体にするのではなく、前二行の偈頌体を残して残りの偈文を偈頌体とせず散文としていた例が、体裁上の省略例と考えられる。
- (31) 『聖典全』二・六四九上、六五二下。
- (32) 中井玄道校訂本『顕浄土真実教行証文類』（仏教大学出版部、一九二〇）一一二頁校異①、『教行信証附録』九五頁。
- (33) 中井玄道校訂本一二六頁校異①、『教行信証附録』九六頁。
- (34) 中井玄道『教行信証附録』九六頁上では、「延本菩提に作る」とある。
- (35) 中井玄道校訂本一二八頁校異①、『教行信証附録』九六頁下によれば、寛永版（前）・正保版は「記」とするも形誤とし、正

保版と明暦版に「談イ」の校異があるという。

(36) 金龍静前掲論文には次のように指摘されている。

宝徳本行巻の正信偈の最末尾に、「唯可信師高僧説「談イ」と記されています。坂東本の当該部分は説とも読め、談とも読める漢字なので、書写する際に、一本が談と記した可能性が考えられます。「談イ」の傍注を付しているものが、伝善如本・無年期九帖本・豊前市法光寺蔵蓮如上人筆正信偈註で、その他にも無年期の京都市金宝寺本・八尾市慈願寺本・大阪市浄照坊本・柏原市光徳寺本にも見られます。その一方、説のみで傍記のないものとして、高田専修寺本・文永十二年本・正応開版本・仏光寺本・大分市専想寺本などがあります。説と談に関しては、宝徳本は文永本を継承せず、正応開版本すらも継承していないという事になります。その意味・背景はわかりません。

(37) 妻木直良「本願寺所蔵の真本『教行信証』に就て」(『法爾』一八、一九一九)。なお、題簽に「真筆本校合」との書き入れのある龍谷大学図書館蔵『教行信証』(請求記号:〇二四七二/二四三W)には「國」の下に符号があり、右傍に「土イ御筆ニコノ字无」の書き入れがある。

(38) 『真聖全』二・一一三頁、本願寺蔵版『教行信証』(一九六七初版)三〇五頁、『原典版』四一一頁、『聖典全』二・一四五頁。

(39) 中井玄道『教行信証附録』一五七頁下段では「國の下、永・保二本、土の字あり。」としている。寛永版には「攝<sup>シテ</sup>取<sup>リ</sup>一切衆<sup>ヲ</sup>生<sup>ニ</sup>共<sup>ニ</sup>同<sup>シ</sup>生<sup>ニ</sup>彼安樂佛國土<sup>ニ</sup>」とある。正保本には「土」の右傍に「御筆ニ土ノ字无」とある。佐々木求巳『真宗典籍刊行史稿』(伝久寺、一九七三)九一頁によれば、寛永本は尊蓮系の本を底本とし、形の上では存蓮<sup>ニ</sup>筆本に似ているとされる。その補刻版が正保本である。

(40) 龍谷大学図書館HP貴重書データベース「龍谷蔵」に公開されている龍谷大学図書館蔵『教行信証』室町時代末期書写本山

宝庫本校合本（請求記号：〇二一―一六五―八）第五冊「証卷」二一才には「攝<sub>シテ</sub>取<sub>テ</sub>一切衆<sub>ヲ</sub>生<sub>ニ</sub>共<sub>ニ</sub>同<sub>シク</sub>生<sub>ニ</sub>彼安樂佛國土<sub>ニ</sub>」  
とある。同じく公開されている龍谷大学図書館蔵『教行信証』江戸時代初期書写知空本（請求記号：〇二一―一六五―八）、  
第五冊「証卷」二一才には「攝<sub>シテ</sub>取<sub>テ</sub>一切衆<sub>ヲ</sub>生<sub>ニ</sub>共<sub>ニ</sub>同<sub>シク</sub>生<sub>ニ</sub>彼安樂國<sub>ニ</sub>」<sup>ユ</sup>とあり、「国」の下に挿入符号があつて「土」と右傍補  
記されている。

- (41) 日下無倫「教行信証古写本の種類及びその最古の註疏」（『仏教研究』四一三・四「親鸞聖人著述研究号」、一九二二）。
- (42) 龍谷大学図書館HP貴重書データベース「龍谷蔵」にて公開されている。請求記号：〇二一―一六五―八。
- (43) 『龍谷大学善本目録』（龍谷大学出版、一九三六）三五頁。
- (44) 中井玄道校訂本一二八頁校異③、『教行信証附録』九六頁。
- (45) 中井玄道『教行信証附録』四九頁「校正標異」の凡例参照。
- (46) 日野環「『教行信証』（親鸞撰述）の「文明古写本」について」（『印仏研』一四二、一九六六）。
- (47) 文明本の奥書の文言は、冒頭は本願寺系八冊本にほぼ一致するが、本願寺系八冊本の記述が終わったところからは、続いて  
高田慶長本や中山寺本の文言を抄出したような内容を、いずれも誤字や脱字を含みながら書写しているようであり、最後に  
「文明二年」の文言を加えている。
- (48) 中井玄道『教行信証附録』一七七頁参照。
- (49) 中井玄道『教行信証附録』二三〇頁参照。
- (50) 三重県総合博物館開館記念企画展第6弾の展覧図録『親鸞 高田本山専修寺の至宝』（三重県総合博物館、二〇二五）一一  
六頁、展示番号八十三。
- (51) 佐々木瑞雲「新出 佛光寺蔵『教行信証』の意義―『六要鈔』所積本の行方―」（『真宗研究』五〇、二〇〇六）。

- (52) 佐々木瑞雲前掲論文。
- (53) 中井玄道『教行信証附録』九七頁上。
- (54) 中井玄道『教行信証附録』一一七頁下。
- (55) 中井玄道『教行信証附録』二〇三頁上。
- (56) 中井玄道『教行信証附録』二〇三頁下。

## 第七章

標拳・標列の変遷―鎌倉三本からの展開―

## 第七章 標挙・標列の変遷―鎌倉三本からの展開―

『教行信証』の標挙は、各巻冒頭の経名や願名に細註が付されたものを指し、標列とは「総序」と「教卷」の間に位置する第一巻から第六巻の主題を列举したものととして知られている。現状の坂東本では「教卷」は欠損部分が多く、標挙や標列は現存していない。また、坂東本第五冊「化身土卷」の標挙は異筆と考えられ、西本願寺本では失われている。さらに、その後の成立と考えられる『教行信証』諸本においては、標挙の有無あるいは記入された位置によって様々な形態として流布している。つまり、標挙自体の位置付けに変化があると考えられ、『教行信証』諸本の生成を考える上で、大きな課題といえよう。これは、前章までに検討してきた古写本から何らかの展開があったことを示唆するもので、現存諸本からすれば、鎌倉三本の形態を崩す動きが、西本願寺本以降に見られることを意味している。

そこで本論の終わりとして、鎌倉三本とその後の諸本について、諸翻刻を含めた比較を行い、標挙・標列とその理解の変遷を考察する。標挙と本文構造の関係を踏まえることで、『教行信証』の構成がどのような成り立ち、どのように変化したのかについて明らかにし、それを元に諸本の関係性を窺ってみたい。

## 第一節 標挙・標列とその例

『教行信証』の標挙・標列について考察する場合、それらが何を指すのかを定義付けてあるべきだが、外にもその語義を定めたものは少ない。「標列」・「標挙」という言葉は、『日本国語大辞典』第二版（小学館、二〇〇六）や『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、一九九九）など、現代の辞書類には掲載されていないようである。<sup>①</sup>そこで、仏典等での実例を挙げながら、その定義付けをしていきたい。

### 第一項 標挙・標列の実例

大正新脩大藏経テキストデータベース (SAT) では、「標挙」は五九〇例、「標列」は二九九例ある。「標挙」は、經典でいえば不空訳『大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王経』のみであり、法蔵『華嚴経探玄記』、慧遠『無量寿経義疏』・『観無量寿経義疏』・『大般涅槃経義記』など、經典を解釈するために主に論書や釈書で使われる用語である。

たとえば、世親造・玄奘訳『撰大乘論积』巻第四には、

總攝一切分別略有十種者。是總標舉。後當別釋。

〔『大正藏』三一・三四二上〕

とある。また、淨影寺慧遠『大乘義章』巻第一には、

三略修多羅。十二部中。初略標舉一切。通名爲修多羅。後廣解釋。說爲十二。

〔『大正藏』四四・四六七上〕

とある。本文に至って詳しく解釈する前に、総標・略標して挙げる、列するといった意で用いられている。

『教行信証』を註釈する中では、各卷冒頭に掲げられる名目を指す用語として使用されるようになる。『教行信証』の成立に近いところでいえば、覚如あるいは存覚撰述説が有力な『教行信証大意』には、

その教・行・信・證・眞佛土・化身土といふは、第一卷には眞實の教をあらはし、第二卷には眞實の行をあらはし、第三卷には眞實の信をあらはし、第四卷には眞實の證をあかし、第五卷には眞佛土をあかし、第六卷には化身土をあかされたり。

〔『聖典全』四・三五八〕

とあり、一部六卷それぞれの主題として、標列の文言を用いている。

さらに、存覚が『六要鈔』で用いた「標列」「標拳」という名目が、『教行信証』各卷に掲げられるそれを指すようになった。『六要鈔』第一では、『教行信証』全文の構成として、

第二正解<sup>ニクセバ</sup>レ文、准<sup>シテ</sup>依<sup>レ</sup>經<sup>ノ</sup>論<sup>ヲ</sup>釋<sup>ス</sup>義<sup>ヲ</sup>常<sup>ニ</sup>例<sup>ト</sup>、分<sup>テ</sup>レ文<sup>ヲ</sup>爲<sup>レ</sup>三<sup>ト</sup>。一序<sup>ニハ</sup>、序分。二自<sup>ニハ</sup>標列<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>至<sup>マデハ</sup>第六<sup>ノ</sup>末<sup>ニ</sup>引<sup>ク</sup>論<sup>ヲ</sup>語<sup>ヲ</sup>文<sup>ヲ</sup>、是正宗分。三自<sup>ニハ</sup>竊<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>二下<sup>ヲ</sup>、終<sup>マデハ</sup>至<sup>スニ</sup>盡<sup>ク</sup>レ卷<sup>ヲ</sup>流<sup>ト</sup>通<sup>ス</sup>分<sup>也</sup>也。

〔『聖典全』四・九九九〕

と示し、総序の註釈を終えた後、「教巻」の構成について、

第二於正宗中、分卷爲六。教・行・信・證・眞・化佛土、從一至六如次明之。

〔聖典全〕四・一〇〇七

と『教行信証』六卷の構成を述べた上で、

當卷大文第一明教。於中爲五。一者標列、次第如文。二者題目。三者標舉、題後一行。四者正釋、自文初下至引興釋。五者總結、爾者以下是其文也。

〔聖典全〕四・一〇〇七

と記している。(標列↓題号↓標挙)の順で示されたものが、『六要鈔』の「標挙」・「標列」理解である。

また、

初就標列。問。題目所標、在教・行・證。三外更加信眞佛土及化身土。於首題中難攝此等。然者於題有未盡過、如何。答。教行證三常途教相、信眞化土今師所加。任常教相雖標其二、依爲最要、今加後三。但至云題難攝餘者、行中攝信、證中廣攝眞・化佛土。所以然者、行所行法、信是能信。

〔聖典全〕四・一〇〇七

などとあるように、題号が「教行證」であるのに標列に六つの名目が並んでいることについて問答を設けている。『教行信証』は題号が三法門、内容が四法門とされるが、その根本は標列に六つ並び、調巻が六巻で

あることである。存覚の理解によると、それを約めることで初めて四法門の問題となるのである。

標挙については、

次<sup>ニ</sup>就<sup>テ</sup>標<sup>ニ</sup>舉<sup>ニ</sup>、問。上<sup>ノ</sup>標<sup>列</sup>中<sup>ニ</sup>載<sup>スル</sup>眞<sup>實</sup>教<sup>ト</sup>、其<sup>ノ</sup>義<sup>可</sup>レ足<sup>ス</sup>。今<sup>ニ</sup>重<sup>テ</sup>舉<sup>ル</sup>之<sup>ル</sup>、豈<sup>非</sup>ニ<sup>ス</sup>繁<sup>ニ</sup>重<sup>ニ</sup>。答。上<sup>ノ</sup>標<sup>列</sup>者、廣<sup>ク</sup>通<sup>ニ</sup>一<sup>部</sup>。今<sup>ノ</sup>標<sup>舉</sup>者、限<sup>テ</sup>在<sup>リ</sup>當<sup>ニ</sup>卷<sup>ニ</sup>。況<sup>ヤ</sup>標<sup>列</sup>中<sup>ニ</sup>雖<sup>レ</sup>有<sup>リ</sup>眞<sup>實</sup>教<sup>之</sup>名<sup>目</sup>、未<sup>ダ</sup>顯<sup>サ</sup>教<sup>體</sup>。今<sup>ニ</sup>舉<sup>ニ</sup>經<sup>名</sup>、明<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>教<sup>體</sup>。有<sup>リ</sup>總<sup>ニ</sup>別<sup>ノ</sup>異<sup>ニ</sup>、更<sup>ニ</sup>非<sup>ニ</sup>繁<sup>ニ</sup>重<sup>ニ</sup>。經<sup>名</sup>等<sup>ノ</sup>事、至<sup>テ</sup>下<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>詳<sup>ス</sup>。

（『聖典全』四・一〇〇九）

と述べている。標列は六巻に通ずるものであり、その中に「眞實教」の名目があることを述べている。しかし、それを教の本質として示したものは見なせず、その役割を担って經名を掲げたのが標挙であるとしている。「大无量壽經<sup>眞實之教</sup>淨土眞宗」という文字列は、あくまでも「教卷」の標挙であると理解し、『六要鈔』の所積本あるいは註釈では、標挙は題号後・本文前に位置させている。

## 第二項 標挙・標列の前列

親鸞は『教行信証』の執筆に当たり、多くの經典・論書・釈書等を引用して各巻を構成している。標挙・標列に似たものは、七祖撰述や親鸞による引文あるいは所覽本等の中にもある。それは、曇鸞『讚阿弥陀仏偈』善導「玄義分」・『觀念法門』、法然『選択本願念仏集』である。

まず、曇鸞の『讚阿弥陀仏偈』には、題号・撰号と本文の間に、

南無阿彌陀佛

釋名無量壽傍經  
奉讚亦曰安養

〔聖典全〕一・五三五

という標体があるが、当初の形態ははっきりせず、細註については後に挿入された可能性も指摘されている。<sup>(2)</sup>  
「真仏土卷」引用の冒頭は次のようである。

讚阿彌陀佛偈曰

曇鸞和尚造

南无阿彌陀佛

釋名無量壽傍經  
奉贊亦曰安養

〔聖典全〕二・一七三

ただ坂東本では冒頭より二十五字は散逸しており、この二行は西本願寺本・専修寺本に伝わる文言により復元されていることは、第三章で述べた。「信卷」においてもこれと類似した引用法である。

また、『浄土和讚』国宝本冒頭には、『讚阿彌陀佛偈』に示される弥陀三十七名が列挙されているが、その前に題号・撰号と標体を並べる中に、

讚阿彌陀佛偈曰

曇鸞和尚造

南无阿彌陀佛

釋名無量壽傍經  
奉贊亦曰安養

〔聖典全〕二・三三三中段

とある。『浄土和讚』の本文の多くは真仏筆とされるが、『讚阿彌陀佛偈』弥陀徳号部分の振り仮名は親鸞の書き入れと考えられているので、<sup>(3)</sup>これが親鸞が認めた引用形式ということであろう。『浄土和讚』において

は、題号・撰号に続いて標体（名号と細註）を置き、さらに「成佛已來歷十劫」等二行四句の偈頌を置いた後に、弥陀徳号三十七名を並べる構造をとる。そこで、この標体は『讚阿弥陀仏偈』の書物としての内容を総括して示すものであると考えられる。

『讚阿弥陀仏偈』と同様、冒頭に「南無阿弥陀仏」の六字を掲げるのが、法然『選択本願念仏集』である。<sup>(4)</sup> 『選択本願念仏集』では、題号と本文の間に、

南無阿彌陀佛

往生之業  
念佛爲先

〔聖典全〕一・一二五三

とある。これは標宗の文と呼ばれ、京都府廬山寺藏鎌倉時代書写本においては、題号を含めた冒頭二十一字の書き入れが法然自筆と考えられている。<sup>(5)</sup> 親鸞は「行巻」大行釈に、

選擇本願念佛集

源空  
集

云 南無阿彌陀佛

往生之業  
念佛爲先

〔聖典全〕二・四八

と書写し、「後序」での引用や、『尊号真像銘文』正嘉本の「比叡山延曆寺寶幢院黒谷源空聖人眞像」では、  
選擇本願念佛集云南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本文  
〔聖典全〕二・六四〇

といったように、割註形式を用いずに書写している。

次に、善導五部九巻のうち、「玄義分」では、題号・撰号の後、歸三宝偈の前に、

先勸大衆發願歸三寶

〔聖典全〕一・六五五

とあり、帰三宝偈に続いて『観経』を註釈する意趣を述べている。この九字は、『観経疏』全体というより、帰三宝偈に関しての文言であろう。

また、『観念法門』の冒頭には、

依観經明觀佛三昧法一

依般舟經明念佛三昧法二

依經明入道場念佛三昧法三

依經明道場内懺悔發願之法四

〔聖典全〕一・八七一

とある。この四行は、『観念法門』全体の構成を示したもので、現在の書物の形態でいう目録にあたる。専修寺には親鸞が外題を記したとされる「善導五部九卷」の鎌倉時代版本があり、これらも親鸞の目にした形式と推定できる。<sup>6)</sup>

『讚阿弥陀仏偈』や『選択本願念仏集』のような名号と細註の形式は『教行信証』でいう各巻冒頭の標挙にあたり、「玄義分」の冒頭一行もこれに類するものである。『讚阿弥陀仏偈』と「玄義分」のものが偈文の冒頭にあることからすれば、『選択集』の標体が『教行信証』のそれに近いといえるだろう。そして、『観念

法門』に見られるような章題の列挙は、「教卷」前の標列に類似している。

親鸞の引用と標挙・標列の形式は引用原典を基にしたものと考えることができ、これらは書物としての巻頭のうち題号後・本文前に置かれたものであるから、『教行信証』各巻における標挙が題号・撰号前に置かれているのとは些か位置が異なる。そこで、『教行信証』古写本、すなわち親鸞の書写した形態が残されている本の標挙の形態を特定することが、『教行信証』の標挙を考える上で出発点となる。

### 第三項 『教行信証』の標挙・標列

『教行信証』古写本の各巻の標挙類は、記入位置が題号の前にあるという配置を考えると、『教行信証』各巻の標挙類がいかに『教行信証』に組み入れられたのか、どうして表紙裏の題前なのかを知ること、『教行信証』古写本に特徴的な標挙・標列の意義が見いだせると考えられる。

まず、『教行信証』の標挙・標列はいかに生成されたのか、親鸞自筆本である坂東本の執筆時期について把握しておきたい。まずは親鸞自筆本である坂東本各巻冒頭の執筆時期について、書誌事項に基づく諸要素に分類した上で、鳥越正道の筆跡分類次第資料に照らしあわせて確認しておこう。<sup>7)</sup>

外題や標挙は、いずれも後期筆跡時に書き加えられている場合が多い。注目すべきは「証卷」や「真仏土卷」であり、のちに増補・書改を繰り返す『教行信証』にあつて前期筆跡の余白箇所そのまま書き加えることで標挙として成立している。「教卷」においても、残存部分の執筆時期はいずれの紙面も後期筆跡時の



標挙は異筆であるが、親鸞八四歳以降に他人に委嘱して書かせたものと考えられている。

なお、「真仏土巻」の題号右傍には朱筆で「光明无量之願壽命无量之願」と書き入れられている。これは、「真仏土巻」尾題の朱補入と同じ頃で、前期筆跡時の記入と考えられている。<sup>(10)</sup> 先に見たような、表紙見返に標挙を書き入れる前に、「真仏土巻」の依るべき願の名を示した註記が書き入れられたことは、坂東本における標挙類に先行するものと位置づけることができる。

執筆時期を概観した結果、坂東本の本文が確定に向かい、書物としての体裁が整えられていく中で、標挙が書き加えられていったと推定できる。外題については、第一冊のものは失われ、「信巻」・「化身土巻」のものは異筆とする説もあるが、重見によると、「信巻」・「化身土巻」の外題は八四歳以降、「証巻」・「真仏土巻」は少なくとも八四歳以降と、いずれも専修寺本の親本と推定される建長七年（一二五五）の専信書写以降の書き入れと推定され、標挙を含む墨付きの紙面が完成した後に、外題の染筆が行われたと考えられる。

つまり、坂東本という書物が生成する過程において、題号・撰号・本文といったテキストの中枢を担う要素の記入が進んでいき、加筆・訂正・書改などの改訂が随時繰り返し返されていった。そして、坂東本として各巻の本文がほぼ出来上がってから、標挙・外題が整えられたのである。書物の成立ということを考える場合、草稿から清書へと進んでいくことが想定される。その中で、本文を書き終えた後に総標・略標を掲げ、さらに外題を染筆するということは、それらの書き入れが坂東本の書物としての完成を意味する大きな一時点とすることができる。

ただ、現状の坂東本では「教巻」の標挙類が失われているため、別途検討すべきであろう。それには、古くに坂東本の情報を書写あるいは転写したと考えられる西本願寺本や専修寺本を検討することが有効である。坂東本「教巻」では、巻頭・巻尾に標挙・標列は現在確認できない。ここに掲げた西本願寺本や専修寺本の形式が『教行信証』としての原形に近い状態であろうし、これまでもそう考えられてきた。巻尾の記入については、現在の坂東本に見られない以上、その有無については断定しかねる。親鸞示寂後まもなくの坂東本を書写したと推定される西本願寺本のを基準として挙げておきたい。

〔表7-1〕 西本願寺本の標挙・標列 ※〔一〕は省略した箇所、〔二〕は『縮刷本』の頁数を示す。

第一冊	第二冊	第三冊	第四冊	第五冊	第六冊
大阿彌陀經 友謙三藏譯 平等覺經 帛延三藏譯 (一) 【内題】 【本文】 大無量壽經 廣實之教 淨土真宗 顯眞實教一 顯眞實行二 顯眞實信三 顯眞實證四 顯眞佛土五 顯化身土六 【内題・撰号】	諸佛稱名之願 淨土眞實之行 選擇本願之行 【内題・撰号】	【内題・撰号】 【本文】 如來眞說披閱論家釋家宗義 廣蒙三經光澤特開一心華 文且至疑問遂出明證誠念佛 恩深重不恥人倫嗚言忻淨 邦徒衆厭機械庶類雖加取 捨莫生毀謗矣 至心信樂之願 正定聚之機 (二八) 【内題・撰号】	必至滅度之願 難思議往生 【内題・撰号】	光明无量之願 壽命无量之願 【内題・撰号】	(標挙無し) 【内題・撰号】

【本文】 【尾題】 大無量壽經 <small>淨土真宗 實之教</small> 顯真實教一 顯真實行二 顯真實信三 顯真實證四 顯真實佛土五 顯化身土六 (二四)	【本文】 【尾題】	【本文】	【本文】 【尾題】	【本文】 【尾題】	【本文】 【尾題】
--	--------------	------	--------------	--------------	--------------

## 第二節 「教卷」における標挙・標列

従来より問題として指摘されているのが、「教卷」の標挙・標列である。日野環による論考を参考に、<sup>(11)</sup>「教卷」の問題点をまとめた上で、諸翻刻、書誌学的見地からみた諸本の状態について考察していきたい。

### 第一項 「教卷」標挙の問題点

まずは、現存する西本願寺本と専修寺本の見た目の標挙・標列の位置を示しておこう。

〔表 7-2 西本願寺本・専修寺本「教巻」の標拳・標列〕

西本願寺本 標拳・標列	縮刷本 <sup>〔一〕</sup>	専修寺本 標拳・標列	専修寺本 <sup>〔二〕</sup>
…大阿彌陀經 …友謙三藏譯 …平等覺經 …帛延三藏譯	六	曠劫誠哉攝取不捨眞言超世希有正法 聞思莫遲慮爰愚禿釋親鸞慶哉 西蕃月支聖典東夏日域師釋難遇 今得遇難聞已得聞敬信眞宗教行證 特知如來恩德深斯以慶所聞嘆所獲矣 大無量壽經 眞實之教 淨土眞宗	一三
大無量壽經 眞實之教 淨土眞宗 顯眞實教一 顯眞實行二 顯眞實信三 顯眞實證四 顯眞佛土五 顯化身土六	一一二	顯眞實教 一 顯眞實行 二 顯眞實信 三 顯眞實證 四 顯眞佛土 五 顯化身土 六	一四
大無量壽經 眞實之教 淨土眞宗 顯眞實教一 顯眞實行二 顯眞實信三 顯眞實證四 顯眞實佛土五 顯眞實佛土六 顯化身土六	二二四		

このような「総序」「教巻」に所属する標挙・標列のうち、日野が課題としてあげるのが、「大無量壽經」等十三字が何のためらいもなく「教巻」の「標挙之文」として考えられているという点である。日野は各本の状態を鑑みて、西本願寺本・専修寺本では標列七行は一連であること、江戸期刊本のうち寛文本に至って「教巻」題号・撰号後本文前に「大無量壽經」等が移動したことから、「標列」の七行を第一行と他六行に切り離すべきではないと述べている。そして、その分割が行われた時期は覚如・存覚・乗専の時代であって、『六要鈔』のあり方がその後に影響を及ぼしたことを指摘している。

そこで、書誌学的視点からはどのように捉えられてきたのか、二つの方法で考えることで、『教行信証』古写本としての位置づけを把握したい。一つが坂東本・西本願寺本・専修寺本を底本とした翻刻であり、もう一つが真蹟研究の中での検討である。

まず、鎌倉三本を底本とする諸翻刻を挙げ、近代以降これらの形式がどのように理解されてきたのかを考察したい。このことによつて、鎌倉二本等を前にして翻刻を試みる際に、底本の状態をどう把握しているか、そして校合諸本の状態からどう『教行信証』としての原本を復元しているのかという、過去の書誌学的考察における見解を確認することができる。つまり、『教行信証』の本文としていかにあるべきかという作業が行われているのかについての過去の見解を知ることができるであろう。

第一に、坂東本を底本として行われた翻刻である。ここではそれぞれの特徴とともに列挙しておこう。

(1) 侍董寮編纂『真実教行証文類』（大谷派本願寺、一九二六）

標挙・標列は翻刻せず、西本願寺本・専修寺本の状態を上欄校異で示している。<sup>(13)</sup>

(2) 柏原祐義編『真宗聖典』（法藏館、一九三五）

「総序」の後に【標題】として標列を載せ、「総序」の題号を記す。次に「教卷」題号・撰号と本文の間に標挙を置く。尾題後の標挙・標列は翻刻しない。

(3) 『真宗聖典』（親鸞聖人七百回大遠忌記念出版、永田文昌堂、一九五六）

凡例によると『教行信証』は坂東本による書き下しであり、自釈部分には漢文も示されている。「総序」後・「教卷」前の標挙・標列は翻刻するが、尾題後はない。柱書によると標挙・標列は「教卷」に属する。

(4) 『親鸞聖人全集』教行信証一（親鸞聖人全集発行会、一九五八）

「総序」・「教卷」を西本願寺本で補うが、「総序」前十九字、「教卷」前標挙・標列、尾題後標挙・標列は西本願寺本・専修寺本の状態を脚註に示している。<sup>(14)</sup>

(5) 『真宗史料集成』第一卷（同朋舎、一九八三）

「総序」・「教卷」を西本願寺本で補い、標挙・標列は「総序」に続けて翻刻し、「教卷」題号とは行間を空ける。尾題後の標挙・標列は翻刻しない。

(6) 『浄土真宗聖典全書』第二卷宗祖篇上（本願寺出版社、二〇一一）

上段に坂東本の状態、下段に諸本を踏まえた翻刻をし、標列は下段にのみ教卷の巻頭として翻刻されている。柱書を見ると、「総序」と「教文類一」が同じ階層にあり、標挙と標列は「教文類一」に所属している。

尾題後標挙・標列は無し。

(7) 大谷大学編『顕浄土真実教行証文類』翻刻篇（真宗大谷派（東本願寺）、二〇一二）

本文に標挙・標列無し。解説に西本願寺本・専修寺本の「総序」・「教巻」それぞれ全文翻刻している。

これらでは、坂東本の状態を示した上で、西本願寺本等によつて不足部分として補われている。補う方法としては、西本願寺本の情報を校異で示す(1)(4)、標挙・標列を分割・移動する(2)、西本願寺本の状態を翻刻する(3)(5)、別に翻刻する(6)(7) という方法がある。さらに、その所屬が、「総序」に続くものと「教巻」に属するものに分かれている。

第二に、西本願寺本を底本とする翻刻例である。

(8) 『真宗聖典全書』漢文之部（文会堂、一九〇七）

「総序」の末に標挙・標列を置く。尾題後の標挙・標列は翻刻しない。

(9) 『大正新脩大藏経』第八三卷所収本（大正新脩大藏経刊行会、一九三二）

「総序」の末に標挙・標列を置く。巻尾の標挙・標列も翻刻する。中段一行目は「教巻」題号から開始する。<sup>(15)</sup>

(10) 『真宗聖教全書』所収本（大八木興文堂、一九四一）

「教巻」前に標挙・標列を置く。巻尾の標挙・標列は翻刻せず、下欄校異に回している。<sup>(15)</sup>

(11) 『浄土真宗聖典』原典版（本願寺出版部、一九八五）

標挙は翻刻するが、尾題後標挙・標列は翻刻しない。いずれも「教卷」に属する。

いずれも「総序」後・「教卷」前の標挙・標列は翻刻しているが、「総序」に続くものとするか(8)(9)、「教卷」に属するものとするか(10)(11)で位置づけが異なるようである。また尾題後については翻刻するもの、校異するもの、翻刻しないものの三種がある。

第三に、専修寺本である。影印本・写真版に先行して明治末期にその翻刻が出版されている。

(12)『教行信証』（高田専修寺蔵版、一九二二）

二丁右一行目に「恩徳深斯以慶所聞嘆所獲矣」、中央に「大無量壽經 眞實之教  
浄土眞宗」とあり、二丁左に標列の

六行を刻す。柱書は「顯淨土眞實教行證文類序」とある。次頁の題号・撰号・「教卷」本文は「顯淨土眞實教文類一」と始まる。ここからは頁数も改まり、柱書も「顯淨土眞實教文類一」となる。

先に挙げた専修寺本の頁割をよく再現しており、「総序」の直後に標挙、次頁に標列が続き、さらに次頁から「教卷」が開始する。この周辺の専修寺本は七行書きであるから、翻刻においても二丁左が六行で終わっていることから、専修寺本における紙面の状況は、標挙・標列の理解に一つの形を提示するものである。専修寺本(一三)では細註の「眞實之教」と「浄土眞宗」が「大無量壽經」とほぼ同じ字の大きさで書かれており、明治の翻刻版では標挙は一行書きで示すのではなく、二行書きの細註をそれぞれ一行ずつに振り分けているのである。このことと、当翻刻の柱書表記とを合わせると、専修寺本の翻刻においては、「大無量壽經」等の標挙を「総序」に属するものという意識の下で作成されたと考えられる。

これまでの翻刻では、標拳・標列の文言は、西本願寺本か専修寺本かを基に作成されている。しかし、翻刻するのかもしれないのか、校異で示すのか示さないのか、同じ底本であってもその場所や位置づけによって様々な見解を見ることが出来る。諸本の状態を示す際には様々な判断がなされているが、どれも『教行信証』としてふさわしいのかを探求する中で、伝来諸本それぞれの書物としての特徴となりうる書誌的情報が失われてしまうといった事態も生じてしまっているのである。そして、標拳あるいは標列を「教卷」に組み入れるのか、それとも「総序」に連続したものと見るのかで、見解が大きく分かれている現状が浮かび上がる。

このように、標拳類は多くの書誌的問題をはらんでおり、これまでの真蹟本等諸本の研究の中でもいくつかの指摘がある。それは、題号と標列の関係、坂東本の状態、その後の展開についての言及である。少し引用が長くなるが、標拳・標列に関する書誌学的研究の中の言及を抜き出し、検討しておく。

藤田海龍は、坂東本の外題・内題・各巻別号の現形を並べて題号の原形を推定する中で、

各巻別号の中、「真仏土巻」・「化身土巻」は初め「顕真仏土文類」「顕化身土文類」とし、「浄土」或は「浄土方便」の語は後に附加せられたものである。是によつて想像するに、或は前四巻にも初めは「浄土」の語がなかったのかも知れない。前四巻の題号の部分は何れも清書或は書き直ししてあるので、原形を知る事が出来ないが、また同時に此の想像を容るる余地が存在する訳である。「総序」の後に在る巻名の標列

顕真実行二

顕真実信三

顕真実証四

顕真仏土五

顕化身土六（坂東本は此の部分欠落す）

より見て、或は「浄土」の語無きが最初の題号でなかったかと思う。尤も前四巻には初めより「浄土」の語が有り、後二巻にのみ「浄土」の語がなかった、何となれば真仏土・化身土ともに、其の語彙より見て別に「浄土」の語を附けなくとも、浄土の真仏土であり、浄土方便の化身土であることを顕し得るからである、とかんがうることも勿論可能である。

と述べている。<sup>(17)</sup> 標列を考える場合には、前章で問題とした諸本間の位置の違いや翻刻時の位置づけの異なりのみならず、各巻題号との関係も考えなければならぬという指摘である。

赤松俊秀は、

「総序」に続いて、本願寺派本願寺所蔵の伝真蹟本では、「大無量寿経」の標挙と巻名の標列が七行に記されている。現在の「真蹟本」には標挙・標列の部分はないが、当初からなかったのではなく、中古欠失したものと思われる。いま本紙のない四がその部分に当るであろう。

という。<sup>(18)</sup>ここでも、現在失われている坂東本にも標挙・標列があったという認識は共有されている。

鳥越正道は、坂東本欠損部分の復元を試みるにあたって、

(四)の標挙と(五)の標列(標目)は共に坂東本では欠損している。西本願寺本と専修寺本には総序の後、教巻の首題の前に次のように記されているので、最終稿本にもあったと推察される。(中略)なお、西本願寺本には教巻の尾題の後に再度、標挙と標列が記されている。ただし、「頭真仏土五」が「頭真実仏土五」となっている。これは、坂東本の状態からして、最終稿本には記されていなかったと言えるよう。

と、坂東本の欠損と西本願寺本・専修寺本とを比較し、問題箇所として挙げている。<sup>(19)</sup>

先ほど確認した、坂東本の成立過程における最終段階にあたる標挙から外題という執筆の流れと考え合わせる、各巻が完成に向かう中で訂正され、現在見ることでできる形になっていったと考えられる。真蹟本研究の中で培われてきたものとしては、坂東本欠損部分を西本願寺本・専修寺本で補い、さらに西本願寺本の巻尾の記入は親鸞の示寂時の状態としては無かったものと位置づけている。

過去の書誌学的検討の中では、三本を相互依存させる形で、『教行信証』の翻刻あるいは原典遡及の研究が行われてきた。これらは近代以降確立された学的視点からさなされた研究であるが、西本願寺本の書写時

点ですでに校合諸本の情報が加えられているという事実よりすると、過去約八百年に亘ってそれぞれの過程が原典遡及を指すという同じ方針による作業の延長線上にあるともいえる。各時代に証本としての『教行信証』が求められ、テキストの正統性を継承していく過程の中で様々な形に派生していったが、一方で現在見ることでできる坂東本では自筆本である坂東本には無い状態が諸本・諸翻刻、そしてその解説に現れるという二面性が生じているのである。

これまでは諸本の体裁とその理解について述べてきたが、『教行信証』の標挙・標列の原初形態を探ると、題号の前に記入されているという古写本に共通する形式があつた。それは、題号の右傍に書かれた坂東本「真仏土巻」の「光明无量之願壽命无量之願」という、各巻標挙に先行する朱書の右傍註記でさえも同様であり、坂東本や西本願寺本、専修寺本では本文の直前に標挙・標列は置かれていないのである。改訂・書改が行われた坂東本、編集の行われた西本願寺本、専信本転写と推定される専修寺本の三本で題前に置かれることは共通しているが、西本願寺本において「総序」後一丁分空白を挟んで「教巻」題号・本文の前丁に標挙・標列を置いているのに対して、専修寺本では「総序」後二行分を使って標挙を示し、次丁に標列、その次丁から「教巻」題号・本文が始まるという体裁であることは、初期形態においても幾つかの違いが見られる。

この標挙の位置について、西本願寺本を依用する梅原真隆はその記入順に解説を施している。<sup>(20)</sup>「総序」前の「文前袖書」は訳者についての異説があることから親鸞自身の依用するところを書きとめたもの、「教巻」前の「文前袖書」は「教巻」の標挙と全巻の標列を備忘として記して「教巻」の要綱を組み合わせ体系づけ

たもの、西本願寺本尾題裏面にある文前袖書と同じ「袖書」は、そのまま忠実に写されたものであろうと推測している。西本願寺本を底本としても、「教巻」は経名であるのに対し、「行巻」以下が願名であること、教巻のみに標列が伴っていることで、その意義が複雑となっているという指摘もある。<sup>(21)</sup>

西本願寺本等古写本の形式をまとめれば、この系統は、親鸞の執筆形式をそのまま受け継ぐものであり、御自釈・引用文の構成や内容が確定したのちに総括的に浮かび上がった主題を端的に明示することを目的としている。「教巻」標挙が「総序」と「教巻」を挟む位置にある場合、六巻全体の標挙・標列と考えられる。全体の標列となった時、『教行信証』各巻巻頭の引文構成がそれに一致する。いずれの巻においても、例外なく『無量寿経』とその異訳經典類を続けざまに配列することで構成されている。「行巻」以下の構成自体が、『大経』を中心とした因願・成就の関係で構成されていることからすれば、「大無量寿経」を標列の総標とし、その細目として「眞實之教」が立ち、それに並記する形で「浄土眞宗」が示されているといえる。

なおこの場合は、「教巻」本文に標挙が直接しないことから、「教巻」の標挙として「大無量寿経」等を位置づけるとすれば、この十三文字は六巻全体と「教巻」の双方を兼ねる役割があると理解するのか、あるいは「教巻」にはもともと標挙が存在しないと理解するか、二通りの可能性がある。前者の場合は、「教巻」冒頭の総標綱起に、

謹按<sup>デ</sup>ニ<sup>スル</sup>ニ<sup>ム</sup>浄土眞宗<sup>ヲ</sup>有<sup>リ</sup>ニ<sup>種</sup>回向<sup>一</sup>。一者<sup>ニ</sup>往相<sup>、</sup>二者<sup>ニ</sup>還相<sup>ナリ</sup>。就<sup>テ</sup>ニ<sup>往</sup>相回向<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>ニ<sup>眞</sup>實教行信證<sup>一</sup>。

〔聖典全〕二一・八

とあるように、一部六巻の開始にもあたる「教巻」本文自体に浄土真宗の体系を示すという役割も含まれている。「大無量壽經」という標挙のもと、右辺に「眞實之教」と「教巻」の主題を記し、左辺に「浄土眞宗」と各巻の構成を示し、合わせて標列前の標挙として示されていると理解できる。後者の場合は、「行巻」以下の標挙がいずれも願名であるのに対して、「教巻」本文では願文の引用がないことがその説明として用いられることとなるであろう。

そうしたときに、西本願寺本「教巻」巻尾の標挙・標列について、その意義を問い直してみてもう一度示していることになり、うか。「教巻」巻尾は「行巻」との境にあたり、「行巻」以下の構成を含めてもう一度示していることになり、本願寺系八冊本もそれを受け継いでいる。本文の要素としては捉えられないが、「総序」「教巻」の内容が終わったところで「行巻」以下の内容を再掲することには、「大無量壽經」と標する「教巻」と、願名を標する「行巻」以下との接続を果たす役割があったのではないだろうか。そうしたテキストとしての意義を巻尾の標列として受容してきたのが本願寺系八冊本であった。

## 第二項 題後文前の意義

坂東本・専修寺本・西本願寺本の標挙より時代が下ると考えられる中世の書写本においては、京都府常楽寺蔵存覚書写本では、標挙の所在が首題の前にあり、「総序」の次に標願細註、標列、「教巻」首題の順とい<sup>(22)</sup>う。また、本派本願寺蔵存如授与本では、「総序」と「教巻」の間にある標挙・標列は西本願寺本と同じ位

置にあるが、「総序」前の「大阿彌陀經」等が「総序」の題後文前にあり、「行卷」以下の標挙はいずれも題後・本文前にある。<sup>(23)</sup> 文言・位置・有無によって、古くから諸本間でいくつかの相違があり、その註釈においても古写本との相異が見られるのである。<sup>(24)</sup>

重見一行は正応四年出版について考察する中で、延書本を除く『教行信証』写本の形態について六冊本と八冊本に分けた上で、八冊本系の特徴として標挙・標列を挙げて<sup>(25)</sup>いる。まず本願寺系八冊本（浄興寺本等）について、

⑦ 総序（最初の序文）の前に

大阿彌陀經 友謙三藏訳

平等覺經 帛延三藏訳

という標挙（その巻の目標となる文句）らしいものがある。

⑧ 標列（目次）が総序の後の正常の位置のほか教巻の後にもある。

これ等は、いずれも内容としてふさわしいものとは考えられず、坂東本をはじめ六冊本系にも見当たらず、おそらく西本願寺本にはじまるものと考えられる。

という。「総序」前の「大阿彌陀經」等の文句は、西本願寺本が創始したものといい、編集本としての性格を指摘している。また、高田系八冊本（中山寺本等）とともに六冊本系に共通して対立する結構の一つとして、

④ 標拳はすべて内題と本文の間に整頓されて置かれている。

としている。先ほどから確認している西本願寺本・専修寺本からは文言を変えないままその位置を移すという一定の改訂作業がなされているということであり、重見はこの結構が元亨四年存覚書写本に影響を与えたと考え、曆応本の書写原本である元弘三年乗専書写本が校合に用いた助阿本なるものをこの結構と想定している。また、こうした鎌倉時代末期までに成立した結構を、正応四年出版本に比定している。

また、日野の指摘するように、江戸期の『教行信証』講録類では『六要鈔』の釈例に従って解説されることが多く、日野以前にもすでにそのような評価もなされている。<sup>(27)</sup>しかし、その後の註釈書も前例に倣うことが多く、『六要鈔』刊本、翻刻例、解説書の間には強い結びつきを持つようである。さらに、『六要鈔』の釈例と同様に、「総序」に続いて〈標列↓題号・撰号↓標拳〉の順で刻している刊本とそれに類する翻刻の例を挙げておこう。

(1) 寛文十三年刊本

二丁右 恩徳深斯以慶所聞嘆所獲矣

顯眞實教 一

顯眞實行 二

顯眞實信 三

顯眞實證 四

顯眞佛土 五

顯化身土 六

顯淨土眞實教文類一 愚禿釋  
親鸞集

大無量壽經 眞實之教  
淨土眞宗

(2)中井玄道校訂『顯淨土眞實教行証文類』(仏教大学出版部、一九二〇)  
(28)

四頁 顯眞實教一

顯眞實行二

顯眞實信三

顯眞實證四

顯眞佛土五

顯化身土六

五頁 顯淨土眞實教文類一

愚禿釋親鸞集

大無量壽經 眞實之教  
淨土眞宗

これらの配列によれば、「大無量壽經」等の標挙が題号・撰号後、本文前に位置し、「教卷」の標挙とするということが打ち出されている。中井による校訂本は、明治式の版に改刻すべきとの提言のもとで行われた

ものであるが、龍谷山藏版を基礎として翻刻しているため、中井の把握しえた古写本とは異なる位置に標挙・標列を置き、参考本として西本願寺本や刊本等を用いてその状態を校正標異として詳細に掲げているのである。<sup>(30)</sup> それに先立って発表された「教行信証校訂私考一」(『六条学報』一二四、一九一二)においては、順序の項に「大阿彌陀經」等二行四句、「大無量壽經」等十三字、標列のそれぞれを示しているから、翻刻とその理解にはなお隔たりがあるようだ。その他、次に挙げる三本でも寛文十三年刊本と同様の体裁をとる。

(3) 『日本撰述大日本校訂大藏經』真宗霜八(弘教書院、一八八四)<sup>(31)</sup>

「総序」に続いて標列を一行書きで示し、「教卷」題号、撰号、標挙、本文と続く。柱記は「教行信証第一」とある。

(4) 島地大等編『聖典 浄土真宗』(明治書院、一九二八改修印刷)

御自釈部分の国訳に原文を対照させる。標列・標挙は中井の校訂本と同様である。

(5) 稲葉秀賢・栗原行信・白井元成編『昭和新篇教行信証御自釈』(文栄堂書店、一九七〇)

寛文本を用い、誤字を坂東本で修正。標列を「教卷」に加えた翻刻。柱書によれば標列は「序」に含まれる。

このように、標挙・標列については、書誌学的見地に基づいて西本願寺本等古写本の状態を認識していたとしても、内容上は『六要鈔』に従って「教卷」に属して解釈する理解が大勢を占め、それを前提に翻刻し解説される傾向にある。

古写本系とその後の展開の間で標挙・標列の位置が異なること、そしてどの本を依用して翻刻や解説をするかによっても、その位置づけが異なることが問題なのである。これに加え、日野の指摘とは異なり、専修寺本では標挙一行、次丁に標列六行がある体裁をとっていることから、必ずしも標挙・標列七行を一体とする訳ではないことも、古写本の体裁からさらに指摘することができる。以上のように様々な問題があるが、

- ① 標挙が各巻の題号の前後いずれかに置かれている
- ② 標列があるものと無いものがある

という諸本間相異が課題となる。

現存諸本からは、八冊本系や『六要鈔』等のように題号と本文で標挙・標列を挟む場合は、註釈時代になって多く見られるものと考えられ、各巻の理解の拠りどころというべきものである。題号と本文で標挙を挟んだ時には、「教巻」の所属となる。『六要鈔』では、先に挙げたように、「教巻」の構造を〈標列次第↓題目↓標挙↓正釈↓総結〉と捉えている。存覚の依用した本がそうであったのかもしれないが、<sup>(32)</sup>存覚があえてそのように古写本から移動した形態を採用していることになる。

『六要鈔』においては、『教行信証』を註釈するにあたり、序分・正宗分・流通分と經典を分科するように捉えている。これに従えば、正宗分の始まりは「教巻」と捉えられ、その前に標列を置くということは、「総序」には標挙・標列が入りえないということであろう。「総序」を終えたところから正宗分に位置づけることで、標列が序文と正宗分の間位置しながら、「教巻」以下六巻に含んで註釈することとなる。標挙

を「教巻」の題号後に置く初期の一例が存覚における註釈であり、校訂といえる。ただし、この場合は、「教行信証」の原初形態とは異なること、「教巻」本文の説示順と標拳の並びとの整合性の説明が必要であろう。

### 第三項 古写本と諸本の異同

坂東本においては外題を記すのが書物成立の最終局面であるが、その直前になされたのが標拳記入であった。鎌倉三本における教巻の標列と標拳の連続を鑑みると、書改が随時行われた坂東本の後期筆跡時において、題号・撰号と本文の間に移されなかったこと、坂東本を臨写した西本願寺本の書写においてもそのままの位置を保持していることから、形式的には各巻そして全巻を統べる意味が強い。一方、『六要鈔』や江戸期刊本などは全巻に亘って題号と本文の間に置く。西本願寺本総序前の「大阿彌陀經 友謙三藏譯  
平等覺經 帛延三藏譯」についてもそれらのように本文前に移動することも可能であるが、異訳大經一本の経名とその訳者という内容であるから、題号を跨いで総序本文と接続することは難しい。

古写本の標拳の位置からすれば、坂東本では題号の前丁に記され、西本願寺本や専修寺本でもその位置を守っている。目次的な位置にあることから「文類」の要約を指すとも考えられるが、引用文群によって「題」されたところを示すことに題号の前に置く意義があったと考えられる。標拳書き入れ前に坂東本真仏土巻題号右傍に標拳と同文が朱筆で示されていることも、このことの証左となろう。

こうしたとき、親鸞が題号前に標拳を置く傾向について再考しなければならぬ。「証巻」や「真仏土巻」

という坂東本前期筆跡時の状態が多く残り、後に改訂しうるところであつても改訂を施さないということから、親鸞が意図的に〈標拳↓題号↓本文〉という順序を崩さない姿勢をとっているのではないかということである。標列という、題号に準じる名目の前に標拳を置くことで、六巻それぞれの標拳が題号の前に位置することになり、そうした一貫性を以て、これを「教卷」の標拳・標列の順にも当てはめることで、「教卷」において〈標拳↓標列〉の順が生じたと考えられる。それを西本願寺本・専修寺本が踏襲していること、そして存覚の註釈では本文前に移動しているが標列・標拳をいずれも「教卷」に属していることを考え合わせると、書物としての体裁を整える作業の中で二つの形態が生じ、西本願寺本書写と『六要鈔』の註釈との間に差異が生じたのである。

中井によれば、標列の位置については二様あるとされる。<sup>(33)</sup>第一に「総序」に接して置く場合は、総題の教行証を開示して五真実一方便を顕し、一宗の綱格を明らかにするためである。第二に「総序」と正宗分の間には置く場合は、独立の地位を与えることによつて一部の章目を列挙して内容を示す目録のような役割があつて、標列のために別の一紙を費やす必要があるという。つまり、「教卷」の標拳・標列については体裁によつて二つ、属性によつて三つのパターンが考えられるのである。

A 標拳・標列の一体 A1 「総序」に属す ↓西本願寺本

A2 独立した「教卷」の標拳と目録としての標列 ↓専修寺本

B 標拳・標列の分割 ↓『六要鈔』寛文版等

まず、共通しているのが、本文理解の中心的役割を担っているという点である。多くの引文の配列によって構成される『教行信証』において、各巻あるいは全体の主題を簡潔に『無量寿経』の経名と願名で示したことは、親鸞自身の理解であるとともに、伝持者や後世の読者に向けて示されたものであることは明白である。そして標挙・題号・本文がそれぞれ具体的にあるいは抽象的に相互に『教行信証』の内容を示す役割を果たしているのである。

次に「教巻」の標挙・標列が分割・移動した理解の中で、初期形態をどう考えるべきかということである。両者に一致しているのが、標列は「教巻」の前に位置しているということだ。これは西本願寺本・専修寺本でも同様であるから、このことは『教行信証』において動かない事実であろう。すると、標挙を本文前に移すことによって、少なくとも六巻全体の標挙という可能性を失ってしまうことが問題である。

では、この形態的な二面性は許容できるのであるか。近代以降の『教行信証』の書誌学的乃至文献学的研究で主流となった原初形態を求めるといふ立場に立てば異本としての扱いになるであろう。しかし、西本願寺本書写の時点では、坂東本の内容をそのまま享受するという態度で書写する一方で、「総序」前にも経典名と訳者を記すという新たな一面を見せており、さらに『教行信証』の註釈にあたった存覚は、テキストを分割・移動した形を元に註釈を行うという展開を見せている。いずれにしても、原初形態を知りながら、各本の制作者が新たに追加したり削除したりという変化を伴う作業を、信頼できる諸本との比較の中で行っていたと考えられるのである。

それは、坂東本以来、これまでの書写本・刊本・翻刻において、『教行信証』としてふさわしい形態が常に求められてきた中で共通して行われてきたことであろう。つまり、この標挙・標列の諸本間の異同は、増補・改訂を繰り返す坂東本（Ⅱ生成期）、いくつかの改変を施しつつ坂東本の多くの体裁を受け継ぐ西本願寺本・専修寺本（Ⅱ書写期）、刊本の成立と存覚による『六要鈔』執筆（Ⅱ註釈期）と『教行信証』の初期段階における各本の成立の中で三つの類型が考えられ、それぞれの中でも紙面の使用状況や書写者の意図によって、役割に変化が認められるのである。これこそが、〈読者〉としての役割であろう。その新たな形態を作った〈読者〉はまた、時代の書写者に享受されることによって〈作者〉ともなり、それが幾たびも重ねられることによって定型の一つとなって、諸本の系統が形作られてきたと考えられる。

### 第三節 「化身土巻」における標挙

次に特徴的なのが、「化身土巻」の標挙である。これまであまり取り上げられていないが、その内容が古写本の形態から変化していると見られる。

## 第一項 坂東本・専修寺本の標挙

坂東本第五冊「化身土卷本」には、現状では題号・撰号・本文の一頁前に、

無量壽佛觀經之意  
至心發願之願 邪定聚機  
阿彌陀經之意 雙樹林下往生  
至心回向之願 不定聚機  
難思往生

『真蹟集成』二・四七二

とあるが、異筆である。専修寺本の「化身土卷」標挙は、

無量壽佛觀經之意也  
至心發願願 邪定聚機  
阿彌陀經之意也 雙樹林下往生  
至心回向願 不定聚機  
難思往生

『専修寺本』五二〇

と坂東本と同様の書き入れがあるが、願名について「之」を欠いた表記となっており、それらの傍註の最後に「也」が付いている。西本願寺本第六冊「化身土卷」では、標挙は失われている。

また、細註の内容としては、「邪定聚機」「不定聚機」とあるが、坂東本「信卷」標挙では「正定聚之機」

（『真蹟集成』一・一五八）、専修寺本「信卷」では「<sup>正定聚</sup>機」（『専修寺本』一七〇）とある。「之」の有無は

細註全体にも及んでいるといえよう。

古写本間に細かな違いは認められるが、二つの願名の右傍にそれぞれ『観無量壽經』『阿彌陀經』の経名が挙げられ、細註としては機と往生に関する内容が併記されていることは、「化身土卷」の標挙として共通している。

「化身土卷」標挙は、西本願寺本に現在見ることはできず、坂東本は異筆であるが、専修寺本に同様の内容があることから、少なくとも鎌倉三本には存在していたものとして、坂東本や専修寺本の内容や位置を古写本の基準として議論したい。

その中で着目したいのが、願名の右傍に付された註記である。古写本では「至心發願之願」の右傍に「無量壽佛觀經之意也」、願名の細註に「不定聚之機 邪定聚之機難思往生 雙樹林下往生」とあり、「至心回向之願」の右傍には「阿彌陀經之意」、願名の細註に「不定聚之機 難思往生」とあったのが『教行信証』としての原型であろう。

内容的には、「教卷」における「大無量壽經」に相当するような「無量壽佛觀經之意也」「阿彌陀經之意也」が願名の右傍註として示されていることになる。

## 第二項 漢文・延書諸本の標挙

次に注目するのは、その後の変化である。三本に一致して標挙が題前にあるという古写本の形態が、早い段階で標挙・標列の分割・移動が行われ、それが後世の刊本、書写本、そして註釈にも影響していることは、これまでの検討で明確になった。この異なりによって、『教行信証』の展開の中で初期形態はどう受容されたのか、そこに連続性はあるのかという問題が生じる。

今回披見し得た諸本及び重見一行によって紹介された延書本等の標挙を並べてみれば、古写本とは異なる興味深い事実が浮かび上がる。

まず、重見の紹介した附表より拝借し、延書諸本の「化身土巻」標拳を分類すると、次の三つの系統に分かれる。

(1)源覚本（延書十九冊本）「化身土巻」内題後

至心発願ノ願

邪定聚ノ機 双樹林下往生

無量寿仏觀經ノコ、ロナリ

至心廻向ノ願

不定聚ノ機 難思往生

阿弥陀經ノコ、ロナリ

(2)宮谷本・(3)弘誓寺本・(4)本證寺本（いずれも延書二十冊本）「化身土巻」内題後

至心発願ノ願

邪定聚機 双樹林下往生

無量寿仏觀經ノコ、ロナリ

至心廻向ノ願

不定聚機 難思往生

阿弥陀経ノコ、ロナリ

(5)善如本・(6)天文本・(7)岸部・粟津本・(8)恵空本(十七冊延書本)「化身土卷」内題前)

至心発願ノ願 邪定聚ノ機

双樹林下往生

无量寿仏觀経ノコ、ロナリ

至心廻向ノ願 不定聚ノ機

難思往生

阿弥陀経ノコ、ロナリ

重見が掲げた延書八本の標挙については、十七冊本系・十九冊本系・二十冊本系でそれぞれ位置や文言に若干の相異があるが、その系統内では統一されていることがわかる。

次に、前章で扱った三本を挙げてみたい。

(9)存如授与本

至心發願之願 邪定聚之機 雙樹林下往生  
無量壽佛觀經之意也

至心回向之願 不定聚之機 難思往生  
阿彌陀經之意也

(10) 本山宝庫校(合本) (題号・撰号後、本文前)

至心發願之願

邪定聚之機 雙樹林下往生  
無量壽佛觀經之意也

至心回向之願

不定聚之機 難思往生  
阿弥陀經之意也

(11) 文明本

至心發願之願

邪定聚之機 雙樹林下往生  
無量壽佛觀經之意也

至心回向之願

不定聚之機 難思往生  
阿弥陀經之意也

三本ともに同じ表記となっているが、坂東本・専修寺本と比べて、細註の内容が一見して異なることがわかる。それは、「無量壽佛觀經之意也」「阿弥陀經之意也」の細註化である。

これをさらに『六要鈔』の記述と対比させてみたい。詳細に示されているため少し長くなるが、「化身土卷」標舉について述べられた部分を引用する。

二標舉之中、竝舉二願。至心發願是第十九之誓願也。邪定聚機者、問。今所言者淨土正機、往生極樂之行人也、何云邪聚。答。疑端所來誠以爲難。但試會之、觀經九品衆機之中、其下三品是正實機。而彼三品、或說應墮地獄、或說應墮惡道。斯乃爲顯定業能轉奇特之妬益。且約遇善以前之機。云邪定歟。是故下云觀經意也。雙樹林下往生者。問。其意如何。答。雙樹林者、狗尸那城跋提河邊、大聖釋尊入

滅却也。是則化身入滅処故、於明化土舉此處歟。至心回向第二十之本誓願也。不定聚機者、問。淨土眞宗所被之機。偏願極樂必得往生。須言正定。何因謂之不定聚乎。答。三部之中。且依小經、長時起行爲其本意、臨終來迎爲其所期。起行若懈、所期難遂。対至信心樂之機、平生業成必得生邊、爲示勝劣稱之且云不定聚也。難思往生者。問。其意如何。答。是又同對第十八願至信心樂、決定往生、難思議義爲之難思。議字有無可有差別。淺深応知。問。三種往生之名目者。出法事讚。今所出義正爲彼讚所明義乎。答。三種往生。謂其名目。出彼事讚。今分別意。又任彼釋。更無異論。但於其中。或約三經。或約三聚。此集料簡愚解未覃。今集主意。配當定叶其教旨歟。仰可信之。〔聖典全〕四・一二三八)

この中で注意しなければならないのは、「下有觀經意也」である。「下に」とあるのは、坂東本等で願名の右傍にあったが、『六要鈔』では下方に移ったものを用いているという意味であり、それと存如授与本以下の内容が合致するのである。

ここに、「化身土卷」の標挙においても、題後文前の位置的な問題に加えて、傍註が細註に変化しているという古写本からの変化が認められるのである。

### 第三項 標挙・標列からみる本願寺系『教行信証』

以上のことから、古写本とその後では標挙・標列に異なりがあることを知ることができた。最後に、本研

究で取り上げた諸本を中心に、標挙・標列からみた諸本の特徴をまとめておきたい。

まず、第一類としては、坂東本・専修寺本・西本願寺本が挙げられる。これらは、題号撰号・本文の前頁に大きく並べることでも共通している。各本の特徴としては、坂東本については、「真仏土巻」題号右傍に「光明无量之願壽命无量之願」という朱の書き入れがあること、「化身土巻」無量壽佛觀經之意「至心發願之願」邪定聚之機「阿彌陀經之意至心回向之願」難思往生は異筆であることである。専修寺本については、「行巻」の「諸佛稱名之願」眞實之行が坂東本に先行する内容を含んでいることである。西本願寺本については、「総序」前に「大阿彌陀經」等十九字、「総序」後に標挙・標列、「教巻」後に標挙・標列を有すること、「化身土巻」の標挙が失われていることである。

第二類として、「題後文前」に標挙を置くものが一系統として纏められる。これについては、八冊本系標挙・標列と仮に名付けておこう。その内実は、いくつかに分けられる。まず、『六要鈔』については、標列と標挙を切り離すことが特徴であり、その叙述順が、この系統の標挙・標列の配置に一致している。また本願寺系八冊本としての存如授与本・龍大藏室町末期書写本、文明本、延書本、江戸期刊本についても同様である。内容としては「化身土巻」の「是故下云觀經意也」〔聖典全〕四・一二三八と本願寺系八冊本や延書本などに見られる「至心發願之願」邪定聚之機「雙樹林下往生至心回向之願」無量壽佛觀經之意也という願名と細註の関係が、第一類からは変化していることが挙げられる。

第六章で取り上げた本山宝庫本校合本では、標挙類について、「総序前」の異訳大經二本に関する書き入

れである。「大阿彌陀經」の右傍に「イ无」、「平等覺經」の右傍に「イ无」、「信卷本」の標挙「至心信樂之願」の右傍に「題ヨリ前ニアリ」、「証卷」の標挙「必至滅度之願」の右傍「此行イニ无シ」とある。「信卷本」と「証卷」の註記のように、親本と考えられる存如授与本の位置と異本の標挙位置が異なる事を示している。このイ本は西本願寺本を指しており、古写本と流布本・伝授本との違いが認識されていた。

さらに、第二類に附属して文明本を挙げておきたい。日野環によって指摘され、第六章第三節で文明本の特徴の四心目として挙げた特徴を再掲すれば、文明本の標挙は次の特徴を有する。

(4)標挙・標挙

「総序」の次に、六行の標列がある。

「教卷」の標挙は題後文前にある（「行卷」・「信卷」を除いて標挙の所在は共通）。

「行卷」・「信卷」の標挙は、題下撰号前にある。

文明本では、「行卷」・「信卷」の標挙が後に追加されたような形態になっているのである。これらについて、これまでの研究で指摘されてきた、高田系八冊本、仏光寺新出本、あるいは中山寺本、正応出版本の特徴は、本願寺系八冊本あるいは文明本との関連として加えることによって、より緻密な体系構築を構築することが、今後期待されよう。

ところで、金龍静は、蓮如と『教行信証』の検討から、「根本奥書が附された正応開版本が絶大なる權威を誇っていたのではなからうか」と指摘していた。<sup>(34)</sup>本研究では、本願寺という場を中心に考察してきたわけ

であるが、標挙・標列による検討によつて、存覚『六要鈔』（及びその所積本）、存覚延書本を書写した善如本等の延書本、本願寺系漢文八冊本の共通形態を、「教巻」「化身土巻」標挙に見ることとなった。現存諸本から見れば、本願寺系においては、存覚がこの形式を受容したといえるわけであるが、本願寺宗主らが作成した諸本はいずれも所望者の要請による制作であつたことも共通している。伝授本としての『教行信証』の形態もこれに含めて考えれば、古写本の形態にとらわれない形式の裏側に、流布本の影響が相当程度、（読者）に及んでいたのではないかという金龍の指摘の確からしさの証左とならう。

そのような版本と考えられる影響が見られる中で、先に挙げた第一類と第二類との接続点としての本願寺系八冊本の意義についても認めなければならぬ。題後文前という流布本系統と思われる配置を基底とし、その跋文を元とする内容の奥書を共通して有していることはこれまでに指摘されてきた。もう一つの特徴として、第一章で指摘したように跋文については、その内容を正応版本や高田系八冊本のものから本願寺の伝授本としての内容にふさわしいものに改変している。さらに、本章で検討してきたように、標挙・標列については、西本願寺本に見られる「総序」前の「大阿彌陀經」等十九字、「総序」後の標挙・標列、「教巻」後の標挙・標列を悉く有している。この形式を採ることを以て、本願寺独自の聖教として位置づけることが可能となり、書写・伝授の中心に据えることができたと考えられるのである。

中世においては、『教行信証』は正応版本、高田系諸本など、様々な書写本・版本が成立していた。その中で、平松の指摘するような本願寺が書写・授与することのできる聖教であるためには、本願寺独自の聖教

である必要があった。<sup>(35)</sup> その条件に合うように、一般に認知されていたであろう形式を基底としつつ、その跋文を本願寺仕様に改変し、西本願寺本の標挙・標列などの諸要素を加えることで、書写・伝授に叶う本願寺独自の聖教としての役割を担うことができた。こうして〈読者〉が広く受容していく形式の中に本願寺独自の要素を組み込むことで、本願寺による『教行信証』は本願寺伝統聖教としての地位を自ら確立し、その中心的な位置づけが与えられるに至ったのではないだろうか。

## 小結

本章では、標挙・標列とは何を指すのか、七高僧との関わり、『教行信証』諸本間の異同について考察し、標挙が本文理解の中心的役割を担うこと、『教行信証』の展開の中でその体裁が変化したことを述べてきた。

『教行信証』の各本が成立するとき、いずれの場合においても、その時点での先行諸本・諸研究を踏まえて書写・翻刻が企図されている。初稿本ではなく草稿本であるとされる坂東本の場合も、引文を含めて原本を置いて書写が進められているのであって、坂東本以降の書写・刊行事業においても同様のことが繰り返行われてきた。古くから積み重ねられてきた書写・翻刻・校訂作業の中に一貫してきた方針は、証本としての『教行信証』を求めていくという姿勢である。それぞれ何を底本にしてどのように書写・翻刻するのか、

そのこと自体を『教行信証』という書物の展開とすることができるといえる。その繰り返しのことによって『教行信証』自体が広く展開することとなったが、同時にそれだけの註釈・解釈が書き加えられ続けているということである。現在は坂東本・西本願寺本・専修寺本の複製本・写真版が公刊され、それが共有されるという充実した研究環境となっている。そうした立場にあつては、どの段階で加えられた校訂や解釈なのか、そしてなぜそれが求められたのかを検討し、それを体系化することが『教行信証』受容の歴史を理解する一助となる。

「教巻」の標挙・標列は、第一冊という一部全体を総標する位置にも当たり、「教巻」本文も一部の体系を端的に示すことで開始している。西本願寺本・専修寺本では標挙・標列が「総序」に続けた位置にあつて「教巻」の本文には直結しない形態であつた。標挙とは『教行信証』という書物の体裁を整えるために行われた書き入れであつて、外題を記すという書物成立の最終段階の一步前になされた作業であつた。書改が随時行われた坂東本において、題号・撰号と本文の間に移されなかつたこと、坂東本を臨写した西本願寺本の書写において、本文とそれを峻別し、引文の体裁を整理する中でも標挙・標列をそのままの位置に書写したこと、そして専修寺本では標列に一紙を割いているという点も強調しておきたい。しかしその後、多くの形態の書写本・刊本・翻刻例が生じ、それらを用いた註釈・解釈が長く続けられてきた。つまり、標挙・標列の分割と移動が行われたということである。

すると「教巻」の標挙・標列は、古写本のような形式と、それを分割・移動した形式で伝わり、それぞれが『教行信証』の展開の中で受け入れられてきたといえる。その多面性があることで、一卷の主題としての

「標拳、本文の主題としての標拳、六巻の主題としての標拳と三種の理解が生じることとなるのである。今回はその分割・移動した形式を元に古写本の状態を見直すことで、『教行信証』の初期段階では、六巻共通の体裁で標拳・標列を記すという一貫性の中に書物としての成立を見た。

さらに「化身土巻」の標拳を検討することにより、古写本（第一類）と八冊本系（第二類）の系統分類が想定されることを指摘し、前者に属する西本願寺本と後者に属する存如授与本との接続点が、標拳・標列に見られることを指摘した。こうした、現存諸本による第一類と第二類の系統の中に、寛元五年尊蓮、建長七年専信本、助阿本などの散逸本の位置づけを想定することで、失われた諸本を含めた『教行信証』諸本系統の全体像が把握されるが、このことは今後の課題としたい。

## 註

(1) 諸橋徹次『大漢和辞典』第六卷五二八頁の「標拳」（ヘウキヨの読み）には「高くあげる。あげしめす。又、高くあがる。抜ん出あらはれる。」とあるが、『教行信証』で用いられるような用語の意味ではない。

(2) 灘本愛慈『讚阿弥陀仏偈要解』（永田文昌堂、一九七九）四六頁。

- (3) 平松令三「解説三帖和讃」(常磐井鸞猷註解『註解国宝三帖和讃』所収、真宗高田派宗務院、一九九八)一〇九頁。
- (4) 石井教導『選択集全講』(平楽寺書店、一九九五)六頁によると、経論の劈頭に三宝帰依の敬虔な態度を示すものとして、『大薩遮尼乾子所説経』巻第一の「歸命大智海大毘盧遮那佛」(『大正蔵』九・三一七上)、『成唯識論』巻第一の「稽首唯識性、滿分清淨者」(『大正蔵』三一・一上)、善導『観経四帖疏』「玄義分」「先勸大衆發願歸三寶」(『聖典全』一・六五五頁)などがあるという。ただ、『成唯識論』のものについては、「有情」までを含んだ五言一頌の護法等による帰敬頌(序)であり、直ちに標挙に類するものとはできない。
- (5) 藤堂祐範「選択集之書史学的研究」(『選択集大観』所収、山喜房仏書林、一九七五再版、一四四頁)によると、聖岡『決疑鈔直牒』巻第七(『浄全』七・五四七上)に「自」選擇本願「至」念佛爲先「註上人御自筆也」とあるのを初出とし、筆跡研究においても法然自筆は認められているようである。
- (6) 『専修寺本善導大師五部九卷』(法蔵館、一九八六)の平松令三による解説Ⅱでは、『四帖疏』は古版による後刷り、『観念法門』を含む第三種目の版の成立は貞永元年(一一三二)から弘長二年(一二七二)の間に京都で出版されたものであると推されている。
- (7) 鳥越正道『最終稿本教行信証の復元研究』(法蔵館、一九九七)二四一頁。
- (8) 現在では、寛元五年(一二七五)尊蓮による書写をしたことで、『教行信証』の一応の完成と考えられているが、その段階での『教行信証』という書物、あるいは坂東本に外題や標挙があったのか、どのような体裁だったのかは分からないが、尊蓮本とその系統の諸本にしても後に書き加えられる可能性、さらに校訂される可能性はある。
- (9) 重見一行『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察』(法蔵館、一九八一)第四章第二節参照。
- (10) 重見一行前掲書三三二頁。

(11) 日野環『教行信証』の教巻の標挙について(二)、「親鸞教学」一、一九五七。

(12) 『教行信証』の主な刊本に次のものがあり、佐々木求巳『真宗典籍刊行史稿』(伝久寺、一九七三)によってその特徴をまとめとめておく。

① 正応本 正応四年(一二九一)性海

現存しないが、高田専修寺蔵室町時代写本・慶長五年写本によって性海が開版したとされる。

② 寛永本 寛永十三年(一六三六)、中野市右衛門刊

尊蓮本系であるとされ、形の上では、存蓮二筆本に似ているが、総序題後文、教巻末の標挙・標列がない。

③ 正保本 正保三年一六四六、中野是誰重刊

寛永本の誤字脱字を訂正補刻したもの。「総序」題後文が「大阿弥陀経、友謙三蔵訳。平等覚経、帛延三蔵訳」と改刻された。

④ 松屋町版 明暦三年(一六五七)、五条橋松屋町

存蓮二筆本の特色を悉く具す。のちに西本願寺蔵版となる明暦丁酉本(西村九郎右衛門刊)の原刻版。

⑤ 寛文本 寛文九年(一六六九)、河村利兵衛刊

存蓮二筆本の型を存する。標挙・題号は『六要鈔所积本』と一致するところが多い。

なお、寛文十三年(一六七三)版は福森兵左衛門によって補刻・改版されたものであり、教巻序に「大阿弥陀経」等十三字があるが、寛文九年版にはない。

⑥ 天保本 天保十一年(一八四〇)

正保版が焼失し、この焼版が安永五年に東本願寺の蔵版となって再刻された。

⑦渋谷本 天保十四年（一八四三）、仏光寺二十四世信導隨念開版

寛文版を底本とし、他本と校合している。

- (13) 一頁上欄校異には「〇【西】総序文前有大阿弥陀経友謙三藏訳平等覚経帛延三藏訳二行十九字」、四頁上欄校異には「〇【西】【高】総序次有大無量寿経／真実之教／浄土真宗／顕真实教一／顕真实行二／顕真实信三／顕真实証四／顕真仏土五／顕化身土六」（〇は改行箇所）、十二頁には「【西】尾題後有大無量寿経真実之教浄土真宗之標拵及顕真实教一、顕真实行二、顕真实信三、顕真实証四、顕真仏土五、顕化身土六之標列」とある。
- (14) 二頁下欄脚註には「①【西】「大阿弥陀経 友謙三藏訳／平等覚経 帛延三藏訳」の十九字あり」（〇は改行箇所）とあり、七頁には「③【高】大無量寿経<sup>真実之教  
浄土真宗</sup>／の文あり。その裏側に／顕真实教一／顕真实行二／顕真实信三／顕真实証四／顕真仏土五／顕化身土六／の列名あり／【西】総序の次の一紙、表側は白紙、裏側に同様の文を置く」（〇は改行箇所）、十五頁には「⑨【西】「教卷」の終った裏側に／大無量寿経<sup>真実之教  
浄土真宗</sup>／の文あり。その裏側に／顕真实教一／顕真实行二／顕真实信三／顕真实証四／顕真仏土五／顕化身土六／とある」（〇は改行箇所、校異本文は十六頁下欄）とある。
- なお、『定本親鸞聖人全集』第一卷（法藏館、一九六九初版、二〇〇八ワイド版初版）、細川行信校訂『定本教行信証』（法藏館、一九八九）も同様の体裁をとる。
- (15) 『真聖全』二・四頁校異⑤には「教巻尾題後「大無量寿経真実之教浄土真宗 顕真实教一 顕真实行二 顕真实信三 顕真实証四 顕真实仏土五 顕化身土六」トアリ◎②、但し◎は顕真实仏〓顕真仏」とある。
- (16) 宮崎圓遵著作集第6巻『真宗書誌学の研究』（永田文昌堂、一九八八）五一頁。
- (17) 藤田海龍『教行信証』の真蹟本に就いて」（『日本仏学論叢』一、一九四四）。
- (18) 赤松俊秀『教行信証』の成立と改訂について」（『親鸞聖人 国宝 顕浄土真実教行証文類影印本解説』所収、真宗大谷派宗務

所、一九七一)。

(19) 鳥越正道前掲書一二九頁。

(20) 梅原真隆『教行信証新釈』巻上(専長寺文書伝道部発行所、一九五六)四・二〇・二一・五八頁。

(21) 加藤仏眼『教行信証堅徹』(永田文昌堂、一九六七)三十一頁。

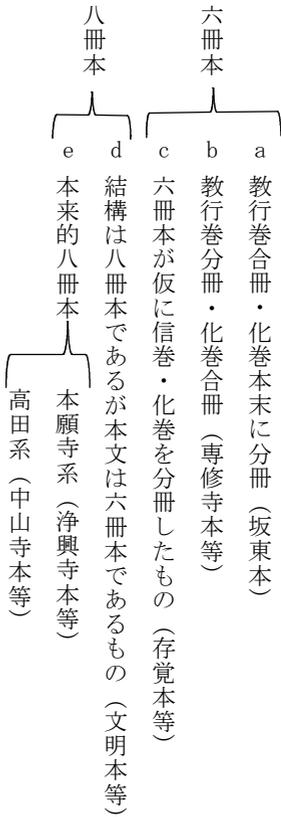
(22) 浄土真宗本願寺派宗学院編『古写真宗聖教現存目録』(永田文昌堂、一九七六)九九頁参照。

(23) 中井玄道『教行信証附録』(仏教大学出版部、一九二〇)一〇〇頁、「異本解説」本願寺本の項参照。

(24) 平松令三「高田宝庫より発見せられたる新資料の一、二について」(『高田学報』第四〇輯、一九五七)では、二本の『教行信証』古写本について、各巻の標挙が一樣に題後文前にあること、標列は教巻の題前に記されていることを挙げ、正応

版本の跋文をもつこと、本文記述の体裁が江戸時代刊本などの流布本と殆ど一致することも指摘している。

(25) 重見一行前掲書八五頁では、現存『教行信証』(延書を除く)の形態を中心とした分類を次のように示している。



(26) 重見一行前掲書八六頁。

(27) 『本典研鑽集記』(宗学院、一九三七)三四頁。

- (28) 『真宗の世界』臨時増刊「教行信証新研究号」立教開宗七百年紀念（一九二三）の第五輯では、中井の校訂本を依用し、勝岡廓善が校正を加えている。
- (29) 中井玄道「教行信証改刻批議」（『六条学報』六五〇、一九一一）及び『教行信証附録』所収「教行信証校刻縁起」参照。
- (30) 中井玄道『教行信証附録』五一頁①、五二頁②、五三頁③参照。
- (31) 大正十二年（一九二三）縮刷大蔵経刊行会により再訂されている。
- (32) 『六要鈔』所積本については、日野環『教行信証六要鈔』の「所依」本についての検討（『印仏研』一二二、一九六四）・『教行信証六要鈔』の「所依本」の性格についての検討①（『大谷学報』四三十一、一九六三）や佐々木瑞雲「新出佛光寺蔵『教行信証』の意義―『六要鈔』所積本の行方―」（『真宗研究』五〇、二〇〇六）の論考がある。
- (33) 正福幻堂（中井玄道）「教行信証校訂私考一」（『六条学報』一二四、一九一一）。
- (34) 金龍静「蓮如上人と『教行信証』」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』二八、二四〇）。
- (35) 平松令三「蓮如の聖教書写と本願寺の伝統聖教」（『講座蓮如』二所収、平凡社、一九九七）、「蓮如上人の聖教書写と本願寺伝統聖教」（『龍谷教学』三二、一九九七）。



# 結 論

本研究では、『教行信証』テキスト論を標榜し、〈作者〉と〈読者〉という視点を『教行信証』の書誌学的乃至文献学的研究に導入することで、〈作者〉親鸞による生成のみならず、どの時代にも必ず存在していたであろう、親鸞の名著『教行信証』を読み解く〈読者〉の立場によるテキストの変化・変容について明らかにしてきた。こうした点から、書誌学的・文献学的研究を営む真宗典籍学・真宗聖典学の進展を促し、『教行信証』読解の可能性の拡がりに対する基礎的研究として、人文情報学の枠組みの中における真宗聖教・典籍研究の方法論開拓に寄与できると考える。

本研究で明らかとなったのは、テキスト環境の差異、あるいは作者と読者の立場によるテキストの変化であった。

### 一 『教行信証』テキストの生成

『教行信証』テキストは、親鸞自筆本である坂東本から書写されることを起点として、諸本が生成されていく。親鸞は『教行信証』の生成にあたり、引用文を蒐集・配列し、その前後に御自釈を置いた。文類とし

ての主体となる引用文については、従来、経典「言」・論書「曰」・釈書「云」の書目に分けて把握される場合が多くあったが、本研究では、御自釈内容の検討から、親鸞には経典と論釈との二項に分ける見方があったことを明らかにした。そうして引用されたテキストについて、親鸞は、書物の独立性を確保しつつ、柔軟な態度を以て引用文を構成していった。経典や論書と釈書の間に有機的な関係性がある場合、一つは連続引用として扱う方法と、視覚的な方法を以て書写する方法が認められた。前者が『浄土論』『論註』の引用であり、後者が『無量寿経』『述文贊』における『述文贊』文の割註化である。

その視覚化を特徴とするのが、西本願寺本である。西本願寺本の体裁面の処置と本文整理については三つの意義が認められた。第一に、坂東本を臨写したことであり、親鸞の字体を模すことに加えて坂東本の内容を保存することが挙げられる。一行十二字前後という少ない字詰で書写されたことは、坂東本の字形や内容を親鸞から次代へ継承することを目的とした書写であることを意味し、西本願寺本を証本として位置づけるための措置であったと考えられる。第二に、頻繁に施される改行や註記によって引用文を構造把握して書写していたことである。親鸞真蹟の用例に基づき、朱註・右左傍註記・改行の三つを複合的に用いることで、引用文の整理を行っていたが、それは親鸞の御自釈の用例と同様に、経典と論釈の二項に区別したものであった。また、体裁面では偈頌体と句点を多用していた。引用原典が偈文の場合は、積極的に四言・五言・七言などに区切って一行数句で書写する偈頌体を用いる傾向にあり、坂東本と比しても圧倒的に多く見られる。また、前五巻に引用される願文・願成就文には句点が附されることが多く認められ、それ以外に第十八願成

就文や「大本」として引用される一群の中に、本来偈文でないものを独自に偈頌体とする例が散見された。西本願寺本の要文の視覚化という目的に対する措置がこの第二の特徴の要因であろう。第三に、朱を中心とする書き入れであり、坂東本の情報を基底に置きつつ、声点・右左訓・字音註によって音読のための漢字音を、返点・句点・読点・合符・字訓註・字義註によって訓読のために訓点を諸本から文字情報を集約した。ここに坂東本との関係における継承性とテキストとしての進展性とは西本願寺本の特徴として加えられる。

構造、本文、内容の三つの調整が行われた西本願寺本では、読解・音読・訓読という三つの「読む」要素の充実が図られていたと考えられる。そしてこの制作が親鸞示寂後に近い時期に行われたことが重要である。訓点や、音読に関する字音・声点が増加した事実からは、口伝との関係が浮かび上がる。西本願寺本は後に「伝授本」としての地位を帯びることになるが、そのための要件が既に西本願寺本書写時に備えられていたと考えられる。時代性を考慮すれば、親鸞示寂後、直弟の時代、十四世紀以降盛んとなる延書本や註釈書の作成に先立つ時代の書写であって、『教行信証』を読むという行為が書物の伝持・継承を意味していたと考えられる。

## 二 『教行信証』テキストの展開

『教行信証』の各本が成立するとき、いずれの場合においても、その時点での先行諸本・諸研究を踏まえ

て書写・翻刻が企図されている。従来は初稿本ではなく草稿本であるとされ、現在では「中書本」と位置づけられる坂東本の場合も、引用原典あるいは自身の書物を原本として書写が進められているのであって、坂東本以降の書写・刊行事業においても同様のことが繰り返し行われてきた。古くから積み重ねられてきた書写・翻刻・校訂作業の中に一貫してきた方針は、証本としての『教行信証』を求めていくという姿勢である。それぞれ何を底本にしてどのように書写・翻刻するかを探求すること自体を『教行信証』という書物の展開と捉えることができる。その繰り返しのよって、『教行信証』テキストが広く展開することとなったが、同時にそれだけの註釈・解釈が書き加えられ続けているということである。現在は坂東本・西本願寺本・専修寺本の複製本・写真版が公刊され、それが共有されるという充実した研究環境となっている。そうした立場にあつては、どの段階で加えられた校訂や解釈なのか、そしてなぜそれが求められたのかを、歴史的・社会的な文脈の中で検討し、それを体系化することが、『教行信証』諸展開の歴史を理解する一助となる。

その展開史を知る足がかりとして、本研究でまず取り組んだのが奥書である。書物に奥書が記されたとき、そこにはその本の書写者の意思表示が含まれている。坂東本に本奥書が無いことは、坂東本自身の性格を考える上で重要な要素である。一方、その後の『教行信証』諸本には、親鸞の入滅年時、祖師の遠忌、書物の来歴を記すことの裏側に、諸本の書写意識が垣間見れ、真筆として由緒ある本を書写した旨を示すことにも一定の意義があつた。その書写がなつたとき、テキストの書写者は奥書の〈作者〉となり、後の〈読者〉によつてさらに改変されていく事例が、西本願寺本奥書に見ることができよう。

時代を下って本願寺の寺院形成が進行すると、『教行信証』テキストが様々な形態を見せるようになる。その諸展開については、諸事象を文字テキスト・画像テキストとして概念付けることができ、聖典としての写伝・延書・引用、儀礼としての「正信偈」別行、伝記としての「後序」への引用、尊像としての「正信偈」銘文という動態として表出した。これらのそれぞれが本願寺の寺院としての形成と展開に役割を果たしてきたが、『教行信証』の写伝は、それらの動態の基幹となるものと考えられる。

そうした中で、本願寺系『教行信証』における共通形態の先駆けとなる存如授与本は、すでに正応四年版本が本願寺あるいはその門弟に強く影響していたとも推定される時代にあつて、版本系の跋文を略出した内容を有し、巧如所伝本から「伝授本」としての連続性も見られるとされていた。存如授与本は、本研究の考察により、八冊本の中でも最も厳格な書写体裁を採り、坂東本訂記前の情報や善如延書本の情報をも有するなど、遡れば坂東本に辿り着くであろう体裁や内容の他に、本願寺系諸本の体裁や内容を含んでいることも特徴としていることが確認できた。このことが、本願寺聖教として『教行信証』を書写し伝授することのできる用件であつたと考えられる。さらに存如授与本と同時代に成立した文明本と比較すれば、同じく坂東本から派生していったテキストが、ある時代に諸本として並置されたときに、別系統と考えられる関係にあつたとしても、註記・註釈的な内容として、それぞれのテキスト内に組み込まれることで、系統分類を越えた新たな関係性を作り出していたことを指摘した。祖本系統を探るのみでは明らかにし得ない同時代テキストの交渉があつたことは、諸本研究にあたって注意すべき事項であろう。

さらに、古写本からその後の書写本・版本への展開像の典型として捉えることができるのが、主として各巻冒頭に位置する標挙・標列であった。「教巻」と「化身土巻」の標挙を検討することにより、古写本（第一類）と八冊本系（第二類）の系統分類が想定され、前者に属する西本願寺本と後者に属する存如授与本との接続点が、標挙・標列に見られることを指摘した。

### 三 テクスト環境の差異

ではどうしてそのような展開が繰り返されたのであろうか。様々なテキストとの関連性を考慮すれば、仏典の漢訳以来の大きな歴史の中で『教行信証』の生成と展開を読み解かなければならないだろう。

その出発点となり基層を構築するのが、一切経を初めとする仏教書、経論章疏と、その周辺典籍の成立と伝来である。親鸞による『教行信証』執筆以前では、若き頃に筆をとったとされる『観無量寿経註』『阿弥陀経註』は、仏典群の中から經典と註疏の双方を抽出し書写したものである。『般舟讚』の発見や『楽邦文類』の将来など、『教行信証』における引用文との一致や異なりなどからも、その書写本の時代や価値が様々な評価されている。また、親鸞の特徴的な字体や引用の傾向などから宋版一切経が古くから着目され、近年では、津田徹英によって、鎌倉における一切経校合への関与や蓮華王院での修学の可能性など、親鸞の来歴を推察する試みがなされている。これらはいずれも、『教行信証』への繋がりとして重んじなければなら

ない。これらは、〈教行信証前史〉と位置づけられよう。

次に、〈教行信証制作期〉に至れば、一切経群を基盤とすることは変わらず、経論章疏等の書写・抄出に、配列・私積が加わって、坂東本テキストの完成を見ることになる。坂東本テキストが一応の成立を見たのは、寛元元年（一二二四）の尊蓮による書写と目されているが、その成立以降は、坂東本自体に増改訂が加えられていく中で、専信によって書写され、諸本間の関係が生まれることになった。さらに同時期からは親鸞による他の書写・制作活動が多く見られるようになり、そこに引用される文と『教行信証』テキスト関係性が生じた。一方、様々な引用法や書法で書写された引用文は、親鸞自身による經典書写によって集積されてきた背景がある。さらに『教行信証』成立以降は、銘文や著作中の引用という形で表出されることになった。親鸞は『涅槃経』や『大集経』などの断簡を多く残しており、他経への深い関心が窺えるとともに、引用文の増補・修正と関わるものを書写した姿が窺えるのである。また、親鸞八〇歳代以降、名号・影像等の讚銘に『大経』・『浄土論』などを写し、『大経』を中心に要文の視角化が行われたことは、法義の根幹の視覚化が図られたことを意味する。

さらに、〈親鸞示寂後〉になれば、坂東本を臨写しながら編集を加えた西本願寺本のような書写本、坂東本を底本として出版された正応版本、それらの忠実な書写本、いずれもの特徴を取り入れた書写本など、〈作者〉とは離れた場所で、諸本が成立することになった。〈作者〉から離れたという意味でいえば、漢文本からの延書、異文、諸本による校勘、御自釈や「正信偈」などの一部抽出（別行）などのように、意図的な改

変を加えられていくことで、『教行信証』テキストが再構築されていった。

時代で分ければ、このように大きく三つの時期で捉えることができるが、その内容を考えてみれば、ある一定の行為が、その基底をなしていたと考えられる。それは、テキストの書写と抽出である。(作者)・(読者)によって書写と抽出が重ねられていくことが、『教行信証』テキストの生成と展開の基底にあり、その目的や依拠するテキストの選定によって、諸本間の違いが生じる結果となつて表れているのである。つまり、『教行信証』のテキストの生成と展開において、諸本間の相異は、それぞれの成立時におけるテキスト環境の差異が要因であると考えられる。

坂東本の場合、親鸞の用いた経典・論書・釈書等の原典(引用関係)、親鸞自身のメモや手控え等(草稿)、本文とは別に書き記した註記等(本文に対する註釈)、本文とは別に書物を成立させるために記された題号・撰号等(成立に関する情報)にテキストを分類できる。一方、西本願寺本の場合は坂東本という親鸞が作成したある種の完成本を基盤としつつ、情報の追加と整理を行っている。坂東本との重複と差異がここに見られ、この差異のためにテキスト享受の変化が起こった。さらに十四世紀になると、書写の形態に変化が生まれ、引用・註釈の対象となり、延書も普及した。このように展開することで、『教行信証』は(読者)によつて読み継がれる中で、幾重もの異文・異本が生じるのである。

時代的変遷と、(作者)と(読者)の異なりの中で、(読者)としての理解を所処に鑲めたすがたが西本願寺本の書誌に表出している。西本願寺本は坂東本を書写する傍ら、その他の親鸞真蹟等を媒介として本文を

整備することで、親鸞からの継承性と自らの創造性を担保し、書写本としての正統性と信頼性を確保した。このことは、坂東本より後発の本であっても、決して補助・補完するただけのものではないこと、さらに坂東本を写すだけに留まらず、他の諸本の情報も加味した、独自テキストの形成が行われたことを意味している。

坂東本からの変化は、同一典籍の様々な写本や版本・翻刻本に対峙する上で、親鸞真筆本とその周辺にある書写本、親鸞真蹟や諸著作を含む典籍体系の中に『教行信証』というテキストを捉えるべきことを暗示しており、書写本同士の関係性の中に、更なる享受の基盤が築かれているといえる。この体系の中で諸本それぞれ創造性を認めることによって、経典が、『教行信証』が、どう読まれてきたのか、どう伝えられてきたのかという親鸞以来の長年の営みについての把握が可能となる。

#### 四 〈作者〉と〈読者〉

〈作者〉による草稿や〈読者〉によるテキストへの関与については、周辺諸分野で書物のテキスト論や生成論、史料論などが急速に発展し、一定の成果を見せている。それらの成果や方法を援用しつつ、各時代のテキスト環境と書写本間のテキスト関係を分析してきた。引用文それぞれの独立性に注意しつつ、周辺の文、同一書物の他の引用、引用原典、親鸞真蹟、その他一切経・経論章疏などとの関係性を重視し、書物毎の特

性をまとめることで、『教行信証』テキストがどのように生成されたのかを捉えていく。その点、問題箇所を異文や特異箇所として個別に取り上げて論じるような、これまで多くなされてきた研究方法とは一線を画した方法を取ったのが、本研究の特色であった。その研究の対象として、現存唯一の親鸞真蹟である坂東本、親鸞示寂後に坂東本を臨写した立場にある西本願寺本、中世本願寺において伝授本の完成形として作成された存如授与本の三本を中心に各時代に於けるテキスト生成の在り方を考察することで、親鸞から本願寺へと展開していく中で『教行信証』テキストがどのような動きを見せたのかを明らかにしえたと思う。具体的には、諸本の奥書、割註、標拳・標列、句点、改行、偈頌体、註記など、書誌学的見地から細分される書物を構成する要素それぞれの特徴を、差異性を以て位置付けるだけでなく、共通性を以て結びつけて再構築していくことで、『教行信証』諸本のみならず周辺の関連典籍・史資料を含めた重層的・複合的なテキスト関係を明らかにしえたことを本研究の成果としたい。

※本研究は以下の論考及び研究発表に基づき、加筆・修正を加えた。

## 第一章

「奥書から見る『教行信証』の書写」(『真宗研究会紀要』四七、二〇一五)

## 第二章

「『教行信証』における割註について」(『印仏研』六一―二、二〇一三)

## 第三章

「親鸞聖人と弥陀仏土―真仏土巻における曇鸞引文を中心に」(『龍谷大学大学院文学研究科研究紀要』三三、二〇一三)

「教行信証所引の讚阿弥陀仏偈について」(『真宗学』一二七に発表要旨掲載、二〇一三)

「坂東本初期改訂について―真仏土巻『述文贊』周辺を中心に―」(『浄土真宗総合研究』八に要旨掲載、二〇一三)

〇一三)

## 第四章

「西本願寺本『教行信証』における註記の特徴について―坂東本との比較から―」(『印仏研』六二―一、二〇一三)

「西本願寺本『教行信証』の本文整理」(『印仏研』六四―一、二〇一五)

## 第五章

『教行信証』の書写における改編について―西本願寺本を中心に―（『宗教研究』八八、二〇一五）

## 第六章

「本願寺の系譜―歴代宗主の事績と聖教」（『浄土真宗総合研究』一〇、二〇一六）

「本願寺と『教行信証』（二〇一六年度九月に開催された日本宗教学会第七十五回学術大会にて発表、『宗教研究』九〇に掲載予定）

## 第七章

『教行信証』標挙・標列の書誌学的検討」（『真宗研究会紀要』四六、二〇一四）



附表一 『教行信証』 坂東本・西本願寺本・存如授与本

関連略年表

附表二 『教行信証』 引用文分類表

参考文献一覽

# 附表一 『教行信証』 坂東本・西本願寺本・存如授与本 関連略年表

〈凡例〉

- 一、本表は、本論において主に取り上げた坂東本、西本願寺本、存如授与本について、親鸞示寂後から現代までの主要事項をまとめたものである。
- 二、坂東本に関する事項は㊸、西本願寺本に関する事項は㊹、存如授与本に関わる事項は㊺と記した。
- 三、関連項目には、刊本や翻刻例、重要な書誌学的研究などを適宜略示している。

年号(西暦)	主要事項	関連項目
文永一一(一二七四) 一二(一二七五) 弘安 六(一二八三) 正応 四(一二九一) 応長 元(一三一一)	◎親鸞一三回忌 ㊸坂東本を臨写か(浄得寺本奥書) ㊹明性、性海より坂東本相伝(坂東本奥書) ㊺正応版本出版か(中山寺本奥書) ㊻覚如・存覚、大町如道に『教行信証』伝授(鏡御影・存覚一期記)	
宝徳 二(一四五〇) 宝徳 三(一四五二)	㊼蓮如、「行巻」「真仏土巻」書写 ㊽存如、「教巻」「化身土巻末」奥書書写 ㊾蓮如、補修の際に表紙外題染筆(現・題簽)	
※室町期 ※室町期 ※室町期	㊿本向房、「腹籠りの聖教」「肉付の聖教」の伝説(蓮如上人縁起) ㊽弘願寺本書写(一八〇〇年代末に焼失) ㊾浄得寺本書写	
※室町末期		

<p>※鎌倉～江戸期          ※江戸前中期          ※江戸前中期          寛文 元(一六六一)          ※江戸中後期          文化 八(一八一)          ※江戸中後期          文政一〇(一八二七)          天保一一(一八四〇)          文久 元(一八六一)</p>	<p>⑧欠落・欠損発生(序・教・真・化巻の一部)          ⑧奈良県教行寺蔵本(坂東本模本) 書写          ⑧欠落発生(「化身土巻」の一部)          ◎親鸞四〇〇回忌          ⑧真宗大谷派蔵内局本(坂東本模本) 書写          ◎親鸞五五〇回忌          ⑧江戸期修復。丹山順藝、大谷大学図書館蔵旧高倉学寮本・同禿庵文庫本(坂東本模本) 書写か。          ⑧本山での「御真影宝物拝覧」に展示『東本願寺史料』一          ⑧島根県明清寺本(坂東本模本) 書写          ◎親鸞六〇〇回忌</p>	<p>寛永版「一六六三」          正保版「一六四六」          明暦版「一六五七」          寛文九年版「一六六九」          寛文十三年版「一六七三」          天保版「一八四〇」</p>
<p>明治一二(一八七九)          四〇(一九〇七)          四四(一九一一)          大正 二(一九一三)          九(一九二〇)          一〇(一九二二)          一一(一九二二)          一二(一九二三)</p>	<p>⑧明治初期、宝物聚覧会で度々展観          ⑧弘願寺本を校合に用いる(大谷大学蔵)          ⑧佐々木月樵、拝観(佐々木一九一〇)          ◎親鸞六五〇回忌          ⑧禿氏祐祥、拝観(禿氏一九四九)          ⑧辻善之助・八代国治、拝観(辻一九二〇)、妻木直良同席          ⑧辻善之助、拝観(辻一九二〇)          ⑧日下無倫、拝観(日下一九二二)          ⑧大正版影印本刊行事業(可西大秀・山上正尊)          ⑧日下無倫、欠落箇所の一部発見(「教巻」『平等覚経』)          ⑧大正期修復(「教巻」発見箇所の挿入)          ⑧大正版影印本『顕浄土真実教行証文類』六冊刊行          ◎立教開宗七〇〇年          ⑧法宝物蒐覧会にて展観</p>	<p>『真宗聖典全書』「一九〇七」<sup>④</sup>          「山田文昭一九一四」<sup>④</sup>          「中井玄道一九一九」<sup>④</sup>          「妻木直良一九一九」<sup>④</sup>          「中井玄道一九二〇」<sup>④</sup>          「中澤見明一九二〇」<sup>④</sup>          「禿氏祐祥一九二二」<sup>④</sup>          「吉澤義則一九二四」<sup>④</sup></p>

<p>昭和 元 (一九二六) 一一 (一九三六)</p>	<p>④大正版影印本『教行信証』四冊刊行(禿氏祐祥解説) ④関東大震災で損傷、京都へ ④『眞實教行証文類』(活字版) ④大正版縮小影印本『顕浄土真実教行証文類』四冊刊行</p>	<p>『大正蔵』八三「一九三一」④↓対校本④ 「梅原真隆」九三六④ 「鈴木宗忠」九三八④ 柏原祐義『眞宗聖典』「一九三五」④ 『眞宗聖教全書』「一九四一」④ ↓対校本④ 「藤田海龍」一九四四④</p>
<p>昭和二七 (一九五二) 二九 (一九五四)</p>	<p>④国宝指定 ④昭和期修復(赤松俊秀・山川文吾・禿氏祐祥) ④影印本刊行事業(赤松俊秀・山川文吾・禿氏祐祥) ④昭和版影印本『親鸞聖人 国宝 顕浄土真実教行証文類影印本』六冊刊行 ◎親鸞七〇〇回忌 ④昭和版影印本『親鸞聖人 蹟 国宝 顕浄土真実教行証文類影印本』六冊再刊 ◎親鸞誕生誕八〇〇年・立教開宗七五〇年 ④『親鸞聖人眞蹟集成』第一・二巻刊行</p>	<p>永田文昌堂刊『眞宗聖典』「一九五六」④ 「潟岡孝昭」一九六五④ 本願寺蔵版(改版)「一九六七」④ 『親鸞聖人全集』「一九六八」④</p>
<p>四八 (一九七三) 五〇 (一九七五)</p>	<p>④重要文化財指定 ④重要文化財 教行信証(講談社) 刊行(宮崎圓遵解説) ④京都市立博物館に預託 ④影印本『顕浄土真実教行証文類』六冊(美乃美) 刊行 ④『日本国宝展』(東京国立博物館)に展示</p>	<p>本願寺蔵版(再版)「一九八〇」④ 「重見一行」一九八一④ 『眞宗史料集成』「一九八三」④ 『原典版』「一九八五」④↓対校本④ 「鳥越正道」一九九七④</p>
<p>平成 二 (一九九〇) 五 (一九九三) 一〇 (一九九八) 一一 (一九九九) 一五 (二〇〇三)</p>	<p>④奈良国立博物館「特別展 鎌倉仏教―高僧とその美術―」に展示 ④蓮如上人五百回忌にあたり、京都市立博物館特別展覧会『蓮如と本願寺―その歴史と美術―』に出陳 ④眞宗大谷派の所有が確定 ④平成期修復(文化庁・京都市文化財保護課・京都市立博物館・岡墨光堂、宗宝宗史蹟保存会調査委員)、影印本刊行事業 ④京都市立博物館にて特別展示</p>	

平成一七（二〇〇五）

一九（二〇〇七）

二〇（二〇〇八）

二一（二〇〇九）

二三（二〇一一）

二四（二〇一二）

二七（二〇一五）

④東京国立博物館『西本願寺展―御影堂平成大修復事業記念―』に出版  
⑤平成版影印本『顕浄土真実教行証文類（坂東本）影印本』六冊刊行

⑥『増補親鸞聖人真蹟集成』第一・二巻刊行

⑦完全複製本作成完了

⑧九州国立博物館『本願寺展―親鸞と仏教伝来の道―』に出版

⑨広島県立美術館・徳島市立徳島城博物館『本願寺展』に出版

⑩名古屋市博物館・石川県立歴史博物館『本願寺展』に出版

◎親鸞七五〇回忌

⑪法然上人八百回忌・親鸞聖人七百五十回忌特別展『法然と親鸞―ゆかりの名宝』（東京国立博物館）に出版

⑫親鸞聖人七百五十回忌・真宗教団連合四十周年記念『親鸞展―生涯とゆかりの名宝』（京都市美術館）に出版

⑬平成期影印本『顕浄土真実教行証文類』復刻（西本願寺本）』六冊刊行

⑭平成期縮刷本『本願寺蔵 顕浄土真実教行証文類 縮刷本』上下刊行

⑮大谷大学博物館二〇一二年年度特別展『親鸞―真宗開頭』（別冊・坂東本）『教行信証』について』

⑯京都国立博物館・京都仏教各宗学校連合会特別展覧 第一〇〇回大蔵会記念『仏法東漸―仏教の典籍と美術―』に出版

三木彰円『坂東本・教行信証』と親鸞』

『真宗』[二〇〇七-〇九] ⑥

『聖典全』二巻 [二〇一一] ⑥ ↓ 対校本 ④⑤

『龍谷教学』二〇一二 ⑥④

『顕浄土真実教行証文類』翻刻篇・付録

篇一・付録篇二刊行 [二〇一二] ⑥

## 附表二 『教行信証』 引用文分類表

〔凡例〕

① 本表は、『教行信証』の引用文の導入箇所について、經典別・巻別に分けて示したものである。A表は經典、B表は論書・積書、C表は御自釈中引文についてである。

② A表は上段から經典名、『教行信証』の巻、引用法の順に、B表は上段から書名・人名、『教行信証』の巻、引用法の順に、C表は上段から『教行信証』の巻、御自釈名、引用法の順に示した。括弧内は『聖典全』二の頁数を示し、「||」を用いて書名を示したものは、引用箇所が明示されていないものについて適宜附した。

③ 書名・人名については、『教行信証』に引用される順に示した。A表の『無量寿経』『如来会』、B表の天親『浄土論』と曇鸞『論註』については、連続引用される場合が多くあるため、同一行に収めた。同一巻内で連続して引用される場合は一点「、」を附し、それ以外は句点「。」を附して区別した。

④ 漢字は、新字に統一した。

### A表 經典の引用法

經典名	卷	引用法〔『聖典全』二）
無量寿経	教	「大无量寿経言」（10）、「无量寿如来会言」（11）。
如来会	行	「諸仏称名願大経言」（15）、「又言」（15    無量寿経）、「願成就文経言」（15    無量寿経）、「又言」（16    無量寿経）、「又言」（16    無量寿経）、「无量寿如来会言」（16）、「又言」（16    如来会）。
	信	「故大本言」（49）。 「故大本言」（56    無量寿経）。 「至心信楽本願文大経言」（67）、「无量寿如来会言」（68）、「本願成就文経言」（68）、「無量寿如

来会言」(68、下欄補記「菩提流支訳)、「又言」(68 || 無量寿経)、「又言」(68 || 如来会)、「又言」(68 || 如来会)。

「是以大経言」(81)、「無量寿如来会言」(81)。

「本願信心願成就文経言」(83 || 無量寿経)、「又言」(84 || 如来会)。

「是以本願欲生心成就文経言」(88)、「又言」(88 || 如来会)。

「是以大経言」(93)、「又言」(94 || 如来会)、「又言」(94 || 無量寿経)、「又言」(94 || 如来会)。

「大本言」(97 || 無量寿経)、「又言」(97 || 無量寿経)、「又言」(97 || 無量寿経)。

「大本言」(97 || 無量寿経)、「又言」(98 || 平等覚経)。

「大本言」(98 || 無量寿経)、「無量寿如来会言」(99)、「又言」(99 || 無量寿経)、「又言」(99 || 無量寿経)、「又言」(99 || 如来会)、「又言」(99 || 如来会)。

「大経言」(103)、「又言」(103 || 如来会)。

「必至滅度願文大経言」(133)、「無量寿如来会言」(133)、「願成就文経言」(134 || 無量寿経)、「又言」(134 || 無量寿経)、「又言」(134 || 如来会)。

真

「大経言」(155)、「又願言」(155 || 無量寿経)、「願成就文言」(155 || 無量寿経)、「無量寿如来会言」(156)。

化

「是以大経願言」(183)。

「又大経言」(184)、「又言」(185)、「如来会言」(186)、「大経言」(186)、「又言」(186 || 如来会)。

「是以大経願言」(201)、「又言」(201 || 無量寿経)、「又言」(201 || 無量寿経)、「無量寿如来会言」(201)。

「大本言」(205 || 無量寿経)

平等覺經	<p>教 「平等覺經言」(12)。</p> <p>行 「無量清淨平等覺經卷上言」(17)。</p> <p>信 「又言」(98)。</p> <p>真 「無量清淨平等覺經言」(157、上欄註記「帛延詁」)。</p> <p>化 「平等覺經言」(20)。</p>
大阿彌陀經	<p>行 「仏説諸仏阿彌陀三那三仏薩樓仏檀過度人道經言」(16、上欄註記「大阿彌陀經云廿四願經卜云」)。</p> <p>信 「大阿彌陀經<small>謙友</small>言」(97)。</p> <p>真 「仏説諸仏阿彌陀三那三仏薩樓仏檀過度人道經<small>女謙</small>言」(157)。</p>
悲華經	<p>行 「悲華經大施品之二卷言<small>曇無讖</small>」(19)。</p> <p>化 「悲華經大施品言」(184)。</p>
涅槃經	<p>行 「涅槃經言」(54)、「又言」(54)、「又言」(55)、「又言」(55)。</p> <p>信 「涅槃經言」(83)。「涅槃經言」(84)、「又言」(85)、「又言」(85)。「涅槃經言」(94)。「涅槃經言」(98)。「涅槃經言」(104)。「夫仏説難治機涅槃經言」(105)、「又言」(105)。「又言」(112)、「又言」(121)。</p> <p>真 「涅槃經言」(159)、「又言」(160)、「又言」(160)、「又言」(160)、「又言」(161)、「又言」(162)、「又言」(163)、「又言」(163)、「又言」(164)、「又言」(167)、「又言」(167)、「又言」(168)、「又言」(168)。「涅槃經言」(205)、「又言」(206)、「又言」(207)。「涅槃經言」(221)。</p>
華嚴經	<p>行 「華嚴經言」(55    晉詁・唐詁)。</p> <p>信 「華嚴經言」(85    晉詁)、「又言」(85    唐詁)、「又言」(85    唐詁)。</p> <p>化 「華嚴經言」(208    唐詁)、「又言」(208    唐詁)。「又言」(239    晉詁)。</p>

觀無量壽經	信	「又言」(99)。
不空羼索經	真	「不空羼索神變眞言經言」(158)。
阿弥陀經	化	「阿弥陀經言」(202)。
般舟三昧經	化	「般舟三昧經言」(221)、「又言」(221)。
大集經	化	「大乘大方等日藏經卷第八魔王波旬星宿品第八之二言」(221)、「日藏經卷第九念仏三昧品第十言」(223)、「日藏經卷第十護塔品第十三言」(225)、「大方等大集月藏經卷第五諸惡鬼神得敬信品第八上言」(226)、「月藏經卷第六諸惡鬼神得敬信品第八下言」(226)、「大方等大集經卷第六月藏分中諸天王護持品第九言」(227)、「月藏經卷第七諸魔得敬信品第十言」(237)、「提頭賴吒天王護持品云」(238)、「月藏經卷第八忍辱品第十六言」(238)、「又言」(239)。
首楞嚴經	化	「首楞嚴經言」(239)。
灌頂經	化	「灌頂經言」(240)。
地藏十輪經	化	「地藏十輪經言」(240)、「又言」(240)。
集一切福德三昧經	化	「集一切福德三昧經中言」(240)。
本願藥師經	化	「本願藥師經言」(240)、「又言」(240)。
梵網經	化	「菩薩戒經言」(241)。
仏本行集經	化	「仏本行集經第四十二卷優婆斯那品言」(241)、「上欄註記「闍那崛多記」

B表 論書・釈書の引用法

人名 書名	卷 引用法 (『聖典全』二)
憬興 述文贊	<p>「憬興師云」(12)。</p> <p>「憬興師云」(40)、「又云」(40)、「又云」(41)、「又云」(41)、「又云」(41)、「又云」(41)、「又云」(41)、「又云」(41)。</p> <p>「憬興師云」(178)。</p> <p>「憬興師云」(186)。</p>
龍樹 十住論	<p>「十住毘婆沙論曰」(19    入初地品)、「問曰」(21    地相品、導入無し)、「又云」(23    淨地品)、「又曰」(23    易行品)。</p>
天親 淨土論 曇鸞 論註	<p>「淨土論曰」(25)、「又曰」(25    淨土論)、「論註曰」(25)、「又云」(26)。</p> <p>「是以論註曰」(46)。「論曰」(51    論註)。「淨土論曰」(56    論註)、「又曰」(56    論註)。「論註曰」(69)。</p> <p>「論註曰」(87)、「又言」(87    論註)。</p> <p>「淨土論曰」(88    論文を含む論註)、「又云」(88    論文を含む論註)、「又論曰」(88    論文を含む論註)。</p>
信	<p>「論註曰」(91)。「論註曰」(96)、「又云」(96    論註)。「報道論註曰」(125)。</p> <p>「淨土論曰」(134    論文を含む論註)、「又言」(135    論註)、「又論曰」(135    論文を含む論註)、「淨土論曰」(137)、「論註曰」(137)、「又言」(137    論註)。</p>
証	<p>「淨土論曰」(170)、「註論曰」(170)、「又云」(170    論註)、「又云」(170    論註)、「又云」(172    論註)、「又云」(172    論註)、「又云」(172    論註)。</p>
真	<p>「論註曰」(194)。</p>
化	

曇鸞讚阿弥陀仏偈	道綽安樂集	善導五部九卷
<p>「讚阿弥陀仏偈<small>曇鸞和尚造也</small>」(70)。  「讚阿弥陀仏偈<small>曇鸞和尚造</small>」(173)。</p>	<p>「安樂集云」(29)、「又云」(30)、「又云」(30)、「又云」(31)。「安樂集云」(50)。  「安樂集云」(99)。  「安樂集云」(136)。  「安樂集云」(194)、「又云」(195)。「是以玄忠寺綽和尚云」(211)、「又云」(212)、「又云」(212)、「又云」(213)。「安樂集云」(255)。</p>	<p>「光明寺和尚云」(31) 〓 禮讚、「又云」(32) 〓 禮讚、「又云」(32) 〓 禮讚、「又云」(33) 〓 禮讚、「又云」(33) 〓 禮讚、「又云」(34) 〓 玄義分、「又云」(34) 〓 玄義分、「又云」(35) 〓 觀念法門、「又云」(35) 〓 觀念法門、「又云」(49) 〓 散善義、「又云」(49) 〓 禮讚、「又云」(49) 〓 散善義。  「光明師云」(56) 〓 玄義分、「又云」(57) 〓 般舟讚。  「光明寺觀經義云」(70) 〓 散善義、「又云」(70) 〓 序分義、「又云」(70) 〓 散善義、「又云」(78) 〓 般舟讚。「光明寺和尚云」(82) 〓 散善義。「光明寺和尚云」(89) 〓 散善義。「觀經義云」(90) 〓 玄義分、「又云」(90) 〓 序分義、「又云」(90) 〓 定善義。「光明寺和尚云」(94) 〓 散善義、「又云」(94) 〓 散善義。「光明云」(96) 〓 定善義。「光明寺和尚云」(98) 〓 般舟讚、「又云」(98) 〓 禮讚。「光明師云」(101) 〓 般舟讚、「又云」(101) 〓 禮讚、「又云」(101) 〓 禮讚、「又云」(101) 〓 觀念法門、「又云」(102) 〓 序分義、「又云」(102) 〓 散善義。「故光明師云」(104) 〓 般舟讚、「又云」(104) 〓 法事讚、「又云」(104) 〓 般舟讚。「光明師云」(104) 〓 法事讚。「光明寺和尚云」(128) 〓 散善義、「又云」(128) 〓 法事讚)。</p> <p>「光明寺疏云」(136) 〓 玄義分、「又云」(136) 〓 定善義)。  「光明寺和尚云」(174) 〓 玄義分、「又云」(177) 〓 序分義、「又云」(178) 〓 定善義、「又云」(178) 〓 眞</p>
信	行	眞



永觀 往生捨因	信	「言五逆者」(129)。
智覺	信	「禪宗智覺讚念仏行者云」(104    樂邦文類)。
王日休 龍舒淨土文	信	「王日休云」(102)。
天台 摩訶止觀 法界次第	化	「天台法界次第云」(252)。「止觀魔事境云」(253)。
智昇 集諸經禮懺儀	信	「止觀一云」(96)。
法然 選採本願念仏集	行	「真元新定釈教目錄卷第十一云」(78)。「禮讚」(78    集諸經禮懺儀)。
源信 往生要集	行	「智昇師集諸經禮懺儀下卷云」(50)。
飛錫 念仏三昧玉王論	行	「選採本願念仏集 <small>源空</small> 云」(48)。「又云」(48)。
吉藏 觀經義疏	行	「往生要集云」(46)、「又云」(47)、「依此六種功德信和尚云」(47)、「又云」(47)、「又云」(48)。
法位 大經義疏	行	「往生要集云」(78)、「又云」(78)。
用欽 觀經扶新論	信	「首楞嚴院要集引感禪師釈云」(186)。「源信依止觀云」(253)。「如華嚴經偈云」(256    華嚴經を合 心往生要集)。
戒度 正觀記 開持記	行	「禪宗飛錫云」(46)。
觀經扶新論	化	「法相祖師法位云」(46)。
用欽	行	「三論祖師嘉祥云」(46)。
	信	「律宗用欽云」(45)、「上欄註記「元照之弟子也」」、「又云」(46)。
	行	「律宗用欽云」(92)。「律宗用欽師云」(103)。
	化	「度律師云」(253    觀經扶新論)。
	信	「戒度開持記云」(93)。
	行	「律宗戒度云」(45    正觀記、上欄註記「元照之弟子也」)。
	化	「慈雲大師云」(252    樂邦文類)。
	行	上欄註記「遵式也」。

C表 御自釈中引文

卷	御自釈	引用法(『聖典全』二)
行	六字釈	「經言」(36    無量壽經)、「釈云」(36    十住論)。
	行信利益	「龍樹大士曰」(49    十住毘婆沙論)、「曇鸞大師云」(49    論註)。
	両重因縁	「宗師言」(49    礼讚)、「又云」(49    五会法事讚)、「又云」(49    散善義)。
	行一念釈	「經言」(50    無量壽經)、「釈言」(50    散善義)。
	偈前序説	「披宗師釈言」(60    論註)。
信	三一問答 字訓釈	「故論主建言」(80    浄土論)。
	至心釈 追釈	「涅槃經言」(82)、「釈云」(82    散善義)。
	法義釈 結示	「是故建言一心」(90    浄土論)、「又言如彼名義欲如實執行相應故」(90    浄土論)。
	明所被機 料簡	「今大經言」(125)、「或言」(125    如来会)。
真	真仏土結釈	「經言」(179    涅槃經)、「亦經言」(179    涅槃經)。
	真仮対弁	「大經言」(179)、「又言」(179    大阿弥陀經)、「論曰」(179    浄土論)。

馬鳴 起信論	真	「起信論曰」(179    論文を含む念仏三昧宝王論)。
孤山智圓 小経義疏	化	「起信論曰」(241)。
最澄 末法灯明記	化	「孤山疏云」(205)。
法琳 弁正論	化	「披閱末法燈明記 <small>最澄</small> 撰 <small>法琳</small> 曰」(213)。
諦觀 天台四教儀	化	「弁正論 <small>撰法琳</small> 曰」(242)、「又云」(251)。
神智 天台四教儀集解	化	「高麗觀法師云」(252)。
孔子 論語	化	「神智法師釈云」(252)。
	化	「論語云」(253)。

		化
	觀經隱顯 十三文例	<p>「大經言」(180 〓平等覺經)、「論曰」(180 〓淨土論)。</p> <p>「大經言」(180)、「論曰」(180 〓淨土論)、「又云」(180 〓論註)、「又云」(180 〓法事讚)。</p> <p>「是以經言教我觀於清淨業處」(188 〓觀經)、「言教我思惟者」(188 〓觀經)、「言教我正受者」(188 〓觀經)、「言諦觀彼國淨業成者」(188 〓觀經)、「言廣說衆譬」(188 〓觀經)、「言汝是凡夫心想羸劣」(188 〓觀經)、「言諸仏如來有異方便」(188 〓觀經)、「言以仏力故見彼國土」(188 〓觀經)、「言若仏滅後諸衆生等」(188 〓觀經)、「言若有合者名為龜想」(188 〓觀經)、「言於現身中得念仏三昧」(188 〓觀經)、「言發三種心即便往生」(188 〓觀經)、「又言復有三種衆生當得往生」(188 〓觀經)。</p>
	觀經隱顯 明真実	<p>「大經言信樂」(196)、「觀經說深心」(196)、「小本言一心」(196 〓小經)。</p>
	觀經隱顯 挙釈述意	<p>「依宗師意云」(196 〓玄義分)、「故言」(196 〓定善義)、「故言」(196 〓定善義)。</p>
	觀經隱顯 明淨土門	<p>「綽和尚云萬行」(198 〓安樂集)、「導和尚稱雜行」(198 〓散善義)、「感禪師云諸行」(198 〓群疑論)。</p>
	小經隱顯 正明隱顯	<p>「經說多善根」(199 〓襄陽石碑小經)、「或云」(199 〓法事讚)、「或云」(199 〓法事讚)、「釈云」(199 〓法事讚)。</p>
	小經隱顯 別弁実義	<p>「經言執持」(199 〓小經)、「經言一心」(199 〓小經)、「經始稱如是」(200)。</p>
	真門釈 結誠	<p>「故宗師云」(209 〓礼讚)。</p>
後序		<p>「選撰本願念仏集」(254)、「南無阿弥陀仏往生之業念仏為本」(254 〓選撰集)、「釈綽空」(254)、「南無阿弥陀仏」(254)、「若我成仏十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不者正覺彼仏今現在成仏當知本誓重願不虛衆生称念必得往生」(254 〓礼讚)。</p>

## 参考文献一覽

### 書籍

- 赤尾栄慶・宇都宮啓吾監修・執筆 『坂東本『顕浄土真実教行証文類』角点の研究』(東本願寺出版、二〇一五)
- 明星聖子・納富信富編 『テキストとは何か―編集文献学入門』(慶應義塾大学出版会、二〇一五)
- 浅田正博 『存覚上人書写本 末法灯明記講読』(永田文昌堂、一九九九)
- 阿部泰郎 『中世文学と寺院資料・聖教』(竹林舎、二〇一〇)
- 阿部泰郎 『中世日本の宗教テキスト体系』(名古屋大学出版会、二〇一三)
- 網野善彦 『蒙古襲来(下)』(小学館、一九九二) \*初版一九七四
- 家人博徳 『中世書写論―俊成・定家の書写と社会』(勉誠出版、二〇一〇)
- 石井教導 『選択集全講』(平楽寺書店、一九九五) \*初版一九六七
- 石田茂作 『写経より見たる奈良町仏教の研究』(東洋書房、一九八二) \*初版一九六六
- 今井雅晴 『親鸞と東国門徒』(吉川弘文館、一九九九)
- 上村静 『旧約聖書と新約聖書―「聖書」とはなにか』(新教出版社、二〇一一)
- 宇野恵教 『本典華嚴経要文講述』(永田文昌堂、二〇一三)
- 梅原真隆 『教行信証序説』(親鸞聖人研究発行所、一九三四)
- 梅原真隆 『教行信証新釈』(専長寺文書伝道部発行所、一九五五―一九五九)

梯信暁 『宇治大納言源隆国編 安養集 本文と研究』(百華苑、一九九三)

加藤仏眼 『教行信証堅徹』(永田文昌堂、一九六七)

門川徹真 『『教行信証』の書誌学的研究』(永田文昌堂、二〇一六)

片桐洋一 『平安文学の本文は動く―写本の書誌学序説』(和泉書院、二〇一五)

禿諦住 『行信の体系的研究』(法藏館、一九三五)

韓普光 『新羅浄土思想の研究』(東方出版、一九九一)

日下無倫 『阪東真本教行信証』(丁字屋書店、一九二三)

日下無倫 『真宗史の研究』(平楽寺書店、一九三一)

佐々木求巳 『真宗典籍刊行史稿』(伝久寺、一九七三)

佐々木月樵 『親鸞聖人伝』(無我山房、一九一〇) \*佐々木教悟監修・長崎法潤・木村宣彰編『佐々木月樵全集第三卷

親鸞聖人伝』(うしお書店、二〇〇一)として再刊

重見一行 『教行信証の研究―その成立過程の文献学的考察』(法藏館、一九八一)

重見一行 『貞慶・高弁・源空・親鸞覚書』(タニシ企画印刷、二〇一四)

田川建三 『書物としての新約聖書』(勁草書房、一九九七)

辻善之助 『親鸞聖人筆跡之研究』(金港堂書籍株式会社、一九二〇)

寺尾英智 『日蓮聖人真蹟の形態と伝来』(雄山閣出版、一九九七)

藤堂祐範 『増補新版 浄土教版の研究』(山喜房仏書林、一九七六) \*初版一九三〇

鳥越正道 『最終稿本教行信証の復元研究』（法藏館、一九九七）

中井玄道 『教行信証解説』（龍谷大学出版部、一九二二）

中尾堯 『日蓮真蹟遺文と寺院文書』（吉川弘文館、二〇〇二）

中澤見明 『史上之親鸞』（文献書院、一九二二）

中村薫 『親鸞の華嚴』（法藏館、一九九八）

永村眞 『中世寺院史料論』（吉川弘文館、二〇〇〇）

灘本愛慈 『讃阿弥陀仏偈要解』（永田文昌堂、一九七九）

灘本愛慈 『顕浄土真実行文類講讃』（永田文昌堂、一九八九）

橋川正 『日本仏教文化史の研究』（中外出版、一九二四）

橋川正 『綜合日本仏教史』（目黒書店、一九三二）

福土慈稔 『日本仏教各宗の新羅・高麗・李朝仏教認識に関する研究』（身延山大学東アジア仏教研究室、二〇一一）

二〇一三） 第1巻『日本天台宗にみられる海東仏教認識』（二〇一一）、第2巻・上『日本三論宗・法相宗にみられる海東仏教認識—三論宗の部—』（二〇一一）、第2巻・下『日本三論宗・法相宗にみられる海東仏教認識—法相宗の部—』（二〇一一）、第3巻『日本華嚴宗にみられる海東仏教認識』（二〇一三）

藤井隆 『日本古典書誌学総説』（和泉書院、一九九一）

藤田宏達 『浄土三部経の研究』（岩波書店、二〇〇七）

藤場俊基 『親鸞の教行信証を読み解く』全五冊（明石書店、一九九八〜二〇〇一）

- 古田武彦 『親鸞思想―その史料批判』(富山房、一九七五、一九九六年明石書店より再刊)
- 堀川貴司 『書誌学入門―古典籍を見る・知る・読む』(勉誠出版、二〇一〇)
- 松沢和宏編 『テクストの解釈学』(名古屋大学グローバル@プログラム、水声社、二〇一二)
- 松沢和宏 『生成論の探求―テクスト・草稿・エクリチュール』(名古屋大学出版会、二〇〇三)
- 神子上恵龍 『弥陀仏身仏土論の展開』(永田文昌堂、一九六八)
- 宮崎圓遵 『真宗書誌学の研究』(永田文昌堂、一九四九)
- 宮崎圓遵 『教行信証考証』(講談社、一九七六)
- 宮崎圓遵著作集第6巻 『真宗書誌学の研究』(永田文昌堂、一九八八)
- 村上速水 『教行信証を学ぶ―親鸞教義の基本構造―』(永田文昌堂、一九九六)
- 山田文昭遺稿第一巻 『真宗史稿』(破塵閣書房、一九三四)
- 山田文昭遺稿第二巻 『真宗史之研究』(破塵閣書房、一九三四)
- 山本信吉 『古籍籍が語る―書物の文化史―』(八木書店、二〇〇四)
- 横田冬彦編 『シリーズ本の文化史① 読者と読書』(平凡社、二〇一五)
- 田口紀子・吉田一義編 『文学作品が生まれるとき―生成のフランス文学』(京都大学学術出版会、二〇一〇)
- 吉田城 『『失われた時代を求めて』草稿研究』(平凡社、一九九三)
- 頼富本宏・赤尾栄慶 『写経の鑑賞基礎知識』(至文堂、一九九四)
- 鷲尾教導 『恵信尼文書の研究』(中外出版、一九二三)

渡辺顕正 『新羅・憬興師述文贊の研究』（永田文昌堂、一九七八）

小森陽一他編『岩波講座文学Ⅰ テクストとは何か』（岩波書店、二〇〇三）

本願寺宗学院編『古写真宗聖教現存目録』（興教書院、一九三七）

本願寺宗学院編『古版本典研鑽集記』（興教書院、一九三七）

慶華文化研究会編『教行信証撰述の研究』（百華苑、一九五四、一九九四重版）

## 論文

赤松俊秀 「教行信証（坂東本）について」（『鎌倉仏教の研究』所収、平楽寺書店、一九五七）

浅井成海他（共同研究）「親鸞聖人著作用語の学術的解明―用語解釈及び字訓・左右訓の分類（一）（二）」（『龍谷大学

仏教文化研究所紀要』二〇・二二、一九八二・一九八三）

浅井成海他（共同研究）「親鸞における他力救済用語の総合的研究―教行信証の左・右訓と古字書（一）（二）」（『龍谷

大学仏教文化研究所紀要』二五・二七、一九八六・一九八九）

浅田正博 「学術講演 親鸞聖人における天台用語の依用について―なぜ『本典』中に『法華経』の引用がないか、を

めぐって」（『行信学報』二二、二〇〇八）

浅田正博 「『教行信証』になぜ『法華経』が引用されなかったか―天台教学との関連において」（『真宗研究会紀要』

三〇、一九九八）

愛宕邦康 「新羅浄土教における『観無量寿経』の位置付け―恵谷隆戒説への疑問」（『印仏研』六一―一、二〇一一）

新光晴 「口絵解説」専修寺蔵『観經四帖疏(版本)』の藍紙表紙筆跡について―修理が完了した重要文化財『善導

五部九卷(版本)』から」(『高田学報』一〇三、二〇一五)

新光晴 「口絵解説」専修寺所蔵『法事讚(上・下)』・『往生礼讚』・『観念法門』・『般舟讚』の藍紙表紙外題筆跡に

ついて―修理が完了した重要文化財『善導大師五部九卷(版本)』から」(『高田学報』一〇四、二〇一六)

新光晴 「口絵解説 国宝本『西方指南抄』に見る聖人筆跡」(『高田学報』一〇二、二〇一四)

安藤弥 「史料紹介」慈願寺蔵『聖教目録』(『同朋大学仏教文化研究所紀要』三一、二〇一二)

安藤弥 「史料対校」実悟編『聖教目録聞書』・慈願寺蔵『聖教目録』前半部分」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』

三三、二〇一三)

石田充之 「教行信証成立期の法然教団の動向」(『真宗学』三、一九五〇)

井上見淳 「親鸞聖人と『集諸経礼懺儀』」(『龍谷教学』四一、二〇〇六)

生桑完明 「高田伝来の『教行証』真本について」(『真宗研究』二、一九五六) \*『親鸞聖人撰述の研究』(法藏館、

一九七〇)に再録

生桑完明 「西方指南抄について」(『親鸞聖人撰述の研究』(法藏館、一九七〇) \*初出は『親鸞聖人全集』輯録編解

説(一九五四)

上山文夫 「見聞集並愚禿鈔に就て」(『大谷学報』一四三、一九三三)

恵谷隆戒 「新羅法位の無量寿経義疏の研究」(『浄土教の新研究』所収、山喜房仏書林、一九七六)

恵谷隆戒 「新羅法位撰無量寿経義疏復元について」(『浄土教の新研究』所収、山喜房仏書林、一九七六)

大塚紀弘 「一切経書写と仏典目録―愛知県新城市徳雲寺平安古写経の分析から―」(『日本における宗教テキストの諸

位相と統辞法』所収、名古屋大学大学院文学研究科、二〇〇八)

大田利生 「親鸞と華嚴経」(『真宗学』一〇五・一〇六、二〇〇二)

小川貫弍 「阪東本『教行信証』の成立過程」(慶華文化研究会編『教行信証撰述の研究』所収、百華苑、一九五四)

小川貫弍 「教行信証の書写と印刷」(『真宗研究』一八、一九七四)

落合俊典 「七寺蔵『古聖教目録』に見える浄土教章疏について」(『仏教文化』三七、一九九二)

落合俊典 「平安時代後期の章疏目録について」(『印仏研』四六一、一九九八)

落合俊典 「真福寺蔵承暦元年写『阿弥陀仏経論並章疏目録』について」(『仏教文化研究』四八・四八、二〇〇三)

落合俊典 「中世に於ける経蔵の目録学的分類と諸相―一切経・章疏・聖教」(『説話文学研究』四一、二〇〇六)

尾畑文正 「『教行信証』信巻「序前の文」についての一考察」(『同朋仏教』四六・四七、二〇一一)

小山正文 「増補 親鸞聖人真蹟集成」以後の聖人真蹟―平松令三先生へのご報告」(『高田学報』一〇二、二〇一四)

梶浦晋 「日本近代出版の大蔵経と大蔵経出版」(仏教大学宗教文化ミュージアム平成二十六年秋期特別展『縮刷

蔵経から大正蔵経へ』所収)

潟岡孝昭 「西本願寺本『教行信証』成立考」(『帯広大谷短期大学紀要』三、一九六五)

潟岡孝昭 「国宝本『教行信証文類』の改稿と完成」(『帯広大谷短期大学紀要』四、一九六七)

門川徹真 「『教行信証』の書誌学的研究―初稿本から改定本・清書本へと」(『真宗研究』五八、二〇一四)

上川通夫 「中世聖教史料論の試み」(『史林』七九三、一九九六) \* 『日本中世仏教史料論』(吉川弘文館、二〇〇八)

に再録

木村清孝 「仏教と「和」の思想」(『国際仏教学大学院大学研究紀要』一〇、二〇〇六)

木村邦和 『教行信証』信巻所引の「大般涅槃行梵行品文における非引用部分について」(『新潟親鸞学会紀要』五、二〇〇八)

金龍靜 「蓮如上人と『教行信証』」(『同朋大学仏教文化研究所紀要』二八、二〇〇八)

日下無倫 「教行信証古写本の種類及びその最古の註疏」(『仏教研究』四一三・四、一九三三)

日下無倫 「教行信証について」(『真宗史の研究』所収、平楽寺書店、一九三二)

工藤康子 「生成研究―草稿を読む」(川本皓嗣・小林康夫編『文学の方法』所収、東京大学出版、一九九六)

小林芳規 「漢籍訓点語の特徴―群書治要古点と教行信証・法華經古点の比較による」(『訓点語と訓点資料』二九、一九六四)

佐々木勇 「親鸞筆『教行信証』の漢音声調」(『比治山大学現代文化学部紀要』二、一九九六)

佐々木勇 「西本願寺蔵『浄土三部経』正平六年存覚書写本の朱点について―親鸞自筆加点点本および龍谷大学蔵南北朝

期加点点本との比較」(『訓点語と訓点資料』一二六、二〇一一)

佐々木瑞雲 「新出 仏光寺蔵『教行信証』の意義―『六要鈔』所積本の行方―」(『真宗研究』五〇、二〇〇六)

齊藤研 「坂東本『教行信証』「信巻」、序前の文、試論」(『親鸞教学』九一、二〇〇八)

正福幻堂 (中井玄道) 「教行信証校訂私考一」(『六条学報』一二四、一九二二)

重見一行 「教行信証天文三年写本について」(『学術文献刊行会編』国文学年次別論文集 中世Ⅱ(全二冊)(昭和五七

年)』所収、朋大出版、一九八四)

庄司暁憲 「相伝義書」相伝家の聖教目録について(『同朋学園仏教文化研究所紀要』一〇、一九八九)

庄司暁憲 「相伝義書」相伝家の聖教目録について 補稿—真玄の聖教目録完成に至る経緯—(『同朋学園仏教文化

研究所紀要』一一、一九八九)

鈴木宗忠 「教行信証の真蹟本に就いて」(『文化』五十三、一九三八)

首藤善樹 「親鸞聖人伝絵」詞書翻刻対照表(『真宗重宝聚英』五、同朋舎、一九八九)

隅倉浩信 「教行信証」における『述文贊』の引用について(『印仏研』四三二二、一九九四)

武田晋 「信卷」の構造について—書誌的視点と本願成就文受容形態を中心として(『龍谷大学論集』四五六、二〇〇〇)

武田晋 「行卷」の構造について—書誌的視点を中心として(『真宗学』一一一、二〇〇五)

武田晋 「真仏土卷」の構造について—書誌的視点と報仏土の問題を中心として(『龍谷大学論集』四七一、二〇〇八)

〇八)

武田晋 「化身土卷」(本)の構造について—書誌的視座を中心として(『真宗学』一一九・一二〇、二〇〇九)

竺沙雅章 「宋元版大藏經の系譜」(『宋元仏教文化研究』所収、汲古書院)

妻木直良 「本願寺所蔵の真本「教行信証」に就て」(『法爾』一八・一九、一九一九)

辻善之助 「親鸞聖人筆跡之研究」正誤(『史学雑誌』三一一二、一九二〇)

津田徹英 「親鸞の欠画文字・異体字とその書風」(『仏教美術論集6 組織論—制作した人々』所収、竹林舎、二〇一六)

- 土橋秀高 「親鸞聖人の涅槃経観」〔『真宗研究』五、一九六〇〕
- 土橋秀高 「親鸞聖人と涅槃経」〔『龍谷大学論集』三六五・三六六、一九六〇〕
- 藤堂祐範 「選択集之書史学的研究」〔『選択集大観』所収、山喜房仏書林、一九七五〕 \*初版一九三二
- 常磐井堯祺 「教行信証の校訂（一）」〔『高田学報』六、一九三三〕
- 常磐井堯祺 「教行信証の校訂（二）」〔『高田学報』七、一九三四〕
- 常磐井堯祺 「教行信証の校訂（三）」〔『高田学報』八、一九三四〕
- 常磐井堯祺 「教行信証の校訂（四）」〔『高田学報』一一、一九三五〕
- 常磐井堯祺 「教行信証の校勘（五）」〔『高田学報』三四、一九五三〕
- 常磐井堯祺 「教行信証の校勘（六）」〔『高田学報』三五、一九五四〕
- 常磐井堯祺 「教行信証の校勘（七）」〔『高田学報』三九、一九五六〕
- 常磐井堯祺 「教行信証の校勘（八）」〔『高田学報』四〇、一九五七〕
- 常磐井堯祺 「教行信証の校勘（九）」〔『高田学報』四一、一九五七〕
- 禿氏祐祥 「本願寺本『教行信証』後序 口絵解説」〔『真宗講話』一一、一九二二〕
- 禿氏祐祥 『『教行信証』の自筆草稿本』〔『教行信証撰述の研究』所収、百華苑、一九五四〕
- 中井玄道 「教行信証改刻批議」〔『六条学報』一一四、一九一一〕
- 中井玄道 「教行信証校訂私考（一）〜（十八）」〔『六条学報』一二四〜一五〇、一九二二〜一九二四〕
- 中井玄道 「教行信証引文の体例」〔『六条学報』一八七〜一九三、一九一七〕

- 中井玄道 「教行信証の異本 上」〔『六条学報』二二〇、一九一九〕
- 中井玄道 「教行信証の異本 下」〔『六条学報』二二一、一九一九〕
- 中尾堯 「寺内文書」(歴史読本特別増刊『日本歴史「古文書」総覧』、新人物往来社、一九九二)
- 中澤見明 「教行信証撰述の意思について」〔『教行信証新研究号』、大日本真宗宣伝協会、一九二三〕
- 中澤見明 「専修寺蔵の見聞集と教行信証成立の時代について」〔『高田学報』四、一九三三〕
- 中村元 「『教行信証』の同訓異字(一)——言・日・云について——」〔『教学研究所紀要』七、一九九八〕
- 野村精一 「書誌の文明的考察——源氏物語古注釈の世界——」(実践女子大学文芸資料研究所叢書Ⅰ『源氏物語古注釈の世界——写本から版本へ——』所収、汲古書院、一九九四)
- 橋川正 「聖人の筆跡と浄興寺六字名号」〔『親鸞と祖国』一九一九年、八月号〕
- 橋川正 「聖人真蹟妙源寺蔵十字名号」〔『親鸞と祖国』二二二、一九二〇〕
- 橋川正 「辻博士の親鸞聖人筆跡之研究」〔『親鸞と祖国』二二二、一九二〇〕
- 橋川正 「親鸞聖人著述総論」〔『仏教学研究』四一三・四、一九二三〕
- 林智康 「親鸞と華嚴経」〔『佐賀龍谷短期大学紀要』二九、一九八三〕
- 日野環 「『教行信証』の教巻の標挙について(一)」〔『親鸞教学』一、一九五七〕
- 日野環 「阪東本教行信証に於て異筆を課題とする八カ處の筆蹟討究」〔『印仏研』五一六、一九五七〕
- 日野環 「『教行信証六要鈔』の「所依」本についての検討」〔『印仏研』二二二、一九六四〕
- 日野環 「『教行信証六要鈔』の「所依本」の性格についての検討Ⅰ」〔『大谷学報』四三二二、一九六四〕

- 日野環 「『教行信証』（親鸞撰述）の「文明古写本」について」（『印仏研』一四二、一九六六）
- 平原晃宗 「信巻所引『聞持記』について」（『印仏研』四七一、一九九八）
- 平松令三 「高田宝庫より発見せられた新資料の一、二について」（『高田学報』四〇、一九五六）
- 平松令三 「高田専修寺の黒印をめぐって」（『高田学報』五七、一九六六） \* 『親鸞真蹟の研究』（法藏館、一九八八）に再録
- 平松令三 「高田専修寺本『教行証』の特色とその背景」（高田専修寺本影印本解説、一九八六） \* 『親鸞真蹟の研究』（法藏館、一九八八）に再録
- 平松令三 「蓮如の聖教書写と本願寺の伝統聖教」（『講座蓮如』第二巻所収、平凡社、一九九七）
- 平松令三 「蓮如上人の書写聖教と本願寺伝統聖教」（『龍谷教学』三二、一九九七）
- 平松令三 「解説三帖和讃」（常磐井鸞猷註解『註解国宝三帖和讃』所収、真宗高田派宗務院、一九九八）
- 深貝慈孝 「新羅法位浄土教の研究」（戸松啓真教授古稀記念論集刊行会編『戸松教授古稀記念 浄土教論集』所収、大東出版社、一九八七）
- 福土慈稔 「目録類からみる日本に於ける朝鮮仏教の影響とその問題点」（『印仏研』五六二、二〇〇八）
- 藤田海龍 「教行信証の真筆本に就いて」（『日本仏学論叢』一、一九四四）
- 堀池春峰 「仏典と写経」（堀池春峰著・東大寺監修『南都仏教史の研究 遺芳編』所収、二〇〇四）
- 三木彰円 「親鸞の思想課題における「文類」形式の考察」（『真宗研究』四七、二〇〇三）
- 三木彰円 「坂東本・教行信証と親鸞 第十六回「坂東本」の形態⑨」（『真宗』一二五七、大谷派宗務所、二〇〇八）

峰岸純夫 「鎌倉時代東国の真宗門徒―真仏報恩板碑を中心に―」（北西弘先生還暦記念会編『中世仏教と真宗』所収、

一九八五）

宮崎圓遵 「室町時代に於ける『正信偈』の註釈」（『宗学院論輯』二二、一九三五）

宮崎圓遵 「真宗における聖教の伝授」（『龍谷大学論集』四〇〇・四〇一、一九七三）

宮崎健司 「法隆寺一切経と『貞元新定釈教目録』（伊東唯真編『日本仏教の形成と展開』所収、二〇〇二）

宮本正尊 「教行信証の基本構造、自釈・文類・自伝」（『印仏研』一八二、一九七〇）

桃井信之 「親鸞浄土教と『述文贊』（『印仏研』五一、二〇〇二）

山田文昭 「教行信証の御草本について」（『無尽灯』一九四、一九一四）\*『真宗史の研究』（法藏館、一九七九）に

再録

山田龍城・福原亮巖 「親鸞教学とその著作中の引用書」（『龍谷大学論集』三六五・三六六、一九六〇）

吉澤義則 「本願寺本教行信証点注の筆者に就いて 上」（『龍谷大学論集』二五八、一九二四）

吉澤義則 「本願寺本教行信証点注の筆者に就いて 下」（『龍谷大学論集』二五九、一九二四）

吉田讓 「宗祖と『涅槃経』―『教行信証』と『大般涅槃経要文』、『見聞集』との関係について―」（『宗学院紀要』

五、一九九九）

吉田讓 「宗祖の『涅槃経』依用の態度―源信の『一乗要決』と比して―」（『真宗研究』四三、一九九九）

若林真人 「坂東本『正信偈』の推敲跡をめぐって」（『行信学報』一一、一九九八）

鷲尾教導 「『教行信証』伝授史考」（『六条学報』一一七、一九一一）

鷲尾教導 「教行証文類完成年代考」(『仏教研究』三四、一九二二)

龍谷教学会議第四十八回シンポジウム 『教行信証』の書誌的研究について(『龍谷教学』四八、二〇一三)

「シンポジウム―奥書・識語をめぐる諸問題―」(国文学研究資料館文献資料部『調査研究報告』一七、一九九六)

「教行信証(坂東本)の角筆点について」(真宗大谷派宗務所『真宗』一二四九号、二〇〇八)

「親鸞聖人筆蹟研究」(『高田学報』五、一九三三)

『教行信証』(坂東本) 総合研究のための基盤構築(『真宗総合研究所研究紀要』二八、二〇一一)

加来雄之「緒言」、藤元雅文「『顕浄土真実教行証文類』(坂東本)の特徴についての予備的考察―専修寺本・西本願寺本との比較を通して―」、廣瀬惺「『教行信証』の構成―各巻の位置について―」、加来雄之「方法としての『教行信証』(坂東本)―「正信念仏偈」解釈の試み―」、後藤智道「『此の』顕真実教の明証なり―晩年の改訂からみる親鸞の課題―」、マイケル・コンウェイ「『教行信証』における親鸞の歴史観」、金子彰「恵信尼文書の用語」

## 坂東本 影印・写真

『顕浄土真実教行証文類』六冊(大谷派本願寺編纂課、一九二二)

『親鸞聖人真蹟』 国宝 顕浄土真実教行証文類影印本(真宗大谷派宗務所、一九五六)

『親鸞聖人真蹟』 国宝 顕浄土真実教行証文類影印本(真宗大谷派宗務所、一九七一再刊)

- 『親鸞聖人真蹟』宝 国 願浄土真実教行証文類』（教行信証刊行会、美乃美、一九八六）  
『願浄土真実教行証文類（坂東本）影印本』六冊（真宗大谷派宗務所、二〇〇五）  
『親鸞聖人真蹟集成』九卷（法藏館、一九七三～一九七四）  
『増補親鸞聖人真蹟集成』（法藏館、二〇〇五～二〇〇七）

専修寺本 影印・写真

- 『重要文化財願浄土真実教行証文類』六冊（便利堂、一九八六）  
『専修寺本願浄土真実教行証文類』上・下（法藏館、一九七五、刊記によれば「高田専修寺本教行信証」）

西本願寺本 影印・写真

- 『教行信証』四冊（本派本願寺立教開宗七百年記念慶讃事務所文書部、一九二三）  
『重要文化財 教行信証』六冊（講談社、一九七六）  
『願浄土真実教行証文類』復刻（西本願寺本）』（浄土真宗本願寺派宗務所、二〇一一）  
『本願寺蔵願浄土真実教行証文類縮刷本』上・下（『教行信証の研究』第三・四卷所収、浄土真宗本願寺派宗務所、二〇一一）

教行信証 翻刻

『日本撰述大日本校訂大藏經』真宗霜八（弘教書院、一八八四）

『真宗聖典全書』漢文之部（文會堂、一九〇七）

『教行信証』（高田專修寺藏版、一九一二）

『本典諸本校異』（二九一八）

中井玄道校訂『顕浄土真実教行証文類 京都仏教大学蔵版』（仏教大学出版部、一九二〇）\*一九八二年仏教児童博物館

館より復刻版刊行

中井玄道 『教行信証附録』（仏教大学出版部、一九二〇）\*一九八二年仏教児童博物館より復刻版刊行

勝岡廓善「顕浄土真実教行証文類／愚禿釈親鸞述」『真宗の世界』臨時増刊第三卷第五号「教行信証新研究号」第五輯、

大日本真宗宣傳協会発行、一九二三）

侍董寮編纂『真実教行証文類』（大谷派本願寺、一九二六）

島地大等編『聖典 浄土真宗』（明治書院、一九二八改修印刷）

『大正新脩大藏經』第八三卷（大正新脩大藏經刊行会、一九三二）

柏原祐義編『真宗聖典』（法藏館、一九三五）

『真宗聖教全書』第二卷（大八木興文堂、一九四一）

『真宗聖典』（親鸞聖人七百回大遠忌記念出版、永田文昌堂、一九五六）

『親鸞聖人全集』教行信証一（親鸞聖人全集発行会、一九五八）

『定本親鸞聖人全集』第一卷（法藏館、一九六九初版、二〇〇八ワイド版初版）

稻葉秀賢・栗原行信・臼井元成編『昭和新篇教行信証御自釈』（文栄堂書店、一九七〇）

『真宗史料集成』一（同朋舎、一九八三）

『浄土真宗聖典 原典版』（本願寺出版部、一九八五）

細川行信校訂『定本教行信証』（法藏館、一九八九）

『浄土真宗聖典全書』第二卷宗祖篇上（本願寺出版社、二〇一一）

大谷大学編『顕浄土真実教行証文類』翻刻篇・附録篇一・附録篇二（真宗大谷派宗務所、二〇一一）

### 図録・資料・翻刻等

『本願寺史』一（浄土真宗本願寺派宗務所、一九六一）

『本願寺年表』（浄土真宗本願寺派、一九八一）

『真宗史料集成』一（同朋舎、一九八三）

『増補改訂本願寺史』一（本願寺出版社、二〇一〇）

『龍谷大学善本目録』（龍谷大学出版、一九三六）

『図録 蓮如上人余芳』（本願寺出版社、一九九八）

禿氏祐祥『観無量寿経集註 付阿弥陀経集註』（全人社、一九四四）

『憬興師云』（『高田学報』八六、二〇〇八）

『専修寺本善導大師五部九卷』（法藏館、一九八六）

真宗高田派教学院編『影印高田古典』第一卷真仏上人集（真宗高田派宗務院、一九九六）

『浄土教典籍目録』（仏教大学総合研究所、二〇一一）

『【図説】日蓮聖人と法華の至宝』第二卷真蹟遺文（同朋舎メディアプラン、二〇一二）

『【図説】日蓮聖人と法華の至宝』第三卷典籍・古文書（同朋舎メディアプラン、二〇一三）

『高山寺資料叢書』（東京大学出版会、一九七二～二〇〇二）

七寺古逸經典研究叢書第六卷『中国・日本經典章疏目録』（大東出版社、一九九八）

国文学研究資料館編／阿部泰郎・山崎誠編集責任『真福寺善本叢刊』（臨川書店、一九九八～二〇一一）

国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編集『日本古写経善本叢刊』第四輯『集諸経礼懺儀 卷下』（国際仏

教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇一〇）

山本新吉『国宝大辞典』第三卷「書跡・典籍」（講談社、一九八六）

三重県総合博物館開館記念企画展第6弾展覧図録『親鸞 高田本山専修寺の至宝』（三重県総合博物館、二〇一五）